サモンナイト・ストーリー

エキストラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サモンナイト・ストーリー

【Ｎコード】

Ｎ４５１９Ｒ

【作者名】

エキストラ

【あらすじ】

タイトル通りの物語形式です。何の変哲もない一般人オリジナル主人公（現実から、原作知識あり）がサモンナイトシリーズを順々に進んでいく予定です。（一部の作品はやった事ないですが）何の前兆もなく前置きもなくいきなり非現実に放り込まれます。そこから生き抜いていく様を書けたらと思います。途中から設定チートになります。そういうのが苦手な人は読まないほうがいいかも知れません。オリジナルとかも少し考えていますが、何分初投稿なので、荒いです。次話投稿も遅いです。それでもいい人は、広い心で読ん

でください。作品をよくするためのアドバイスとかあれば、ぜひお願いします。

外伝　太陽の少女　向日葵と宝と船旅と（前書き）

さて、ようやく外伝作成終了。遅くなって申し訳ないです。本編を書くついでにちまちまと仕上げていたので、結構時間喰いました。そして過去最高のボリューム、勢いってすごいですよね。本当。

一応断っておきますが、この話には本編のネタバレがあったりなかったりします。ま、その設定はまだ出ませんが。

後、この話は本編にもつながってます。だから、この話の設定そのものは本編でそのうち登場する予定です。分けようかなと思いましたが、せっかくなので本編に繋げる事にしました。

外伝では特定のヒロインびいきでいきます。今回はクラフトのラジィです。まあきちんとかけているかは知りませんが。

外伝　太陽の少女　向日葵と宝と船旅と

石造りの部屋で物書きをする音が聞こえる。それ以外には、遠くで金属が打ち付けられる音が響くのみ。その静寂の中、腕を唯動かす。一刻も早く、今書いている案件を終わらせるために。そして、それも最後を仕上げるのみ。

そんな時、通路を走る音が聞こえる。その気配は、知っている。割とちょくちょくこの部屋に遊びに来ている少女だろう。まだここに辿り着いてもいないのに関わらず、通路では騒々しい音が響いている。その時その足音の近くで何かが割れるような音が響く。

「わあっ！ごめんなさい！」

その声の他に、何か怒声が聞こえる。これが後で俺への文句へとならないように祈っておく。まあ、無駄だろうけど。

「・・・また何か厄介ごととかじゃないならいいんだが。」

少女が来ること自体はいい、少女との会話も特に問題は無い。問題はその後、やたらと人数が増えるのだ。そして何かが起こる。無論それは少女のせいではないが、一枚噛むことが多いのだ。と言うより最近はトラブルに引っ張られている気すらする。

そういう意味では他の誰が来ても大体一緒だが。なぜこうも自分の周りにはトラブルメイカーが多いのか、時折不思議に思う。まあ、自分が言えた事では無いが。

「さて、今日はどうなるやら。」

書類を仕上げ、鞄に詰めて出入り口に目を向ける。ここは元々空き家だったのだが、ある知り合いがなぜか率先して、使ってくれと言ってきたのでそれに甘えている。その後、なぜかその本人が頻繁に訪れるようになったが、大体その者は飯を食べて適当に話をして帰っていくが。そして、賑やかなのが来たらしい。予想に違わず、入ってきたのはいつもの少女。

「アニキ！遊びに来たよ！ねえ、外に行こうよ！」

「お前は人の部屋に来るなり、何を言ってるんだ。」

「まあ、まあいいじゃん、細かい事は。それよりも面白い話を聞いたんだよ！暇つぶしにはもってこいだよ！」

「俺はお前の暇つぶしで毎回連れ出されるのか。」

目の前の人物はそう言って人を連れ出して、最終的にまちがいなくトラブルになるのだが。他にもトラブルメイカーはいるが、現黒鉄とか、現水晶とか。ワイスタァンの、都市の最高権力者がこんなのでいいのか、と頻繁に疑問に思う。まあ、見た目から考えて大問題とは思うが。

「そういって、前は召喚獣に襲われたんだよな。確か。」

「うっ！だ、大丈夫だよ。今度はそんなに危なくないし。」

「それで、以前、船が壊れたりもしたんだが。ブロンになんて言われたか、聞きたいか？」

「こ、今度こそ！今度こそ本当に大丈夫だから、ね！」

さすがに旗色が不味いと悟ったのか、若干弱弱しく言って来る。それをみて、とりあえず先を聞こうと話の先を促す。

「はあ、で、今度はなんだ？」

「歩きながら話すよ、それに今日はアネキたちも一緒なんだよ！」

「今日も、だろ。」

その言葉を聞いて、今日も本当に賑やかになるなと苦笑いした。その手を引いて前を歩く、黄色い服を着た少女、ラジィと、手を引かれ歩く青年ユーリ、二人は昨日、その前と同じく、部屋を後にした。これはワイスタァンという都市で起こった、ある事件が終わった後の物語。

ようやく七人そろった鍛聖、そして、少しずつ事件が起こる前の安定を取り戻していた、そんな日の一日。ありきたりな一日である。

「というか、なんでわざわざ俺を呼ぶんだ？別にプラティ達と一緒に行けばいいだろう。腕を競い合った仲なんだからさ。」

「そんなこと言ったって、みんなアニキが来るの楽しみにしてるんだよ！そんなこと言ったら怒られるよ？」

「どうだかな。」

「もう、仕事もどうせ終わってるんでしょ？いつも通り。」

「・・・ああ、終わってるよ。」

「じゃあいいじゃん！それにアニキは有名だしね。なんたって幻の鍛聖なんだし、ね！緋色の鍛聖様！」

「・・・七鍛聖の筈なんだがな。しかも幻って、なんだかな。」

あまり聞きたくもない肩書を聞き、肩を落とす。しばらく離れている間に、自分に訳の分からない武勇伝が書き記されていたのには正直に驚いた。しかもそれを広めているのが、ワイスタァンの最大武力であり、権力者でもある七鍛聖なのだ、どうしようもない。

最も、かつて自分がやり過ぎてしまったのが最大の原因だという事は自覚している。そして、そのおかげで今のような関係を気付けたことも。

「はあ、とりあえずそれはいいや。それでどうするんだ？このままプラティの所に行くのか？」

「ううん、これから船の所に行くんだよ。」

「船？また、ブロンの船を借りるのか？いい加減怒られるぞ。」

「大丈夫だって、それにもうすぐ、新しい鍛聖専用の船だってできるみたいだし。」

「今度はそれに乗ってくからって？まったく。行くのは止めないんだな。」

「えへへ。」

「笑い事じゃないんだがな。」

悪びれる事無く笑う少女に対し、呆れたように溜息をつくユーリ。それは、いつもの光景、少なくともここ最近では見慣れた光景となっている。だから、既に言う気も失せてしまい、先を目指す事にする。

「まあ、いいか。それなら船着き場で集合か？」

「うん、そうだよ。」

特に旅支度はしてないが、道具袋は持っているから問題ない。それにいざとなれば自分が召喚すればいい。いつも突発的に出かけているのだ。こんなことをいちいち考えていても意味は無い。いつでも行けるようにさえ準備して置けばいいだけの話である。

「まあ、考えても仕方ないか。せっかくの誘いだ、楽しまないとな。」

「さすがアニキ！そう来なくっちゃ！！」

その言葉に嬉しそうに返事するラジィ、そしてそんなことを話している間に船着き場まで辿り着く。そこには変わり映えのしない景色と人がいた。

そこにはもう来てから少し経っていたらしく、クリュウ、プラティ、シュガレット、サナレの４人が待っていた。此方に気付くと全員が此方に視線を置くってくる。とりあえず待たせてしまったようなのでその件について口を開く。

「俺らが最後か。待たせたみたいで悪かったな。」

「まったくよ、女性を待たすなんて、今更だけど本当にいい度胸してるわね。」

「まあまあ、サナレ。ユーリも忙しいのに来てくれたんだしさ。」

「そうそう、それにユーリを待ってる間中、そわそわしてたのは誰かなあ？」

「なあ！あんたらは何言ってんのよ！！」

人数が揃った途端に賑やかになる。いつもの事だが本当に元気だ。この元気をもう少し別の事に使ってくれるとありがたいんだが、主に書類仕事とか。だがそう上手くはいかない。無理にさせてもいい事は無いし、どうしたものか。

「さて、それじゃ話はそれ位にして、そろそろ行くか。」

このままでは何時まで経っても出発しそうにないので、話を切る。それで目的を思い出したのか、急いで全員が荷物を持ち、船に乗り込む。先に乗り込まず、全員が集まるのを待っていたのはやはり仲がいいからだろう。

『それでは参りましょうか、旦那様。』

その言葉に冷静に切り返す。いつもの事だ。

「・・・いや、認めてないし、いい加減に他に良い奴を探せ。」

『いえ、私はユーリ様一筋ですし。』

「いや、そもそもお前はシンテツの護衛獣だろうが。普通に考えたら繋がり自体ないだろう。」

『む～ユーリ様はイケズです。生まれたばかりの私に名前を付けたのはユーリ様なのに。』

「おいおい、あれはお前がシンテツのいう事を無視して俺に寄ってきた結果だろうに。」

シュガレットもいつもの通り、訳が分からない方向に全力前進している。もう少し他の男に目を向ければいいと思うが、何度言っても取り合わない。少々嫉妬深いが、根は純真なんだが。とりあえず、舵を握り出発することにする。

行き先は聞いていないが、別に進みながらでも特に問題ないので気にしない。その内に誰か来ると思うのでその時に聞こうと思う。何度も行っているので、いい加減慣れたモノだ。特に慣れたいわけでもなく、結果的になれたというだけだ。

操縦していると思った通り、誰かが歩いて来た。俺を退屈させないように配慮しているのか、運転中には必ず誰かが話しかけに来る。

気のいい連中だと思う。後はこの連中にもそろそろ出会いがあってもいいと思うが。見た目にしろ、正確にしろ。あとワイスタァンにおける地位についても別格なのだが。なぜか他の男友達に相談すると、全員にため息をつかれるが。解せぬ。

「アニキ！どう、何か見えた？」

「俺に言うより、自分で見てきたらどうだ？それに行き先自体、俺は知らないんだが。」

「うん、そう思って持って来たよ。これが地図だよ！」

「へえ、で今度はどこに行くのやらっと。これは、無人島、か。結構遠いな。日帰りでこれは少し遠くないか？」

「大丈夫！そんな時のためにアニキがいるんだから！！アニキだったら船が無くてもどうにかなるでしょ？」

「・・・自信満々に言うな。というより船がない前提で話をするな。壊す気か？それに、俺が断ってたらどうする気だったんだ？」

「え？断る気だったの？」

「・・・今の反応で大体分かった。全く、大変な妹分を持ったものだ。」

「・・・（別に妹じゃなくても良いんだけどな。）」

「？どうかしたか？」

「なんでもなーい！」

「？」

なぜか突然拗ねたように海の向こうを見るラジィ。不思議に思ったがまあ、知り合いにもよくわからない奴は沢山いるので放っておく。こういうのは関わると碌なことが無い。経験則とも言う。前からそうだった気もするが。

沖に出てしばらく経過したが、まだ目的の島には辿り着けない。実際の距離は日帰りという距離ではないのだから当然だが。俺以外のメンバーは泊りがけで行くつもりだったらしい。俺は無論、何も聞かされてない。

まあ、必要なものは全部、常時、道具袋に入っているので問題は無いのだが、事前連絡くらいはきちんとしてほしいと毎回切に思う。あいつらには俺がどういうふうに見えているのか、一回聞いてみたいものだ。

「ユーリ、しばらく代わろうか？ずっと舵を握り続けるの疲れるだろうし。」

「いや、問題ないぞ。それにそんなに疲れるものでもないしな。」

様子を見に来たのはクリュウだった。まあ、時たまこうやって話し相手が来るのだが、なぜか全員一人で来る。何故かは知らない。

特に問題も無いし、困る事でもないので今まで聞いた事も無い。その後しばらく談笑した後、また外へと戻っていった。その後、なぜか外でジャンケン、ホイ！とか聞こえたが、遊んでるのか？

「さて、これは結構時間がかかりそうだな。」

まだ目的の島まで随分距離がある。それにそろそろモンスターが出やすい海域に入る。いつ襲われるか判らないから、注意するように全員に伝える。各自、武器を持って用意だけはしている。とりあえず油断したりしない限りは大丈夫だろう。何かあるようなら俺が一気に終わらせるし。

「あっ！今何かの影が見えた！！」

「それじゃ、そろそろお出ましって事かしら？」

「よーし！頑張ってアニキにいいとこ魅せるぞ！！」

「私だって！」

『私も頑張ります！妻として！！』

「「「「いや、それはおかしい。」」」」

『ええっ！』

緊張感の欠片も無いが、戦闘になればそれぞれ、しっかりと自分のすべき事をしてくれるだろう。ただ、誰も毎回気にしてないが、この人数で船上の戦いは普通に避けたいんだが。船を壊すと俺がブロンに怒られるんだが、無論修理も俺がやらないといけないし・・・

一応俺って非公式とはいえ、鍛聖なんだけどな。いくらなんでもこの扱いって酷くないか？

そんなことを思っていると、船の真下に幾つかの気配が集まる。船底に穴でもあけられると面倒なので、船を動かし避ける。すると避けた所からモンスターが飛び出してくる。その数は数匹、十分に相手取れる数だし、見たところそんなに強い相手もいない・・・飛び込んできたやつらの中には、だが。

「（離れた所に数十匹ほどいる、それにデカいのも幾つか来てるな。）」

今更だが、こいつら3ケタ単位で群れを作ってるとしか思えないのだが。最終的に俺が呼び出されるし。この海域は昔からモンスターの巣として有名なのだ。だが、気にせず突っ込んでいるのは時間の問題と、一応俺にも戦い続けてきた自信みたいなものがあるからなのだが。あとはラジィ達の経験にもなるからなのだが。前のようにまた帝国と戦闘になるかもしれないし、経験は多い方がいい。

「さて、いくよ！」

「一気に終わらせてあげるわ！」

掛け声と共にモンスターとの戦いが始まる。船の上とはいえ、少しの揺れや狭さなどは物ともしない。そのくらいの戦闘は潜り抜けている。それに中には鍛聖と戦った事もある者もいるのだ。これくらいで終わられても困る。

「サナレ！後ろ！！」

「そっちもでしょうが！」

サナレとプラティがお互いの背後の敵をそれぞれ貫く。お互いに仕留めたのを確認、他の敵に向かう。少し前まで地下迷宮や、数々のモンスターを相手にした経験が生きている、瞬く間に数を減らす。

「こっちも負けてられないよ！やああ！」

「これで！どうだ！！」

『行きます！！』

ラジィとクリュウも剣とナックルで複数の敵を相手にしている、そして倒し損ねた相手もシュガレットの魔法で叩き伏せる。５人の奮戦により、最初に襲ってきたモンスターは殲滅される、なぜかは知らないが、こいつらは船を破壊せず、先にラジィ達に攻撃を加えている。

そっちの方が脅威にでも見えているのだろうか？魔物に船を壊された話自体はよく聞くし、普通に考えると、そっちの方が断然効率がいいのだが、そういうのは思いつかないのだろうか？こいつらは。

「といっても、あんまり大人数で上ってこられても沈むんだが。」

近場からかなりの数のモンスターが向かって来るのを感じる。最初に乗り込んできたモンスターがやられたのを見計らったように、第二陣が船に上がってくる。それは数もモンスターの質もさっきとは比べるべくもない。数にして７０強、戦う以前に、近づかれればそれだけでこんな船などその重さで軽く砕かれるだろう。流石にそれは看過できない。そんなことになれば、俺が船を作り直せとか言

われかねない。

「さて、それじゃ俺も行くか。」

外で戦闘をするために、ホーンテッド船長を呼び出す。ホーンテッド船長は本来スケルトンが海賊帽をかぶった姿をしているが、ユーリが呼び出したものは、片目に眼帯をした女海賊。無論スケルトンの姿も取れるが、これには理由がある。後、眼帯の下は別に見えない訳じゃない。どうやらファッションらしく、時折左右逆になってたり、花柄になってたりする。

『さて、今日も舵を代わればいいのかい？』

「ああ、いつもすまないな。」

『構わないよ。アタシは楽しくてやってるんだし、気にするこたあないよ。』

「そう言ってくれると助かるよ。」

一言二言会話して、舵を代わってもらう。そしてユーリは道具袋から刀を取出し、甲板に出る。そして同時に召喚。

「ワイヴァーン、あいつらを相手してやってくれ。」

呼び出されたのは幻獣界に住む巨大な飛龍、その翼は3対6枚あり、百メートルを軽く超すであろう巨体は、全ての物に威圧を与え、闇を連想させる漆黒の竜が咆哮を上げる。

召喚主の言葉を聞き届け、空中から灼熱の火炎弾を撃ち込み、翼

が巻き起こす暴風と竜巻により、船に近づくものを全て空高く吹き飛ばす。そして、空中に浮かんだモンスターはワイヴァーンの爪から放たれる衝撃波に打たれ、海の藻屑となる。そこは既に、塵芥が浮かぶ墓場とかしている。

『グオオォオオ！！』

その咆哮は水の中を振動として伝わり、深海に逃れたモンスターを直撃する。その結果、一つ、また一つと海に気絶したモンスターが浮かんでくる。そして、稀にそれを掻い潜って来たとしても、待っているのはもう一つの地獄。ワイスタァンに伝わりし生ける伝説。それを身をもって知ることになる。

「さて、始めようか！！」

鞘から抜き放たれる真剣。自ら鍛えし刃から斬撃が衝撃となり、全てを切り開く。それは一切の視認を許さず、何の抵抗なく、即死させる。居合い切り・絶。これはそう呼ばれる居合いの一つ。本人は仕留めやすさからこれをよく使う。と言っても加減はしているが。その姿を見ながら、サナレが呆れた声でつぶやく。

「でも本当、召喚獣って言われても信じれる強さよね。さすがは生きる伝説。」

「でも、ユーリはそう言われると決まって嫌そうな顔するんだよね。なんかやり過ぎたって言ってたし。」

「本当、何をしたんだか。」

そう話す、サナレとクリュウの目の前では、モンスターが勝手に

切り落とされるという鎌鼬現象が多発している。それを引き起こしている本人は、いたって涼しい顔をしたまま、視認不可の速さで刀を扱う。それに全員が見惚れている中、ユーリの声が響く。

「お前ら、こっちに気を取られるのはいいが、数匹そっちに行ったぞ！」

「えっ！嘘！」

ユーリの言葉に全員が素早く臨戦態勢に入る。その直後、モンスターが海面から飛び出す。そしてそれらとの戦闘に入ろうとしたところで、再びユーリの声により中断される。

「全員何かに掴まれ！！揺れるぞ！」

その声が聞こえ、全員の耳にその声が届いた次の瞬間、船よりも大きな巨大魚が海から跳ね上がり、津波を巻き起こす。それを見た面々は遅れながらもそれぞれの行動を始める。

「ちょっと！これは無しでしょう！！」

「いやあああぁぁぁ！！」

それは船を転覆させるには十分な威力となって押し寄せる。

『いい波じゃないか！』

「はあ、やれやれだな。」

ホーンテッド船長が舵を操り、何とその大波に乗る。その様は船

でサーフィンを行っているとしか思えない。けれど、その波は一つで終わらない。数十の大波を起こすそれは、本場の嵐と比べても何の遜色もない。

しかし、それのうちの幾つかは、ユーリが居合いで大気と共に波を二つに裂く。船長の舵捌きとユーリの斬撃により嵐を乗り切る。二人の顔には余裕とも言える笑みが浮かんでいた。それは少なくとも見ている者からは、間違いなく楽しんでいるとしか見えない。

「嘘、大波切ってる。船も波に乗ってるし、夢かしら？・・・そうよね、あんなに楽しそうなんだし、夢よね、うん！」

「いや、うんじゃないから！サナレ！戻ってきて！！今手を放したら終わるよ！！」

「いやぁああ、目が回るぅぅ！！きゃふっ！！ふみゅ！！」

問題はそれ以外のメンバー。クリュウとサナレは手すりに必死でしがみ付き耐えている。サナレは現実逃避に走り始めているが。プラティはなんとか室内に入ったまではいいが、何か掴む前に波に乗ったので操舵室の下、鍛冶場にまで転げ落ち、絶賛狭い室内で、空中浮遊と激突を繰り返している。ちなみに船そのものをブロンが改造して強化しているので、プラティがぶつかったぐらいで壊れはしない。合掌。

「ちょ、ちょっとこれは不味い、かな。」

そして、ラジィだが、彼女は今、船に繋がれた縄にしがみ付いている。そしてその足元は海、彼女は今、最初に津波の時に最前線でモンスターを待ち受けていたので、船が傾いたときに投げ出された

のだ。

本来なら何かをつかむには、十分に間に合う距離だったのだが、首にぶら下げているペンダントが外れ、それを掴みに体勢を崩したために届かなくなってしまった。だから咄嗟にロープを掴んだのだが、そのロープが思っていた以上に長く、海面ギリギリまで飛ばされることになったのだ。

「でも、これは失くせないもんね。」

彼女の手の中にあるそれは、ユーリ手製のペンダント、これ自体に結界が仕込まれていて、若干の身体能力強化という代物で武器がナックルという格闘武器である以上、攻撃を防ぎ、尚且つ攻撃力や素早さも上がるこのペンダントは非常に相性がいい。今更ではあるが、市販の物より格段に質がいい。というより桁が違う。

非公式とはいえ、鍛聖が作った者なので当然だが、低級の召喚術なら無効化、中級でも半減する程の結界が張れる。無論物理攻撃でも防ぐ。本人にとっては気紛れに作っただけとのことだが、ラジィが気に入ったので、そのままプレゼントしたものだ。その装飾は向日葵を象っている。

「早く上らないとね、って！嘘！！」

今彼女はその縄を上り、後数メートルの所まで来ていた。だが、此処に来て船に繋がれている部分が、ぶちぶちと嫌な音を立てて切れ始めていた。それを見ながら急いで上ろうとする。だが、悪い事は重なるのか、そこには先ほど上っていたモンスターが縄に重なるように転がってきた。先ほどに津波でどこかにぶつかりでもして気を失ったのだろう。そしてその鋭利な牙が縄の裂け目に触れる。

「え！ちょ、ちょっと、それはないと思うん、だけどな！！」

それを見てさすがに不味いと判断したラジィは、勢いよく縄を上る。しかし、縄は上りきる前に絶望的な音を立てて切れる。落ちる前に壁を蹴り手を伸ばすが、僅かに届かない。少しの浮遊感の次に感じるのは自分がこのまま落ちるという事を示す落ちる感覚だけ。

「（あれ、ボク、このまま・・・やだな。まだ、なんにもできてないのに。まだ、夢だって叶えてないのに。アニ、キ・・・）」

最後に甲板で刃を振るっているであろう青年の事を考え、意識が沈み込む。暖かな温もりに包まれながら。最後に感じたのは、海水の冷たさとは別のナニカだった。

ちなみに、シュガレットは空中に飛んでいるので、特に被害もなく戦い続けていたらしい。

心地の良い感触と共に、ゆっくりと目覚めが促される。僅かに開いた眼には木で作られた天井が見える。しばらく自分の状況が判らずに混乱していたが、何があったのかを思い出すうちに、顔が青ざめて跳ね起きる。しかしその眼に映った景色はどこかの見知らぬ島や家でもなく、かといって海の底では断じてない。見慣れた船、ブロンの船の鍛治室、そこの備え付けのベッドの中だ。

「あれ、ボク・・・海に落ちて、でもここは、あれ？」

元々頭を使ったことは苦手であり、物事を深く考える事をしないラジィには現状が上手く飲み込めない。とりあえずベッドを下りようと体を動かす。すると上から、足音が聞こえ、プラティが下りてくる。

「あっ！ラジィ！目が覚めたんだ！！今皆呼んでくるから待ってて！」

そう行ってプラティは階段を上っていく。先ほど言っていた通り、皆を呼んでくるのだろう。未だによく判らないが、とりあえず自分は助かったんだという事はなんとなく理解する事が出来た。

「でも、誰が助けてくれたんだろう。誰も気付いてないと思ってたんだけど。もしかしてアニキが助けてくれたのかな？・・・だったらいいなぁ。」

いくつかの疑問と本音を口にしながら全員が下りてくるのを待つ。程なくして全員が下りてくる。舵は変わらずホーンテッド船長がとっているらしい。ちなみに初めて見たサナレとプラティが大声を上げ、騒ぎになった事が有る。これが人間体を取っている理由なのだが、今では些細なことである。

「気分はどうだ？」

「うん、もう大丈夫かな。ほら。」

そう言って、ベッドから飛び降り、ひとしきり体を動かす。それをしばらく見ていたユーリは表情を緩め、口を開く。

「本当に大丈夫そうだな。はしゃぎ過ぎてこけるなよ。」

「ええ～そんなに子供じゃないよ！」

頬を膨らませるラジィを見て室内に笑いが溢れる。それを見てラジィも表情を緩める。そして疑問を解決させるために口を開く。

「それで、ボクはどうやって助かったの？海に落ちる直前だった筈なんだけど。」

「ラジィを助けたのはユーリだよ。」

そういって、青年を指さすクリュウ。それを聞いて自分が願った通りに助けてくれたような錯覚に陥り、顔に赤みが増す。それを隠すために聞き返す。

「え？本当に？」

「嘘を言ってどうする。というか覚えてないのか、少なくとも最初は起きてたんだと思ったんだが。」

「え？」

そしてユーリからあの時の出来事を聞く。その時、全員の顔が引き攣っていたが、その理由もすぐに気付くことになる。

ラジィが海面に落ちる直前、蒼い光がラジィを包み、海面を疾走

する。それは沈むことなく、移動する。その光はストラを纏ったユーリ。ラジィを抱き上げ、海面を文字通り走る。ついでに　すれ違ったモンスターを蹴り飛ばし、海に沈めていく。

「全く、掴まれと言ったんだが、何に気を取られたんだか。」

その目線は先程助けたラジィに向いている。恐らくは何か足を止める何かがあったんだろう。直前で何かがラジィから離れていくのを感じた。とりあえず助けるのは可能だったために、ギリギリまで波を切る事にしたが、もっと早く来た方がよかったかなと思う。

「さて、と。せっかくだ。ここで群がってるモンスターとお別れしようか。」

一言そう言うと、残りのモンスターの方へと海の上を走っていく。蹴りにストラを込め、モンスターに叩きつける。イカに似たモンスターの触手が足に巻きつくが、むしろそれが狙い。構わずに足を振り回す。その脚力にモンスターは引っ張られ、ユーリを中心に回転する。

それは傍から見ると、鉄球を振り回しているかのようにも見える。所為ジャイアントスイングの様なものである。そして他のモンスターが固まっている所へ勢いよく叩きつける。海面に激しく叩きつけられ、水柱を作り出す。それに巻き込まれたものたちはたまったものでは無いだろう。

「次はこれでどうだ。」

その言葉と同時に、足元の海面から、赤い茨と青い鎖が噴き出すように現出する。赤い茨は、モンスターを縛り上げるとその意思を

狂わし、力を奪う。青い鎖は縛り上げたモンスターを引きちぎるかの様な勢いで体をその場に縫い付け、持っている力を封じる。

「吹き飛べ。」

呟いた言葉は誰にも届くことなく、爆発音にかき消される。それは茨と鎖がその力を開放した結果生まれた爆発。その威力は並みの爆弾を軽く凌駕する。その衝撃で先程の大波の１０数倍以上の規模の、もはや、天変地異の領域とも言える荒波を作り出す。

見ているであろうプラティ達の眼が見開かれる。その眼には、これから起こる事が真実、予感として頭に浮かんだのだろう。この破滅を予感させる大波によって、船ごと飲み込まれるという未来を。だが、その光景は、他でもない、その光景を生み出した青年によって破壊される。

「さて、少し派手にやり過ぎたな。」

大波に赤い光が灯ったかと思うと、徐々に霧となり、その勢いを弱める。そして青い光が灯ると、それは凝固し、塔のようになり、流れる事を封じられる。それは一種の幻想的な風景だろう。海に忽然と現れた赤い霧と青い塔。それは見る者を魅了する力を持っていた。

そしてそれを生み出したユーリは、残りのモンスターに目をやる。途中で止めたせいか、まだ残っている者がちらほら存在している。逃げ出すものもいるが、まだいくらかこちらに向かって来るものもいる。

「さて、今ので結構減ったが、後は一気に決めるか。」

そして、その言葉と同時に持っている刀が光に包まれる。それは形状を変え、更に長く、鋭くその身を研ぎ澄ます。その刀に込められし力は鬼神将ゴウセツ。行われし現象は武装召喚。物質、今回で言えば自分の装備に召喚獣を込める技法。もしくは召喚獣そのものを武器として使うことも可能とされる、ユーリの術の一つ。

光が消えた後に見えるその姿は、紅く長大な鬼神の刃。それは長さ5メートルほどの刀。柄の部分には鎧の様なものが付いており、それは腕を守るように展開している。そして、その刀身からは紅い魔力が霧となって噴出していた。その銘は天之尾羽張。

「さて、これで終わりだ。」

終幕、神速すら凌駕するそのひと振りは、海を軽く裂く極大の斬撃となり、それは空の雲をすら裂く。その威力は射線に入った多数のモンスターを無慈悲に切り裂く。その死の斬閃から逃れたモンスターも、その後に生まれし大渦に残らず飲み込まれ、帰らぬ命となる。そして船が巻き込まれる前に、再び刀を振り渦を切りかき消す。

他のモンスターもワイヴァーンが仕留めたのだろう。既に船の護衛をしている。ユーリはその光景に特に思う事も無く、また水の上を滑るように疾走し、船へと戻る。見ている者の心を置き去りにしながら。

「とまあ、こんな所だ。」

なんでもない事のように言う。その言葉を聞いたほかのメンバーの顔色は、凄く微妙な感じになっている。何の反応も無いのを不思議に思ったのか、ユーリが口を開く。

「どうしたお前ら？」

「ねえ、ユーリ、不思議に思わないの？」

「何が？」

「何がって、貴方、海の上を走ってたのよ！それに海を割ったのよ！！真っ二つに！しかも先にある島まで切ってたじゃない。」

サナレの指摘を聞き、ユーリは気になった点を反論する。

「失礼な、寸前で止まるように計算してる。あの島には斬撃は届いてないよ。」

「え、本当に？」

「ああ。」

「・・・真正の化け物じゃない。」

「・・・本当に失礼だな。」

「まあまあ、二人とも、とりあえずみんな無事だったんだしさ。落ち着こう、ね。」

クリュウの言葉でとりあえずその場が収まる。ユーリは派手にしないように早めに終わらせたのだが、まだ駄目か、と内心落ち込む・・・その判断がすでに間違えていると気付けない。

「・・・まあ、それで、どうする？まだ進むのか？」

「え？」

「いや、一旦帰ってまた日を改めてくるという考えもあるからな。」

「だ、大丈夫だよ。ほら、体に痛い所なんてないし、ね？」

ユーリの言葉にラジィが大げさとも言えるほどに体を動かし、大丈夫だという事をアピールする。流石に自分のせいで旅を断念するというのは嫌らしい。

「まあ、いいんじゃないかな。ここまで元気に動けてるんだし、何も問題は無いと思うけど。」

「そうよ、それにあなたが治したんだから問題ないでしょ？」

それをプラティとサナレが擁護する。口にこそ出してないものの、他の面々も同じ意見の様だ。それを見たユーリは内心帰れるかもと言った期待を溜息と共に消す。

「・・・まあ、無理だけはするなよ。」

「うん！！」

ユーリの言葉に嬉しそうに頷くラジィ。他のメンバーも安堵した

のか今では気軽に会話している。

「さて、俺は操舵室に行くから、お前たちは休んでろ。特にラジィはまだ寝てろ。何かあったら呼ぶから。」

とりあえず、いつまでも舵をホーンテッド船長に任せるのも忍びないと思い、行って見るが。

『まあ、まだいいじゃないか。減るもんじゃないだろ、ね！』

そう言って無理矢理に舵を取られた。まあ、船長なんだし、船と海が好きなんだろう。いつもの問答だが、本当に楽しそうに海を見ている。

『ほら、何してるんだい！こっちはこっちでやっとくからさ！心配いらないよ！』

「はあ、ならつまめる物だけは置いとくから、適当に食べててくれ。」

『いつもありがとうね、感謝してるよ。』

突然、穏やかな声でそんなことを言われる。

「ああ、そうか。それは本当に嬉しいな。」

前を向きながら言う船長に苦笑いしながら返す。また、海で舵をとれたことに対して行っているのだろう。これくらい言ってくれればいつでも叶えてやれる。

「それじゃ俺はお言葉に甘えて、そこいら辺を散策してくるよ。」

『ああ、行ってきな。』

船長との会話を切り上げ、外へと出る。そこにはふくれっ面になったシュガレットがいた。

『・・・』

「どうした？こんな所で。何か船長に用でもあったか？」

『何もありません！！』

「そうか。それじゃ俺は散歩に行ってくるから、シュガレットも適当にくつろいでおけよ。」

『あっ！』

何か言いかけたシュガレットだったが、気付かずにユーリは外へ出ていく。その後にはジト目で、ユーリが去った後を睨むシュガレットがいた。

「さて、とこれからどうするかな。」

元々舵以外にすることはそんなにない。食事を作ろうにもまだ時間があるし、何かをして時間を潰す必要がある。鍛冶場で何か作ろうにも、ラジィが休んでいる以上、あまり煩くしたくは無い。召喚獣を呼べばどうとでもなるが、こんな事で呼ぶのもどうかなと思うし、だが、今まで暇つぶしに召喚を繰り返してきたりもしたが、誰もかれもそれを咎めもしない。気のいい連中だと思う。

「まあ、呼ぶだけ呼んでみるか。」

駄目ならそれはそれでいいや、と気楽に考える。元々何もする事は無いのだ。そう思い、来た道を帰っていく。操舵室で船長とシュガレットが何か熱く話していたが、邪魔するのもどうかと思い、そのまま階段を下りていく。幸いにもシュガレットは気づかなったらしい。船長はこちらにウインクしてきたが。

そして、その下にある鍛冶場に入る。そこには先ほどと変わらず、ラジィがベッドの上で退屈そうにしていた。

「あれ、アニキ、どうしたの？」

「いや、時間が空いたんでな。とりあえず何か作ろうかなと思ってな。」

「アニキ今暇なんだ。それならボクと話しない？皆に寝てろって言われて暇なんだ。」

「まあ、それでもいいか。」

「やった！それじゃ何話そっか？」

ユーリがラジィとの会話を優先すると、ラジィが本当に嬉しそうに身を乗り出す。

「はあ、いきなり元気になったな。」

「勿論！だってアニキとゆっくり話せるんだよ！」

「いまいちよく判らんが、まあいい。それにもうそろそろ歩いてもいいか。」

「本当！やった！」

そう言ってベッドから飛び降りるように下りるラジィ。それを見ながらため息をつくユーリ。

「で、どうする？上に行くか？それともここに残るか？」

「勿論、さっきまで言ってた通りにアニキと話すよ！」

「・・・そうかい。」

それを見て、呆れながら返事することで応えるユーリ。

「それじゃ、何の話をするんだ？」

「勿論アニキの今までの旅の話だよ。まだまだ聞きたいんだよ。」

「前にさんざん言ったと思うが？」

「でも全部じゃないんでしょ？ボクはアニキの事がもっと知りたいんだ。駄目、かな？」

「駄目とは言わないが、妙なものに興味を持つな。」

「だって、ボクらはワイスタァンで生まれて、用事がないと外に出る事すらあんまりないんだよ。だからアニキの話は新鮮で面白いん

だよ！」

「俺の話は娯楽か何かか？まったく。」

「あはは。それで、今日はどんな話をしてくれるの？」

「話をするのは決定してるのか。はあ、まあいい・・・そうだな、前に行った話の続きでもしてやるか。」

「前っていうと・・・アニキを教えた先生の話？」

「ああ、そうだ。・・・と言っても、教えられた覚えはあんまりないんだがな。（トラブルばかり持ってきて、なんだかんだで俺も教える側に回ってたし。正確にはあいつらの家庭教師だし、な。）」

そう言ってユーリは、昔あったことについて思いをはせる。ある時は懐かしい顔を見せ、時には儚い笑みを浮かべながら。それをラジィは本当に楽しそうに聞く。まるで自分もその話に参加しているかのように。

「（アニキは本当に、いろんなところを回って来たんだなあ。アニキの話を聞いてると、ボクも見て見たくなっちゃうや。）」

事実ラジィは、その話を聞いて、実際にその話の場所にいつか実際に行ってみたいと思っているのだ。それは、今までユーリが歩んできた道、それを自分も実際に見てみたいのだ。何を見て、何を思い、今ここに居るのか。ユーリの事ならばなんでも貪欲に知っていきたいと思う。それはラジィの偽らざる気持ち。

「（今までいろんな話を聞いて来たもんなぁ・・・でも。）」

一つだけ、そうたった一つだけ納得がいかない事が有る。それは話がつまらないとか、内容が理解できないとか、そういうものではない。確かに、話している内容を全て理解している訳では無い。判らない話や単語も数多い。それにユーリ自身、話していいものと、悪いものの区別をしているために、物語の真の核心には迫る事は無い。だが、ラジィが不満に思っていることはそういう事では無い。それは簡単な理由。

「ねえ、アニキ。」

「どうした？」

「その先生をやってる人って・・・女の人なんだよね？」

その言葉にユーリは気に留める事も無く、自然に返す。

「ああ、そうだが。前にも言ったと思うけど。」

それを聞いて自分の気持ちが、僅かながら沈み込むのを自覚する。

「・・・そうだよね。」

「？」

「（・・・どうしてアニキの話に出てくる人たちの、ほとんどが女の人なんだろう。）」

そう、ユーリの昔語りで出てくる者達の、そのほとんどが女性で構成されている。その男女比率はおかしいくらいに女性側に傾いて

いる。ユーリに思いを寄せる者たちは自分以外にもいる。ラジィもそれはきちんと分かっているつもりだ。だが、ユーリの話を聞くたびに思う。それは本当に判ったつもりになっていただけだと。

「（アニキを好きな人だって、アネキたちやサナレ以外にもきっといるとは思ってたけど、今までの話を纏めたら何人いるんだろう。アニキがこんな事で嘘を言うわけないし、それ以前に、ボクを騙したことなんて今まで一回もないし。やっぱり本当の事なんだろうな。）」

ユーリの話を聞くのは本当に楽しい。内容もそこらの物語等よりも面白いし、ユーリの話そのものが聞きやすく、判りやすいように説明してくれるので、大体の流れは分かる。

だからこそユーリの話を皆楽しみにしているのだ・・・あとは登場人物がほとんど女性でさえなければ、いや出てはいけない訳では無い。ただ、ライバルとして考えると、競争率がとんでもないことになっている。そしてその本人はその想いをことごとく躱している。しかも無自覚に。

「どうした急に黙って？何か判らないところでもあったか？」

ユーリが不思議そうにこちらを見ている。他の事ならば神がかり的な頭の冴えを見せるのに、恋愛事となると、それが全て消え失せているような気がする。しかも自分の事限定で。周りのそう言った変化は敏感に察知するのにどういう事なんだろう。まるで自分は恋愛対象に入っていないと確信しているかのような、そんな感じがする。

「アニキ・・・アニキって彼女が欲しいとか思った事、ある？」

「・・・は？」

突然の質問に驚くユーリ。それもその筈だ。自分の昔話をしていたら急に自分の彼女の話になったのだ。驚かない方がどうかしていると言えるだろう。

「どうしたんだ急に。」

「だから、その、アニキって非公式だけど鍛聖だよね。そう言った事に関しては結構話が来てるとか思ったんだけど。」

「ああ、確かに書類に交じってお見合い話の写真やら何やらが紛れ込んでるからな。それを話があったというならあったんだろうな。（御蔭で変に勢いで書類にサインしてると、いつの間にか書き込んでてやばい目に合うから手が抜けないし、あの爺の仕業だろうが。）」

「やっぱりアニキって人気者なんだ。」

ラジィが妙な事を言って俯いたっきり喋らなくなった。それにしても、人気者ね。あんまり嬉しくないんだが。恐らく肩書が変に影響してるんだろうし。

「はあ、別にそういう事は無いと思うぞ。俺はそんなに人気なんてないと思ってるし。」

「本当にそう思ってるの？」

今の俺の言葉にラジィがゆっくりと顔を上げ返事をした。俺はそ

れに自分が思うように返事を返す。

「当たり前だ。それに俺はあまり表に出ないしな。そもそも知っているかどうかすら怪しいんだが。」

「・・・アニキはもう少し、自分がワイスタァンに住む皆にどう思われているかとか、知っといたほうがいいよ、きっと。」

どこか投げやり感を漂わせ、ラジィが言って来る。その声色は俺が何も知らないと言われているような気がして、若干へこむ。

「結構ワイスタァンの人たちと交流はとってるつもりなんだが？」

「それじゃ女の人に誘われたこととかは？」

そう言われ、少し考える。

「まあ確かに鍛治についての話を聞かせて欲しいとか、作った剣を見て欲しいとかでよく呼ばれるけど。」

「・・・もしかしてそれ全部行ってるの？」

「いや流石に全部は無理だな。ただ行ける時には行ってるぞ。こういう事も必要だしな。」

「全員女の人なんだよね？」

「まあ、多いのは認めるが、別に女性ばかりってわけでもないんだが。」

「それでアニキは彼女とか作る気はあるの？」

「いや、だから、なんでそこでそのセリフが出るんだ？」

「・・・」

いかにも不満です。と言わんばかりの顔をしたラジィに疑問をぶつける。というか、なぜこんな話になったのだろうか。しかも自分の話をすると、誰もかれもが同じような事を聞いてくるような気がする。

そしてその言葉を聞いたラジィは、何かを考えるように腕を組んで、あーでもない、こーでもないといっている。正直訳が分からない。だが、そんなことを思っていると何を考えたのか、その顔に決意を刻んで目を合わせてくる。

「アニキって自分から告白しないと、一生彼女出来ないと思うよ。」

突然の発言に落ち込む。そこまでもてなさそうに見えるのか。変わり続ける展開に全くついて行けないが、とりあえずラジィを見返してみる。しばらくこちらを見つめていたラジィだが、何かを決心したのか、その口を開き、言葉を紡ぐ。

「アニキ、ボクじゃ、不満かな？」

いきなり主語を抜かした言葉に、意図するところが判らずに聞き返す。さすがに今の言葉だけで、言いたいことを全部理解する程、俺は出来た性格はしていない。と言うより先ほどの言葉が地味に効いた。

「何が？」

聞き返すと一気に顔を赤く染め、拙いながらも続きを話そうとするラジィ。

「そ、その・・・か。」

「ラジィ！！」

だが、その声は後ろから聞こえてきた声によって、断ち切られることになる。

「・・・ラジィ、今、何を言おうとしてたのかなあ。私、すごく聞きたいんだけどな。少し向こうでお話ししよっか。」

「ア、アネキ。」

そこにいたのはプラティ。だが、いつもの明るさは鳴りを潜め、静かにラジィへと視線を向け語りかける。俺はと言うと、どんどん変わっていく状況について行く気も起らず、事態を静観する。

「それじゃ、ユーリ、ラジィ借りてくから。大丈夫、直ぐに済むから。」

「ちょ、ちょっとアネキ！」

「どうしたのラジィ？そんなに慌てて？ああ、大丈夫。皆一緒だから。ね？」

なぜか悲壮な顔で悲鳴を上げながら、プラティに引きずられてい

くラジィ。なぜかは知らないが、プラティの機嫌はかなり悪いらしい・・・船酔いでもしたのだろうか？

「・・・はあ、結局ラジィが言いたかった事はなんだったんだろうな。」

そんなことを思いながら、一人になった部屋の中で一人思う。なぜか上の方で、先程の黄色い少女の悲鳴が聞こえたのを知覚した・・・何をやったんだ、お前は。

その後、しばらく俺はそのまま休息を取り、のんびりとしていた。せっかくなので何か作ろうかとも思っていたが、と言うよりそれが目的だったのだが、先程の会話でなんとなく作る気が失せてしまったので、簡単なものを作って早々に止める事にした。別に本格的に作るのはまた今度でもいいだろう。

そして今度は厨房へ行き、食事時になる前に下ごしらえを始めた。そして、そのまま調理を開始。それが出来上がるころには全員が見計らったように、食事をとりに食堂へと下りてきた。

「あっ美味しそう。今日もユーリの料理だ。やっぱりユーリの料理が一番だよね。」

「アニキの料理って、絶対にお金が取れるくらいに美味しいよね。」

クリュウが嬉しそうに声を上げ、ラジィが褒めてくる。どうでも

いいことかもしれないが、クリュウ、今のその言葉をお前の母親が聞いたらなんというだろうか。まあ、楽しくはならないだろう。少なくともクリュウにとっては。

「へえ、今回もまた違うメニューなんだ・・・なんで男のアンタがこんなにレパートリー豊富で、しかもおいしいのよ。理不尽だわ。」

サナレが褒めているのか、喧嘩を売っているのか判らない言葉で評価する。とりあえず全員が席につき、食事に手を付ける。ちなみにワイスタァンにはいただきます、ご馳走様の習慣はきちんとある。

「失礼な。最近の男は料理もできるんだぞ。」

「あのね、アンタ以前に王宮で出そうな料理作ったでしょ？あそこまで料理できるような男がそうポンポンいるわけないでしょ！それに男の料理って、材料入れてかき回して調味料ぶち込んで終わりって奴でしょ？寝言は寝てから言いなさい。」

「お前は今すぐに世界中の男性に謝罪して来い。」

サナレの口から語られた言葉を、呆れながら聞く。偏見にも程があると思うんだが、しかもそんなやつがそうそう居る筈がないだろう。ブロンの奴も割と家庭料理とかなら得意だぞ。この前アマリエに持っていってたし、断られたが。

「だって、姉さんが昔に言ってたわよ。」

「・・・あいつが原因か。とりあえずコウランの言う事は3割くらいは信用するな。時たま本人も判ってない事を言って来る時があるからな。」

「そうなの？」

「ああ、あいつのせいで余計に話が拗れた事もあったぐらいだ。」

「それって、ユーリが鍛聖って呼ばれる前の事？」

「ああ、そうなるな。」

「昔の姉さんって結構お転婆だったりするの？」

「お転婆と言うか、あれはそういうものじゃないな。」

どちらかと言うと爆弾か何かだったと思う。今でこそ、落ち着きを持ち、そこそこの分別は付いているが、それでも周りに誰もいない様になると、途端に人を引っ張りまわす迷惑マシーンへと変貌する。

この前も人を見かけるなり、いきなり襟首掴んで昼飯をおごらされたのだ。そこまで腹が空いていたのか。まあ、女性だし。色々あるだろうから、何も言う気はないが。

「そうなんだ。意外ね。昔から落ち着いてるのかと思ってた。」

「そんなはずないだろう。今でも根っこの方は変わってないよ。少しは大人になったみたいだけど、な。」

「そうなんだ。また今度その話してね。」

然も意外と言わんばかりの表情をして、席に着くサナレ。昔を知

らないっていうのは、割と幸せな事なのかもしれないと、その顔を見ながらユーリは少し思った。

「でもユーリって本当に何でもできるね。料理もおいしいし、鍛治もできる。戦闘だって並ぶ人いないし、今は書類仕事もしてるんでしょ？」

プラティがそう言って褒めてくれているが、最後の事については俺も言いたい事が有る。

「そうやって言ってくれるのは素直に嬉しいんだが、書類仕事は本来ならお前とクリュウの仕事になる分まで俺に回って来てるんだが。」

その言葉を聞いて、プラティの顔が引き攣る。離れて聞いているクリュウも少し後ろめたそうなものになっている。

「え？！あ、あはは。う、うん。いつも感謝してるよ。」

「そ、そうそう。それに僕たちにはまだ早いっていうか。」

焦ったように言う二人に追撃をする。普段あまりこう言った事は言わないので、もう少し言っておいてやろう。

「いつも嫌がって二人そろって脱走して、俺に全部回しているくせによく言うな。」

「そ、そんなことないよ。そ、そう！これは適材適所って奴なのよ！この前、覚えたの。」

「それにまだ僕たちは学ぶ事だって多いし。これだって立派な仕事だよ。」

「へえ、それはいいことだ。ついでに責任って言葉も教えてやろうか？」

「「御免なさい。」」

・・・まあ、とは言うものの、そこまで苦痛ではない。元々デスクワークは得意なのだ。それに色々考える事も多いので刺激にもなる。まあ、量は多いが、今の自分からすれば些細なものである。

「（それに俺が教えているわけじゃないしな。）」

それに二人の教育係はシンテツとサクロだ。俺が如何こう言う気はない。ただ、きちんと教えれているのか、たまに不安になるのも事実、早く使える位にはなってもらいたいものである。

『まあまあ、いいではないですか。お二人とも頑張っていらっしゃってますよ。ユーリ様。ただ少しだけ長続きしないだけで。』

「・・・駄目だろう、それは。」

『今後に期待と言った所ですね。』

シュガレットの言葉に溜息をつく。思った通り、教育係の二人も苦労しているらしい。少しはヴァリラ辺りを見習えとも思う。まあ、この二人が書類仕事に携わるのはもっと先の事だろうという確信は持てた。

『では、今度は私も一緒に料理を作りますね。』

「ではに至った、お前の思考そのものが俺には理解できないんだが。」

『私たちの前では小さなことです。大事なのは私と旦那様が一緒に作業するという一点のみです。』

「いや、違うだろう。明らかに無視したらダメな部分を流しただろう。」

シュガレットの無茶ぶりに呆れるユーリ。シュガレットは結構本気で言っているらしく、手を握りしめて力説していた。それを冷めた目で見ているユーリ。両者の間には割と大きな温度差があった。

『むっ。別にいいじゃないですか！二人の共同作業なんですよ！やる気が出るじゃないですか！』

「・・・はあ、それなら今度はそうするか？」

しょうがなく妥協して、次は二人で料理するかと言う旨を話す。最初その言葉をきょとんとして聞いていたシュガレットだったが、言葉の意味が理解できると、花が咲き誇るような満面の笑みを浮かべ、幸せそうに話しかけて来る。

『さすがは旦那様です。不束者ですが、これからは末永くよろしくお願いします。』

「・・・おい。」

内心早まったなと思いつつも、とりあえず突っ込んでおく。なぜか今のやり取りで、周りの視線の温度が下がったような気がした。いつもの事だろうに、どういう事だ？

「でも、本当にアニキって何でもできるね。ボクなんて、武器作って戦うのが精一杯で、料理なんてしたことないのに。」

少しラジィが落ち込んだように言う。それに気付いたユーリは特にためらいもせずに言う。

「なら、俺が教えようか？料理も回数こなすと上手になるし、慣れてくると結構楽しいものだぞ。」

「え？」

その言葉に周りの声がやむ・・・なんでだ？

「そ、その、ホントにボクが教わってもいいの？」

「いいに決まってるだろう。そう言ったはずだが。」

「で、でも、アニキって鍛聖なんだよ！そんな人に教えなんて。」

「いや、料理教わるのに肩書とか関係ないからな。それに料理と関係がないだろう鍛聖は。」

「だ、だけど。」

「それに、何時かはラジィにも好きなやつができるだろうし、覚えてて損は無いと思うぞ。」

「?!?!」

その言葉を言った瞬間、確かに時間が止まったような感覚がした。といっても当然、実際にそんな事は無いが。クロックラビィなんか呼んでないし。けれどこの場に居る者の動きは確かに止まった。そのせいで錯覚はする。その場には静寂と何とも言えない雰囲気がにじみ出ていた。唯一ラジィが顔を真っ赤にして、あたふたしていたのが割と印象的だったりする。

「・・・どうした?」

「どうしたじゃないわよ!このウスラトンカチ!!いきなりなにを言ってんのよ!!」

いきなり激昂し、立ち上がったサナレに視線をやり、困惑しながらも窘め返答する。

「落ち着け、喋るなとまでは言う気はないが、食事中に騒ぐな。別にラジィに料理を教えるだけだが、そんなに驚くようなことか?」

「当たり前でしょ!なんでそんな話になるのよ!」

興奮さめやらぬと言った感じで話しかけてくるサナレ。さっきの言葉も意味なかったらしい。とりあえず落ち着かせるために質問に答える事にする。

「いや、料理できない事を残念そうにしていたからな。それならまあ、俺が手助けしてやろうかなと。」

「だから、なんでアンタが教えるの！別に他の人だっていいじゃない！！」

そのサナレの言葉に、口にはしないものの、肯定する雰囲気が周りから感じられた。ラジィだけはまだ何か赤い顔でぶつぶつ言っているが。

「いや、だって忙しいだろ。皆自分の仕事を頑張ってるんだ。だったら俺がやった方がいいだろう。元々言い出したのも俺なんだしな。」

その言葉にサナレが何か言いたそうにしていたが、結局何も言わずに席に着く。それを不思議に思ったが、とりあえずラジィに話しかける。

「それで、ラジィ。」

「え、あ、ああ！うん！！何、アニキ！」

「どうする？どうしても俺が嫌なら、他の人を呼ぶけど、とりあえずやるかどうかを聞かせて欲しいんだが。」

その言葉にまだ若干慌てながらではあるが、僅かに頷くのを見た。

「そっか。それなら、今度から時間が空いたら、一緒に練習しような。」

「う、うん！！」

その言葉に元気よく返事をするラジィ。料理をできるようになる

のが本当に嬉しいらしい。すごく嬉しそうに笑っている。それを見ながら優しく笑うユーリ。

「わ、私も習う！！」

そう言って勢いよく立ち上がるのはプラティ。何がきっかけになったのか、その眼には本気が見て取れる。

「どうした急に？」

「そんなことはどうでもいいの！私も料理ができるようになりたいの。」

「別にそれはいいが、俺じゃなくたって、お前にはアマリエがいるだろうに、あっちに言えばいいだろう。喜んで教えてくれると思うぞ。」

「うっ！」

その言葉を聞いたプラティは何か不味いのか、苦い顔で俯いた。

「はあ、何を考えてるのかは知らないが、お前は他におぼえる事が有るだろうに。とりあえず、シンテツとサクロに扱かれて来い。」

「えぇ～！」

「いや、片方お前の親だからな。そこまで嫌がったら本人泣くぞ。」

さすがに本心から嫌がっていた今の顔を、シンテツが見たら引きこもりかねない。とりあえずシンテツの前ではしないように釘を刺

しておく。あの男もなんだかんだで親馬鹿な部分があるのだ。本当にひきこもりそうで怖い。

「それじゃ、何から教えていくか、少し考えとくよ。ラジィ。」

「う、うん。よろしくね。アニキ。」

そう言って俯きがちに笑うラジィをみて、内心上手くいくといいなと思うユーリ。ラジィが誰を選ぶのかは知らないが、少しでもその助けになればと思う。そんな気持ちなど知る由も無く、ラジィは嬉しそうに笑顔を浮かべ、なぜか周りの面々は焦り顔で何か思案している。

その後も適当に話をしながら食事をし、全員が食べ終わった後、シュガレットとユーリが後片付けを行う。その時のシュガレットの視線がなぜかこっちばかり向いていたのは気のせいだと信じたい。

「あ、見えてきたよ。あそこが地図の島だよ！」

「へえ、結構大きいじゃない。」

その言葉と共に見えてきたのは、緑が生い茂る小島。小島と言っても島だ。それなりの大きさをしている。

「それじゃ、そろそろ、下りる準備をしないとね。」

「うん、そうだね。」

クリュウとプラティが自分の荷物を確認し、問題がない事を確認する。それを見て他の者も確認作業に入る。

「はあ、そう言えば、ここに何か面白い事が有るとか言ってたが、結局なんなんだ？」

「そう言えばアニキには言って無かったっけ？ほら、これだよ！」

そう言ってラジィが紙を広げる。そこには島の全景と、その島の中に何かの印がされている絵が描かれていた。見ている限りでは宝の地図と言った所だろうか。

「どこでこんなものを拾ってきたんだ。」

「露店で売ってたんだ。何でも過去にいた有名な海賊がここに宝物を隠したらしいんだって、それでその宝物を手に入れた者には幸せが訪れるんだって！だったら手に入れなきゃ！」

「（なんだ、その胡散臭いうたい文句は。聞いたことないぞ。そして今の言葉を聞いて、なんで買う気になった？）」

ラジィの言葉を聞いて、そんなもののために一日不意にしたのかと、内心複雑なユーリ。それには気づかずにそれぞれが話を始める。

「でも、今までよく見つからなかったわね。普通に考えたら、そんなもの誰かに見つかっててもおかしくないのに。」

「きっと、ここにその宝物を守っているモンスターとかがいるんだ

よ。それで誰も手に入れられないんだ。」

「それなら、私たちがその宝物を見つけることもできるってことだよね？」

「うん、僕達だって結構腕を上げたし、いざとなったらユーリもいるし、怖いものなんてないよ。」

『でも、宝物ですか。素敵な物だといいですね。』

その話を聞きながら、ユーリは今更ながらここに来たことに対して、若干の後悔をしたのを自覚した。

「（はあ、なんでこんなことになったんだか。）」

その思いにこたえるものはこの場には居らず、事態はどんどん深みに嵌っていく。つまりはいつも通りである。

上陸した後、それぞれが荷物を持ち、地に足をつける。砂浜の向こうには洞窟の入り口が見える。これから入るのはその中、最奥に宝があるらしい。

「よーし、それじゃ、行って見よう！」

「うん！」

「ふん、わたしにとっちゃ簡単な事ね。」

『皆さん元気があり余ってますね。』

「当然！なんたってお宝だよ！」

「（・・・なんか、面倒なことになりそうな気がするなぁ。）」

一人を除き、全員のテンションが上がる。それを他人事のように見ながらユーリはこれから起こる出来事について考える。どう転がっても最後には、自分に面倒が降りかかるのだろうという予感がある。しかもこういう予感は、得てして当たるものだとユーリは知っている。そのため、気落ちするのも無理はない。

「はあ、しょうがないか。今更だしな。」

「何言ってるの、アニキ？もう出発するよ。」

前に目を向ければ、もう洞窟に向かって数人が足を運んでいる。溜息をつきながらラジィと共に洞窟へ向かう。そのラジィだが、言葉を掛けると普通に返して来るが、なぜか、時折こちらをちらちらとみてくる。どこかおかしなところでもあるのだろうか？

洞窟の中は暗闇に包まれ、先が見通せないため、松明を用意する。材木にストラを込め、青い光を放つ松明を作る。燃えている訳では無いので、木が焼けていくこともないし、触れても熱くは無い。しかも長時間消える事は無い。松明としては理想的だろう。

「本当、ストラって便利ね。私も覚えようかしら。」

「いや、断っとくけど俺のストラ限定だからな。こんなことできるの。」

「そうなの？」

「まあな。俺のは少し特殊なんだ。」

「へえ、流石にユーリは別格なんだ。」

「何が流石なのか、気になるんだが。」

適当な会話をしながら奥へ歩いていく。そしてしばらく歩いていくと、三つの別れ道に辿り着く。この洞窟はよくある分岐点のある洞窟らしい。俗に迷宮と呼ばれる類の物だ。こういった洞窟はとにかく印をつけたり、道筋を描いていくなりしないと直ぐに迷う。天然の迷路なのだ。

「分かれ道、だな。」

「うん、どうしよう。どれか適当に選ぶ？」

「でも間違えるとここまで戻ってこないといけないし、この先にも分かれ道があったりしても困るし。」

『う～ん、それなら入り口は三つですし、二人ずつの組になって行動するというのはどうでしょうか。』

「「「「？！」」」」

シュガレットの案で、この先の分かれ道をそれぞれ組になって進

もうということになった。だが、その提案をした時、周りの空気が固まったのだが、結局なんだったのだろうか？

「まあ、お前たちの好きにしろ。」

とりあえず邪魔をする気は無いので、少し離れた所で静観する。ここからはあまり口だしする気は無いので、素直に話し合いが終わるのを待つ。しばらく議論していたがやがて決まったのか話し合いが終わる。そしてここから、班決めの会話に移行する

「よし、ここから先は二人一組で進んで行こう！とりあえずは班分けだね。」

「どうやって決める？」

「とりあえずはクリュウとプラティ、シュガレットとラジィで。」

「「「『却下！』」」」

「なんでよ！別にいいじゃない、何か文句でもあるの！」

「有るに決まってるでしょ！その分け方だとサナレとユーリになるじゃない！」

「だから？やっぱり男の人とだと緊張するでしょ？だから私が受け持つって言ってるのよ！」

「勝手な言い分だよ、やっぱり却下だ！」

『そうです！私とサナレさんが入れ替わったら完璧です。』

「「「「却下！」」」」

『ええっ？！』

「それなら私が！」

「それもダメ！」

「・・・はあ。何をそんなに息巻いてるんだか。しかも堂々巡りで終わらないし。」

今目の前で繰り広げられているのは、壮絶なパートナー争奪戦。それを見ていると、どうも俺だけが除け者になっているような気がする。確かにこの中で唯一の男だし、居づらいのは分かるが、そこまで白熱しなくてもいいと思う。さすがにこの光景には思う所がある。

「とりあえず、くじ引きか何かで決めたらどうだ？この調子だと終わりそうにないしな。」

「そ、そうね。それで決めましょ。まさかやらないなんて言わないわよね？」

「そっちこそ、期待外れでも文句無しだからね！」

「よし、それじゃくじ引きで決めよう。」

『まあ、それで私と旦那様が結ばれるんですね。これが運命と言うのですね。』

「「「「「そんな結末は認めない！」」」」」

『祝福ぐらいしてください！』

「「「「「するわけないでしょ！」」」」」

『うう。』

一応俺の意見が通ったらしく、くじ引きで班分けをすることになった。後シュガレットは色々自重しとけ。そこらの枝を集め、くじの代わりにする。下の方に数字を書きいれ、俺が握っておく。どこかにさしておいてもいいが、俺は特に誰とがいいとかは考えてないため、俺が適役という事もある。

「それじゃ、まずは私ね。一発で当てて見せるわ。」

「まあ、やり直しなしだから一回で終わるんだがな。」

「もう！言われなくても判ってるわよ！」

そう言って最初に引いたのはサナレ。次にプラティ、クリュウ、シュガレット、ラジィの順。全員が引き終わると、その下に書かれている数字を見る。これで同じ数字ならそいつと組になる。そして、俺の手にも一つ残っているので、俺のペアもできる。

「私は1ね。」

「あ、私のも1だ。」

「って何よ。プラティと私って事？」

「そうみたいだね。よろしくね、サナレ。」

「まあ、しょうがないわね。よろしくしてやろうじゃない。」

まず決まったのはサナレとプラティ。なんだかんだ言いながらも楽しそうにしている。これなら、まあ、大丈夫だろう。

「あ、僕は2だ。」

『私も2ですね。』

「という事はシュガレットとか。」

『少し残念ですけど、仕方ありませんね。よろしくお願いしますね。クリュウ様。』

「うん、よろしく、シュガレット。」

二組目はクリュウとシュガレット。こっちも問題なさそうだ。まあ、普段から仲の良い人物ばかりで構成されているので、人間関係とかそう言った問題は一切無いのだが。そして、残ったのは、俺と・・・

「ってことはボクの相手は・・・」

「俺になるな。」

「ええ！アニキと、二人っきり！」

「まあ、間違ってないが、そんなに大声で言うな。」

ラジィの驚きようを見て呆れる。大体二人で話す事など結構あるだろうし、今までも二人で行動したことも多かった。そこまで驚く必要性があるとは思えない。そうユーリは思っているが、ラジィは先程の戦いで助けてもらった事や、その後の会話でいつも以上にユーリの事を意識していたので、この結果に必要以上に動揺していたりする。

『ラジィ様、私が変わりましょうか？』

「そこは言わずに置いておこうよ、シュガレット。」

変わると言い出すシュガレットに、苦笑いしながらも宥めるクリュウ。そしてなぜか羨ましそうにラジィを見るプラティ。サナレにいたっては、そんなプラティにゲンコツをおとして何か言っている。どうやらサナレにも何か思う事が有るらしい。

「ちょっとサナレ！いきなりなにするの？痛いじゃない！」

「まったく。そんなに羨ましそうに見なくてもいいでしょ。」

「だって・・・」

「まったく、いい？確かに今回は別行動だけど、なにもこれで終わりと言うわけじゃないわ。私たちがその宝を先に見つければ、ユーリだって私たちになんらかの形で話しかけてくる筈よ。そこを一気に形勢逆転するの！わかった？」

「うん、そっか。一番最初に宝物を見つければいいんだね？」

「そう、予定通りに行けば、帰りの船の中で私たちが会話の中心になる。そうすればユーリも気に掛けずにはいられない筈よ。」

「よし、私も何かやる気がわいて来たよ！行くよサナレ！」

「ええ！」

なにか話した後、急に勢いよく分岐路へと走り出したプラティとサナレを見ながら、その後を追う、クリュウとシュガレットに目を向ける。こっちの二人もなぜかやる気になっている気がする。

「僕たちも行こうか。」

『はい、ここで良い所を見せて、ユーリ様の心をわしづかみです！』

「うん、きっと褒めてくれるよね。」

『はい、ユーリ様は優しい方ですから、きっと私たちの事をきちんと見てくれますよ。』

「うん、それに、プラティとサナレも急いでるみたいだし、僕らも急ごう！」

『はい！』

なぜかは分からないが、我先に走っていく４人を見ながら、傍らで真っ赤になっているラジィへと視線を向ける。

「さて、俺らも行くか。」

「う、うん。」

そう言うと、何故か俺の手を握ってくるラジィ。突然の事に呆けていると、それに気付いたのか、さらに真っ赤になって手をひっこめるラジィ。

「ご、ごめんね。アニキ。あ、あはは。気にしないでね。」

笑ってその場をごまかそうとするラジィを見ながら少し思案する。そんなユーリを見ながらラジィは嫌がられたと勘違いし、内心落ち込む。だが、その眼の前に何かが差し出される。不思議に思い、顔を上げると、そこにはユーリの手があった。

「それじゃ、行くか。ラジィ。」

「え？」

「どうした？手をつなぎたいんだと思ったんだが、違ったか？」

「え、えっと、その、嫌じゃ、ないかな？」

「なんで？」

「な、なんでって・・・」

ラジィの言葉を聞いて、内心溜息をつき、ラジィの瞳を真っ直ぐに見てユーリは答えを返す。

「はあ、あのな、俺がお前を嫌うわけがないだろう。そもそも今日俺を誘った時も、堂々と人の手を掴んで行ったくせに、何を今更な事を。」

「え、ええ！そ、そうだったっけ？」

「ああ、さも当然と言うように掴んでったな。いつもながら驚いたぞ。」

「う、け、けど。」

「一応言っとくけど嫌なら嫌で、きちんと言うぞ俺は。全く何を不安に思ってるんだか。」

「・・・」

その言葉に黙り俯くラジィ。面倒だなと思いながらも話を続けるユーリ。その声は兄が妹を諭すかのようにやさしくラジィの耳に聞こえてくる。

「さて、俺は別に気にしないんだが、下手に離れて、孤立しても困るからな。迷子にならないように手でもつないでおかないか？」

内心、流石にこんな理由はないな、と思うユーリ。そもそも余程の事がない限り、ラジィから目を放すつもりはない。他の組はまあ、どうにかするだろうが、自分と共にいるラジィはなぜか本調子ではないのだ。なら、少しでも危険を減らすように考えた結果、気分を沈ませるわけにはいかないと結論付けた。故に出来る限りはラジィの要望に沿えるようにしようと考えた。まあ理由が稚拙なのは仕方ないとしておこう。問題のラジィの反応だが。

「・・・」

なぜか無言で手を握られた。そんなにこの理由は苦しすぎたのだろうか。少し悲しくなる。自分でもこれはどうかなと思う理由だが、せめて一言欲しかった。

「さ、さあ行こうよアニキ。」

なぜか小声でそんな事を言ってくるラジィを気にしつつも前へと進む。途中何度か体調を崩してないか聞いたが問題ないらしい。まあ召喚術まで使って治療してるのだから大丈夫とは思うが、いくらなんでも変わり過ぎである。いつもの元気は鳴りを潜め、静かで何かが違う雰囲気に包まれている。

「（はあ、やれやれ。何事も無ければいいんだが。）」

そう思わずにはいられない。心なしか嬉しそうにつないだ手を見ているラジィを見ながら、この先に何もない事を願っておく。

「（どうしよう、アニキと二人っきりなんだよね。）」

ラジィは激しくなる鼓動を隠すように顔を俯け、繋いだ手とは逆の方の手を胸に置く。その気持ちは驚くほど乱れに乱れている。

「（いつもだったらあんまり気にしないのに、あんな事が有ったから。）」

思い出すのはうっすらと意識に残っている、海に投げ出されたラジィを抱えるユーリの顔、時間をおいて、あの時の事を思い出して

きたのだ。いつもより近くで見るその顔は、気を失う寸前でありながらもその心に強烈に印象を刻んでいく。

「（思い出したら頭から離れないよ！どうしよう、アニキの顔が見れないや。）」

そのせいでいざ、ユーリの顔を見ようとすると、頭に血が上ってくるのだ。顔を見たいのに、見ると逸らしてしまう。本人の意思とは裏腹に、その心はいつも以上にユーリを異性として意識していた。

「（で、でも、ここから帰ったらアニキと料理の練習するんだよね？ボクにできるかな？下手に失敗しちゃって嫌われたりしないかな？）」

次に思い至ったのは船での会話、そこでの料理を教わるという約束。楽しみに思う反面、失敗して嫌われないかと思うとすごく怖くなった。それはどれだけ心の中で大丈夫と思っても消える事は無く、逆に心が締め付けられるの感じる。

「（ラジィの奴、どこかで頭でも打ったか？）」

側で見ているユーリはふとそんな事を思った。なぜなら、先程までつないだ手を見ていたのに、直ぐに顔を俯け、手をせわしなく振る。ユーリとつないだ手を。そのせいでさっきからユーリの手がラジィの手と一緒に上下左右に振られる。かと思ったら、今度は反対の手を頬に当て、顔を左右に振りだす。その顔は変わらず赤い。そんな行動を知り合いがとっているとなると、流石に心配もする。

「（なんか自分の世界に入って無いか？まったく、訳が分からないな。）」

洞窟を進みながら、手を繋いだ二人には致命的な温度差があった。それでも特に何も起こらずに奥まで進んでいく。むしろ何もなくてよかったのだろう。ここでモンスターとか、何かの仕掛けでも作動されたらそれこそ大変なことになっただろう。

「ラジィ。」

「え！う、うん。ななに、かな？アニキ。」

その言葉に俯いたまま返事するラジィ、もうそれを極力気にしないようにして、先を話しかけるユーリ。

「とりあえず、何もないみたいだし、ここらで休憩するか？」

「う、うん。そうだね。ボクはそれで構わないよ。」

「（なんでそんなに慌ててるんだ？）」

シートを取出し、地面に敷いた後その上に腰を降ろす。そして持っていていたサンドイッチをラジィに渡し、自分も一つ取る。そして、とりあえずいくつかラジィの事で考え付いた事を言ってみるが、全て該当しなかった。

「ねえ、アニキ。」

「なんだ？」

「その、今日、此処に来て、アニキは楽しかった？」

不意に聞かれたその言葉でラジィに目を向け、無言で見つめる。
「だって、アニキ、最初は乗り気じゃなかったみたいだし、やっぱり嫌だったのかなって。」
「・・・はあ、あのな。さっきも言ったが、俺は嫌なことは嫌ってはっきりと言うぞ。」
「けど・・・」
「何を不安がってるかは知らないが、俺は自分で望んでここに居るんだ。別にお前が気にすることじゃない。それに・・・」
「？」
「楽しかったじゃない。今も、きっとこれからも楽しいんだよ。な。」
確信をもって言ってやる。それもそうだろう。このメンバーなら、きっとどんな事が有っても笑い話にしていくだろう。だからこそ、これからもそれは続いていくと思える。だからこそ、それを見ているのが、それを共にするのが楽しいのだ。その気持ちに嘘は無い。だからこそ本心を伝える。
「う、うん。そっか。そうだよね。」
「ああ、それにまた今日みたいに荒々しく来ては俺を引っ張っていくんだろう？まあ、いつもとは行かないが、それでも行けるときは一緒に行ってやる。」

「うん！」

今の会話で何か吹っ切ったのか、途中からいつもの元気なラジィへと戻っていった。なぜかまでは知らないが、元気が出たのはいいことだ。まあ、腹が減っていただけなのかもしれないが。

「よし、休憩はここらで終わりにして、奥へと進むとするか。」

「うん！僕も頑張って探すよ、アニキ！さあ、行こう。」

そう言って、今度はまっすぐに俺の手を掴み、走り出す。そこにはさっきみたいな雰囲気は無い。それを嬉しく思いながら、歩調を合わせ隣を走る。

「アニキ！」

「なんだ？」

隣には満面の笑みのラジィの顔、そして本当に嬉しそうに話しかけてくる。

「ボクはね、やっぱりアニキの事、大好きだよ！！」

「・・・そっか、それは何よりだ。」

その純粋な思いを込めた言葉に何かを感じ、一瞬返答に詰まったが、何とか無難に返す。

「あ～本当に好きなんだからね。」

「はいはい、まあ、そういった事はおいおいな。」

「もう！はぐらかさないでよね！」

それでもラジィに浮かんでいるのは笑顔。そこに曇った所など何処にも無い。まさしく向日葵の様な笑顔だろう。太陽の届かないこの洞窟で向日葵とは何ともな話だが。

「それなら、これでもプレゼントしとこうか。」

「え？」

ユーリから差し出された物を見る。そこには小さなブローチがある。それは船で軽く作った物。何の変哲もないただのブローチ、その中心に描かれた絵は花畑。

「これ、もらっていいの？」

「ああ、単なる細工品だがな。気に入らなかったら捨ててくれてもいいぞ。」

「そ、そんなことしないよ！！・・・大切にするから。」

「ああ、そうしてくれると有りがたいな。」

胸にブローチを抱き、嬉しそうにはにかむラジィ、それを優しく見つめるユーリ。洞窟の中だというのに、そこには確かに太陽の日差しがあるかのようだった。

「ねえ、この花はなんていうの？」

「ああ、その花はな・・・」

そこには洞窟には不似合いな優しい雰囲気と、暖かな光景が広がっていた。そして、少女は改めて決意する。絶対に目の前の青年と共に居ようと、例えどれだけのライバルが居ても決して負けないように、どう転んだとしても決して後悔しないように、今を精一杯頑張ろうと、だからこそ、この瞬間を胸に刻んでおく。この会話を忘れないように、胸に秘める。想いは今まで以上に強くなり、きっと明日はもっと強くなる。

だから、自分の中で一番大切な言葉を考える。けれどまだ言わない。目の前の青年はいつも肝心要の部分だけは気づいてくれない。だから、もっと意識してもらおう。そうしないと自分ばかりが空回りしてしまう。だから、来るべき日までに最高の言葉を、面と向かって言える一言を用意しよう。

自分の夢をかなえるために最善を尽くす。けれど、その方法は誇れるものでありたい。自分にも周りにも、そしてなにより、青年に自信を持って言いたいのだ。だから・・・

「（だから、その時は真面目に応えてね。アニキ。）」

少女の願いは言葉になる事は無く、笑顔と共に穏やかな時間が流れるのみ。それは何にも代えがたい時間。

隣でにこにこと笑う少女を見ながら、いつか転んだりしないか、少し注意しながら見守る。

「（なんでこんなに元気になってるんだ？よくわからないな。）」

結局の所、ラジィの好意も割と親しい者へのものと考えているユーリ。本人の想いも知らず、実に外れた考えをしている。もし、ここで本当の気持ちに気付けたのなら、ここで一つの区切りとなっていたのだろうが、そんなことはなく、今日もユーリはすれ違う。その思考は目の前の少女の心配へと切り替わる。あと、他のメンバーは怪我していないか、とか、帰った後の仕事はどうしようかなど、割と現実的な考えが広がっている。

「（さて、帰ったら、また仕事か。）」

少女の想いを阻むように思考する、岩が天井から落ち、乾いた音を上げる。その音はどこまでも軽く響いた。

～洞窟の奥、第１班～

「もう、どうなってんのよ！奥まで来たけど、なにも無いじゃない！！」

「きっとこの方向じゃなかったんだね。特に分岐も無かったし。」

「うう、ここからまた引き返すの？」

さすがにハズレとは思わなかったのか、サナレは盛大に肩を落としている。それを苦笑いしながら宥めるプラティ。

「で、でもさ。こうして怪我も何もしてないんだからさ！よかったじゃない！」

「まあ、そうだけど。せっかくユーリと一緒に。」

「まあまあ、ほら機嫌直して、分岐まで戻ろ。ね？」

「はあ、しょうがない、か。」

二人は収穫がない事に落ち込みながらも、元々の分岐まで戻る。その後ろ姿は結構悲しく見えた。

～洞窟の奥、第３班～

『さて、奥まで来たわけですが。』

「箱があるね。」

今二人の前には宝箱と思われるものがある。最初は喜んだのだが、その大きさは小物入れ位の大きさなのだ。あとは壁の方に樽などもある。

「これ全部お宝ならいいんだけどね。」

『そうですね。けれどまずはこの宝箱ですね』

そう言うとシュガレットは何の仕掛けもない事を確認し、宝箱を慎重にあける。そしてその宝箱を開けた瞬間。

『えい！』

「・・・空っぽ、だね。」

そう、その中には何もなく、タダの空箱であると理解しただけだった。

「誰かがとっくに持ち出した後だったみたいだね。」

『うう、なら、樽の方はどうでしょう。』

一縷の望みをかけ、樽のふたを開ける。だが、そこにあったのは濁りきった水、もしくは空の物のみ。

『せっかくユーリ様に褒めてもらって、そこからめくるめく大人な時間が来ると期待していましたのに。』

「ねえ、僕には時々、いや、割とシュガレットが何を考えてるのか判らなくなるよ。」

呆れた眼差しでシュガレットを見るクリュウ。意味は分からなくても、なんとなく何を指しているのかは判る。

『でも、でも私は、私は待ち望んでいたのに。うう、運命は非常です。でも私は負けません！ユーリ様が振り向いてくださるその日まで！！むしろそこからが私たちの新しいスタートなのですが、いや、どちらかと言うとスイート？』

「もう、何がなんだかわからないよ。」

そんなシュガレットの暴走を止めるのに多大な労力を費やすクリュウ。自身も落胆をしてはいるが、流石に目の前でここまで意味不明な事をされると、そうも言っていられなくなる。尚、二人が元の所に戻るまで、余分に半時間かかる事となる。

～洞窟の最奥、第３班～

「結構、奥まで入ってきちゃったね。」

「ああ、特に何もなかったしな。」

二人で話ながら進む。そしてしばらく行くと、その向こうに光が見えてくる。

「あ、アニキ！向こうの方、何か明るいよ！何かあるのかも！」

「あ、おい！・・・・ったく、何かあっても知らないぞ。世話の焼ける。」

そう言って、ラジィの後を追うユーリ。そして程なくしてラジィに追いつくユーリ。そこには洞窟の上から、太陽の日差しが差し込んでいた。そしてその下には・・・

「成程、どういうわけか、ここに種が落ちて、運よく育ったと言った所か。」

「うん、こんな暗い所でもこんなにきれいに咲くんだ。凄いね。」

そこには、日差しを体いっぱいに受けるように、日差しに顔を向けた向日葵が乱立していた。それはラジィが望んでいた花畑の姿。それを見るラジィの眼は驚愕と感動で見開かれていた。

「・・・この場所はボクとアニキの二人だけの秘密だね！」

振り向いたラジィは、唐突にそんな事を言って来る。それを聞いた後、視線を花畑に戻す。

「とはいっても、直ぐに来れる場所じゃないから、少し難儀だな。」

「それでもいいよ。こんなにきれいな場所があるんだって、ボクらは知ってるんだから！」

両手を広げながら力説するラジィ。

「好きな時に来れないのはちょっと残念だけど、それでもこの花畑の事をボクは忘れ無い。アニキも覚えててね！」

「はあ、判ったよ。確かに、見ごたえはあるな。」

「だよね！！」

そう言うラジィはユーリの横に立ち、手を握る。もうしばらくこの景色を共にみたいという意思を込めて。それを汲んだのか、その場に留まり、二人で見続ける。それは二人が顔を合わせ、帰ろうとするまで続いた。

・・・そして、その船旅から数日、今日も書類仕事に精を出す日々。変わる事は無い。そして聞こえてくる足音も。その気配からすると、今日はあの少女だろう。そしてしばらくすると予想に違わず、満面の笑みで少女が部屋に入ってくる。

「アニキ！！また、面白そうなモノ見つけたんだ！一緒に行かない？」

今日もまた、あわただしい一日が始まる。けれど。それはきっと楽しいものとなるだろう。それだけはきっと間違いはない。

外伝　太陽の少女　向日葵と宝と船旅と（後書き）

さて、どうだったのか、睡眠時間を削って一気にやったので、頭が現在回ってません。とりあえず、今回はこんな感じです。

さて、外伝は次のリクエスト待ちです。エクステーゼのキャラについてははっきりと外伝希望とかいてもらえると助かります。本編の出番を待っているのか、外伝を書いて欲しいのか、いまいち判断がつかないので。

さあ、この話を読んで需要はあるのかが果てしなく疑問です。

外伝　思い出を振り返り　笑顔を想う（前書き）

さて、今回は作者の悪乗りが色々あります。このままだと出番がないまま終わりそうなアイデアも少し入れてます。そして、今回の回想の中のイベントは使うのかどうなのか。作者もまだ考えてない。そして、ミントさんって若干扱いづらい。おっとりしてる人が一方的に思う場合どうなるのと小一時間。

今回はミントさんです。これでいいのかはやっぱり知りません。何か気になったらまたそのうち直すと思う。

外伝　思い出を振り返り　笑顔を想う

燦々と照りつける太陽、空はどこまでも澄み渡る蒼天。見るものの気分を澄み渡らせるその色は、人々の上空で今も世界を繋いでいる。この色を他の者たちも見て同じように思っているのかそれを思うと気分が弾む。

畑から野菜を引き抜く。きちんと育ったものを目利きで選び、厳選された物だけを取っていく。土を落とし、抜いた野菜を護衛獣に運んでいってもらう。それを見ながら笑みを浮かべる。

「……よしっ、これで、今日持っていく分は終了かな？後は、なにか作って持って言ってもいいかな？あの人の腕にはかなわないけど、やっぱりこういうのは気持ちだもんね」

いつも運んでいる野菜をのせたリヤカーに目をやる。それは何故か機械仕掛けのモーターを取り付けられ、上り坂でも軽く押すだけで上れる優れものだ。これをもらった時はうれしかったが、こんな所にこんな技術が果たして必要なのか軽く疑問に思う。

「それに、どこでこんな事を覚えたんだろう？……ううん、気にしても仕方ないし、別にあの人には何の変りも無いよね。」

独り言と共に疑問を打ち切る。そう、考えても結局本人でなければ答えは出せないし、それが辛いものであるなら無理には訊けない。あの人には悲しい顔をしてほしくは無い。自分の知らないところで大変なものを背負い続けている彼を、自分の勝手でこれ以上如何こうしたくはない。

「……でも、こんな日々がずっと続いたらいいのにな。本当に」

いつまでもこんな日が続けばいいと思った。どんな事が有っても諦めずに前を向く。言葉にすれば簡単だが、実行するのは至難の業だ。そして、それを違えず実行した人物を思い浮かべ、軽く微笑む。どんな難関も如何にかしてしまう。不思議な人物。

「でも、また会えるなんて思ってもみなかったなぁ」

最初の出会いは派閥に入る前、ある村で、事件が起き、それを解決したのが彼だったというだけ。けれど、今でも鮮明に覚えている。思えばあれからだろう。心に焼きついたのは、そして再開し、共にいるうちに思いが固まった。

『ムイムイィ！』

「あぁ！ごめんね、オヤカタ。今行くから」

『ムイッ！』

オヤカタと呼ばれた召喚獣は、彼女の護衛獣を務めている。本人もそれは納得している。彼は野菜の積み込みが終わった事を主である彼女に伝え、畑に水をやっている。彼が引いた水道とホースで。

「それじゃ、急いで何か作って持っていかないと。時間は待ってくれないもんね……クロックラビィでも呼ぼうかな？」

先ほどオヤカタに呼ばれた女性、ミントはあわてて家に入っていく。それを見つめながらオヤカタはやれやれとでも言うかのように肩をすくめる。まるで、一向に進まない関係に溜息をついているか

のようにも見える……事実だが。

「さて、何を作ったら喜んでくれるかな？」

一つ一つ想いを込める。彼は好き嫌いというものがない。仮に失敗しても彼は最後まで食べるだろう。それは以前、ある天使に料理を教えていた時の事から既に実証されている。あの時は大変だった。彼を驚かそうと他の人物に、主に二人の少女にだが。料理の教えを乞い、その結果は失敗。初心者が難しいものに挑戦した結果、それは黒く焦げたケーキとなった。

けれども、まずいとも言わず、彼を最後まで食べきった。特別お腹を壊したなどという事も無く、食べきった後、何食わぬ顔で、次はもっと頑張れと言って部屋を出て行った。そして、その後に何か会話したのだろう。その天使の少女は彼の教えを受けるようになった。

その事が有るから、食べてもらえないと言う事は無いだろう、けれど、どうせ食べてもらうならやはり美味しいと言ってほしい。ハードルは果てしないほど高いが、それが挑戦しない理由にはならない。

「よし！頑張ろう！」

普段おっとりとしてる彼女がやる気を見せる、ある意味珍しいワンシーン。けれど、知っている者からすればありふれた一ページ。

蒼天の中、リヤカーを押していく。リヤカーの後ろはオヤカタが押してくれているが、正直一人でも押していけるのだ。

確か、ソーラーパネルとかいうのが付いていて、太陽の光を動力にしているのだとか、そう言った機界の事に関しては自分では畑違いなのでよく判らなかったが、晴れていると動くというのが何となくわかった……雨の日でもなぜか動くが。

「でも、助かってるのは事実だし、なんとか理解したいんだけどなぁ」

知り合いの機属性の少女に頼んでも判らないらしい。大体の原理は分かるのだが、判らない部分が多いらしい。そう言えばこの前教授と楽しそうに話をしていた。クウカンワイキョクがどうとか、タイムスリップとか、何がしたいんだろう。時折彼の事が判らなくなる。

「けど、本当に楽しそうだったなぁ」

教授と話しているときもそうだったし、獣皇が連れていた子供たちと遊んでいるときも笑顔を見せていた。将軍とは戦略について延々と話し合っていた。そして、自分はそんな彼の笑顔を見るのが好きなのだ。彼が傍で笑ってくれているのなら、自分はそれで満足していられる。

以前、ポムニットさんにそのことについて本当に満足できるんですか？と問われたことがある。その時は気にする事も無く頷く事が出来た。今はどうだろうか。おそらく頷くことだろう。自分の事で困らせたくないから、想っているだけでいいから、それだけで十分

だから。

「……でも」

最近、少しずつだけれど、変化している。それがいいのか悪いのか、自分でもはっきりとはしない。昔から優柔不断な所はあった。

問題を先送りにして、いざその時になって尻込みしてしまうようなときもあった。大人になると共にそれを隠す術ばかりが上手くなっていったような気がする。先輩にももう少し我儘になりなさいと言われたこともある。

「そう簡単には変われないよね。人の心になんて、簡単には踏み込めないんだから」

よく言えば人を思いやれる、悪く言えば踏ん切りがつかない、消極的ともとれる。けれど、今までそうやって過ごしてきたのだ。思えばここに来たときだって、自分はこの町の者と馴染めず、途方に暮れていたのではなかったか。そして、彼と出会った。

その日は曇天、黒く淀んだ雲は近いうちに雨が降ることを予感させた。この町に来て既にしばらくたつ。その道を帰っているうちに先程の事が思い出された。

「……人との付き合いってうまくいかないなぁ。」

何の事は無い。町の人に話しかけられず、目的の物も買えず、逃げるように帰って来ただけ。自分が派閥の人間だという事は割と知られているのだ。無論大多数の者は知らない。

けれど、情報というのは気付いたら漏れ出しているものだ。どこからか仕入れたその情報を指摘され、出ていくように言われたことだってある。それに、知っている者はやはりいい顔はしない。無論温かく対応してくれる者もいるがそれはほんの僅か。

「どうしようかな。このままじゃ、本当にここに居られなくなるかも」

考えると不安ばかりが募る。こんなことが続けば、任務が如何とか以前に、自分が耐えられなくなる。孤独というのは思った以上に彼女の神経をすり減らしていた。考えると思わず、目が熱くなる。自分のふがいなさに、孤独の恐怖に、今の自分はこんな曇天と同じだろう。もうすぐ雨が降って全て流されてしまうのだろう。

「……もう帰ろっか。オヤカタ」

『……ムイムイ』

オヤカタもそんな彼女の意思を感じたのか、その声はいつもより元気がないように感じる。それとも、自分の気持ちはそこまで沈んでいるのだろうか。だとすれば不甲斐無い。無理にでも笑ってごまかそうとする。

「大丈夫だよ。明日はきっとうまくいくから」

『ムイ……』

「うん、絶対、大丈夫だよ」

どちらかというとオヤカタでは無く、自分に言い聞かせるために言葉を紡ぐ。この言葉が実る事は無いだろう。けれどせめて今日だけは、こんな願望を口にしてもいいのではないか。淀んだ気持ちで家路へ着く。いつもならこのまま家へと戻り、失意のまま就寝していたのだろう。けれど……この日に限ってはこの後にも出会いがあったりする。それがきっかけ。

『ムイ！』

「オヤカタ？どうしたの？」

『ムイムイッ！！』

「あっ、オヤカタ！」

いきなりなにかに反応するかのように、家の方を見て走り出したオヤカタ。それを呆気にとられながら見る自分。何に対して行動したか判らないが、それでも家の方へ向かっているのは間違いない。

――あっ、もしかして空き巣か何かかな？

家の方で何かあったのかもしれない。煙も何もないのだから家事とかではないだろう。なんにせよ喜べる事態ではないだろう。沈む気持ちのまま家へ向けて走り出す。しばらく激しい運動などしていなかったために、直ぐに息が切れる。

けれど、走り出したオヤカタが心配だったから気にせず走り続け

る。やがて、自分が今住んでいる家が見えてくる。その家はテイラーという方に理由を話し、都合してもらった借家。なにかあればこちらの責任も問われるだろう。

「はあ、はあ、なにが、あったの？」

息が切れ切れになりながらも、なんとか家まで辿り着く。膝に手を置き顔を下に向けながら、今度から少し、走り込みでもしようと決める。さすがに有事の際にこれではどうしようもない。ここまで消耗すれば召喚術もきちんと扱えないだろう。そんなことを考えながら家を確認するために肩で息しながら顔を上げる。そしてそこには思いもしていない光景があった。

『ムイムイ！』

「ああ、だから俺はここの家の人に用があってな。少し待たせてもらってるんだ。不審者にでも見えたのなら悪かったな。さすがに黙って家には上がれないからな」

『ムイムムイ！』

「もうすぐ来るのか？それならよかった。入れ違いにでもなったら少し不味いからな。教えてくれて有難うな」

『ムイ！』

会話しているような声、いや真実、会話しているのだろう。ある程度の意思疎通は自分でも出来るが完全な会話はできない。それを行っている目の前にいる男性は誰なのだろう。見た所、紺のズボン

と灰色のシャツを着ている、見た目２０代程の男性だろうか。今まであった事は無い筈だが、この町の者なのだろうか。もしかしてまた出て行けとでも言われてしまうのだろうか。

――それは、嫌だな。

内心これからの事をネガティブに捉えてしまい、鬱になる。気落ちしていた所にこれでは、確かにプラス思考にとらえる事は不可能だろう。けれど、それでも、失礼な対応はできない。毅然とした対応をしないとこれからの自分、ひいては蒼の派閥の評価を、著しく下げてしまう事になるだろう。気を入れなおし、その男性に話しかける。

「あ、あの」

『ムイ』

「む？」

声をかけると男性も気付いたらしく、オヤカタと共に此方へ向く。そこには悪意は無く、自然体な姿があった。とりあえずこちらに悪意を持っているわけではなさそうなのでほっとする。とりあえず考え得る最悪という訳では無いらしい。

「ああ、貴方がこの家を借りているミントさんかな？」

「あ、はい。そうですけど、なにか？」

「とりあえずは自己紹介だな。俺の名前はユーリ、テイラーからの依頼で、この家の修繕をしてほしいと頼まれてな。どうやらほった

らかしにしていたせいで、あちこちボロボロらしい」

「確かに少し壊れている部分はありましたけど」

「それで、其処を直してくれと本人からの要請でな。今回俺が来たというわけだな」

「そうなんですか」

どうやらこの家の修理のために訪れた者らしい。テイラーさんから要請を受けたと言っていたが、正式な書類も持っているみたいで、きちんとしたものだった。

「面倒だが、こういうのはきちんとしないと疑われたりするからな」

「そうですね」

ユーリさんの言葉通り、先程までの会話では自分はまだ不審に思っていた。けれどあの書類は本人の筆跡と印が成されている。さすがに筆跡までは判別できないが、あの印は金の派閥、ブロンクス家の物であるためにおいそれと偽造できるものでは無い。それゆえに正式なものと受け取る事が出来る。

「で、今からでも構わないか？これから少し雨が強く降りそうだからな。できる事ならその前に終わらせたい」

「あ、はい、それは構いませんが」

「それはよかった、それならまずは屋根から直していくか」

ユーリさんはそう言うと、取り出した道具袋から明らかに質量無視の木材や機材を取り出していく。これにはさすがに驚かされた。拳が入る程度の大きさの道具袋から家の支柱に使えそうな材木を取り出されれば驚きもする。一瞬召喚術かもと思ったが特に魔力の流れは感じなかった。

「さて、と少し手間でも増やすか。もし間に合わなかったら問題だしな」

「え？」

「テテ」

ユーリさんが手間を増やすといい、即座に自分もよく知る召喚獣の名をつぶやく。サモナイト石も持たず、魔力の流動も感じさせず、果てには詠唱も無しで。そしてそこに現れた召喚獣を見て、再び驚かされた。

『なにかようですか？親分！』

「……その呼び名は止めろと言ったはずだが」

『え～いいじゃないですか！呼び名くらい皆好き勝手呼んでるじゃないですか！！』

現れたのは短パンと胸部までを覆う黒シャツのへそ出しルック、その上にジャケットを着ている少女。この娘がテテなのだろうか？他の召喚獣で名前を変えているのだろう。オヤカタを見る。うん、ありえない。

『それで、何をすればいいんですか？』

「とりあえずお前その姿止めろ。向こうでドン引きされてるから」

『え～！』

「いいから早くしてくれ、話が進まん」

『むう』

そして、テテと呼ばれた少女が光に包まれる。そして、その光がやむと、そこにいたのは自分も知っている召喚獣のテテそのものだった。驚きで言葉を失う。外見で言えば、普通に呼ばれるテテよりも大きいと言った所だけ。それ位しか差異は無い。といってもオヤカタよりも大きいが。

『ムイ！』

『キュウ！』

同じ種族だからなのか、気が合うらしく何か話をしている。それを見ていたユーリは溜息をつきながらそれを見ている。不意に目があった。

「……すまないな。直ぐにと言ったが、時間ばかりかけてしまって」

「いえいえ、気にしないでください。私も見ていて楽しいですから」

「そう言ってくれると助かるよ、テテ！そろそろ始めるぞ」

『キュイ！』

二人はそう言って屋根に上っていく……梯子も無しに一足飛びで。もう何があっても驚かない。この人は色々と不思議だ、けれど悪い人では無いだろう。見ていて判った、だからなのだろう。久しくしていなかった自然な会話。それに本当になんの抵抗も無く笑みを浮かべる事が出来たのは。

「そこに板を置いといてくれ。それで、釘くれ」

『キュイ！』

「……多すぎだ。その三分の一でいい」

『キュ！』

「よし、これでここはいいか」

二人で黙々と作業をしている。その動きはきちんとしたもので、先程の言葉は嘘では無いと漸くわかった。その作業が終わり、他の破損個所も順々に補修して行く。

「あの」

「どうかしたか？」

「上手なんですね」

「そうでもないさ、回数こなしてたら自然と出来るようになっただけだ」

「それでも、すごい事だと思います」

少し積極的に話しかけてみる。うまくいかないかもしれないけど、どのみちここは自分の家なのだ。顔をはしばらく合わせるだろう。なら下手に離れて悪印象をもたれるより、話をした方が何かといいだろう。

これがきっかけで少しは街でも話ができるかもしれない。そんな打算も確かにあった。けれど、本当は不思議な雰囲気をした目の前の男性が気になったから。

「そうかい、とりあえず褒め言葉と受け取っておくよ」

「そうですか……？」

「どうした？急に黙って」

目の前でユーリさんが此方に視線を向ける。急に黙った此方が気になったのだろう。けれど、近くでその顔を見た時、昔、一度だけ見た姿を思い出した。燃える木々、砕ける樹木、暴れる召喚獣、その中を一人で鎮圧した青年。その時と比べると年齢が合わないような気がするが、それでも、その顔には確かな面影があった。意を決して話しかける。

「あ、あの！」

「どうかしたか？」

「昔、ある村のはずれで悪魔を倒したことってないですか？」

「は？」

その言葉にユーリさんの動きが止まる。確かにいきなりこんな事を言われても困るだけだろう。けれど、その時はその事が気になって他の事は頭には言って無かった。後々考えてもあれは無かったなと思う。ユーリさんはしばらく動きを止めていたが、こちらを見返すと口を開いた。まだ少し困惑しているみたいではあるが。

「確かにそんな事をしたこともあるかもしれないが、それが何の関係が？」

「その時に洞窟にいた小さな女の子を助けませんでしたか？」

「女の子？」

「はい！その時はまだ小さかった村で、今じゃもう違う名前になってますけど、昔の名はペルシアって言います！それで、この髪飾りも貰った物です！」

そして、自身の髪にしている髪飾りを見せる。それを青年は確かに見覚えがあった。厳密には最初から不思議には思っていたのだが、売ったり買ったりで目の前の女性に渡ったのだと思っていた。

「……」

そして、村の名を聞いて少し思案するユーリ。少しすると目星がついたのか、顔を上げる。

「……確か変なぬいぐるみを抱えてた女の子だったか？」

「変じゃないです！あれはモグ郎です！可愛いじゃないですか！」

「……そう、かも、な」

勢いに押されるように曖昧な返事をするユーリ。しかし、その眼は疑問に満ちている。確かにおとなしい女性がいきなり大声を出せば驚きもするだろう。ミントはそれにも気付かず、ぬいぐるみの事を話す。その話はユーリが内心諦めるまで続く。小さな声で、ここまできてこの話を聞くのか、と疲れた声が聞こえたが、その意味は分からない。

「とにかく、判ってもらえましたか？」

「ああ、痛い程に判ったよ。妙な事を言って悪かったな」

「いえ、判って貰えればいいんです」

「で、その女の子がなんだっけ？」

疲れた顔で話を戻すユーリ。とりあえずこれ以上触れる気は無いのだろう。そして問われたミントは一瞬何のことか気付かなかった。ぬいぐるみに没頭しすぎたためだが、それを見てユーリは内心溜息をついた。ここにもこの系統の奴がいたんだと少し頬が引き攣った。

「え、えっと、その女の子って私なんですよ」

「……そうなのか？」

やはり驚いたのか、その顔には驚愕が張り付いている。

「はい、家族で旅行に行った帰りだったんです。今思えば、あれが家族と一緒にいた最後の思い出ですけど。あのあと直ぐに派閥に来て、ここに来ちゃった訳ですし」

「……で、確かあの時は特に滞在した覚えもないんだが、騒ぎを起こしたからさっさと離れたしな、あれ以降はしばらく放浪してたし」

「そうなんですか、でも、私はあの時、貴方の御蔭で救われました。その時のお礼がしたかったんです。有難うございました」

そう言って頭を下げるミント、それを困った顔をしながら見つめるユーリ。何せ言われるまで忘れていたのだ、どうにも釈然としない。それに、あれは偶然と言う訳では無く、依頼であり、それを達成するためにあの場所へ行ったのだ。そして、探した末にあの村へ立ち寄ったのだ。そこで少ないとはいえ被害をだしたのはこちらの落ち度だ。死者こそ出ていないが、少なくない被害は出ている。気分が沈むことには違いない。

「そうか、それなら素直に受け取っておくよ」

「はい」

その一言でまたその場には静寂が訪れる。しばらく釘を打ち付ける音だけが響く。そして、その合間にあの頃の事を思い出す。あの頃、まさかあんなことにあるなどとは夢にも思わなかった。けれど、その悪夢のような出来事は、目の前で家の修理をしている青年によって被害を最小限に止められることになる。それが最初の出会い。

村としては小さく、けれど、そこには緑の恵みが多かった。森へ行けば山の幸があり、村全体で野菜を育て、それなりに裕福に暮らしていた。そこに時折訪れるものがいる。何の事は無い。都へ行くまでの道のりにあり、宿を取ろうとするものが立ち寄るだけ。そして、この日もそんな目的である家族が立ち寄ることになる。

「さて、今日はここで宿を取ろうか」

「でも、部屋空いてるかしら？」

「大丈夫だろう、まぁ、駄目だったら仕方がないさ。近くの民家に言って頼み込んでみるしかないな」

「でも、この人数だと……」

そんな会話を交わしながら見た目年若い夫婦が宿へと向かう。身なりはそれなりに裕福そうに見える。けれど、派手ではなく、きちんと整えられている。その後をついて行く数人の小さな子供。

そして、その子供と一緒に歩いてくる少し年上の女の子がいた。年のころは１０代前半と言った所か、彼女は自身の両親に近づき、先程聞こえた会話について聞く。

「お父さん、私達、泊まる場所無いの？」

「あははは！そんな心配なんかする必要はないぞ！私が何とかしてやるからな！」

「本当？」

「本当だとも！それじゃ、今から宿をとってくるから少しここで待ってなさい」

「うん！」

子どもと妻を外に待たせて、男が中へ入っていく。外に待たせたのは、いざ宿がなかった時に出来るだけ悲しませないようにするためか、それとも、他に理由があったのか、それは定かでは無い。無論、この行動が何かを変える事などは無い。けれど……ほんのわずかな異変を純真な子供に知らせるきっかけにはなった。

「ねえ、お母さん」

「どうしたの？ミント」

「なにか、変なにおいがしない？何か焦げたみたいな……」

「そぉ？私には何もにおわないけど」

「それじゃ、気の所為かな」

「きっとそうよ、それか誰かがここの近くで火でも燃やしたんじゃないかしら？」

「そうなのかなぁ」

ほんの小さな疑問、けれど、それは気の所為で片づけられる。こ

の時点で少女が行動を起こしたとしても意味は無いだろう。そして、彼女の父親が満面の笑みで建物から出てくる。

「よし！ちゃんと部屋が取れたぞ！さぁ、中に荷物を運ぼうか！」

「本当！やったぁ！俺もう足クタクタだよぉ！！」

「私もぉ！早く休みたいなぁ！」

父親の言葉に子供たちが喜びと共に宿の中に入っていく。それを母と顔を合わせ微笑む。

「ははは！そんなに急がなくても宿は逃げないぞ！」

「まぁまぁ、皆歩き疲れているんですし、いいじゃないですか。それにしても、部屋ってたくさんあったんですか？やけに出てくるのが速かったですけど」

少し話をつけるのが速かったために少し聞いてみる。妻の言葉に男は少し頷いて答える。

「うむ、まだ半分くらいは空いていてな。慌てる必要など微塵もなかったわけだよ」

「あら、そうなんですか！」

「ああ、だから二つ返事で大丈夫だったよ！」

「そっか、それなら、私も荷物運ぶの手伝ってきますね」

「ああ、私も行こう、と言うより、ミントお前は休んでいなさい。元々お前のために企画した旅行だ。緑が好きなお前のために各地の自然を見れるように予定を組んだんだからな」

「大丈夫だよ、お父さん。これくらいどうってことないから！」

「しかしだなぁ」

「まぁ、本人がいいと言うのだからいいじゃないですか。それに貴方がお酒を飲んで酔いつぶれたせいで日程が一日狂ったせいで、こうなりましたしねぇ、私もあなたに全部任すのが心配で」

「お、お前……」

「冗談ですよ、けど、今後は少し自重してくださいね、いくらミントが世間に認められたのが嬉しかったからと言っても、羽目の外し過ぎはダメですよ」

「わ、判っておる！！」

「ふふっ」

和気藹々とした雰囲気で中へと入っていく5人。自身の弟や妹の言葉を笑顔で聞きながら荷物を運んでいく。そこにはごくありふれた風景があった。家族のだんらん、微笑ましいそれはきっと見るものに笑顔を与えただろう。

やがて、荷物を部屋に運び終わり、歩き疲れた弟たちを寝かしつけたミントは両親の元へ向かう。

「お父さん、お母さん、荷物運び終わったよ……って、お父さん、どうかしたの？」

そこにはなんとなく元気のない父が椅子に座り、黄昏ていた。原因はなんとなくわかっているが、それでも一応聞いてみる。返ってきた答えは案の定というか、予想通りだった。

「いえね、少し虐めすぎちゃったみたいで、少し拗ねちゃったのよ、何時まで経っても子供なんだから」

「煩い！」

「あら、怖い、うふふ」

「もう、あんまりからかっちゃだめだよ」

「ミ、ミント……」

「ただでさえ、弱いですからねぇ」

「……」

「あ、あはは」

ミントの言葉に少し反応したが、続く母の言葉に言葉を失う。そして、その後に続くミントの乾いた笑いで絶望したような顔になり、再び黄昏る。それを苦笑い気味にみる母とミント。

「そ、それじゃ、私、少し散歩してくるね！」

その空気を避けるかのように外へ行こうとするミント。途中で自分の部屋に立ち寄り、手提げかばんを持っていく。

「あまり遠くへ行ったらいけませんよ、危ないですからね」

「大丈夫！私だって、もうすぐ派閥の一因になるんだから、少しくらい平気だよ！」

「そうは言ってもねぇ」

「あまり遠くへは行かないから、直ぐに戻って来るよ」

そう言ってミントは外へ出ていく。それを見送った後、窓際で黄昏ていた夫に目を向ける。

「はぁ、これさえなければ頼りがいもあるのですけどねぇ、ほら、こっち向いてくださいな」

これから、この不貞腐れた旦那を元気づけるために近寄っていく。本当に打たれ弱い人だなと苦笑いする。そして、その手が優しく夫を包む。

「さて、どこから回っていこうかな」

外へと出たミントは、金色の髪を揺らしながら、これからどこへ行こうかを考える。本来なら山の中で女性の独り歩きなどは危険極

まりないが、ミントは護身術で杖術をかじっている。それとなにより、召喚術を使う事が出来る。元々ミントはこの旅行が終わった後、蒼の派閥へと行くことになっている。だからこそ、召喚術の知識なども持ち合わせているし、それを使うことも可能となっている。

懐には自身が扱える獣属性を示す、緑のサモナイト石を幾つか忍ばせている。既に誓約している物もあるし、一応まだ未誓約の物もある。それと、手提げかばんの中には、いざという時の薬一式、とりあえずの準備はできている。

「とりあえずは村の人と話して見てもいいかな？」

そう思い村の奥へと歩を進める。村は都の様な人のにぎわいこそ鳴りを潜めてはいるものの、そこには都には見えない自然の姿が見えた。それを笑顔で見つめる。豊かな自然を見つめるのが自分にとってはとても楽しいのだ。村を見回り、村人と野菜の事などを話、ミントにとっては有意義な時間が続く。

「あっ、あれってなんの野菜なんですか？」

「あぁ、あれはだね、この村で昔から育てられたもので、此処の特産品なんだよ」

共通の話題があれば話しかけやすい。そのこともあり、普段は内気な彼女も、割と気兼ねなく村人に話しかけられている。村人の方も穏やかに話しかけてくるミントに好感を持ち、親しげに話しかけてくる。そして、その傍ら、妙な話を聞く。

「え？何かが焼けるような臭いがする、ですか」

「ああ、誰かが最初は火を焚いているのかと思ったのだが、ここ数日、毎日のようにそんな臭いがこの村のはずれから漂ってきてるんだよ。」

「そうなんですか」

それを聞いて自分もその臭いを知っている事に思い至る。確かにこの村に来るときにそんな臭いを嗅いだ。けれど、自分も気の所為か、誰かが火を起こしている程度にしか感じていなかった。だが、話を聞いていくうちにその認識は違うのだと気付かされる。

「ああ、なにせ、以前、あまりにもその匂いがずっと続くから、山火事になるのを心配した他の者が注意を呼び掛けに言った所、そこには誰もいなかったんだよ」

「え？」

「不思議なんだよ、その時は逃げたと思ったんだ。けど、そこはたき火をしていたとか、そう言った物じゃ無くて、広い範囲が焼けていたんだ。まるで家一軒丸ごと燃えたみたいに」

「そんな、まさか！」

「けど、そんな所に家なんて誰も作ってないし、村の誰も知らない。けど、なにか大きな物が燃え尽きた痕跡はある。それが家なのか、それとも別のナニカなのかは判らないが」

「……それで、大丈夫なんですか？なにかあったのなら都の方に事件として捜査を依頼した方が」

「それはできない、元々この村は都に行く者がたびたび訪れたりはするものの、大体自給自足でまかなっている者ばかりだ。依頼する程の資金などは無い、それに食物を出すというのも限度があるし」

「けど、それで実際に何かあったら」

「けど、もう気付いてから４０日くらいになるけれど、何も起こってはいない。最初に燃えた物以降は臭いはするが、肝心の出火元が見当たらない。時折召喚士様も立ち寄るから調べてもらった事もあるのだけれど、何も見つからなかったし、強いて言えば、村人がなんにか元気がなくなっているのと、最近森の動物を見かけなくなったくらいかな？やはりあの臭いは動物も嫌がるらしい」

「そうなんですか」

「だから、何時しか誰も触れなくなってしまったんだ、この話題には。私はやはり納得がいかなくて時々見に行ったりしているわけだが、何を隠そう注意を掛けに行ったのが私の妹でね、現場を見て以降、なぜか無気力になってしまって、どうしてか外にも出ようとしないんだ。」

「それで、ずっと調べているんですか、妹さんの変化を治すために」

「あはは、実りは全然ないんだけどね、それでも、アイツが元気になるんなら頑張ってみようと思うんだ」

「……」

「すまないね、君が楽しそうに自然を見て、笑ってるのが元気だった妹にダブって見えてね。こんなくだらない話をしてしまった。気

分を害したのなら謝らせてもらうよ」

「いえ！そんな事は無いです」

「そうかい、それなら良いんだけどね、長いこと引きとめて悪かったね」

「あ、いえ……」

話を聞いた後、彼女の頭の中には先程の話が刻み込まれている。どうしても気になる。だからこそ、今も微かに周囲に漂うこの何かが焼けた臭いをたどる。それは危険かもしれない、けれど、このままにしては置けない。本来なら都に知らせるのが正しいのだろう。

けれど、ミントはそれよりも前に、少しでも情報を集めようと森へと踏み込む。まだ経験が足りないが故と言えばそうかもしれない。けれど、何もせずにいるわけにもいかない。彼女はこの真相を知ろうと調査を開始する。

「ここにも何もない、ならこの臭いの元はどこから……」

ある程度森の中を彷徨い、臭いがきつくなっている所を見つける。けれど、そこには焦げ目どころか、焼けた物一つない。火種も何もなく、唯臭いだけがそこにあるだけ。確かにこれではどうしようもない。

「もしかして、此処の周囲にはぐれ召喚獣でも出たのかしら？それとも……なんにせよ、このままにしておくのは心配ね」

思い至る事と言えば、やはり召喚獣が何らかの影響を及ぼしてい

るという事。元々ミントもその召喚士に区別され、その才を見込まれ、蒼の派閥へと入る事となっている。けれど、召喚士としてはまだまだ、修行中の身。高位の召喚獣は呼べず、術の発動も数回が限度。

だからこそ、不意打ちなどは極力注意しなければいけない。本来なら、数人で組みとなって調べた方がいいのだが、この時にそんな者はいるとは思えない。村人への協力も、既に触らずに居る者が多く、最初にこの話をしてくれたものも妹の世話のためにここを離れられないと断られたのだ。だからこそ、単身で調べる事にしたのだ。

「けど、私一人だけじゃこれ以上どうしようもないかも、やっぱり、一旦戻って派閥に連絡を入れてからにした方がいいかも」

そう思い、来た道を引き返そうとする。その時、不意に奥の方で何かが聞こえた、ような気がした。

「？今、向こうの方で何かが聞こえたような……」

手を懐のサモナイト石に伸ばし、念のために召喚獣を呼び出す。今までは仮に誰かと遭遇した場合、相手に召喚士と思わせないようにするためと、魔力の節約のために止めていたのだが、うっすらと日が暮れ始めている今の状況では一人の方が危ない。

「我が声に応え、現れ出でよ、異界の獣よ、この石に刻まれし誓約の元に、今ここにその誓いは果たせ！」

精神を研ぎ澄ませ、サモナイト石に魔力を注ぎ込み詠唱を行う。まだ半人前でもあるミントは、この一連の行動に幾ばくかの時間を要する。けれど、今の自分では召喚したものを此方に留めて置くの

は時間制限付きなのだ。ずっとと言うわけにはいかない。これが最初から召喚しなかった理由である。何度も何度も送還されるたびに召喚していたら魔力がいくらあっても足りない。

『ムイッ！』

ミントの声に応え、幻獣界メイトルパへの門が開く。しばらくするとその穴から小さな影が飛び出す。それは昔から共にいろんな思い出を共有し合った召喚獣。テテ。メイトルパで最もポピュラーな召喚獣。

「オヤカタ、来てくれてありがとう！」

『ムイムイ！』

召喚士は自身が呼ぶ召喚獣に、独自に名前をつける事が有る。これはその個性を強調することで、その能力を強化する意味合いがある。大体は召喚士が自己満足や他の同種族との区別で名づけていたりするが。

彼女が呼び出したテテ、オヤカタは他のテテとは違い、一回り大きく、ひげが生えている。そのため、能力は同じでもその力は並みの物を上回る。この時のオヤカタはまだミントの護衛獣とはなっていない。護衛獣の儀式は派閥に行ってから行う手はずだったのだ。それ故に、短時間召喚のユニット召喚しかできない。

「お願い、少し調べたい事が有るの！協力してもらっていい？」

『ムイッムイ！』

任せろと言わんばかりに自分の胸をドンと叩くオヤカタ。それを見て微笑むミント。まだ召喚士としての技量は並み以下だが、召喚獣との絆ならそこらの名ばかりのベテランとは比べ物にはならないだろう。

「有難う！……それじゃ、行くよ！オヤカタ」

『ムイムイムイ！』

一人と一匹はそのまま音がした方向へと向かう。この先に何があるのかも知らずに……

そして、その頃、宿ではなかなか戻ってこない娘を心配しているミントの父親が、宿の外でうろうろしていた。傍から見ると不審者にしか見えないだろう。

「むぅうううう！！」

「あなた、いい加減に部屋に入ってはいかがです？あまり外でいると体調を崩しますよ」

宿の二階の窓から掛けられる声に憮然として返す。けれど、そこには冷たい返事が返ってくるだけだった。

「だが、まだミントは帰ってきておらん！それなのに私だけが戻る訳にはいかん！」

「……そう思うのなら探しに行ってきてはいかがですか？私たちはここに居ますので」

「ぐっ！」

妻の声に呻く。彼は運動はからっきしで、動くのはもともと得意ではない。頭脳労働が彼の本分なのだから。とはいえ、詰めが甘いとよく言われていて、それも疑わしいものではあるが。

「まぁ、あの子も自分の事は自分でできますよ。それに、仮にあの子が解決できない事があったとして、あなたに解決できます？」

「で、できるに決まっているだろう！！私はあれの父親なのだ！出来るに決まっている！」

「それならいいのですが……昔、あの子に色々と助けられた事が有っても、そういう事が言えるモノなのかしら？感心しますね」

「むぐっ！」

「だいたい、あなたは前からそうだったでは無いですか、あの子にも度々迷惑をかけて……自覚はしているのですか？」

「むぅ……」

知らない間に自分の説教へとシフトしてる。その事実に気付いても言い返せない。この家での上下関係は基本的に女性の方が上なのだ。いずれ自分の地位は妻、ミント、そして、末の次女にも劣るようになるだろう。

息子は……ミントが大切にしているので、少なくとも自分よりは上だろう。そのうち本気で引きこもろうか考えた。そんな話の傍ら、都から続く道から一人の青年が歩いて来るのを見かける。

さすがに、見知らぬ者の前で恥をさらすわけにはいかないので妻に眼をやる。既に窓を閉め、その姿は見えなくなっていた……もう塞ぎ込んでもいいのかもしれない。内心汗が流れた。

「……」

特に何も思うわけでもなくその青年に目をやる。あまり見ない出で立ち、ここいらの者では無いのだろう。旅人、にしては荷物が少なすぎる。着の身着のままと言った格好で現れた青年はまだ、子供と言える年齢ではあるだろう。うちの娘より幾らか上に見えたその姿は、なぜかその雰囲気の所為か、自分よりも大きく見えた。

「……あの」

「むっ！」

青年が此方に目を向け話しかけてくる。即座に年長者の威厳をかき集め対応する。青年は何か不思議そうにこちらを見ながら口を開く。

「……なにかね？」

「いえ、先程からこちらを何度か見ていたようなので、何か在るのかと」

どうやら気づかれていたらしい。出来る限り気付かれないようにしていたつもりだったが、やはり判るものなのだろうか。変に疑われるのも避けたい。ここは無難に済ますのが正解だろう。

「いや、何がどうと言うわけでもないのだがね。ただ、このような時間帯に来るのが少し不思議だったのでね」

とりあえず、こういえば問題は無いだろう。青年はと言えば、やはり不思議そうなまま返答を返す。

「はぁ、今しがたこの村に着いたばかりなので、始めに宿に部屋がないかを確認しに来ただけなのですが……」

「……」

そう言われれば特に不思議な事でもない。そもそも自分たちもある程度早く着いたと言うだけで、特に言うほどの差は無いのだ。そう言われそのことに潔く気付いたが、その言葉でこの場には何とも言えない沈黙が広がる。

青年もそれを察しているのか、特に表情を変える事も無く、会釈をして受付の方へ行く。残された自分はなんとなく空しい気持ちになった。

青年……ユーリは宿へと入って、取り合えず窓から外をみる。元々この宿は小高い丘の上にあり、村全体が見渡せるのだ。だから、

宿をとったのはただのついで。不信に思われないようにするための偽装。本当の目的はここに持ち込まれた魔道具の回収、又は破壊。それが知り合いから頼まれた今回の用事。

「まったく、情報も無しに、魔力だけで特定して行くと言うのも、案外手間のかかるものだな。」

自分でも探知用の道具を作り探していたが、移動を繰り返し中々掴まらなかったのだ。それに、頼まれていた魔道具は他にもたくさんある。これ一つなら即座に終わらせれるのだが、それも仕方ない。

「どいつもこいつも、俺を何だと思ってるんだかな。一度詳しく問い詰めてみたいものだ」

少しの不満を口にする。そして、村とその周辺の全貌を把握する。本当なら空中に飛び、空から見れば手っ取り早いのだが、もし、向こうに見られて自体がややこしくなるのなら逆効果にも程がある。力づくで解決して周辺を破壊してしまうわけにはいかない。

道具袋からメモを取りだし、今回の品物を確認する。それを見終わった後、窓の外を見ながら何かをメモに記入する。その筆記速度は既に人外の者になっている。

「さて、ここにあるのは、邪気の数珠、よりにもよって魅魔の宝玉のレプリカ、か。また嫌なものを見た気分だ」

魅魔の宝玉、過去に対峙したものが所有していた魔道具、その力はリィンバウムを囲む四界のうちの一つ、霊界サプレスに干渉する魔道具、その本来の用途はリィンバウムに召喚された悪魔や天使、精神体を送還するための物。

けれど、それを悪用すれば、逆にサプレスの存在を召喚する事が出来るという事。とはいえ、悪魔限定だが。以前、それで、リィンバウムの結界が虫食いだらけになり、魔王が呼び出されるという事件が起こった事もある。解決こそしたが、思い出して気持ちのいいものでは無い。思い出すのは主に疲労感だが。

そして、今回はそのレプリカがあるという事で、ここに回収しに来たのだ。とは言っても、制御の全く効かないデッドコピーでしかないが。その効果は、元からサプレスの存在を呼び出すためのものとして作られているので質が悪い。

オリジナルなら自動で強制従属の誓約がかかるために、使用者が意図しない限りは何の問題も無い。これは実際は抵抗されずに送還するためについた効果だ。悪用すればどんな良い物も厄介になるのは当たり前の事だ。

更にこれには厄介な機能がある。周囲の血や肉、怨念を喰らい焼き尽くすことにより、それを媒介に悪魔を召喚するのだ。魅魔の宝玉はあくまで持ち主の精神力、感情に左右される。けれど、邪気の数珠は外部から補充されたモノで作動する。つまり、贄さえあれば、子供でも発動は可能という事だ。

「一つだけ幸いなのは、生贄にされたものは基本丸ごと喰われるが、それが消化されるまでに４２日ほどいると言った所か、できればつかわれる前にどうにかしたいが、どうやら遅かったみたいだな。魔力が満ちてきてる、どうにもうまくいかないな」

大気に満ちたサプレスの魔力に目をやる。とは言ってもその密度はかなり薄く、霊界の魔力に敏感な者でなければ気付けない程度の

もの。けれど、ユーリにはそれで十分すぎる。急速に広がり始めたそれを見ながら、その出元を確かめる。

「さて、あそこにあるのか。今回の魔道具は。確か、暴走の危険があるんだったか。さて、そういう事なら今回は時間をかけるわけにはいかないな。と、なると……保険がいるか」

道具袋から数十本のナイフを取り出す。その柄には宝石が埋め込まれていた。言わずもがなサモナイト石だ。これはユーリが加工した特殊な物。そのうちの一本を手に持ち、窓の外へと放る。それは外に立ち並ぶ木に刺さる。

「さて、ゆっくりと準備をする暇も無いとなると、やっぱり、任すか」

そう言って召喚術を行使する。今回呼び出すは数多く呼べるもの、すなわち。

「来い、マシラ衆」

その呼び声により、室内には何かの気配が漂う。けれど、それはわざと洩らしてある気配、必要とあらば即座に闇へと変貌する忍びの集団。マシラ衆とは、この名では無く、この集団としての名。故に呼ばれるのは個では無く群であるのが必然。それに目を向けず、淡々と任務を言い渡す。

「この短剣を指示した場所へと設置してきてほしい。場所はこれを見ればわかる。出来る限り早く頼む。それ以降は不測の事態に備え待機だ。村人の安否を一番に考えて欲しい」

その声と共に、一人の忍びがユーリの目の前に跪く、その衣は黒く、顔を隠し、その背には巨大な苦無を背負っている。彼女に目を向け、用件を述べる。

『承知いたしました、では』

短剣とメモを受け取り、即座に駆け出そうとするマシラ衆、その背中に軽く声をかける。

「後で、全員分の食事を作っておくから、楽しみにしておいてくれ」

『……はい、皆！行くぞ』

心なしか力強く響いた声を最後に、気配が遠ざかる。そこには少しの感情が読み取れた。

「……喜んでくれたんなら何よりだな。さて、俺も行くか！」

そう言った瞬間、部屋の中には誰も居なくなっていた。今いた青年は影も形も無く、誰も居なくなっている。それを気に止める者も、気付くものもいない。

「……ここが、さっきの音が聞こえてきた場所。オヤカタ、準備はいい？」

『ムイイイ！！』

音の出元を探っていくと、森の奥に洞窟が見える。それは蔦が絡まり、苔に覆われ、長い事変化がない事を示していた。だが、そこには確かに誰かがいたという痕跡があった。

「これ、足跡、それも最近ついたような……」

ミントが見る先には、地面についた真新しい足跡。大きさからして、その足跡をつけた本人が大人であるだろうことは簡単に予想できる。それも一つでは無い。複数あった。

「……これじゃ、この中に入るのは危険ね。とりあえず、ここはいったん戻って派閥に知らせた方が正解ね」

自分個人で出来る事は、このあたりが限界と踏んで村へ戻ろうとするミント。両親も心配しているだろう。だが、そんな考えは唐突に聞こえてきた声と悲鳴にかき消される。

『ギャジャアアア！！』

「がぁあああぁああ！！」

「今の声は……洞窟から！？」

その悲鳴は洞窟から聞こえてきた。何かあったのか、その中から何かが此方に来る。日も暮れ、闇に染まっている今、その姿ははっきりと視認できない。けれど、その人物が人間であるというのはとりあえず理解できた。慌てたように出てきたのは少し肥えた人物。声から察するに男性らしい。

「た、助けてくれぇ！オレはまだ死にたくないんだぁ！！」

「！！……大丈夫ですか！こっちです！！」

「ア、アンタは！？」

「話は後です！今はこっちに！」

引き返すのを止め、今洞窟から出てきた者を手招きで此方に呼びよせる。それに気付いた男性はすぐさまこちらに駆け寄ってくる。どうやら走る程度には無事らしい。

「はぁ！！はぁ、はぁ！」

「大丈夫ですか！？水です。飲んでください」

「あ、あぁ、ありがとう」

直ぐに持っていた鞄から水筒をだし、男性に差し出す。見た所、大きな外傷はない。息が荒いのも今まで走り続けていたからだろう。男性は受け取るなりそれを一気に飲み干す。その勢いの所為か喉に詰まらせ盛大にむせる。

「ごほっ！ごほっ！」

「ああ、慌てないで、ゆっくりと呑んでください」

「す、すまない……ふう、落ち着いた、ってそうじゃない！早く逃げなければ！」

とりあえず背中をさすりながら落ち着くように言うミント。促されるままに、何とか平静を取り戻す男性、けれど、直ぐに慌てたように走り出そうとする。ミントはとりあえず何が起こっているのかを聞こうとする。

「待ってください！あの洞窟で何があったんですか？」

「あの中には、悪魔がいるんだ」

「悪魔！！どうして、こんな所に……」

「そんなことはどうだっていい！ここに居たら危険だ！！直ぐに逃げないと！」

「でも、このままにしておくわけには……」

男性の口から語られた悪魔と言う言葉に、一気に周囲の空気が緊迫する。ミント本人にしても、ここで、悪魔に遭遇するとは思ってもみなかった。

未熟な自分では、どうあがいても悪魔には対抗できないだろう。ここから離れ、一刻も早く派閥へ連絡を取る必要が出てくる。けれど、一つだけ、ミントにはどうしても気になる事が有った。

「あの、あの中にはまだ人がいるんですか？」

それは中にいるものの安否、それを男性に聞くと少しの間を置いて返答が返ってきた。

「え、ああ、私が出てくる前にはまだ何人かいたと思うが、もう助

かりはしないだろう」

「そんな……」

「もうすぐアイツらも外へ出てくる。その時見つかったらおしまいだ！早く逃げるんだ！」

「ですが……」

ミントの手を引き、この場を離れるよう促す男性、けれど、中にまだ生きている人がいると聞いたために、簡単にこの場を離れると言う選択を取る事に戸惑いがある。果たしてその選択が正しいのか。少しの間悩んだ後、ミントは洞窟へと歩を進める。

「な！どこへ行ってるんだ！！そっちは危ないって言っただろう！！」

「でも、このままに放っておくなんてできません！」

「だが、……（待てよ、これはチャンスなんじゃ……）」

「私は様子を見てから戻りますから、あなたは先に村へ戻っていて下さい」

「……いや、私も行こう、君だけでは心配だ」

「えっ？」

「元々、私の所為で君を危険にさらしているようなものだ。それなら、私も共に行くのが筋と言うものだ」

「ですが……」

「心配はいらない。これでも、召喚術をかじった身でね。自分の身位は守れるよ」

「そうですか、それなら、お願いできますか」

「ああ、任せてくれ……ふっ！」

『ムイ！！？』

ミントは洞窟へ視線を向け、一歩を踏み出そうとする。けれど、その一歩は踏みだされる事は無く。視界は闇に染まる。後ろから笑みを浮かべ見つめる者に気付かないまま……共にいた召喚獣の声だけがなぜか大きく耳に響いた

視界にちらつく炎、それが気になりうっすらと目を開ける。そこは岩で包まれた場所。恐らくは先程の洞窟だろう。そこまで考えが及び、なぜこんなことになっているかを思い出そうとする。けれど、それは鈍い頭痛と共に視界が開く。そこには地面に不自然な溝が幾重にも刻まれた大地が見えた。

「う、ここ、は……」

頭痛に悩まされながら頭を上げる。動こうとして自身が今縛られ

ているのだと気付く。両手を後ろに回した状態で縛られ、足も縛られている。目を足元に向けると、そこには自分のカバンが投げ捨てられている。なぜこうなったのか、洞窟に踏み込もうとしたのまでは思い出したが、それ以降は闇に呑まれ思い出せない。

「そういえば、あの人は？」

「……オレの事かい？」

「えっ？」

不意に声が聞こえ、其方に顔を向けると、先程の男性が此方を笑顔で見つめていた。その笑顔に何故か悪寒を覚えた。けれど、それを気の所為と割り切り、話しかける。

「無事だったんですね。本当に良かった」

それを聞いた瞬間、男は俯き、何かをこらえるように震えている。不思議に思っていると不意にその顔が此方に向く。そこには初対面の時にみた慌てたようなモノは一切なく、濁った眼が此方を見つめていた。今度こそ悪寒が体を支配した。

「本当におめでたい子だなぁ。さっき自分を気絶させたのがオレとは考えないのかい？面白い子だ」

「え？……どういう事ですか？」

「今言った通り、君を気絶させてこの洞窟に運んだのはオレだよ。なにせ、ここから逃げても追手がかかって面が割れてるオレは近いうちに捕まるからなぁ！力がいるんだよ、力が！」

「ちか、ら？」

痛む頭に耐えながら男性に目を向ける。男性は何かを拝むように大仰に手を振りかざし、熱弁する。

「そう、力だ！力さえあればなんだってできる！！それこそ、だれも反対なんてしない！だから、オレはここでその力を得るんだ！」

言っていることが分からず、内心首を傾げる。けれど、これで、目の前の人物が正気ではないという事がはっきりとした。恐らく、最初に洞窟から出てきた時に気付かなかったのは、逃げるのに必死で狂気が霧散していたからだろう。

「なにせ、ここまで力を蓄えるのに苦労した。この周辺の村々で家畜を殺し、森の動物を狩りつくしたからな！」

「な！」

その言葉を聞いて驚く。そう言えば村人から森の動物を見かけなくなったと聞いていた。けれど、それは臭いによって逃げたのだと思っていた。けれど、それは違っていた。

「それじゃ、最近ここで聞いた妙な話は……」

「オレの事だろうな」

「焦げた臭いがするっていうのは……」

「その事か、それは仕方がないのさ。それを使うと贄を燃やし尽く

し、その燃えた血肉を、魂を喰らうモノだからな！」

「そんな……」

言葉を失くす。思った以上に危険な事となっている。その表情を見て男の顔が満足そうに笑みを形作る。

「そのおかげでかなりの力がたまったが、やはり人間が一番だ！一人の旅人を狙ってさらったりもしていたが、動物とは格が違う！」

「！！そんな、そんな話なんて！」

「知らないか？無理も無い。一人の旅人ばかり、それも、みすぼらしい奴ばかりを狙っていたんだからな！そもそも、こんな辺境の村の、人がいない場所で噂など、立つわけも無い！」

「！そ、そんな……」

それを聞いて顔が青ざめる。自分が知らなかっただけで既に被害者は出ていた。それも、現在進行形でその被害は広がっている。

「最初はオレを含めた１０数人で行っていたんだがな。始めは村人から気力を奪うだけだった。だが、それでは満足しなくなってな！そして、ある物に力をささげているうちに、やがてそれが自立的に発動し始めてな。それが制御できずに何人かがさっき喰われたというわけだ！」

「う、嘘……」

「本当さ、おかげで生き残りはオレ一人だろうさ！何せアイツらを

囮にして逃げたんだからな！オレより早く食われるのは当然だ！！」

「なんてことを……」

「これも力を得るための犠牲だ。アイツらも満足だろう！なにせ、自分たちがその大いなる力の一つとなったのだから！」

地面に這いつくばったまま、男の言う事を聞くミント。その顔は話が進むにつれ悲しみに沈んでいく。もっと早くに気付けていれば、何故一切男を疑おうとしなかったのか。洞窟から出てきた時点で男が何らかのかかわりがあるのは明らかだった。どうして村人と断定してしまったのか。考えれば考えるほど自身の迂闊さに歯噛みする。それに気付く事も無く、男は嬉しそうにミントの未来を告げる。

「そして、君にはこれからオレの力、すなわちある魔道具の制御のための贄となってもらう！光栄に思うがいい！」

「魔道、具」

男が視線をある方向に送り、ミントも自然とそれを追う。そこには紫の光を放ちながら光る数珠があった。ピンポン玉ほどの大きさの珠がいくつも連なり、ネックレスのようになっている。けれど、そこに美しさは無く、禍々しさだけがあった。それを眺め陶酔する様に口を開く。その眼は明らかに魔に魅入られていた。

「そう、あれを使うだけで持ち主に強力な力を与える無敵の道具さ！！オレは選ばれたんだ！だからこそ、こんな時にでも運命はオレの味方をする！」

その言葉を聞いて、手段は不明だが、自分が無事では済まない。

いや、高確率で終わる事を感じた。微かに指先が震える。それでもどうにかしようと周りを見る。オヤカタはいない。これは召喚時間を過ぎてしまったが故に強制送還されたのだろう。もしくは自分の制御が外れたためにその時点で送還されたか。どちらにせよ同じことだ。オヤカタを呼ぶには、もう一度召喚術を使う必要がある。

何とかサモナイト石を取り出そうと体を動かそうとする。そんな動きに気付いたのか、男の口が醜悪に歪む。そしてその口からミントの気持ちを折ろうとする一言が放たれる。

「おっと、君のサモナイト石は回収させてもらった。なんせ召喚術と言うのはサモナイト石がないとできないからな」

「……」

「言っただろう？オレも召喚術をかじっていると、外道召喚士と言うんだったか？」

男が嬉しそうに自分の事を話す。その姿には余裕がある。それにミントは少しの疑問を覚えた。

「……どうしてですか？」

「何がだい？今は気分がいいからね。少々の事なら答えてあげよう」

「ここから出て来た時、あなたは必死で逃げようとしていた。けれど、今はゆったりと構えている。それはどうして……」

「ああ、その事か。何簡単な事さ。あの時直ぐに逃げようとしていたのは制御するための生贄が足りなかったからさ。あのまま放置し

ておけば、いずれ悪魔が際限なく呼ばれていただろう。だが、君が生贄としてその身をささげてくれるから制御ができるという事さ。ようするにあの時にいた人数では制御できずに、暴走するからさっさと逃げていただけで、それが起こるにはまだ時間がかかる、囮になった奴らは少しでもそれを長くするための意味もあったのさ」

「酷い……そんな事」

「ああ、心配しなくても、君ももうすぐその中に入るんだ。何も悲しむ事は無い。」

男の言葉を聞けば聞くほどどうしようもない事が判ってくる。

「ああ、要らぬ抵抗はしない事だ。なにせ、君が贄とならなければ悪魔が暴走するからね。そうなればここら一帯の住人が喰われるだけさ」

「あ、ああ……」

「くくっ！いい顔だ！そう言う感情が一番いい餌になる！本当にオレは運がいい！」

心が確実に折れていく。仮にここから何とかして逃げ出せても悪魔が解放される。そうなれば自分も危険だが、村の家族や村人が襲われるのは必定。どうすることもできない。そして、この男しか制御法を知らないだろう。故に倒すわけにもいかない……現状そんな方法も無いわけだが。

「さて、そろそろ聞きたいことも無くなったかな？……それでは始めるとしようか」

「……」

男が奥に目をやり、終わりを告げる。そして、儀式が始まる。大地に刻まれた紋様が光を放つ。此処に来てミントは自分が魔方陣の上に転がされているのだと気付く。魔方陣……召喚陣とも言われるそれは術の増幅や規模の拡大、逆に抑制や封印など、その使用方法は多岐にわたる。

けれど、今回の物は恐らく生贄とするためのもの。話を聞く限りではまず間違いない。何とか逃げようとするが、その抵抗も意味をなさない。

「ははは っ！これで、何とか静まるだろう！魔力を持った人間、とりわけ召喚士はいい餌になるからなぁ！」

「くっ！……」

「有難う、心から感謝させてもらうよ！のこのこ来てくれて有難うってね！」

すべては自分の判断ミス。もっと気を付けて立ちまわっていればまた違う結果になっていたはず、今それを悔やんでももう遅い。けれど、最後まで諦めたくない。体を少しづつ動かし、陣の上からどこうとする。けれど、もう数秒もせずに儀式が終わるだろう。だが、その動きによって鞄の中に入れて置いたぬいぐるみが飛び出す。

あれは……

それは、妹達が自分へと送ってくれたプレゼント。かわいいモグ

ラのぬいぐるみ、なぜか家族には不評だったが。けれど、家族からの大切なプレゼント、それを見た瞬間涙があふれた。

「無駄だよ！もう間に合わない！安心して構わないさ！死体なんて残らない！灰の一粒まできちんと贄としてあげるよ！！」

狂気に染まった声が響く。魔道具が光を放ち、ミントを飲み込もうとする。彼女は最後の最後、後ろで縛られて使えない手の代わりに、体を使ってぬいぐるみを抱きしめる。そして、目をつぶりその光を見ないようにする。家族の事を思い浮かべ、恐怖と悲しみに包まれながら……

けれど、その時は訪れない。不思議に思い、目を開くと、そこには白い光に包まれた自分の体があった。その光は優しく暖かな光に満ちていた。

「さて、とりあえず、これまでだ」

この場にいない新たな者の声が響く。そこには自身よりも年上の青年が佇んでいた。

洞窟に辿り着いた時、どういうわけか狂い気味に喋っている男性と、手足を縛られ、陣の中でぬいぐるみを抱えた少女を見つける。

とりあえず、その陣の構成を読み取り、その用途を調べる。予想通り生贄をささげるものと気付いたと同時に、自身の導き手として

の力を割り込ませ少女を守る。その力は陣の力を越え、少女を害する力の一切を退ける。

「な、なんだ！！」

「これ、は」

二人とも予想外の事態に困惑を隠せないらしい。その間に魔道具を回収しておこうと奥へと進もうとする。だが、男性がその時こちらに気付く。

「貴様！！何者だ！」

「そこの魔道具に用がある者だよ」

「そうか！貴様が追手か！！渡しはせん！私はせんぞぉ！」

「……少しは落ち着いたらどうだ」

冷静さを失い、血走った目で青年を見つめる男性。対する青年は冷めた視線で見るのみだ。そしてその視線は不意に下がり、こちらへと向く。一瞬肩が震えたが、そこには確かにこちらを心配するような輝きがあった。

青年は陣を無視するかのように歩き始め、陣に入ってくる。それと同時に巨大な藍色の炎が青年を飲み込もうとする。それを見た少女が声なき悲鳴を上げる。けれど、その光景は現実にはならない。

「小賢しい！」

ただ、叫んだだけ、けれど、どの言葉は力を持ち、術式を破壊して行く。それと同時に陣の力も止まり、静寂に包まれる。

「な、馬鹿な！その陣は近づくものを全て飲み込む物の筈！どうして無事なのだ！！」

「……知るか……怪我は無いか？」

男に適当に言葉を返し、少女を縛っていた縄を切る。それにより、自由を取り戻したミントは直ぐに起き上がり、男性へと目を向ける。その狂気を湛えた眼を見て、悲しく思った。そして、今度は顔を青年に向ける。

「あの、助けてくれて「それは後だ」えっ？」

「礼ならきちんと帰ってからにしてくれ……あいにく、まだ終わりってわけじゃない」

そう言って青年は目線を魔道具を置いてあった位置へと向ける。ミントもそれを追って目を向けると男性が魔道具を掴み、何かをつぶやいていた。

「いけない！」

「させはしない！！誰にも邪魔はさせん！！オレが最強なんだぁああ！！」

その声と共に男性の周りに数体の召喚獣が現れる。そして、それが此方に跳びかかってくる。いくらミントが召喚士とは言え、まだ半人前、しかもサモナイト石は手元には無く、武器も無い。つまり

この場ではただの少女と言って差し支えない。けれど、青年は臆さず踏み込む。それを制止しようと足を青年の方へと踏み出そうとして、目の前の光景に目を奪われる。

「駄……！」

「邪魔だ」

拳を振り切り、素手で自分の三倍近い巨体を持った召喚獣を殴り飛ばす。それを行った正体不明の青年は軽く首を回し、拳を構えると不敵に笑う。

「加減はしてやる。四の五の言わずに……全力でかかってこい！」

「な、何を止まっている！！いけっ！化け物ども！！」

その青年の迫力に呑まれ、少女も男性も、召喚獣さえも動きを止める。けれど、いち早く我を取り戻した男性が誓約で召喚獣を縛り、強制的に青年を襲わせる。

「さて、俺の拳は少し痛いぞ。歯ぁ食いしばれ」

それを青年は軽い口調で迎え撃つ。拳が振り切られる度吹き飛ばされる召喚獣達。それは世の召喚士が見れば驚愕するだろう。本来、このような光景は存在しない。それ位常軌を逸していた。

この人は一体……

ミントの胸中を占める思考は、目の前の青年の事で埋まっていた。けれど、その思考は男性の声で無理矢理中断される。

「馬鹿な馬鹿な馬鹿な！！オレは選ばれたモノなんだ！！だから世界はオレのためにあるんだ！！お前の事などオレは認めてはいない！！」

「……何が言いたいのか、よく判らないんだが？」

「させぬさせぬぅ！魔道具よ！オレを誰にも負けぬ最強の存在へと変えろ！欲しいのならば何でもくれてやる！さぁ、我が声に応えろ！！」

「おい、無茶するな！そんなことしたら間違いなく暴走するぞ！」

「ははっはぁあああはあはははあっはははは！！！」

青年の言葉を無視し、男は魔道具に溜め込まれた力を開放する。そして、悪魔に身を売り渡した契約によってその身を魔に染める。洞窟に黒い風が吹き、次第に大地が黒い沼地に変わっていく。そしてその沼地からは無数の悪魔が出現する。

「おいおい、それなりの悪魔と契約したか、自分の軍勢を送り込んできていやがるな」

「あ、あの」

「心配しなくてもいいさ、後はこっちで終わらせとくから、これを持って少し隠れてな」

「え……これは」

「お守りみたいなものだ、さぁ、それを放さないようにしてそこの岩陰にでも隠れてな」

ミントに手に渡されたのは髪飾り。それは黒い風を弾き返し、彼女の身を守っている。ミントはそれを握ったまま青年に促された、岩陰に隠れる。そして、そこに青年が白い光で結界を張る。次いで青年を青い光がつつむ。

「さて、始めるか、聞き分けのない奴らには、少し灸をすえないとな」

青い光を炎の様に燃え上がらせ現れた悪魔を吹き飛ばしていく。そして、吹き飛ばされた悪魔達の間を縫うように黒い存在が飛び出す。それは先程悪魔に身を売った男性であった物。契約により真正の悪魔として存在が切り替わったのだ。背に黒い翼を持ち、黒く染まった肉体。作り直された骨格は既に人の原型は留めてはいない。

その姿を目に止め、話しかける。けれど、その返答は既に男性が変わってしまったと感じるだけで終わる。

「へえ、狂気の果てがその姿か、もう自我も無いんじゃないか？」

『殺ス殺ス殺ス！！コロスゥウゥゥゥ！！』

「……だろうと思ったよ、悪いが…一秒もやらん！」

既に狂い、崩壊したその人格を確認し、溜息を吐く青年。そして、その眼が再び悪魔を捉えた時、少女は青年を見失う。そしてそれは悪魔たち全員も同じことだった。

――融合召喚――クロックラビィ――星天停止――

全てを飲み込みゼロタイムで停止する。時間は此処では意味がない。動けるものはこの世界の主である自分と、自分が許した物のみ。目が赤に染まり、耳がメイトルパに住む時兎のモノへと変わる。紫の髪をなびかせ、ブレザーの制服姿をしたユーリは、周りに浮かんだ岩を手でどけ、足を踏み出す。

「全部気付かないままで終わりにしてやる。痛みも、誰かを恨む暇もお前らにはやらない、この静止した世界で終われ」

ここは全てが止まった世界。舞い散る岩、揺らぐ光、周りに現れた悪魔、その全てが不自然に動きを止める。その中をユーリのみが動く。止まった時の中加速し、でてくる悪魔を全て蹴り返し、出てきた悪魔には送還術を叩き込む。そして、周りの悪魔を全て一掃した後、ユーリは融合を解く。

「……そして時は動きだす、ってな」

少女、ミントには何が起こったのかが全く分からなかった。けれど、飛び回っていた悪魔も、地面からはい出そうになっていた悪魔もその姿を消していた。そして、少し見回すと青年が魔道具を見つめ立っていた。

「あの、今、いったい何が……」

「そんな事より、少し離れるぞ、そろそろ限界だ」

「え？」

「あの魔道具が暴走する」

「！！」

その言葉に二人は洞窟の外に出る。そして外に出た青年は即座に白い光で結界を編み上げ、洞窟と青年自身をそれ以外から隔離する。その形は巨大な円柱、空中に高く聳え立つ塔のような結界。

「え！！」

その行為にミントは驚きを隠せなかった。けれど、その驚きを口にするより先に洞窟を突き破り、浮遊する黒い球体に目を奪われた。それは黒く脈打ち、何かを生み出そうとする前兆のようにも見える。

それは即座に周囲へと伝染し、黒い歪みとなる。リィンバウムの結界に罅が入る。このままいけば、以前起こった結界の虫食い程では無いものの、小さくない被害が生まれるだろう。

「さて、せっかく保険を掛けたんだ。どうせなら……使うか！」

その言葉と共に、森のいたるところから光が浮かびだす。それはマシラ衆に頼んだ短剣に取り付けられたサモナイト石。それの光が全て連なり、一つの陣と成す。その中心で青年は世界にその姿を示す。

「行くぞ、来い！聖ジャンヌ・アーク！」

呼び出されるは最上位召喚獣、Ｓランクに区分されるその召喚獣を実際に見たモノは、本当に数えるほどしかいないであろう。そして、その姿を見た少女はその光に目を奪われる。全てを包み込む聖女の笑みを持って世界を見つめる。そしてその上空に静かに表れた巨大な上半身のみの鎧。それは既にあまりの巨大さに要塞にしか見えない。それは太古に伝えられた神の物、神の雷。

この場に現れしは至高の再現、その威圧はこの世界に並ぶものなし。全てが平伏し、個としての意味を失う。ただ、それを見上げる事、それがただ世界に許されたこと。

「後腐れ失く消し飛ばす！」

そして、この後に振るわれた力は想像を超える。

――融合召喚――聖ジャンヌ・アーク――神浄　救世者――

音が消える。世界の色が抜け落ちる。全てが色あせる。そこには、巨大な杖を構え、重厚な鎧に身を包んだユーリ。緑色の１２枚の翼が世界から音を生む。世界がその存在を支えきれず、亀裂を生む。けれど、崩壊には至らない。この場にあるは世の救済を行う者。それが世界を救わぬ筈は無い。これから行われるは裁き、断罪の瞬間。

『全てを解き放て――大聖浄！！』

杖を振りかざし、黒き空間を上空へと移す。本来空間をいじるなどと言った事は不可能。けれど、今のみは例外。その程度は造作も無い。界の頂点に立つ一角、ならばそも不可能は無い。ただ手を振りかざすのみ、それは呼吸と同じ程度の意識で行われる。

そして、杖の先端から放たれた極光に包まれ、全ての穢れは浄化される。その一撃は誰も殺さない。その一撃は次元を崩壊させ、界の果てまで到達し尚その威力には一切の衰えがない、放った本人が任意で消さなければ際限のない破壊が発生していたことだろう。その事象が威力の凄まじさを物語っている。それは意味消滅、存在すら消し去る一撃。もし当たれば誰の記憶にも残らない。

そして、吹き飛ばされた後、虚空に漂うは今まで犠牲になった者達、確かに喰われたものが完全に消化されるまでは４２日ほどかかるされるこの魔道具だが、すでにリミットぎりぎりだったことは今更だ。しかも殺され飲み込まれた者も居ただろう。それすら関係なく奇跡としかとれない想像外の力を持って、例外なくその命を救う。神の御業。

そして、それは悪魔に喰われた先程の男性も救うという事。同じように空中に漂っている姿が見える。ここに全ての犠牲は消え去った。

『さて、これで、ひと段落かな……それにしても、オーバーキルなのは今更か。変に抵抗されてややこしくなるよりはいいか』

空中に投げ出された者達を静かにおろし、静かに眠っている者達を見て笑みを浮かべる。自身の内からも笑みが返ってくる。そして、行動を停止させた魔道具が下りてくるのを優しく受け止める。

それを見た後、ユーリは壊れた自然を修復させる。白い光が壊れを直し、雪の様な光が活力を増す。それを行った後、静かに空を見上げる。その眼光が世界を射抜いたとき、今この場で起きた事象は外部への情報流出を止められる。歴史から先程の融合は切り抜かれ

る事となる。知る者は本人と少女のみ。

その後、ユーリは融合を解除し、周りを見渡す。

「これで回収も終わり、行方不明者も全員か？とりあえず、この魔道具に関わった者は全員吐き出させたはずなんだが……」

気絶している者達を光で包み、知人がいる場所に送る。彼女ならうまくやってくれるだろう。正直少しくらいは苦労すればいいと思う。そして、それはミントも例外では無く、光が体を包み込んでいく。

「えっ？これって！？」

「ああ、心配するな。君は村に戻すだけだから、早く帰ってあげな。ご両親も心配してるだろうからさ」

実際ユーリは宿の近くでうろうろしていた男性が多分この少女の親だと当たりをつけていた。そして、それは当たっていた訳だが、その村出身と勘違いしたままだったりする。無論ここでは大した意味は無いが。そして、この少女が自身の知識に関わるものとは全く気付かない。

「待っ！！」

言葉は最後まで続く事も無く大気に溶ける。見上げた夜空は星が綺羅綺羅と輝き、とても綺麗に見えた。

あの後、村に戻され、色々不思議なままに終わったものの、父親には怒られ、母には軽い注意を受けた。そして、活力を失っていたとされる村人たちも、翌日には元気を取り戻していた。その後、森にも動物たちが戻って来たらしい。

けれど、あの青年の事だけはいくら調べても出てこない。あの時のお礼が言いたかったのだ。派閥でも捕まらない彼の足跡。そして、この村への任務が言い渡され、諦めるを得なくなった。それがこんな所で再開するとは、本当に判らないものだと笑う。

あの頃を振り返り、今の男性に目を向ける。若干年を取っているように見えるが、思い出の中の青年と特に変わらない。今の自分と同い年くらいに見える。だが、それでは辻褄が合わない。少なくとも昔あった時点で目の前の男性の方が4、5歳は上だと感じたのだ。

「あ、あの！」

「なんだ？」

「若いんですね！」

「はぁ？」

「……あれ？」

気が付けば訳の分からない事を喋っていた。ユーリさんも不思議に感じているらしく、困惑している。さすがに今のは自分でもおかしいと感じた。誤魔化すように手を振る。

「いえ、思っただけですから」

「……」

笑顔を浮かべながら誤魔化すと、男性がますます困惑を深くする。これでは墓穴を掘っただけではないだろうか？その後も色々とあの事件の話をしたが、男性が困惑した顔が多かったのは、ある意味で仕方のない事かもしれない。ミントはここ最近誰かと長時間喋る事をしていなかったために少し説明不足な会話をしていた。そして、少なくともユーリは最後に解決して行っただけで、それまでの状況を知らないのだから。

「それで、あの時の召喚獣を見た時に思ったんです！すごいなぁって、誓約するのってやっぱり大変でしたか？」

「まぁ、それなりには、かな」

そう言いながら道具袋に道具を入れていく。補修はこれで大体終わった。役目が終わった以上はさっさと立ち去るまで。ユーリ自身は内心困惑していた。予想していたよりもミントが饒舌に話しかけてくるのだ。正直こんなに明るい女性とは考えてなかった。そして、予想外なのはまだあった。

「あ！今お茶を入れますね」

今はテーブルでミントが入れてくれたお茶を飲んでいる。断るのも失礼だと思い、一杯ぐらいならいいかと思い、頂くことにしたが、そこから何故かクッキーから何やら、色々でてくる。

「あ、御免なさい。私だけ喋っちゃって……迷惑でした？」

「そんな事は無いよ」

その視線を感じたのか、ミントが目を伏せおずおずと言って来る。特に深いと思っていたわけでもないので否定する。

「本当ですか？」

「ああ」

「よかった……最近村の人たちとあまり仲良くできなくて、久しぶりに喋ったから気分を害したんじゃ無いかって思って」

「そんな事は無いさ、話を聞いていて楽しいと思ってるよ」

「それなら、良かったです」

そうやって話をしていると、ぽつぽつと雨が降ってくる。それを見たユーリはそろそろ引き上げようと席を立つ。

「さて、そろそろお暇するよ。手間を取らせたみたいですまなかった」

「あ、あの、雨も降ってきてますし、止むまで雨宿りして行ったらどうですか？」

「いや、そういうわけにはいかない。そこまでしてもらうわけには」

「そうですか……また来てくださいね」

「ああ、また」

「はい」

そして、ユーリは小雨の中来た道を帰っていく。それを少し寂しく思いながら窓から見つめる。彼は振り返る事も無く、無人の道を歩いていく。その背中がどこか寂しく見えたのは気の所為なのか。ミントはしばらく男性が去った方角を見つめ続けた。次会う日を少し楽しみにしながら。

その後も少なからず会う機会はあった。街で見かければ何気なく近づいて話をする。時には野菜についての話をする。彼の仲介や紹介で街の人とも諍いが無くなり、自然に暮らす事が出来た。そして、彼が子供たちを紹介してくれたことで妹たちと遊んでいるようでそれも楽しく思えた。セクターと言う子供たちの教師をしている者とも知り合え、今では野菜の話をする友人としていい関係を気付いている。

彼は色々な話を知っている。それこそ、自分の狭い世界を広げてくれるかのように、いつしか彼の笑顔を見る機会が増えた。その顔を見るのが楽しみになった。彼が笑顔になると自分も笑顔になっていた。さて、この想いを自覚したのはいつだったか。それは本人だけが知っている。そして、それは今も続いている。

回想を終えた時、もうすぐ目的の所に着くぐらいになっていた。

思った以上に思考に浸っていたらしい。そして、彼がいる宿では大声で響く声と打撃音が聞こえた。不思議に思いその音源に近づいていく。裏庭に回る。音はそこから聞こえてきている。無論その音の出所は予想はついている。

「アチャァ――！！」

「……」

「ホアチャァ――！！」

「……」

「チョワ――！！」

「……」

そこには予想に違わず、拳を振るう一組の男性がいた。その片方は予想通り、竜人族の青年、セイロン。彼は戦闘中、とにかく叫ぶ、それがストラの呼吸である事は知っているが、知らないものからすれば面食らうに違いない。現に自分たちは面食らった。ユーリだけは笑っていたが。

そして、その相手をしているのは件の男性、ユーリ。無言のまま繰り出される拳や蹴りを捌いていく。ストラを使っているセイロンとは違い、ユーリは何も使わない徒手空拳のまま。その動きは何かの武術なのか。特異な構えを取っている。

「ふふっ！そなたと戦うと自分の可能性に気付けると言うものだ！まだまだ、世界は広いという事よな。楽しみが増えたというもの！」

「あのな、一回一回使う武術を変えてるこっちの身にもなれ！結構面倒くさいんだがな、これ」

「そう言うでない、異界の武術、それがこのようなまでに多才多芸なものだとは……正直驚嘆に値する。その長き武の蓄積、見てみたいと思うのは、武に携わる者の性と言ってもよかろう！久しくなかった武人としての熱なのだ！冷ましてくれるなよユーリ！」

「まったく、愉快だねぇ」

「行くぞ！ホワチャ――！！」

「……なんか大変そうだね」

その試合を横目に見ながら、彼と話ができないのが少し残念に思いながら、表に置いてきた野菜を室内にいた少女を呼び渡す事にする。

「あはは、セイロンもきちんとした相手が今までいなかったみたいで、毎日毎日挑んでるみたいだよ。今の所全敗みたいだけど……」

「でも、平和になってからだし、いいんじゃないかな」

「あのね、実は本人が言うにはあの頃から戦ってはみたいと思ってたんだって！だけど、御使いだから表面上は我慢してたんだって」

「そ、そうなんだ……」

「うん、だから、もしかしたら戦ってる時にも今みたいに模擬戦挑

んでたかもしれないんだ」

「それは、ちょっと……」

さすがにあの頃に今みたいな模擬戦をされるのはどうかと思った。当然そんな余裕などあまりなかったわけだが。

「やっぱり、そう思うよね、あはは」

「フェアちゃんはユーリさん取られて寂しく思ったりするんじゃないかな？」

突然振られた話題に瞬時に少女、フェアが慌てだす。

「そ、そんなことないよ！別にこの後は三人で宿切り盛りするんだし、別にそんな事は……」

「そう言えば、ライちゃんは？姿が見えないけど？」

「ああ、ライなら今頃糞親父にケンカ売ってるんじゃないかな？私も後で行くけど」

さっきとはうって変わって、嫌そうな目をしながら口を開く。それを聞いて、内心汗を流しながら聞いてみる。

「……えーと、勝ち目、ある？」

「ない！……悔しいけど、父さん以外勝った人見たことないから、それに父さんみたいな強さはちょっと無理、かなぁ」

「まぁ、ユーリさんは色々あるから、そう思うのも無理ないよね」
「あっ！今お茶出すからゆっくりしててよ！ミントお姉ちゃん！」
「あ、有難う、それじゃ、お言葉に甘えるね」
「どうぞどうぞ！それじゃ少し待ってて！どうせだからセイロン達の試合も見ながら何か食べよっか？」
「あ、いいね～」
「うん！直ぐに準備するね！」
「……本当、見てて飽きないなぁ」

二人の戦いを見ながらお茶を飲む。二人はなんだかんだ言いつつも笑顔で武を競い合っている。それを見ながら、笑顔になっている自分を認識する。やはり彼の笑顔を見ていると自分も嬉しくなる。だから、せめて、今はこの距離を保ちたい。

そのうち、我慢できなくなるかもしれない。けれど、その時まではこのままで。ゆっくりでいい。無理には走らない。自然にゆっくりと進んで行けばいいのだ。慌てなくてもいい。だってこの時間が本当に大切だって知っているから。

外伝　思い出を振り返り　笑顔を想う（後書き）

今回最上級召喚獣とその融合が出てますが戯れの一発で出番終了！というか、こいつらの出番はぶっちゃけあんまりない！そう出すものでもないですし、本編で言ってた通り、オーバーキルです。

使う必要は全くない、けど用意したから使おうか！理由としてはそれだけです。あと、ユーリ関係で書いてない場面が幾つかありますが、あくまでミント主観だと思っていただけるとありがたいなと。

後、地味にクロックラビィ、強くない？そして、いくつか問題発言とかあったりします。これは作者だけの考えなのであんまり真に受けないでくれると嬉しいです。

準備不足すぎる介入（前書き）

初投稿なので、意見があれば、よろしくお願いします。少々編集しました。

準備不足すぎる介入

軽い虚脱感を感じながら目を覚ます。最初に感じたのは冷たく硬い床、ついで肌に当たる風である。それら全てに思い当たることはない。その違和感に意識が覚醒を促される。うっすらと目を開け、自身の状況も正確に把握できないまま青年は体を起こす。

「・・・あれ、ここはどこだ？俺は夢遊病とか患った覚えはないんだが」

自分は間違いなく布団で寝ていた筈なのだが、起きてすぐに寝る前の記憶を探る。だが、その記憶はどう考えても今と繋がらない。誘拐かとも思ったが、そんな御大層な身分じゃない。どこにでもいる一般家庭、特別な所など何一つない。少なくとも自身が知っている限りでは心当たりはない。

とりあえず、今の自分の状態を確認してみる。両手…特に問題なく動く。両足…問題なし。縛られたりもしていない。気になる部分としては、何か夢を見たような、まあ所詮思い出せないなら、言うほど大した事はないだろう。まさか正夢とかは無いだろう。そんなものは滅多にないというか自分はなった事は無い。

恰好は、寝る前と同じ、紺のジーンズと灰色のシャツ、黒のジャケット。いつも通り、変わったところも何もない。体調も特に悪くない。薬物とかを使われて連れてこられたという事もあるが、それを判断することはできない。

この事に誰か気付いてくれると嬉しいが、あいにくと独り暮らし

だったし、近所付き合いもあまりしていない。居なくなっても誰も気付かんよなあ、とうなだれる。時間を置けば気付くかもしれないが、それでは手遅れになってたりしてそうな気がする。

「まあ、落ち込んでも仕方ないか、こういう時は前向きになるのがいいんだったか？」

次に周囲を探る。気付くのが遅れたが仮に誘拐だとしても、見張りぐらいいる筈だろうが、周りには誰もいない。今いる部屋は石造りの物置みたいな所か。じゃなきゃ、牢屋か。そんなところに当たりをつける。

視線の正面にある鉄の扉が妙な威圧感を放っているようにも思える。見た感じ人が使った形跡はない。至る所が埃やら泥やらで汚れ放題である。それに気付くと、自分がこんな所で横になっていたのかと思うとなんか嫌なので立ち上がる。さすがに汚れた床で座っていたくないし。当然の事だろう。

「夢とかならいいんだけど、自覚のある夢ってのもな。とりあえず、動き回ってみるか。なんか新しい発見とかあるかもしれないしな。ここで居るよりかはましだろう。多分」

とりあえず、部屋から出ることにする。幸いにも鍵はかかってない。既に誘拐と言う戦は薄まっているが、それならばなぜ自分がここに居るのかと言う問題にぶち当たる。夢遊病とかなら本当にへこむが。

外に出て、周りを見渡す。番をしている者もいない。こちらにとってはいいことである。仮に誰かがいて、何かの用で一旦離れただけであるとしたら、戻ってくる前にここを去らないとまずい。ここ

に残る気はないので、とりあえず移動することにする。無論、それが正解かどうかの判断は尽きない、けれど、このままと言うのもそれはそれで不味い気がする。なら、自分は行動するまで。

「とりあえず、右か、左か・・・右でいくか」

直感で決めて進む、土地勘がないのだから仕方ない。他に頼るものは何もないのだから。次の交差点も勘を頼りにそのまま進む……出来る限り進路が判るようにそこらの石で壁に目印なんかもつけながら。もちろん、居るかは判らないが、追手か何かが来た時にばれないように、少し工夫しておいたが。

「長いな、どこまで続くんだ？」

そんなことをしながら進んでいたが、長い、この一言に尽きる。この建物とにかく長いのだ、まるで迷路のように道が多い。下手をしなくても普通に迷えと言わんばかりに。かれこれ2時間は歩いたと思うが、あいにく腕時計も時計もしていないのだ、時間なんてわかる筈もない。

まあ寝ていたのだから身につけてても外すだろうが。ないものをねだっても仕方ない。気持ちを切り替えて進む。体内時計ではもうすぐ朝飯だと言っているが、どこまで当たっている事やら。

「・・・どこまで続くんだかなぁ、まあ、なんか体の調子がいいし、苦にはならないのが救いと言えば救いだな。おっ？なんか広間にでるっぽいな。さて何が出るかな、鬼が出るか、蛇が出るか……出口がいいなぁ」

なぜかは知らないが、体が軽い。ずっと歩いているのに疲れがか

けらもない。不思議な感じだがやはり薬物か何か投与されていて脳内麻薬とか出ているのかもしれない。なんにせよ動けるうちに動けるだけ動いておきたい。とりあえず、顔だけ出して中を窺う。なんか、ロボットみたいなのが動いてた。二足歩行で滑らかに動いてる。絶句し、思考が止まる。視線はその異常な物体に固定される。

ありえんだろ、着ぐるみかあれ。自立型ロボットとかアニメとかの世界だけだろ、というか、此処って日本か？……やっぱり夢とかかな？

現実逃避気味に見てみる。けれど一向に目覚める気配は無く、意味不明な事実を突きつけられるのみ。しばらく悩んでいたが、結局あきらめて現実を見てみる。

やはり動いている。きちんと稼働音もしている。しかもよく見ると、あのロボットは少しだけだが、宙に浮いているように見える。

待て、普通あの質量が空を飛ぶとか、物理法則的にありえないのだが、どこのロボット大戦だ？動力は核融合？ないな、というかあってたらどうしようか？……とりあえず笑っておこう。

そんなことを考えながら、しばらく不思議ロボットを観察する。しばらくして埒が明かないと思い、とりあえず他の道を探そうと振り向こうとした矢先、唐突にロボットが向きを変え、偶然だろうが視線をこちらへと移動させる。

あっこっち見た、目が合う、なんか近づいてきた。運命の出会い？うん、ないな。

「って、ちょおおっとまて。なにこの状況、シャレにもならんぞ。

これっって、きやがったし！ってか早っ！」

なんか知らんがこっち見るなり追ってきたロボット、明らかにウインウインいってるし、あれで友達になろうというニュアンスなら、人間をもっと勉強しろと返すぞ。常識的にいうと侵入者発見、排除開始。みたいな感じだろう、多分一字一句間違えてないと自信を持って言える。それにしても速い、デカイなりしてあの速度は異常だ。そこらの陸上選手ならごぼう抜きだろう。

「む？何でおれは逃げ切れてるんだ？……こんなに速くなんてないぞ。まあ、今考えても仕方ないか、とりあえず考えるよりも手を動かさないとな、掴まっても碌な未来像が浮かばん」

とりあえず、そんなことよりももしも捕まってしまうと、確実にろくでもない事になるのは確定的に明らかなので、逃げの一手一択。自身の勘が示す通りに向きを変え、がむしゃらに走る。後の事など考えずにでたらめに走り続ける。自分でも驚くぐらいの速さで、逃げてる間になんとなくなのだが、これ夢じゃないだろ、と変に確信を持ったが。全然嬉しくない。

そしてその後しばらくして後ろを見ると、もうあのロボットは追ってきていなかった。機械音もしないからきっと逃げ切ったのだろう。とりあえず壁に背をつき腰を下ろす。遅れて疲労感が襲ってくる。もし今来られたら高確率で捕まるだろう。

「はあ、はあ、なん、とか、まっ撒いたか……なんだったんだ。あれ、ロボットってフィクションだろうが。普通ったくどんな状況になってるんだよドチクショウ！」

一息つく、この中でまたあんな目に合うのかと思うと動く気力が

ごっそりと削られる気がした。正直やってられない。とりあえずなんとか、息を整え、既に方向を見失った道を勘を頼りに歩き出していく。

「本当に、きっついなぁ。波乱すぎる人生とか誰が得するんだよ！」

脈絡のない事を考える。そうでも思わないと気分が落ち込む一方だ。そして、それは此処では現状マイナスにしか働かない。だからこそ、そんな状態は何としても回避する。暇があれば何か希望がある事を考える。そうしていると再び広間に出る。

「今度は油断しない！なんかいたら即逃げる！見つかっても即逃げる！よし！」

後ろ向きな発言だが、今の自分には武器も何も無いのだ。正面切って戦う方がどうかしている。戦う術と、それをきちんと扱う能力があるならともかく、そんなものはどこを探っても無い。だからこそ、生きるために逃げる。この行動に何のためらいもない。

「さて、と、何がいるかな？……っというか何もいない方が俺的に嬉しいんだが」

恐る恐る顔をだし、中を覗き込む。その先には何もいない。そして、部屋全体をしっかりと確認する。そして、壁や屋根なんかもしっかりとみる。もしも罠や警報なんかがあればそれだけでも俺は終わる。そして、結局素人目だがないと判断する。元々見つからないように設置するのが本当の使い方なのだが、素人に判る訳がない。だから、ないと判断したのなら、後は一気に行くだけだ。臆せば止まる。それなら進むのみ！

「すぅーはぁーよし！行くぞ！！せーのっ！！」

深呼吸をして、一気に走り出す。大丈夫と判断したラインを全力疾走。これならきっと反対側まで届く。そう思い気を緩めたのがいけなかったのか、足元の床が光る。

「は？」

この時、速度を緩めなかったのが結果的に功を奏した。でなければここで終わっていたかもしれない。自分が通り過ぎた後、一瞬遅れて衝撃が走る。それは自身の背後から。それもすぐ近くの足元からの爆発。気付いたときには壁にたたきつけられていた。

「っづ……何が起こったんだ？……うぉ！なんだこれ？」

青年の見た先には、少し前までは何の問題も無い床が、浅いながらもクレーターを穿ちその形を変えていた。それをみて、先程の衝撃が何かに行きあたる。

「地雷か？……本当に命がけだな。よく全力疾走してたな俺。よくやった俺！」

自画自賛してみる。間違いなくこれは自分の英断だったと思った。何せ最大速度で走って何とか生にしがみ付けたのだ。もし少しでも速度を下げていたのなら今頃足がなくなっていたかもしれないのだ。考えただけでも気分が悪くなる。

「はぁ、けど、これで俺の命がさらに危険になったと実感したな。これ生きてられるんだろうか？」

頬を伝う冷や汗をかきながらそんな事を考える。さすがにこんな戦場で使うような兵器まで普通に仕込まれていては気分も落ち込んでいく。そして、嫌な事とは重なるものだ。いつ、どんな時も、ある意味不変の法則と言ってもいい。この時もそのお約束は発動する。

「なんだ？何かの音がって！なんかいっぱい来た！ロボットばっかり！やべぇ！！」

さっきの爆発音を聞きつけたのか、奥からはさっきのロボットが数体此方へ向かってきている。急いで逆の出口へ向かって走る。余裕なしの全力疾走で、なんとか通路まで逃げ込むことに成功する。そしてそれを喜ぶ間もなく、妙な音と共に、傍の壁が溶け融解して行く。

「はい？なんだこれ？」

無論、足を止める暇は無い。止めたらそこで先は無い。だからこそ、思考を止める事態にあっても足だけは止めない。この時は生きるための本能に感謝したい気分だった。先ほどの融解した壁の原因は当然後ろから進んできているロボットの口から放たれたものである。それを考え付くのにしばらく時間を要したが、それが判ったからと言って別段なんの進展もないし、この状況が好転するわけでもない。三代絶望が加速して行く。

「マジで救いようがないんじゃないのか？この状況！」

既に笑い話以前に、遺言レベルの言葉を紡ぎながら、現状を精一杯生き抜く。体力の続く限り走りぬく。それが自分にできる唯一にして絶対の選択。他は無い。だからこそ、足を潰す勢いで走る、走る。これ以上走れないと体が悲鳴を上げようとかまわない。どうせ

止まったら終わるのだ。それならば自分の限界位越えてやる。

「やってられない！こんな時に何も思いうかばない自分が腹立たしい！」

愚痴を言いながらも速度を落とさない。これ以上の速度は無い。失速覚悟のオーバースピード。けれど、限界を超えて走るその速度は、奇妙な事に衰えを知らないとでも言うかのように走り続ける、いつか壊れるのだろうその体は生へと一生懸命にしがみ付いている。

「本当に！まだ、何も思いつかないけど、やり残したこととかきっとあるんだからな！こんなところで終われるかぁ！！」

実際の話、心残りなんてものは結局、この局面において思いつかなかった、そこまで充実した人生を送った覚えはない。けれど、物足りないと思った事も無い。どこまでいっても自分はこんなものなんだろう、そう思った。けど、それでも、今を全力で頑張ってる奴を蔑ろになんかできやしない。だから諦める事なんかない。

「もうすぐ、きっともうすぐ撒いて終わりだ、もうすぐ……なんだかなぁ、ついてないって言えばいいのか？この状況は？」

その視線の先には、先程のロボットと同系統の物が数体、道を塞ぐように立ちふさがっていた。流石にその状況に静かに詰みを悟る。けれど……

「……だから、何だってんだ！こっちはもう止まる気なんてないんだよ！」

それでも、止まる事無く走る。ほんの少し前に走っていた空間に

レーザーが走り、壁を溶かしていく。それでも恐怖は感じない…それに気付く余裕などない。目の前のロボットが口からレーザーを放とうと此方へ顔を向ける。止まれない…もう足に力が入らない。このまま前後からレーザーで焼かれて終わるのか、もうこれを逃れても体力がない。ここで詰み。それは変わらない。けれど、それでも諦めたくない。

「……詰んだって、盤ごとひっくり返して全部なかったことにしてやる！チェックメイトからの逆転劇だってあるんだって見せつけてやる！」

そう言って走る速度を上げる。足が軋む。体が痛い。けれど、それでも、諦めたくない。そんな思いとは裏腹に体は無情にも限界を訴える。そして、足がもつれ、その場に転倒する。

おい、これで終わりかよ！まだ、何にもわかってないのに！こんなわけわかんないままで終わりかよ！

最後まで、もがきながらも何とか進もうとする。けれどもう足は動かない。既に力が入らずどうしようもない。青年の体が床へと叩きつけられる。その直後、光が溢れた。

光が過ぎ去った後、そこには何かが溶けたような異臭が漂っていた。その中で動くものが一つ。件の青年である。

「たく、逆転劇ってこんな感じだったっけ？」

何の事は無い。前後のロボットが同時に正面に向けてレーザーを放ち、対象となっていた青年がいきなり転んだことによって同士討ちが起こっただけの話。特筆するような事は無い。けれど、ここでそれが起こったことには意味がある。偶然でもなんでも今ここに青年は生きている。実力でも、運でも、例え、ありえない奇跡でも、彼は今ここに死の運命から、生を勝ち取ったのだから。

けれど、それは小さな一歩、大局的には何も変わらない。この場を切り抜けただけ、そう、言うほどの意味はない。けれど、ここから先を生き抜く命を独力で手に入れたのだ。

「けど、やっと、少し休める、な」

少しだけ壁に持たれて休む。さすがに足がつった。しばらくは使い物にならないだろう下半身に目をやり、溜息をつく。

「よく、生きてたもんだよな」

そういって、壁に目を向ける。そこには融解した壁が歪んだ異星系のアートとなって鎮座している。それを見ながら、下手をしなくてもこの中に組み込まれていたのかと思うと、気味が悪い。側には先程のロボットが数体、頭部を溶かした状態で横たわっている。それを近くの壁の破片を拾い、投げつける。特に意味はない。

「やれやれ、動かないのなら少しは愛着もわくのかもしれないが、今は無理そうだな」

さっきまで掛け値なしのデスレースの真っ最中だったのだ。少なくとも愛着は無い。別に憎悪している訳でも無いが。

「さて、と、そろそろ動くとするか。また襲われても嫌だしな。次はどこに行くとするかな？」

とりあえず歩ける程度には回復した体を起こし立ち上がる。そのまま、通路を進んでいく。そしてその後もロボットを見かけたりもしたが、なんとか発見されずに身を隠すことに成功する。

「どうしろっていうんだか……ってあれは、階段、か？」

何とか動けるようになったのはいいが、もう帰り道も覚えていない。戻るという選択肢はこの時点で消えている。この場合、どの道を選んでも進むという事になる。けれど、先ほどのロボットが今までの分しかいないとかいう楽観はできない。さすがにそこまでおめでたくはない。

だが、ここでとどまったとしても状況は好転しないだろう。つまり進むしかないのだが、息を整えて前の階段を見つめる。階段と言う性質上、この階段は当然上の階に続いている。この階の探索を続けるか。上に昇るか。二つに一つ、目をつむり数秒考えて答えを出す。

「とりあえず、この階きちんと探索してからにしようか目印かなんか「うあああああああああ！！」…って何だ、何だよ、何ですか、俺に考える暇をくれっての！お願いだから、こっちはもうお腹いっぱいなんだよ！」

とりあえず、聞こえた悲鳴の場所は上の階、今までの考えを強制的に打ち切って、反射的に上に向かって走り続ける。その先にトラブルしかないとしても、気になったのだから仕方ない。放っておい

て後味の悪い思いはしたくない。すぐに行動に移す。それほど休憩を取っていないにも関わらず何の問題も体は動く、疑問は尽きないがプラスに働いているのだから、今は置いておく。

この時の行動を後に振りかえれば、異常な空間に置かれてテンションがおかしくなっていたのだろうと思う。思えばこの選択が後々へ続く最初の選択肢だったのだろう。

「嫌な予感しかしねえぞこれ。上にターミネーターとか居てももう驚かんぞっと……いややっぱ、居ないでほしいなっておい！」

口には出したものの、本当にそうだったら嫌だなぁとか思いつつ、階段を駆け上がる。上がりきった先に待っていた光景は、やはり予想斜め上からコークスクリュー気味にかっとんでいった。

「き、君は？」

階段を上った先に広がっていた光景は、女の子が触手につかまってる場面だった。予想できるか、こんな状況！

しかも、本当に何故か判らないが、女の子に見覚えがあるような、その傍にいた白い髪の青年（こっちもなんか見覚えがある）がこっちを見て驚いている。だが、こちらも目の前の事態を把握するのにいっぱいで、気にする余裕もない。漫画とかだと割と触手系の奴いるけど、実際に見ると非常にグロい。本気で、夢に出そうである。というか見るんじゃなかったと真剣に思った。

「…これは予想外すぎだろったく、どうするよ、なんか切る物でもあれば……」

そこまで考えた時、少し離れた所に細い刀身をした剣が転がっているのを見つける。種類までは分からないが、レイピアとかそんな感じだろうか？けれど、それと比べても幾らか太めの刀身だ。これなら軽そうだし、何より斬撃にも使えそうだ。

「って剣あるし……というかなんであるんだよ……まあいいか、使ったことないけど、それでも振るだけなら何とかなるか？草刈りとかならやったことあるしな。全然違うのは承知の上だけど、大切なのは出来るって思う事だって誰かが言ってたような気がする」

無造作に転がっていた剣をつかんで構える。あまりの軽さに驚いたが、気にしないようにして目の前のことに神経を集中する。これは遊びじゃない、他の事に気を取られない、少しでも集中力を落とすと命を落とす。けど、緊張するな、急ぐのはいいけど焦るな。体が硬くなると動きが遅くなる。それを自分にしっかりと言い聞かす。

チャンスは一回。外せばゲームオーバー。腰を落とし、体を少し傾け前傾姿勢を取る。心臓が鼓動を上げている。足が少し震える。気分は最初からクライマックス、雑念を捨てて目の前の事に全ての意識を向ける。出来るんだと思い込む。失敗なんてしない。絶対に成功させる。

「ま、待つんだ。あれに近づいちゃいけない！」

それに気付いた青年がこっちを制止させようと声を張り上げる。けれど、こちらは既に踏み出した、最初の一歩を。今更止まるなんて選択肢は、無い。

「全部ブッタ切る！おっらあああ！！」

なんか、白いのがなんか言ってる気がしたが気にも留めない。そんな余裕はない。足か手を止めれば俺も捕まる。そうなった瞬間俺は終わる。そんなことには絶対なりたくない。それにとりあえず、人命救助優先で。話は後で聞く今は女の子を助けて逃げるのみ。

近づくと地面から触手が山のように出てくる。内心驚いて足を止めそうになったが、姿勢をさらに傾けて手前から順々に根元から切り飛ばす。まんま草刈りである、しかも走りながらの。出来る限り不必要な攻撃はせず、一気に女の子の所まで突っ切る。そのための道を切り開く。

触手を切るたび、返り血とでも言うのか、変な液体が体のあちこちにつきまくるが、今は無視して中心で捕まっている女の子目指して進む。べたべたして気持ち悪い。今すぐ服事脱いでしまいたい衝動に駆られる。それになんか皮膚に吸い込まれていってるような気がするが、考えると絶望しそうなので見なかったことにする。そのうち、かゆ、うま、とかにならないよう願っておく、切に。

そして、漸く後少しというところまで辿り着く。足を止めず、最後とばかりに走り込む。けれど、その直後、何かに襟首を掴まれたかのように突然後ろに引きずられる。それはあまりにも突然であったために抵抗もできずに成すが儘となる。

「ちょっ！！なんだよこれは！」

焦って周りを確認すると、さっきからいた白い青年がこっちを見てた……ってもしかしなくても。

「お前の仕業かあああ、いきなりなにしやがる。後少しだったんだぞ！！」

青年は険しい顔をしたまま、俺の話には答えず、いきなり口を開いてしゃべり始める。

「初対面だけど、君にお願いがある、聞いて欲しい」

「あ？いや、その前に俺の話「時間がないんだ！！」……わかったよ、でなんだ。あの子を助けるって言うんなら見ての通り、手伝うけど」

とりあえず冗談が言える雰囲気ではなさそうなので、仕方なく相手の言い分に従う。こっちは自分の状況すらわからないのだ。選択肢もさほどないのだから、少々理不尽でも仕方ないと納得しておく。とりあえず話の先を促す。今は少しでも状況を知りたい。それが結果的に俺を助ける筈だ。

「うん、その事なんだけど、今から君をある所に飛ばす」

その口から予想外の言葉が飛び出す。このまま助けるか、それともいったん下がって、体勢を整えるか、そんなところだろうと思っていたのだが。その口から紡がれる言葉はこちらの思考を止める威力を持っていた。もしこの時触手が襲ってきていたら確実に捕まっていただろう、例えるのならその位の衝撃があった。

「はぁ？どういう事だ？いや、それよりもあの子は？助けるんじゃないのか？」

慌てて口をはさむ。もし見捨てるとかいうのなら、即座に殴ろうと思いながら。

「今の君じゃ、助けてもすぐに捕まるよ。君はここにきて長いのかい？」

「いや、今は何が何だか、目が覚めて3時間ぐらいだな、多分」

「ということは、ここがスタート地点ということか。（まさか、ありえない。転生の塔から始まるなんて……それとも誰かが送り込んだ、ということか）とにかく、あの子の心配はいらない。僕がなんとかする。君には、力をつけてほしい。そして、あの子のことを頼みたい」

矛盾したことを言われて理解が追い付かない。しかも、なんか俺に押し付けようとしてないか？こいつ。と嫌な予感ＭＡＸで聞き返す。それが無駄だと直感的に悟りながらもやはり確認しておきたい。

「？？待て、話がおかしいぞ。お前が何とかするんだろう？なぜ俺に頼むんだ？」

「すぐにわかるよ、で、返答は？」

何もわからんが、というか判断材料が碌にないが、とりあえず答えるしかないらしい。本当に不本意だけど仕方ない。首を突っ込んだのはこっちなのだ。今更だと腹をくくる。

「説明不足もいいところだろう。判断に困るけど時間もないし、どうにかなるんだろう？ならその話に乗るよ……どうにかなるんだよな？」

「ありがとう、それじゃ、さっそくはじまるよ」

そういうと白髪の青年がいきなり、白い光に包まれる。目の前の女の子も光に包まれる、普通に驚いて絶句した。しばらくして、光が女の子から俺に集まってくる。とりあえず空気を読んで動かずじっとしておく。痛みは無い。不思議と少し温かかった。けれど、今は目の前で展開されたオカルトっぽい状況を理解するのが精一杯で、まともな思考なんかをすることはできてない。

「いや、いきなりかよ！俺はここがどこかも知らないんだが。せめて簡単な説明をしてくれ」

なんとか意識を絞りだし、最後の抵抗とばかりに説明を促す。無論、通るとは思ってない、案の定、事態は進む。よく判らないまま、理不尽を越えて無茶を要求する。

「悪いけど、僕にも余裕がないんだ。このまま君を飛ばす。知りたいことは向こうで聞いてほしい。準備はいいね」

「いいもなにも、はあ、まあやってくれ。もう諦めた……ああそうだ、あんたとあの子の名前は？そのくらいは教えてくれ」

呆れながらも、それぐらいならいいだろうと聞く。けれど、その返答に度肝を抜かれることになるとは思いもしていなかった。

「・・・僕はノヴァ、そして、あの子の名は――――」

「・・・・え？」

その言葉で理解した。ああ、どこかでこの二人を見たことあると思ったら、そういうことか。サモンナイト。しかもエクステーゼってマイナーだなぁ。どこのテンプレだよ。これ。せめてもっとメジ

ャーな方がよかった。勿論命の危険がない感じの所が、なんで俺はここに居るんだろう。そんなことを思いつつ光に包まれた。これからどうなるんだろう俺、と明らかな非現実の前に項垂れた。

……いつからかは判らない。気が付くと、目に映るのは星っぽいもの、３６０度、星ばっかり。宇宙とかそんな感じだろうか？ほんとうにきれいだった。なぜか息はできる。だったらプラネタリウムとかそんなのだろうか？だけど、プラネタリウムって体が浮いたりしたっけ？と絶賛無重力体験をしている俺は疑問に思った。意味のない事だが、何が起こったんだろうな。

そんな中で、異彩を放つものが二つあった。なにせ、こちらに背を向けて、子供っぽいのが、２人ほどいるのだ。二人とも同じ服装で、色だけ違う。片方が薄い赤、そしてもう片方が薄い青。どちらも何かをしている風には見えず、その背中が寂しそうに見えたからだろうか。なんとなく、本当になんとなく話してみようと思った。けれど、ヤケクソ気味なこの時の自分は、きっと色々一杯一杯だったのだろう。からかう気満々で近寄っていった。

「何をしているのかは知らないが、人と話すときは相手の目を見て話せって、誰かから教わらなかったか？」

２人が驚いた顔で振り向いたのが、なんとなく判った。

『あなたは、誰？』

「…俺は、俺だ。それ以上でも以下でもない」

とりあえず、適当に返す。というか、お前らこそ誰だよ。

『あなたは、何？』

「…見たとおりのものだが、それ以外ありえないしな」

再び適当に返す。というかどう答えろと？それにここどこだよ。

『『……』』

会話が止まる、話がかみ合わないというか、俺がきちんと相手をしていないだけだが……

さすがに初対面でふざけすぎたか……けど、こんな状況、誰が予想できるんだか。少しくらいはっちゃけてもいいと思うんだが。

何をどう思ったのか、一度お互いを見て再びこちらに顔を向ける。その顔には何かほんの少しだけ小さな想いがこもっている気がした。

『『……私を見つけて……あなたが私の……』』

その言葉と同時にあたりが真っ白に染まる。まるで、元からここには何もなかったかのように。けれど、一言だけ言いたい。どうでもいいが本当に一つだけ。

「最後まできちんと言えよ」

こういうのは、半端にされると確実に困るんだが、そう切に思っ

た。そういうのに限って何か重要なことだったりするのだ。そう思いながらも、きちんと対応すればよかったと、考えても仕方ない事を思いながら意識を手放した、もしくは夢から覚めたが正しいのだろうか？まだ、その答えは出ない。

顔に何か冷たいものが当たり、意識が次第に覚醒する。目を開けて周りを見渡す。岩、岩、岩……察するにどこかの洞窟らしい。またどこかの牢屋か物置なんて事は無いらしい。さっきのは夢だったのかなんて思ったが、そんな都合のいいことなどある訳も無く、手元にはさっきまでつかんでた剣が。

……刺さらなくてよかったと思う。いや、本当。それだけで今までの苦しみは無駄じゃなかったと思ったくらいだ。知らない間に血まみれとか嫌だし、正直勘弁願いたい。

しばらくして、直前にあったことを思い出す。ああ、此処ってもしかして最初の所か。となんとなく理解する。もしそうならここは間違いなく、サモンナイト、それもエクステーゼの世界という事になる。肌に触れる岩の冷たさを感じながら横になっている体で寝返りを打つ。

なんでこうなったんだっけか？

思い出してすぐに考えるのは、なぜここにいるか。なにせ、異世界、それもゲームのだ。普通におかしい。どうやら、あの時の俺はそうとう冷静さを失っていたらしい。当然の事だが、実際あんなや

ばい場面で人助けをするか、今までの自分ではありえない。普通に見放す。俺は普通の現代人、高校生なのだ。揉め事に首を突っ込むことはない、今までそうだったのだ。急に変わるはずがない。やっぱり、混乱してたんだなあ、と思い至る。しかも、そのせいでさらなる面倒事になってるのだ。

「何の前兆も無くとか、正直リアルすぎて怖いものがあるな。呪われでもしたのか俺？」

どこぞの二次小説みたいなことになってる。テンプレなら神様来るんだけどな。としばらく前に読んだ小説を思い出す。ただ、俺は正義の味方でも、スーパーマンでも、魔法使いでもない。そこらにいるモブキャラだ。エキストラで起用されても、主役に抜擢なんかされるはずはない。なのに、今いる状況は、主人公の位置だ。ありえない。投げ出してもいいのだろう？と自棄に走りそうになる。ネタに走る限りいらんところで余裕は残っているらしい。

どこぞの誰かが言っていた、余裕と言うのはある物じゃ無い、作るものだと！……だからなんだと言いたいんだ俺は、やっぱ疲れてるんだよ、きっと。

まあなんであれ、ひとつ良かったのはこのゲーム、クリア済みなのだということ。サモンナイトは、自分で買ったり、友人から借りてやったりしているのだ。ネットでもみたし、どこでなにがどうというのは知っているのだ。まあ、最近までやってたから、あの短い時間で気付いたのだが。元々知らないものと比べれば雲泥の差がある。

「なんにしても、お先真っ暗な事実は変わらないんだけどな。どうするかな」

さっきの夢は全くわからんが、とりあえず無視しておく。考えても仕方ない、あんな場所は知らないし、あんなキャラはいない筈である。今はとりあえず、気にしても意味がない。これ以上余計な事が増えても対処できないし。

「結局よかったのかどうなのか。判断に困るな。せめて助けてくれる奴でもいればいいんだが……」

まあ、先がわかるのは今の俺の唯一の特権かなと思う。と言うかそれしかないが……これって特権か？

けどまあ、その知識のおかげで、時間をかけずに現状が理解できたのだから、もしやってなかったらと思うとぞっとする。死ぬからな、マジで。ゲームだからやり直せばいいんだしっていうのは、今の俺には酷な現実に映るけどな。何せ、やり直しとか効かんしな。多分、リセットとかあるんだろうか？どこかで嵌って無限ループとか怖くない？

辛いな。やっぱり考えれば考えるほど、現状がやばいと思わざるをえない。リアルだからゲームバランスとかないだろうし、最初からラスダンの雑魚とか居ても、文句も言えないしな。いや、流石にない……よな？

「……って、ちょっとまてよ、なんかおかしくないか？これ」

今思ったが、元々の主人公はどこにいった？その位置に俺が入っているのは渋々と言うか、なんとなくだが分かった。ならそいつは？いないのか、どこかであうのか？……なんにせよ頭の片隅にとどめておく。情報は大切なんだ。あと、これがサモンナイトだと言う

のなら、俺は誰かに呼ばれたことになる。俺を呼んだのはだれだ？

ノヴァ…ないだろう。あれは、本当に驚いていたように見えたし、もう一人の女の子は気絶。出会ったのはその二人だけ、召喚者は基本的に近くにいるはず、無論例外もあるが、どこぞの門とか。なんであれ、それがいないとなると……まてよ、ここはサモンナイトでも少し、いやかなり特殊な世界観だったよな。結局共通設定っぽいけど。

「確かここは……色々本筋とは違うんだよな、確か」

そういや、ここは、召喚に名前を掘られた石を組み合わせて誓約するんだっけか。そんなものに俺の名があるとは思えない。会っても困るが。……ということは、今回の俺の事は召喚じゃない、他の方法ということになる。この世界から考えられることはつまり……

「……まあ、ここから出てそれから考えるか。あれ……なんか頭がって、おい！なんだこれ！」

思考を打ち切り、体を起こすと頭に違和感、具体的にいうと重い。ついでにサラサラしたなにかが手に触れる。目を向けると、黒い髪が見える。手で辿っていくと、自分の頭に続いてる。長い、髪が伸びてる、前は、普通に短髪だったのだが。伸びた？この短期間で？どんな異常だよ！最後には禿げろとでも言うのか？それは酷だろう。

「なんでだよ、少なくともさっきの所まで普通だったはずなんだが、育毛剤とか？嫌がらせにしか聞こえない」

最近切ったから、これは異常である。しばらく、髪をいじりながら理由を考える、今の髪は肩まで伸びている。どう考えてもいやな

可能性ばかり思いつくが、とりあえず違和感もないし、大丈夫だと思っておく。自分の変化に結構時間を忘れて驚いていたが、しばらくして自分の置かれている状況に気が付いた。曰く現実逃避終了の合図。

本来なら、暗闇から始まるはずなんだが……そして、そこで、導き手だっけか？……ファイファーとかなんとか言う燃えるライオンだが……しかも喋る、後初見だと結構怖い、と出会い驚いた主人公が、部屋の隙間から洞窟に落ちるんだが……これ、明らかに、洞窟にワープしてるよな。ノヴァ、あいつ、あとでボコる。って洞窟ってことは……不味くないか？

そしてそういう予感は得てして当たるものだと思い知る事となる。モンスターの襲撃と言う形で。

「やっぱ、そうくるよな……こんな時に来るなよ、本当にさ。っていうか今すぐ帰ってくれ」

『『『『『『『『『ぎゃるあああああ』』』』』』』』』

「って、おいおいおいおい！！洒落にならんぞ、これ！何のジョークだよ！ドッキリか！」

失念してた。洞窟入って最初はいきなりバトルからだった。それを忘れて考え事に没頭するとは、迂闊すぎるぞ。とっとと逃げりゃよかった。あわてて手元の剣を構える。目の前にはスライムっぽいのが２９匹・・・多いわ！！３０でないだけ喜ぶべきか？難易度どうなってんだ。〇〇マストダイとかじゃねえだろうなこれ。どうしろと？

「・・・しゃあない。やらなきゃやられるんだ。こんな所で終われるかよ！！」

覚悟を決める。命を奪うとか、傷つけるとかは、頭から追い出す。じゃないと、俺が終わる。それに触手を既に切っている。あの気持ち悪さがまだ手に染みついているような気がした。

そう言えば、あの液体はどうなったんだろう？そんな事を考えた。体に染みこんでたような気がするし……怖いのでそれ以上の思考を止める。悪夢だ。

「・・・罪悪感とか、そんなこと言えんよなあ。皆、自分が一番大事だし、な！！」

自分本位の考えであるのは、百も承知だが、そうでも思わないとやってられない。思ったよりもずっと軽い剣を振り回しつつ思った。刃は軽々とスライムの肉に食い込んで二つに裂く。切ってははなれ、切っては離れのヒットアンドウェイを行う。一匹、二匹、三匹と切り捨てていく……本当にこれが自分なのか不思議に思った。普通こんな状況で剣なんか扱えるはずがない。

できるだけ群れには近づかない。一匹づつ狩っていく。素人なんだから、数に勝てるわけない、と正面からの戦闘は当然捨てる。ただし、自分の体力はできるだけ温存したい。これで終わりじゃないのだから。だから、時たま動きを止めて息を整える……命の危機だと言うのに、頭は気持ち落ち着いている。取り乱さずに必要な事を勝手に行っている。ありえない事態が自分を中心に行われている。

「・・・・なんか、減った気がしないんだが」

周りを見渡して、敵を見る。多分減ってない。というか増えてる、恐らく４０匹ぐらいに。ありえない、というか増援ありかよ。と思いながら、近づいてきた一匹を２つに裂く。バックステップ。

なんとなく切ったスライムに目を向ける。たしか、正式名称、ゼリーなんたらだっけか、まあいいや雑魚だし。とか思ってると、ブルブルと激しく動き出す。普通にビビる。見てる前で、２つに裂いたそれがそれぞれ元に戻って数が増える。絶句。

「いやいやいや！！さすがにそれはなくね？！序盤からなんて鬼畜使用だよ、コンチクショウ！！」

それで、数が減るどころか、増えてるわけか。と納得する。最悪だな、今自分の手元には細剣一つしかない。これで戦うしかない。それで増えるとなると、どうしようもない。何かないか、と必死になって周りを見渡す。当然何もない、現実は非常である。今更だなと納得する。逃げるという手もあるが、そのうち挟み撃ちとかくらいそうでやるにやれない。もしそうなったらそれこそである。

「どうするよこれ、いきなり詰んだよオイ。いや、まだだ、まだなんか在る筈、きっと」

意地でもこんな所で終わってたまるか、と起死回生の一手を模索する。とはいっても、周りは岩ばかり。あるのはせいぜいスライムの亡骸ぐらいで・・・いや、待て。ここで初めてその事実に気付く。どうやら動揺して、周りが見えてなかったらしい。こんなことすらも気付かないとは。

「なんで、何匹か死んでんだ？増えるんじゃないのか？」

即座に考える。どうやった、思い返すは自分の行動、こいつらが分裂せずに、且つ復活しないように倒す方法を考える。しばらくして、仮説を一つ立てる。間違えてたら、また考える。よしやれる、よし俺はできる子、と自己暗示かけて仮説を実行に移す。外れていたとしてもまた考えればいい、あきらめるには早い。まだ、やれることがある。まだ動けるのだ。なんだってやれる。

「とりあえず、群れから離れてるお前から、試してやる！行くぞ！！」

剣をスライムに向けて走らせる。何度も何度も剣を振っていくうちに、余分な力が抜けて自己流ながらも、それなりに見えるようになってきた体捌きで剣を振り下ろす。スライムの体に食い込み、なんなく切断していく。だが、真っ二つにせずに途中で止める。バックステップ。

しばらく様子を見る、当然、他のスライムから逃げながら。しばらく見続けるが、何の反応もないことを悟ると、笑いがこみあげてくる。助かる、少なくとも、この戦闘は勝てる。その可能性が大きくなっているのを確信した。

「思った通り、２つに割ったりしなきゃ、ダメージで死ぬってわけだ。突きとか、半端な斬撃で潰したのが、動かねえからもしやとは思ったが、大当たりでよかったよ。これで、何とかなる。してみせる。」

ここから怒涛の反撃、切って、切っての雨あられ、ノリで、ローキック、普通に蹴り飛ばせた。軟体だからダメージは期待できないが、距離を話すことはできる。体が酸とかでなくて本当に良かったと蹴った後、切に思った。

ますます勢いづいて殴って蹴って切って見る見るうちに数を減らす。だが、あと１０匹ぐらいになったときに勢いが止まる。このゲーム、実際は主人公は二人、男女ペアである。当然どちらかでないと倒せない敵がいるのだ。

男なら青い敵、女なら赤い敵に攻撃といった具合に、男が赤色の敵、女が青色の敵を倒すことはできない。目の前の敵は、全員、赤である。今度こそ詰んだ。中の人、もといもう一人の主人公が目覚めないと無理なんだが、目覚めないのか何の反応もない……というか忘れてた。

「まあ、逃げるにせよなんにせよ、もう少しがんばってみるか！」

なんとなくここまでやると、逃げは取りたくないなあと思う。その考えは本来の青年のものとは異なる。けれど今はその事実に気付かない。

とりあえず全力で切りかかる、金属音と共に弾かれる。やっぱ無理か、としびれる手を振りながら、とりあえず、性別が倒す条件というのは、外す。もしそうならどうしようもない。

なら攻撃の方法になる訳だが、斬撃はダメ、なら蹴り飛ばす。下段回し蹴り、弾きとばせた。けど効いてない。剣はダメ、体術もダメ。とりあえず、もう一人の主人公の攻撃を思い出し、考える。連撃、横切り主体、一撃は弱い、攻撃速度は速い。となると・・・

「行き当たりばったばかりだが、しゃあないよな。やってみるか」

剣を横に向けて、横切りの体制になる。走り出して横に切り裂く、

この時、威力ではなく、速さを意識する。何かを裂くような感触と共にスライムの体に届く。休むことなく2度3度と切り払い止めを刺す。要するに、青は縦ぎりで威力重視、赤は横切りで速さ重視ならいけるということになる。面の攻撃か、点の攻撃か、ということだろうか。つまり、結果論だが、俺一人で、何とかなりそうだということである。残りも潰しにかかって後2匹。

「よし、これならいけ・・・ん？なんだこれ。体が動かねえ、ぞ」

体の自由が突然にして、効かなくなる。この状況でこれは不味い。何気に大ピンチである。そして思い出す。この体には今、自分以外の意識が存在しているのだと。その間にも、スライムが距離を詰めてくる。だが、その動きは遅い、先ほどまでの戦闘でさすがに疲れたのか、それともこちらを警戒しているのか。どちらにせよ今は都合がいい。

……やべえ、中の人が起きたか。どうする？どうすればいい？考えろ！このままだと終わる！俺が色々丸ごと全て！そんなのは断固拒否してやる！

もう一人の主人公、さっきの女の子だが、が目を覚ましたらしい。が、体のコントロールをやる気はさらさらない。ゲームのように、自由に交替できるとは限らないのだ。もしかすると、そのまま消える可能性もあるのだ。後先考えず、渾身の力で体を動かす。なんとか動く。その間にせめて残りの敵をつぶす。とりあえず動けなくなったらまずいしな。できることなら交替はしたくないのだ。

「後少しだから、静かにしてろっての！このじゃじゃ馬」

つい言ってしまった、その言葉を合図に、体の自由が戻る。その

瞬間を逃さず、残り二匹を即座に突きさす。周りを見渡し、何もいないことを確認すると、大きくため息をついて力を抜く。何とかなったと本気で安心した。

次の瞬間、再び、体の自由が利かなくなる。完全に不意打ちだったため、なす術もなく、意識を引きずり降ろされる。例えるなら舞台から観客席に引きずり降ろされるようなもんである。危険なことこの上ないイメージしか湧かない。どこか見覚えのある女性が、すれ違いざまにアッカンベーをしてたような気がした……少しいらっとした。

「あーー。やっと出られたぁ。・・・であいつはなんなのよ！初対面の女の子に向かって、じゃじゃ馬だなんて失礼だと思うんだけど。あー腹立つぅ。」

光と共に青年の体が、少女に代わる。青年からすれば、間違いなく本音であろうそれを聞いて、ひどく少女はお気に召さなかったらしい。少々機嫌の悪そうなセリフと共に先ほどの戦闘を思い出す。何はともあれ、あれだけの戦闘を行ったのだ。体力的にもきついだろう。ここからは選手交代である。

「・・・まあいいわ。後は私が頑張るから！君は少し休んでなさい」

言うと少女、エイナは細剣を握りしめ、この洞窟から出るために、目の前を見据え、走り出した。

準備不足すぎる介入（後書き）

一話にしては、あまり進んでいません。主要キャラも最低限、主人公の名前すら出てません。次ももう少し洞窟が続く予定です。後、赤と青のモンスターですが、青は一定のダメージを一撃で、赤はコンボを決めると倒せるといった感じです。オリ主人公は。エイナ？無理ですよ。赤しか倒せませんよ。

難易度が別次元に突入（前書き）

２話出来上がりました。ようやく洞窟から出れます。さあここからがいろいろ大変になります。編集しました。

難易度が別次元に突入

洞窟の中を風が吹き抜け、外へと押し出すように吹き出す。その風の中、靡く髪をかき上げ前を見据える。

「さぁて、ちゃっちゃと行きますか」

軽い声でそういうと、エイナは細剣を握り直し、広間の外に出る。走っている間に、青年のことを思い出す。最初こそ３０近い数のモンスターに襲われていたが、分裂されたりしたせいで最終的に５０近い数を倒すことになっていたのだ。今は、自身の中で浅い眠りについているのだが、その疲労も無理はない。

最後の所で、自身も手伝おうと表に出ようとしたのだが、じゃじゃ馬と言う暴言と共に、奥へと押し戻されたのだ。戦闘終了と共に、勢いで表に無理やり出てきたが。よく考えてみれば戦闘の最中に、動きが止まるのもまずいし、お互い面識がなかったのだ。抵抗するのも無理はない、今思えば邪魔だったのかな、と少し思う。実際、本人が聞くと「いや、判ってるんなら出てくるなよ」と、突っ込んだだろう。ひどく呆れた声で。

「ま、まあ、実際一人で頑張ったんだから、ここからは私が引き受けるわ」

自分の中の青年に語りかけるように言う。本人は眠っているので、聞いてなかったりするが。

それはそれとして、正直判らない事だらけである。目が覚めてみ

ると、見知らぬ青年が一人、モンスター相手に戦っているのだ。しかも、自分の体の自由がきかない、というより青年が使っているので動くわけはないのだが。

「それに、ここはどこなのかもわからないし」

それに、一番の問題は、ここに来る前の記憶が一切無いことである。自身が何者で、何をしていたのか、ほんの少しも思い出せない。気付くと同時に、とてつもない不安が押し寄せる。何もわからない恐怖、どうすればいいのかも判らず、ともすれば膝をつきそうになる。

「なんで……こんなことになってるのかな。判んないよ」

思わず声に出る。けれどここでじっとしていても仕方がない。震える体を抑え込み、再び歩き出す。この洞窟の外に答えがあるのだと信じて。そうでなければ膝をついて泣いてしまいそうだから、無理にでも強がる。今は前へ進むのが答えにつながると信じて。

「さて、外に出てみたけど、何よこれ。崖じゃない」

目の前にそびえるように、切り立った崖が道をふさいでいる。周りを見渡すも他に通路はない。崖の上はどうなっているかはわからないが、登る以外に道はないらしい。幸いにも、足場になるように崖が階段のように切り立っているので、順々に飛んでいけばいずれは上に行けるだろう。ただ、モンスターもいるだろうし、登っている最中は隙が多いし、突き落とされたりすれば、唯では済まないだろう。

「とはいっても、行くしかない、か。全く、判んないことばっかり

で、おまけに崖だなんて、ふざけてるとしか思えないわね。いいわよ、上りきってやるわよ！」

宣言するように言うと早速崖のぼりに入る。手ごろな足場に乗り、今の足場より高い岩場を見つけて、飛び移る。それを繰り返して、少しずつ上に登っていく。何度かくり返していくうちに、かなりの高さになったのだろう。下を見ると、先ほどいた場所が見える。けっこう上ったな、と思いながら、再び飛び移る。少しするとようやく上が見える位置になり、結構広くなっていることがわかる。

「はあ、けっこう疲れたわね。でも、まだまだ先は長い、か。それに・・・敵もいるみたいだしね」

目線の先には、切り立った岩肌が見える。そしてその上にもまだ登れそうだ。そしてその岩場には、モンスターが数匹、獲物を見つけ臨戦態勢に入っている。こちらも剣を構え、念のために崖から離れておく。当然落ちないように、後、逃げ場をなくさないようにするために。

「さて、どっからでもかかってきなさい！」

その声を合図に、モンスターが一斉に襲ってくる。本当なら、少しは恐れるだろうと思うが、最初に青年がこの数倍の数を相手にしているのだ。それと比べると、ずっとましである。……今思うと目が覚めてあの状況はちょっとどうかと思う。自分なら絶対にやりたくない場面である。あれを知っていると素直にそう思う。自分が最初表でなくてよかったと思った。

「私だって、これくらい！はあああ。」

今目の前の状況も幾分気楽に見える。スライムを切り刻む。女性であるため、力は特筆するものではないが、速さにおいては、かなりのものである。そのスピードを生かして、回り込み、手数で畳み掛ける。威力は青年には届かないが、速さと手数では青年のそれに並ぶ。

「次っ！」

実際の所、エイナのスピードは相当なもので、数の不利を覆すには十分である。だが、何ごとにも例外と言うものはある。

「あれっ？うそ！」

青いスライムに自分の攻撃が効かないのだ。青年の攻撃は通ったのに。もう一度攻撃する。やはり弾かれる。原因は分からないが、仕方なくそれ以外の敵を倒し、残りの青スライムは蹴り飛ばして、崖の下にたたき落とす。

とりあえずここら周辺の全てのモンスターを倒しきったエイナが少し休憩を取っていると、それは突然聞こえた。

『……エイナ』

「えっ？……誰、誰かいるの！」

前触れもなく、唯一覚えていた、それも誰にも名乗ってもいない自分の名を呼ばれたことで、必要以上に警戒をする。いつ戦いになってもいいように神経を集中させ、声の主を探す。もちろん周りにも気を払う。

『……エイナ、こっちだよ』

「あの奥から聞こえる……それに、なんで私の名前を……」

声の聞こえてきた方を見ると、横穴があり、どうやらそこに今の声の主がいるらしい。目を覚ましてから、青年以外の人物と話していない以上、必然的に過去の自分を知る者になる。期待と不安を胸に、声の元に向かう。そこには大きな泉があり、その傍に淡い光を放ちながら佇む、銀髪の少年が自身を真っ直ぐに見つめていた。

「……あなたが、私を呼んだの？」

『そうだよ……僕が君をここに呼んだんだ』

青年は優しく微笑みながらそう言った。つまりこの少年は、エイナという人物を知っているという先程の考えが、間違えではないと確信する。怪しいと判っているものの、なりふり構う余裕は今の自分にはない。

「……そう、なら教えて、私の事を。私はここに来る以前のことを何も覚えていないの……過去の自分が何者で、どんなことをしていたのか」

『……』

こちらの質問聞いた瞬間、険しい顔になり、何かを考えているようなしぐさをする。それは本当に予想外で考えてもいなかったような反応だ、けれど気にせず、聞き続ける。

「私はどうして、こんな所で気を失っていたの？私の中にいる彼は

いったい誰！」

『・・・そうか、君は全て忘れてしまったんだね。それでもかまわない、無事でいてくれるのなら』

少しさびしそうにそういうと、それでも優しさをたたえた笑みは変わらない。その笑顔を見ていると、尚更気になってしまう。私は本来どんな人物で何をしていたのか。今は何もわからないのだから。

「……ええ、私は自分の名前以外何も覚えていない。だから、以前の私を知っているのなら、答えて！」

『……教えることはできない。答えが知りたいなら、自身の手で掴み取る。それがこの世界の理だから。知りたいかい？君が知っていたはずのことを、僕が知っているはずのことを』

「知りたいに決まってるじゃない！」

強い口調で肯定する。少年はその言葉に一つ頷くと語りだす。

『……僕の名はノヴァ。僕の元までたどり着けたのなら、全て教えてあげよう。彼と共に上ってくるといい、君たちならできる筈だから。この上で待っているよ』

その言葉を聞いて、もう一度聞き直す、せめてこれぐらいは知っておきたい。

「……彼は何者？」

『……君を助けるために体を張って行動した勇敢な青年さ。そして、

君が共存している体の持ち主でもある』

「共存……どうしてそんな事に」

予想もしていない言葉に、驚きが隠せない。確かに彼と自分が別人だというのなら、勿論それぞれ体があるということになる、だが、同じ体にいるということは、現状どちらかが自分の体を失っている、もしくは似たような状況になっているということである。それが自分だと知って、頭が真っ白になる。

『そのことについては彼に聞いてみるといい、もし彼が記憶を失っていないなら、覚えているはずだから……それじゃあね、エイナ。また会おう』

そういうと、ノヴァは青い光に包まれ姿を消した。後には、深い静寂だけが残された。思わぬ事実に思考が止まる。ノヴァとの会話を思い出し、より深い不安に襲われる。体は動かない。その隙を狙ったのか、それともただの偶然なのか、突然、周りに大量の敵が現れる。それは先ほど蹴り落とした青スライムたちである。

『ギャリャアアア！！』

「……嘘、そんな、事」

だが、自分の考えに没頭しているエイナは気付けない。それはモンスターからすれば絶好の隙、その間にモンスターがエイナに一斉に襲いかかる。

『ギャシャアアア！！』

「えっ？……きゃあああああ！！」

寸前で気付き、咄嗟に剣で防いだものの、衝撃で弾き飛ばされる。吹き飛ばされ、体を壁に打ち付ける。思った以上に先ほどの話とここまでの移動で、心身共に参っているらしい。そのまま、ずるずると壁に体を預けるように倒れる。疲れからなのか。思考もネガティブになっていく。

「あれ？……体に力が入んないや。どうして？行かなきゃダメなのに、知らなきゃいけないのに……お願いだから、起きてよ。私は、こんなとこで終われないのに」

言い聞かせるように呟くが、どうしても体に力が入らない。どうやら、打ちどころも悪かったらしい。体がうまく動かせない。震える手で剣をモンスターに向ける。威嚇にもならないと判っている。けれども、こんな所で終われない。そんな気持ちが最後の力になっている。そんなエイナを嘲笑うように、モンスターが飛びかかってくる。体は……やはり動かない。

『ガアアアアアア！！』

「……にも、まだなんにも判ってないのに、こんな所で終われないよ……誰か、助けてよ」

不安と恐怖が限界を超え、諦めと弱音が出てくる。今自分は一人、周りは敵ばかりで助けはない。目をつむり、体から力が抜ける。生きる気力を失くしたかのように、地面に剣が落ちる音が響く。その瞳にはうっすらと涙が、最後に、ノヴァの言葉が頭に浮かび上がってくる。

ーーーー君を助けるために行動した勇敢な青年さ

助けて！

頬に涙が流れる。自分の事をじゃじゃ馬と呼んだ青年を思い浮かべる。次の瞬間、後ろにひかれるような感覚と共に、自身が今望んだ人物の背中が見えた。驚きと共に、無意識ではあるが、その口元には小さな、自分でも気づかないような、小さな笑みが浮かんでいた。その背がなぜかとても大きく見えた。

「おっらあああああ。」

光と共にエイナと入れ替わる。気合一閃。全力で蹴りを放ち、襲いかかってくるモンスターを蹴り飛ばす。ここに居るのは全て青スライムならさっきと同じ、いや、数が少ない以上ずっと楽だろう。

「おいおいおい。人が目を覚ましたら、絶対絶命とか。やめてくれ、マジで。ああくそ、起きてすぐだから、なんかテンションがおかしいなったく！」

悪態をつかずにはいられない。なんせ、寝起きで行動しているのだ。気分が悪いのは当然である。しかも、なんか自分でやるとか言ってた本人が、死にかけていたのだ。弱音はいて諦めて、絶望しきっているのだ。嫌な感じで目が覚めるのも当然である。それに、さすがに今回は俺も少し腹が立っているのだ。本気で。

「……さぁて、何はともあれ。お前ら、一匹も逃がさねえから覚悟しとけ、流石に今の俺は虫の居所が悪い」

言うと同時に、走り出し、地面に落ちていた剣を拾い、一気に敵

に突っ込む。それは、初戦と比べると明らかに速い。それは、先程のエイナのスピードすら超える。だが今は気に留めない。躊躇無く切り払い貫く。後ろから来る敵には、振り向きざまに拳を叩き込み、即座に剣で額を貫く。以前のように、ヒットアンドアウェイはしていない。完全に攻めの体制になっている。無論理由もある。

第一に、初戦で数十匹の敵を一人で倒したのだ。その経験値は破格である。

（無論、金もきちんと回収している）その戦闘経験とレベルアップした身体能力によって真っ向から挑んでも十分に打ち勝てる強さになっていること。

第二に、寝起きでテンションが変になっている事。起き抜けに、自分の体大ピンチ、焦って表に出てくる。目の前にモンスターの顔ドアップ、反射的に全力キック。ドッキリの連続で、心臓バクバク、テンションギガギガである。故に、倍返しのつもりで、手加減なしで攻める。無論八つ当たりである。

第三に、エイナが泣いていた事。女性が泣いているというのは、基本嫌なのだ。面倒事は御免である。さっさと泣き止んで欲しいものである。詳しくは知らないが、恐らくこいつらが脅かしたんだろう、と適当に当たりをつけ殲滅に入っている。要は現実逃避も入っていたりする。泣いている理由は全く知らない。今思ったこと以外見当もつかない。ノヴァとはもう会ったのだろうが、あれでへこんだりはしていないはずなので、除外。俺が原因、あり得ない。結論うんわからん。やっぱお前らが原因だろ。無意識の責任転嫁である。

「いくぜ。死にたくなかったら逃げてもいいんだぜっと、逃がす気は、全くないけどな」

言いながら一体切り裂く。更に一歩踏み込み、続けざまにもう一匹切り落とす。速度を落とさず走り続ける。

「遅いんだよ！」

横から襲いかかってくるスライム数匹に、蹴りを入れその反動で飛び上がり、包囲から出る。

「隙ありってな！」

空中で手ごろなやつに斬撃を加える。跳びかかってくるスライムをカウンターで貫き、刺したまま、横に振りきり、更に二匹横切りにする。

「お前で最後だ！」

最後の一匹に突っ込み斜めに切り裂く。断末魔を残し、絶命する。残ったクリスタル（経験値）と金を回収し、一息つく。しばらくすると、頭が冷えてきたのか、さっきの行動に頭を悩ませる。何をやっているんだか、正直一つ間違えば大けがである。熱くなり過ぎた、ため息が出る。一通りへこんだ後、再び、上を目指すことにする。開き直っただけだが。まあ、交替は自由だというのが判って良かったが。あれで体から消え失せました、とかはやめてほしい。切に思った。

「さて、いくか！っと、ああそうだ」

一歩を踏み出した所で、思い出したように足を止める。そして、放っておくわけにもいかないので幾分柔らかい調子で自分の中にいるエイナに語りかける。

「泣くのも、弱音を吐くのも別に構わないけど、溜め込むのはやめた方がいいぞ。疲れるだけだから。どうせなら楽しいことでも考えることだな。そっちの方がいいだろ」

一応、気休めにでもなればと思い、言っておく。泣いている理由は依然わからないが、どうとでも取れる言葉を言えば気休めにはなるだろうという打算である。心配しているのは本当だが。

「しばらく休んでろ、後は、俺がやっとくから」

そういって前を見据える。今のエイナに任せると、碌なことにならないと判っているので、出てこないように言っておく。さっきみたいに戦闘中に止められるのは勘弁してほしい。

「さて、と。今度こそ行くか」

聞こえたのかどうかは知らないが気にしない。そして、再び上に行くために、歩き出す。とりあえず今いるところのモンスターを駆除しておく。明らかに難易度がおかしいのだが、気にしていても仕方がない。今いる泉のある所から出る。その際宝箱を発見して、何気に、ミミックとかを警戒したのは、しょうもないことである。そして、中を確認すると、ポーション薄味×3だったりした。

「薄味って、要は手抜きだよな、これ。普通にポーションにすればいいのに、パチモンくせえな」

アイテムを回収した後表を見る。案の定モンスターがいる。12体くらいだろうか。（ちなみに、エイナが戦ったところである。数もモンスターの種類も同じ。）ゲームと比べるとおかしいくらいの

戦力である。いちいち正面からやっていても、体力を使うだけである。となると、やることは一つ。

「よし、不意打ち上等、一気に行くぜ」

思いついたことは、奇襲。自分に気が付いていない奴のそばにより、急所に一撃、急所は適当にそれっぽい所を狙う。目的はできる限り、体力を使わない事。岩登り、もとい崖登りが待っているのだ。こんなことに体力は裂きたくない。

「だったら、あそこから行くか」

泉の所まで戻り、さらに奥まで行く。するとさらに上に昇れる所がある。そこに上がり、道なりに行く。すると先ほど様子を見ていた所の上側に出る。宝箱があるのでそれも回収しておく。ここからなら、先手が取れるだろう。ずるい？卑怯？生きていたいならできることは全部やれである。別に罪に問われるわけでもないのだし。

「知ってることは何でも生かさないとな、単純な話、サバイバルと一緒だしな。こんなの」

ゲームでのマップを覚えていたので、それを生かしたのである。少なくともここからなら、不意打ちで何体か減らせれるだろう。決めたらすぐに行動に移す。気付かれでもしたら全てが無駄になる。

「おし、行くか。まずは近い所にいる、あのスライムから、だな。よっと」

飛び降りて、スライムを断ち切る。そのまま、周辺の数体も連続で切り捨てる。敵が体勢を整える前に一気に攻める。これで半数ほ

どを削ることができた。あとは、壁に誘き寄せ、跳びかかって来たのを避け、残りの敵を壁際にまとめる。そして、その上、岩を切るために跳ぶ。問題もなく切り落とし、敵をつぶすように岩を落とす。周囲の確認、先ほどの落石の影響がないか、伏兵がいないか調べる。

「……どっちも問題ない、か。今の落石で他のモンスターとか来るだろうし、少し急いでいくか」

実際、今の音に反応してモンスターが集まってくるのは間違いない。故に何も来ていない今の間に、少しでも上に近づいておく必要がある。記憶にあるマップを頼りに、上る。無論全部をきれいに覚えているわけではない、だが、それを抜きにしてみてもおかしい。

俺が知ってるマップよりもだいぶデカい、マップそのものも知らないところが、多い。知らない道もあった。どうなってるんだかな。

上っている間に気付いたが、自分の知っているマップとだいぶ違っている。というより、引き伸ばして、その間にいろいろ手を加えたようなあっている所もあるが、既に別物と呼んでもいいだろう。ここで確信する。自分の知識の世界とこの世界は似ているだけの未知の世界だと。

自分がいるから、ある程度違うのは当然だが、いくらなんでも、地形まで変わるとは、考えづらい。故に、自分の知識をうのみにするのは危険だということだ。知らない人物や事件も当然あるだろう。どこまで対応できるかわからないが、少なくとも楽はできそうにない。上りながらそう考える。

「のんびりしたいもんだが、今は無理そうだな、と言うよりこんな所で休みたくもないし」

考えても仕方がないので、思考を打ち切る。開けた空間に出る。当然のようにモンスターが待ち受ける。今度は既にばれているから奇襲は無理。なら、どれだけ犠牲を出さずに終わらせるか、になる。当然自力ではこちらが上、なら、数の利点を発揮される前に潰す。剣を振りかぶり、一閃する。続けざまに切り払う。

「押しとおっていくぜ。悪いけど逃げないなら、切り伏せる！」

自分もだいぶ染まって来たなあ。と、げんなりしながら剣をふるう。何せこんな状況なのだ。思うままに生きた方が、色々ましである。考えるのもいいが、とりあえず、なにもわからないまま悩んでもドツボにはまるだけである。まあ、自分は全部知っているわけであるが。・・・ただ、自分がここに居るのは本当に見当がつかないが。

「……よし、終わりっと。考え事しながらでも戦えるとか、どこの達人だよ、俺は」

ここで戦い始めてから軽く一般人を超えてきたなあ、と思う。まあファンタジーだし、で終わるが。剣をしまいながら思う。これからが大変だ、まだ最初も最初。チュートリアルか、はたまた初心者の館か、どちらにせよ、この洞窟から出てからが、真の冒険の始まりである。

「まあ、とりあえずはでないとな。いい加減この岩場だらけの風景も飽きたし……な。」

走る速度を上げて、出口を目指す。もちろん宝箱はとれるもの全部を回収しながら、そしてその出口の手前にまで来る。その足取り

は、恐れなど一切感じさせない。……ただ、若干目線がずれているが。

「まあ、当然こういう所の出口には、当然ボスとか居るわけだが、流石にこれは無しだろう。」

奥の方から光の差し込んでくる。間違いなく出口だろう。そして、目下、現実逃避の理由が今目の前にいる。門番っぽくボスがいることは、知っている。実際そうだったのだから、一言でいうなら、赤と青の二体のカバである。そう二体のはずなのだが……

「なんで、12体もいるんだ？おかしいだろう。いい加減、疲れてるんだがこっちは。なにか？そんなに俺にくたばれと？……オーケーオーケー、世界が俺の敵か。ふざけんなよ、ドチクショウ！」

なぜかは知らないが、青6体、赤6体の12体いたりする。ここまで徹底して難易度が跳ね上がっていると、本当に愚痴の一つも出てくる。まあそうも言ってられない訳だが……

「はあ、仕方ない。やれるだけやってみるか。やってだめなら、逃げるまで。いくぜ！！」

勇ましく逃げ腰なこと言いながら、カバの群れに突っ込む。ここが広いとはいえ、12体も動いていると、すぐに逃げ場もなくなるし、相手の方が図体も3倍以上あるのだ。潰されたら終わる。

「とにかく数を減らす手を考えないと、足もとめれんし、どうするか、なっと！！」

そう、潰されないように、常に動き続ける必要がある。足を止め

れば巨体でもって、一気に押しつぶされるだろう。そうならないように、近すぎず、一か所にとどまらず、最適な位置と距離を取り続けることが大切である。すれ違いざま足をつぶそうと切り払う。だが、分厚い肉がそれを阻む。図体が多きい分、生命力もそれに見合うだけある。

しかも、途中まで忘れていたが、こいつらは毒霧を吐くのだ。それをかいくぐりながら、何度も何度も繰り返しようやく足をつぶす。そして、後は囲まれるまで切り刻む。それの繰り返しである。作業ゲーとはよく言ったものだ。現実だが、リアルだが。

「はあ、はあ、さすがにきついな。これ、は。息つく暇もない、なっ！」

そう言いながら、剣を振り下ろす。今までのダメージと今の一撃でようやく絶命したらしい。そんなやり方で、半分を倒すことに成功する。既に体は返り血と自分の血で、ぼろぼろになっている。だが、休む暇はない。後半数のモンスターが此方に向かって来るのだ。剣を持ってないほうの手を懐に突っ込む。そこから、回収したポーション薄味を取出し、一気に飲み干す。体が軽くなり、疲れも幾分とれたことを確認すると前を見据える。思うことはただ一つ。

よかったぁ、これ、消費期限とかあったらどうしようかと思ったぞ。それにしたって、衛生上決していいとは言えない洞窟の宝箱の中、常温で保存されてたんだからな。腹壊したり、変な病気発症したらどうしようかと思ったぞ。……味がどこぞの飲むヨーグルトなんだが、そう言うのは気にしないようにしとこう。

……何気に必死だったりする。その回復もあってか、更に3体倒し、後2体も壁際で落石を当てて、押しつぶした。残りは一体。さ

すがにボスが分裂とかないよなとか思いながらも、内心気が気でなかったのだが、さすがにないらしい。敵のチートほど腹立つものもそうない、と思う。クリア不可能のゲームのどこが面白いのか。どこのマゾだ。少なくとも俺は違う。

「さてと、さすがにつかれたな。いい加減終わりにするぞ。カバ野郎。いい加減外に出たいんだよ。俺は」

そういうと一気に肉薄し、その首を跳ね飛ばす。1対1ならこんな芸当も可能。

「ん？……この石は……」

倒したモンスターの傍に石が落ちているのを見つける。それは常夜の石と呼ばれる見えざる者を見えるようにする特殊な石である。落とさないように懐に入れると、出口に顔を向ける。しばらくじっと何かを考えていると。

「エイナ、悪いけど後、頼んだ。外に出るくらいだから大丈夫だろう」

その一言を残し何を思ったか、その体が光に包まれ、エイナと入れ替わる。

「え？・・・ええっ？いきなりどうしたの？」

問うが当然返事はない。しかし、塞ぎ込んでいた自分の代わりにずっとがんばってくれたのだ。代わってすぐの時には自分の事で本気で怒ってくれていたのだ。それを考えるとここから位引受けようと出口へと足を進める。そして・・・

「外、か。……あ、これって……」

言葉をなくす。その眼には、とてつもなく広く、光射す世界が広がっていた。全てが輝いて見えた。言葉で表現するのが無粋と言わんばかりの絶景。どこまでも広がっているかのような錯覚を起こしそうになる。優しく吹き付ける風、青々と茂る緑、息づく命、どれも本当に大切に思えた。実際、今のエイナが初めて心動かされた景色なのは本当の事である。

「…すごい。綺麗」

しばらく見入っていた。本当に心奪われた、その一言に尽きる。自分の悩みが本当にちっぽけに感じた。沈んでいた気持ちが浮き立つのを感じる。もしかすると、彼はこの景色を見せたかったのかもしれない。と益体もない事を考える。実際当たっているが、彼なりの励ましだったりする。

「うん。悩んでたって仕方ないよね。頑張らないと。」

そういって、エイナはその景色を胸に刻んで、歩き始めた。悩みが解決したわけでも、無くなったわけでもない。けれど、確実に軽くなった気持ちを自覚し、遠回しに励ましてくれた彼に、少しの感謝をしながら……その顔は笑顔だった。

難易度が別次元に突入（後書き）

なんかフラグたってます。そして、当然のごとく、主人公は気付かない。理由も判らず修羅場とかなります。そんな主人公にしたいです。でも名前も出てないという。どんな主人公だ。まあ、次ぐらいで出ます。ここまで、引き伸ばした意味は、特にないです。

新たなる始まりとフラグ（前書き）

やっと冒頭部分が終わった感じです。これ、終わるのか？と少し不安に思ってきました。

ダンジョン一つにどれだけ時間をかけているのやら、自分に呆れます。今回は会話が急に増えてます。こんな感じでいいのか、結構悩んでます。

それはそれとして、このペースの更新は早いのか遅いのかどうなんでしょう？

エイナは基本信用した人にはなんだかんだで結構甘いです。しかも主人公には根っこの所でなついているのであんまり怒りも持続しません。結局許します。これなんてギャルゲー？

新たなる始まりとフラグ

自身を優しくなでる風をその身に受けながら今の現状、そしてこれからの事について考える。

「さて、ここからどうしようか」

エイナは先ほどいた洞窟の出口から外へ移動し、これからの事を考える。ノヴァは上ってこいと言っていた。とりあえず上に行ってみよう。いなければこの山を下りればいいのだ。

「それにしても、ここって山の上の洞窟だったんだ」

そう、ここは山の頂上付近である。てっきり平地かと思っていたのだが、まあおかげで、素晴らしい景色を見ることができたのだが。気持ちを切り替えて、上に登る道を探す。程なくして上への道を見つける。

「さて、なにがでるか、少し緊張するな」

そして、上へと続く階段を上りきり、エイナが目にしたものは。

「また、洞窟、か」

そうそこには、洞窟があった。だが、明かりはついているし、誰かが住んでいるような、そんな気がする。つまり、ここには、人がいるということである。

ここにノヴァが住んでいるのかしら？

真っ先に浮かぶのは、先ほど話したノヴァと名乗った少年である。あの少年がここに住んでいるというのが一番納得がいく。どちらにせよここで止まる選択肢はない。

「よし、それじゃあ、いってみましょうか」

早速、足を向けて、洞窟の中に入る。やはりというか、中は広く、水瓶や食料なんかがある。誰かがここで生活しているのだ。それだけでも、期待する価値はある。

「すいませーん。だれかいませんかー？」

声を上げて反応を待つ。すると。

「……ふむ。客人か、特に村からは何も聞いて無いのだが」

「あ、いえ村とかじゃなくて少し聞きたいことが。あ、私エイナって言います」

「ふむ、エイナか良き名だ、人としての礼儀にのっとり名乗り返そう。我はファイファーという」

奥の2階と言ってもいい場所から、声が聞こえる。明らかに自分が知らない声である。ノヴァではない。予想こそしていたものの、少し落胆した。そして、しばらくすると自分に影がかかり、先ほどの声に人物が、目の前に現れた。現れたのだが……

「先ほどは、すまなかった。少々休みを取っていたのでな。ふむ、

立ち話もなんだ、奥へとあがるといい。そこで用件を聞こう」

「え？あ？？え？……」

「む？どうした、そんなあっけにとられた顔をして？なにかあったか？」

「い、いや、いやあぁぁーーーー！！」

声の主は、落ち着き払い、年月を重ねた威厳のようなものを持っていた。それはいい、そのような人物ならこちらの話もきちんと聞いてくれるだろう。

だが、見た目がそれを帳消しにしている。というかマイナスにぶっちぎっている。なぜなら、この人物？は……ライオンなのだ、上から下まで、余すことなく、ライオンである。獅子である。しかも鬣や尾などは燃え盛る炎のようになっている。それに加え、大きさもこちらの二回りはデカい。そんなものが急に出てきて、冷静に対処できるか？……答えは否である。

「そ、そんな。モンスターのすみかだったなんて」

「む。初対面の者に向かって、何たる暴言、人として失礼であろう！！」

咆哮、その迫力に完全に飲まれたエイナ。

た、食べられる！

反射的に剣に手を伸ばそうとするが、体の自由が利かなくなる。

「え？」

う、嘘！体が動かない！なんで？！

動かない体、それは剣を抜くのを止めているように感じる。しばらく奮闘していたが、やがて焦れたのか、エイナの体が光に包まれる。そこには青年が佇んでいた。

「やれやれ、もう少し冷静になれば判ることもあるんだが、な」

「姿が変わった！そなたは一体何者だ？」

「まあ、こちらも色々と立て込んでてな。詳しいことは、俺にもいまいち判らんよ。まあ、少々あいつが取り乱したから出てきたが、そろそろ落ち着いたか。話はあっちから聞いてくれ」

「……色々と複雑な事情がありそうだな」

「まあな」

そういうと、再び光に包まれ、エイナが表に出てくる。その顔は、まだ少し引きつっていたが青年と獅子の会話を聞いて、話が通じると理解したのだろう、少なくとも敵意は収まっていた。

「え、え～と、いきなり騒いじゃってごめんなさい」

「いや、そう頭を下げなくてもよい。もう気にしてはおらんよ。それで用とはなんだ？」

「！！そうだ。ノヴァを、ノヴァを探してるんです！」

「ノヴァ……だと？」

訝しむファイファーをよそに、エイナは、周囲に目を凝らす。

「出てきなさい、ノヴァ！約束したはずよ。上ってくれば、全て教えると。でてきて、話、を聞か、せな、さい……」

しばらく、周囲を見ていたがいままでの疲れが出てきたのか、体が睡眠を欲している。先ほどまで戦闘ばかりで気を張っていたが、ここが安全なところだと、納得してから急激な睡魔に襲われている。もう意識を保つのも難しい。そのままエイナは、気を失い眠りに落ちる。……ちなみに青年は自分から寝た。

「エイナ！しっかりしろ！」

「……無理もありません。先ほどまで、慣れない体で行動し続けていたのです。ここにきて緊張の糸が切れてしまったのでしょう。」

「！！……おお、そなたは」

「ご無沙汰しております。ファイファー様」

エイナが倒れた後、その傍に、ノヴァが現れる。どうやら会話を聞く限り、ファイファーとは、知り合いらしい。

「このような姿で挨拶すること、どうかお許しください」

「そうか、この者たちをここに送ったのは、そなたか……」

「はい、最悪の事態を避けるべく、やむなく、せめて彼女一人だけでも……」

「ふむ、どうやら、思った以上に込み入った事情があるらしいな。話してみるがよい」

「はい」

その話声は傍の少女には聞こえる事無く、少女は何も知らぬまま……

「……え、ねえってば、起きてよ」

近くから声がする。最近なんか聞いたような、そうでも無いような、その声に意識が覚醒する。

「……どうした、なんかあったか？ってなんだこの服装」

体を起こして自分の確認をする。今の自分はさっきまでとは服装が違っている。上下黒のズボンとシャツ、それに黒のロングコート。真黒である。そして、風景も違っている。傍に家が一軒草原の丘に建っている。傍には泉があり、遠くに塔のようなものがいくつかあり、その先には、ここと同じようになっている。そして、今は夜である。・・・当然自分はここがどこか知っている。

常夜の石の中か。そういえば、こんな感じだったっけ。

常夜の石・・・見えざる者との対話ができるとされる魔石。この魔力により、本来向き合って話のできない自分たちが、こうやって別々に話せているんだろう。そして自分の言葉にエイナが応える。

「そんなの知らないわよ。気が付いたらもうこの状況だったし。私が知りたいぐらいよ」

「……そうか」

大体状況を理解した自分とは違い、何もわからないエイナは不安でいっぱいだろうと予測する。本来ならここで、泣かせることになるのだが・・・まあ、どうなることやら、呆れながら青年は少女に視線を合わす。とりあえず今は会話に集中しようとする。

「多分ノヴァって子の仕業じゃないかなあ」

「（……うん、はずれ）……そうか」

真実を言う気はまだないし、適当に話を合わせておく。そしてあたり触りのない事を言っておく。色々言われるだろうが、今時点でエイナに全て言う気はない。信じるとは思えないし、余計な混乱や疑心暗鬼になるだけだろう。そもそも信用ないし・・・多分。

「ねえ、ノヴァが言ってた貴方が、私の事を助けたって何？」

そんなことを言ってくる。何の事かは判る。転生の塔での行動だろう。だがあれは助けてない、その前にノヴァにひき止められたのだから。救助未遂と言った所か。

「さあな、そんな記憶はないがってノヴァは？」

嘘は言ってない、それに探られるのもよくない、ここは話をそらす事にする。

「判んないよ、あれ以降あってないし、もしかして逃げちゃったのかも」

不安そうに言う。逃げたわけではないだろう。単にそう長時間行動できないだけだろう。はじめてあった時、ノヴァは青年だった。ならばあの少年姿は仮の姿、分身か何かだろう。ゲームの通りというわけだ。

「ふむ」

これからどうする？どう動くべきか……

実際はノヴァが出てくる前に倒れたのだが、いや、狙ってたのか？まあどちらでもいいか。体渡して即座に眠りについた自分がどうこう言う気はないし、現状ノヴァに俺が聞くことはない。俺が知りたいのは俺がここに居る理由。

だがノヴァは知らないだろう。最初の場所から離れすぎているし、あったのは偶然、接点もない。まあ、こちらはゆっくり探そう。幸いまだ余裕はあるのだから。

それに、まだ世界を回るには解決することがいろいろあるしな。どうしたものか。

その前に目の前の問題解決だな。とりあえずノヴァをダシに話を逸らしたが、俺も記憶喪失にすべきだろうか。だが、そうなると助

言も考えないといけない。変なことを言うと疑われるし、知らない情報は言えなくなる。途中で思い出したってことにするか。まあおいおい考えよう。

「……見た感じ、追えそうにないな」

「……もう、なにがなんだか全然わかんないよ！目が覚めたら知らない男の人の体の中に閉じ込められてて、化け物と戦わされたり、変な連中を追いかけることになったり、ねえ、教えてよ！！なんでこんな目に合わなくちゃいけないの？！私たち、これからどうなっちゃうのよ！！」

このセリフで本来の主人公の返しが悪くて、溝ができるんだっけ。まあすぐに治るが、無いに越したことはない。やんわりいえば何とかなるか？それとも……

「そうだな、とりあえず……」

「とりあえず？」

「この家家探しするぞ」

有耶無耶にするか。こちらの方がずっとやりやすい。空気も弛緩するし。

「……はあ？」

「なんかあるかも知れないだろう、探してから後のことは考えるぞ」

建物に向かう、その後ろ姿を見て慌てて止めてくる。

「え？ちょっちょっと！なんでそんな話になってるの？私が聞きたいのは！」

「……ならどうしたい？」

ゆっくり振り返りながら言う。

「……え？」

「今できることは、ここでファイファーに頼んで住まわしてもらう、ノヴァを追う、どちらもせず、とりあえず山を下りる。こんなところか。どうする？」

「きゅ、急にそんなこと言われても……決められるわけ……」

「別に今決めろなんて言わんさ、じっくり考えろ、自分がどうしたいか、何を望んでいるのか。決まってから言ってくれればいいさ」

「……うん」

話をそらして、なし崩しに話を終わらせる作戦終了（きちんと説明できそうもないと投げた。）そして建物の中は何もなかった。ただの休憩所っぽい。あの後エイナは、一人うんうん唸っている。色々整理しているのだろう。それはいい、特に喧嘩もなく、空気もどこかゆったりとしている。……ただ一つを除いて。

「……おい」

「え、な、なに？」

「いや、考え事はいいが、こっちをちらちら見るな。言いたいことがあるならこっちに来い」

そう。さっきからエイナがこっちをちらちら見てくるのだ。俺はまた、寝ていたのだが、そのせいで寝づらいのだ。さっきの会話からそれなりに時間がたっている。おそらく考えがまとまったのだろう。なぜあんなにおどおどしてるのかは知らんが、自信を持って言えばいいのに。

「え、えっと、あのね。私、決めた」

「へえ、それで？」

とりあえず先を促す。

「うん、私、ノヴァを追おうと思う。だってやっぱり、気になるし、知らなくちゃいけないと思うから……だから、お願い、協力して！」

「……ああそんな心配してたのか。心配しなくても、協力するよ」

「本当！？」

「嘘言ってどうするよ、それで話は終わりか？」

そういうと、少し目を伏せ、しばらくしてから決心したのか。

「え、えと、実はもう一個、あるんだけど……」

「何だ？俺でわかることなら、答えるし、悩みくらいなら聞くぞ」

「その……あなたの事教えてくれないかな？」

「は？」

正直予想外だった。そういや俺の事誰にも言ってなかったなあと思いだす。

「だって、私は君の名前も知らないんだよ。少しくらい教えてくれたっていいじゃない。それにこれから一緒に頑張るのにそれは変でしょ」

正直、誰も聞いてこないからだれも興味ないんだな。と気にしていなかったのだが。忘れていたともいうが。まあようやく、こちらに来てから初めて自分の名を言う。名字は伏せておこう。記憶がある裏付けになりそうだし、とりあえず聞かれるまでは有耶無耶にしておこう。

「まあそうだな、俺はユーリ、これからよろしくな、エイナ」

こちらの自己紹介を聞いてエイナはその表情を緩める。

「……うん！よろしく、ユーリ。あ、そうだ、あのときはありがとうね」

「？なんのことだ？」

「私が動揺してる時に、助けてくれたのと、あの景色を見せてくれた事」

「気にするな、恩を売りたかったわけじゃないし、知ってるやつが怪我するのは見たくないし、景色の方はたまたまだ。礼を言われるようなことじゃない」

「それでも、私が言いたいから……ありがとう。」

そういって、満面の笑みで笑う。その笑顔を直視できなくて、目をそらす。後ろめたすぎて罪悪感がすごい。純粋な感謝なのだが、だからこそ来るものがある。必要なことは話さず、自分の思うように誘導しているようなものだ。それをどう取り違えたのか。

「？……へぇ、どうしたのかな、もしかして照れてる？」

にやにやしながらそんなことを聞いて来る。甘いわ。とりあえずからかうつもりならもう少し突っ込むことだな。

「……はあ、そうだな、こんなかわいい子と話せてるんだ。少しくらい舞い上がってもいいだろう」

こんな感じで。

「え、えええぇーー！！」

……今はこれでいいだろう、これで。これからは、辛い事も楽しいことも、共有していくのだ。仲良くしていけるなら、それに越したことはない。ああ、だから少しぐらい、恰好つけてもいいだろう。

「いや、嬉しいけど、嬉しいけどいきなりそんなこと言われても、私もあなたの事頼りに、ってそうじゃなくて、うう〜！」

「……エイナ」

「へ？ななに？」

「好きなように行動してみろ、なんかあったら、俺を頼れ、大丈夫、俺がお前を守るから」

うん、これぐらいは言っておこう。助けたいという気持ちは偽りないし、実際、俺の方が強い。それに、エイナの行動が軸になる。全てを知っている俺は、先入観が邪魔をする。故にこれはエイナなしには成立しない。だから、俺はエイナを支える、俺のために、この物語を終わらすために。

「え……そそそれって……だ、駄目だよ！気持ちは嬉しいけど、私にも心の準備とかが」

……なんか早まった気がするが、ああ本当に。どうしよう、冷静に考えたら、俺はさっきなんて言ったんだろう。盛大に自爆したな。まあ、嘘は言ってないし、いいか。目の前のわたわたしてるのを見てると和むし。まあ、いじる分には楽しそうだし、さて、これから賑やかになるな。

意識が戻り、自己を認識する。直前に起こったことを即座に思い出せ無いまま、体を起こす。自分の状況を知るために周りを確認しようとすると、傍から声が聞こえる。

「う、ん、あれ、私、何してたんだっけ。なんか夢見てたような」

「……いや、夢ではないぞ。エイナ」

「え？」

「自身が知らなくとも、常に世界は動き、歴史を積み重ねる。故に我もそなたも、ここに居るのだ」

声の主を探すと、炎をまとった獅子がこちらを見ていた。さすがにもう驚きはしない。確か名は……

「ファイファー……であってたわよね？」

「うむ、相違ない。体は大丈夫か？エイナ」

「うん、大丈夫」

こちらを心配してくれるファイファーに返事を返す。きちんと見ると、瞳に理性的な色が見えるし、ある程度距離を保って話をしてくれる。うん、確かに冷静に見れば、自分を襲ったりしないと思える。さっきまでの自分がいかに余裕がなかったかがうかがえる。

「もうすぐ、食事もできる。顔でも洗って来るといい」

その言葉に従いその場を離れ、水場で顔を洗う。戻ってくると、既に食事が用意されていた。・・・どうやって作ったのだろう。少なくともライオンにしか見えないあの足でどうやって料理を？しばらく考えていたが判らないのでスルーすることにした。

「……うまいか？」

「……ええ。」

「そうか、ならば食が進まぬのは、そなた自身に何か思う所があるからか」

そう、確かに、食事は美味しいのだが、あまり喉を通らない。やはり、気になるのだ。

「……ノヴァ、か。」

その声に目線をファイファーに合わせる。

「ノヴァは何か言ってた？」

「いや、あやつは何も説明せずに行ってしまったからな。だが、あやつを責めんでやってほしい。おそらくあれが、精一杯だったのだ」

それを聞き気持ちが沈むのを感じる。しかしそれでは駄目だと顔をあげ次の質問を投げかける。

「ねえ、ファイファーはノヴァの事を知っているの？」

それを聞き、ファイファーはどこか懐かしそうな顔をして、

「ああ、知っている、元々古い付き合いだからな。もっとも最近は会っていなかったがな」

「それじゃあ、どこにいるのかも……」

その言葉に少し申し訳なさそうにファイファーは答える。

「すまぬな、それに我はこの山から長い事外には出てはおらん」

「そっか、それじゃあしょうがないね」

「あやつは、我にそなたたちの面倒を見るよう言っていた。そして、我はそれを聞き入れた。故にこうして、面倒を見ている」

「それじゃあ、私はここからどうすればいいの？」

「……それはそなたが自身の判断で探すべきことだ。求めるべき答えは自身の力で掴み取る。それがこの世界の理なのだ。」

「世界の理……」

「答えを教えてはやれぬ。だが、導くことはしてやろう。自身が何を求めているか、よく考えることだ」

その後、ファイファーにいくつか尋ね、その上で、私が求めていることを改めて考える。やはり、ノヴァを追い、忘れた自分を取り戻す。彼との約束もあるし……ああ、そうだ。彼とファイファーはあまり話していなかった。もしかしたらなにか話したいことがあるかもしれない。思ったら、すぐに体が光に包まれ、彼と変わる。

「……別に聞くことはないんだがな」

「……ほう、そなたがエイナと共にいるものか」

「ああ、俺の名はユーリ、あらためてよろしくなファイファー」

「うむ、よろしくなユーリ、それで我に何か聞くことでもあれば、答えれる範囲で聞こう」

「いや、今はいい。また質問があればその時に頼む」

「そうか」

その後、しばらく他愛のない話をして、旅の準備をする。とりあえず、ファイファーに風呂を進められ汚れた服は洗うことにした。その際にひと悶着あったのだが、内容としてはこんな感じ……

「さて、適当に着替えもあったし、風呂に入るか……ん？」

とりあえず服を脱ごうと服に手をかけると常夜の石が光る。何事かと着替えるのをやめ、エイナに会いに行く。そこには顔を赤く染めたエイナがいた。なぜかご立腹らしい。なぜだ？

「な、何考えてるのよ！！」

「？なにって、着替えだが？」

何を当たり前の事を今更聞くのやら。意味が分からない。

「だから、なんでそんな事になってるの！！」

「いや話は聞いていただろう、風呂に入るから服を脱ぐ、当然だろう？」

何を言っているんだろうか、こいつは。当たり前の事だと思うのだが。

「だから、そ、その。」

「？」

何が言いたいのかわからない、言うのを待っていると顔を赤く染め言い放つ。

「女の子がいるのに何平然と裸になろうとしてるのよ！！」

「……ああ」

そういうことか、確かに言われてみれば確かに。気付かなかった俺も大概である。本来なら真っ先に配慮したはずの事なんだが、やはりまだ本調子じゃないということだろう。

「成程、確かに失念してた。ああ、エイナが言いづらいのもここに呼んだのも納得できるな」

「もう、びっくりしたんだから」

赤い顔でそういうエイナ、それならこうするか。

「ふむ、それじゃあ見ないようにしといてくれ」

「え？」

俺の言葉にエイナの動きが止まる。そして次の瞬間勢いよく動き出す。

「ちょ、そ、それってどういうこと？！」

人の襟首もってがくがくと揺らしてくる。顔を近づけるな、こええよ。しつこいのでその手を掴んで止める。落ち着いたのを見計らって話す。

「いや、風呂に入るんだが」

「だから、私がいるって言ってるじゃない！！」

そうは言うが……どうしろと？本気で。

「あのな、お前が俺の中にいる以上どうしようもないと思うんだが」

「うっ」

「まあ、はいらなきゃあいい話なんだが、どうする？」

とりあえずそうすれば問題もない、あくまで今はだが。聞いてみたところ帰ってきた答えは。

「……入りたい」

「なら見ないようにすることだな」

「わ、判ったわよ！」

「……先に入るか？」

「……後でいい！」

なんかやけになってる。まあ、判らんでもないが、とりあえず了解はとったが、ずっとこのままというのも良くない。そのうち何か考えておくか。

そう思いながら表に戻り服を脱ぎ風呂に入る。不作法だが一応タオルは撒いておく。何せ中に異性がいるのだ。久しぶりに落ち着ける筈なのだが、落ち着かない。とりあえず考えるべきことは山ほどある。

「さてこれからどうなることやら……」

今色々考えても仕方がない。情報が少なすぎる。この世界で起こっている事、この先の展開、知ってはいるものの、それが本当にこの先起こるのかと言えば何とも言えない。もしかすると根本から全然違う可能性もある、まあその確率は低いが。とりあえず思考を打ち切り今に考えを向ける。

「とりあえず出るとするか。考え過ぎでのぼせたとか馬鹿らしいし」

そういい、風呂から出る。うんすっきりした。服を着てエイナを呼びに行くために常夜の石を掴む。

「お～い上がったから次入れよ」

「え、あ、う、うん！」

建物の中で座っていたエイナだがそれを聞いていきなり立ち上がった。まさかまだひきづってるのか？と思ったがその通りらしい。動きがなんかかくかくしてる。そう思ってたらいきなりこっちに顔

を向ける。なにかと思っていると。

「……に……い…ね！」

「何？」

「絶対に見ないでね！！」

そんなことを言われた。女性なら当然言う言葉だろう。露出狂とかでない限りは。

「ああ、見ない見ない」

「むっ、なんか軽く感じるんだけど！」

「いや、元から見る気ないし、どうでもいいしな」

「むっ！」

最初からそんなつもりはない。当たり前だ、誰が好き好んで変態のレッテルを張られに行くというのか。そう言ったにもかかわらずエイナの顔は険しい。もしかして信用されてない？とはいえどうしようもない。それに自分が入っている間、変に意識して精神的に疲れたのだ。まともに相手にする元気もない。

「それじゃあ行ってきな。終わったら呼んでくれ。ここに居るから」

そういってそこに座る。そのうち何か家具でも作ろうと思いながら。エイナはしばらくこちらを恨めしそうに見ていたがしばらくすると光に包まれ消えた。とりあえずすることもないので横になって

寝ることにする。

表に出てきたエイナは若干肩を怒らせながら服を脱ぐ。きちんとタオルも体に巻く。そしてそのまま湯船につかる。

「む〜〜、何よ、あの反応。こっちがあんなに恥ずかしがってたのがバカみたいじゃない！！」

入るなり不満をあらわにする。青年がやけに淡々と対応したのがなんとなく気に入らなくて青年が風呂に入っている間、色々文句を言っていたのだが、まだ不満は尽きないらしい。無論青年はそんな不満をこぼしている事は知らない。

「少しぐらい慌てるとかしてもいいじゃない！私には魅力がないとでもいってるの？」

ひとりごちる。その後もずっと不満を述べていく。そうして自分の中の不満をあらかた吐き出すとようやく一区切りついたのか静かになった。

「……はあ、私なにやってるんだろう」

本当は分かっているのだ。青年がこっちを気遣っているということは。今は変に意識してしまっているが、それを抜きにしても自分が同居している青年を、この短い間で驚くほど頼りにしていることぐらいはさすがに理解している。少し前のやり取りを思い出す。

「はあ、変な女とか思われてないといいけど」

さっきはほんとに慌てたのだ。それこそ襟首掴んで自分の顔の傍

に引き寄せたりしていたのだから、思い出すとたちまち頭に血が上ってくる。

「な、何してんだろう、ほ、本当に」

顔を半分湯につけ、ぶくぶくと泡を立てる。意識すればするほど鮮明に思い出してくる。ああ、けど最初から思ってたけど近くで見ると本当にかっこよかっ……って！

「ちょ！！い、今、私なにを～～～～～っ！！……きゅう」

ひとり考え、一人自爆している。そしてその果てにのぼせて気絶。ベタすぎる。そしてエイナはさすがに遅いと思ったユーリが常夜の石を光らせるが、何の反応もなく時間だけが立つので嫌な予感がしたので、後で土下座して殴られようと思いながら仕方なく様子を見ると、見知った女性が風呂場で気絶してた。

……どうしよう、馬鹿がいたよ。

とりあえずエイナを奥にして自分が表に出る。風呂に入った状態から変わったので濡れるが仕方ない。そのまま、風呂から上がり、外に出る。そのまま常夜の石の中に行きとりあえず様子を見ておく。

「全く手間をかけさ……」

当然だが肌にタオルをしただけの状態で交代したのでそのままである。自動で服着ているとかそんな淡い願望は根こそぎ吹き飛ばされた。しかも、タオルは本来の役目を放り投げ、少し離れたところに飛んでいる。頭の中が真っ白になった。

仕方ないので、表に戻りエイナの着替えを用意して自分も服を着替えて再び中に戻る。変わらず気を失ったままである。途方にくれながらとりあえず介抱する。しばらくすると意識が戻ったのか。

「う〜〜ん、ここどこぉ？」

なんか、すごく逃げたい、本当に切に思う。

「とりあえず表に出て、着替えてきな」

質問には答えずさっさと着替えを促す。エイナ自身が着ないと、意味がない。俺は服を着ているが当然エイナには関係ない。風邪をひかれるわけにもいかないので早くするように促す。後自分の精神安定のために。

「え？……ええっ！！」

しくじった。意識がはっきりしないうちに終わらせたかったのだが、もうこうなるとどうしようもない。詰んだのを自覚しながら声をかける。

「だから、早く着替えて来い」

「あ、あ、う、あ」

やばい、混乱してる。とりあえずこの後のお約束だと間違いなく来る。拳が

「い、いぃやあああああ！！！！」

「うおっと」

当然避ける。喰らう気はない。

「ななんで私こんなところでこんなかっこで、え？え？」

「……はあ、風呂場でのぼせたんだよお前は。あんまり遅いから石光らせたけど反応ないし、心配して様子見に来たらこれだ、これでも焦ったんだがな」

正直に言う。隠したりごまかしても仕方ない。俺の言葉を聞いて、しばらく俯いて何か考えると顔を赤くしてこちらに聞いてきた。

「……ねえ、あの、見た？」

「……一応不可抗力とは言っとく」

タオルこそしていたのだが、こっちに急いで戻したからその時にはだけたのだろう。言い訳にしかならないがどうしようもない。

「そ、そう……」

「……」

気まずい、とりあえず着替えてくるように言う。濡れたままだと本当に体調を崩す。その後着替えて再びエイナが戻ってきたが、しばらくお互いに会話はなかった。

「……悪かった。仕方がないとはいえ俺のやったことは許されない。いいわけはしない、好きなようにしてくれ」

とりあえず先にそう言って頭を下げる。

「え、う、うん。で、でも私が倒れたから仕方なくなんだよね？」

「当たり前だ。だから気づくのが遅れたわけだし」

「……」

とりあえず、頭を下げ本当に謝罪の気持ちを表している青年を見て、やましい理由はないと理解する。自分が気絶せずそのまま出ていたら本当に何もなく終わっていたのだろう。そう思うと一つの疑問が浮かんできた。

「ねえ」

「……なんだ？」

「私って魅力ない？」

「……は？」

その質問に本気で首をかしげる。殴られるだろうと思っていたのだが、もしくは信頼を完全になくすかぐらいはすると思っていたのだが。予想斜め上の質問に呆気にとられる。

「だ、だって覗こうとか、そんな気持ちがないってことでしょう？そ、それって私を女性としてみてないってことじゃないのかなあって思って」

「そういう問題か？後、話の論点がずれてるんだが」

「……本当に謝ってるのが判ったから今回だけ許したげる。でも！次はないからね！！」

「いいのか？」

「いいの！それでどうなの？やっぱり私、魅力ない？」

やたらと聞いて来るので仕方なく正直に答える。

「俺の主観でいいか？」

「う、うん」

「十分魅力的だと思うが？少なくても十人いたら全員が魅力的と言うと思うぞ」

「ほ、本当？嘘じゃないよね？」

「あ、ああ」

「そっか、そっか～～～えへへ」

本音で答えたらにやけて笑い出した。正直引く。ドン引きである。その後、どういうわけか、機嫌の直ったエイナと話をして、少し休むというので俺が表に出てくる。とりあえず取り返しのつかないような事態にならなくて本当に良かった。〈これから私が困ってたら絶対助けること〉を約束させられたが。仕方ない、約束した以上、守らざるを得ない。

少し休んだ後旅の準備をする。ファイファーに頼んで軽い鎧や武器なんかを持ってきてもらった。一つの細剣を二人で運用してもそのうち折れそうだし、なによりせっかく二人いるので別の種類の武器を持って戦術に幅を持たしたい。そんな事を考えながら武器を選ぶ。

「お、片手剣か、う～ん槌はいいか。双剣ねえ、これでいいか」

とりあえず双剣をチョイスする。火力が下がるが手数で埋めれる。後は投げナイフもいくつか拝借する。道具袋もファイファーにもらったし、なぜか某四次元に通じそうなポケットレベルで色々入る。製作過程が非常に気になった。そして、一通り用意すると今度はエイナに代わり再び準備する。そして、お互いに準備が終わると出発することにする。何事も早い方がいい。

「……決まったか。」

奥からファイファーが歩いてくる。見送りに来たのだろう。本当に律儀なことだ。

「うん、ありがとうファイファー」

「有無、まずは山を下り、麓の村を目指すといい。そしてそこから、次の道を模索するといい」

見送ってくれるファイファーに返事を返し、前を見据える。まずはこの山≪獅子ヶ峰≫を下り、麓の村に下りる。今度はきちんと自分の意志で一歩を踏み出す。大丈夫、私は一人じゃ無い、頼りになる相棒がいるんだから、どんなことがあっても二人ならきっと乗り

越えていける。そう信じ、その瞳に強い思いを宿して獅子ヶ峰を下る。

「困った時はちゃんと頼るから、きちんと応えてね。約束だよ！」

その言葉を胸の常夜の石に向けて話す。石が軽く揺れ、光を煌めかせる。それが返事のようで、エイナは笑顔を向ける。

「さあ、いきましょうか！」

その後ろ姿を見届けながら思う、彼らの旅は、過酷なものになろう、だが、あの二人ならきっと乗り越えるだろう。そう思わせる何かをあの二人は持っていた。

「行くがいい……そして、探すがいい。己が歩むべき道を……若き≪放浪者≫たちよ！！」

それは、この世界で本当の意味での冒険が始まったことを意味していた。

新たなる始まりとフラグ（後書き）

なんかフラグっぽいのが立ちました。主人公に言わせると吊り橋効果でしょうか。ほっとくと冷める、みたいな感じの。さあこれで終わるか、もっと進展させるか、少し悩んでいます。

ただ、好感度は割と高いです。依存１０歩手前です。それとどうでもいいですが主人公の名前出ました。うんそれだけです。

イベント増やしましたがこれはない。笑うしかない。これが原因で常夜の石改造計画が発動します。

冒険の始まり、新たなる力（前書き）

一応仕上がりました。色々自分独自の設定を考えていこうと思います。ただ原作をなぞるよりかは深みのようなものが出ればいいかなと思います。しかし、自分で考えても好感度おかしいだろうと思いますが、まあいいか、ニコポナデポよりかはましだろう。あれ好感度一気に振り切れますしね。あれはないな。チートまちがいなし

冒険の始まり、新たなる力

青空の下、新たな一歩を踏み出す。確固とした意志を持って。

「さあて、まずは、この山を下りないとね」

とりあえず今やるべきことを口にすると、エイナは下に目をやる。当然道の安全など保障されていない山道である。それに加え、モンスターもかなりの数が見える。戦闘は避けられない。それでも止まることなく足を踏み出す。その手に剣を携えて。

「……あっ、そういえば」

ふと何かに気付くと、常夜の石を掴み、意識を集中する。そしてその精神は、自分の中にいるもう一人の人物に会いに行く。何かと自分の事を気にしてくれたいる仲間であり、同じ体にいる同居人と言った所だろうか。

少し前にハプニングにより、とても恥ずかしい事態になったが。そのことについてはお互い触れないようにしている。けれどもエイナとしては結構気にしているので、若干会うのをためらっていたりする。その時に言われた魅力的という言葉に、時たま頬を染めたりしているが。

その人物は小屋の周りで、金づちと釘を持ち、大工仕事に興じていた。予想外の事態に相談すべきことが口から出ない。

「ユーリ！あのね、相談が！……って。……なにしてるの？」

まずその疑問をぶつける。そもそも、そんなものどこから持ってきたのか。少なくとも前に調べたときは何もなかったはずである。相談したいことがあったから来たのだが、予想斜め上すぎて質問せざるを得ない。その声を聴いて、絶賛木材に釘を打ちこんでいる当の本人は手を止め、こちらに顔を向ける。その顔を見て、俺が守ると言った発言なども思い出して何気に顔が赤くなっているが、気付かず口を開く。

「ああ、エイナか。見ての通り、仕事だ」

そういうと作業を再開させる。何気に手馴れているのは気のせいか。少なくとも、初めてとは思えないほど手際がいい。

「いやそうじゃなくて、その道具とか木材はどこから持って来たの？ここ何もなかったはずだけど。」

その言葉を聞いて今度は手を止めずに口を開く。

「あの休憩室には何もないさ。裏の方にあったんだ、判らなかったの仕方ないさ」

「裏？」

その言葉を聞くと手を止めエイナを手招きして建物の裏に連れていく。

「……ここだ」

「これって……」

連れてこられた場所は文字通りの建物のちょうど真裏である。そこには道具箱やら掃除道具などが置かれていた。色々ある。自分ではわからないが、何か専門的な道具なのだろう。気が向いたらユーリに聞いた見ようと思う。

「昨日色々話しただろう？あの後、暇つぶしに色々探索してな。これを見つけたってわけだ」

「暇つぶしって……」

自分がこれからを考えて、不安や期待を感じている間、この世界の探索をしていたらしい。暇つぶしで。

そう考えると何か納得がいかなくなる。あの後ということは、こちらが顔を合わせづらいから色々悩んでた時ぐらいだろう。自分に相談もなく、こちらの気持ちも知らずに、気楽に行動している青年にもやもやしたものを感じる。それを自覚しないまま、目の前の青年を睨みつける。・・・気付きもしなかったが・・・

エイナは気づかなかったが考えてみると必要なことだと判る。この世界に何か危険があったりしたら困るから自分が探っていた、と思えば特に思うことはない。なにせ見えないものと話せる魔石ということ以外知らないのだ。何かトラップがある可能性もゼロではないのだ。

もし、トラップか何かがあった時自分ならまだしも、さすがに目の前の女の子が被害を受けるのはよろしくない。これも一応相手を気遣ったものである。まあ、暇つぶしも嘘ではないが。

「あれ？でもあの木材はどこから持って来たの？道具はあったけど、

材料がないよね」

そう、材料がないのである。さっきの木材は、そこそこ量があったとはいえ、目の前の倉庫？のはそんなものはない、もしかすると、あれで全部だったのかも知れないが。

「ああ、あれは、あっちから持って来たんだ」

そういうと、ユーリはここから離れた孤島を指さして言う。それはここに来た時から見えていた。搭のような物の上にある離れ小島である。微かにしか見えないが、見た感じ、ここと同じようにしか見えない。

「でもあそこまでどうやって行ったの？もしかしてユーリって空が飛べるとか？」

「……お前は俺を何だと思ってるんだ、できるわけがないだろう」

「あ、あはは。そ、そうだよね」

自分でもそれはないと思いながら言ったのだ。そうだったらそれこそびっくりである。

「あそこをくぐれば行けるぞ、普通に」

「あそこって、あの、門だけのアレ？」

ユーリの指差した先にはボロボロの門が見える。その先はそのまま崖になっている。落ちれば当然ただでは済まない、というか、ぐちゃっと紅い花が咲くだろう。恐る恐る聞き返す。

「あれを通れと？」

間違っていることを願いながらもう一度聞く。

「ああ、そうだ。それ以外に何か思いつくか？」

確かにそうなのだが、通るとそのまま落下するのでは無いかと思う。そんな心配に気付いたのか。苦笑いしながらユーリは口を開く。

「それなら俺が先に行くからついてきな」

「え？先にって、ち、ちょっと！」

エイナの言葉を聞く前にさっさと門をくぐる。すると不思議なことにユーリの姿が掻き消える。それを驚いた顔で凝視するエイナ、文字道理絶句した。

「……どうなってんの？」

無論答える者はいない、そして、先ほどのセリフを思い出した。

「わ、私も行くの？」

返事は当然ない。やはり、行くしかないんだろうか。大丈夫とは思いながらも歩く足は重い。数歩歩いて、止まる。

「うう、だ、大丈夫。ユーリは嘘は言わないよね、うん！」

本人の知らないところで、株がうなぎ上りしているのに本人は、

まあ、少しは溝も埋まったかな。とか思っている。

ユーリは勘違いしているが、元々溝はない。仲たがいしたわけでも、因縁があるわけでもない。少し前にハプニングこそあったが、それにせよ、結局の所、好感度は割と上がっている。恐るべきは乙女フィルター。なんにせよ、むしろ助けまくっているので、好感度が序盤からすごいことになっていたりするのだが。

今のセリフも本人が聞くと、どこの聖人君子だ！と呆れるだろう。そして、嘘ぐらいいくらでもつくぞ、とうんざりしながら返すのだが。仮にそんな展開になっても、乙女フィルターはみじんも揺るがない。笑顔でそんなことないよ、と切り返す。更に信じてるから、とか根拠がゼロの筈なのに確信して言うのだが。

……話はそれたが、現状の好感度はそんな感じである。その考えに沿って問題ないと判断。全力で走り抜ける。なぜ走り出したかは、誰にもわからない。恐らく本人にもわからない、きっとノリ。

「よーし、いっくわよ！」

最大スピードで門を突っ切る。その先には、驚いた顔をした青年がドアップで現れた。

「・・・は？ちょ！！」

「きゃあああ！！」

なかなか来ないので心配して戻ろうとしたのだが、そこで運悪くタイミングが重なったのだ。哀れ全力タックルの餌食である。それを行った当の本人はというと。

「……いたたあ。……あ、ユーリ！だ、大丈夫？」

何も考えず走っていたので状況が掴めない。ただ、思ったよりも衝撃がずっと少ないし、なにかに捕まえられているのか動けないし、なにより温かい。よくわからないがとりあえずぶつかったであろうユーリに声をかける。

「……お前はこれが、大丈夫に見えると？本気でそう思うか？後、早くどいてくれ。」

思ったよりも近くで声がした。視線を下に向けると、痛みに顔をゆがませたユーリが、呆れた眼差しでこちらを見上げていた。その視線を傍で受けて状況を悟る。

「え？・・・うひゃああ！！ご、ごめん！」

当然の事だが、体当たりを行い一緒に倒れた以上、大体の場合は、お互いが折り重なって倒れる。今回の事もその例に漏れない。要するに、エイナは今、ユーリを下敷きにしているのである。慌てて離れる。

「……ったく、遅いから、見に行こうとすれば突っ込んでくるし、一体何があったんだ？」

呆れた口調で問う。正直不意打ちもいい所なのだ。文句の一つや二つ言いたくもなる。

「あ、あはは。……本当にごめん」

顔を真っ赤にしながら謝罪してくる。さすがに恥ずかしいだろうな。と思いつつ、その割に何かぶつぶつと考え事をしているようだが。……突っ込む気はない。これ以上話を脱線させたくない。

「……はぁ、まあいいや。ほら、ここから木材を持って来たんだよ」

そういい、ユーリはある方向を指さす。その向こうにはここに来る前の島にあった休憩所に似たような場所がある。その中には大量の木材やレンガ、鉄板などが所狭しと置かれていた。きちんと整理された状態で。

「これってユーリがやったの？きちんと整頓されてるけど」

「いや、最初からこうだったぞ。ま、そこからいくつか拝借した」

「ふ～ん。そうなんだ」

「……最初から気になってたんだが、お前何しに来たんだ？先に進まなくていいのか？」

「え？……あ、あ～～～～！！」

ユーリに言われ、ようやくここに来た理由を思い出す。思えば、こちらにきてすぐに、目の前の青年が大工仕事をしているからそちらに気を取られたのだ。確かに用事があったのだ。それは……

「……ねえ、これからの事なんだけど、さ」

「……ああ」

「このまま村に入って、さ。人前で私達が入れ替わっても問題ないのかなあ？」

「？……ああ、そういうことか。」

つまり、エイナが言いたいのは、言葉通り俺とエイナが誰かの前で入れ替わったとして、それを怪しまれたり、それが原因でトラブルを起こしたりしないか。ということだ。この事については、一応気が付いていた、とはいえやることが変わるわけではない。

「まあ、基本気を付けて、見られたら臨機応変に対応といったところだな。実際入れ替わらざるを得ない状況もあるかもしれんしな。深く考えても仕方ないだろう」

楽観的に答えておく。これは、ゲーム内ではポンポン変わりまくっていたので問題ないだろう、というのと、逆に見られたら隠す必要もなくなるし、エイナが気を使う必要もなくなるからである。それを言う気はないが。

「そうなのかな？」

「そんなもんだよ、難しく考えても仕方ないし、なんかあったら、どうにかするさ」

「あ……うん！そうだよね！私は一人じゃないもんね、ユーリがいるんだから！頼りにしてるよ。」

そういって満面の笑みをこちらに向ける。

「あ、ああ。」

なぜかわからないが、あって間もない女の子が自分に予想以上の信頼を向けてる。この事態に、表面上ポーカーフェイスを保っていながら、心の中では、焦りまくっていた。

なにがあった？少なくとも、こんな最初の方でここまで信用なんてされてなかったと思うが……それにもう少し向こう見ずなところもあったはずなんだが。なんか俺の知らない間に心境の変化でもあったのか？後、別に俺一人で何とかするわけじゃないんだがな……

心の中では色々ぶっちゃけていたが、とりあえず置いておく。理解が及ばないが気にしない。それにここで言っても仕方ない。そう思い、とりあえず話題を変えることにする。

「で、疑問が解けたんなら戻るけどいいか？」

「うん、かまわないよ。あ、そういえば何作ってたの？」

やはり気になったのか聞いて来る。隠すことでもないので答えておく。

「テーブルとイスだ。ずっと立ってるのも嫌だろう？まあ、他にもあるんだが……」

「ああ、それで色々やってたんだ」

「まあな、そういうことだ」

そういうと、再び門をくぐり、元の島に帰っていく。慌ててその後についていく。

「ちょ、まってよ！私も戻るってば！」

門をくぐり、元の場所に戻ると、既にユーリは大工仕事に戻っていた。気になったので聞いてみる。

「なんでそんなことできるの？」

「ああ、こういうのは慣れると簡単だぞ。体が覚えてくるしな。」

「そういうもんなの？」

「多分、そんなものだと思うぞ……ああ、それと」

思い出したように苦笑いしながら喋りだす。

「これ以降は無駄に全力疾走はしないようにしてくれ。さすがにびっくりしたからな」

そう一言こぼした。その一言で、先ほどの事態が鮮やかに甦ってくる。門をくぐり、ユーリに当たった時、ユーリは自分を抱きしめて倒れたのだ。その結果ユーリが衝撃のほとんどを和らげてくれたのだ。思い出すと同時、顔が熱くなる、心臓の鼓動が早くなる。その顔を見せたくなくてそっぽを向く。

はたから見ているユーリからするとやんわりと苦言を言ったら、いきなり動きが止まり、だんだん顔が赤くなっていき、最後には真っ赤になって顔をそらされる。どうみても怒っているようにしか見えない。

いや、お前のミスだろうが、と突っ込みたいのを我慢しながらため息をつく。ちなみに、ユーリはエイナを抱きしめたつもりはない。そんな覚えもない。ただ倒れないように何か掴もうと手を反射的に動かしたらそうなっただけである。無論、そんな結果など、そしてどう思われているかなど思いもつかない。

「……ねえ」

唐突にエイナが口を開く。まだ何かあるのだろうかと思いながら、耳を傾ける。

「と、とりあえず私行くから！何かあったらまた相談のってね！」

「あ、ああ」

早口でそう捲し立て、顔を赤くしたまま光に包まれ消える。しばらく呆気にとられながら立ち尽くす。

「あれ、やっぱり怒らしてるな。もう少しやんわりと言えばよかったのか、それとも黙ってた方が良かったのか、まあ、機嫌が直るのを待つか」

完全に怒らせたと勘違いしたまま、作業に戻る。元々この作業は暇つぶしであるが、理由はある。エイナがこの前もっと住みやすい所だったらいいのにとか言ったのだ。まあ確かに自分が住むならもっといい場所がいいと思ったのでつたないながらも頑張っているのである。

まあ、驚かせたい気持ちもあったのだが、まあばれたのだから仕方ない。結構痛い思いもしたし、まさか説明するだけでダメージを

食らうとは思いもしなかった。思い出すとますます空しくなる。そんなことを考えながら手を休める事無く、テーブルを作っていく。ちなみに椅子はもうできていたりする。というか、後は組み立てるだけである。

何でもやっとくもんだと内心思う。近所で大工のおっさんにいろいろ教わってバイトまがいのことまでやってたのだ。社員さんに混ざって作業もしていたし、そこらの素人よりは上手だろう。そんなことを考えながら作業を進める。そして建物の中に一番最初に作ったあるものを言ってない事を思い出した。

その頃表に出たエイナは。

「あ～～もう、私なに考えてるんだろう、ああ、穴があったら入りたい！」

先ほどまでの思考を振り払うように顔をぶんぶん振る。先ほどよりも落ち着いたとはいえ、その顔はまだ若干赤い。

「よ～し、じっとしてるからダメなんだよね。それじゃ遅れた分取り戻すためにも、一気に行くよ！」

気持ちを切り替えるように言うと、剣を握りしめ、山を下っていく。途中のモンスターは正面から切り捨てていく、けっこう数が多いがまだ、何とかなる。

「私だってやれるんだから、なめんじゃないわよ！」

その言葉と共に、モンスターを高速の連撃で仕留めていく。このペースなら割と早く、麓にまで行けるかもしれない。そんな風に思

っていると、横の草むらから勢いよくモンスターが飛び出してくる。半漁人のようなそのモンスターはサハギョという。

「！しまっ！！」

不意を突かれたために、迎撃は間に合わない。一撃喰らう覚悟で身を固めると、いきなり光に包まれる。光の中から剣が突き出てモンスターをカウンターで貫く。光が消えた後、双剣をもったユーリが佇んでいた。

「戦闘中にあんまり他の事考えるなよ、危ないぞ」

そういうとファイファーの所でもらった双剣を握りしめる。そして、前を見据え。

「よし、いくか！」

残りのモンスターを掃除しにかかる。あまり苦戦することもなく全滅させる。やはり数だけは多いが。

ゲームの3倍はいると思う。多分だが、強さもこっちが上だろう。油断するとまずいな、と改めて思う。しかもさっきのエイナの時のように不意打ちしてくる奴も出てくる。想定した以上に難易度が高いと実感する。

とはいえ、やめるわけにもいかない。エイナに記憶を取り戻すという目的があるように、自分にもここに来た原因を探すという目的がある。

「このままいけるといいんだけど、な。やっぱりそうはいかないか」

目線の先には、サモンナイトをやったことがあるなら、割と知っている人もいるだろう。召喚獣テテ、それの色違いが道をふさいでいる。ちなみに名前はテテノワール。いるのは知っていたが、まさかの２０体。イベント戦のボスも数倍の数、もしくは数倍の強さになってるとか、やるせない。とりあえずどうにかするしかないだろう。それに試したいこともある。

「さあ、いくぞ。頼りにしてるぞ、エイナ！」

本来テテは力が強い。怪力とかそういう類の物だ。亜種でもそれは変わらない。故に岩投げや、小柄ながらも繰り出す拳は強力である。だからこそ今回長期戦は悪手。短期決戦こそが望ましい。

それに対し、自分に語りかけるように何事か呟くと、敵を見据え一気に走り出し、手ごろなところにいる奴から切り伏せる。こちらの動きに気付くと囲むように動いてくる。包囲される前の薄い所を狙って、突撃する。

その隙に近くにいたテテノワールが背後から跳びかかってくる。それは本来対処不能なタイミング、だが、気付きながらも慌てはしない。自分は一人ではないのだから。光に包まれると同時、細剣がテテを叩き落とす。

「甘いっての！私がいるんだから、不意打ちなんてさせないよ！」

その声と共にエイナに入れ替わる。これが試したかったことである。入れ替わりと同時に攻撃ができるかどうか。ゲームなら隙だらけだが、実際は即座に動ける。どうやら体の体勢もある程度変えれるらしく、今のように背後からの不意打ちからでも、万全の態勢で切りかかれるというわけだ。

「さて、こんな所で止まってられないんだから、かかってきなさい！」

そのお言葉と同時に残りのテテノワールが襲いかかって来る。それを横なぎで叩き落として、残りはバックステップでかわす。そして、着地した隙を狙って切り払う。一つの体でも意志は二つ。きちんと連携すればこれくらい朝飯前である。

……本当は常夜の石を介して簡単な会話（交信と言った方がいい）をしてるからなのだが。別にこの石の中じゃないと話せない訳ではない。外に出ている方の声は聞こえるし、内側からも簡単な意志を伝えるくらいはできる。それを利用しているのだ。

高速で動き回って残りを翻弄する。隙を見て、切り払い、返しの刃、突きの剣舞で切り捨てる。その嵐から逃れたものは。

「・・・俺が、仕留める！」

光と共に更に前に突っ切る流星の前に塵となる。威力と速さを兼ね備えた連撃により、みるみるその数を減らす。最後の一体も苦し紛れに突っ込んでくる。だが・・・

「これで、おしまいっ！」

再びエイナと代わり袈裟切りにしてこの場の戦闘を終わらす。それは、一撃ももらわず無傷で勝利したことに他ならない。その事実を嬉しそうにエイナは話す。

「すごい、今までと違ってすごく楽じゃない。もっと早く言ってく

れればいいのに。」

その言葉に苦笑いしているかのように、常夜の石が明滅する。本当の話、気付いたのは偶然であり、実戦で使用したのは、今回普通に戦うと確実にダメージを受けそうだったからである。

気付いたのは以前エイナを助けたときに遡る。あの時本来ならこちらがダメージを受けるつもりだったのだ。それが瞬時に攻撃に転じることができた。そのことから鑑みるに交替からタイムラグなしで動けるという事実にたどり着いたのは当然の話である。

無論だからと言って、すぐに使わなかったのにも理由がある。それは、いくら強力とはいえ、これはいわゆる連携、協力プレイの類である。

そのため、互いがきちんと力を合わさないと、真価が発揮できないのだ。最初の段階ではそこまでの信頼はないと思っていた。故に本来なら村について以降、機を見て伝えようと思っていたぐらいだったのだが、どういうわけか思った以上に信頼してくれている。

ならば、やってみてもいいか。駄目なら、俺が体を張ろう、それぐらいの気持ちで試したわけだが、結果はこれである。思っていた以上に戦いやすい。これなら、ボス相手でも、少しは楽になるだろう。

無論欠点もある。１つ目は、短時間に連続して出ることはできない。これはゲームの時から予想がついていたことだが、１度交替すると大よそ１０秒ほど再交代できなくなる。故にその間は乱入することはできない。

２つ目は、二人ともが表に出るため、下手をすると両方がダメージを食らう可能性があること。これが躊躇した理由でも特に大きい。一つ間違うと、両者共にカウンターをもらい窮地に立たされるかも知れないのだ。諸刃の剣のようなところがあるのだ。これを補うには個人でもそれなりの強さを持っている事。一人でその場をしのげる事（正確には１０秒以上）。お互いが息を合わせ抵抗すること無く交替する事。

簡単に纏めてもこれぐらい問題や課題があったのだが、いずれ試さざるを得なくなるのなら、思っていた以上に信頼され、敵の弱い今のうちにということで試したのだが、中々どうしてうまくやれたものだと考える。成果は上々。後は練度を上げるのみと言った所だろう。そんなことを考えていると。

「……あれ？これなんだろう、ユーリ何かわかる？」

エイナが何か見つける。その手の中には何かの破片のようなものが握られていた。中心には大きく〈テ〉の文字が描かれている。これは、サモンナイトというゲームの根幹ともいえる召喚獣の名その一部である。この世界では、召喚術は呼び出す存在の名前が必要なのだ。それは世界に散り張り、パズルの様に組み合わせ召喚獣の真の名を知り得て初めて成立する術である。

まあこの世界限定だが。本来は触媒となる石を用いて儀式によって誓約をして呼び出すのだが。どちらにせよ名前が重要視されるのは変わらない。まあ、なんにせよ、必要なのは間違いないので拾うように伝える。

「よくわかんないけど、そういうんなら拾っとくね」

そして、エイナは自分の持ち物袋に入れておく。そして、勢いよく手を振り上げる。

「さ～て、この調子でバンバン行こう！ユーリ！」

まあ、表でハイテンションになってる誰かさんには言う気もないが、多分理解してくれそうもない。そのうちどこかで勉強でもさせるべきだろうか。まあ、自分が今すべきは、浮足立って足元がお留守になっている相方のフォローだろう。苦笑いと共に、腰かけているイスに深く座る。肘はテーブルの上、もう一つのイスに目をやりため息を吐く。さあ、もう一仕事始めるか。

「・・・あれ？あんなところに人がいる」

その後もお互い入れ替わりながら、進み続けた。危険なこともなく問題もなく進める。そして、麓近くまで下りてきたとき、少し離れたところに人がいるのに気付いた。その人物は黒いローブに身を包みその場に立っている。訝しみながらエイナが話しかけると。

「あの～ここで何をしてるんですか？」

「～～～ぜだ、なぜ、～～！！」

聞く耳持たず、何かぶつぶつ呟いて居る。これは怖い。放っとこうと思ったのだが、常夜の石が点滅しているのだ。何かあるのだろう。とりあえずもういちど話しかける。かなり気はひけるが、めちゃくちゃ嫌だが。

「あの！ここでなにをしてるの！」

その声で気付いたのか、ようやく俯いていた顔を上げこちらを見る。顔を合わせた瞬間、若干後ずさったのは仕方ない、それほどにげっそりしていたのだ。パッと見、幽鬼かなにかであり、青い人魂でも浮いていれば完璧である。エイナでなくとも引く。というか女の子なのだ。怖いものは怖い。叫ばなかっただけ褒めてほしいものだ。

「む、私はここで召喚術の……おお！！君が持っているのは召喚獣の名前の欠片ではないか！」

話し始めたと思ったら、急に人の道具袋を指さして、何かわけに判らないことを言い始めた。興味津々に近寄ってくる、見た目げっそりした不審者、既にエイナの顔は涙目になっている。すごく関わりたくないのだが、仕方なく聞き返す。

「召喚獣の名前の欠片？なんの事？」

「君の持ち物に言葉の書かれた破片のようなものがあるだろう。それの事だ」

聞くと懇切丁寧に説明してくれる。その態度にエイナもようやく冷静さを取り戻す。そして、心当たりのあるものを取り出す。

「これの事？」

「おお、そうだそれの事だ」

取り出したものは先ほど手に入れた〈テ〉の文字が刻まれた欠片。

「で、召喚獣って何？」

「うむ、召喚獣というのは召喚術で呼び出される存在のことを言う。そして、呼び出したものに様々な恩恵をもたらしてくれるのだよ！」

「ふ～ん、そうなんだ……」

あいまいに頷いておく。単純に理解が追い付いてないだけなのだが、それを信じていないととったのか。

「その反応！全く信じていないな！ならば、その眼に召喚獣の凄さを刻みつけてやろう！」

そういうと男は自身の懐からこちらと同じような欠片を持ち出す。

「君の持っている欠片とこちらの持っている欠片を組み合わせて見るといい！」

「え、え～と、これでいいの？」

手渡された欠片を自分のものと組み合わせる。すると、突然正面に光が集まり、形を成す。その形は先ほど戦ったテテノワールに酷似している。実際はテテノワールが似ているのだが。しばらくすると、現れた時のように光に包まれ、散るように消える。

「びっくりしたぁ。今の子は？あれが召喚獣？」

「そう、今のは召喚獣テテ小柄だが、力が強く、すばしっこい、そ

してかわいい、一家に一体は置いておきたい召喚獣だ。私のおすすめでもある！」

「は、はあ……」

何が嬉しいのか、拳を握りしめ力説する。それに困惑を隠せないエイナ。傍から見ていると宗教勧誘か何かの構図にしか見えない。

「というわけだ。子の代、孫の代までかわいがって欲しい」

「え、子、子供？！」

どういうわけか、エイナが子どもという単語に反応して急に大声を上げる。

「うむ、いずれ君も誰かの子を成すだろう。その時、召喚獣の素晴らしさをぜひ、母親になった君の手で教えてあげてほしい！」

その言葉を聞いて自分の思考に没頭する。時折、まだ早いとかなんとか心の準備がどうとか聞こえるが誰も突っ込まない。ローブの男……召喚士だろうが、も空気を読んでいるのか。話しかけない。

「ああ、家族に一体召喚獣……ああ！なんと素晴らしい！！」

……訂正、こっちはこっちで自分の世界に突入していた。あいにく止めれる者はいない。ユーリはこの状況に関わりたくないのでスルーに徹している。きっかり5分後、何事もなかったように会話が再開された。

「……え？貰っていいの？」

「もちろんだ、私の目的はこういった召喚獣の素晴らしさを広める事だ。世界中が召喚術や召喚獣で埋め尽くされる。それが私の望む未来であり、野望なのだよ！！」

「は、はあ……」

「はーーはっはっは！！！」

……本当にどちらも先ほどの事を無かったかのように話しているが、息が合い過ぎである。あきれてものも言えない。

「……そうそう、召喚獣には属性の相性もあるから気を付けるように」

「属性の相性？」

「そう！使うものとの相性が合っていれば、召喚獣の隠された力が使える。逆に相性が悪ければ、使うことはできない。相性が並みなら召喚することはできるが、その強さは大きく下がることになる。他にも召喚獣と協力すれば色々なことができるだろう！！」

「へえ」

「ちなみに君の属性はズバリ〈鬼〉と〈獣〉属性だ。きちんと覚えておくように。召喚獣の名前の欠片は様々なところで手に入るだろう。色々と探してみるといい。」

「うん、いろいろ教えてくれありがとう！」

「かまわないさ、これも我が野望のため！」

「あ、あはは……（そういえばユーリは何の属性なんだろう〉ねえ、私の知り合いがいるんだけど、その人の属性も見てもらえない？」

「その程度お安い御用だ、さあ、連れてくるといい！」

「ほんと！それじゃ少し待ってて！」

そして物陰に隠れてユーリに交替する。そして、再び召喚士の男の所に行く。

「君が先ほどの彼女の知り合いかね？」

「ああ、まあな」

「……ほう！これはすごい！！！まさか全ての属性を持っているとは！このような人物には私も始めてあったよ！」

「へえ、それは、すごいのか？」

判っていたことではあるが、一応聞き返す。

「すごいもなにも、普通は〈獣〉〈機〉〈鬼〉〈霊〉のうちのどれか、多くても二つのはずなのだ。君のような者は前例がないとも言える。少なくとも私は聞いたこともない！」

「そうか。まあ、いいことのようだから喜んどくよ」

適当に返す。とりあえず、そうだろうとは思っていた。サモンナ

イトの世界において、決められた世界以外は名もなき世界として一括りにされている。そして、そこから来たものは全ての属性を使えるものが多い。まあすべての名もなき世界でそうなのかは知らないが。まあ、得手不得手はあるだろうが。自分に至っては全てが得意か。1の主人公みたいだな、と思う。

「手間を取らせてしまったようで悪かったな。」

「いやいや、中々に有意義だった。君の彼女にもよろしく言っておいてほしい」

何に反応したか判らないが激しく明滅する常夜の石。……気にしない。気にしないったら気にしない。

「……ああ。」

召喚士の男に別れを告げて、とりあえずモンスターももういないようなので、ある程度警戒を解いて先へ進む。もうすぐ村に着くとは思うが、確か門が閉まっていたんだったか。そんなことを考えながら歩く。

「まあ、思った通りだな」

そこには今思っていた通り、閉まった門があった。しばらく門とその周りを見つめ、近くに洞穴があるのを見つける。口の端をつり上げる。

「エイナ、お前だったらここ、どうやって開ける？」

その言葉と共にエイナに代わる。最初はしばらく悩んでいたエイ

ナだったが。

「すいませ～ん、開けてくださ～い！」

とりあえず大声で開けてもらうよう頼んでみた。しかし、しばらく待っても何の返事もない。門番とか居ないのだろうか、この村。

「むう、それなら！」

なんとなく手で押してみる。当然びくともしない。当たり前だが、女の細腕ひとつで開く門に意味はない。

「……どうしよっか」

早速手詰まりである。ユーリは、多分どうすればいいか判っているのだろう。それが何となく悔しくて頼るのは憚られる。周りを見渡し、何かないかを探す。考えればユーリは門よりもその周りを気にしていた。何かを探すように……そしてその眼が洞穴を見つける。

これだ！と思い中を除く。しかし、人が入れる大きさではない。明らかに小さい。子供とか、小動物なら入れるくらいである。もしかしたら何かの巣なのかもしれない。

「え～と、他には……何にもないか。どうしよう……」

判らないのでしばらく悩んでいたが、何を思ったか洞穴に強引に入ろうとする。しばらく奮闘していたがさすがに無理と思ったのか、戻ってくる。ところどころ汚れているのは仕方がないだろう。ちなみにユーリは石の中で作業を再開させながらも様子を窺っていたが、顔に手を当ててため息をついていた。

なにせ、いきなり洞穴の前で屈んで何をするのかと思えば、頭を突っ込んだり、足から入れたり、手を入れたり、とにかく見当違いの努力をしているのだ。ただ、終いに鎧まで外して入ろうとしたのには、止めに入るか本気で迷った。

何せ、見た目間違いなく美人が子供が通るような穴の前で四つんばいで腰やらなんやらを振りまくっているのだ。穴に入ろうとして結構きわどい状態になっていたし、もしも村人か誰かが見ていれば確実に変人扱いだろう。仮に見つけた者が男性なら多分中腰になっていたと思う。気付いてないのは本人ばかりとはよく言ったものである。エイナは鎧をつけ直し、泥や埃を手で払い落とす。

「む〜〜〜！！」

人の気も知らず悩みまくっている。そしてユーリは何かが近づいてくるのを感知する。さっきの召喚士だろう。確か様子を見ていたはずだ。さすがにもう一度さっきのようなことをするのなら、無理矢理交代しようと誓って様子を窺う。当のエイナは、何か思いついたような表情で手を掲げる。

「来て！テテ！！」

この世界限定で特に詠唱なしで術の行使が可能である。恐らく、名前の欠片に術が込められているのだろう。まあ、楽なのでいいが。そして、エイナはテテを先ほどの洞穴に連れて行く。

「テテ！ここを通って、あの門を開けてきてくれないかな？」

エイナの頼みに、しばらく穴と門を交互に見ていたテテだったが、

自分の胸を張り、任せろ！と言わんばかりに頷くと、穴の中に入っていった。

しばらくすると、大きな音と共に、巨大な門が開かれる。その向こうにはテテが胸を張って待っていた。褒めて褒めて、と言わんばかりに。

「よ～し、偉いよテテ。よくできました！」

頭をなでてやる、目を細めて気持ちよさそうにしているテテ、それを優しく見ていると。

「素晴らしい！！」

「うきゃあ！！」

突然、大声を出されたので思わず驚いてしまう。声の先には先ほど話していた召喚士の男が嬉々として此方に歩いてきていた。

「初めてとは思えないコンビネーション！君こそ正に生まれながらの召喚獣のご主人様！！」

「は、はあ……」

急に来て捲し立てられてきちんとした反応が返せない。そうこうしているうちに、門の向こう側から数人の恐らく村人だろう。が走ってくる。

「見たまえ、君の妙技に皆感動してこうやって……」

意気揚々と喋っていた、召喚士だったが、村人の視線が自分に集中しているのを見て、顔を青ざめさせる。

「お前、よくも何食わね顔で戻ってきたものだ！！」

「しかも門まで開けやがって！！」

「ち、ちがう！！わ、私じゃ！」

話している最中に両脇を掴まれる。

「今度こそ村はずれまでほっぽり出してやる！！」

その言葉と共に連れて行かれる。完全に蚊帳の外になっていたエイナと言えば。

「……まあ、いいか」

スルーすることにしたらしい。ある意味で賢明である。

「と、とりあえず門は開いたんだし、村に行ってみよっと」

強引に話に修正を図っている。無かったことにするらしい。門をくぐり中に入る。

「さ～て、村かあ、どんなところなのかなあ。何か手がかりがあるといいけど」

そういいながら歩いていくと、赤い箱が見える。

「……なにこれ？宝箱っぽいけど」

そういいながらその赤い箱に近づいていく。どこか開けるところがないか探して無るが、特に開きそうなところはない。そして鍵穴すらない。さすがに困った。

「ねえユーリどうにかならない？」

自分ではどうしようもないので、ユーリに頼ってみる。するとしばらくした後、光に包まれユーリが表に出てくる。

「……試してみるか」

しばらく、宝箱を眺めていると、突然壁に向かって走り出し、壁に向かって跳躍する。そして、その壁を蹴ってさらに高く飛び上がる。そして、独楽のように体を回転させる。そのまま遠心力と重力を利用した全力の斬撃を叩き込む。すかさず駄目押しにもう一方の剣を十字に交差するように叩きおろす。かなりの轟音が響き渡る。そしてその一撃を受けた宝箱は、傷こそついたものの割れもせず、あまつさえ凹みすらせず、そのままの状態で原型を保っていた。

「……やっぱり無理か」

そういうと、何事もなかったかのように剣を鞘に戻して村の中に入っていく。常夜の石が光るどころか跳ねている。相当動揺してるらしい。びっくりしても仕方がないと、内心笑う。本当の話、当然開ける手段はある。宝箱なのだから、ただその手段が手に入るのがまだ先なのだ。

故に強引にでも手に入るのならやってみようと思ったのだ。結局

無駄に終わったのだが、まあ手に入れば儲けもの程度に考えていたので特に思うことはない。仮に壊れて開かなくなっていた場合は、無理矢理破壊するが。その時はその時である。

「さて、ようやく村の中か。どうなるかな？」

苦笑いして再び歩き出す。こちらにきて初めての大勢の人との接触になる。なんにせよ、得るものはあるだろう。これからに思いをはせながら村に足を踏み入れる。

冒険の始まり、新たなる力（後書き）

一応次はほのぼのした感じにしたいです。あとやっぱりフラグイベント入れよう。なんとなく決めました。後、敵の名前は出すやつと出せない奴が出てきます。名前なんて覚えてないです。調べてもお前誰？といった感じですし。判る奴だけにします。いや、一応調べますよ。

予想外のイベントと密かな決意（前書き）

何とかできました。一応報告しておくと今月は諸事情で休みが増えているので、ペースが速いです。

来月からは二週間に一回ぐらいのペースになります。それにここからは少し先のストーリーも考え無いとネタが無いので更に遅くなるかも・・・

楽しみにしていただいている方々は少し？待たせてしまうかもしれません。文才も何もない作品ですが気長に見ていただけたらと思います。

予想外のイベントと密かな決意

平穏な日常を過ごす村人たちを見ていると、外で起きたことが嘘のような気がした。エイナはそう感じた。洞窟であったことも山を下りてきたことも、そう思うぐらい平穏そのものである。今表に出ているユーリもそんな気持ちなのだろうか？そう思い様子を見てみてみると、軽く笑い

「さあて、どう動くかな」

そういい、村の中に足を踏み入れ周りの視線を気にせず行動する。当然であるが村に新たな人間が来ると良くも悪くも注目を集めてしまう。無論全ての人ではないが入り口近くの者は大体こちらを見る。だがその視線に不快なものはない、単純な興味とかだろう。

「すいません」

だが、こちらを気にしているなら無論声をかけやすい。 近くの女性に話しかける。すぐにこちらに気が付き顔を向ける。初対面なので少し口調を変える。こういうのは第一印象が大切だと思う。

「え？ああ、なにかしら？」

「少し聞きたいことがあるんですが、構わないでしょうか？」

「ああ、ということはあなたは旅人さん？ええ、かまわないわ。それに話し方も崩してもいいわよ。この村の人たちはそんなことは気にしないから。私もそちらの方が喋りやすいし」

その言葉を聞いて、口調を普段のものに戻す。

「そうか、では……改めて話を聞かせてもらっても？」

「ええ、何でも聞いて。知ってることなら答えるわよ」

「ああ、ありがとう」

「かまわないわよ、旅人さんかっこいいし、今、村の中で少し話題になってるからね」

「へえ、それは嬉しい限りだ」

ゲームをやっていた時から思っていたが、俺の情報はどこから入手したのやら、ファイファーかノヴァぐらいしか知り合いはいない。ファイファーが先回りして話しまくったとか、ないな。そのうちオール　ハイル　ファイファー！！とか言ってそうだ……考えて見たモノの、心底どうでもいい。そんなことを頭の隅で考えながら話を聞く。

村についての簡単な説明を受ける。この村の名はツェーゼの村。獅子王様……確実にファイファーの事だろう。の御膝元ということで信仰の対象になっている。村の中に川が通っているので、新鮮な魚が名物だとか。この川のおかげで村から出ずとも最低限の自給自足ができるらしい。

まあ、本当は聞くまでも無いんだけどな。俺はだいだい知ってるが……エイナの事が有るしな。

そう、自分は知っている。この村の名前など元々判っていたし、村の住人も大体見当がついている。とはいえ、だからといって情報収集を怠っていいわけではないのだ。当然の話だが、エイナは何も知らない。故にエイナに理解してもらうためというのもあるが、一番の理由は、お互いが知らないとうっかり会話にでもあげると、連鎖的に疑われる可能性がある。

それは避けないとな。さすがに今のままこれ以上問題を増やしたら、さすがにエイナが持たんだろう。

エイナは普段活発だが、落ち込むと多少ひきづる所がある。今の所そういった所はなぜかない。むしろ普通に喋りまくってたが。感情をきっちり出して、無理をしていたり何か悩んでたりしているようにも見えない。まあ、ゲームと実際の差だろう。・・・無論、ユーリはなぜ、エイナが不安をほとんど出さず笑顔でいる理由なんかは全く判ってないが。

「・・・ああ、こんな所でいいよ。色々聞かせてもらったよ」

「あら、もういいの？」

「とりあえず聞きたいことは聞けたし、村もまわってみたいしな」

「案内してあげましょうか？私も旅人さんに興味あるし、ね」

いきなりそんなことを言われた。ナンパのようにも聞こえるがからかっているだけだろう。なにせ、目の前の彼女は顔がいたずらっ子みたいになってるし。ま、案内が必要な訳ではないし。申し出はありがたいが断ろうとしたところ。

「む、これは……」

「どうしたの？」

常夜の石がすごい勢いで光りだしたのだ。見られたらややこしいと思い、服の中に入れているので光は見えてないが。というか、熱い、火傷しそうなほどに熱い。突然の不意打ちにさっきまでの考えが消え、気分が急速になえる。

適当に断りを入れ、近くの木に背を預け常世の石に意識を集中する。何か思いついたのか？ここまでしてくるぐらいなのだ。何か重大なことなのだろう。でないとさすがに理不尽だろう。そう思い、石の世界に入る。そこには……

「むううう～～～～～！！」

変な声で唸っている変な生物がいた。いやエイナだが。こっちを見ながら唸ってる。その眼に怒りを宿しながら。

「エイナ、急にどうした？……っておい！」

戻ってくるなり石を投げられた。拳大ぐらいの。１００Ｋぐらい出ていたのではないだろうか？こいつ本当に非力なんだろうか？疑わしくなる、問題なくかわしたが。

「急に何しやがる、用事があるんじゃないのか？」

「……ふん！！」

……取りつく暇もないとはこのことか。何がなんだかわけがわか

らん。とりあえず話を聞かないとどうしようもない。少し探りでも入れてみるか、とりあえずきっかけになってたのはさっきの会話だろうな。まあ、目星はついたが。

「さっきまでの会話で何か気にさわることでもあったか？」

「……むぅ」

当たりらしい。というか、外れたらさすがにどうしようもないが。

「村の人になんか思う所でも？」

「……別に、そう言うわけじゃないけど……」

少しは何かありそうだが、違う……となると、後はやはり。

「俺の対応か？」

「！？」

目に見えて肩が揺れた。……判りやすい奴だな。嘘をつきづらい性格だな。ついてもすぐばれる典型だな。まあ、思った通りか。実際村に入った後の行動が原因だろうし、考えればすぐわかる。多分。

「悪かったよ。俺一人じゃ無くてエイナも一緒だもんな。勝手に判断して悪かった」

先に謝罪する。こちらが折れておくと存外向こうも耳を傾けてはくれるものだ。

「ユーリ・・・そ、そんなに頭まで下げなくても、私もちょっと大人げなかったし……」

慌ててこちらに対応してくるエイナ。

「今度からはもう少し考えてから対応することにするよ」

「……うん」

なんか少しばつが悪そうに頷く。けれど大丈夫だろう。そんなに怒ってるようには見えない。

「……それで、さ。さっきの案内、受ける気だったの？」

「いや、断る気だったぞ。言ってくれたのはありがたいけど自分のペースで歩きたいしな」

「そ、そうなんだ……」

なんか、すごい安心してるし、一応誤解してるかもしれんから言っとくか。

「……もしかしてナンパか何かと勘違いしてないか？」

「え！？」

「あれ、からかってただけだぞ。もしかして本気にしてたのか？」

「え～～、そ、そんなはずないじゃない！！も、もちろん私だってわかってたわよ。あ、あはは！！」

「……そうか、それならいいんだが」

やっぱり誤解だったか。やるせねえ。……仕方ないか。記憶のないエイナにとっては唯一身近にいる話せる存在だからなあ。とられると思っても仕方ないか。出なきゃ嫉妬か何かか。笑ってごまかすエイナをげんなりしながら見る。目をそらされた。はあ。

ユーリの考えはほぼあっているのだが、エイナの自分に対する好感度の高さだけ読み間違えてたりする。ちなみにこの時点で、エイナ＝片思い手前（しかもわずかに自覚あり）ユーリ＝割と話すクラスメイト、ぐらいの開きがある。温度差が激しすぎるがこの時点でお互いがそれに気付くことはない。

「とりあえず村を見て回るぞ」

「え、あ、うん。」

断りを入れ村の散策に戻る。そして表に戻ったユーリを見送ったエイナはさっきの事を思い出す。ユーリが女性と話すとイライラするというか、胸がもやもやするというかとにかく調子が悪くなる。

「むう～～デレデレしてたように見えるんだけどなあ。見えるんだけどなあ！」

二回言ってたりする。それぐらいエイナ視点からではあの対応はアウトに近いレッドカードらしい。まだ疑ってたりする。これからもこんなことが続くのかと思うと少し、いやかなり落ち着かない、きっとお互いに。理由は違うだろうが。

「あ～もう、なんで私がこんなことで悩まないといけないのよ！」

そういい頭を抱える。本人が普通にしているのにこっちばかり悩んでいるのだ。傍目からみれば滑稽だろう。頭から離れないのだから仕方がない。けれどなぜ頭から離れないのか？それだけ想っているからに他ならない、そんな考えに行きついてエイナは立ったまま思考がシャットダウンした。主に熱さで。

「とりあえずは、と」

橋の上に目をやる。そこには誰もいない。訝しんでいたが、その近くでパタパタと走り回る人物を確認する。……何かの準備をしているように見える、その人物の特徴が自分が探している人物と合致しているのを気付く。あの調子ならまだ村の中を見てても問題ないか。そこには女の子が所狭しと歩き回って色々とある準備をしていた。

……あの子が動き出すまでに、出来る限り村を回っておかないとな。

その後も村人に話を聞いて回り、色々な人に話しかけていった。色々ハプニングというか事件があったが、それは……

「ああ～私のペンダントが！！」

そんな声に目を向けると女の子が近くの家の屋根を指さして叫んでいた。その先には、野良猫？（角があるが）が口にペンダントを加えていた。……何気に家は６階建てである。めちゃくちゃ高い。あんなのあったっけ？というか、なんだこのイベント。

「こら〜〜！！それは私のよ！返しなさい！」

そういうが猫はもちろん一向に下りてこない。それどころか面白そうに女の子の挙動を見ている。尻尾がピコピコ動いて普段ならばかわいらしいと思うだろうがこの時に限ってはなめているようにしか見えない。事実そうなのだろうが。

「この！おりな、さい！！」

さすがに我慢の限界に来たのか近くの石を掴んで猫に向かって投げる。自分に向かって真っすぐに飛来するそれを、猫は……

『みしゃあああ』

威嚇音とともに叩き落とした、というか届くんだ。６階なんだが、それにしても……猫、だよなあれ。あんな声出るのか。それを見た女の子はもう一度やろうと石を拾う。あれは頭に血がのぼってるな。とりあえず手を掴んで投げるのを止める。さすがにあの高さは不味い。もし何かの拍子に猫に当たっても落ちてペンダントが割れるだろう。

「！！ちょっと何するのよ！」

「慌てるな、そんなに焦って投げると、人の家壊すことになるぞ。それに当たってもペンダント地面に落ちて壊れちまうぞ。大切なものなんだろう？」

膝をついて目線を少女に合わせ、諭すように言ってみる。しばらくこっちを睨みつけていたが、一応納得したのか。手をおろし、ぼそっと呟くように言う。

「旅人のお姉さんに貰った、私の宝物……」

目に涙をためたまま手をぎゅっと握り、絞り出すように言う。心の中でため息をつく。また、段取りくるった、と呆れながら、気持ちを入れ替える。そして、目の前の女の子に視線を合わせて口を開く。

「そうか、それなら、俺が取り返してきてやる。だから泣くな」

驚いたようにこちらを見る。そして、しばらく逡巡していたが、やがて縋るように、

「本当？」

「ああ、できない事は俺は言わないし、する気もないからな」

「……約束だから」

「ああ、約束だ」

その言葉と共に屋根の猫に視線を移す。向こうもこちらの気迫が通じたのか臨戦態勢に入る。さすが獣、本能は分かってるか。油断してたら一気に石でも投げて撃ち落として落ちてきたペンダント回収してやったんだが、無理だな。さっきの子のようになるか、なら……

俺の手で直接捕まえるまで！

方法を決めると、次に呼吸を整えて全力で加速するために構える。

理由はどうあれ、相手は野生の獣、俊敏性は相手が上だろう。獣の本能、直感なんかも脅威、戦闘とは別の意味でいい訓練になる。それに俺は基本約束は破らない。できない約束はしないからであるが……

長距離を走ると見越しておく。できれば一気に終わらせたいが。そうして呼吸を整えていくうちに体の芯から力が湧き上がってくるのを感じる。不思議に思い、体を見下ろす、そこには青白い燐光を放つ自分の体が会った。

な、に。これは……

驚きと共に呼吸を乱す。すると光も消える。湧き上がっていた力もなくなる。不思議に思うが気にせず、再び呼吸を整える。そうすると再び青い光が浮かび上がる。今度は気にせず目の前を見据える。自分の力になるならとりあえず気にしない。そして。

「よーい、どん！！」

掛け声と共に一気に走り出す。家に一番近い木に走っていく。止まることなく更に速度を上げる。枝振りや着地地点を走りながら割り出す。この世界に来てから、全てに能力において比べ物にならないほど上がっている。その力がさらに上がっていると自覚する。だが今は約束を守ることを最優先に考える。

「ふっ！！」

木の手前で地をけり、木に向かって飛び上がる。そのまま幹を蹴りさらに高く飛び上がる。ここまでは村の外の宝箱に攻撃を加えた時にやっているため躊躇はない。できると判っているのだから。け

れど、今回はここから、一番下の枝に足をかけ、斜めに飛び上がる。そして、蹴った枝より高い位置に生えている枝を同じようにけり、さらに高く飛ぶ、それを連続で行う。

「……綺麗」

見ているものからそんな声が上がる。傍から見ていると青白い光がジグザグに木を駆け上がっていくように見えただろう。しかもそれは、速度を下げるどころか、勢いをまし、さらに加速する。さながら天に昇る青い稲妻にも見える。猫は自分の位置に高速で蹴りあがってくる青年を脅威と認識したのか。既にほかの屋根に飛び移ろうとしている。

そしてのその足が屋根から離れ近くの家の屋根に降り立つ。その後も止まることなく屋根をわたり続ける。しばらくした後、ここなら安全と思ったのか、足を止め振り返る。するとそこには。

「ようやく足、止めたな」

青白く輝く燐光をまとった青年が真後ろに迫っていた。すかさず手を伸ばし、捕まえに行く。だが、そこは野生の獣、本能か直感で回避する。そのまま走り抜け、他の屋根に飛び移る。逃がさないとばかりに青年も青白い光を燃え盛る炎のように燃やして追走する。

ここからは、獣と人が屋根を高速で飛び移りながらの鬼ごっこが始まる。速度ではやはり、獣に分がある。だが、本来なら引き離せるそれを、人が持ちうる思考がそれを良しとしない。次に飛び移る屋根を即座に予測し、そこに至るための最短距離を組み上げる。召喚術を身に着けてから、頭の冴えも良い。悩むことなく次の行動に移る。屋根を、ある時は木の枝を蹴り、駆け抜ける。

「いけええっ！！」

その時木の実をいくつか拝借し投げる。それは当てるためでなく猫をこちらが決めたルートから外さないように牽制の意味で投げる。無論足止めの意味もある。そして・・・このままでは追い付けないと思わせておくこと。それが目的である。

『フシャアア！！！』

今更ではあるが、最初猫がいた建物がこの村で一番高い。そこから移動している以上、どうしてもそこからは低くなる。つまり、今の位置はかなり下がっている。2階建ての家に屋根を走っている。このまま下に下りられればそのまま追いつかずに逃げられる可能性が高い。

「逃がすか！！」

だが、迂闊に飛び降りれば俺が追い付く。一瞬の速度ならこちらが上、それが判っているからこそ、速度を下げずに地面を走り抜けれる高さまで屋根を渡っているのだ。そして俺が狙っているのは、その高さ一歩手前、次の次に足を向ける屋根である。そこには天窓がいくつかあり、気を付けないと足がとられるようになっている。

だけど、だからこそチャンスもある！

そう、ここまで走り続けたのは、この屋根にたどり着くためである。ここなら色々手の加えようもあるし、なによりペンダントが落ちても、下が草で覆われているため壊れはしないだろう。結構かかったがようやくつかんだんだ。このまま捕まえさせてもらう。目的

の屋根の手前に猫が降り立つ。

そこに並行して腰の剣を抜き放ち、ブーメランのように回転をかけ投げる。それは、大きく迂回しながら飛んでいく。更にポケットに入れといた木の実を投げる。猫は木の実を避け、屋根から離れる。そして、狙っていた屋根、想定した天窓に向かって下りていく。天窓手前に下りた猫はそのまま走り出す。

その左右から飛来する双剣それは上下二段の斬撃、本来なら直撃のはずのそれを獣は己が本能により躱しに行く。僅か下に開いた隙間、すぐそばに迫った天窓である。ぎりぎりそこに身を隠す。だが、これで詰め。この後剣が通り過ぎれば、青年が追い付き捕まえるだろう。

『きしゃあああ！！』

だが、己が敗北を良しとしない獣は、ここからもう一手限界を超える。天窓の底につく前に天窓の縁に足をかけ剣をかわしざま体を丸めすかさず飛び出す。これならロスを最小限にでき、なおかつ壁を蹴って加速しているため、距離もそこまで縮まらない筈、このまま下りて逃げ切る。自身の勝利を確信した次の瞬間、衝撃。

「捕まえたぞ、くそ猫」

その声に振り向くと、既に青年の手により、空中で捕まれていた。猫が壁を蹴り加速した時、青年は自分の剣を足場に同じことをしていたのだ。青年からすると剣の軌道は下段に当たる。そのまま足を上げ、踏み抜けばいいので、問題ない。そして、いくらロスを最小限にしようと、あの位置からだと空中に飛ぶしかない。天窓によって前は壁なのだから、そこで最大速度で肉薄し捕まえたわけである。

猫は自身の状況が理解できず困惑するのみ、そしてその口から咥えていたペンダントが滑り落ちる。青年は依然空中、落ちるペンダントには届かない。少女が悲しげにそれを見る。次の瞬間。

「来い、テテ！！」

その声と共に、光が集まり、そこから青い何かがペンダントを掴んで地面に着地した。次いで青年も地面に下りてくる。その手に猫を捕まえて……

蛇足だが体を共有する少女はこの一連の行動を見て一時的に好感度が振り切れて一人顔を真っ赤にしながら悶々としていたとか。その後脳内妄想で猫を悪魔、自分をペンダントに置き変え、最後だけテテではなくユーリにお姫様抱っこにしてにやけていたとかなんとか、曰く〈姫と王子様の恋愛って素敵と思わない？〉らしい。わけがわからない。

「……全く、なんでこうなった」

こんなイベント知らんし、一応テテいつでも呼べるようにしてたが、結果オーライってやつだな。それはそれとしてなんでペンダント咥えた猫全力で追わないと駄目なんだか。考えたらかなり鬱になってくるが、約束は破れない。この年になるまで約束は破らないようにしてきたのだ。とりあえずペンダントを返さないとな、幸い傷もないし。

「ほら、約束通り取り返して来たぞ」

「う。うん！」

ペンダントを返すと大事に抱えている。本当に大切だったんだろう。そう思うとやって良かったかなとも思う。しばらくそうしていると急にこちらに顔を向け。

「お兄ちゃん、本当にありがとう！」

満面の笑みでそう言われた。本当にうれしそうなその顔を見て、少し自己嫌悪に陥りかけてた心が沸き立つのを自覚する。うん、まあたまにはこういうのもいいか。そう思った。ちなみに猫は村の外に逃がした。少女の提案だったので特に反対はなかった。

「兄ちゃんやるじゃねえか！！」

「すごいじゃない！噂以上ね。」

「うおおおお！！すげええええ！！」

「なんだよあれ……絶対人じゃねえ……」

「もう一回やってくれえ。金ならあるぞ！」

一部始終を見ていた他の村人が偉くハイテンションで歓声を上げる。とりあえず俺はまちがいなく人間なんだが。後最後の奴、やってもいいが、次に俺に追われるのがお前になってもいいならな！

その後あっちこっちに連れて行かれた。いいもの見せてくれた礼にこれ食ってけ！といいながら色々もらったり、弟子にしてくれという子供がいたり、道具屋の主人にはサービスだ取っとけ！！とか言われてやっぱり色々もらった。

この行動のおかげで村人からの好感度は鰻登りなのだが、何事も過ぎれば毒となる。

……これはいくらなんでも予想外すぎるんだが。

何かともてはやされる。俺は芸能人か何かか？と思うくらいにはすごい。女性たちはファンか追っかけと変わらんような状態になってる。しかも目線が不味い。本気とかいてマジだ。洒落にならんと勘が訴えかけている。多分関わると最終的に碌でもないようなことになると、確信に近い予想が立つ、のでやんわり誘いを断りながら距離を取る。ちなみにこの間中、常夜の石が点灯しっぱなしですごく熱かったことは今更だった。

あまりに熱いのでも一度暇を見て常夜の石の中に入ったのだが、顔を真っ赤にして人の顔すら見ない。人助けしたのだから、というかあれだけ派手に立ち回ったのだ。少しぐらい引っ張りだこに合っても仕方ないと思い、それを話すが、やはり取り合ってはもらえない。仕方がないので、時間を置くことにする。……見惚れたのと嫉妬でまともに顔を見れなかっただけである。

「とりあえず、色々と予想外すぎたが、見返りも大きかったし問題ないかな」

そしてある方向を見て安堵の息をつく。予定が狂ったと少し焦ったりしていたのだが。特に問題もなく思った通りに運んで行けそうだと軽く笑う。見返りというのは、アイテムや村人からの信頼。

後、あの青い光、あの後もいろいろ試したのだが、最初は、呼吸によって生まれる力だと思っていた。どこぞでいう『震えるぞハー

ト、燃え滾るほどヒート！！』とかいうあれと思えばわかりやすい。だが、きちんと意識すると、普通に使えることが判明した。知識を色々思い返して該当するものを思い出す。

なんで、素人に近い俺がストラを使えるんだ？

ストラ・・・この世界における気功のようなもの。その用途も医療や戦闘など多岐にわたる。個人によって強さが変わる。武道家なんかに多い。鍛錬によって強さや総量は上げれる。よく言う気というのはこれの事になる。鍛え上げると開放するだけで街が吹っ飛ぶとか、うん、ないわ。

ストラが呼吸に依存するというのは、専門家ではないから知らんが、気功というなら重要だと思う。現に呼吸をきちんとした方が確実に出力が強かった。これから色々試していこうと思う。手札が増えたことに笑みが浮かぶ。

「さあて、他の所もまわるか」

目線の先のパタパタと出かける準備をしている少女をしり目に他の場所に赴く。あの調子ならもう少しかかりそうだな。・・・その理由は先ほどの追いかけっこが原因だということを知らない。

その後も村の中を散策する。色々と交友関係を広げたり、ノヴァの事を聞いたり短い時間ながら確実に村人と仲良くなっていく。そして、大体全ての場所を回る。一か所を除いて・・・

「……」

さて、ここからだ、な

そこは村にかかっている橋、そこに女の子がいる。まだ話しかけてない唯一の村人だろう。できることなら関わらないほうがいいのだが。先を知っている以上見過ごすのも気が引ける。ま、とりあえず先に他の村人全員と話ができたのはよかった。

会話してさりげなく自分の印象をいい方に持っていく。これでこの後交替の事を知られても、極端に溝はできないだろう。自分一人なら気にしないがエイナは落ち込むだろう。良くも悪くもまっすぐで、傷つきやすいのだ。こっちがいろいろ気を回した方がいい。なにせ、守るといったのだ。できない事はそもそもしない。

無論無駄になるかもしれない。本来はこの次に起こるイベントによって、交替しても問題なく受け入れられるのだが、まあ気にする必要なんてないのだが、もし、もしそれでつまはじきにされる可能性が少しでもあるのなら用心はしておくべきである。それに今やることはもしかするとそのイベントをつぶす可能性があるのだ。

「とりあえず、いくか。そうしないと始まらんし」

とりあえず今しておきたかったことはした、ならば、当初考えていたことを実行に移すまで。

「……あっ！こんにちわ！！お兄ちゃん！！」

そこにいるのは灰色を主とした服を着ていて、頭に青いカチューシャをして、肩から鞄を下げた少女……気のせいか、目がすごくキラキラしている。

「……ああ、こんにちは」

話しかけようと思っていると先に声をかけられた。これはこれで都合がいい。良い筈なのに疲れそうな気がする、何故だ？

「さっきから村の中歩いてた旅人さんだよね？それでそれで！さっき屋根走ってた人だよね！！！」

「ああ、やっぱりみてたか……」

当然だろう。あれだけ派手にやってたのだ。この橋からなら全部丸見えだろう。さっきまで散々その話題を引っ張られ続けたのだ。少し、乾いた笑いが出るのも仕方ないだろう。だから少女のセリフ後半にやたら力が入っているのは聞かなかったことにした。

「うん、ここって見晴らしがいいから！私、この橋の上好きなんだ。でも私あんなの初めて見た！！すごくかっこよかったよ！！私リコっていうの。お兄ちゃんは？」

「俺の名前はユーリっていうんだ。よろしくな、リコ」

「うん！よろしくね、ユーリおにいちゃん！」

そういってリコは笑う。確かに村を見渡せる位置に橋は架かっている。川の流れる音も聞こえる。ここは確かに好む人も多いだろう。今回は特に思い出深いだろうが。覚え続けていれば・・・だが。

「そうか、君はここで何をしてるんだ？」

「私ね、おばあちゃんに会いに行くんだ！」

ああ、知ってる、とは言わずに話を続ける。実際このおばあちゃんという存在がいるのかはさすがに知らんが。

「へえ、会いに行くということは村の外に行くのか？」

「うん！アレスパの町に行くんだよ！」

元気にうなずく。アレスパの町というのは、この村から西にある迷いの森を越えた先にある町である。いずれ行くことになる街であり、俺が一番危険視してる街でもある。

「外は危ないぞ。怖い奴らがいっぱいだぞ。誰かと一緒に行くのか？」

「ううん、私一人だよ。大丈夫だよ、私足速いもん！」

「そうか……」

元気いっぱいに逃走宣言をされる。怖いのとはまた別だと思うが。さてそろそろ切り出してみるか。

「それじゃあ私、もう行くね！」

「ああ少し待ってくれ……俺も一緒に言って構わないか？」

「え？」

「リコが心配なのと、この村の外に興味があってな。駄目か？」

普通は断られるんだが、これで断られたら後追いになる。さすが

にそれだと遅い。さあ、どう出る。

「本当！一緒に行ってくれるの？それじゃお話ししながら行こうね。ユーリお兄ちゃん！」

そういってリコは村の外に走っていく。そして俺は。

……やれやれ、断られた後の事を考えてた俺の考えは無駄だったな。

まさか満面の笑みで頷いてくれるとは思ってなかったので、拍子抜けと言った所である。まあ、一番いい展開だが、さてこれから俺が思うとおりに進むかどうか。うまくいってほしい、そう思うがそれは本人次第、たとえこの行動自体が組み込まれたものでも、まだ村の外に行くという選択肢がある以上他の者たちよりはまだましだと思う。

定着せし者、か。

この世界はサモンナイトの世界でも特に異質。なぜならここは……界の狭間。本来存在しない世界なのだから。

いや、今考えても仕方ない。それは関係ない。

そのせいでこの世界にはある悲劇が存在する。この世界はある事を促す世界であり、それを試す世界。本来この段階では知りえない情報、幸か不幸かそれを俺を知っている。故にせめて少しでもかかわるあの子を助けようと思った。

失敗すれば悲しみが増すだけ、最悪エイナも定着する可能性もあ

る。

けれども、決めた以上、関わった以上後戻りはしない。既にエイナも俺がついていくのを聞いているし、自分で決めたことを翻す気もない。だからこそ、自分の中で笑っているであろう相方と、これから旅路を同じくする小さく純粋な少女の笑顔を曇らせたくないと、心底思った。

「おに～ちゃ～ん、早く早く～！」

「ああ、直ぐに行くよ」

「もう、ボーっとしてたら駄目だよ、置いてっちゃうんだから！！」

「それは困るな、許してくれリコ」

「もう、次はきちんとしてよね！」

焦れたのか、先を促す少女リコ。それに笑顔で応える。これからの事を考え、自分の役割を定めながら。

「……ねえ、ユーリお兄ちゃん。」

「どうした？」

「もし、リコが困ってたら助けてね？」

「……」

その言葉を聞いて強く心に刻む。今の言葉が無意識にでも変わろ

うとする強い意志だと信じて。

「ああ、約束だ。俺はリコを助ける。ああそうだ、約束ついでにそのうちすごく綺麗な風景を見せてやる」

「本当！！それじゃあ楽しみにしてるね。ユーリお兄ちゃん！！」

そして、新しい約束も取り付けておく。この事を大切に思っていてくれれば繰り返さずにいられるはず・・・閉じられた時間からこの子を引き上げる。その目的を胸に秘め歩き出す。誰にも話さず、頼る者のない今、全てを決めるのは、結局の所、自分でしかありえないのだから。

予想外のイベントと密かな決意（後書き）

さて主人公による原作破壊スタートです。うまくいくかはこれから次第です。いくつか用語が出てきましたがきちんと説明できているでしょうか？あいまいにしている部分はまた話題に上がるかもしれません。予定してませんが。

後主人公強化イベント。まあ主人公限定のストラのイメージは某2倍やら、3倍に（10倍とか20倍はない）戦闘力を上げるあれの負担がかなりなくなっているもの、

もしくは本文の通り、オーバードライブでもいいです。使ってる間は状態異常任意耐性、憑依任意耐性が付きます。（自分の意志でかかるか選べる）で身体能力も上がります。全ステータスに5%ぐらいの補正がかかります。あと自然回復。でも使うのをやめると若干疲労します。長時間使うようになるには訓練が入りますが、ユーリ？主人公補正でそんなもん無いですよ。

どこのでもいる一般人ですが、割と何でもそつなくこなすタイプなのでいわゆる天才型です。本気で努力もしてますが。皆様の周りにも「あいつ初めてなのになんであんなに簡単にやってるんだ？」みたいな人はいませんか？作者の周りには、うん、いないな。

蝕む違和感と出会いたくない出会い（前書き）

一応出来上がりました。あーだこーだ考えながら色々書いていたらいつの間にかこんな日に。時間がたつのは速いです。一応また新キャラ登場です。そしてある意味急展開になります。と言うかこの速度で終わるの何話かかるんだろう？不安になってきた。

蝕む違和感と出会いたくない出会い

緑の草原が広がり日の光がさす平原ここは《旅立ちの野》と呼ばれるツェーゼの村を出てすぐの平原の名である。ここは旅人の取ってほぼ必ず通る所であり、最初は大体ここに来ることが多いのでついた名が旅立ちの野である。

そこを歩く二人の人影があった。一人は腰に双剣を差しもう一人を見守るようにゆっくり歩く青年ユーリ。もう一人はせわしなく走り回りしきりに青年に話しかける鞄を肩から掛けた少女リコ。二人は傍から見ていると仲のいい兄妹に見えた事だろう。

自分の前を楽しそうに歩く少女を視界にとらえこれからの事に思いをはせる。これから行っていくことは自分の自己満足かも知れない。結局何の意味もなく、悲しみだけが残り、何も得るものなどないかも知れない。

「（それでも、関わっていくんだからこの短い時間で変わったものだな、俺も。）」

そんなことを考え、苦笑いする。元々何が起こっても不思議ではないのだ。自分が知っていることが全てではない、それはいい加減わかっている。だからこそこれからをよりよくしようと努力する気になるのだ。届かないなら届くように変えるまで。

「ユーリお兄ちゃん！！」

ふと前の少女、リコから声がかかる。何かあったかと目を向けると、なぜかキラキラした目でこちらを見ていた。その眼を見て先ほ

どの村であったことを思い出したのは仕方ない。

「どうした？モンスターでも出たか？」

「ううん、違うよあのね、村でやってたあの光ってどうやってたの？」

「ああ、あれはな・・・」

話しながらストラを使う。自身の体が青白く輝き光に包まれる。それと同時に体の奥から力があふれてくる。それを目を輝かせて見るリコ。

「こうやってたんだが。」

「すごいすごい！！私もやってみたい、ユーリお兄ちゃん私にも教えて！」

そう言われて少し考える。確かにストラをつかえれば身を守ることに関しては、そこそこましにはなるだろう。けど少し疑問がある。自分はほとんど勢いみたいなもので簡単に使っているが、結構難しいもののはずなのだ。それこそ修行を積んだ武闘家などが主に使っているから間違いない。

だが、それを教えることは自分にできるだろうか？ストラの知識はそんなにない。当然ゲームでわかる分しか知らない。というか使い始めて一日すら立ってない。この世界に一日とか関係ないが。ならどうするか・・・適当に知ってる修行法でも教えるか。体が鍛えれるなら一緒だし。それでもいいかと思う。まあ、とりあえずストラに関係しそうなところから教えるか。

「そうだな、別にいいぞ。」

「本当！！やったあ！！」

「けど使えるかどうかはリコ次第だからな。それは俺にはどうしようもないからな。」

「うん私頑張る！！何すればいいの？」

気合十分と言った所でリコが聞いてくる。まずは自分がストラに気付いたきっかけである呼吸から教えてみる。こういうのは慌てずに行動したり、スタミナ温存とかで重宝する。ストラ関係なく練習して損にはならない。そうしたことを覚えていくことでストラが使えたらいいなという希望もある。

呼吸の仕方を教えてリコはそれをがんばって実践している。傍から見ている分にはとても微笑ましい。和んだ空気になっているのが判る。その空気に当てられてか思い出したことがあった。

「（そういえばエイナにあの事言ってなかったな。）」

思い出したことを伝えるため常夜の石を使いエイナに会いに行く。中ではエイナが金づち片手に一人奮戦していた。

「・・・何してるんだ？」

「え、ああユーリ。ど、どうかしたの？」

こちらに気付くと今まで作っていたものを急いで背中に隠す。な

んか必死になっているがもう遅い。

「後ろに何隠したんだ？」

「え、えーと、こ、これは～ねえ。」

何やら、しばらく言いよどんだ後観念したのか隠していたものを前に出す。それはもう原型が何かわからない木の固まり、言い換えると新しい芸術にも思える。早い話がガラクタに見える。

「ガラクタ・・・だよな？」

「ちょ、もう少し言い方ってものがあるでしょう？！」

「ならどう言えと？」

「・・・置物とか？」

「・・・自分で疑問に思うなら言うな、と言うかそんなもん置きたいのか、お前は。」

正直に言ったら勢いよく反論されたが聞き返すと何とも頼りない反論が聞こえた。こちらの疑問に少し困り顔で悩んだ後、弱弱しく首を横に振る。自分で置きたくも無い物をどうしろと言うのだろう。と言うより、何故作ったし。

「はあ、で、何を作ろうとしてたんだ？物によっては俺も手伝うけど？」

「え？ええ～と、なんというか、ね。」

何か手助けしてやろうかと思い何を作っていたか聞くと、途端にばつの悪そうな表情になり、顔を若干俯かせながら答えた。

「あの、ね、ユーリが色々作ってるのを見て私も何か作ってみようかなって思って。」

「ああ、それで？」

「うん、最初は何か小物でも作ろうかなと思ってたんだけど、うまくいかないからもう少し大きな物にしようかなって思って色々考えてたんだけど気付いたらこんな感じになってて・・・あはは。」

つまりはこういうことか。最初は小物を作ろうとしたが断念。もったいないからそれを使って何かできないかと試行錯誤しながら作り直していって今の大きさになると、どんな思考回路でそうなったんだか。

俺の足元にはエイナ曰く置物？が転がっている。見た目でいうと某５３万の宇宙人の第３形態とエイリアンを足して２で掛けたような感じになっている。正直木で作った筈なのになんか瘴気か何か放ってる気がする。普通に空気が淀んでる気がする。

「おらあ！」

「ちょっ、ちょおっと何するのよ急に！いくらなんでも壊さなくてもいいじゃない！」

あまりにも身の危険を感じたので早々にストラで破壊する。無論触りたくないので拳圧を飛ばして破壊する。

その時変な違和感を感じた。その違和感はほんの少し、そうほんの少しだけ気になった程度のもの、その筈なのだが、なぜ今まで気にすらしなかったのか？一度気にしてしまえばその疑問は一気に広がる。伝えようと思っていた事柄も、目の前のエイナすら意識から消える。その疑問は・・・

「（待て、今、俺は何をした？なんでこんなことができる？）」

先ほど行ったことを思い起こす。ストラが攻撃に転用できるのは知っている。拳に乗せて飛ばすことも可能と言えば可能だろう。だがそれは今考えて思い至ったことだ。少なくとも先ほどまでそんな考えは無かった。それに何の抵抗もなく成功した、まるで元から使い慣れているように、自分の一部であるかのように。

「（さすがにこれはおかしい。少なくとも俺はこんな事をしたことなんてない。したことがない筈なのにほとんど何の違和感もない。気付いたのだって行動を起こした後なんとなく不思議に感じたぐらいだ。）」

実際初めてやったことが意外なほどうまくいく場合があるが、そういうのは何らかの情報を得ていたりなにかのきっかけがあったりと自分の中になんらかの手ごたえがある場合が多い。そういったものがなくたまたま突然うまくいって後に気付くということもあるにはあるだろう。

「（だが、多すぎる。少なくとも俺がこの世界にきて行ったことのほとんどが初めての事だ。それなのに問題も無くそれどころか完璧ともいえる精度で行えている。はっきり言ってこれは異常だ。）」

そう、ユーリはこの世界に来てからの戦闘、そのほとんど全てに置いて初めての経験と呼んでいいものだ。その中で、今に至るまで何の抵抗もなく戦えているのはどういうことだ？初めて剣を使った時、普通に苦も無く扱えることができた理由は？洞窟での戦闘で初めての命のかかった戦いであれだけの事がなぜできた？なぜ、ストラが何の問題も無く使える、なぜ、こんな使い方を知っている？

考え始めればおかしい事だらけだ。そもそもそれ以前に戦うことに何の疑問もないのはどういうことだ？俺は単なる一般人。血が好きだとか戦うのが好きなんてことは断じてない。そして戦闘に対するセンスがあるなんて思ったこともない。

「（ならなんでここまで戦うことに関して抵抗がないんだ？まてよ、俺はこんな性格だったか？）」

疑問を追及していけば知りたくもなかった自分の異常性が浮き彫りになる。戦闘力にしてもそうだが自分が知らない経験や力、そして咄嗟の判断、戦闘における先読みまで行う頭脳、全て元来自分にはない筈のものだ。

「（なんでだ？どこでこうなった？）」

最初に思いつくのはこの世界に来た瞬間、その時に何かの力や存在を取り込んだ場合。サモンナイトにおける1がそれに当たる。だがこれの場合全てに説明はつくが確認の仕様がない。他の可能性としてはノヴァに転移させられた後、エイナ以外に何か混ざってこの体の宿ったか、後は・・・

「（そういえば、あの時エイナを助けたとき・・・）」

転生の塔で捕まっているエイナを助けようとしたとき、触手を切り裂きながら突っ切っていった、けれどその時の返り血はどうなった？この身に降り注ぎその後は？

「（あの時、この体に染み込んでいくように入っていった。）」

そう、返り血が不自然に体に吸い込まれるように、まるでスポンジに染み込む水のように見えたのだ。そしてその後洞窟に送られ何の疑問もなく戦い始めたのだ。逃げることなど考えもせずに。

「（確かに最初から体がいつも以上に力強く軽く感じた。それでも洞窟に行くまではまだ普通だと言えた。その筈だ。）」

主に変わったのは洞窟からだろう。塔では軽く混乱していたから参考にはならない。問題は一度落ち着いてから以前との変わりようだ。そして、あの時からだ。髪が一気に伸びたのは。身体的な変化はあの時だけ、やはり何かあるのだろう。

「（やっぱり、あの返り血で何か入ったのか？もしそうだとすると碌なものじゃないな。下手すると俺がラスボスとかならないだろうな。）」

考えを纏めると今の時点では情報が少なすぎてはっきりとは分からない。けれど確実に何かある。自分ですら違和感を感じないほど染み込んだ何かが、この身に宿っているのはたぶん間違いない。それを抱えたまま現状維持になるだろう。どうしようもない。推測ばかりだし無論全然違うかもしれない。

「（調べることがまた増えたな。）」

そう思いとりあえず思考に一区切りを入れる。ここまでの思考時間はほんの数秒、目の前には不思議な顔をしたエイナが此方を見ていた。それと同時にここに来た用件を思い出す。

「まあ、とりあえずガラクタ製造は置いといてだ。教えとくことがあったんだ。」

「だから、もう少し言い方ってものが、あ〜〜もういいわよ。で何？」

心持ち拗ねたような感じでこちらの言葉を聞いているエイナに苦笑いしながら要件を言う。

「ああ、前に風呂関連でトラブルあっただろう？」

「え？あ、ああうん。そ、そうね。あったわ、ね。」

言った途端に顔が真っ赤になって口ごもる。まあ、不可抗力とはいえ大して気にも留めていない男に肌をさらしたのだ。思い出すのも嫌だろう。そう思い簡単に言う。

「もうあんなことにならないようにこっちに作ったから、風呂場。」

「・・・は？」

「・・・だから、風呂場作ったんだって。こっち来てみな。」

そういって建物の中に入る。何が何だか判らないといった表情でついてくるエイナ。建物の奥、小部屋がいくつか左右に並んでいる中で一番奥の部屋のドアを開ける。そこには日本でいう檜風呂が用

意されていた。

「ほら、これだ。」

「い、いつの間にこんな物作ってたの？」

「前にテーブルとイス作ってる時に来ただろ？あの時にはできてたぞ。」

「ええ！早くない？」

「大体はこの部屋が物置みたいになってたからそれを少し改良しただけだ。だから思ったよりもずっと早く出来た、それだけだ。」

そして元々隣の部屋に水を引くポンプがあったのでそこを少しいじってこっちの部屋に流れるように弁やら何やら作ったのだ。そして、湯を沸かせるように改造とかして後は細かい所を色々いじって終わりと言った所だ。部品やらなんやらは割と探すと見つかった、常夜の石すげえ。

「だから、こっちだったら気にせず入れるだろう？まあ、表に出たときに綺麗になっているかは知らんが気分的にはましになるんじゃないか？」

「えっと、これって私のため、とか？」

説明が終わるとそんなことを聞いてきた。とりあえず応えておく。

「まあ、そんなとこだ。疲れとか溜め込まれてもなんだからな。適当にくつろいでくれ、使ってこそ意味があるんだし。遠慮すんな。」

「う、うん。それじゃ、せっかくだし入らせてもらうね。」

「ああ、どうせリコがいる以上交替しづらいだろうし、ゆっくりしとけ。」

「うん。ユーリ・・・ありがとう。」

その言葉に軽く片手を上げて応える。そして表に戻る。表ではリコが変わらず呼吸を整えていた。それをゆったりと眺める。そうした中で自分たちに近づいてくる気配を感知する。静かに戦闘態勢に移る。そして気配の元に目を向けると。

「（・・・確か、ベクサー、だったか。）」

視線の先に居るのは頬に傷を持つ黒髪の男性。黒を主とした服装をしており、傍から見た印象はヤクザ、じゃないならチンピラだろうと思っている。軽い言動が目立つし。とはいえその実力は疑いようもないし、頭の回転も速い。敵に回すと厄介の似合う男ではある。

当然その出会いに少し驚いている。確かに村を出てすぐここで出会うのだが、それは本来リコが村を出た後主人公が追いかけて出会うといったもので、リコと一緒に出ている以上時間がずれると思うんだが。

そこまで考えて一つの出来事を思い出す。猫との追いかけっこ、あれを見ている間リコは出発の準備を忘れ見入っていたらしい。そしてしばらく俺の事を見ていたらしい。それがあったからこそ時間の帳尻がうまいことあったんだろうと納得する。

「（ここで関わってもいいが。）」

ベクサーともう一人彼のパートナーともいうべき存在は俺にとっては将来的に必要になる。それは間違いない。問題は現在の状態でどう接触するか？である。本来不可避のイベントなのだがこれはリアルタイムの世界なのだ。すれ違いする事なんていくらでもあるだろう。故にここで自分の印象を強く与えておきたい。ユーリは少なくともいずれ関わるのだから今何らかの接点を持ってもいいと思っている。

「（とはいえ、滅多なことは言えないしどうする？）」

今ベクサーに事の真相を言うのはたやすい。しかし、ベクサーがそれを信じるかどうかは全くの別問題で疑われる可能性の方がきわめて高い。というか信用する部分があるなら教えてもらいたいぐらいだ。少なくともそんな間抜けではない。

それに中にいるエイナにもそれを知られることはマイナスにしかならない。本来この世界の真相はとんでもなく暗い事実になる。現状エイナにそんな余裕はない。しかもこれを言うということは俺は初めから全て知っていたというのと同じになる。それは今までの出来事の否定につながるし、最悪、俺が黒幕と思われかねない。

「（適当に会話しておくだけに留めて置くのがベストか。）」

結局、考えるだけ考えてそんな結論しか出せない。迂闊に情報を教えて、下手を打たれても困る。やはり現状維持、その上で接点を作る。そんな所に落ち着く。守るべきものがある以上下手もなかなか打てない。難儀な立場である。

「（俺だけ知っててても手詰まりだしな。どうしようもない。）」

とりあえず近づいてくるベクサー相手にどんな話をしようか、こちらはストラの影響か、やたらとよくなった視力のおかげで向こうが気付く前に見つけることができたのだが、向こうはまだこっちには気づいてはいない。そしてもうすぐ来るであろうベクサーのパートナーをどうしようか、前者はともかく後者はからかうのも命がけだなあと、少し笑顔がひきつったが。

「リコ！少しこっちに来てほしいんだが。」

「うん！！今いくね！」

とりあえずリコを呼び戻す。これから下手すると戦闘が始まるかもしれないのだ。あまり離れられると危険だ。とりあえずリコを傍に置いておく。そして道の向こうから早歩きでこちらに歩いてくる人物を改めて視界に止める。

「おおっと失礼。」

ベクサーが傍まで来てこちらに当たりそうになる。何か考えていたのか注意が散漫になっていたらしい、顔を確認する。間違いなくベクサー、確かこの時は何かのようで急いでいたはずだ。何も言わなければこのまま通り直ぎていくだけだがそれはさせない。

「大丈夫だ、外から来るということはあんたも旅人か？」

その言葉に一旦足を止めこちらに目線を合わせてくる。

「ああ、そうなるな。俺はベクサーだ。あんたは？」

律儀に答える。どのみちベクサーよりも後から来るもう一人を引き留めてやろうと思っていたのでうれしい誤算である。リコは俺の服を掴んで後ろに隠れている・・・服が伸びるんだが。

「ユーリだ。こっちはリコ。」

「よろしくな、ユーリ。とリコちゃんだったか？」

「うん、よろしくね。ベクサーおじちゃん。」

「お、おじちゃん。」

リコの言葉に打ちひしがれているベクサー。とりあえずへこんだままで居られても迷惑なので話を戻す。

「あんたはもう旅を初めて長いのか？」

「ああ、まあな最近相棒が一人できたんだが、まあ二人でいろんなところを回ってるんだよ。」

気持ちを切り替えたのか、忘れたのか、完全に足を止め話しかけてくる。・・・急いでんじゃないのか？まあ、都合がいいのでそのまま会話を続ける。最近と言うのがどういうことか気になったがとりあえず無難に会話する。

「二人？」

「ああ、もう来ると思うが。お～いリニア！」

その声に応えるように奥の道から一人の人影が見える。

「・・・申し訳ありません。ベクサー様、敵性戦力の殲滅に時間がかかりました。」

その人影は機械的な口調で話しかけてくる。リニアと呼ばれたその人物は見た目からでも判るとおり人ではない。肩から直接突き出ている機械や耳にある機械がついている。フラーゼンと呼ばれる機械人形である。とはいえ知識では知っていても見るのは初めてなので少し感動したりもした。ただ、これからジェノサイドされそうだが。

「ああ、別に構わねえよ。と言うか、なんで戦闘挑んでるんだよ。隠れてやり過ごせと言ったろうが。」

「こちらの方が後の禍根を絶てるので楽です、それに私の機嫌も上昇します。」

呆れた声でそう言う。どうやらベクサーと離れていたのは独断でモンスターの群れに突っ込んで叩き潰したからしい。予想はしていたがやはり攻撃的な性格らしい。さてどうしたものか。

「・・・そっちがさっき言ってた相棒か？」

「まあな、リニア、紹介ぐらいしな。」

「・・・では、機械人形（フラーゼン）のリニアです。お見知りおきを。」

思っていたよりも丁寧に挨拶してくれた、くれたのだが目が笑ってない。そのままこちらに顔を近づけると、ぼそっと吐き捨てるよ

うに言葉が聞こえた。

「チョウシニノルナヨ。」

さすがに初対面でこう言われるとこちらも思う所がある。無論こういわれるのが判っていたとしても、である。その言葉に対して不敵に笑みを浮かべてこう返す。

「心配しなくても自分の事ぐらい自分で何とかしてるさ・・・誰かさんとは違ってな。」

少し皮肉ったように返す。即座に挑発と理解したのか、腰から拳銃を引き抜きこちらに向ける。躊躇なく引き金を引く。狙いは俺の顔。銃口から黒い何かが勢い良く打ち出される。それを即座に首を動かして躱す。髪が風に揺られてなびく。リコが口を開いたまま絶句している。

「ちっ、外したか。」

「だから言ったろ。自分の事くらいどうにかするさ。」

「・・・・・・」

リニアは既に戦闘態勢に移行しているらしく無言でこちらに銃を向けている。こちらも双剣に手を伸ばし相手の動きを注視する。お互いに既に体勢を整えている。・・・正直、内心冷や汗でいっぱいだが、いくらなんでも喧嘩ごしすぎだろう。まさかいきなり戦闘とは。

一度だけ視線を外しリコを見る。かなり不安そうにこちらを見て

いる。手をリコの頭において撫でてやる。落ち着くとかなんとか本に書いてた。続けてベクサーに視線を向ける、すまなさそうな顔と呆れた視線が見える。割と手を焼いているらしい。止めるかどうか考えているようにも見える。

だが、戦闘自体はこちらも予想はしていた。首を動かして意志を伝える。こちらの意図に気付いたのか、ため息を吐きながらリコを連れて離れる。なら問題はないと判断。目の前の事に集中する。

元々は戦うつもりはなかったがこうなることも予定のうちである。それに原作の通りならこれから先戦うことになるかもしれないのだ。なら銃撃戦も経験しておいた方がいい。ここから先、機械兵士なんかもいるのだから、慣れておくに越したことはない。ベクサーも止める気はないようだし。

ベクサーは近くの芝生に腰を落ち着かせて見ている。あれはこちらを観察している眼だ。今のところ関係がないであろう俺の事を見るということは、常日頃からあらゆることに目を光らせているということに他ならない。小手先の技術が通用しない奴はそれはそれでやりづらい。こちらの手札もさらすが覚悟の上、別に初見殺ししかできない訳じゃない、狙いもしないが。

リコはベクサーから何か言われたのか、心配そうな顔こそしているが止めようとはしてこない。何を言われたのか気にはなるが今は置いて置き、目の前に視線を戻す。

「・・・来ないのですか？」

そんなことを考えているとリニアが話しかけてきた。元々カウンターを狙っていたのか、どことなく余裕がある。今まで様々な遺跡

や森なんかを攻略してきた経験と自身の演算による先読み、そういった物が積み重なった自信があるのだろう。無論隙はない。けれど、ここで止まる気はない。

「・・・それならお望み通り、仕掛けてやるよ！」

相手が待ちを選ぶならこちらが攻めて突き崩すまで。そのつもりで一気に突っ込む、お互いの距離は大凡１０ｍ、無論感づかれる。こちらの攻勢を見たリニアが迎撃に出る。その手の銃をこちらに向け一気に打ち出してくる。先ほどとは違い、球形のエネルギー弾のようなものがマシンガンのように飛んでくる。それを投げナイフで撃ち落とす。

「甘えよ。」

「っ！」

こちらが弾を打ち落とすのは予想から外れたのか、少し目を細めながらこちらと一定の距離を保つように動き始める。こちらが押せば引き、こちらが引けばすかさず押してくる。無論この距離は向こうの距離、こちらから仕掛ける方法は限定される。無論この距離でも負ける気はない。ないが銃相手の遠距離戦は進んでやりたいとは思わない。ナイフと銃では弾数に大きな開きがある。

「はっ、どうしたよ？こんなんじゃあ俺はやれんぜ。」

「・・・」

少し挑発してみても聞く耳持たず、まあ俺もうまくいくとは思っちゃいない。これで近づいてきたらそいつは負けフラグにしかなら

んしな。剣士相手の接近戦は避けるべき。無論強さにもよるが。だが、一般的にはであり、全てがそうと言うわけでもない。例えば・・・遠距離戦が可能な剣士もいるかもな。

「だんまりなら構わねえよ。けどな、その距離がお前だけのものだと思うなよ？飛べっ！」

「なっ！」

不意打ち気味にストラを開放し剣に乗せて斬撃として飛ばす。いきなりの予想外の対応に僅かに動きが止まり、次への反応が遅れる。そこへ容赦なくストラを纏い突っ込む。斬撃を飛ばしながら。・・・やはり体が勝手に反応して知らない筈の技術や能力を何の違和感もなく使える。その疑問をわきに追いやり目の前の事に集中する。

リニアもすぐに行動を再開し、ストラの斬撃を銃で撃ち落とす。だがその後ろには無数のストラの斬撃、更にその後ろには俺も突っ込んでいる。この波状攻撃は今からの対処は難しい。本来なら一気に後退する所だろう。

だが、リニアには諦めどころか、苦戦していると言った感じすらしない。銃口をこっちに向け、そのきれいな口元に笑みを浮かべるとこっちを見据え自身の勝利宣言のように告げる。

「確かに先ほどの対応には目を見張りました。ですがこれだけの距離があれば対応策の一つや二つ、阿呆でも思いつきます。不用意に距離を詰めたあなたの負けです。」

こちらに銃口を向けたそのままの体勢で止まる。そして銃口の先に先ほどとは比にならないほどの莫大なエネルギーが収束していく。

そして次の瞬間溜りにたまったエネルギーが放出される。それはストラの斬撃を打ち抜きそのままこちらまで突き抜けてくる。

「まあ、読んでたよ。」

冷静に口から言葉が出る。それが当然であるかのように。砲撃を見据え2歩分体を横へずらす。その直後自分のすぐ横を突き抜ける。間違いなくカウンターではなった一撃がはいったと思ったのだろう。リニアの顔には今度こそはっきりとした驚愕が表れていた。

「さあ、今度はさっきみたいに距離はないぜ？どうするよ。」

「・・・ならば、こうします。」

そのまま、突っ込み一撃を見舞おうとしたがリニアの体から火花が散っているのを見て、攻撃を中断し、そのまま一気に離脱する。次の瞬間、目も眩むほどの雷光が迸る。それを見つめたユーリは静かに呟く。

「なんか強くなってるだろうなとは思ったが、これは・・・」

『放電』機械兵士やフラーゼンなどの機界の存在が持つ能力の一つ。自身の中の体内電圧を瞬間的に引き上げ、周囲一帯に麻痺の効果を与える。

リニアが持っているとは思わなかったが、予想はできた。原作よりも難易度は上、しかも、相手は生きている一個の生命、なら自分が思いつかない能力や、技、戦略の一つや二つ持ち出してきても不思議ではない。驚いた事には驚いたが、表向き無表情だが。

「・・・まさか躱されるとは思ってもいませんでした。素直に驚嘆します。」

光が収まった後、静かにこちらを見ながらリニアは驚きを口にする。正直先ほどの砲撃で終わると読んでいたのだ。タイミング的に躱せるものではなかったはず、それにあれほどの攻撃を目の前でやられれば足がわずかでも止まる筈、それすらなく、まるでこちらの手を知っているかのように軽々と回避した。

「それはどっちの事を言ってるんだ？」

「もちろん両方です。今の行動で終わりにするつもりでしたので。」

その後の放電にしてもそうだ。準備こそしていたものの、使いはしないだろうと思っていたのだ。これを使うと体への負担がかかる。そのため使う気などなかったのだ。けれども油断ならないと目の前の人物は少しでもこちらが隙を見せれば一気に終わらせに来ると、演算や経験ではなく、機械にあるまじき直感に近いものにより保険として準備しておいたのだ。

「ですが、また距離は開きました。ここならもう先ほどの攻撃は対応できます。同じ手は効きません。」

「俺もさっきの手が二度効くとは思ってねえよ。」

素直に言う。仮にさっきの方法をしてもその場しのぎで今度こそタイミングを合わせられるだろう。相手の手の内を見るために少し攻めてみたのだが、思ったよりも凶悪なものが出て来て嫌になる。とはいえ、こちらもまだ打てる手はある。

けれど召喚術は使わない。用意はしておくがこの戦闘で使うつもりはない。エイナに関しても同様、交替する気はない。あくまで自分一人でどこまでやれるか試したいのだ。そのためにある宣言をしておく。

「さて、準備運動はこれくらいでいいか？」

「そうですね、こちらも機体が温まってきたところです。」

お互いに前座は終わりだという。ここから始まるのはお互いの知恵と力による本気の戦闘。二人の目つきが先ほどとは変わり鷹の目のように鋭くなる。お互いの間の空気が一気に重くなるのを感じる。その中動き出すものはいない。リコもベクサーも目を離さず、見入っている。周りに音が消え静寂が広がる。そして先に動いたのは。

「行きます、これはどう対処します？」

先に動いたのはリニア、肩についている機械が開き中からミサイルが打ち出される。前後合わせて４発、ホーミング機能がついているのか、こちらに向かって来る。この攻撃は想定内、足元の石を拾いストラを纏わせ投げつける。

「こんなもんか？」

投げた石は全弾ミサイルに吸い込まれるように当たり、爆発を起こす。そして、次に考え付くのがその爆風に乗じての奇襲。油断なく煙の中を見つめる。その時、ほんの少しの違和感を感じた。ささいなほんの少しの違和感。それは足元から感じる、微弱な振動として。

「（下から何か来る！）」

気付いた直後ストラを纏い双剣を構える。次の瞬間地面の下から銀色の何かが勢いよく飛び出す。それを双剣で弾き飛ばす。更にその直後煙を突き破り先ほどの砲撃がこちらに向かって突き進んでくる。

こちらは双剣で迎撃したために体勢が崩れている。タイミングとしては今以上はないだろう。それほど完璧なタイミング。こちらは何もできず当たるのみ。防御はおろか、回避も無理。本来ならストラを全開にして防御に回るしかない。

だが、ユーリの目には諦めなど無く、体が自然と対処法を考えそれを実行する。確かに体制は崩れているがけれどまだ動く部分はある。それは無意識に近く本能的なものそれを頼りに体を動かす。ユーリの知識にもない事を当たり前のように行う。

「なかなか考えたな、けどまだ甘い！」

防御も回避もせず、迎撃のみ、ストラをさらに剣に込める。すると今まで剣にストラがまとわりついているだけだったのが剣そのものが青白く光り出すようになる。そして、体勢が崩れたまま剣をさらに振り切る。そして螺旋を描いて、剣を砲撃の方へ切り込んでいく。

遠心力と何より込められた莫大なストラにより砲撃を押し切る。自分のすぐ傍を通る砲撃を特に気も止めず、相手の動向に注意を払う。目標は砲撃のあった射線の向こう側、ならば一気に攻め立てるまで。

「だったら、今度はこちらから仕掛けるまでだ！」

ストラを纏った剣を地面にたたきつけ衝撃波として放つ、それは地面を隆起させながら、さながら地割れのように突き進む。その後ろをストラの斬撃を飛ばす。そしてその後から追い越す勢いで走り出す。

「今のは当たったはずですが。」

リニアは静かに思考する。確かの今のは不意を突いたはず。最後の砲撃を当てるために体勢を崩し連撃で足を止めたのだ。手ごたえはあった。けれど相対している青年はこちらの予想を超えた行動をとってきた。油断はしない。そしてその考えは当たることになる。

煙の中から地割れが此方に向かって突き進んでくる。どうやったかは判らないが、先ほどの攻撃でも仕留めきれてないのだろう。その地割れをグレネードを投げて破壊する。その後ろからすかさず斬撃が飛んでくる、それを銃で撃ち落とす。

「くっ！あいつはどこに。」

「こっちだ！」

「なっ！！」

上空から聞こえた声に動きが止まる。ユーリは先ほどの地割れを足場に一気に上へと飛んでいた。そして一連の攻撃でリニアの足を止めて不意を突くことに成功していた。

そして影がリニアの背後に下りる。それと同時にリニアの体から

雷光が迸る。放電、再び周囲を閃光が満たす。閃光が収まった時、リニアの首には双剣が押し当てられていた。

「俺の勝ちだな。」

「・・・・・・」

その声で勝負は終わりを告げる。リニアは無表情ではあるが顔が何となく悔しそうには見える。というか、なんでここまで熱くなったのか不思議に思う。まさか会うやつ全員にこうやって銃弾かましてるのかと不安になった。離れて見ていた2人もこちらに来る。

「・・・・・・ベクサー様。」

「どうした、リニア？」

しばらくするとリニアが口を開き、予想外の言葉を言う。

「彼を連れて行くべきだと思います。」

「はあ？なんでだよ。」

ベクサーが呆れた声でいう。俺も同意見だ。それに対し、こちらを睨みながら口を開く。

「彼がいればいざと言うとき私の退屈を潰せます、サンドバッグ的な意味で。あと、盾には困りません。」

そんなことをのたまうフラーゼン。何も言えない周りの三人、奇妙な沈黙がその場を包む。

「え～ああ、少し急いでるんでな。失礼させてもらう。またどこかで会えたらいいな。それじゃあな。」

ベクサーがそう言って、さっさと村に入っていく。間違いなく逃げた。リニアが恨めしそうに睨んでいる。とりあえずリコを連れてさっさとその場を離れる。後ろは見ない。なんか聞こえるけど気のせいだ。なんか銃弾が飛んでくるけれど気にしない考えたら鬱になりそうだ。どうしてこうなった。

ちなみにとある女の子は外の事に気付かず、長風呂に浸かってご機嫌だったとかなんとか。後、常夜の石の中で入浴すると表に出てきた時きちんと綺麗になっていると後に判明する。

「・・・お兄ちゃん。」

「気にするな、考えたら負けだ。」

「・・・うん。」

なにか嫌な雰囲気を抱えたまま旅路に戻る。目的は一応達したはず。予想したより複雑だがとりあえず接点はできた。さあ、これがどう転ぶか。

「まあ、気分を切り替えていくとするか。」

「うん！」

元気一杯に返事するリコを見ながら視線を前に向ける。その向こうには森が見える。また何か予想もしていない事態に会いそうだな、

と考えながら歩いていく。リコはまた呼吸の練習をしながら歩いている。調べることは増えるばかりで解決の兆しもない。それでも前へ行くしかない。その果てに何が待っているとしても。

・・・そして、その行動を見つめる視線がある事に気付かず、黒い甲冑に身を纏った何者かは何も語らない・・・

とある村の中で・・・

「・・・けど、珍しかったな。リニアがあそこまで他人にこだわるとはな。と言うか初めてじゃあないか？」

「・・・初めて私をあそこまで追い込んだのですからむしろ当然では？」

「いや、お前の負けだろう？あれは。」

「ナニカ、イイマシタカ？」

「・・・なんでもない。（やっぱ止めるべきだったな、あいつが予想以上だったからつい止め損ねたんだよな。）」

「そういえば、あいつの名前は？」

「ああ、確かユーリって言ったっけ。」

「そうですか。・・・ユーリ。」

「（こいつ、まさかあいつの事・・・まあ、何にせよ不憫だな。同情するよ、ユーリ。）」

そんな会話があったとかなんとか。終われ。

蝕む違和感と出会いたくない出会い（後書き）

伏線っぽいものを色々考えてみました。まあ、最初から考えていたものが多いですが。実は主人公は本来こんな性格じゃないです。厄介ごとは見ない振りするタイプです。現代っ子なんで。

それがある異常がいい方向に働いて今みたいな性格に変わってます。一応性格はこれで行きます。元の性格を書くことはないです。裏設定みたいなものだと思えば楽になれます。

後、この世界のモンスター設定を考えると色々人として壊れてると思います。この設定は後に書くと思います。ゲームでも多分こうだったはずですが・・・まあ違ってたら独自設定と言うことにします。

狂気との死闘　紅と蒼の交差（前書き）

出来上がりました。けどなんかボリュームがおかしいです。本当に。どうしてこうなった？ネタがない筈なのに、これはなんだろう。正直作者も訳が分かりません。

今回も色々急展開です。戦いやフラグが熱い？です。ようやくハーレムっぽくなったかな？と感じてます。ん？まあ、本編をどうぞ

狂気との死闘　紅と蒼の交差

晴れ空の元、小柄な影が楽しそうに野原を走り回る。それを見守る青年、その二人が野原を歩き、時には話をしながら仲良く旅を続ける。

リニアとの出会いの後、旅立ちの野を歩き、時折現れるモンスターを、リコに何かあってからでは遅いので、できるだけ避けるように動き、気付かれないように目的の場所に向かう。無論全てが全てとはいかないが。

「もう少ししたらね、森が見えてくるんだよ、それでその森を越えるの。」

リコがこちらを向いて説明してくる。もう知ってる。とは言えない俺はその言葉を相槌を打ちながら聞く。何が楽しいのか、その顔は満面の笑みが浮かんでいる。心なしか胸を張りながら話している、それを微笑ましくなりながら聞いているユーリ。もし誰かが見ているなら本当に仲のいい兄妹に見えただろう。

「そうか、有難うなリコ。俺は土地勘がないからな。この辺は初めて来たから助かってるよ。」

「本当！えへへ～、私が居て良かった？」

「ああ、良かったよ。」

「そっか～、よかった～、私もお兄ちゃんが居てくれて嬉しいよ、お兄ちゃんと話すの楽しいし。」

「それは何よりだ、せっかくいい天気なんだから気分良くいかないとな。」

「うん！！」

元気よく返事をするリコ。それを見、笑顔を返しながら、今の自分の言葉を思い返す。その言葉がどれほど的外れか認識するかのように。

「（いい天気・・・か。どの口が言うのやら。）」

変わらない天候、夜または昼しかない世界、固定された天候、それはこの世界がきちんとしたものではなく作り物のものだという何よりの証である。その証拠に雲自体はある、しかし全く動くことはない。まるで空というキャンバスに絵を描いたような、そんな薄っぺらさが伝わるような気がした。そんなことを考えながら、以前後回しにしていた、この世界の事について思考を走らせる。

「（この世界は存在しない。ここには生ける者は例外を除き存在しない。死者の国、地獄と言い換えてもいいかもな。まあ、厳密には違うが。）」

そう、この世界は生まれながらに死んでいる。そして世界を支えているものは死者の魂、目に映る空も木も空気すら死者の魂を原材料とした箱庭、そして、その世界の住人もまた死者のみ。それがこの世界の真実。それはこの世界で過ごす者は気づく事も無く、やがてこの世界に溶け込み消えていく。それは砂糖や塩の固まりを水に溶かしていくかのような、そんな現象、それを魂に置き換えているだけ。

その一連のサイクルの繰り返しがこの世界の姿、そしてこのサイクルの中にいずれ入るであろう者は《定着せし者》と呼ばれる。

《定着せし者》・・・それは本来、仮初のこの世界の姿に気付かず、又は日々の変化を拒む者達の総称である。その魂は変化をすることなく一定の周期で同じ行動を繰り返す。例えば祖母に会いに行くと言って村を出る。そして無事に帰ってくる、または何らかのトラブルで旅を諦め村に戻る。そしてまた祖母に会いに行く。その日々を繰り返すということだ。リコがこれに当たる。

本来そのサイクルはあり得ない。同じ日など普通に考えればありえないのだ。平坦な日常であろうと、そこには変化があるのだ。例え気付かずとも明確で確実な差異がある筈である。だがこの世界はそれがない。吹く風、周りの人の反応、ありとあらゆるものが外部からの干渉がないのなら本当にリプレイの様に同じ、全く変わらない行動をとるのだ。ループともいえる、記憶すら残らずにスタートの状態に戻るのだから。

そしてそんな繰り返しを繰り返していくうちに、生きるという生物にとっての根源ともいえる活力、欲望とも言えるものが薄れていき、それが尽きれば世界の一部として取り込まれる。それがこの世界での最後。定着せし者がたどり着く最後である。

だが、全ての人がこうなるわけではない。例えば毎日日記をつける。些細なことでも繰り返した結果に何らかの変化を起こすもの、そういったものなら世界に取り込まれることはない。そして稀に自分の行動、又は何らかの理由でこの世界、もしくは小さなことにせよ疑問を持ち、それを知るために自分独自の意思で行動できる者が出てくる。そういった者を《放浪者》とこの世界では呼んでいる。

「（まあ、最初からそうだったのかは知らないが。）」

《放浪者》・・・こう呼ばれる者は例外なく自らの意思で自分が求める答えを見つけ出そうとする者である。判りやすく言うなら変化を受け入れる者、この世界を理解し、なにか決めたことにきちんと取り組める者の事である。今の自分やエイナがそれに当たる。

こう呼ばれる者は大抵この世界を渡り歩き、この世界の真実に辿り着く。そしてそれでも前に進み、変わり続けていける者ならば近いうちに《導き手》により転生の塔に送られることになる。そしてそこで輪廻の輪へと加わることになる。

《導き手》・・・元々は導き手も放浪者である。しかし転生を拒み、この世界で暮らし他の魂を導き、転生を促す存在。主に放浪者が転生に値するかを見極める監査官の様なものである。この世界には導き手が相当数居る筈だがどれくらい存在しているのかは知らない。導き手は不思議な能力を多く持ち、基本こちらに干渉はしない。

ともかくこの世界の住人は主にこの3種類に分けられる。このうち定着せし者は放浪者や導き手により放浪者として目覚めることもある。逆に、絶望し前を向くことを失くした放浪者が定着せし者になるケースも存在する。恐らく導き手が定着することもあるかもしれない。

元々この世界の魂は転生の輪から外れ、零れ落ちた者たちの集まり、転生の塔に行くことにより、元の位置に戻るといった方が判りやすい。だが、多くの魂はここに定着し世界に溶け込んでいく。その積み重ねの果て、この世界が生まれたのだ。

変わらない日常、繰り返す日々それを望む魂で作られた死の世界、イメージこそ違うが賽の河原と三途の川を足し合わせた様なものだ。延々と石を積みそれを崩され、またそれを積みその繰り返し、その果てに川を渡る。まさしく今のこの世界そのものだ。

「（リコはこのまま放浪者になってもらいたいが、さて、どうなるか。）」

先ほど例えに出したがリコも元々は定着せし者である。今回は俺が介入したから繰り返しの行動から少しは逸れているがここでやめてしまうとまた同じことを繰り返すだろう。だが俺はそれが必ずしも悪いとは思わない。本人が納得しているのなら周りがどうであれそれでいいとも俺は思う。

今回のは原作で関わるから介入したに過ぎない、本当なら放っておいても良かったのだ。中には変わりたくないと思う奴も居るということだ。リコがそうとは言わないが、そのままを望んでいたかも知れないのだ。

「（まあ、関わって約束もしたんだ。破れねえし進むだけだ。同じ後悔でも行動してやれることやってから落ち込むか。）」

そう、今回の事は既に行動に移しているし、もう止めれないだろう。関わった以上、エイナも引き下がるとは思えない。後はリコ次第、せいぜい支えておくとしようと気を引き締める。なにせうまくいかないと連鎖でエイナにとってもまずいことになる。一つ間違えばすべて失うのだ。

「（まあ、失うのはいつだって変らない理由だし、今更だよな。）」

リスクなど今更思い返すものでもない。ゼロから積み上げていくのだから、恐れていても仕方ない。今できることを一つ一つ片づけていくしかない。結局情報があっても提示せずに置くのだから今の所、価値はそれほど高くない。有効利用するからこそ情報は生きるのだ。

そんな考えで思考を締めくくろうとしたところ、近くから音が聞こえた。例えるなら空腹を訴える腹の音みたいな・・・視線を音源に向けるとそこには俯いたまま動きを止めたリコがいた。

「・・・そろそろ飯にでもするか？」

ゆっくりそう聞くと、首筋まで真っ赤になったまま静かにリコは頷いた。

見晴らしがよくモンスターが見当たらない場所を探す。時間がかかるかと危惧したが、そんな事も無く割とすぐに見つかった。大きな木で日陰にもなっている、側にはモンスターの気配もない。ちょうどいいだろう。

「あそこで飯にするか。」

「うん！」

そこに布を敷きその上に座る。道具袋から村でもらった食べ物を取り出す。この世界にもサンドイッチってあるんだなあと少し感心

した。そして先ほど気付いた、というより思い出したのだが、村でもらったアイテムをきちんと把握してなかったなと思い道具袋を漁る。

そうすると剣やら鎧やら薬やら食べ物やらどかどか出てくる。こんなにもらったっけ？と不思議に思える量だったりする。道具袋のおかげでかさ張らないのが何よりである。・・・本当この道具袋が一番の謎なんだが。そしてその中で目についたのは小さな欠片。

「これって、召喚獣の名前の欠片か？なんであるんだ？まあ、探す手間が省けていいんだが。」

そう、持ち物を探っていると名前の欠片がぽろぽろと振ってきた。これ幸いとなにかできないかと色々組合してみるとできたのは。

「いでよ！ライザー！」

『ｊａｙａｊａｊａｙ』

光が集まり出現したのは、電子音と共に明滅する目、空に浮いた丸いボディ、その体についた両手。召喚獣ライザー。テテと並んで割とポピュラーな召喚獣である。どういう原理で浮いているのか非常に気になる。場合によっては巨大化もする、既に化学の産物じゃない。ＵＭＡか？

「（・・・まだ森に入っても無いんだが。なぜに？）」

呼び出せたのはいいが本来呼び出せるようになるのはもっと先なのだが、少なくてもこの先の森に入らないと無理なはずなんだが、どういうわけか呼び出せた。まあ、同じ欠片が複数個あるのかもし

れない。そんなことを考えていると、すぐ傍でリコがまた目を輝かせていた。

「ねえ、ユーリお兄ちゃん！この子何？かわいい！！触ってもいい？」

「あ、ああ、かまわないか？ライザー？」

『ｊａｊａｙｕａｊａ』

「すご～い、飛んでる！かわいい！！」

構わないらしい、むしろ子供が好きなのか率先して傍に寄っている。いや、珍しいだけか？とにかくリコが喜んでいるので放っておく。問題無いと思うし。

「ねえ、お兄ちゃん他にはいないの？」

ふとリコがそんなことを聞いてきた。その言葉を言ってるリコは何か期待に満ちた目でこっちを見ている、特に隠す必要もないので期待に応える。魔力を込め術を発動させる。

「テテ！」

光と共にテテが呼び出される。それを見たリコが再び大はしゃぎでテテに近づく。最初は何かと身構えたテテだが、敵じゃない事が判るとされるがままとなっている。少し苦しそうだが。

「やわらか～い。ねえ、お兄ちゃん、私もこの子たち呼べないかなあ？」

リコが何気なく聞いてきたそのセリフを聞いて少し考える。確かに召喚獣との契約には名前を知る必要がある。この世界ではこの名前の書かれた石がサモナイト石の代わりになっていると思っていた。これがないと召喚そのものができないものだと。けれど、それは本当にそうか？

「・・・試してみるか。」

「ユーリお兄ちゃん？どうしたの？」

「少しやりたいことがあってな。うまくいったらリコも呼べるようになるかもな。」

「本当？！」

「とりあえずやってみるからリコはライザーとテテを離してくれ。」

「うん！！」

とりあえずそもそも思ったのは俺とエイナの召喚する召喚獣は同一かどうかである。これの答えは否である。同じ種族の別個体なのだ。なぜならエイナのテテの方は少し小さい。後かぶっている帽子の形が違う。なんかベレー帽みたいになってる。俺のテテは基本通りなんだが、少し大きい。

とにかく、この事から察するに一つの名前で複数の誓約は可能という事だ。なぜなら、いくら体が同じといっても俺とエイナは他人だ。似ている部分などありはしない。これがもし単一の契約しかできないというのなら、同じ個体の召喚獣が出ないとおかしい。

そして、ここで確かめたいのは召喚獣の名前の石（仮に魔石とでもしておく）が手元になくても召喚は可能かどうかである。これが可能なら恐らくリコでも呼べる。

「さて、うまくいくかな？」

「・・・・・・」

傍でリコが固唾をのんで見守っている。何気にすごく真剣だ、そこまで召喚したいか。とりあえず魔石をリコに持たせ、始める事にする。

「もどれ、テテ、ライザー！」

俺の指示に従い、２体の召喚獣は送還され光の粒子が散るように消える。とりあえず送還はできる。そして・・・

「来い！テテ、ライザー！」

その声と共に光が集まり、２体の召喚獣が呼び出される。石がないときの差は若干消費が多きいことぐらいか。それぐらいなら十分許容範囲内だ、問題ない。この世界の召喚術は結構いい加減なものらしい。

「・・・お兄ちゃん、どう？私にも使えそうかな？」

「ああ、とりあえず大丈夫そうだな。」

「本当！！やったー！！」

俺の返答に両手を上げて喜ぶリコ、テテを抱きしめながら走り回っている。テテが少し困った顔をしているが目線で謝っておく。ライザーはそれを見てさすがに被害を恐れたのか、俺の後ろに隠れている。まあ、とりあえずの課題は誓約の仕方を知らないという事なんだが、どうするか。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。私も早く使いたい、ねえ、どうやったらいいの？」

「そうだな。」

とりあえず誓約の儀式のようなものをすればいいと思うのだがよくは知らない。とりあえずリコに持たせている石を受け取る。一度完成した石はもう割れないらしい。だから一旦解体して繋ぎ合わすというのは無理らしい。なら誓約の儀式という事になる。

「リコ、この石を握って召喚獣の事を考えて見な。」

「うん。判った。」

ならばその事について知っている人物が必要なんだが、あの召喚士の男は連れ去られて行方不明だ。エイナが引いているので合わないほうがいいんだが。それが無理である以上、頼りにはしたくないのだが、俺の中にある不確定因子に頼ってみる。判りやすく言うなら自分の無意識に期待と言った所だろう。自分のかは判らないが。

リコは両手で魔石を包み込み一心不乱に思考に没頭している、余程召喚獣がほしいらしい。それに苦笑しながら、自然と出てくる知識を言葉にする。

「次に俺の言葉を復唱してみな。魔石に刻まれし異界の友よ誓約に従い我と共に歩め。」

「魔石に刻まれし異界の友よ誓約に従い我と共に歩め。」

その言葉と共に魔石が淡い光を放ち、周囲に風が巻き起こる。初めてだから制御がつたないせいなのか、派手に光が乱舞している。しばらくするとその光が渦を巻くように集まりやがて形を成す。

そして光が消えてライザーが現れる。テテは現れてないが。それにしても問題なく口からすらすらと知らない言葉が出てくる。腹話術かと思うぐらいに。俺は人形かなにかか？まあ、プラスに働く分にはまだいいが、気味悪い事には違いないが。

「あ、出た！！ってあれ？片方しか出ないよ？なんで？」

「多分、向き不向きがあるんだろうな。まあ、そのことについては後で教えるよ。」

「む～お兄ちゃんは出せたのに」

「まあ、ライザーは出たんだから喜んどけ、拗ねてるぞ。そいつ。」

「え？ああ！」

視線の先には、木の根元を指でいじくりまわしながら落ち込んだオーラを漂わせた青いライザー、かなり落ち込んでいる。それを見てリコは慌ててライザーの所へ向かって励ましている。

ちなみに俺のテテは解放されて毛づくろいしてたりする。そして今気づいたが、テテの帽子の中はどこかのスーパーでハードなペンギンみたいなツンツンヘアーである・・・俺のテテだけだろうか？後日エイナに確認すると俺のだけらしい。なぜ？

こうなるとエイナがなぜ全属性使えるかが疑問だが、恐らく俺がいるからだろうと思う。一つの体に二つの魂が同居して居るのだ。その影響で何らかの恩恵があってもいい。もしくは本当に全属性が使えるかだが。まあ、使えても霊属性と機属性はランクが低いだろうが。適正的に。

「お兄ちゃん、この子ってどうしたらいいの？」

仲直りしたのか、ライザーを抱えながらリコが聞いてきた。その顔は満面の笑みを浮かべている。

「パートナーみたいなものだから色々と協力してみたらどうだ？リコの言葉を聞いてきたんだから、友達と思って仲良くしてみな。」

「うん！！」

勢いよく頷くと二人でそこらを走り回り始めた。あれもスキンシップみたいなものだろうと、優しく見守ることにする。その間にほったらかしになっていた食事の準備を再開する。しばらくするとこちらに気付いたのか、大急ぎで帰ってくる。

「ご、ごめんね、お兄ちゃん！私もすぐに手伝うから！」

「別に気にしなくていいぞ。そんなに急がなくてもかまわずに遊んで来ればよかったのに。」

「え、でも。」

「ほら、それにもう準備も終わるしな。まあ、呼ぶ手間は省けたかな。」

そう言って準備を終わらす。それを見てリコに食事を促す。リコも敷いた布の上に座り自分の鞄からお弁当を取り出す。ちなみに召喚獣たちは既に送還済みだ。

「ねえ、お兄ちゃん。」

そんなことを思っていると、隣に座って自分のお弁当を食べているリコから声がかかる。

「どうした？まさか何か忘れ物でもしたか？」

先ほど弁当を取り出した後も鞄をあさったりしていたから、てっきり忘れ物か何かだと思ったのだが、リコはこちらを見上げながら口を開く。

「ううん、そんなんじゃないけど、少し気になっちゃって。」

「なにがだ？」

「うん、お兄ちゃんはどうして私にここまで優しくしてくれるのかなって。」

「・・・別に優しくはないと思うけどなあ。」

実際成り行きで関わったようなものだ。理由さえ知っていればまた違うだろうが言う気はさらさらない。だから正直に言う。けれどリコはそうは思わなかったらしく優しく笑いながら言う。

「ううん、ユーリお兄ちゃんは優しいよ、だって私誰かと一緒に村を出たのって初めてだもん。誰も一緒に行くなんて言ってくれたことなんてないし、前に行ったときだって・・・」

言葉をしゃべっている最中に口が止まり、その眼が驚愕のためか大きく見開かれる。あまりにも不自然なその行動に緩んでいた意識を引き締めていく。そして、先ほどのリコのセリフから原因を探ろうとしてすぐに思い当たる。そしてリコの口から今考えたばかりの予想通りの言葉が出る。

「・・・あれ？私、前はいつおばあちゃんに会いに行ったんだっけ？」

「・・・・・・」

返す言葉はない。空気が凍る。今までの柔らかい雰囲気が一瞬で瓦解する。残されるのは沈黙のみ・・・本来一連の行動は繰り返される。記憶もそれに倣い失われる。今まで１００回同じことをしてもその記憶はない。だからこそ今のリコの疑問に答えれる者はいない。

「あれ、おかしいな。どうして思い出せないんだろう。あんなに楽しみにしてたのに、変、だね、私。」

まだ幼いながら自分の言動の異常さを正しく認識しているのか、顔がどんどん青くなっていく。さすがにそれを見て、これ以上は危

険だと判断したユーリは肩をゆすってリコの意識を引き戻す。

「リコ！！」

「え？あ！お兄ちゃん・・・」

こちらに気づいたリコの顔は青い、先程見せていた元気は欠片も無く俯いて意気消沈していた。とりあえず出していた食べ物を片付けリコを寝かす。そして、できる限り優しく休むように言う。

「歩きっぱなしだったからな、少し疲れたんだろう。俺が片づけしとくからリコは気にせず休んでろ。というか寝てろ。」

「え、でも、悪いよ。私は大丈夫だから。」

「子供が遠慮なんかするな。それに今のお前がすべきことは体を休めることだ。なら、それをやる事、な。」

「・・・うん、ありがとう。やっぱりお兄ちゃんは優しいね。私が知ってる人の中で一番優しいよ。」

「そうか、それは嬉しいな、ありがとうな。」

「うん、それじゃあ少しだけ休ませてもらうね。」

「ああ。」

そういってリコは目をつむる。まだ寝たわけではないだろう。その証拠に肩が若干震えている。今の自分の状況が判らないのと、今までそのこと事態に気付かなかった異常に思った以上に疲弊してい

るみたいだ。これはしばらくは動けないな、と現状を見つめなおす。

さすがにこんな形でこの世界の綻びに辿り着くとは思いもしなかった。実際何がきっかけで気付くかわからないとはいえこんな世間話から出るとは予想もできない。片づけをした後リコが眠っている隣に座る。さすがにもう寝たようだが魘されているのか、その顔は険しい。

リコの頭に手を置きゆっくりと撫でてやる。しばらくしていると静かな寝息が聞こえてきた。どうやらきちんと寝れているらしい。せめて夢の中でぐらい笑っていてほしかったがそうもいかないらしい。

「やれやれ、どうしたものか。」

これからの事を考えていると、常夜の石が光りだす。これは当然の事だろう、明らかにおかしい。予想できていた事態に常夜の石に精神を集中させエイナの元へ行く。そこでは、やはり沈痛な顔をしたエイナが此方を見ていた。

「ねえ、ユーリ。リコちゃん、どうしたのかな? 少し前まであんなに楽しそうにしてたのに。」

その言葉に対して曖昧にしか答えられない。エイナの方が先に気付くと思っていたのだ、誤算にもほどがある。ここでエイナもこの世界の異常に触れればそれこそ対処が難しい。最悪ではないにせよ厄介であることには違いない。

「さあな、前の旅の時に何か嫌なことがあったのかもしれないな。それをさっきふとしたきっかけで思い出したとか。」

「でも！・・・でも、変だよリコちゃん。さっきおばあちゃんにいつ会いに行ったんだって、それって、前の記憶が無いって事、だよね。リコちゃんがあんなに楽しそうにしてたおばあさんの事忘れるなんて、いくらなんでもおかしいよ！」

感情が抑えられないのか声を荒げながらエイナはこちらを見つめる。その眼にはリコを案じているのと感覚的になにか根本的におかしいというのを察知しているのかもしれない。なにせ、エイナはその真実に一度辿り着いているのだ。その記憶が無くても、何かまずいということは分かるのだろう。

「・・・とりあえず、今は何とも言えないな。なんにせよリコが目を覚ました後この話題を避けたら聞かない事、だな。いくら心配だからってあんなになるまで思い詰めるようなことなんだ。本人がいいというまでそっとしとけ。」

「で、でも！私はリコちゃんが心配で！」

納得がいかないのか、食い下がってくるエイナ。人がいいのと、思い込んだら一直線なのが災いしたのか、中々首を縦に振らない。とりあえず落ち着かせるように宥めながら言う。

「俺だって心配してる。けどだからってなんでも首突っ込んだらいいって事にはならねえよ。納得いかねえのは分かるけど信じて待つのも必要だと思うぞ。誰だって踏み込んでほしくない事はあるさ。それにリコみたいに下手に物わかりがいい子は特に、な。」

「けど。」

「別に放っておけとは言ってないさ。頼られたらきちんと答えてやればいいし、見えないところで支えてやればいいんだよ。俺らが冷静に対処してやらないでどうするんだ？そんな調子じゃリコとあった時笑われるぞ。」

「・・・うん。」

「全く、リコ本人よりお前の方が先にまいってどうするんだ。お前の長所は底抜けに明るい所だろうに。それが沈んでてどうする。」

「・・・ねえ、それって私の事、馬鹿にしてない？」

少しは元気が出たのか、心なし声に元気が戻ってきたみたいだ。少なくとも前は向いてくれたらしい。

「そう聞こえるか？長所なのは間違いないだろう。なんで悪くとるんだか。」

「私の長所ってそれだけしかないってことだよね？ってことはやっぱり。」

「いや、他にもあるぞ。言ってないだけで。」

「それじゃあ、言ってみてよ。あるんなら言えるわよね？」

・・・なんか妙な雰囲気になってきたような気が。悲観的よりかはましなのだが、面倒なことになりそうな気がする。エイナの目が心なしか吊り上がっているような気すらする。

「まあいいけどな。まず最初に思いつくのはさっきも言ったが明る

い所、見た目がかわいいのと後は一つの物事に真剣に取り組めること、疑問をそのままにせず答えを探して行動できること。剣の腕が立つこと、足が速い。とかかな。こんなもんでいいか？」

とりあえず思いついたものを上げる。といっても２つ目は自分の主観、３つ目は視野が狭い、４つ目は放浪者の事そのもの。残りは要するに物騒だと言ってるんだが、ひっくり返したら大体はそのまま短所になる。ようは見た目はいいがうるさくて手が出やすく視野が狭いという事になる。それをどうとったのか、若干呆けたような反応を返す。

「う、うん。」

「せっかく言ったのに薄い反応だな。」

「だって、こんなにスラスラ出てくると思ってなかったから、少しびっくりしちゃって。」

「あのな、俺は必要な事はきちんと見てるつもりなんだが、まったく。一緒に旅する仲なんだからぞんざいに考えるわけないだろうが。」

返ってきた言葉に呆れてため息をつく。一度エイナの俺のイメージを聞いてみたいくらいだ・・・聞いてみるか？

「で？エイナは俺の事はどう見えてるんだ？」

「え！？わ、私！？」

「ああ、俺は言ったんだ、別に聞き返してもいいだろうに。」

「え、あ、うう。」

突然しどろもどろになるエイナ。そして顔がすごいことになってる。笑ったり険しくなったり、いきなりにやけたり。まあ、よく考えたら結局人を思いやれる性格をしているのだからそんな悪くは言わないようにするだろうと結論付けて思考を終わらせる・・・正直気味が悪いだけだが。

「あ～、まあ、言えないならいいや。元から思いつきで聞いただけだし。困らせるつもりはねえよ。」

「え？」

「まあ、その話は置いといてだな。これからの・・・！」

とりあえず今の話を終わらしてこれからのことを話し合おうかと口を開きかけた瞬間、表の方で嫌な気配を感じ取った。それも今までにないくらい暗い何か。感じるとほぼ同時に表に戻る。

「ちょ、ちょっとユーリ！まだ私、言ってないよ！・・・どうしたんだろう。」

まだその気配に気づいていないエイナは放置されたことに対してぶちぶち文句を言ってる。それはこれからすぐ表で起こる事を見るまで続く。

「・・・（なんだ？今の悪寒みたいなモノは、体の芯が凍ったかと思ったぞ。）」

初めて感じた感覚に警戒を強める。さっきは気づかなかったが俺の気配感知範囲に入ったのか、確かに何かが此方に来る。念のためテテとライザーを呼び出しリコを守らせておく。できることなら精神が不安定な今のリコを動かしたくはない。周りに気を払いながら双剣に手を伸ばす。

「！（なにか飛んでくる！！）」

いきなり飛来してきた赤黒いナニカを双剣で叩き落とす。そのナニカは光を散らしながら消えていく。それは自身のストラに酷似していた。そしてこちらの視界で見える距離まで近づいてきたその存在に目を向け瞠目する。

「・・・黒い騎士か、何者だ？」

そこに現れたのは漆黒の鎧を身に着け大剣を携えた騎士。見た目だけなら俺よりも小柄な筈なのだが、大剣と纏う雰囲気が大きさを錯覚させる。そしてその突然の登場に内心驚く。しかし纏う雰囲気は狂気を纏っていることがわかる。尋常じゃないその圧力を肌で感じて眼光をさらに鋭くする。

「どういうつもりだ？俺らはここで休んでいただけだが？」

こちらの質問にも答えない。答える気がないのか、それとも、答える意識すらないのか。どちらにせよ敵だろう。目を離さず隙を窺う、だが、内心は驚きで埋め尽くされていた。なぜなら・・・

「（こいつ、誰だ？俺はこんな奴、知らねえ。それにこの感じはなんだ？）」

最大の疑問はそこである。自分の知らないキャラ、それもかなり強い。確かにこの世界では自分の知らない部分が多いのは理解している。それだけなら一応納得はする。けれどもこいつはおかしい。目の前に相対してなぜか共感する部分がある。つまり俺となんらかの関わりがある可能性があるという事なのだ。

「去るんなら追いはしない。けど来るのなら迎い撃つ、言う事があるなら聞くが？」

動揺を隠し、とりあえず選択肢を提示する。最後通告でもあるが。さてどうでるか。どうなろうといいように先の展開を予測する。何せリコがいるのだ。下手は踏めない。

『グアアアアアアア！！』

今の言葉の返答とでもいうかの様に大剣を構え、こちらに踏み込んでくる。無論予測できていたユーリはすかさず迎撃する。振り下ろされる大剣を双剣のうちの一本で受け流し間合いを詰める。

大上段から振り下ろされた大剣は大気を切り裂き、砂煙を巻き起こしながら轟音と共に地面にめり込む。周囲に風を巻き起こし大地を揺らす。当たれば人の体など軽く粉砕するだろう。しかし、当たらなければいいだけの話である。今の攻撃で黒騎士は硬直して動きが止まっている。

「っらあ！！」

その隙に懐に入りもう片方の刃で切り付ける。当たるすんでの所で騎士は双剣を放し小手でこちらの斬撃をいなす。外れた瞬間、カウンターで黒騎士の拳が迫る。その前に甲冑に足を向け一気に蹴り

飛ばす。その一撃は大して効いていないが蹴りの反動で後ろに飛び退く。

これでお互いの距離は開いた。少し離れた場所に着地し、体勢を整える。無論リコを隠すような位置を取る。黒騎士はゆっくりと大剣を引き抜き再び構える。仕切り直し。

「・・・思ってたより厄介だな。狂ってるだけかと思ったが意外なほどに機転がききやがる。けど、脅威には思えねえな。何かあるのか？」

確かに厄介には違いないが脅威たりえない、最初に感じた悪寒は確かに目の前の存在から感じた。だが、今の所、その悪寒に等しい危機を感じない。まだ何かあると握る剣に力を込める。その直後。

『オオオオォオオオ！！』

地の底から唸るような声と共に赤黒い光が黒騎士の体から吹き上がる。大気がふるえ、傍の草木が即座にその命を散らす。その光が触れたところは死の荒野と化していった。それを見ると同時に再び悪寒が走った。その赤になぜか血の色を連想した。そして何か大きな世界すら飲み込みそうな負の力とでもいうべきモノを感じた。そして黒騎士が先ほどとは比べ物にならない速度でこちらに切り込んでくる。

「ちっこれが俺が感じた悪寒の正体か！」

即座にこちらもストラを纏い飛び出す。あまりこちらに来られても困る。少なくともリコから遠ざける必要がある。起きられてリコを標的にされてはたまったものじゃない。だが、その目論見はすぐ

に崩れ去る。これだけの死の気配をばらまいて早々寝られるわけがないのだ。

「う、ん。あれ、お、兄ちゃん？」

うっすらと目を開け体を起こすリコ。内心舌打ちしたがそんな暇はない。大剣の一撃をかわし、ストラでの斬撃を飛ばす。黒騎士も同じように赤黒い光を飛ばし打ち消す。そんな撃ち合いを繰り返す。このまま攻め続けてこちらから意識を外さないようにする。

「リコ！今は召喚獣呼んでどこかに隠れてろ！怪我するぞ！」

「え、う、うん！来て！ライザー！！」

リコの求めに応じ、青いライザーが召喚される。だが、ここでその選択が愚策と悟る。そのつたない召喚光と魔力の放出により黒騎士にリコの存在が気取られた。こちらの一撃をかわすと同時にリコに向かって一気に疾走する。その小さな命を絶つために。

「ちっ、しまった！」

わずかに遅れて追走するがその距離はすでに致命的。ストラを飛ばすものの赤黒い光と鎧に阻まれ足を止めることすらままならない。速度そのものはこちらが上、もうあと少しでも距離があれば追い付くが、リコは突然の事で足がすくんで動きが止まっている。こうなると頼みは召喚獣たちだがどこまで持つか。酷だとは承知しているが他に手がない。

「あ、ああ。やだ、やだよ。お兄ちゃん！！」

「テテ！ライザー！！リコの身を守れ！」

その声に応え、リコを守るために召喚獣たちが立ち向かう。その姿に恐れは一切ない。テテが本来ありえない額から角のような物を出し正面から突撃するも、速度を若干落とすことはできたものの黒騎士は光を強めそのまま押し返す。その競り合いで周囲に暴風が吹き荒れる。

その後ろから青いライザーが跳びかかるが光に触れた瞬間にショートし送還される。黒騎士が競り合いの末、テテを蹴り飛ばし、前を向いた黒騎士の眼前にライザーが佇む。その姿は頭のクリアカバーのような部分が開き、そこから砲身のようなものが突き出している。それも本来ならあり得ない武装である。

それをためらいなく主の敵に打ち込む。砲身から打ち出されたのは形状こそ違うものの、ユーリの世界では割と知られているものである。グレネード弾、そして砲身の方にもきちんとした名がある、曰くグレネードランチャーと呼ばれる代物である。なぜそんなものが搭載されているのかは判らない。

ゼロ距離に近い距離から射出され、次の瞬間、爆炎が巻き起こる。地面は鳴動し木々をなぎ倒す、着弾地点にいたっては元の景色の原型はなく数メートルのクレーターが穿たれている。その中心、黒い騎士が赤い光に包まれ、大剣を盾のように構えて存在していた。

だが、さすがにこれには堪えたようで片膝をつき、苦悶の声のようなものが漏れる。その絶望的な歩みは己が召喚獣の力で完全に止まる。そしてそのクレーターを飛び越えユーリがその道に立ちふさがる。

「（なんであんなもんがついてんだ？テテの角も謎だし。けどまあ。）よし、でかしたテテ！ライザー！」

疑問を脇に追いやり黒騎士を追い越し前進を阻む。自分の召喚獣の思った以上の強さと自分の酷な頼みに即座に応えてくれた異界の友に感謝しながら目の前の脅威を見据える。横目でテテとライザーを見る。二体ともボロボロである。だがしかし、こちらを見つめるその眼にはこちらへの信頼があふれていた。その姿を目に焼き付け、かつてない闘志と共に敵を見据える。

「もう、リコの方へは行かせねえよ。絶対にな！」

「お兄ちゃん。」

「少し離れてろ、心配しなくても、もうそっちにはいかせねえ！」

目を離さずリコに離れるように言う、ユーリの召喚獣も自身の負った怪我を無視するかのようにリコの守りにつき、隠れるように促す。そしてその眼は己が主へと向けられていた。

その目線の先には、今まで使っていたものとは比較にならないストラを纏わせた双剣をしっかりと構え相対するユーリがいた。それは先ほどまでの出力を軽く上回る。遠慮なしの本気。黒騎士も赤黒い光を大剣に纏わせ構える。黒騎士の光とストラが互いに反発しあい風を巻き起こす。お互いの気は膨れ上がり、纏う色すら変わっている。

「はあああああ！！」

『グオオオオオ！！』

ユーリは青白い光が更に濃くなり、蒼白い光となり、周囲に稲妻を纏うまでになっている。黒騎士も赤黒い光がより深くなり紅黒く変わる。ユーリと同じく稲妻を纏い、一層周囲の大地がえぐれ大気が震える。お互いに構えたまま微動だにしない。今二人に周りにある物は全て形を失くすだろう。それは他者の立ち入りを拒む聖域のようでもある。決闘場。

その力で自身の最高の一撃を放つべく気を高める。そしてその極限まで膨れ上がり、今解放されようとした瞬間、ユーリは自身の知覚範囲に何かが入り込んだのを感知する。本来ならば気に留めないが、運悪くリコが隠れた側、意識が僅か、ほんの一欠けら逸れる。その刹那、黒騎士が溜め込んだ力のすべてを一気に開放しこちらに肉薄する。

「（ちっ遅れたか、しょうがねえ・・・やりたくなかったがそうもいってられねえ！）」

ほんの僅か遅れてユーリも自身の全てを込め踏み込む。その差は事ここにいたっては絶望的なまでに大きい。されどユーリの顔には諦めや絶望と言った感情は一切浮かんでいない。けれどもここからの選択は賭けでもある。

お互いが交差する刹那、黒騎士の一撃に対し、真っ向正面から双剣を重ね叩きつける。出力は五分、技量はこちらが上、しかし一撃の威力なら双剣よりも重量で勝る大剣に天秤が傾く。当然これは自殺行為である。両足が地面に沈み込む。大剣の一撃を受けた双剣は、既に軋みを上げ、大剣に押し切られるのも時間の問題と言える。だが、それでも意味はある。

「だが、これでお前の一撃も勢いはねえ！」

もう幾ばくも持ちはしない。けれど、けれどもだ。黒騎士の一撃は事ここにいたり殺せている。もしもこの威力が解放されれば恐らく、リコがいる場所まで被害がいく。故に止めたのだ。次に瞬間には押し切られるだろうがこれで十分。次に頼るは己が内に宿る半身。まだ短い時間しか過ごしてないがこの場ですることは言葉に乗せずともわかる。この選択でエイナにかかる負担を理解しながら。

「エイナ！！」

「言われなくても判ってるわよ！よくもリコちゃんを怖い目に合わせてくれたわね！覚悟しなさい！！」

押し切られる瞬間に交替しエイナが表に出てくる。それを見た黒騎士はこれには意表を突かれたのか、それともほかに理由があるのか。動きが止まる。無防備、その隙に連撃を浴びせる。手加減なしの全力攻撃。

全弾鎧の薄い所や関節を狙っての一撃、威力ではどうあってもユーリと黒騎士には及ばない。だが速度なら素の黒騎士よりは上である。しかしそれもあの光が出ていると厳しい。ユーリ程では無いにせよ今の自分よりは速い。故に止まった瞬間に全速で連撃を叩き込んだのだ。

悔しいが自分ではあの光を纏った状態の黒騎士は手に余る。精々出来て牽制と今のような奇策を伴った攻撃、真っ向からでは打つ手が無い様なものだ。ユーリの懸念はこれの事である。まともに戦えば負傷は避けられない。後できることと言えば。

「来て！ライザー！テテ！」

その呼び声に応え、エイナのテテとライザーが召喚される。その姿を見ると同時に指示を出す。

「ユーリの召喚獣達と一緒にリコちゃんを守って！お願い！！」

エイナの指示を聞きリコがいる場所へと駆け出す。リコの側には召喚獣が４体。これでひとまず大丈夫だろう。目線を戻し黒騎士を見据える。先ほどの攻撃で決まればいいがまだ妙な圧迫感がある。油断せずに剣を構える。

「あの人、誰？お兄ちゃんじゃ、ない？」

一方召喚獣に守られながら、先程の戦闘を隠れながら見ていたリコは、ユーリが見知らぬ女性に代わったのを見て軽い混乱に陥っていた。何も信じられない中、唯一今信じている人物が起こした現象に思考が止まる。けれどもそれは拒絶ではない。あの女性は確かに自分の事で怒ってくれた。今も守ろうとしてくれている、ゆえに悪印象はない。

そして、なにより自分が一番だと信じた人の事を自分が疑ってどうする。今までの事を思い返し、信じることに決める、それは少女の心に小さな変化をもたらす。誰も気付かない、本人すらまだ知らない気持ちを秘め、自分を優しく見守っていてくれた笑顔を思い出す。

『グオオオオオ』

地の底から響くような声を上げ黒騎士が起き上がる。それを見据

えエイナは次の一手を考える。少なくとも次の交替までまだ8秒ほどかかる。その時間を自分だけで乗り越える必要がある。自分はユーリや黒騎士の様にストラや光を纏うことはできない。独力のみで乗り切る。

「まったく、確かに手ごたえあったんだけどどうなってんの？ぴんぴんしてる。」

『グアァ』

その言葉道理、特に大きなダメージを負ったようには見えない。黒騎士はしばらくこちらを見、なぜか動きを止めた。あの赤黒い光も鳴りを潜めている。交替まであと7秒。

「え？どうしたの？動きが止まった、もしかして効いてたの？」

此方を見据え、しばらく動きを止めていた黒騎士だったが、突然叫びだし紅黒い光が周囲を侵食する。それは、あたかも不気味な何かが世界を喰らっているかのような錯覚を引き起こす。そして剣を構え、こちらに相対する黒騎士、先程までの静かな雰囲気はまるでない。交替まであと6秒。

「くっ！突然なんだってのよ！期待したのがバカみたいね。」

『グオオオオオ！！』

光を撒き散らしながら突撃してくる。即座に距離を取るため後ろに飛ぶ。力は言うに及ばず、速さもあの光によって身体能力が向上した向こうに軍配が上がる。いずれ捕まる、それは自明の理。けれど今は時間を稼ぐ、それに自分に打てる手段はまだある。交替まで

あと5秒。

『ガアアアア！！』

「ちっ！思ったよりずっと速い。ユーリはこんなのと戦ってたの？反則じゃない！」

少しは距離を離したかと思えば、そんな事は関係ないと言わんばかりの速度で互いの距離を詰める。それは既に人の域にはない。エイナの速度を軽く超え、あっけなく射程に捉える。それを見て覚悟を決める。狙うはカウンター、それしかない。・・・交替まであと4秒。

『グァァ・・・キ・・コウ・・シキ・・』

「え？今、確かに何か・・・」

黒騎士が大剣を振りかぶった時、何か呟いたような気がしたが、直ぐに目の前に迫る脅威によって頭の隅に消える。これを何としても掻い潜り一撃を入れる。この一撃の直撃はもちろん、下手に掠っても巻き込まれるだろう。側で感じて改めてそう思う。ただでさえ人を消しとばすのに十分な威力なのだ。触れれば紙屑のように吹き飛ばされるだろう。その戦慄の中、剣を強く握る。・・・あと3秒。

「（弱気になるな、ユーリはこんなことで怯んだりはしない！私はユーリの・・・相棒なんだから！！）」

思いを振り絞り、振り下ろされる大剣の側面に一撃を加えその力の向きを僅かに逸らす。直線的な力は横からの力に弱い、直ぐに向きがずれるからである。そしてその隙に大剣を回避し懐に入ろうと

する。けれどそこでエイナはありえないものを目撃する。・・・あと2秒。

「（嘘！躱した剣が、まさか、連撃狙い？しまった！）」

そう、躱した剣が弧を描いて再びその首を狙ってきているのだ。本来ならエイナの方が速いのだが光の恩恵により軌道を変え、そのまま返しの刃での2連撃、予想外の一撃に体が一瞬停止する。回避不能なその瞬間、停止した思考の代わりに肉体が死を拒絶し反射的に防ぐ。

偶然にも斜めに構えた剣がほとんどの衝撃を逸らし、致命の一撃を凌ぐ、さりとてその全てを受け流す事は敵わず、振り上げられた大剣が起こす風と散弾のように吹き上がる土砂により空中に打ち上げられる。・・・あと1秒。

「ぐっ、うあぁあああぁ！」

空中で何とか目を開き、下を見たエイナの思考が今度こそ凍りつく。そこには止まる事無く三度目の斬撃を繰り出そうとしている黒騎士の姿。自分は今の一撃でほとんどの体力を持って行かれた。まともに相手をする力も無い、そもそも今の自分は空中で身動きができない。

「（う、そ。）」

死刑宣告とでもいうかのように迫る紅い斬撃。阻める物はなく、防ぐ術はない。ここに勝敗は決した。この一撃で自分は消し飛ぶのだろう。眼前の死に対し驚くほど明確に答えを出す。けれど心は納得しない。何も知らないまま、何も成さぬまま終われないと。なに

より自身の半身はきっと、負けなど認めないから、こんな所で終われない！！

「あああああ！！」

無理な体勢から体を動かし死に抗う。それを嘲笑うように迫る凶刃、交替まであと・・・発光

「・・・よくも、よくもやってくれたな、てめええ！！」

光に包まれ、叫びと共に蒼白き光が周囲を照らす。それは紅き死の大地を潤す広大な海のようにも思えた。その光を纏ったユーリが交替による体勢の変化とストラの噴出により死の条理を覆す。この瞬間勝敗の天秤がそっくりそのまま反転する。

それだけには留まらず、懐に入り、拳で顎をかちあげる。次いで脇腹に一撃、鎧がきしみ悲鳴を上げる。構わず地面を蹴り膝蹴りを叩き込む。たたらを踏む黒騎士、止まる事無く拳を叩き込む。その一撃は確実に鎧を砕き、ストラにより中の人物にも明確なダメージを与えているだろう。

『グオ、オオ、オオオオォ』

「・・・黙れよ。」

苦悶の声を上げる黒騎士にかまわず道具袋に手を入れる。そこから現れたのは村でもらった武器の一つ、名をバムスレイヤー、それは目の前の黒騎士が扱うものとまったく同じ大剣である。それを持ち一撃を叩き込もうとする。

『ガアアアア！」

「ちっ！」

しかしそれは紅き光の衝撃破により阻まれる。後ろに飛び油断なく光を見据える。しかし光が収まった後、黒騎士の姿はどこにもなかった。

「・・・逃げたか。」

自分の知覚範囲に何もいないのを確信して結論を出す。何者かは知らないが危なかったのも事実。この世界には、やはり自分の知らない何かが確実にあるのだと、これからの旅路に懸念を抱く。そして一つの事実を思い出す。

「あ、いけね！リコの方に何かいたんだった。」

先ほど何かがリコの側に向かっているのを思い出し急いでそちらに向かう。恐らくそれほど危険を感じなかったから周囲のモンスターが騒ぎに気付いて襲ってきたといった所だろう。その考えは当たっていたらしく、召喚獣とモンスターが戦っていた。しかし遠目にも勝敗は明らか。自分が行くまでも無くモンスターは倒されるだろう。

だが、ふと何の気なしにリコの方を見てみると目を見開いた。リコは今現在、木に背を預け戦闘を見ている。その木が半ばから亀裂が入り折れそうになっているのだ。原因は間違いなく自分と黒騎士の戦闘だろう。今まで耐えてきたが既に限界だったのだろう。鈍い音を立てて傾いていく・・・リコがいる方へと。

「リコ！今すぐにその木から離れろ！」

「え？あ、お兄ちゃん！怪我して無い？！」

こちらの言ったことがきちんと聞き取れてないのか、こちらの心配をしている・・・その場から全く動かず。すかさずストラを噴出し、リコとの距離を一気に詰める。その間に木は折れ、折れた部分は重力に従い真っ直ぐに下へと落ちる。すなわちリコのいる場所へと。

「あ、ああ。」

この時漸くリコも気付いたが既に遅い。驚愕の顔で自身へと迫る木片を見つめる。反射的に目をつむる、その時頭に浮かんだのはやはり、自身を見つめる優しい青年の顔だった。そして思っていた衝撃は来ず、柔らかく暖かな何かで包み込まれた。

「・・・ふぇ？あれ？お兄ちゃん？」

「ったく、危ないな、ダメージが無いと判っててても当たりに行きたくはないな、ほんとに。」

木片が当たる正にその刹那、横からユーリが肩からタックルの要領で木を押し飛ばす。そしてリコを抱きかかえ残りの破片を自身を盾にして防いだのだ。ストラを纏っているのでダメージは全くない。けれど早々やりたいとも思わないが。

「大丈夫だったか？怖い思いさせて悪かったな。もう心配ないぞ。悪い奴は追い払ったからな。」

「ユーリお兄ちゃん、う、うわあああああん！！怖かったよう！お兄ちゃんが居なくなっちゃうんじゃないかって。」

安心させようとしたらいきなり泣かれて面食らう。そうして泣き止ますのにしばらく時間を使ったのは言うまでもない。

「・・・落ち着いたか？」

「・・・ぐす、うん。大、丈夫。」

まだ少しぐずっているが、まあ問題ないだろう。戦闘よりこっちの方が神経使ったような気がする。心の中でため息をつく。けれども誰も欠けずにいられたのだ、それを喜ぶべきだろうと思いなおす。

曇る事無く光がさす晴天の下、二つの影が歩いていく。片方は小柄な体で時々妙な呼吸やら拙い動きで手足を突き出したりして、似非格闘術と言えない事も無い様な、そんな動きをぎこちなく繰り返していた。初めて拳法なんかをやりはじめた初心者と言えば分りやすいだろうか。それを行う少女、リコ。

もう片方は、その動きを見ながら時々口を開きアドバイスのようなものを出したりして見守る青年、ユーリ。時折、苦笑いも浮かべているが。ある程度動きを見た後休憩をリコに伝える、それを聞いたリコは少しずつ動きをゆったりとさせ一連の動作のようなものが終わるとユーリの側へと走っていく。

「お兄ちゃん、どうだった？少しは上達した？」

「いや、始めて3時間ぐらいしかたってないんだが・・・と言うかこれで２０回ぐらい聞いたぞ。」

少女の言葉に苦笑いが絶えない。先ほどから事あるごとにどうかな？上手かな？と聞かれることがやたら多い、教えないほうがよかったかな、と少し自分の行動を振り返る。とりあえず自分の体をきちんと動かせるようになったらナイフの使い方でも教えようと思う。

「まあ、少しずつ覚えてものにしていくことだし、気長にやらないとだめだからな。続かないと意味ないし。」

「それでも、早く上達してお兄ちゃんみたいに強くなりたいんだもん！！」

リコの瞳が此方を真っ直ぐ見つめる。その顔には曇りも何もなく、真摯な気持ちが宿っていることが判る。その瞳を受けて、やっぱり早まったかな？とこれからも教え続けることになりそうな予感にため息が漏れそうになる。だが、その意欲は頼もしいと素直に思う。そもそもリコが戦闘術を覚えようとしたきっかけは少し前に遡る・・・

「・・・ねえ、お兄ちゃん、さっきの女の人誰？」

そうきっかけは恐らく、この質問だったのだろう。この時はまあ、驚くよなあ。どう言えばいいか。とそんなことを考えていた。拒絶されないように言葉を選びながら。俺はいいがエイナはショックだ

ろう。だったらとりあえず本人に自己紹介をさせようと思い至る・・・此方を心なしかジト目で見つめるリコに気付かないまま。

「あのな、リコ、俺、というより俺たちは少し特殊な体質なんだ。この体の中にはもう一人別の人がいるんだ。」

「？そうなの？あの人はお兄ちゃんじゃないの？」

「ああ、別人だ。ここからは本人に聞いてみな。」

そう伝え、エイナに代わる。光が収まり、まだいたるところに怪我をしたエイナが現れる。驚愕した顔でこちらを見るリコに笑顔で（内心びくびくしているが）語りかける。

「えっと、今ユーリが言ってたもう一人、私はエイナ、よろしくね、リコちゃん！」

「う、うん、よろしく。」

まだ少し事態が呑み込めていないのか、つたない返事を返す。それを見て落ちつかせようと優しい笑みを浮かべ話しかける。・・・中から見ているユーリは緊張により、ひきつった笑みを浮かべたエイナを呆れながら見ていた。

「直ぐには慣れないと思うけど、少しずつ慣れていってくれたら嬉しいな。」

「うん・・・あ、あのね。一つ聞きたいことがあるの。」

「うん、何？なんでも聞いて。」

予想外の事にリコからエイナに話しかける。それに対し幾分緊張が解けたのか、エイナは自然に笑みを浮かべ次の言葉を待つ。

「ユーリお兄ちゃんとエイナお姉ちゃんは別人なんだよね？」

「うん、そうだよ。」

「この話ってユーリお兄ちゃんも聞いてるの？」

「うん、聞いてるけどユーリに聞かせたくないなら言っとくけど？」

「う、うん。少し、恥ずかしいから。」

「？まあ、そういうことだから少し席を外してて。」

その言葉にユーリは外の情報を遮断し、適当に材料を取ってきて小物制作に取り掛かる。それを感じ取ったエイナはリコに伝える。

「もういいよ。これからの会話はユーリには聞こえない。」

「本当？」

「うん。」

「あ、あのね。」

ユーリを外してまで自分に相談があるのだ。気合を入れて耳を傾ける、そしてリコの口から語られた言葉は。

「お、お兄ちゃんとお姉ちゃんって恋人なの？」

「え、ええ～！！そ、それは！あの、うん、えっと・・・」

突然の不意打ち。全く思いもしない伏兵により余裕を装った動揺が一気に表面に出てくる。質問の意味を復唱し、更に顔に血液が集まる。既に完熟トマト並みである。

「べ、別に付き合ってるわけじゃないよ、うん。そんなことはなかったし、なかったし・・・」

赤い顔でぼそぼそという。先ほどの年上の余裕みたいなものはどこにもない。まあ、元々メッキだが。それを見ていたリコは。

「それじゃあ、二人は恋人じゃないんだ。」

「う、うん。そうなるの、かな？」

「ふ～ん、そうなんだ、それじゃあ・・・」

そこで一旦言葉を切り、満面の笑みで爆弾を投下する。・・・ちなみに村でのリコは他の同年代の子より頭一つ飛びぬけて聡明だったりする。

「私が恋人になってもいいんだよね？」

「えええーー！！ち、ちょ。」

「だって恋人じゃないなら止めたりできないよね？」

「む、むう〜〜！け、けど！」

「私、負けないから！」

それは宣戦布告、小さな体に宿った大切な思い。新しく現れた女性を見て不安に思ったが一安心する。ちなみにエイナについては初めから気を許している。ユーリが信用しているのが判ったので少し嫉妬が入ってこそいるが初めて見たときから受け入れている。

焦るのはエイナ。最初考えていたことから明後日どころか次元がゆがんで１１次元に向かってかっとんで行く。もう余裕どころかまともな思考すらできてない。リコの言葉に対して返事ができてない点からも明らかである。見た目と内面が激しく反比例している。

「お兄ちゃ〜ん、もういいよ〜。」

「え、いや、私の話を。」

話は終わったとばかりにリコはユーリを呼ぶ。当然話を聞いていないユーリが出てくるわけはない。それを見てエイナに視線を移し、笑顔で言う。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんに代わって！」

「絶対！嫌！！」

本人の知らないところで争奪戦が勃発している。それはあまりのも長いのでユーリが外の様子を窺うまで続く。既に両方とも遠慮はない。そういう意味では大成功と言える。

そしてその後なぜかユーリが表に出るのをエイナが非常に渋ったが、初めて話す同性だからまだ話してたいんだろう、と考える。女の話は長いというし、そんな考えで打ち切る。そして表に出てきたユーリに飛びつくリコ、中ではエイナがハラハラしながら見ていた。

「っと、どうした？リコ？」

リコを受け止め、話を聞く。リコは意を決したのか口を開き思いを口にする。

「あのね、お兄ちゃん、私に戦い方を教えて！！」

「・・・」

「私も自分の身を守るくらい強くなる。お兄ちゃんの足手まといになんかなりたくないから！！」

それは先ほどの戦闘で死の危険を感じて、あれほどの恐怖をその小さな体に一身に受けた者の言葉かと瞠目する。まだ、きちんと理解はしていないだろうがその思いは本物だと感じ取る。

「わかった。」

「本当？！」

「ただし、結構大変だぞ？」

「む、が、頑張るもん！！」

「そうか、その意気だ。」

どのみち、このまま放浪者になるなら力は必ず必要になる。ならばせめて自分で教えれる事は教えようと気持ちを切り替える。この確かな覚悟を信じて。

「（まずはお兄ちゃんの隣に立てるぐらいに強くなくちゃね！負けないよエイナお姉ちゃん！！）」

まあ、それ以降とりあえず武器以前に体の動かし方や、体力をつけることを優先しているのだ。そう言った基礎をきちんとしないと怪我をするのだから、手抜きをする気はない。

「さてそれじゃあ休憩終了！森まで出発するか。」

「うん！！」

「気持ちの整理はついたか？」

「・・・まだ、判んない。でも、とりあえずおばあちゃんに会いに行くのは変えない！自分で確かめたいから。」

「そっか。」

祖母の事についての不安はいまだ在るだろうが正面から向かい合うつもりらしい。短い間に強くなったものだと笑う。子供の成長って早いんだなあ、と少し驚いたものだ。親心みたいな、妹を見る兄のようなそんな感覚を覚える。

「（とはいえ、問題はあの黒い騎士、か。）」

ここから進む以上、またどこかで出会うだろう。あの時あの騎士はたしかにキコウシキと言った。最初は分からなかったが、今は一つの結論が出た。騎攻式の事だろう。あるキャラの技である。もし、あの騎士が思った通りに人物だったとしたら、なぜこうなったのかなにかわかるかも知れない。

「とはいえ進むしかない、か。」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

リコに返事を返し歩き出す。止まることなどいつだってできる。今はこの小さな仲間に意志を失わないよう力をつける。今の最優先はそれだろう。だから思う。この子が自分を見失わないように、元の虚ろなループに戻らないように。せめてこれから先その笑顔をできる限り曇らせないように強くなってほしいと。

風が二人の側を一際強く吹き抜けた。

ある遺跡にて〜

「む！」

「どうした？リニア。」

「なんか、無性に撃ちたくなってきました。ベクサー様少し殲滅・・・もとい殲滅に行ってきます。」

「言い直した意味がねえだろう！」

「小さなことは気しないでください、禿げますよ？」

「嫌なことを言うな！・・・で急にどうした。」

「・・・なぜか撃ち抜く対象が増えた気がしました。では、行ってきます。」

「・・・なんのことだ？」

今日も平和である。

狂気との死闘　紅と蒼の交差（後書き）

今回は前話の最後のキャラが出てきました。このキャラは赤の光無しなら大体エイナと五分です。ちなみにユーリとサシでやるとユーリが勝ちます。リコ優先でやった結果がこれです。

後はフラグです。まあ、予想してた人も多いかなと思いますが、リコ参戦です。当然本人が知らないうちに。リニアは・・・うん。

あと黒騎士の正体、エクステーゼやったことがあるなら割とバレバレですね。まあ、思った通りです。

召喚獣についてはまあなんか色々個人差があります。ユーリのは呼ぶのは基本大きく戦闘力が同族でもやけに高いです。なんででしょうね？召喚術については適正によって呼べない奴がいたりします。ちなみにリコは機、鬼属性です。

ストラと赤黒い光は某超野菜人のオーラの色違いを想像してください。最大で2みたいな感じになります。

文字数が今回半端ない。いつのまにこうなったんだろう？2話に分割すればよかった。まあ、いっか

広大な森　新たな誓約と感情の暴走（前書き）

けっこう遅くなりました。最近時間が取れなくなってきたので色々とピンチです。そこで掛ける時にネタを一気に詰め込んでしまえ、といったノリで書いていたら再び量がおかしくなってしまいました。一応これゼロから三日で作ってます。

多分内容がすごい事になってます。ここまでする必要は全くないし、予定もしてないのですが、最近色々本なんかを読んで、こういうのやってみようと思いついたので書いてみました。なぜか自分でハードルを上げているような気がしてならない。大丈夫かなこれ。

あと、やってみたいネタはやっぱり　主人公の勇気が世界を救うと信じて！！という奴ですね。あれはいい、どういう状況でも打ち切りに持って行ける。やったら感想がすごく怖い事になりそうですが。・・・一回やってみようかな？どんな感想が来るか、興味があるような怖い様な・・・

広大な森　新たな誓約と感情の暴走

木々の合間から光が漏れ、薄暗い暗闇をいくらか明るく照らす。周囲には緑があふれ、木々に覆われている。ここは《獣魔の森》この魔物は好戦的になっており、しかも森自体が入り込んだものを外に出さない天然の迷路のような構造をしている。その森の中、エイナとリコは先を急ぐために歩を進めていた。周囲に召喚獣を出しながら。

「ねえ、リコちゃん、この森っていつもこんなに暗いの？」

ライザー2体が明かりを灯し、いくらか明るいとはいえ、本当にささやかなものだ。奥の方に目を向ければ暗闇で覆われその先を見る事は敵わない。ユーリならば視えるだろうが、残念ながら自分にはそこまでの眼はない。不意打ちや足元に注意しながら話しかける。そして話しかけられたリコは顔を上げ、少し考えた後喋りだす。

「うん、いつもこんな感じの筈だよ。ここが明るい事なんてなかったと思う。薄暗くてちょっとひんやりしてるの。」

リコが言うにはこれが普通らしい。日が射し辛い為に森の中は少々冷えているのだ。そして、風が吹き抜け、静けさをより感じさせる。その中リコは何を思ったのか、ジト目でエイナを見上げる。

「そんな事より、お姉ちゃん！そろそろユーリお兄ちゃんに代わってよ！少しは上達したか見て欲しいんだから！」

「だから、私が見てあげるって言ってるじゃない！別にユーリが見る必要なんてないんだし。」

「私はお兄ちゃんがいいの！それにお姉ちゃんわかんないじゃない！」

「駄目ったら駄目！！」

先ほどからこれの繰り返しである。しばらく何か話したと思ったら直ぐにこの話に戻ってくる。事の始まりはこの森に入る時に起こった事が原因だったりする。

「じゃあ、とりあえず森に入る前にリコにはこれを渡しておくよ。」

そう言いながらユーリは道具袋に手を入れ、数本の投げナイフを取り出す。これはリニアとの戦いで使用したものの余りである。割と使えるのだが自分にはストラがあるし、エイナにいたってはあんまりコントロールが良くないので味方に当てたり、隙ができたりする可能性があるので基本禁止している。特に今は。リコの方に飛んで行ったりしたら洒落にもならない。

「ナイフ？でも私使ったことなんてないよ。」

「まあ、そうだろうな。けどこのナイフは投げて使うんだ。まだリコにはモンスターに近づいての戦闘は危険だからな。だからリコでも使えて、遠くからでも攻撃できるナイフの出番ってわけだ。」

「ふ～ん、それじゃあこれを投げるの？」

「ああ。」

「でも、これ、無くなったらどうするの？」

「当然逃げろ、そもそも、これは攻撃というより牽制の意味で使うんだ。もし近くに俺が居なかったり、離れ離れになった時に俺が行くまでの間を持たすための物だからな。」

「へえ、そうなんだ。」

「それに、リコも召喚術でライザーが呼べるだろう？それの補助に使ったりなんかもできるな。とはいえ、そのナイフは基本非常時以外には使わないようにしとく事。本数が限られてるからな。」

「うん、判った！」

「よし、とりあえず投げ方を教えておくな。慣れてきたらそのうち他の使い方も教えるから焦らず一つ一つ覚えていくんだ。いいな。」

「うん！！」

ユーリの言葉に元気よく頷くリコ、それを見ながらナイフの使い方を丁寧に教えていく。特にナイフで自分を傷つけないように教える。身を守る物で傷をつけさせるわけにはいかない。自然と真剣になる。リコもそれを感じたのか、真剣に耳を傾けている。

そして、一通り説明した後、手ごろな木に剣で傷を入れる。判りやすいように円形に傷を入れる。更に、ちょうどダーツの的のように円の中に等間隔で一回り小さな円を刻む。

「とりあえず、説明はこんな所だ。今度は実際に投げて見な。まずはこの円の中に刺さるように頑張ってみな。最初は俺が手本を見せとくよ。」

木から少し離れ、手にナイフを持ち、構える。リコがしっかりと見続けている中、ユーリがナイフを投げる。手から放たれたそれは回転する事無く真っ直ぐに木に向かって飛ぶ。次の瞬間乾いた音と共にナイフが木に深々と刺さる。それは切り込みを入れた的の中心を綺麗に捉えていた。

リコの眼が大きく見開かれる。そしてなんかキラキラした目でこっちを見ていた。それはストラや召喚獣を初めて見た時に酷似していた。

「すごいすごい！真ん中に綺麗に刺さってるよ！さすがお兄ちゃん！！」

「なにがさすがなのか判らんが、まあいいや。とりあえずこんな感じで投げて見な。といっても最初は俺が補助するけどな。こっちきてみな。」

「え？補助？うん、今行くね。」

まだ補助の意味がよく分かっていないのか。首を傾げながらこちらに歩いてくる。そして自分が投げた所より幾らか近くにリコを立たせる。そしてリコの後ろできちんとした姿勢を取らせる。最初が肝心なのだ。ここで変な癖がつくと、何かの拍子に怪我をするかもしれないし、ここぞという時に外したり刺さらなかったりするのだ。

「え、お、お兄ちゃん？」

「？どうかしたか？」

「そ、その、手、手が当たってるんだけど。」

焦ったような声でリコが聞いてくる。まさかと思うが、さあやってみろで済ますと思っていたのだろうか。さすがにそんな真似はさせないが。

「だから補助をするっていっただろう？きちんと構えをしとかないと投げづらいだろう？怪我をされても困るし、基本はきちんとしとかないとな。ほら、背筋ちゃんと伸ばして。」

「う、うん。こ、こう？」

「・・・いや、なんでいきなりそんなに力を込めるんだ？もっと軽く持ったんでいいぞ。」

手を取った瞬間から体に力が入ってガッチガチになってるリコを見ながら呆れる。軽くと言ってるのにその真逆の状態にしかならない。これでは投げるどころか怪我をする。下手に動かしたりしないようにしっかり手を掴んで置く。最初は数分で終わるかなと思ったが、既に半時間かかっていたりする。やはりいきなり刃物を使わせるのは無理があったかな、と胸の内でため息を吐く。

「・・・やっぱりやめとくか？抵抗あるなら他の方法にしとくけど。」

「だ、大丈夫！私は大丈夫だから続けて！きちんとするから！」

やめようとするとなぜかすごい勢いで止めるリコ。しかし教え始めると妙に力が入り、いつの間にかナイフの柄をギュッと握りしめている。それをもう十数回繰り返している。どれだけ力を込めていたのか手はプルプルと震え、顔は真っ赤になっている。

「こ、こうでいいの？」

「・・・ああ（力抜いたらそれだけでいいんだけど。）」

構え自体は最初から問題ない。ただ力を抜いて欲しいだけだったのだ。ここまできてようやく冷静になってくれたらしい。ただ、なぜか時たまにやけているのが謎だが。とりあえず今は関係ないと思い直す。ようやく思った展開になったのだ。また変に力まれても困るのでさっさと教える。

「それじゃあ、そのままの姿勢で腕をこうやってナイフをこのまま一気に投げる。いくぞ。」

「う、うん！」

「・・・また力入ってるぞ。」

とりあえず、リコの手を持って一緒にナイフを投げる。それは綺麗に真っ直ぐと飛び、先ほど当てたナイフの下に刺さる。乾いた音と共に数枚の木の葉が舞い落ちる。

「わあ！できた！」

「まあ、思ったよりも時間がかかったがこういう感じでやるんだ。

もう一回やってみるか？」

「うん！」

「よし、それじゃあ握ってみな。」

一度投げて綺麗に刺さった事で刺激されたのか今度は力まずに構えれた。今度は俺は手を触れず、怪我をしないようにだけ注意を払う。そしてリコが先と同じようにナイフを投げ放つ。自分だけで投げたからか狙いが逸れた。若干、ずれた位置に向かって飛んでいく。今度は円の外に刺さった。

「あ～、外れたー、む～もう一回！」

「やるのはいいが怪我だけには注意しろよ。後、あまり意気込んでへとへとになるまでやるなよ。まだまだ歩くんだから。」

「うん、今ある分だけにしとくね。」

そういうリコの側には十数本のナイフ。リコはそれを抜いては投げ、抜いては投げを繰り返す。

「あっまた外れた～、もう一回！」

さすがに初めて間もないので大体十回に一回円の端の方に刺さるぐらいだ。けれど何度も繰り返し練習していくことに意味がある。そうやって行けばきちんと体が覚える。リコは一回一回構えを確認するので変な癖もつかない。これには少し安心した。

「（また、何十分もかけたくないしな。）」

そう思い、少し視線を外す。その先には光を放つ常夜の石、既に点滅してない。発光体になっている、なんかどんどん進化して行ってないかこの石？と不思議に思いつつもエイナに会いに行く。なんか嫌な予感がひしひしと感じるが。台風に生身で突っ込んでいくような、どうしようもない諦念が湧き上がる。その果てに、そのことについてユーリは考えるのを止めた。

「エイナ、どうし・・・」

「・・・・・・」

常夜の石の中に入ってエイナを見つけると同時に来たのを後悔した。今更だが。エイナの首から下はいつもと変わらない。首から下は。顔がすごいことになってる。すごく笑顔になっているのだ。満面の笑みというやつだろう。歯ぎしりさえ聞こえなければ。米神もなんかぴくぴくしてる。噴火寸前の活火山とか、臨界直前の炉心とかだろうか。はあ、めんどくさい。

「一応聞くがなんかあったか？」

「・・・じゃ、ないわよ。」

「なに？」

「なにかあったかじゃあ、ないわよ！！」

ああ、噴火した、と冷静な自分がどこかで冷やかにゴングを鳴らす。これからの惨劇を考えると頭が痛くなる。後、胃。そんな事を考えながら目線はエイナから離さない。以前は予備動作なしで岩が飛んできたのだ。今度は剣で切りかかってくるか、他ならいきなり殴りかかってくるか等々、どんな攻撃が来るか予測する。即時対応ができるように。

「うう〜〜！！」

そんな考えは当然エイナは知らない。というか知っていたらもっと酷い事になるだろうが。切り出した言葉と共に目が一気に吊り上がる。普段の明るさや笑顔は欠片も残さず消え、今自分に向かって怒気を絶賛照射中。その強さは例えるなら一つに収束した放射能レベルだろう。肌が視線で焼けそうなくらい睨んでくる。足元の草も気のせいか萎れている。

理由は無論、嫉妬の類である。リコとユーリが手を取り合って仲良くしているのが逆鱗に触れたのだ。思えば自分とユーリはそういった二人で何かを一緒にするといったことはほとんどない。どちらか片方しか表に出られないので無理はないのだが、エイナは納得しない。それを行えるリコを羨ましく思う。

正直な話、常夜の石の中なら可能なのだが、お互いが揃って何かをするほど長時間二人で居た事は無い。そんな必要はないし、旅を続ける必要もある。今はリコもいるので尚更時間はとれない。だからこそ、エイナは二人でいる時間を大切にしようと思っているのだ。

「はあ、とりあえず何をそんなに怒ってるんだ？理由が判らないん

だが。」

正直に言う。すると信じられないものを見たような顔で驚く・・・いくらなんでもその反応は失礼だと思うぞ。いつもは俺がその顔をしてたんだが。というか俺はいつも振り回されてたんだが。と少しへこむ。

それに対してエイナはその言葉に激しい憤りを感じる。無論この気持ちはエイナが一方的に抱いているものだが、それでも看過できる物では無い。先ほどの嫉妬に加え、目の前の想い人に対して沸々と怒りが湧き上がる。

「はあ！？判んないの？！本当に？全然？」

「あ、ああ。」

理由を聞いたら怒られた。理不尽にもほどがある。エイナはしばらく何かを考えるように俯いて何か悩んでいたがキッとこちらを睨むように顔を上げ、唐突に尋ねてきた。

「ね、ねえ。」

「なんだ？」

「私とリコちゃん、どっちが大事？」

「はあ？話が急に飛んだな。なんか関係あるのか？」

「いいから！！答えて！！例えば、そうね、私とリコちゃんがモンスターに襲われていたら、どっちを先に助ける？」

いきなり会話が妙な方向にすっ飛び始めた。なんでこうなったんだか。と内心呆れる。とりあえずこのセリフだけ取ったらドラマか何かの修羅場だろう。まさかこの質問をされる側になるとは思いもしなかった。といっても言う側になど回る気は毛頭ないが。

とりあえずドラマや漫画の主人公みたいにあやふやな態度だとまずいよなあこの場面。とか関係ない事を考える。まあ、エイナが俺にそんな感情を持っているとは思えないのが実情だが。エイナはそんな意味合いで言って無いだろうが、その内後ろから刺されたりしてな。なんてことを考えた。結論だけ取ると大体合ってるのだが。無論気づかない。

脱線した思考を元に戻す。現実逃避をしていても仕方ない。エイナも何か考えがあるんだろう。ここまで真剣な顔は初めて見る。相当真面目な話なんだろう。ふざけた考えは打ち切り本気で答える。・・・本当はそう思いたいだけである、割と切実に。

「エイナだな。」

「えっ・・・」

色々考えたが実の所、エイナ視点では即答しているように聞こえている。ユーリの思考はエイナが考えている以上に処理能力が高いのである。その高速反応に呆気にとられたような反応をする。一方ユーリは先ほどの脱線した思考が割といい線いってるなんて思いもせず、首をひねる。

「（あれ？なんだこの反応。なんか思ってたのと違う。）」

ユーリは目の前の状況に理解が追い付かない。エイナはしばらく放心したと思ったら、急に赤くなり出す。耳元から首筋まで肌が見えている部分が全て真っ赤になっている。それを見ながら、鬼の肌の色ってこんな感じかなあ、とか外れた事を考える。

「（まさか、また何か間違えたか？様子がおかしいし。間違ったことは言って無いし、なんかおかしいのか？）」

どうしてこうなった？自分としてはそこでリコを優先しないとダメ！みたいなことを言うのだと踏んでいたのだが当てが外れた。そう言ったらエイナを肯定して、話を合わせようと踏んでいたのだが、まさかここまで怒るとは思いもしなかった。とりあえず、様子見をしながら宥めようと密かに決める。

「そ、そう。そっか、そうなんだ。あ、あはは。」

一方エイナとしては当然そんな理由は知らない。自分の中でようやく形を持ち始めていた気持ちに熱が入ろうとしていた。主に原子炉みたいなものがフル稼働。様々な考えが頭の中を駆け巡る。

そんなことはつゆ知らず、なにか間違えていたのかと内心焦るユーリ。とりあえず理由を言おうと口を開く。余談だがユーリは本当に大切なものに優劣はつけない。現実的に関わる順番とか、そういった類のものは決めるが、何が何より大事とかは考えない。全て大事だから全部大切なのだ。・・・恋愛関係においては致命的ともいえる考えだが。

「ああ、エイナは交替したら済むからな。どうなっても先になるのはエイナだな。それで後になるのはリコだな。けど優先するのはリコになるな。まだ力不足だし。」

「え・・・」

エイナの動きが止まる。なぜか周りの空気も凝固したかのような錯覚に襲われたが気のせいだと判断して言葉を続ける。

「だってそうだろ？エイナは俺が交替したらいい。けどリコはそんなことはできないんだから守らざるを得ないだろう？」

エイナは顔を伏せた後、事務的な声で淡々と聞いてきた。心なしか背筋に寒気が走った。

「・・・私、どっちが大事って聞かなかった？」

「その後の例えの返事じゃなかったのか？」

「・・・・・・」

「なんか間違ってたか？俺としては結構真剣に考えたんだが。」

正直に言うとなんかエイナの眼が怖いくらいにギラギラしている。とりあえず今のエイナを喋らせるのは不味いと感じたので更に口を開く。なんか地雷踏んだらしい。どうしたらよかったんだろう？

「それに仮にそうなってもお前だったら俺が行くまで絶対に諦めないだろう？黒騎士の時にはっきりわかったよ。だから、リコを優先することにした。」

真っ直ぐ見つめ、それを言うとなんだかきょとんとした後、一気に顔に火がつく。いきなりの変化に驚く。何が何だかわからない。

気のせいかさっきと何か違うような。

「へえ、そうなんだ。優先するのはリコちゃんなんだ～。」

そう息巻くが、顔が若干引き攣っている。心が煮えたぎる気持ちで埋まる。我ながら人の言葉一つでここまで気持ちが変わるのだからいい加減だなと思う。けれど少し前までは本当に嬉しい気持ちでいられたが、今はマグマの下からボコボコと湧き上がる気持ちで埋め尽くされている。

「（で、でも、まだ判んないわよね。ど、どうせだし、もう少し聞いちゃえ！そもそも気付かないユーリが悪いんだからこれは当然なのよ、これは、うん。これ以上リコちゃんと一緒にするのは不味い気がするし。）」

危機感と独占欲からさらに踏み込もうとする。目の前には何が何だかわかっていない青年一人。怒りを抑えながら、口を開く。

「ね、ねえ、私の事は大切に思ってる？」

「ああ、当然だろう。そうじゃないならここまで関わらんしな。」

「そう、それでリコちゃんの事はどう思ってるの？」

「まあ、妹が居たらこんな感じかなあといった感じか？」

「・・・そっか。」

最後の言葉を聞いて少し安心するのを感じた。少なくともリコは妹みたいなものだからユーリの方からの進展はない。つまり、問題

はリコからのアプローチのみ。先程の怒りも今の言葉で幾らか収まったように思う。消えたわけではないが・・・

「ああ、そうだ。ユーリは少し休んでなよ。リコちゃんの事は私が面倒見とくから。」

「はあ？いきなり何を言いだしてんだっておい！」

結論としてはつまり、これ以上ユーリを表に出さなければいいという事に他ならない。そうすればとりあえず大丈夫な筈、言った側から表に出る。取り残される形となったユーリはいきなりの展開に驚くしかない。

「・・・つまりさっき怒ってた理由はなんだったんだ？」

訳が分からないまま放っておかれたので結局、状況把握がいまいちできていない。けれど、一つ思う事は、怒ってた割には何もせずに表に出たなという事だけ。身構えてた自分が少し悲しく思えた。

「あいつ、リコの事見るっていったけど投げナイフの事とかトレーニングの事とか判るんだろうか？」

まあ、何か率先して行ったから自信あるんだろうと受け取る。とりあえず表に意識を割いて様子見に徹する。何かあれば俺がなんとかすればいいんだから、と溜息をつきながら思う。俺ってこんなに面倒見良かったっけ？と改めて疑問に思う。やはり変わったのだろう。だが、嫌な変化ではない。けれど変化した原因を思うにそれだけでは終わらないだろう。

「（俺に何かあってもあいつらに被害が及ばないようにしないとな。

）」

それは自分で決めた思い、あの二人には何も知らず笑っていてほしい、とそんな無理なことを考える。もう二人は踏みだしている、変わろうとしているのだ。俺がその決意を汚して良い筈はない。だから来たるべきときには支えようと一層強く心に刻む。

そして、表ではエイナがリコの動向を見守っていた。エイナはリコの事は別に嫌ってない。むしろ明るく分け隔てなく接するエイナにとってリコはかなり好意的に見えている。自分自身が割と子供好きなこともある。

要するに面倒を見たりする事自体が結構好きなのだが、ちなみにユーリはそういう事は割と早くから気づいている。こういう事は気づくのが早い。故に表に出るといった時も止める気が無かった。やはり話したかったんだなと納得したぐらいである。それ故に様子見で終わらせているのだ。

「さ〜て、とリコちゃんは、と。おおやってるやってる。」

エイナの視線の先ではちょうど最後のナイフを投げたリコが目に映った。それは思った以上に真剣にやっていた、エイナはリコが戦闘に関わるのは良しとしていない。けれどユーリはなにか確信めいた顔をして教えているので口を挿めないのだ。それで何らかの亀裂が生まれることを恐れている。今の自分の最初の、そして恐らく最後の拠り所なのだ。それを失くしたくない。

「（こんなこと知ったらユーリはどう思うかな？嫌な女って嫌いにならないかな？）」

ユーリに嫌われるのを今、自分は何より恐れている。だからこそ放したくない、傍にいてほしいのだ。できることなら、ずっと中に閉じ込めればいいのでは？という考えも浮かんでいたりする。

「（駄目だよね、そんなの。うん、進むって決めたんだ。ユーリと一緒に。こんな事じゃだめだよね。）」

そう思い思考を打ち切る。そしてそれと同時にリコが此方を向く。

「終わったよ見ててくれたユーリお兄・・・なんでお姉ちゃんが来てるの？」

いるのがエイナとわかるとなにかあったのか聞いてくる。

「別に何がどうってわけじゃないんだけど、ユーリも色々あって疲れたかなと思って私が出てきたのよ。」

「ふ～ん、それじゃあ、今度はお姉ちゃんが教えてくれるの？」

「うん！任せて！！」

「それならこれからどうしたらいいの？また、投げるの？」

「え・・・」

そう言われて思い返す。そういえばこういうには全てユーリが教えていた。自分は理解できないと早々に聞くのをやめ、お風呂に入浴したんだった。それを思いだし、これからどうしようと途方に暮れた。自信満々に受けた手前、判りませんとは言えない。エイナも

さすがに子供の前でかっこ悪い所は見せたくない。かといってユーリに頼るのもばつが悪い。それなら変わった意味がまるでない。

「（とりあえず、続けさせればいいのかな？でも怪我でもしたら大変だし、どうしよう。）」

「お姉ちゃん？」

「え、ああ、そうね。少し休憩にしようかな、疲れたでしょ？」

「うん！判った、それじゃあ、ナイフ片づけてくるね。」

そういい、ナイフが刺さっている木に向かってリコが走っていく。それを見ながら安堵のため息をつく。何とかうまくいった、と思い、次はどうしようかない頭使って悩む。それならもう森の中進んだらいいじゃないと思い至る。

「（うん、それでいいわよね。別に進みながら考えたらいいんだし。）」

問題を先送りしながら旅を優先しようと決める。その間にユーリに聞こうと密かに決める。やはり子供の前ではかっこつけたいらしい。ちなみに初対面の時に年上の威厳とかそんなものは因果地平の彼方に吹っ飛んでいるのだが、どうも本人はそれを忘れているらしい。喜劇である。

「エイナお姉ちゃん、とって来たよ！」

「それじゃ、休憩にしよっか。」

木陰を見つけ、腰を下ろす。リコもそれに倣う。リコは先ほどまで体を動かしていたからか、肩で息をしていた。

「リコちゃん、大丈夫？結構つらそうだけど。」

「うん、大丈夫だよ、このくらい。」

笑顔でそう言う。自分の体を鍛えるなんてことは初めてなので、全てが新鮮で楽しいのだ。それを伝えるとエイナも笑顔で返す。

「そっか、それならよかった。中から見てて少し心配だったから。」

「問題ないよ、それに頑張らないとユーリお兄ちゃんの隣に立てないから。」

その言葉を聞いて、頬が引き攣る。さすがに今の言葉は流せなかったらしい。

「で、でも、ユーリは強いからまだまだ隣に立つのは難しいんじゃないかなあ？」

「けど、何もしないよりましだもん！私だってできるんだから！エイナお姉ちゃんなんて直ぐに抜いちゃうんだから！」

「むっ！私だって強いんだから！そんな簡単にいかないんだから！」

「む～～！」

「う～～！」

先ほどの余裕は欠片も無い。この二人の関係はこれがデフォルトらしい。そしてしばらく唸りあった後、二人して自分の自慢話に移行する、何気にやってることが同レベルという話。ちなみにユーリはこの会話は一応聞いている。

「私、ユーリお兄ちゃんに結構筋がいいって言って貰ったもん！これって見込みがあるってことだよね！」

「でも、私だってそれくらいやれるんだから！ほら、こうやって！やあ！！」

その言葉と共にナイフを取出し、大気を切り裂いて飛んで行く。しかし木に弾かれて地面に落ちる。しばらく静寂が訪れる。

「・・・できてないよ。お姉ちゃん。」

「わ、私は剣が専門なの！だ、だからこういう武器は私には必要ないんだから問題ないの！」

「それはどうかと思うよ、それに私は料理だって洗濯だってできるんだから！戦う以外にもできることはあるんだし。」

「そ、それくらい、私だってやれるわよ！」

「本当〜？さっきみたいに失敗するんじゃないの？」

「だ、大丈夫よ、それくらいちょちょいのチョイよ！」

ちなみにそのセリフを聞いたユーリはエイナに料理はやらさないようにしようと決める。仮にやるにしても近くで教えながらさせよ

うと決意する。さすがにどこかの漫画やアニメのように食べただけで死にはしないだろうと思ったが、ここも似たような世界だと思いなおして気を引き締める。味方の善意で生死の境をさまようとか冗談じゃない。笑い話にもしたくない。

「それじゃあ、エイナお姉ちゃんは他に何ができるの？」

心なしかリコのエイナに対する扱いがどんどん下がってきているなとユーリは判断する。最初は姉妹のようだったが、今の状況を見てみると、子供にあしらわれる駄目な女性という図式が出来上がりつつあるような気がする。現にリコの眼が半眼になっている。敬意の欠片も無い。まあ、それだけ打ち解けていると言い換えてもいいが、そんな綺麗なものだろうかと疑問に思う。

「そ、そうね。他に私ができることは・・・」

そういい、自分にできることを上げていく。料理・・・やったことない。洗濯、裁縫・・・同じく。記憶が無いから何とも言えないが、少なくとも今は無理。手先はそんなに器用じゃない。工作・・・ユーリに止められた。思えば剣を振り回すぐらいしか取り柄がない。そんな今更な事実に事ここにいたって漸く気付く。

「・・・そ、そうね。お、お話するのとかは得意よ！」

「・・・へぇ～。」

もう、リコの眼が何というか白い。年上の威厳や余裕が隙間風に吹かれ飛んでいく、そんなやるせなさに襲われる。いたたまれない。泣いてしまいそうになる。瞼が熱くなった。

「さ、さあ、そろそろ行きましょうか！あ、森の中なんだし、明かりがいるよね！ライザー！」

話を打ち切るように一気にまくしたて、ライザーを召喚する。呼び出されたライザーはエイナの指示通りに目に光を灯し、明かりとなる。それを無言で見続けるリコ。

「ど、どうしたのリコちゃん。早くいきましょ！」

「・・・ソウダネ。」

見た目と力関係が逆転した瞬間である。中から見ていたユーリは呆れて物も言えない。とりあえず、暇があれば今度なにかやらせてみようと思う。とはいえ何が向いているだろうか。と少し思案する。まあ、色々教えて見込みがある物を教えればいいだろうと簡単に考える。こういうのはコツさえ掴めば後は経験や場数を踏みさえすれば自然と形になる物だ。

「さて、リコちゃんもライザーを呼んでおこうか。そっちの方が明るいし。」

「うん、わかった！来て！ライザー！！」

その声に応え、青いライザーが現れる。黒騎士の相手をした時にショートしたが問題なく稼働している。エイナのライザーと同じく目から光を放ち薄暗い森を明るく照らす。

「それじゃあ、行きましょうか。」

「うん！」

そういって二人は獣魔の森に足を踏み出す。湿気を含んだ空気を感じて少し眉を潜める。けれど、足は止める事無く歩を進める。

そして、時間は現在の時間に戻ってくる。つまり冒頭の展開である。その後二人は森の中を探索していたが、リコがそろそろユーリと変わってと言い始め、それをエイナが断っての繰り返しである。しかしその不毛な会話もエイナの唐突な一言で終わりを告げる。

「・・・で、ここはどこなの？」

「え！？判んないよ！というかお姉ちゃんがどんどん進むから道知ってるのかと思ったのに、知らないの！？」

「知らないわよ！私ここに来た事無いもの！」

「なんでそんなに自信満々で言えるの！知らないなら聞いてよ！」

「むむむむむ。」

「むむむじゃないよ、もう！とりあえずユーリお兄ちゃんに代わってよ！二人でどうにかするから！！」

「それはダメ！」

訂正、ここぞとばかりにヒートアップしていた。ちなみにユーリ

は工作に取りかかり、木彫りの食器を予備も含め、４人分を既に作り終わってたりする。下手をしなくても本職より速い。今度は食器棚の製作に取り掛かっている。当然会話は聞いていたが状況は見ていないので今の一言で漸く作業を切り上げていたりする。

「それじゃ、これからどうするの？帰り道も判んないよ。」

「ちょっと話に夢中になっちゃったからね。とりあえず歩いてみましょ。そのうちに知ってるところに出ると思うし。」

「・・・本当に大丈夫かなあ。」

現実にこんなことをしていると迷うばかりなのだが、まだ見慣れた場所ならまだしもエイナは初めてだし、リコもそんなに馴染みがある訳では無い。深みに嵌るのは自明の理である。というかはまらない訳がない。しばらく歩き続けた後、それを実感する。

「ねえ、ここどこかなあ？」

「・・・」

「どうしてこうなったのかなあ？不思議だね！」

「・・・ごめんなさい。」

「・・・はあ、どうしよう。」

歩いた結果さらに判らなくなる。最早奥に居るのか、端に居るのかすらわからない。エイナはリコに淡々と絞られている。ユーリに再びじゃじゃ馬呼ばわりされる日も近い。

そうやって絞られている中、茂みの中から音が聞こえた。直ぐに意識を戦闘用に切り替える。先ほどまでの情けない姿は消え去り、そこには一人の剣士の姿があった。

「リコちゃん！こっちに来て。」

「え？う、うん！」

リコもエイナの雰囲気が変わったのに気づき、直ぐにその言葉に従う。リコが傍に来たのを確認し、剣を抜き放つ。その切っ先は茂みに向いている。

「（さあ、なにが来るかしら。リコちゃんはちゃんと守らないと。）」

茂みから数匹のモンスターが飛び出す。全て以前戦った、猪っぽいモンスター、ちなみに名前はガゼールという。それを見据え、剣を構える。

「さてと、それじゃ、リコちゃん、危ないと思ったらすぐに隠れてて。直ぐに終わらせるから。ライザー！リコちゃんの事お願い！」

『ｊａ』

エイナの言葉に肯定の意を示しリコの守りにつく。そしてリコは持っていたナイフをいつでも投げれるように構えたまま木の陰に隠れる。そしてエイナはガゼールの群れに突っ込む。

「やっ！はああ！」

踏込からの刺突、ついで切り払い、止まる事無く弧を描き再び横薙ぎ、無駄を省き速度重視の連撃、それは踏み込めぬ斬撃の結界、いかに魔物といえどこれを凌ぐには力不足。次々とその命の灯を消されていく。それは、凄惨で苛烈な円舞、何人もそれを阻むことはできない。独壇場。

「・・・すごい、エイナお姉ちゃん。」

リコはそれを見て見入っていた。エイナの戦いは初めて見たといってもいいのだ。ちなみにユーリの戦いなら何度も見ていた。旅立ちの野でも全てを避けていた訳では無く、明らかに見つかると思った場合は一気に倒し切っていたのだ。その時のユーリはリコの眼にはまさしく鬼神の如く見えていた。無論、だからと言って恐怖はなかったが。

ユーリが苦戦したのはリコが知る限り、黒騎士の時だけである。しかも後になって思い返してみると主に自分が狙われたのが原因になっている。ユーリは何も言わないが、今のリコにとってユーリの足手まといというのは見過ごせないのだ。もしかするとあの時自分が原因で大怪我をしていたかもしれないのだ。現にエイナはあの時怪我を負った。後でユーリがストラで治療したらしいが、それでも気分は晴れない。

「（私もいつか、あそこに立てるのかな？）」

そのエイナも今見た通り、自分の遥か高みにいる。無論すぐに追いつけるなんて考えていない。けれど改めて自分が望む強さの高さを実感して届くのかと不安になる。けれども直ぐにそんな気持ちは消え去る。エイナの剣舞に目が釘付けとなり他の事を考えれない。

それはユーリと比べると勢いと威力にこそ欠けるが、見る者を引き付ける何かが確かにあった。

「これで最後！終わりよ！」

目の前のモンスターを切り払い、現れたモンスターの全てを殲滅する。そして他に何もいないことを確認する。その時、常夜に意志が淡く光り出す。そしてその意思を感じ取り、急いでリコの方に視線を向ける。リコが隠れている所の後ろの茂みが風以外の何かの力で揺れている。ユーリは逸早く近づいていた何かを感じ取っていたらしい。

「っ！リコちゃん！」

気付くと同時に地面を蹴り一気にリコの前に立つ。そしてそれとほぼ同時に茂みの中から影が飛び出し、近くの木に隠れる。てっきりモンスターが隠れていて、直ぐに襲ってくると思っていたエイナはその姿を見て驚く。

「え？ひ、人？」

それは、確かに一見しただけでは人に見えるだろう。髪を草の葉の髪留めで止め、大きな葉で作られた服を着ているかわいらしい顔をした女性、上半身だけを見れば確かにそう見える。だが、下半身は植物の葉に覆われ、人ならざるものであると主張している。だが、エイナは直ぐに攻撃に移ることができなかった。意外と言葉が通じるかもと思ったのだ。

「（ちょっと怖がってるみたいだしこっちの言葉も判るかも。ただのモンスターとは思えないし、ファイファーみたいなのもいるみた

いだし。意外と仲良くできたりして。）」

そう、以前であったファイファーを思い出す。本人が聞いたら怒るだろうが、現に言って怒られた事もあるが、実際モンスターのボスとして見ても全然違和感がないのだ。けれども話してみるとそこいらの人よりよほど誠実だし、こちらの気持ちを汲んでくれる。その体験が今の行動を後押ししている。

それと他のモンスターと違い直ぐに襲ってこず、木に隠れながら此方をおずおずと見ている。きちんとした態度で話せばどうにかなるかもしれない。とりあえず剣をおろし、ゆっくりと距離を縮めて見る。少しびくっと肩が揺れたが特に逃げたり、こちらに襲いかかってきたりしない。

「（これなら、大丈夫かな？もう少し近づいてもいいかな？）怖くないよ、何もしないから。」

「エイナお姉ちゃん、大丈夫なの？」

「多分、大丈夫じゃないかな。」

後ろでリコが心配そうに見ている。エイナが突然自分の前に来て、茂みが動いたときは驚いたが、そこから現れたのはかわいい女の子なのだ。それもこちらを襲ってこず、様子を窺うだけ、まだ少し不安だが、エイナと同じく警戒心の面でいえばかなり下がっていた。

「（もう少し。）ほらなにもしないでしょう？怖がらなくても大丈夫だよ。」

そう言いながらゆっくりと更に距離を縮める。それに意識を集中

するあまり胸で光る常夜の石に気付かない。ここで気付いておけば後の惨劇は回避できたかもしれない。だがもう遅い。賽は投げられた。これより先に待ち受けるは混沌のみ。

そして、常夜の石の中で様子を見ていたユーリは軽く驚いていた。何かの気配を感じてエイナに知らせたのはいいが、そこから現れたのは、実際いない筈の存在。それも全然予想外の者が出てくるとさすがにユーリとしても驚きはある。

「（おいおい、なんでこんなところにドライアードがいるんだ？というかこの作品に居たっけ、こいつ。」

そう、ユーリはこの存在の正体を知っている。彼女の名前はドライアード、他の作品に登場するれっきとした召喚獣である。まあ、テテやライザーの亜種が何気にモンスターに混じって襲ってくるので召喚獣が敵でも別にかまわない。しかしなぜにドライアードがいるのかが判らない。本来この世界では登場しない筈なのだが、そこまで思考したところで思い直す。

「（ここは原作とは違うんだからこんなこともあるか。けど確かドライアードって・・・）」

ここはゲームじゃないと改めて思いなおす。直ぐにゲームと同じと思い込むのは悪い癖だなと思う。いつかそれが致命的な選択に繋がるかも知れないのだ。先入観に囚われないように気を付けようと自分を戒める。そして、ドライアードの能力に気付き、直ぐにエイ

ナに知らせようとするが、反応が返ってこない。

「おい、あいつ目の前の事に気を取られすぎだろ。まずいな。」

そして、ユーリが危惧した直後、それは現実のものとなる。だがそれはユーリも予想すらしなかった展開を迎える。

外ではエイナがドライアードまであと数歩の所まで来ていた。ドライアードは一歩一歩肩を震わせているが特に逃げはしない。けどその眼は涙目になっていたりする。そしてそれにエイナは気付かない。タイムリミットは刻々と刻まれていた。

ちなみにドライアードからしてみれば唯、散歩をしていただけである。森林浴が彼女のささやかな楽しみだったりする。森にすむ他のモンスターは自身の能力でどうとでもなるし、物理的にもこちらの方が強かったりする。性格上そう言った事はやらないが。

『・・・なんだろう、なにか音がする。』

その日課の散歩をしていた途中に聞きなれない音が聞こえたので、好奇心に負けて見に来たのだ。無論、きちんとした理由もあるのだが。そしてちょうどいい茂みを見つけ、そこに身を潜めた時、うっかり茂みを揺らしてしまったのだ。それから彼女にとっての恐怖体験が始まったのだ。後悔ここに極まる。

『・・・なに、あれ。悪魔？』

考えても見て欲しい、野次馬感覚で見てみると見知らぬ女性が剣を勢いよく振り回し、森の生き物をジェノサイドしているのだ、それも一方的に。怖くない筈がない。

『（あっ、どうしよう。こっち見てる。下手に動いたらあの剣で、あ、ああ。）』

そしてその女性に見つかるばかりか、その女性が近づいて来るのだ。剣を持ったまま。エイナは剣をおろしこそしたものの、鞘に納めてはいない。そんな自分より遥かに好戦的であろう存在が武器を持ったまま近づいて来るのだ。怖くない筈がない。

ちなみに彼女は他のドライアードと違い、花の冠をしていたり、どんぐりっぽいものをあしらった首飾りをしている。後、下半身の葉っぱがやたら大きく、枚数も多い。性格はそれとは裏腹に、割と気が小さい。しかし能力や身体能力自体は一際高かったりする。ちなみに彼女はなぜか他と違い大きい、どこがとは言わないが。

『ひうう、あう。』

そんな彼女だが、もう恐慌状態になっていたりする。エイナの言葉は理解こそしているが、正直信用してない。何せ同じ状況のモンスター達を躊躇なくフルスイングしておいてそれは無い、と判断したのだ。動かないのは足がすくんでいるだけである。是非もない。

そんな感想を抱かれているとは欠片も思わずエイナは、根拠のない自信と共に手ごたえを感じていたりする。

「（この子、特に逃げたりしないし、やっぱり私の言葉が判ってるんだ。これなら！）」

そう思い、少しだけ早く近づく。しかしこれが不味かった。勢いを増した足は小枝を踏み、乾いた音を放つ。それは先ほどまでエイナの言葉以外静かだった空間に大きく響いた、これによりドライアードの理性が限界を迎える。その手に淡く光が宿る。既に半泣きになっている。

「あ、ちょ、ちょっと待って！」

「お姉ちゃん！！」

これに焦るのはエイナだ。何せもう1、2歩で触れれる所まで来ているのだ。この距離でのいきなりの攻撃にはさすがに対処しづらい。剣で薙ぎ払えばいいが、さすがにそれは憚られる。だからこそ、せめて至近距離からの直撃は避けようと一気に後ろに跳び、リコがいる場所まで下がる。

ドライアードは目をギュッと瞑ったまま手に溜め込んだ光をエイナ達に向かって放つ。その光は細かく分かれ、なぜかハート状になり此方に向かって飛んでくる。

「リコちゃん！」

とりあえずリコが当たらないように庇う。だがハートの量は多く全てを剣では捌き切れない。そのうちの幾つかが自身に当たる。構わず剣を振るう。痛みも何もないのは気になったが、リコを守るのが最優先、ダメージがないのは幸いだと思う。だが、その後すぐに異変に気付く。

「えっ？なにこれ。（体が・・・熱くなってくる！）」

体の芯が妙に熱を持ってくる。そしてそれは確実に理性を削っていく。そしていつの間にかエイナの思考は一つの事しか考えられなくなってくる。それは自分の中の想い、大切で掛け替えのない存在に対する想い。

「（ああ、会いたい。私は、ユーリに会いたい！）」

その思いの命ずるままに、エイナは常夜の石の魔力を使う。自身が望むままに。その気持ちに応えるように脳が今までで一番の処理能力を発揮する。

ターゲット確認、ロックオン。障害物なし、風向き良好、ミッションスタート。ターゲットの前方に出現、ターゲットは驚愕と共に動きを止める。すかさず突貫、距離を零にする、成功。捕縛に移行する。両手を使い固定、ターゲットはまだ動きが見られない、好都合。体を接触させ逃がさないようにする。ミッションコンプリート！これからは独自の判断で行動する、オーバー。

「・・・は？」

「うふふ～む～。」

思考が止まる。ドライアードの攻撃に気付いて、とりあえずエイナと交替しようとした瞬間にその本人に抱きしめられたのだ。しかもえらくご機嫌である。もう離さないとばかりに、抱き着いて胸に顔を埋めてご満悦である、誰だこいつ。こんなキャラだったっけ？そう思わずにはいられない。しかも離そうとしたら、なぜか泣きそ

うになる。訳が分からない。

「これ、思った以上に怖いな。魅了って。」

ドライアードの能力、それは魅了である。対象を魅了し、同士討ちをさせたりする。言ってみればこれだけだが実際に喰らうと、とてつもなくやばいという事が判る。仮に実力者が魅了されると致命的だし、攻撃しづらい人物だと、無抵抗なままやられることになる。ある意味、味方を傷つけずに勝つという方法に置いては、これ以上に適したものは無いだろう。

「冷静に考えるよりもこれをどうするかな、本当に。ほら、エイナそろそろ離せって。」

「う～やぁだ～！」

「子供かお前は！ほら、いい子だから離せって。」

「む～！」

しっかりとしがみついたまま一向に離さない。いい加減気絶させて引きはがそうかと考える。一応俺も男なのだ、この状態は非常によろしくない。熱を持ち始めた頬からは意識から外す。

それにもし、この記憶が残っていたらエイナにとって嫌なものになるだろう、なにせ魅了の効果でこんな行動をしているのだ。もう遅い気もするが、とりあえず表に出る事にする。そうすればこの拘束からも逃れれるはず、それでだめなら気絶させようと決める。ユーリも割と焦ってたりする。

「あう！」

光と共にユーリが表に出る。そして抱きしめていた対象を失ったエイナは地面に盛大に顔面着地を決める。ゆっくりと顔を上げ周りを見渡す。そしてユーリがいないと判ると心にぽっかりと穴が開いたような喪失感に襲われる。

「ユーリ、どこ～、ねえ、でてきてよ～。っぐす、っく。」

静寂に耐え切れず、瞼が熱くなる。そしてそれは目から一つの流れとなって重力に従い床を濡らす。表を見る余裕も無く、只々何も知らない赤子のようにその場で静かに涙を流す。それは愛情に飢える子供を連想させた。ここには今、誰もいない。

「おいおい、表に出てきたのはいいが、こっちもか！」

「お兄ちゃん、どうしてそっちに行くの？私、少し疲れたから休みたいなあ。」

一方表に出てきたユーリは再び襲われていた。目の前には目を潤ませたリコがゆっくりと歩み寄ってくる。エイナが大半を捌いていたが、捌き損ねた内の一つが当たっていたらしい、どうしろと。とりあえず道具袋を漁って、とりあえず毒消しエキス、うがいエキスを見つける。しかしこれはそれぞれ毒と沈黙を治すだけのもの。魅了は直せない・・・はず。そもそもこのゲームに魅了は無い。是非もない。

「道具じゃどうにもならないか。どうする、下手に離れると他のモンスターに襲われかねないしな。」

少し距離を取ったまま思案する。どうすればいいか、このまま逃げ回る、却下。既に結構な時間、ここで足を止めている。そろそろ他のモンスターが血の臭いを嗅ぎつけてくる。リコを攻撃、又は気絶させて魅了を解く、却下。それで怪我をされたらたまらないし、なによりこの記憶がもし残ったら再び定着せし者に戻りかねない。

「つまり、治すしかない、か。」

だが、どうする。薬はダメだし、魅了を防ぐアクセサリーなど持ってない。後使えるとなると・・・

「そうだ、ストラとか試してみるか。何でも試してみろだ。怪我が治せるんだ、割といけるかもな。」

実際、ストラにそんな力は無い。だが試せるものは何でも試す。自分の知識と色々違う所があるのだ。ならば少しは期待してもいいだろう。それにストラが気功に類似しているのなら、病気とかでも治せるはず、そんな考えでリコにゆっくりと歩み寄る。自分に近づいて来るのが分かったのか、満面の笑みで走ってくる。それを優しく受け止める。

「えへへ～お兄ちゃん。温か～い。」

さっきも似たような目にあった気がするが気にしない。リコを抱き留めたままストラを開放する。青色の光がリコを包み、優しく照らす。しばらくユーリに抱き着いていたリコだが次第に眼に理性の

色が戻ってくる。それを見て安心する。

「・・・え、あ。」

「どうやらうまくいったか。」

「お！お兄ちゃん！？」

「・・・落ち着け。」

しばらくして自分の状況に気付いたのか真っ赤になって離れる。勢い余って転びそうになったが、すんでのところで抱きかかえ事なきを得る。リコの顔がさらに真っ赤になったがまあ、余談だろう。

「わ、わ私、今、お兄ちゃんに・・・」

「ああ、もしかして覚えてるのか？」

そう聞くと真っ赤な顔のままこくんと頷く。それを見てストラで治せてよかったと改めて思う。とりあえずドライアードの気配を探る、またやられたりしたらたまったものではない。探ってみると先程の位置から、大して離れていない所にいた。そしてこちらに注意するあまり、後ろから迫る気配に気が付いていない。

やがてドライアードも後ろの気配に気づく。しかし明らかに遅い。既に後ろに現れたガゼールはトップスピードに入っている。回避は間に合わない。

「やれやれ、見過ごすのもなんか寝覚めが悪そうだな。」

ユーリはそう呟くと同時にストラを纏い、一気にドライアードの前にまで辿り着く。ドライアードはあまりのスピードに逃げることも忘れて放心している。そして拳を腰に構え、膝を少し落とし、拳を一気に振り上げる。そのアッパー気味の一撃は顎を正確にとらえ、ガゼールは空へと打ち上げられる。すかさず回し蹴りを腹に決め蹴り飛ばす。蹴った感触で仕留めたことを確信する。

「はあ、大丈夫か？怖いんならさっさと帰るんだな。追わねえから。」

そういってユーリは戻ろうとする。言葉を理解するのは見ていて判ったので、伝えることを伝えてリコの元に帰ろうとする、その時袖が引かれ、何かと思い振り向くと先程のドライアードが袖口をちょんと握っていた。

「・・・あーなにか用でも？」

一応聞いてみる。さすがに話せるとは思ってないが、意思疎通ぐらいは問題ないだろうと話しかける。

『・・・あ、その、あ、りが、とう。』

予想外に返ってきた返答に内心驚く。そして柔らかく笑って返答する。その顔を見てドライアードはなぜか俯いたが、気付かない。

「気にするな、これからはこういう所には近づかないようにな。」

その言葉を伝え、戻ろうとするが以前手は袖を握ったままだ。しばらく何も言わずに黙っているとドライアードが此方を見てその口を開く。

『・・・あ、あの、私、貴方に、ついて行きたい。』

「・・・は？」

『だ、だめですか？』

「どうして急に？」

さすがに展開についていけず聞き返す。彼女が言うには、この森には自分以外のドライアードはいないらしく、仲間を探しに行きたいと前々から思っていたらしい。けれど一人で行動するのは怖いし、森から出た事も無い。だから、誰か親切な人と一緒の行動しようと散歩ついでに誰か通らないか見ていたのだ。主に好奇心とかも入っていたりするが。

そこで先ほどのユーリの助けられたときにストラに触れ、それが本当に暖かく、気が安らいだために、この人となら、と決めたらしい。それを聞いたユーリは少し考えた後、ドライアードに向かって話しかける。

「俺たちは旅人だ。だから、色々なところを回るだろう。その合間に同族に会えるかもしれないが、結構危ない所にも行くだろうし、何が襲ってくるかわからない。危険だぞ？」

『・・・それでも、私は行きたい。それにどうせ行くのなら、やっぱり、自分が認めた人がいい。』

静かに、しかし、はっきりとそう言うドライアードを見て、決心する。この目は断ってもついてきそうな勢いを感じる。それなら傍

に置いた方がお互いに安全だろう。

「判ったよ、ただし無理はするなよ。ドライアード。」

『・・・うん、大丈夫、です。これから、よろしく、お願いします。』

そう言いユーリの手を取る。その瞬間光が走り、ドライアードが光の粒になり消える。それを見た瞬間慌てたユーリだがしばらくして気付く。今の光は召喚術を使った時に発生する光だと。そして半信半疑で今、目の前で話していた少女の名を呼ぶ。

「来い！ドライアード！」

その声と共に光が集まりやがてさっきと同じ姿をかたどる。そしてそこに現れたドライアードはきょとんとした後、呆然とした感じで話し出した。

『・・・びっくりしました。』

「・・・俺もだよ。まさか魔石も無しに、いきなり誓約ができるとは。」

『・・・誓約？』

知らないようなので召喚術と召喚獣について話す。それを聞き終えてしばらく口元に手を置いて何かを考えていたのだが、こちらに向いて笑顔で爆弾を投下する。

『・・・え、と、よろしくお願いします。ご主人様。』

「・・・なぜに？」

『・・・この前、拾った本で読みました。』

「・・・ああ、そう。」

なぜか、厄介なものを呼び込んだ気がしてならない。どうにかならないだろうか。戦力が増えたのはいいことの筈なのに、素直に喜べない。とりあえず暇を見て、常識を教えようと決める。

「さて、それじゃ、一緒に旅をしてる子を紹介するよ。ついてきてくれ。」

『・・・はい、ご主人様。』

「・・・・・・」

来た道を引き返し、リコの元へ行く。リコはまだ赤いままだったが少しは収まったらしい。こっちに気付き近寄ってくる。

「お兄ちゃん、あ、さっきの。」

「ああ、この子は今から俺らと一緒に旅をすることになったドライアードだ。それでこっちはリコ。二人とも挨拶しな。」

「え、あ、うん。よ、よろしくね。」

『・・・・・・』

ドライアードは口を動かすが声が出てない。とりあえず少し待って見るが、やはり何も聞こえない。焦れたのか、リコが一歩近寄って手を出す。

『！！・・・いじめる？いじめる？』

「いじめないよ、握手しよ！」

『・・・』

しばらくリコの顔と手を交互に見比べていたが、おずおずと手を出しそっと握る。その行動にリコは笑顔で手を握る。それに驚いたドライアードだったが何もしないというのが判ると成すがままになっている。

「見た感じ問題はなさそうだな。問題は・・・あっ！やべえ！」

リコとドライアードが仲良く？しているのはいいのだが、残るもう一人、エイナの事をすっかり忘れていた。急いでエイナのもとに向かう。いい加減元に戻っているだろうと思いながら。しかしてそれは裏切られる。

「エイナ。もう正気に・・・」

「ぐすっくっうう、うええ。」

「・・・おいおい。」

全然治ってなかった、というか悪化してる。何があったのか泣きまくっている。というか間違いなく俺が居なくなってからずっと泣

いていたのだろう。そんな気がする。ゆっくりと近づき、すぐ隣に腰を下ろす。その時エイナが此方に気付いたのだろう。ゆっくりと顔を上げる。

「あ、ああ、ユーリ。」

「はあ、悪かったな。ほったらかしにして、直ぐに治してってうわっと！」

「ユーーリィィ、う、うわあぁあぁあ。」

いきなり再稼働したエイナに体当たりをお見舞いされ、押し倒される。なんかデジャブを感じた。エイナはさっきまで泣いていたはずだが、今は泣き笑いみたいな状態になっている。

「いたたた、ったくなんかこんな事ばっかりだな。」

「えへへへ～もう離さないんだから！」

「しかし、こいつはどうにかならないかなあ。」

身がもたない、いや本当に。こいつは俺を男と意識してないのだろうか？甚だ疑問である。とりあえず治すためにストラを使う。その光に包まれながらエイナはこちらに笑顔を向ける。

「ねえ、ユーリ。」

「どうした？」

「私ね、さっきまで本当に真っ暗闇の中にいるような気がしたんだ。

でも、ね。ユーリが来てくれたらそんなの吹っ飛んじゃった。このまま、ずっと一緒に居て欲しいな。」

「エイナ。」

「私、私ね。ユーリの事が・・・」

その言葉の先を聞くよりも早くエイナの眼が正常な色を取り戻す。そして、無言で見つめあう。数秒後、エイナの顔が発火した。

「いいぃいやあぁぁぁぁぁぁ!!!」

「うわっ!あぶねっ!」

至近距離からのコークスクリューを首をひねって躱す。そして真っ赤な顔で息を切らすエイナを見上げながら口を開く。

「・・・とりあえずそこ、どいてくれ。」

「え?・・・!!!」

「おい!またか!!」

「うっさい!おとなしく当たりなさい!」

「断る!」

上下ですさまじいパンチと回避が展開される。この結末は結局エイナが力尽きる迄続くわけだが、何気にユーリはマウントからの連打を躱しきってたりする。既に人外の領域に入りつつある。

「はあ、はあ、はあ、もうなにしてんのよ。まったく！」

「俺が言いたいんだが。そのセリフ。」

肩で息をするエイナ、その後ろでうんざりした様子で座っているユーリ。そんな中さっきの言葉を思い出す。エイナも当然理性を失っていた間の記憶はある。それを思い出し、また顔に血液が昇ってくる。それは熱湯につけた温度計を彷彿とさせる。そして、その時の想いも明確に思い出す。

「（ああ、そうか。やっぱり、私、ユーリの事が。）」

今まではそんな気こそしていたが、いまいち実感が持てなかった。けれど理性を失っていたからと言ってあそこまで固執するだろうか？そんなことはない。元々あれが自分の本音なのだ・・・まあ、さすがのあの幼児退行みたいな所は消し去りたいと切実に思うが。

理解すると共に傍で佇む青年の事を愛しく思う。けれどその思いを口にする勇気はまだない、だから、まずは振り向かせよう。もうばれたかもしれないが、それならそれで構わない。もっと好きになってもらえればいいのだ。ライバルは多い、これからも増えたりするのだろかと、少し弱きになるが、それでも負けないと決意を新たに気合を入れなおす。

「・・・とりあえず、俺は表にもどるから落ち着いたら表に出て来い。紹介したい子がいるから。」

「え、う、うん。」

返事を聞くとユーリは光に包まれ表に出ていく。それを見送りながらエイナはまだ言えない、理性を失った時に言いかけた言葉を紡ぐ

「好きだよ、ユーリ。」

風が優しく髪を撫でていった。この想いはきっと何よりも尊いものだから。

表に出たユーリは離れたところで遊んでいるリコとドライアードを見ながら、さっきまでの事を思い出す。そして溜息を一つ。

「はあ、いくら魅了されてると言ってもあれはないな。どれだけ強力なんだよ、おかしいだろ。あのドライアード、何気にすごいな。」

先ほどまでのエイナの態度や言葉の全てを魅了によるものだと信じて疑わないユーリ。先ほどまでのエイナの気持ちをすりつぶすような一言を放つ。エイナはこれからの事を考え、表の状況を見ていない。既に空回りどころか道化芝居みたいになってる。ちなみに読み方は、道化芝居で滑稽と読む。

そしてこの後、エイナにドライアードを紹介し、ドライアードが『いじめる?！いじめる?！』と連呼しながらエイナから逃げ回り、交替したユーリに半泣きでしがみついたことや、ご主人様発言により、エイナに常夜の石内で追い掛け回されることになる。是非もな

い。終われ。

広大な森　新たな誓約と感情の暴走（後書き）

一応これで完全にフラグが立ちました。エイナの想いは届くのか？・・・しばらく無理です。

後、ドライアードのキャラの設定は元ネタいます。判る人にはわかると思いますが。

ちなみにドライアードはユーリにしか呼び出せません。魔石がないので。媒介無しで呼べるのはこのエクステーゼの世界のみです。（ただし、他のシリーズでも例外はあります）

あと、ユーリのストラは原作設定無視です（今更ですが）これの理由はストラのようなものですが、使えるようになった理由が全然違うからです。簡単に言うとウイルスに対抗するためのワクチン（じゃないなら白血球とかですが）みたいなものです。ですから既存のストラとは出力も効果、威力すら桁が違います。ある物に対抗して生まれた力なので。

ちなみにドライアードをヒロインに入れるかは皆さんの感想で決めようかなとか思ってたりします。どうですかね？

召喚獣の想い　絆の召喚術（前書き）

はい、続き出来ました。今回は戦闘が結構長いです。いつもの事？否定できない。書き始めるともっともっとといった感じで書いて行ってしまうので。

今回で獣魔の森は終わるかな？といった感じです。やったことがある人ならわかると思いますが、ボス戦です。色々新要素を入れてます。

ところで皆さんはライザーという単語で何を考えますか？作者は直ぐに一つ思いつきました。本編を読めばわかるかと。既にサモンナイトじゃ無い様な気がするんだが・・・

それはそれとして気晴らしに外伝でも書いてみようかなとか思います。シリーズ問わずヒロインを上げてくれれば適当にストーリーでも書こうかなと思います。できればどういう状況下も書いて頂けると嬉しいです。

ちなみに気晴らしなのでいつあげるかは知りませんが。本編につながる所も入れようかな。あんまり考えてないけど。

召喚獣の想い　絆の召喚術

獣魔の森、それは、周囲を全て緑に囲まれ、薄闇に包まれた空間。ここは獣が跋扈し、外の光を拒む森。けれど、その中で似つかわしくない明るい声が響く。その声の主はまだ年端もいかない少女、その傍には涼しい顔をしてそれを聞く青年。そして、その背中に隠れるようにして、少女を見つめる女性。そこは明るいな雰囲気に包まれている。

しばらく会話が聞こえていたが、しばらくするとこれからの話に変わったのか、雰囲気が変わる。どことなく少女、リコの顔が不安に染まる。それを静かに見るユーリ。そしてこの旅路に新たに加わったドライアードがそれを無言で見つめている。

「・・・それでこれからどうしたらいいのかな？お兄ちゃん。ここがどこか判らないから、どうしようもないの。」

「まずは、現在地を掴まないとな。といってもそれが判らない、か。良し、それなら、ライザー！」

呼び声に応え、光と共にライザーが現れる。そして、周囲を確認した後ユーリの方を向く。

「ライザー、上空からこの森の全景を見渡して、できる範囲でマッピングできるか？」

『ｊａｊａ』

その言葉に上空に向けてそのまま浮いていく。どういう構造なの

か、風船のように浮かんでいくと適当な所で静止した。そして、ライザーの両手から眼下の森めがけ、レーザーの幕のようなものが放たれる。それは下から見ると形こそ違うがオーロラに見えなくもない。それを見てリコはその眼を輝かせる。ドライアードもそれを見て、目を見開く。

「わあ、きれ～い。私のライザーもできるのかなあ？」

「聞いてみたらどうだ？」

そして、リコが自身のライザーに聞いてみると答えは可能らしい。ちなみにエイナのライザーはできないらしい。主に似たのだろうか？そんなことを考えながら、空のライザーに視線を戻す。

恐らくはあのレーザーの様なモノで、遮蔽物ごとスキャンしているのだろう。しばらく色々なところにレーザーの幕を飛ばし、スキャンしていたライザーが下りてくる。そしてライザーの頭上に投射機のような感じで立体マップが展開される。判りやすいように様々な処理がされている。

「よし、よくやったライザー、助かったよ。ありがとうな。」

思っていた以上の成果に、思わずライザーを軽くなでる。しかし、ライザーってこんな便利機能があったのか、と内心驚いた。機嫌がいいのか、目の光が強く発光している。そしてマップを確認し、二人の方に向き直る。

「さて、こっちみたいだな。それじゃ、遅れた分を取り戻しに行こうか。」

「うん！お兄ちゃんに任せたら、何でもすぐにできちゃうね。凄いなぁ。」

「そうでも無いさ、今回は偶々上手くいっただけだよ。」

「そんなことないよ！だって、エイナお姉ちゃんは迷うばっかりだったもん！大変だったんだから！」

「・・・そうか。（あいつ、子供に役立たず認定されてるんだが、これからどうすんだろ。どんどん杜撰な扱いに代わってるぞ。）」

自身の中に居るもう一人の仲間に対しての余りの発言に、これからパーティ内でのバランスが非常に心配になった。そして言われた本人は壁に背を預け、落ち込んでいたりする。子供は時に残酷である。ただし、その原因は自分自身なので因果応報と言えなくもない。

とりあえず、話題は変えた方がいいと判断したユーリは、先ほどから自分にしがみついている存在に目を向け、苦笑いと共に話しかける。

「それはそれとして、あまり掴まれると動きづらいんだが。」

『？』

言われた本人はきょとんとした後でこちらを見る。どういう事か判らない様だ。

『・・・どうかしたの？』

「いや、とりあえず離れような。戦闘になったら危ないからな。」

『・・・・・・うん。』

なぜか妙な間を開けて返事が返ってきた。ちなみにリコは最初、引きはがそうと躍起になっていたが、そのたびにドライアードが半泣きになり、魅了が発動する。その度にストラを展開し防御するユーリとしては、面倒な事この上ないので、とりあえず仲裁に入ったり、リコを説得したりしていた。それが実ったのか、ともかく今は放置になっている。そのかわり、リコもなぜか手を握ってくるようになった。是非もない。

そしてドライアードも、ユーリが口にして言えば、少しの間は離れるのだが、しばらくすると此方に近寄ってくる。そして元の状態に戻る。送還しようかと思ったが、一人は嫌との事らしい、泣かれた。というか送還した後、どこに行ったかが非常に気になるのだが。この森のどこかにでも跳んでいるのだろうか？聞いても首を傾げてハテナ顔で返される。謎は深まる。

「さて、とこれから先はこっちか。」

マップを見ながら進む、せっかくなので、途中で宝箱も回収しながら移動する。その宝箱の中には薬や魔石なんかもあった。その中でも一つ、特に良いものを手に入れた。途中の洞穴の中に何かあったのでテテを呼び出し、取ってきてもらったのだ。自分でやってもいいが、岩山を破壊することになる。さすがにそれで壊れたら意味がない。

そしてそこから出てきたのは大剣。名はトードスブレード、今扱っているバムスレイヤーと比べると威力こそ劣るものの、その真骨頂は、剣から時折放たれる毒の粉にある。これにより相手に毒を浴

びせることができる。今まではこういった、状態異常を引き起こす装備は無かったので、これは素直にうれしい。

「これで長期戦も幾らか楽だな。持ち替えながら使うか、それとも・・・」

どうやって運用するか決めながら道具袋に入れる。ゲームでは抜身のまま背中に取り付けていたが、これにはきちんと鞘がある。無論バムスレイヤーにも鞘はある。当然である。持ち歩いて毒を受けましたというのは欠陥にも程がある。

「ねえ、お兄ちゃん。他にも何かない？私にも持てそうなものとか。」

そんな事を考えていると、リコが話しかけてきた。どうにも自分の装備が欲しいらしい。投げナイフも時折見ているが、初めと比べると割とましになっている。けれど、近接戦闘となると無理がある。けれど遠距離用の武器は今の所、投げナイフしかない。だから武器以外で何かないか道具袋を漁る。

「そうだなあ、リコでも使えるものとなると、これなんかどうだ？」

防具とかだとリコの体のサイズに合わない、渡すものは必然的にアクセサリーか、アイテムの類になる。そう思い探していると中から指輪が出てきた。これは旅人の指輪、簡素ながら持ち主を守る薄い結界が張れる。これならと思い、リコに見せてみる。

「え、これ、もらってもいいの？」

「？ああ、そのために出したんだし。遠慮しなくてもいいぞ。」

なぜかリコは受け取るのを躊躇した。若干熱に浮かされたかのように、ぼうっとしている。それを見ながらしばらくして、もしかして指輪だからか？と予想をつける。別にそんな大層な物じゃ無いのだから、気にしなくてもいいのに。安物だし、そもそも貰い物だ。まさか今の年齢で指輪どうこうを気にしたりはしないだろう。まだ子供なんだから・・・事実、そのまさかだったりする。

「う、うん、それじゃ、貰うね！これ、大切にするから！！」

「ああ、そうしてくれると指輪も喜ぶよ。」

「お兄ちゃんは？喜んでくれる？」

「そう、だな。そうしてくれた方が俺も嬉しいな。」

「うん！それじゃあ、私の宝物にするね！この指輪！」

なぜかリコは満面の笑みで指輪を見つめている。どういうわけか左薬指に嵌めようとしていたが、サイズが合わないため、中指にしている。すごく残念そうにしていた。割とませているらしい。そういえば現代の子供もそんな感じでませてたっけか？と過去を軽く振り返る。どんな世界でも似てるとこはあるんだなあと思わぬ共通点に心の中で笑う。

「さて、それじゃ・・・どうした？」

ドライアードが袖を掴んでくる。何かあったのか尋ねると。

『・・・私の分は？』

「・・・」

そんなことを言われた。それは考えてなかったので返す言葉も無い。というか召喚獣に装備品っているのか？と疑問がわいてきた。まあ、問題は無いかと思い、何かないか探す。何か使えるか聞くと、剣を振ったりはした事があると言ったので、とりあえずエイナが使っているような細剣、セイバーを渡してみる。

ちなみに今エイナが装備している剣はニードルソードというその名の通り針のように細く、突き主体の剣である。ゲームでは普通に横薙ぎしていたが、割と丈夫らしい。これは獣魔の森の入る前に、旅立ちの野で機械仕掛けの宝箱に入っていた。

この機械仕掛けの宝箱、実はツェーゼの村に入る前にユーリが破壊しようと剣を振り下ろした、あの赤い宝箱の事である。これを開く条件はライザーが居れば良いという事。ライザーならこの宝箱のロックを外し、開ける事ができる。それによりこの剣を手に入れていたのだ。ちなみに森に入って以降のエイナはこれを使っている。

「これでどうだ？」

『・・・うん、ありがとう。』

静かに、だがしっかりと礼を言う。そんなドライアードにこちらも笑顔で応える。しばらく剣を振っていたが慣れたのか鞘に戻して腰に下げる。それを確認して改めて足を踏み出す。

「よし、行くか。」

「うん！」

『・・・うん。』

尚、余談だがこの後エイナにも何か欲しいと強請られ、以前、常夜の石の中で作っておいた、ぬいぐるみを渡す。布や、綿なんかも石の中にあった、それどころか食材まであった。常夜の石もいい加減何でも有りだなと思う。ちなみに、食材があったその島だけ雪国みたいになっていたので、保存には困らない。というか鮮度って下がるのだろうか、この世界。謎である。

しばらく森の中をマップを見ながら進む。モンスターも相当数いたが、ドライアードの魅了で同士討ちをさせながら進んだので、比較的問題も無かった。それにドライアードとライザーがリコを守っているので、少々離れても問題ないようになったのも大きい。時折不意打ちをしてくる奴も居たが、俺の気配感知の前では、隠れているのがバレバレである。隠れている所ごと叩き切る。それを何度も繰り返しながら進んで行く。

そんな中、リコが光を放つ魔方陣を見つけ、それに乗っかったドライアードがいきなり違う所にすっ飛んで行くというアクシデントがあったが、特に問題は無い。心細かったとしばらく宥めるのに手間取ったが、強いて言えばそれだけである。アイテムも手に入ったので文句は・・・無い。

「ふう、結構進んだね。」

「ああ、さすがに疲れたか？」

「え、す、少しだけ。」

歩き通しだったのでリコも結構疲れてきたらしい。

「ドライアードは？疲れてないか？」

『私は大丈夫、でも、少しお腹が空いたの。』

その言葉を裏付けるかのようにドライアードが自分のお腹を撫でる。召喚獣って人と同じものでいいのか？という疑問も湧いたが聞いた所、特に問題は無いらしい。普段は光合成とかしているとかなんとか。

「それじゃ、休憩ついでに食事にするか。用意するから待ってな、テテ！」

テテを呼び出し、手ごろな木を折って来てもらう。その間に道具袋から食材や道具を取り出す。不思議な事に入れた状態そのままで出てくる。この中は時間でも止まっているのだろうか。ちなみに取り出した鍋や飯盒はファイファーの所できちんと了解を取って貰ってきた物だ。こういった旅で使うものは一通り用意している。

そして、テテが持って来た木を加工し、まな板として使う。余った部分はまた後で使うので一か所に固めて置く。そしてテテに石を持ってきてもらい、囲むように円形に配置する。その真ん中に先ほどの余った木切れの一部を置く。

「ライザー、ここに火を頼めるか？」

『ｊａ』

その言葉に応えライザーの指先からライターぐらいの火が発生する。それは直ぐに木片に燃え移り、その勢いを増す。そして後は適当に木をくべて火を調節する。それはライザーに任せる。

そしてこちらは道具袋から竹の水筒を数本取り出す。こういう時のために、水は常に多めに持っている。嵩張らない道具袋は本当にいいものだと思う。食材を水で洗い、火の通りやすい大きさに切る、そして鍋に水を入れ、昆布っぽいものでダシを取る。そして、後は頃合いを見て食材を順々に入れる。後は火が通るのを待つ。

それと並行して飯盒に米を入れる、米が手に入ったのは普通に嬉しい誤算だったが、今はいい。そしてその上から水をある程度入れ研ぐ。余った木を使って飯盒を吊るせるように組み合わせる。授業でやったことがあるのでそれに習って火にかける。

「お兄ちゃん、すごく早いね。」

「そうか？慣れたらこんなものだと思うぞ。」

「そうなの？」

「俺はそう思うけど。」

『・・・お腹空いたの。』

そして雑談している間に食器やら何やらを準備して置く。そして、火の様子を見ながら色々話しているうちに出来上がったらしくライザーが此方をむく。そして飯盒を取り、食器に移していく。鍋の方もいい感じに出来ている。椀に移して全員に配る。

「それじゃ、そろそろ食べるか。」

「わーい、私、鍋なんて初めて！おいしそう！」

『おいしそう。』

「「『いただきます』」」

それぞれが嬉しそうに食べようとする。一応いただきますとか言ってるが、なぜか二人とも知ってたので軽く驚いた。なぜ知ってる。

「あ～おいしい！お兄ちゃんって何でもできるね！すごいなあ。」

「器用貧乏なだけだよ。」

「きょうびんぼう？」

「あ～色んな事がそれなりに出来る人の事だよ。」

「そんなことないよ、おばさんとかゲンさんよりもおいしいもん！」

「それは何よりだ。（ゲンさん？）ドライアードはどうだ？体が受け付けなかったりって。」

『ふぇ？』

「・・・大丈夫そうだな。」

「（・・・私が作る料理よりずっとおいしい。せっかくお兄ちゃんに料理ができるところ見せて驚かそうと思ってたのに。うう。）」

返事がないのでドライアードの方を向いたが、問題なく食べていた。確か散歩の最中だったらしいから一際空腹だったのだろう。気にしないことにした。リコがなぜか俯いてぶつぶつ言っていたが、嫌いな物でもあったのか？そして食べ終わる頃には、ご飯も鍋も綺麗に空になっていた。

「あ～おいしかったあ！」

『・・・満腹。』

「結構多めに作ったんだがまさか完食されるとはな。よほど腹減ってたんだな。」

鍋やら食器を洗いながらそんなことを思う。水はケチっても仕方ないので使う分はきっちり使う。まだまだ、余裕はあるし。そして全て洗い終わり、火の後始末をした後、少し休憩を挟んで、改めて出発することにする。

ちなみに食べられなかったもう一人は拗ねていたりする。エイナが表に出ると、半狂乱になるのが一人いるため、あれから表に出てない。どうやらトラウマになっているらしく、一向に懐かない。ちなみにリコには割と早い段階で慣れてたりする。汎用人型決戦兵器人造人間Ｅの伝説はここから始まる。是非もない。

「さてそろそろ行くかな。」

「うん！」

『・・・うん。』

そのまま先へ進み、しばらくはモンスターも鳴りを潜め、問題なく進む事が出来た。だがそれが意味することはもうすぐ知ることになる。

「なんかモンスターが出なくなったね。」

『・・・それはいい事。あっこの道知ってるの！』

「へえ、それじゃ、次はどっちだ。」

『ここ曲がる～。』

陽気な声でそう言って先を指さす。マップでもその通りになっている。散歩しているだけあってやはり結構詳しいみたいだ。マップがあるから意味はないが。

そしてその道を進んですぐに自身の感覚に引っかかるモノを察知する。それに対して意識を戦闘用に切り替える。

「皆！武器を構えとけ！何か来る！ドライアードとライザーはリコから離れるな！」

「えっ！」

『・・・！』

『『『ｊａ･ｊａ･ｊａ』』』

その声を受け、リコが周りを見渡し、ドライアードは剣を構える。

ライザー達はリコの周辺で囲むように警戒する。そうした中、気配が自分たちの方へまっすぐ向かって来るのを感じ、眼光を鋭くさせる。

「（なんかでかい奴が来る。ここでそんなデカい奴っていうと・・・アイツか！）」

知識の中に該当する存在を挙げる。それは所謂イベント戦闘の類、そこに出てくるのはこの森でのボスのような存在。そして、予想を肯定するかのように、その姿をユーリ達の前に現す。

『グオォォォオオ！！』

「・・・これはまた、でかいな。」

「う、嘘。すごく、大きい。」

『・・・いじめる？！いじめる？！』

それは二足歩行のドラゴン、フェザードラゴンと呼ばれるモンスター、それが目の前に地面を揺らしながら現れる。ここはこのモンスターの縄張りか何かなのだろう。だからこそ誰も近寄ろうとしなかった。近づけばその命を危険にさらすと本能が察したのだろう。

「さて、黙って通してくれたら嬉しいんだが、な。」

『ゴアァァァ！！』

「ど、どうも駄目みたいだよ、お兄ちゃん。怒ってるみたいだし。」

『・・・う、うう。』

「・・・まあ、すんなりいくとは思ってないけど、少し手間取りそうかな？」

改めてその巨体を見据える。その体躯はこちらの5倍はある。というか、ゲームでの大きさと比べても何かの間違いとしか言えないレベルだ。ＯＰのアニメで似たような奴は見たが、あれが子供に見える大きさだ。正直有り得ない。ぶっちゃけ詐欺にしか思えない。

フェザードラゴンが此方を睨みつけ、足を踏み出す。その音は森中に響き渡り、周りの木から鳥が一斉に飛び立つ。そして、周りから緑色の動くキノコ、森トードスや、蜂を大きくしたようなモンスター、アイアンビーがそれぞれ１０数匹現れる。これにはさすがに顔を歪める。

「（・・・どうしろと？）」

「え、えええ？な、なにこれ？」

『あ、うう。わ、私、実はものすごく強いから苛めないで欲しいの！』

さすがにあの巨体とこの数を見てリコも放心している。ドライアードは・・・うん、そんな泣きそうになりながら言っても説得力はない、理解しているかも怪しいし。

此方を見ていたフェザードラゴンの口から、チロチロと火の粉が噴き出る。それを見て即座に次の手に思考を走らせる。回避、今からでは間に合わない。迎撃、リコが危険になる。ならばと防御を選

択し、躊躇なくストラを広域展開する。

「全員、俺の後ろに回れ！」

それと同時にドラゴンの顎から灼熱の業火が放たれる。それは大気を歪め、大地を焼き、緑を滅する赤の侵略、それは勢いを緩めるどころか、距離を伸ばすごとに加速し、あっという間にユーリ達を飲み込もうとする。

だが、その止められぬ筈の死の業火は、蒼白き光により一切の進攻を阻まれる。それは広域に放射されたストラで形成された障壁。その壁は鉄板はおろか、城壁をすら凌ぐ程の堅牢さを持ち、守るべき者達への浸食を食い止め無力化させる。それは最早、遮断の領域、その障壁の前では全ての勢いが無へと帰す。遮断結界。

「ちっ、最初から大盤振る舞いかよ。それなら！ライザー、こっちも反撃だ！遠慮なしでやれ！」

『ｊａ.ｊａ.ｊａ.ｊａ』

ユーリの指示に従い、頭部のクリアパーツが左右に開き、中から砲身が展開される。そしてそこからグレネード弾が見舞われる。それはドラゴンに直撃し、爆炎を上げる。

「ドライアード！周囲のモンスターを同士討ちさせて少しでも数を減らしてくれ！」

『うん、判ったの。これで！』

ドライアードが放つ光、ラブミーウインドによって近くのモンス

ターが魅了され、同士討ちを始める。ドライアードは休むことなく次のモンスターを魅了し、敵の同士討ちを加速させる。その隙を狙い近づいてきたモンスターは腰の細剣を使って切り払う。

他のライザーは手を回転させながら突撃し、魅了されていないモンスターに殴りかかっている。リコはドライアードの近くで、尚且つ敵の少ないエリアを見つけ、そこから投げナイフを投げている。

「私だって、やれるんだから！」

実は食事後の休憩でナイフの腕を見た所、結構命中するようになったので戦闘に加えてみようと提案してみたのだ。いつまでも練習だけで終わらせる気はないし、いつ必要に迫られるかわからないのだ。こういった、周囲が見えづらい地形なら尚更危険だ。酷かもしれないが、それも必要なことだと思う。

だからこそ次からは安全を確認したうえでの攻撃を提案したのだ。リコはそれを了承し、いつでも戦えるようにナイフを装備していたのだ。最初がまさかボス戦とは思わなかったが。それでもリコはおびえる事無くナイフを投げる。

「ライザー！次のナイフを持ってきて！」

『ｊａ.ｊａ』

投げた後のナイフは、ライザーが余裕を見ては回収している。そしてそれを受け取り、また投げるといった運用をしている。これならライザーに少し負担がかかるが、それでも援護の手が止まる事は無い。こういった多数に囲まれるという状況では、援護が途切れるとそのまま押し切られることがあるので、此方の方が都合がいい。

少々なら指輪の力で防ぐ事も出来る。

「さて、向こうは何とかなってるか。それならこっちはこっちでやるか。」

『ゴアアア、グルルルァ。』

横目で二人の様子を窺い、何とかなっていることを確認すると、目の前に視線を戻す。そこには胸にほんの少しの火傷を負った、ほぼ無傷のフェザードラゴン。さっきからライザーのグレネードを何発か胸に当てているが、やはり火には強いのか、有効打には成り得ていない。

「それにしても、硬すぎだろう。グレネードを数発直撃でちょっと焦げるぐらいってどんなだよ。反則だろ。」

ユーリもストラを飛ばして攻撃を加えているが、これも有効打には程遠い。あの体を覆う鱗が鎧の役割をし、全て遮られるのだ。そして、ドラゴンが数度目の火炎放射を行う。それをストラで防ぐ。先ほどから、これが繰り返されている。周囲は炎や爆炎、衝撃波によって、見るも無残な状態になっている。

だが、その惨状を作り出した当の本人達は全てほぼ無傷。ユーリは軽い疲労こそ有るものの以前無傷。ライザーもグレネードの弾数が減っているぐらいでダメージは皆無。フェザードラゴンに至っては、先述の通りである。余力どころか前哨戦の様なモノとも言える。

「遠距離だとやっぱり時間がかかりそうだな、そうなるとあんまりやりたくねえけど、接近戦しか、ねえよなあ！！」

千日手になりそうな状況を変えるために、ストラを一気に噴き出し間合いを詰める。剣を持つ手に力を籠め、バムスレイヤーを振りかぶる。いきなりの行動に意表を突かれたのか、ドラゴンの動きが一手遅れる。それを好機と蒼の魔弾が竜の顎を取らんとひた走る。

「よし、いける。喰らえっ！！」

それを見逃さず胸の傷めがけて大剣を振り下ろす。手ごたえはあった。ストラを纏わせた一撃は確かに直撃した。だが、手に伝わってきた衝撃に顔を歪める。それと同時にドラゴンの顎がユーリを喰らわんと迫る。それを躱し、いったん距離を取る。

「固えな。まさか直接攻撃も歯が立たねえとは、どうするかな。」

軽く言っているがその眼光は鋭い。何せ今のは本気で打ち下ろした一撃、それも相手の傷を負ったはずの部位に当てたのだ。それなのに苦しむ素振りどころか、間髪入れずに反撃までしてきたのだ。十中八九効いちゃいない。

「ここまでの固さの敵は初めてだな、大きさもだが。厄介なことこの上ないな。」

遠距離では千日手だろう。かといって近距離も有効打には程遠い。こちらの攻撃は距離を無視して無力化されたようなものだ。

「とはいっても切りあうしかないか。」

結局選択するのは先ほどと同じ接近戦。何度も当てれば恐らく通る筈。問題はそれまで致命打をもらわない事。あの巨体から繰り出される攻撃はどれも大ダメージは免れない。躱すか、最悪でもスト

ラの防御が必要。そしてある結論を出す。

「（今回はエイナに変われないな。出来る限り俺一人で何とかしないと。）」

交代無しでこの局面を乗り切る。そうでないと不味い。何しろエイナは目の前の存在に対しての攻撃手段どころか、防御方法も無い。せめてストラが使えればいいのだが、無い物ねだりをしても仕方がない。

エイナの場合、最悪一撃で戦闘不能になりかねない。それを危惧し、ここは自分が気張るしかないと決断する。何せ、この場合、戦闘不能＝死なのだ。

「ちょっとばかしヘビィだな。」

そんな考えをしている最中、ドラゴンが猛然とこちらに突進してくる。どうやら向こうも接近戦を選択したらしい。それを悠長に待ってやるつもりはない。主導権は常にこちらが握っておく。そのために相手を超える速さで突っ込む。

「ライザー！今の装備じゃこいつの鱗は砕けねえ！何かあるか？」

『ｊｊｚａ』

ユーリの言葉に自身の武装を変えることにする、その間もグレネードは撃ち続けているが。効果は見込めなくとも、その衝撃で動きは阻害できるし、爆炎で視界も封じる事が出来る。ライザーはそれを行う事でユーリの援護に入る計画を立てていたが、それを破棄し、現状、純粋威力で上回る武装を選択する。

『ｊａｊａｊａ！』

ライザーはグレネードランチャーをしまい、今度はその両手が光に包まれる。それはやがてある形状を持つ。それを構え、背中からバーニアを展開し、ドラゴンに向けて突っ込む。

「！お前、そんなものまで持ってんのか？」

ユーリはライザーが構えていた武装を見て驚愕する。まさかそんなものを見るとは思ってなかったのだ。無論この世界にも似たようなものはあるし、不可能ではないだろう。だが、ライザーが装備しているとは思わない。それは光り輝く刀身を持ち、熱で物体を切断する武器。あまりにも有名なそれの名は。

「（ビームサーベルって、お前はどこの機動戦士だ！っていうかボールか？あの形だと。）」

そうライザーが両手から展開している武装は、ユーリの世界なら知らぬものなどいないだろう。それは原理こそ違うだろうが、熱で物体を切断するための近接武装。熱に強いとはいえ、これでなら恐らく切り裂けるだろう。

『ｊａｊａｊａｊｊａ』

ライザーが接近してサーベルで切り裂く。しかしそれでも切断には至らない。ライザーが出せる出力では、表面を若干溶かす程度が精一杯という事なのだろうか。それともあのドラゴンの鱗はそこまでの熱に耐えうるのか。なんにせよ、これは大きな武器になる。なにせ、自分では表面を少し削るのが限界なのだ。

『ｊＪａｊａｂ』

斬撃を見舞った所にボディ下部からミサイルを輩出し、追撃をかける。無論これといったダメージは無いが、反撃を封じて離脱できる。そしてその背後からユーリがストラを輝かせ、鱗に剣を突き立てんとする。

「はあああ！！」

それは剣先にストラを一点集中し、まさしく弾丸の様な突き、それで眉間を打ち抜く。いくら頑丈でも衝撃までは殺せないと判断する、だからこそ、これで脳震盪を誘発できれば動きを止めれる。目を狙う事も出来たが、それで見境なく暴れられて、他のメンバーの方に行かれるのは避けたい。

『グオオオォオオ。』

狙いは外れていない、だが効いている素振りなど微塵も見せず、その拳を振りかざしてくる。舌打ちと共にその拳を回避し、足に斬撃を叩き込む。刃が通らない以上、既にこれは大剣というより槌と言って差し支えない。足を集中的に狙い、その動きを封じる。そしてその合間を縫ってライザーがサーベルで切り抜く。それは僅かずつでも勝負の天秤を傾けていった。

だがここで予想外の事が起こる。頭と肘についていた角のような部分が突如、背中に移動しその形を変え、武骨な翼となり、その巨体が空中に舞い上がる。これにはユーリも動きこそ止めないものの絶句した。

「（嘘だろ！こいつ、飛べたのか！不味い！）」

その危惧は即座に現実へと変わる。空中から地上に向けて火炎放射が放たれる。それを防ぐものの圧倒的に不利になった事実に舌打ちをする。有効な攻撃手段が無くなったのだ。自身は飛ぶことはできない。跳躍することで一応届くことは届く。

しかしフェザードラゴンの空を飛ぶ速度は地を走っていた時とは違い、かなりの速度を誇る。それはそこらの鳥よりもさらに速い。ただ跳ぶだけならそれだけで終わるだろう。ストラを飛ばすことで攻撃することはできる、けれどそれは通用しないと既に実証されている。

ライザーにしてもそれは同じ、ビームサーベルは手から５０ｃｍ程の長さしかない。ライザーも飛べるが速度が足りない。バーニアを使ってもまだ足りない。それに他の事にエネルギーを割けば、それだけサーベルの使用時間、熱量が落ちることになる。グレネードなどにせよ、火力不足で撃ち落とすほどの威力は望めない。そもそも避けられるのが落ちだ。

「ちっ、益々急がねえと不味いな。あっちに行かれたら終わる！！」

しかもたちが悪いのは、向こうは制空権を得ているという事実、それは、自由に上からリコやドライアードを狙い撃てるという事だ。まだドライアードは送還すればいい、けれどリコはそうはいかない。目をつけられた時点で詰む。炎を防ぎながら思考する。

リコとエイナのライザーではリコを抱えて飛ぶほどの力は無い。自分のライザーなら行けるだろうが、援護が消えるのは痛い。それに速度で劣っているのなら、一時しのぎにしかならない。

それを理解しても、逃げることすらできない。そうなれば、最悪この森が燃えて無くなる。そうなれば間違いなく、致命的にこれから先の展開が狂う。それに、それでどれだけの魂が失われるのか判ったものでは無い。結果的にはマイナスにしかならない。そして戦況はまたしても悪化する。

「わわ、こっち来ないで！あっち行ってってば！」

『うう、リコちゃんいじめちゃ、だめ！』

そして、リコとドライアードもその数により、段々追い詰められていた。既にリコのライザーは送還され、ナイフも尽き、回収する暇も無くなっている。そしてドライアードも力の連続使用により力尽き、剣でモンスターの相手とリコの護衛に回り、動きを止められていた。

「（八方ふさがりって奴か。飛ぶ前にテテも召喚して一気に攻めるべきだったか。）」

長期戦になると踏み、テテを温存していたのが裏目に出た。選択ミスを痛感する。この戦闘は空に飛ばれる前に決めるべきだったのだ。だが済んでしまったことを悔やむ暇は無い。早い所何か手を打たないと本当にどうしようもなくなる。

「もう、出し惜しみも出来やしねえ、いくぜ！」

その声と共にストラを開放し一気に空中に跳び上がる。それは先程無理という結論を出した空中戦という選択。内にいるエイナから見てもそれは自棄にしか映らない、息を呑む。空を飛んでいるフェ

ザードラゴンは即座にユーリを標的にし、さすがに火炎放射は防がれると判断したのか、突撃を開始する。

「何気に学習する頭はあるか、面倒だな。」

空中でそんなことを呟く。突撃してくるドラゴンを見据えながら目を細める。速度だけなら僅かながらこちらが速い、しかしここは空中、直線の跳躍しかできない自分と大空を飛ぶドラゴンとではそもそもの前提が違う。

二人が交差する間際、ドラゴンの上空に光が集まる。それは形を成し、一つの姿を象る。

「出番だぜ。テテ！」

その声と共に召喚されたテテは即座に角を伸ばし、上空から落ちる閃光となる。それは寸分違わずドラゴンの翼に当たり、軌道が逸れる。そしてユーリは翼の付け根を狙い、剣を振り下ろす。

「はああ！落ちやがれ！」

どうにか地上戦に戻そうと翼を狙う。後付けである以上、ここは薄いと読んだのだ。それ自体は当たっていた、翼に幾らかの損傷は与え、その付け根部分を破壊し、皮膚をほんの少しだけ露出させたが、まだダメージが足りないらしく、そのまま振り落される。

「くっ！まだ、足りねえか！」

体勢を整え、着地する。今のチャンスを逃したのは辛い。早々無い状況を逃したことに悪態をつく。諦めずに次の手を考えるユーリ

にライザーとテテが近寄る。

「さて、今の手が通じるとしても次の一回ぐらいだな・・・どうした？二人とも？」

『ｊｊａｊａｊｊａａｂａ！』

『キュキュキュ！』

ユーリのもとに来た二体は、何か決心した様子でユーリを見る。自分の召喚獣の眼を見ながらその本心を探る。その時、ライザーがモニターを展開し自身の意思を伝える。それを見たユーリは驚きつつも、それが可能かどうか思考する。

そしてテテはユーリと手を繋ぎ、お互いを指さす。その動きを見ていて不意にある可能性に気付く。ユーリはそれについては当然気付いてはいたが、効果を知っているので必要ないと思っていたのだ。だがテテは自分を信じろと言わんばかりに胸を叩く。それを見て心を決める。

「どのみち、手詰まりには違いないんだ。お前らに賭けるよ。」

その言葉に頷くテテとライザー。早速準備を始める。ライザーの計画は一発勝負。外せばライザーはこの戦闘ではもう戦えないだろう。故に失敗は許されない。演算するために動きを止めたライザーをしり目にどうやって動きを止めようか考える。

「まあ、やるだけやってみないとな。」

ストラを剣に乗せドラゴンに向かって飛ばす。それは強靭な鱗に

より防がれる。だがそれは承知の上、今のは囮、斬撃の間に上に投げた本命を隠すためだ。やがてその本命は上空からドラゴンに奇襲をかける。鈍い音と共に背中の羽に大剣が突き刺さる。

正確にはその付け根の露出した皮膚にだが、例え鱗が無く、肉に刺さったとしても、本来ならその程度ではダメージは期待できない。僅かに刺さり即座にふるい落とされ、更なる怒りを買うだろう。だが、変化は劇的だった。動きを止めたと思ったら口から赤い血を吐きだしたのだ。さっきの一撃がそこまで深く気付つける事など有り得ない。

もちろん理由は違う、ユーリの狙いは大剣の攻撃よりも、むしろ刺さることにより発動する付加効果こそが本命。剣の名はトードスブレード、毒の大剣である。これによりかすり傷でも動きを止めることが可能となるのだ。元々皮膚さえ見えればこれを使うつもりだったのだ。

「これで動きは封じた、ライザー！準備はいいか？俺はいつでもいいぞ。」

『ｊａｂａｊａｂ』

ユーリの声に応え、演算を終了させたライザーが、その背から半円状の御椀の様なモノを出す。そしてその中央には柄のようなものがついている。ユーリはそれを握り、ストラを全てライザーに収束させる。そしてライザーの中にある、エネルギー変換装置がストラを純粋なエネルギーに変換、吸収する。

それはライザー自身の許容量を凌駕し、周囲に自身の色を薄めたような桃色の燐光を放つ。そしてライザーが紫電を放ちながら両手

を前に突き出す。準備は整った。後は放つのみ。

「いっけええ！ライザー！！」

『ｊａｊａｊａａａａ！』

そしてライザーの手からではなく、全身を使って先ほどのビームサーベルが生み出される。だがそれでは意味がない。そもそも距離が足りない、熱量が足りない、エネルギーが、圧倒的に足りない。だが、無いのなら足してやればいい。一人で届かないなら二人で、協力とはそういう事だ。そしてその結果は今、目の前に輝く光となって現れている。

そこに生まれたものは先程と同じビームサーベル、だがその長さは数百メートルにも及ぶ極太のビームサーベル、それは既に砲撃と変わらない。フェザードラゴンに向かい一直線に伸びるサーベル。毒に苛まれ、その瞬間、動きの止まっていたドラゴンに躱す術は無い。その胸にサーベルが直撃する。それは以前と違い、溢れるほどのエネルギー、鱗が溶け出し、煙を上げボコボコと蒸発する。ドラゴンの絶叫が響き渡る。

「ライザー！後、少しだ！堪えてくれ！」

『ｊａｂａｊａｂａ！』

刻一刻とライザーの限界が近づく。それを判っていながら、無理強いさせるしかない自分のふがいなさを内心歯噛みしながら、握る手に力を込める。エネルギーを供給する以外にも、ユーリはサーベルが逸れ無い様に支えているのだ。

演算処理をバーニアや姿勢制御に回す余裕はない、全てを持って制御しないとライザー自身が持たないのだ。それ故にそれだけのエネルギー放出に吹き飛ばされないように柄を掴みぶれそうになる刀身を固定しているのだ。その証拠に足は地面にめり込み、暴風が荒れ狂う。吹き飛ばされそうになりながら耐える。

「いっけええ！！」

だが、ドラゴンもこの森の獣魔を統べる王者、無理を承知で、既に毒により腐食した翼の残骸を羽ばたかせ、肉体そのものを貫かれる前に射線から逃れる。だが、ユーリとライザーはそれを許さない。柄を握りしめたユーリは、既に遥か上空まで伸びきったビームサーベルを、あろうことか振り下ろす。その予想外の事態に森の王者は今度こそエネルギーの奔流に飲み込まれる。

『グオオォオオオォ！！』

上空から叩き落された巨竜は、体中から煙を吹き出し、自慢の鱗はそのほとんどが原型を失くし、本来の機能を失っている。翼も腐食が進み、使い物にはならないだろう。だが、それでも尚、絶命には至らない。その巨体だけでも十分脅威を持つ。それに翼と鱗を破壊して、元々あった相手のアドバンテージを奪い同じ土俵に上げたに過ぎない。まだ勝負はついていない。ライザーに礼を言い送還する。

「テテ！決めるぞ。」

『キュキュ！』

その声にテテは応える。ユーリもあれだけのストラを一気に消費

したのは初めてなのだ。膝に力が入らず、立つのが精一杯、時間をかけるわけにはいかない。テテを信じる、その意思を感じたのか、テテは一つ頷くとユーリの側に近寄り、光に包まれる。そしてその光は、ユーリに向かい吸い込まれる。それは召喚術の応用、憑依召喚術。召喚獣を対象に取りつかせることにより、様々な効果を与えるものである。

テテとの憑依により、付与する効果は炎耐性、この戦いでは重要のように見えるがユーリはストラで防げるし、エイナはそもそも教えるという事は立場上出来ない。知らない知識を与えるという事はすなわち、不信を招く。どのみちエイナでは有効な一撃を与えられないためにジリ貧になる。本来なら憑依せずにテテを加えて戦った方がいいだろう。だが、これはその結果を覆す。限界突破。

光が臨界を超え尚輝く。そしてそれがもたらすは本来の効果を越えた新生。森がその光に呼応し、新緑の葉が舞う。それは新たなる可能性を開いた者への祝福ともいえる。やがて光が収まった時、そこにいるのはユーリ一人、テテの姿は無い。軽く手を握り、感覚を掴む。そして、敵を見据える。

『・・・これが、俺、か。』

その声はユーリの物でありながら、どこか違って聞こえた。外見にも先程との違いはある。服装は動きやすいラフな格好になり、額にはテテと同じ角を生やし、髪はテテの頭と同じく逆立っている。そしてその髪と眼はテテの肌の色と同じく紺。

それは元々定めらえていた効果とは全くの別物、確かに憑依させるものによっては肉体的に変化するものもあるが、テテはそれには該当しない。その答えは融合、本来なら禁忌ともされるであろう、

それを信頼と絆により、何のリスクも負わず、メリットのみを引き寄せる。

『・・・行くか。』

その声に先程の焦りや消耗は感じられない。この融合憑依とも言えるモノは、行った瞬間に新しい体に変わるので、今までのダメージを無視して体力が融合時の全開状態になる。今のユーリの体力の上限は元の倍に相当する。大剣を構えたまま、倒れている大木を片手で掴み、何の躊躇いも無く持ち上げる。

これが今のユーリが得た付加効果、怪力、そしてそれに付随する筋力増強。それは融合することで上がった身体能力をさらに極限まで引き上げる。大木を振りかぶり、ドラゴンに向け投げ放つ。それは風を越え、敵に向かう矢となる。その巨矢を拳を使い叩き落す。傷ついた体を動かしたために痛みがドラゴンの体を襲い、僅かに体の動きが止まる。そして前に向き直り今度は意識が止まる。一閃。

『おおおお！』

意識をそらしたドラゴンを袈裟切りにする。それは止まる事無く、返しの刃で再び鮮血が舞う。力を振り絞り炎を吐きユーリを焼き尽くそうとする。だがそれは蒼白い光に阻まれる。融合により生命力も飛躍的に上昇している。結果ストラの出力も出鱈目なほどに強くなっている。最早フェザードラゴンが直接打撃を行っても破れるか怪しい程のモノになっている。

一度飛びのき、着地したところにある剣を握る。それはさっきドラゴンの動きを止めるために投げたトードスブレード。それを片手で持ち、構える。大剣の二刀流、限界を超えた筋力で軽々と操る。

ストラを剣に収束し蒼の光りが強まる。

『悪いが、まだやることがあるんでな。お前の相手だけやってる訳にはいかねえ。決めさせてもらう。』

大地を蹴り、風を置き去りにするかのような速度で肉薄、ドラゴンは既にその速度について行けない。なんの遮りも無く剣を振り切る。片方が薙ぎ払えば、もう片方が袈裟切りにする。止まらぬ大剣の斬撃、それは巨大な竜巻を連想させる。

『終わりだ！』

双剣にストラを収束し、振りかぶる。

『これが俺の、俺たちの・・・』

その斬撃はクロスを描き、ドラゴンの命を刈り取る光となる。

『切り札だ！！』

その言葉と共に斬撃が光を放ち、ドラゴンを飲み込みその体を消し去る。そして振り向いたそこには戦いにより生まれた惨状が残るのみ。

『・・・さて、リコやドライアード達を助けないとな。』

少しだけ目を細め、仲間を救うためにその身を翻す。

『う、もう、もたないの。』

そこには既に体を泥や傷だらけにしたドライアードがリコを背に追い詰められていた。満身創痍、もう剣を握る力も無い。後ろのリコもライザーを繰り返し召喚していたが、もう魔力が無い。もう戦う力は欠片も無い。

「まだ、まだ諦めたくない！」

リコがドライアードの手から剣を取り構えようとする。元々軽い細剣とはいえ小柄で筋力もさほどないリコでは構えるどころか、持ち上げる事すらままならない。手間取っているうちにモンスターがリコに跳びかかる。それに気付いたドライアードが力を振り絞り、リコの盾となるため正面に躍り出る。そしてモンスターの一撃が届く刹那、全ては光に包まれる。

『・・・え？』

『・・・ギリギリだが、何とか間に合ったな。よく頑張ったな。』

目の前にはリコとドライアードを抱えたユーリの姿。その姿の変化に二人とも自分の状況を忘れ、放心する。

『後は任して休んでろ。直ぐに終わらせる。』

道具袋から薬を取出し、軽く手当をしてから、モンスターの相手をしに行く。そこからは一方的なワンサイドゲーム、向こうの攻撃は効かず、そもそも当たらない。こちらの攻撃は全てオーバーキル。当たるどころか、触れれば即死。そして回避すら許されない。程なく全てのモンスターが討伐される。

『これで、全部か。』

周囲の気配にも特に引っかかる物は無い。安全を確認した上で二人の元に戻る。

『・・・大丈夫か？二人とも。』

「・・・え、えと、ユーリお兄ちゃん・・・だよね？」

『ああ。』

『その姿は？』

その言葉に憑依を解く。そして光が放たれ、傍にテテが現れる。

「まあ、こういう事だ。さっきのは召喚術の一つだよ。」

「そ、そうなんだ。」

『・・・』

二人とも驚きで声が出てない。その間に、ストラで回復しておく。これで少しはましだろう。憑依を解いた瞬間にさっきまでのダメージが襲ってきたのだ。どうやら、憑依前と憑依後は体力が別物になっているらしい。

「（といっても明らかに俺が知ってるものと別物なんだよなあ。憑依というかむしろ合体だしな。融合か？）」

ユーリ自身も先ほどの憑依について考える。試しにもう一度憑依すると姿に変化はなかった。ちなみに付加効果は攻撃力の上昇。つまりさっきのは憑依召喚とは別物という事だ。判りやすく融合召喚と呼んでおく。新たな力を頼もしく思いながら、テテに礼を言い送還する。そして二人の方に向き直る。

「さて、少し場所を変えて休憩するか。さすがにボロボロだからな。後は頼む、エイナ。さすがに疲れた。」

そういって、エイナに代わる。変わった瞬間、ドライアードが涙目で5メートルほど距離を取ったが、些細なことである。

「さあ、どこか静かなところで休もうか。」

「うん、私もうヘトヘト。」

『・・・うぅ。』

回復したとはいえ、リコも疲れたらしく足取りは重い、ドライアードも力なく浮いているが、それでもエイナから距離は確実に取っている。エイナはそれには触れない事にした、悲しすぎる。

「それにしてもあんなモンスターがいるなんて。」

先ほどの戦いを思い返しエイナは考える。ユーリは間違いなく自分より強い、本来なら交替などする必要もないくらいに。悲しい事だが、事実なのだからしょうがない。そのユーリをあそこまで苦戦させる存在がいるという事に驚いたのだ。

「（私も強くならなくちゃ。今のままじゃユーリだけに負担を掛け

ちゃう。）」

明確に力を求める自分がいることを自覚する。想い人を守る力を。それを考えていくうちに先程の召喚術に行きつく。

「（ユーリがやってたあれを覚えれば何とかなるかも。後で聞いてみようかな？）」

そして、力を手に入れる一つの道は見えたので、とりあえずそれで良しとする。どのみち、今は無理はできない。みんな疲れ切っている。休めそうなところを見つけ、エイナを除くメンバーは体力回復をするために睡眠を取る。そしてその間エイナが番をする。

その眼にはこれからの不安と、仲間がまた窮地に立たされる予感を感じ、揺らめいている。このままではいられない。胸に思いを秘め、薄闇の森の中で一人空を見上げる。木々の間から除く空は、虚ろなくらいに青空だった。

召喚獣の想い　絆の召喚術（後書き）

作者はやっぱりこれですねT、ライザーですね。Rソードも完備、うん、やり過ぎた。ネタに走った。いつかはやりたかった、反省はしてなくも無い。

後、前話からドライアードの感想は多いけど、エイナが触れられない件について、フラグたったのに。最近エイナが落ち担当になってきた気がする。あれ？作者はエイナは苦手では無いですよ。うん。

とりあえず、憑依と融合の二つが増えました。融合はユーリ専用ですけどね。しかもユーリの憑依はゲームの効果と全然違います。耐性とかストラでどうとでもなりますし。なので新しく作ってみました。

効果の一部を説明すると、攻撃力上昇はあくまでインパクト時の威力とかが上がるだけなので、怪力というわけではないです。憑依だとダメージが５％プラスだけですが、融合は基礎ステータス上昇がデフォでつきます。ステータスは融合前Xそれぞれの倍率、それに体力が計算後の上限値になります。融合後は体力全開です。解くとダメージそのままですが。

炎の息3当たりの竜変身を参考にしてください。あの作品大好きなんです。３，４はクリアしました。

今回のテテだと上の計算に加え、筋力上昇のためのステータスアップ、そして怪力が付きます。角を使って戦うのも可能です。技も増えます。姿は基本固定です。服装から全て変わります。魔力消費が大きいですが、恩恵もでかいです。

主がチートなら召喚獣もチートを体現しました。これからのバランスが心配になります。やり過ぎた。後、ここに書いてある事以外にも何かあるかも。

宿業の前兆　閉ざされし旅路（前書き）

はい出来上がりました。初投稿から2か月、今日の間に上げたかったのでちょっと頑張りました。若干粗がありますが。間違いがあったので話の内容を少し修正しました。

今回から少し勢いを下げます。タイトルの宿業はカルマと読んだので問題ない筈。ゲーム用語で問題なしかな。色々急展開、いつもの事、作者は悩んだ末にこれを選びました。他にもゴリ押しルートがあったり。

これからは他のキャラとか新キャラの見せ場とか書けたらいいなと思います。主人公無双はしばらくお預けです。まあ、やろうと思えばできますが。さて次はあの人が来るかな？期待している人もいてくれるといいな。

後、このゲームやった事ある人は知っていると思いますが、ストーリー上のバッドエンドってこれ無いんですよね。なので作ろうかなと。うんバッドになるかはまあ、お楽しみで。

宿業の前兆　閉ざされし旅路

静寂な筈の森が、静かな緊張に張り詰める。この森の王が消えた。それを森自身が示しているかのように風が戦場の跡を激しく吹き付ける。焼けた木々が転がり、ひび割れた大地が軽く振動する。それを行ったモノの片方は消え去り、もう片方は先へと進む。どちらにせよ、その場に留まる事は無い。そこには既に誰もいない。

休息と回復を済ませ、旅を続けることにする。先程の戦いの影響か、エイナは難しい顔で何か考え事をしている。それを見ながらリコは一つ気が付いた事を口にする。

「そういえばお姉ちゃん、お兄ちゃんはどうなったの？あれから姿見てないんだけど。」

「え？」

その言葉に顔を上げ、リコと顔を合わす。

「ああ、たぶん大丈夫よ、少し疲れたって言ってたから、中で休んでると思うけどね。」

「・・・しばらく出てこれないの？」

「そうだと思うけど。」

「・・・それじゃあ、ここから先の地図はどうするの？お兄ちゃんのライザーはいないし。」

「・・・ああ！！」

そう、ユーリのライザーがいないとなるとマップが見れないのだ。そして召喚者であるユーリは中で休養中、どう考えても迷う。

「そ、そうだ。他のライザーにやらせればいいじゃない！それじゃ早速・・・」

「ちょっと、お姉ちゃん。」

「え？どうしたの？今からライザー呼ぶんだけど。」

「お姉ちゃんのライザーってできなかったと思うんだけど。」

「あ・・・」

「忘れてたの？」

エイナのライザーはスキャン機能は無い。あるのはユーリか、リコのライザーだけなのだ。エイナがここでライザーを召喚しても、明かり以外に意味はあんまりない。強いて言えば戦力が増えるぐらいか。

「私のライザーが地図作るまでまた休憩だね。迷っちゃうし。」

なぜだか最近の私、良い所無い様な気がする。と誰に言うでもなく項垂れる。なぜか無性に悲しくなった。リコのライザーが上空に浮かんでいき、ユーリの時と同じく森のスキャンを始める。それを下から眺めながら、休息のために腰を下ろす。

その頃、常夜の石の中では、体を回復させたユーリが静かにストラを練り上げていた。そして、高めたストラを手刀を構えた手に集中する。それは刃のように鋭い。例えるならば刀だろう。

だがまだ、終わらない。それは長さを増し１ｍを超える長さになる。そして、エイナが知らない間に作っていた、瘴気を撒くガラクタめがけ振りぬく。それは並みの刃を遥かに上回る斬撃を生み出し、対象を切り裂く。それを確認しストラを解く。

「割と何でも形になるもんだな。これで素手でも間合いを気にする必要は無いな。」

その言葉を確かめるように手を握る。フェザードラゴンとの勝負は、確かに勝ちはしたが、ユーリとしては、これからの事を気に掛けずにはいられない。何せ、フェザードラゴンは序盤のボスなのだ。それであれだけの脅威なのだ。少しでも自身を磨くことを怠れば、あっという間に詰んでしまうだろう。だがそんなことを許す気はない。

「・・・とはいえ、流石にむりがあったか。」

融合の影響か、ストラの使い過ぎか、あの戦闘の疲れがいうほど抜けないのだ。ストラも収束こそしたものの、普段の３分の２ほどの量しか出せて無い。

しばらく休めば回復するかとも思ったが、そんな事は無く、むし

ろ出力が戦闘終了時よりも若干下がってすらいる。今のも外に放出できるかを試すついでにやったのだ。結果は可能。しかし全開時の6割がいい所。無理して7割。とても以前のようには使えそうにはない。

「勝ったとはいえ、代償は大きい、か。困ったな。」

正直、どうしようもない。理由は先述の通りで多分あっている。どちらかというと使いすぎが原因のように思う。タンクがいくら膨大でも無尽蔵という事はないのだ。車だってガス欠になる。人も食事が必要、それと同じなのだ。ストラは気功の様なモノ、気功とは気、すなわち生命力なのだ。それが尽きかけているとなると、注ぎ足すか、溜まるのを待つ必要がある。

「とはいえ、方法は分からないし、それに・・・」

そう、それに予感があるのだ。このままでは自分は碌でもない事になる。ストラは鍛えた気を呼吸で制御する技術なのだ。つまり本来なら、ぶっつけ本番でできるようなものでは無い筈なのだ。それにこれだけ広い用途、個人で数の不利を覆し、巨竜の炎ですら遮断できる出力。どう考えても普通ではない。

つまり何かが違う。本来とは違う、習得ではなく、突然発現する必要があったという方がしっくりくる。使っている間に、そんな知識がいつの間にかついていた。それは、使えなければ今の自分は無かったかのように思えて来る。それにしても、今更だが不思議なものだ。死者の国のような所に居るのに、生命力がどうとか矛盾している。

「まあ、いいか。知らない事なんていくらでもあるんだしな。」

逸れた考えを引き戻す。落ち着いてから気付いたのだが、融合召喚は恐らくもうできない。確信に近いものがある。というよりも使うと不味いのだ。このままストラを使わずにいれば、どうにか現状維持ができる筈だ。仮に使うにせよ、加減したり、短時間ならどうにかなる筈。だが憑依はまだしも、融合をすると召喚獣をすら危険にさらす。そんな気がする。

「我ながら具体的すぎる勘だな。占い師にでもなるか？」

冗談めかしながら、しかし、その顔は真剣そのもの。それは看過するには、重すぎる仮説。事実だと勘が告げる。きっかけは先の戦闘、だが、まだ問題は無い。ここで止めて置けばどうにかなる。もし、ストラが全体の３割を切るようにでもなれば、その時は・・・

「これから先は、最悪ストラを使わずに旅を続ける必要がある、か。エイナを頼るしかないな。」

躊躇なくそう決める。またフェザードラゴンでも出るならどうしようもないが、その時は逃げればいい。別にあの時は、状況が切羽詰まっていたから戦ったようなものだ。それにフェザードラゴンのようなものは早々会いはしないだろう。

問題は黒騎士、あれはいずれ戦う。鎧を着こんでいる人物も大体見当がついた。黒騎士は自分というよりエイナが戦うべきだろう。強さ云々以前にそういう役割だ。そして、俺が相対すべきはあの赤黒い光、あれこそがあの時の違和感。俺が戦うべきはあの光、正確には黒騎士の向こうにいる存在、それが俺の敵。世界の歪み。

「・・・問題は山積み、戦力はいきなり低下の一途、間々ならねえ

なあ、本当に。」

自分の問題は何も解決せず、気が付けば雁字搦め。それでも何時かはこうなると何処かで思っていた。それでも彼女らは無事に最後まで届けよう。どこまで行けるかはともかく、諦める事だけはしない。

「できることからやっていくか。」

ネガティブな思考を打ち切り、前向きな思考に切り替える。どのみちできる事など変わりはしない。現状の手札で今を乗り切る。最初から何も変わらない。準備不足なのは当然、そこからどれだけできるか。要はやるか、やらないか。それだけだ。

「よし、まずは戦力アップかな、折を見てエイナ鍛えてみるか、並行してリコもだな。」

自分が無理なら他を使う、それに対して躊躇はない。元から頼っている。適材適所、それぞれがやることをやれば大体はどうとでもなる。

「それに、最悪っていうのは割と思ってる以上のものが最悪なんだしな。まだ気が付いてる分にはどうとでもなるな。」

間違っているとは思わないが、空元気だとも理解している。自覚しているからまだ大丈夫と思える。これが自分で自覚できないなら大問題だ。相談してもいいが心配をかけるだけ。なら、ばれるまで引っ張ろう。騙す気はないが言う気も無い。できる事なら最後まで黙っていたいものだ。そう思い自己完結する。

「さてと、少し休むか。向こうも休んでるみたいだし。」

外に意識を向け、その状況を理解する。そこではなぜか、リコとドライアードにエイナが常夜の石の中の話をしている。ドライアードはさすがに離れているため、エイナが声を大きめに出しているが、正直それでモンスターを引き寄せる可能性を考えないのだろうか？呆れるばかりである。

そしてドライアードが夜空を見てみたいという。確かにここは常夜の名の通り、常に夜なのだ。何の星座かは判別できないが星もある。確かに女性には好評かもなあと思う。だが、ここには自分かエイナ以外は来ることはできない。叶えてやりたいが夜の所ってどこかあったっけ？と思考しながら、呼べたら早いのにな、と思いながらダメもとでドライアードを召喚する。目の前に光が収束し、先程外にいた姿が目の前に出てくる。

「は？」

『？』

お互いに目を合わせたまま停止する。そしてしばらくして現状を把握する。

「（呼べた？なんでかは知らないがこの中でも問題なく召喚獣は使えるという事か。これは何気に良いことだな。）」

『・・・ここ、どこ？』

「さっきエイナが言ってた常夜の石の中だ。来たそうにしてたからな、呼んでみたんだよ。」

ドライアードの疑問に、思考を打ち切り答えてやる。その言葉にしばらく固まっていたが、やがて状況が理解できたのか、ユーリの隣に座り、空を眺める。その瞳は子供のように輝いている。

『綺麗。こんなの初めてみたの。』

「そうか、それはよかった。連れてきた甲斐があったよ。」

結果論とはいえ、ドライアードの願いを叶えてやれてよかったと思う。なんであれ興味を持ったことは間違いないし、こんな事ならできる限り叶えてやりたいと思う・・・いつまでも一緒とは限らないのだから。

『いつもご主人様はここに居るの?』

「俺が表に居るときはエイナがこっちに居るけどな。」

『あの人は怖いの。私を虐めるの。』

どうやら、エイナと仲良くできるのはもっと先らしい。余程第一印象が悪かったらしい。難儀だなと呆れる。さすがにこれは俺がどうこう言う気はないので、当人同士で何とかしてほしい。切にそう思う。けれど、先程の思考が尾を引いているのか、要らぬことを言う。

「まあ、そういうな、エイナだって悪気があったわけじゃないんだ。普段は結構親しみやすいぞ。」

『・・・』

「直ぐにとは言わないが、ドライアードもエイナがどんなやつかって言うのは、なんとなくわかってると思うけどな。少しでも近づいてみな。きっと喜ぶからさ。」

『・・・そうなの？』

「きっとな。」

『・・・少し怖いけど、私、頑張ってみるの！』

「それはなによりだな。」

これで少しは近づくきっかけになるかな？と思う。

「で、どうする？そろそろ戻るか？」

『もう少し見てみたい。ご主人様、案内して欲しいの。』

「・・・やれやれ。」

どうやら、まだまだドライアードが外に戻るのは先になりそうだと苦笑いする。たまにはいいかと思い直し、ドライアードと二人歩いていく。

その頃、外では割と大混乱だったりする。なぜなら、召喚された

のはエイナとリコが目を話した間だったために、二人の頭の中では、いつの間にか消えている。どこに行った？さらわれた？大変だ！！という思考が組み上がった。この二人、頭の芯のところで似ているのかもしれない。

「ど、どうしよう。お姉ちゃん、本当にドライアード見てないの？見つからないよ！」

「そう言われても、私も見てなかったし。あ！そうだ。ユーリなら見てるんじゃない？！」

「そうだよ！直ぐにお兄ちゃんに聞いたらよかったんだ！！」

本人が聞いたら、確実に顔を顰める信頼のされ方をされている。ユーリはその頃、ドライアードの話に意識を割いているので表は気に留めてない。エイナなら大丈夫だろうし、変な気配もしない。故にこのトラブルに気が付いていない。本能的にかかわりたくないと、無意識的に見ないふりをしているだけかもしれないが。

「私、ユーリに話して来る！リコちゃんは少し待ってて！」

「うん！お願い！お姉ちゃん。」

「うん、私に任せなさい！」

そういって、常夜の石の中に行く。そして、それまでの雰囲気を歪め、淀んだ空間が形成される。使徒襲来。

その場にいるのは3人、ユーリ、ドライアード、そして今しがた来たエイナの三人、本来穏やかな夜が広がる空間はこの時だけは異

質な恐怖を纏っていた。それは気の弱いドライアードがすでに震えていることからも明らかだ。

「・・・ねえ、ユーリ。」

「・・・なんだ？」

「これは一体どういう事かなあ？」

「・・・どうと言われても、見た通りだが。」

「だから！それを聞きたいんだけど？」

「はあ、外でお前らが話してるのを聞いて、ドライアードが夜空を見たいと言ったから、呼べないか試したら成功した。それで案内してる途中。これでいいか？」

「・・・・・・」

『いじめる？！いじめる？！』

「お前は落ち着け。」

張りつめた雰囲気の中そんな会話がなされる。ユーリはエイナがいきなりおかしくなるのは今更なように思っているので別段どうこう思っていない。ただ、成るようになると思っている。問題はドライアードだ。

どこまで恐怖を抱いていたのか、最初にエイナが目の前に現れた時、その雰囲気に当たり、過呼吸を起こしていたりする。今はユー

リが付きっ切りで介抱を行い、事なきを得ている。そのせいか、ユーリにしがみ付いて残像が見えるほどに震えている。ユーリが酔いやすい体質なら、よりカオスなことになっていたことだろう。幸いにもユーリは、乗り物酔いとかそういったものは無い。

「で、ここに来たってことは何か用か？」

とりあえず、話を進めようと淡々と会話を続ける。なんか最近こんな事ばっかりだと心の中で嘆く。声を荒げると余計にややこしくなると思い、普通に話すように努める。それを見てどう受け取ったのか、エイナが目を吊り上げる。

「で、ユーリはドライアードを連れ込んで何をしようとしてたのかなあ？」

「だから、案内をしてただけだって、まあ、直ぐに伝えなかったのは悪かったよ。さすがに目の前で術使ったらすぐに判るだろうと思って言って無かった。」

「むう、本当にさっき言ってたことだけ？」

「他に何があるんだ。」

「む～。」

最初は勢いがあったエイナも、ユーリが何の動揺も無く言葉を発しているのを見て、自分が勝手に思い込んでるだけで、本当に何の問題も無いのかなと思い始めていた。それにいつまでもユーリにしがみ付いているドライアードを見るのもなんか嫌だ。早々に放れて欲しい。そう思い、とりあえず追及の手を止めることにした。

「なんか納得いかないけど、一応引き下がってあげる。」

「それは、よかったよ。」

げんなりしながらそう返す。そして空気が弛緩したのを感じたのか、ドライアードの震えも止まる。それを見ながらさっきの言葉、意味無くなったな。と内心項垂れる。二人の距離が縮むのは、どうやらまだ先らしい。ずっとこうしているのもなんなので、ドライアードは外に戻そうと思い、話しかける。

「それじゃ、ドライアード、また来たいときは言ってくれ。いつでも連れてきてやるから。」

『うん、待ってるの。』

そういい、ドライアードを外に戻す。誓約を交わした自分なら出し入れ自由らしい。ドライアードを見送った後、エイナに向き直る。

「・・・ねえ、ユーリ。」

「どうした？」

「教えて欲しい事が有るの。さっきの戦闘の事なんだけど、」

そういってエイナは口を開く。丁度良いと思い、先程の戦闘で感じた力不足、そしてユーリが使用した未知の召喚術について聞いてみることにした。どのみち表ではまだライザーがスキャンしている。ユーリのライザーと比べると3倍くらいの時間がかかっている。どれだけ高性能なんだろう。あのライザー。

「力不足、か。」

「うん、黒騎士の時も、あのドラゴンの時も私はユーリに負担を掛けてたし、強くなりたいの。」

事実、黒騎士の時は既に追い詰められ、フェザードラゴンの時にいたっては、戦闘にすら出ていない。そんなのは嫌なのだ。誰が好き好んで想い人が傷つく姿を見続けたいと思うのか。力になりたい、枷になどなりたくはない。いまだ自分の記憶も戻らない、不安定な状態だがこれだけは譲れない。この想いが今の自分を支えているのだから。

「別に構わないぞ。そのうち、俺からも言う気だったしな。」

その言葉を聞いて言う手間が省けたと思う。これから先、自分が率先して戦う事は続けれない。ならばエイナもリコも一人で生き抜く力がいる。リコはリコでナイフの練習や呼吸に整える練習をしている。二人とも自分の判断で強くなろうとしている。いい傾向だと思う。

「本当！それじゃ、さっきやってた召喚獣と合体してみたい！」

それが本題だったのか、それともなにか憧れでもあるのか息が荒い。恐らく融合召喚の事だろう、期待しているのは悪いが、あれは少し事情が違う。何せ自分でもどうしてああなったのかが判らないのだ。

「融合な、それと悪いがあれは俺も良くわからないんだ。勢いでできたようなものだしな。」

「そうなの？あれが出来たら手っ取り早いと思ったんだけどな。」
「不貞腐れるな。いつもの積み重ねが大切なんだかな。けど憑依なら教えれるかな。」
「それって何が違うの？」
それを聞いてやる気が戻ったのか、エイナが質問して来る。それを見て現状判っている違いを簡単に言う。まず最初に姿が変わる。憑依は基本見た目の変化はない。召喚獣の特性や能力を自分自身の体に付加するだけなので見た目に大きな変化はない。
だが融合は文字通り肉体や人格、様々なものが合わさる。その結果、術者をベースに召喚獣の外見を組み合したような姿になる。そのため、基礎能力の上昇や肉体融合前のダメージが引き継がれない。体が違うのだから当然のことだ。無論、術を解けばダメージはそのままだ、回復している訳では無い。
二つ目に、身につく能力の差異。これは判りやすい。テテの融合は先の戦闘で行ったが、それにより、種族特性である怪力、そしてユーリのテテ固有の能力である、金剛角による戦闘。そして筋力増強、後は、金剛角を使った術行使も可能。空中でのホバリングもできる。融合したことでそういった情報もある。大半の能力は使う必要はなかったが。あとユーリなら生命力の増加による、ストラの出力上昇がつく。
憑依になると肉体的な特徴は受け継がれないし、あくまで能力付加なので、融合に比べると能力のランクや数も落ちる。基本一つの能力が付加される。それが普通、なのだが例外もある。ユーリのテ

テ憑依は攻撃力上昇、ホバリング、金剛角の三つが付加される。理由はユーリも判らない。

三つ目に、肉体的、精神的な負担があげられる。融合はこれが特に顕著に表れる。融合している間はいいが、解いた後は反動が一気に来る。だからこそ切り札的な運用になるのは間違いない。融合時間が長ければ長いほど、力を使えば使うほど反動も大きい。

憑依も似たようなものだが、負担として考えれば相当ましである。魔力消費と精神的な疲労が使用時間、力の発動で増加するのは同じ。ただ、どちらにせよ召喚獣と強固な繋がりを作るので、制御を失敗すると不味い点は同じ。

他にもあるが、簡単に比べるとこんな感じの区分になる。結論としては、融合は憑依の上位互換という認識で問題ない。術者の安全を度外視した憑依が融合なのだ。禁じられるのも判る。

「細かい所は置いといてまあ、こんな感じだ。とりあえず憑依からできるようになってみるか。」

「うん、判った。最初に何をすればいいの？」

「最初は、一回見せるからどんなものかきちんと見とくこと、だな。」

「うん。」

「さて、来いテテ！」

その言葉と共に光がユーリに集まり輝きを放つ。その光がやんだ

後、憑依を行ったユーリがそこに佇む。一見すると変わりはない。あえて言うとテテの属性である獣属性の緑光が輝いているぐらいか。

「特に変わらないね。」

「まあな。ちょっとわかりづらいか。」

そういって憑依を解く。

「それじゃ、どうするの？私もやるの？」

「急にやろうとするな。まずは召喚獣を呼ぶ。それからだな。」

「よし、来て、テテ！」

その言葉でエイナの目の前にテテが現れる。そしてユーリがエイナのテテに近寄り、何事か話した後、また此方へ戻ってくる。

「さて、始めるか。」

「さっき何話してたの？」

「ああ、憑依をするから簡単に説明をしといた。まさか召喚獣の了承無しにやるつもりだったのか？暴発するぞ。」

こういったものは両者合意の上でないと暴走しやすい。少しでも暴走しないように配慮するのは当然の事だ。ましてやこれからはガンガン前線に出てもらうというのに、こんなことで躓いて欲しくは無い。できる限り一度で成功してほしい。

「それで、憑依だが、召喚術は自分の側に呼び出すのが大体だが、自分に重ねるようにする感じだな。後、召喚というより意識とか心だけを呼ぶような認識でいい。」

「え、え～と。」

理解が進まないのか、狼狽えている。理解できるように何度も反復して教える。要点だけでも理解してくれればそれでいい。しばらく説明をした後、何とか判ったのか。エイナが此方を見返す。

「よし、それじゃやってみるね。」

「ああ。」

そして、テテを傍に呼び、いよいよ本番に入る。緊張しているのか、何度か深呼吸している。やがて落ち着いたのか。術を行使する兆しが見える。

「行くわよ！テテ！憑依召喚！！」

その言葉を鍵にテテが光に包まれ、エイナに吸い込まれるように集まる。それを目を離す事無く見つめる。その光はやがて、微かな輝きを残し消えていく。そしてそこには、きちんと憑依を成功させたエイナが此方を見つめ立っていた。自分でも不思議なようで、しきりに体のあちこちを見ている。

「これでいいの？」

「ああ、俺から見ても問題は無いよ。成功だな。」

「そっか、良かった。少し不安だったんだ。」
「心配するな。それくらいは俺が責任もってどうにかしてたさ。」
「せ、責任！！」
何が琴線に触れたかは知らないが、急に大声を出すエイナ。あまりの大きさに面食らう。
「・・・いきなり叫ぶな。」
「う、ご、ごめん。でも責任って？」
「俺が勧めたんだ、問題ないように配慮するのは当然だろ？」
その言葉に今度はがっかりしたように俯く。
「ああ、そういう事ね・・・はあ。」
「それに・・・約束しただろう？」
「え？」
「エイナが困ってたら助ける事、忘れてないぞ、俺は。」
目をきちんと見て言ってやる。しばらく今の言葉を理解するかのようにこちらをじいっと見ていたが、次には花が綻ぶ様な笑顔をこちらに向ける。
「うん、ありがとう。ユーリ。感謝してるよ。」

「ああ、そうかい。」

肩をすくめながら答える。それをにこやかに見つめるエイナ。何が嬉しいのか、幸せそうに微笑んでいる。そして、外に意識を割いたユーリが振り向く。

「そろそろ、リコのライザーが戻ってこようとしてるな。戻ったらどうだ？」

外も状況が動いたことを説明すると何を疑問に思ったのか口を開く。

「ねえ、中にいるのによくわかるね。私全然判んないんだけど。」

「経験積んだらきっとわかるさ。俺は最初の方からできてたから参考にはならないかもしれないけどな。」

「ふ～ん。そういえばさ、ユーリって初めて憑依したのってあの戦闘でしょ？」

「ああ。」

「よくそんなに詳しく説明できるね。私だったら無理かなあ。」

それを聞いてユーリは、少し考えるように目線をそらした後、また此方に視線を戻す。

「まあ、実体験や分かった事を判りやすく噛み砕いて説明しただけだしな。口がうまかったらこのくらいは即興で言えるさ。」

「そういうもの？」

「俺はそう思うけどな。まあ、用は相手に要点が伝わればいいんだよ。」

「へえ。」

此方の言う事を珍しく静かに聞いている。いつもなら同じ状況でももっと騒がしいのだが。それを外には出さず心の中で思う。

「・・・やっぱりユーリは凄いね。」

「？そうでもないぞ。」

突然エイナがそんなことを言う。何を考えていたのか、しきりに頷いている・・・慣れない事をしたから、壊れたか？

「ううん、すごいよ！私、いつかユーリに追いつくから！見てて！ここからは私が頑張るから！」

「？あ、ああ。」

ユーリの内心など気付きもせず、宣言をする。それに対し、戸惑うように返答を返すユーリ。

「うん！だから、私を待っててね！」

此方に構わずに、言うだけ言って表に戻っていった。その後にはエイナを、正確にはエイナの頭を純粋に心配するユーリだけが残っ

た。

「大丈夫かな、あいつ。」

それは誰もいない空間に空しく響き渡った。エイナの想いが花開くようになるのは、まだまだ先の事らしい。

エイナは先程、自分で言った言葉を心の中で反芻しながら、視線をリコに向ける。リコはユーリにより外に戻されたドライアードと喋っている。どうやら何をしていたかを細かく聞いているらしい。うん、自分でもそうする、と納得しながら、リコ達に話しかける。

「リコちゃん、ドライアード。ライザーも戻ってきそうだし、そろそろ行こうか？」

「あ、お姉ちゃん。ライザー戻ってきた？」

「うん、もう少ししたら見えて来ると思うから、準備は大丈夫？」

「うん！いつでもいいよ。」

『うう、リコちゃんが虐めるの。』

元気に返事するリコと、何を言われたのか、精神的にダメージを負っているドライアード。二人共、旅の準備自体はできているようだ。それを確認し、ライザーを待ってから出発する。出来上がった

マップを見ながら進む。

「あ、お姉ちゃん、人がいるよ。」

「うん、行ってみよう。迷ってるなら助けないと。」

そしてしばらく行った先、老人が一人佇んでいるのを発見する。二人は何か怪我でもして動けなくなっているのかと思っていたが、近くへ行って見てみると、特に怪我や痛みで苦しんでいるようではないらしい。そのことに安堵しつつ、側へ近寄り話しかける。

「お爺さん、どうかしたんですか？」

「・・・ふむ、わしはここから先へ行く旅人を止めようと呼びかけているのだが、誰も聞いてくれなくてな。」

「この先に何かあるの？」

その言葉に老人は語りだす。ここから先は獣魔の森ではなく、《迷いの森》と呼称されるらしいという事。霧が濃く、唯でさえ視界が悪く、似たような景色が広がり入った者を迷わせる。そして、迷い出られなくなった者の亡霊が、仲間を増やそうと襲って来るらしい。

「そして、この森は通れるものを選ぶ。選ばれた者は出れるが、選ばれ無かった者はこの森の中で彷徨う事になる。だから、戻りなさい。この森に呑まれる前に。」

「でも、私たちこの向こうに行かなくちゃならないの。どうしても通りたいの。だから、ごめんねお爺さん。その言葉を聞くわけには

いかない。」

「・・・そうか、無理に止めはせんよ。気をつける事だ。」

「うん、ありがとう。」

森番をする老人に別れを告げ、迷いの森に踏み込む。そこは老人が言っていた通り霧が濃く、少し離れてしまうと、何も判らなくなりそうな気がする。少し先にうっすらと光が見え、小悪魔のようなモンスターや大きな亡霊が数体見えた。無視するわけにもいかず、全員剣を抜き、戦闘態勢に入る。

「リコちゃん、ドライアード。絶対に私から離れないでね。直ぐに迷っちゃいそうだから。」

「うん、でもライザーもここの地図はできてないみたいだよ、どうしよう。」

「そうね、どうしようか。何か目印でもあればいいんだけど。」

そうなのだ。この森は霧のせいか、森に何かあるのか。スキャンする事が出来ていないのだ。そのため道は手探りで探すしかない。モンスターを倒しながら先を歩く。襲いかかってくるモンスターも多く、戦闘終了時に自分たちが来た道を確認するようにした、そうしないと、直ぐに迷ってしまうからだ。

「でもこう霧が深いと何も見えないよ。それにお姉ちゃんに任せたらまた迷わない？」

「う、だ、大丈夫よ。同じ失敗はしないわよ。」

「それならいいけど・・・」

「とりあえずここから歩き出すしかないね、止まっててもいい事は無いし。」

悩みながらも結局、周りを見ながら歩き回るしかない、と言う結論に達し歩き出す。そして、歩く先にはいくつもの別れ道が見える。出来る限り、判りやすいように目印をつける、その先には宝箱が有ったりもしたが先には進めない。それに、いつまでも似たような景色が続くために、戻り道も判らなくなり始めていた。

「・・・これは不味いわね。リコちゃん、ドライアード、大丈夫？ってドライアードは？」

「え？ああ！いない！」

「嘘！いつの間にかはぐれてたの？！」

気が付くとドライアードが見当たらない事に気付き、慌てて周りを見ると、そこには急ぎ足で此方に飛んで来るドライアードがいた。

「ドライアード！怪我とかしてない？」

『うん、大丈夫なの。』

「でもどうして離れたの？何かあった？」

そう言いながら近づいて来るエイナに問われ、反射的に距離を取ろうとする。しかし、ユーリの言われたことを思い出し、足を止め

る。しばらくじっとしていたが、決心したのか顔を上げ、エイナの方を見るとそちらに歩き出す。

「え？どうしたの？」

『・・・これ、拾ったの。』

その言葉と共に、エイナの手に小さな欠片が渡される。それは召喚獣の名前の欠片、魔石だった。リコに頼んで道具袋の中の魔石と組み合わせ作業をしてもらっているうちに、エイナはドライアードに目を合わす。

「これを取ってくるために離れてたんだ。でも、これからは一言声をかけてね。心配しちゃうから。」

『・・・うん、次からそうするの。ごめんなさい。』

「お姉ちゃん！合いそうなのあったよ！こっち来て！！」

「うん！判った！・・・でもなんともなくてよかった。それにこの魔石を使えば何か手が見つかるかも知れないしね。」

『そうなの？』

「うん！きっとなにかあるよ！」

エイナがそういってドライアードを連れ、リコのもとに行く。まだ何処かぎこちないが、少しは距離が縮まったようだ。そしてリコから魔石を渡される。

「よし、何が出てくるのかしら？」

「可愛いといいな。」

『ドキドキするの。』

「それじゃ、やるわよ。」

エイナはそう言って欠片を嵌め込む。完成した魔石は眼前に光を発生させ、新たな召喚獣を呼び出す。その光が無くなり、そこに居たのは。

『ポワ？』

頭に三角帽をかぶった幽霊みたいな召喚獣、ポワソ。それが新たな召喚獣の、そして新たな仲間の名である。

「可愛い、お姉ちゃん！私も呼びたい！！貸して！」

「うん、はい。」

「よ～し、来て、ポワソ！！」

そしてリコもポワソを呼ぶ。しかしその場には何も現れない。以前テテが呼べなかった時と同様、何も起こらない。そしてリコが不満そうに振り向く。

「どうして呼べないの？テテも呼べなかったし。」

「う～ん、村に入る前に聞いたのは相性がどうとか言ってたけど、

私は問題なく呼べるし、ユーリはなんだか全部大丈夫だったらしいし。」

「うう～理不尽だよ。」

とりあえず、これ以上話すとリコが落ち込むばかりなので話題を変える。

「ねえ、ポワソ。私たち、この森から出たいんだけど、何かいい案無いかな？」

『ポワワ？ポワ～』

エイナがポワソにそう聞くと、少し周りを見渡しながら悩んでいたが、ある方向を見ると、そちらに行くように促す。

「え？ここに何かあるの？」

『ポワ！』

「でも何も見えないけど・・・」

『ポワ、ポポワ！』

来てみたはいいがそこにはないも見えない。けれどポワソは何もない筈のそこに、いきなり取り出した杖を振り降ろす。

『ブギャ！』

「？今、何か聞こえなかった？」

「うん、聞こえた。」

『何かいる？』

確かに見えないのにそこには何かがいるらしい。ポワソには見えているようだが他にメンバーには判らないらしい。けれどそれをしばらく見ていたエイナは何か気づいたらしく顔を上げる。

「見えないんだったら、見える様にになればいいじゃない！ポワソ！！」

そういって、エイナはポワソに了解を取り、憑依を行う。憑依効果は透明化解除、そしてその眼には、確かに人魂に顔が付いたような幽霊がふよふよと浮いていた。

「ちょっと、いいかな？」

『ゲッ！あんた俺が見えんのかよ！さっきはいきなり殴られるし、なんなんだよ、あんたら。』

「それはごめんね。判らなかったからさ。それで、貴方、ここの道判ったりする？」

『ああ、そりゃ判るぜ。』

「本当！なら、出口を教えて！この先に用事があるの。」

『へえ・・・いいぜ。この先の道をまずあっちに曲がって・・・」

「うん、それで先に行けるんだ。判った。有難うね。」

『良いってことよ・・・ケケケ。』

そういって幽霊と別れる、そして、リコとドライアードに今の話を教え、その通りに進んでみる・・・そして、迷って帰り道も判らなくなる。

「どういう事なのよ！これは！！」

「お姉ちゃん、聞いた道、間違えたりとかしてない？」

「間違えてないわよ！これで合ってるはずなんだから！うう～だまされた～！」

そう、先程の幽霊はイタズラ幽霊という名で、この森に入った者を迷わせる存在なのだ。といっても、大体の場合はふざけたセリフの割に自分を見つけた存在にはきちんと道順を言うのだが、今回は完全に騙されたらしい。

「あ～！腹立つ！さっきの幽霊見つけて、一発殴らないと気が済まない！」

「お姉ちゃん、そんなの言っても始まらないよ。ここからどうするの？」

「どうしよう、でも歩くしかないよね。とりあえず来た道を帰ってみようか。」

その後、来た道を戻り、戦闘も行い、何度か道を間違えながらも、

なんとかイタズラ幽霊の所まで戻っていた。見つけるなり、エイナが勢いよく食って掛かる。

「ちょっと、さっきはよくも騙したわね！大変だったんだから！」

『ケケケ、騙しちゃいないぜ。先には行けただろう？』

「屁理屈でしょ！それは！そういうのを騙したっていうのよ！」

『最初に殴ってきたのはそっちだぜ、なんでそんなやつに教えてやらねえとなんねえんだ？』

「う、そ、それは。」

『別に教えたって俺に良いことないし、それだったら、迷わせて慌てる姿見てた方が面白いぜ。』

「う、悪かったわよ。だから、お願いだから、道を教えて。」

『・・・しゃあねえなあ。』

そういってまた幽霊から道順を聞いてくる。今度こそはと意気込んで歩いて行ってみると、変な壺があるだけだった。

「・・・なにこれ？なんだと思う、お姉・・・」

「・・・へえ、また、嘘ついたんだあの幽霊。」

「『・・・』」

リコがエイナの意見を聞こうと振り向いた時、そこには夜叉がいた。その眼には冷たい光があふれ、桃色の髪は気のせいか不気味に蠢いて見えた。ドライアードとエイナの距離がまた遠ざかった瞬間でもある。その張りつめた空気をどうにかしようとリコが無謀にも先陣を切る。

「で、でもこの壺なんだろうね！中に何か入ってたりして！ねえ、ドライアード！！」

『え！ええっと、う、うん。きっと何かいいものが入ってるの！』

「エイナお姉ちゃんはどう思う？」

途中で無茶ぶりされたドライアードも何とか会話を繋げる。それを聞きながら、とりあえず今は怒ってもしょうがないと思ったのか。一応は怒りをおさめる。ただ、溜め込んだだけだが。

「・・・そうね、取っ手もないし、力ずくでも開かない。それなら召喚獣に頼ってみよっか！」

ライザーでないと開かない宝箱だってあるのだ。他にも召喚獣の力で開く宝箱があっても不思議ではない。そう思い、テテを呼び出すが、何も起こらない。ライザーも同じ、ならばと憑依を解いて、ポワソを外に出す。

しばらくポワソは壺を眺めていたが、杖を振り上げるとそこから光を放ち、それが壺に着弾する。そして静かに壺が開いた。

「やった！開いたよ！さすがお姉ちゃん！！」

『さすがさすが。』

「そ、そうかな？う、うん、これからも私に任せて！」

二人の褒められたのが嬉しいのか、しばらく前の雰囲気は完全になりを潜めた。内心安堵の息をつく二人には気付かず、壺の中身を確認しに行く。中には何かの種が入った袋があった。

「なんだろう、これ？とりあえず、もっとこうか。」

そういって道具袋に入れる。そして、再び教えられた道を、戦闘をこなしながら戻る。そして、憑依を行い、幽霊を視界に収めた瞬間、夜叉再び。

『ケケケ、また間抜けな旅人帰ってき・・・』

「ふ～ん、そんなに、面白いんだ・・・」

「『（私は何も見てない！）』」

「ねえ、どの辺が面白かったの？せっかくだから教えてよ？ほら、どうしたの？」

『・・・』

「ほら、聞こえてるんでしょ？人の話はきちんと聞かないとだめだよ？」

『ひいっ！』

「それじゃあ判んないなあ。判るように言ってよ、さあ！」

そしてイタズラ幽霊は、エイナという名の夜叉に、しばらく精神的に生き地獄を見せられた。是非もない。そしてその針のむしろのような雰囲気が、半刻ほど続くと、漸く気が済んだのか、もう一度道を尋ねる。しかしその眼は次ふざけたらどうなるかな？という威圧があったのは言うまでもない。

「よし、今度こそ正解の道だと思うから、張り切っていこっか！」

『・・・間違ってたら？』

「・・・ドウシテヤロウカシラ？」

「『ヒッ！』」

「とりあえず行って見ましょうか・・・どうしたの二人とも。仲良く抱き合っちゃって、ここはモンスターも出るんだから、そんな体勢じゃ危ないよ？さあ、速く立って！」

目の前の女性が原因、という勇気は二人には無く、言うとおりに立ち上がり、歩き始める。そして道順道理に歩き出し、しばらくすると、霧がさらに濃くなり、自分の手も見づらいぐらいになってきた。

「もう、どうなってるの？まさか・・・また？」

「でも、今回は今までと明らかに違うよ！やっぱり正解なんだよ！！」

『うん！うん！』

嫌な気配を感じたのか、即座にリコが口を開き、ドライアードが相槌を入れる。それを聞いて気配が霧散する。

「そうかな？とりあえずもう少し前に行って見ようか。二人とも足元に気を付けてね。」

そして、そのまま進むと少し先に何か赤い光が見えた。

「今、何か光ったような・・・え？何これ！」

それは視界を覆いつくし、何も見えなくなる。それはエイナもリコもドライアードも関係なく飲み込む。

「きゃあああぁあぁあ！！」

そして光が収まった後、そこには誰もいなかった、その奥、赤い眼光を持つナニカは依然、そこにあり続ける。

光が収まり、目を開けてみるとそこは霧も無く、迷いの森の中では無いのは確かだ。どこか見たような景色が広がっていた。近くにはリコとドライアードもいる。どこか違う場所に変わったらしい。

「ほう、お前さんらは戻って来たか。運のいいことだ。」

「え？」

振り向くとそこには迷いの森に入る前に会った森番の老人がいた、老人からは、森の奥に辿り着いたとしても、森の入り口に戻されるらしいという話を聞けた。つまりあそこが森の最深部で間違っていないのだ。

「という事は、私達はやっぱりこの森を抜けれないって事？」

「そういう事になるな。」

「そんな！」

皆と一緒に頑張ってここまで来たのに、こんな所で終わってしまうのか。認めたくない。そんな時、常夜の石が目に入る。　任せてと自信を持って言ったのに結局は頼っている自分を情けなく思いながらユーリに会いに行く。自分ではこれ以上どうしようもない。

そして、常夜の石の中についたエイナはユーリを探す。建物の中には誰もいない。なぜかそこにはグランドピアノや食器棚がある。言うまでも無く暇を見てユーリが作ったのだろう。製作工程が激しく気になった。やがて、建物の中を全て見回ったが姿は無い。

「違う島に行ってるのかな？」

そして、今いる島の果てにある門を通り、他の島に転移する。そ

して何度か転移をしていくと突然風に襲われる。

「きゃあ！」

その風にスカートが捲れ上がり、慌てて抑える。そして目を上げた先には、青と赤の弾丸に対峙するユーリがいた。

「ふっ！おらあ！」

大剣を振りかぶり、青い弾丸、テテに切りかかる。それを横合いから赤い影、ライザーがショットガンで牽制する。それを先読みで躱し、飛び退く。そこに光の弾が着弾する。上空を見上げると、装飾された三角帽にマントを身に着けたポワソが、杖を構え佇んでいた。そして飛びのいた隙に、テテが金剛角を伸ばし、光を飛ばす。それは大木を消し去り、ユーリに突き進む。

それに対しユーリは剣にストラを集中し、振り下ろす。光同士がせめぎ合い、相殺される。それが終了の合図だったのか、全員の動きが止まる。

「・・・何か用か？エイナ。」

正確には自分が来たから区切りをつけて止めただけらしい。その証拠に召喚獣が全員此方をむいている。なぜか責められているような気がする。なぜだろう。

「えっと、外の様子見てた？」

「ああ、見てたぞ。」

とりあえずエイナの側に近寄り、今の事を説明する。最初は物作りをしていたが、今作っている分は終わったので体を動かすついでに、召喚獣と模擬戦をしていたのだ。実戦形式で。それを話すと体の心配をされたが、問題ないと返す。そしてエイナの話を聞く。

「で、迷いの森で先に行けないと。」

「うん、どうしたらいいかな？」

「そうだな。とりあえず、村に戻るか。」

「え？」

「今の所はどうしようもない。少し待ってみるのも手だろう。」

ユーリとしては、できる事なら先に進みたくはなかった。原作ならある組織の人物たちと顔を合わせるのだが、今回はそれが無い、故に話がこじれるのを嫌ったのだ。恐らく何も知らなければ自分はともかく、エイナとリコがどう考えるかわからない。それを危惧したのだ。時間が稼げるならそれでもいい。そうすればもしかすれば会えるかもしれない。幾つか懸念があるが。もしそうなってもどうにかしようと決める。

「う、ん。それならそうしようかな。」

「まあ、リコやドライアードに意見もきちんと聞くようにな。」

「判ってるって！！それじゃね！ユーリ！」

そういい、エイナは外に戻る。その後に残されたユーリは召喚獣

達に礼を言って送還する。そして溜息。

「はあ、ストラはやっぱり短時間しか使えないな。出力も問題だな。」

やはりというかなんというか実践を行い、確信する。やはりストラは弱体化している。すでにかなりの時間がたっている。とりあえず最後以外はストラに頼らないように戦ってみたが、身体能力を底上げしていたストラを制限してしまうのは、雑魚ならいいが黒騎士並みの敵とやりあうには火力が足りない。とはいえ、それは憑依で埋めるとして、その穴を埋めるためにこれからの戦術を考える。

「使いづらい手札があるなら、それに代わるモノを身につけないとな。泣き言なんて言う暇は無いんだしな。」

諦めは無い、それよりもそんな暇があるなら他の手を考える。自分はまだできる事が沢山あるのだ。悲観に暮れるのは速すぎる。それは仲間の信頼を裏切る事と変わらない。それをユーリは看過する気はない。最後まで足掻く。焼けた大地で一人思う。

「それじゃ、いったん村に戻るの？」

「うん、何かまずいことあるかな？」

「ううん、仕方ないよね、でもお姉ちゃん達はまた行くんでしょ？」

「もちろん！」

「それじゃ、私も問題ないよ。」

『私も問題ないの。』

そして、全員に了承を取り、ツェーゼの村に戻ることにする。その足取りは若干重いものがあったが、誰も諦めてない。今は少しの休息、また時が来れば走り出す。そのための準備期間。まだ、旅は終わっていない。

宿業の前兆　閉ざされし旅路（後書き）

今回はこうなりました。今までにもちょこちょこ主人公に不吉フラグが立ってましたが、ここにきて能力に異変が出ます。と言っても使いすぎなかったら特に問題ないです。

やっぱりこういうのって必要だと思います。書いててそう思いました。それに浮き沈みあるから物語として成立するんだと思いますし、作者は主人公最強物とかは好きですけどね。

そして次はまたしても新キャラ登場です。多分。出るといいな。

村との交流　獅子との再会（前書き）

続き出来ました。最近忙しいので、更新がさらに遅れるかと思います。

さて今回は、割とほのぼのしてるかな？とりあえず戦闘はほぼないです。この前にある動画で戦闘シーンを見て触発されたのか戦闘シーンが書きたくなってます。減らすつもりだったんですがもしかすると予定より増えるかも。

今回、またしても新キャラ登場です。結構独自設定に染まってますが気にしない方向で。

村との交流　獅子との再会

川が流れる音が聞こえ、人の話し声が聞こえる。空は晴天、曇る事のないそれは、一見すると気持ちいいものに見える。その光景は以前に見た物、そこはツェーゼの村、戻ってきたそこは傷ついた旅人を暖かく迎え入れてくれた。

そしてリコによりユーリとエイナの事を説明され、初めは不思議がっていた村人も、リコの熱心な説得により、二人を妙な目で見る者も無く、割とすんなり村に馴染む事が出来た。リコも家に戻り、旅の疲れをいやしているだろう。

そして、商人から旅で使った道具を補充し、新しい商品なんかを買い終え、エイナは常夜の石の中でユーリとこれからの事について話す事にした。ちなみにドライアードは常夜の石の中を散策している。

「村の皆が受け入れてくれて良かったね。最初はどうなる事かと思っちゃった。」

「割と問題なかったな、ファイファーと縁が在るようだから、そんなに心配はしてなかったけどな。」

「あっ、そっか。そういえばファイファーの事も怖がらずに普通に話してたね、村の人たち。」

「そういう事だ。理解さえしてくれれば変な目で見る奴は、ここにはいないだろうな。」

「でも、そんな事も私たちは知らなかったんだよね。」

「そうだな。」

沈痛な表情を浮かべるエイナと、それに対し、自然な様子で受け答えするユーリ。ユーリは無論最初から知っている、当然そのことを言う気はないが。この世界の事についてユーリは、エイナ程の不安は持っていない。この展開は判っていた、ここから村との交流も自然と出来上がるだろう。定着せし者の村だからいずれはループするだろうが。

「せっかく村人と仲良くなったんだ。色々話して来るといいさ。俺は以前に話したからな。エイナに任せるよ。」

「え、うん！判った！」

エイナは村人とは然程話していない。ならば今はちょうどいい機会だろう。より多くの人たちを通して自分の疑問を埋めていけばいい。その果てに何を思うのか、どう結論付けるのか、それはエイナが判断していくことだ。俺がどうこういう事では無い。

「知らないなら知っていけばいい。それが今俺たちに必要な事なんだからな。」

「うん、私も知りたい。ううん、知らなくちゃいけない。」

強い意志を持ってエイナはこちらを見る。そこには迷いはないらしい。変に迷うよりは、余程ましだろう。光に包まれ、表に出るエイナを眺めながらそう思った。

そして、その中で俺も自分の答えを出そうと思う。結局今までの旅で有益な所は、俺と繋がりのある存在がいる、というよりは俺がそれに繋がったと言った方が正しいのだろう。知って嬉しい類の情報ではないが、それでも少しは前進したことを喜んでおこう。

「例え何であれ、これが今の俺の人生なんだ。好きにやるさ。」

独り呟く、この世界で人生がどうと言う会話は意味がない、けれど今、こうして考え行動できる。なら生きている事と何一つ変わらない。なら思うまま進んでみるだけだ。もうそれしかないとしても。

ちなみにこの後、戻ってきたドライアードと一緒に工作に勤しむのだが、何気にドライアードがずっと笑顔だったのを、ユーリは作業が楽しいのだと判断する。どうしようもない。

表に出たエイナは、とりあえず村人とコンタクトを取っていこうとする。今まではユーリやリコ、ドライアードと主に話していたが、此処に来て大多数の村人と触れ合える場ができた。エイナは元来の性格で気軽に話し合い、思ったことを言い、疑問を抱いたのなら質問し、例えくだらない情報でも手に入れる。情報が必要なのも確かだが、新たな人との交流は何か新鮮に感じるのだ。

「（うん、なんかいいな、こういうの。）」

争いも無く、平穏に暮らしていける。剣を持ち、短いながらも今まで戦ってきたエイナからしてみれば、その光景は本当に輝いて見

えた。この村の人たちはみんな気さくだし、親身になって話してくれる。だからだろう、話しかけた此方も楽しく思えるのは。

「（最初は少しだけ不安にも思ったけど、いざ話してみたら、楽しくて時間が過ぎるのも忘れちゃいそう。）」

そうやって話していくと自分も村の一員になったような気がして、少し嬉しくなった。そしてもう何人目になるのか、川で釣りをしている村人に話しかける。

「おじさん、釣れてる？」

「おお、嬢ちゃん。ほら、これを見てくれ。」

「わあ！大漁じゃない！すごいね！」

「まあ、俺の腕がいいからな。」

「あはは。」

そういって世間話とも言える会話が続く。

「まあ、こうやって魚がたくさんとれる時は、獅子王様にも感謝しねえとな。」

「獅子王様？」

「ああ、山の頂上に住む御方の事だ、あんたらは獅子王様の所から来たんだろう？」

「ここじゃ、ファイファーの事、獅子王様って言うんだ。」
「そうだ、獅子王様が見守っていて下さる御蔭で、俺らはこうやって生活することができるんだからな。」
そう言いつつ、新たに釣れた魚から針を取る。
「それじゃ、ここでとれた魚はファイファーも食べたりするの？」
「勿論食べて頂いてるさ。けどなあ、唯でさえ険しい山道だし、道中にはモンスターもうようよしてるからなあ、一筋縄ってわけには・・・そうだ！あんた、獅子王様に魚届けていってもらえねえか？」
「ええ！」
「ああ、そうだ。あんたにはあの強い兄ちゃんが居るんだもんな！あんたらに頼んどきゃ、何も心配いらねえな！」
「え、あの。」
「いいこと思いついた！どうせだったら他の奴らの分も、持って言ってもらえばいいんじゃねえか！俺って冴えてるねえ。」
「は、話を。」
「お～い、皆！こっちの姉ちゃんが今から獅子王様の所に食べ物届けるって言ってくれたから、届ける物があれば一緒に持って言っても言いそうだ！」
「な！」

「おお～、本当か？悪いな嬢ちゃん。助かるよ。」

「こっちもよろしくな！」

「私の方もあるからね！」

「俺もだ！」

「・・・どうしてこうなるの。」

ただ世間話をしていたはずが、気が付けば村人全員がファイファーへの贈り物を持ってきて、自分がそれを運ぶ羽目になっているのだ。しかもこちらの意見は綺麗に忘却されている。

ここまですんなり行くと、親しみやすさも度を越えると問題なのだと思わざるを得ない。だが、頼られて悪い気はしないので、エイナは結局持っていくことになるのだが。

「うう、道具袋の御蔭でかさ張らないのが唯一の救いだけど、この扱いはどうなんだろう。」

少々納得いかないが、それも自分を信用してくれているのだと思えば、何とかなるようにも思える、多分。とりあえず今は預かった荷物をファイファーの所まで持っていくのを優先しよう。

「うん、それに久しぶりにファイファーに会うんだし、悪い事じゃないよね。」

そう言って村を出ようとした時、ふと知らない人物がいるのに気

づく。黒い蝙蝠の様な羽を広げ、青紫の肌をした人物。近くには同じく蝙蝠に似た羽を生やした丸い生物が浮いている。その人物は布を地面に広げ、側に置いていた荷物を順々に置き、値札の様なモノを傍に置いて行く、恐らくは商人と言った所なのだろう。

だが、先程村を見回っている間はいなかったように思う。もし居たのならあれだけの特徴を持っているのだ。忘れる筈はない。つまりさっきの荷物を受け取っていた間に来たと考えるべきだ。まあ、そうだとしても、何がどうと言うわけでないが。エイナは興味半分でその人物に近づく。そしてある距離まで近づくとその人物の事がはっきり見える。

「（でも、近くで見るとやっぱり人間には見えないし、モンスター、よね？）」

羽がある時点で、普通の人間ではないが。他にも肌の色や、纏う雰囲気のようなものが人ではないとエイナに訴えかけてくる。もしかしたら危険かもしれないと、関わるのを止めようとした所で目が合う。

「ん？らっしゃ～い！」

「（どうしよう、関わるんじゃなかった。）」

側にエイナが歩いて来たのを気付いたのか、気さくな声で話しかけてくる。一方、逃げ損ねたエイナはこれからどうしようかと悩む。それをどう受け取ったのか、口を曲げ笑う。

「ははぁ～ん、さては魔物が商売してるっていうのが不思議なんだろ？」

「え、ええ。」

「魔物って言ったって全部が全部、人を襲うとでも思ってんの？ま、こっちにもいろいろ訳ってのがあんのよ。アタシの場合は好きで、こういう事やってるんだけどね。」

「へえ。」

「誰かに迷惑かけるでも無し、問題なんか何処にも無いでしょ。」

「そう、ね。」

「それにしてもアンタ、唯、気になったから話しかけるだけで終わり、なんてことは無いよねえ？」

その言葉を聞いて、咄嗟にどうしようか悩んだが、頭に浮かんだ言葉を言う。

「ねえ、あなたここ以外にも商売ってしてたりする？」

「そりゃあ、してるよ。アタシは色んな所でモノを売ったりしてるからね。」

「それじゃあ、ノヴァって人の事、聞いたことない？」

「ノヴァ、ねえ。」

「やっぱり、知らない、かな。」

「いんや、もちろん知ってるともさ。」

「本当？！」

予想もしてない言葉に思わず大声で反応する。その言葉に胸をそらし、自慢げに商人は言う。

「なにせこのルチル様は世界を股にかけてるからねえ。どんな情報もばっちり押さえてるって。」

「ルチル？」

「ああ、名乗ってなかったっけ？私はルチル、それでこっちはムガムガね。」

『ムーガガ！』

「そ、そう、私はエイナ、それでこっちが・・・」

光に包まれユーリが表に出て来る。しかし内心は別に俺を呼ぶ必要はないだろう？と疑問に思っていたが。

「ユーリだ。」

「へえ、変わった力だね。初めて見たよ。」

「まあ、俺らも自分達以外には見てないな。」

ルチルはそれを聞いて興味深そうにユーリを見る。しかしユーリとしては、早くエイナと代わりたかった。その理由としては。

「（実際に見ると改めて思うが、なんでこいつ、こんなに肌だしてんだ？悪魔だから誘惑とかそんなのか？趣味っぽいが、傍から見たらどう見えてるのかが心配だ。エイナは不思議に思わないのか？）」

ルチルの格好は肌の露出がすごい事になっている。胸にさらしの様なモノを撒き、上着はファッションとしての域であり、体を隠すようにはなってない。腰はベルトを申し訳程度に巻いているだけだ。とはいえルチルは悪魔だ。

明確に女性と考えていいのかは知らないが、人間とはまた違うために服装なんかも基準が異なるのだろうとは思う。だがしかし、考えても見て欲しい。この村にいるのは人間だけなのだ。これが広まると社会的に抹殺されかねない。村人が一切近寄らないのもこの服装が原因だろうと思う。

「けど、アンタ、面白い魂してるね。」

そんなことを考えていると、ルチルがいきなり妙なことを口走った。気のせいか，目が真剣そのものになっている。そしてその顔はなぜか上気している。意味が判らない。

「なに？」

「魂さ。見てて思ったんだけど、アンタの魂みたいなのは長い事いろんなところで商売してきたけど、初めて見たね。うん、ねえ、アンタ、アタシに魂くれない？」

「遠慮する。」

若干興奮した様子でそんなことを告げる。その予想外の言葉に反射的に否定の意を返す。よく即答できたと褒めてやりたいくらいだ。本当に。

「え～いいじゃん。ケチケチしないでさ。痛いのは最初だけだって！」

「なんかおかしいだろうが。なんでそういう話になる。」

「だから、アンタの魂が気に入ったんだって。まさかこんなに上等なモノに出会えるとは思いもしなかったよ。」

「・・・そうなのか？」

さすがにそうまで言われると気になる。渡す事は無いが、一応どんなふうに見えているのか聞いておきたくなった。

「そうだね、簡単に言ったら最高級の宝石とか、最高級の食材とかそんな感じだね。しかもレア度が上限突破の。これは手放したくないってぐらいの。」

そしてすごい幸せそうな顔でそう言うルチルに俺、出てこないほうがよかったか？と内心汗だくのユーリ、宝石というのはともかく食材ってなんだ？喰われるのか俺？流れとはいえ、なんかすごい事になっている。そして、ルチルの荷物が僅かに揺れる。

「なんだそれ。」

「まあ、どんなのかは大体予想できたんじゃない？それで、アンタの魂くれる気になった？上から集めて来いって言われてるけどアン

タのはアタシが大事に取っとくからさ、ね。」

「なるわけないだろう。俺の魂は俺のだよ。」

「むう、アンタも強情だね。」

「ここで強情にならない奴がいたら見てみたいがな。」

此方の言葉に残念そうにするルチル。しかし眼はこちらから離さないが。その様子に呆れながら、嫌な予感がしているのを自覚する。そして次の瞬間、ルチルの荷物から何かがすごい勢いで飛び出してくる。ルチルに向かって。

「（嫌な予感はこれか、なんでこんなことになるんだか。）伏せろ！ルチル！」

「え？」

状況が呑み込めず、キョトンとした顔でこっちを見るルチル。村の中であるため、あまり強い力を行使したくないので、その体を抱きしめ、位置を逆転させる。そしてストラを開放。飛び出してきた影がストラに当たり、弾かれる。

『ギャッルルル！』

そこには以前、村の女の子のペンダントを狙った角の生えた猫がこっちを威嚇していた。なぜルチルの荷物から出てきたのかは不明だが、ユーリというより、ルチルを警戒しているようにも見える。何をしたのか少々気になった。猫はそのままこちらを注意しながら村の外に駆けていく。

「なんだったんだ？あれ。正直訳が分からないな、っと悪いな、あまり派手にやりたくなかっ・・・どうした。」

さっきからなんの反応も無いので気付くのが遅れたが、ルチルの様子がおかしい。顔を俯け、一切反応しない。もしかして、あの猫は逃がしたらまずかったのか？と思い始めた頃、ルチルがゆっくりと稼働する。

「・・・・・・」

「おい、どうした？（完全に防いだはずなんだが。）」

「あ、ああ。問題ないよ！守ってくれて礼を言うよ！さっきの奴はここに来る前に罠を仕掛けて捕まえてたんだけどね！どうやら逃げちまったようだね！」

顔をガバッとあげると一気に捲し立てるように言う。その顔は悪魔なのに赤い。血の色って一緒なのか？と思うと同時に、その勢いに驚いたユーリは、やっぱり何か毒でも貰ったのかと目の前の悪魔が心配になった。何せいきなり赤くなり、挙動不審になるのだ。どこぞのじゃじゃ馬を連想する。これからが非常に心配になった。

「（まったく、アタシはなんでこんなに動揺してるんだか。天下のルチル様がこれじゃ笑われちまうよ。）」

そしてルチルはというと、混乱の極みにあった。元々ルチルは今まで商売一筋でやってきており、悪魔でありながら、浮いた話などは一切無かった。ルチルは元々、悪魔でありながら戦闘力は低い、というかそこらの人間の女性並みだろう。かといって他の、悪魔と

しての能力もさして使えるわけではない。元々悪魔として考えれば、落ちこぼれに該当する、

だが、ルチルは自身単体での世界移動を可能とする。これが先程世界を股に掛けると言った理由であり、ルチルが持つ唯一の特性である。これにより、危険が迫れば世界ごと移動し、何食わぬ顔で危機を回避できる。先ほどのように突発的だとどうしようもないが。これの応用で転移も可能としている。

とはいえ、他に出来る事と言えば、言葉巧みに人を騙し、誘うぐらいの物であり、ルチルはこれを商売に利用し、生計を立てている。落ちこぼれであるために同族とは反りが合わず、悪魔という事もあり、他の種族とは距離を置かれる。

「（まったく、今までだって、色んな厄介ごとに巻き込まれては逃げ切って来たじゃないか！・・・ま、まあ、守ってもらったのは初めてだけどさ。）」

故に唯一仲がいいとされるのは、同じ商売仲間か、もしくは商売のお得意様位という事、どちらも仕事上の関係である以上、浮いた話も無い。

つまり、ルチルは見た目や言動とは裏腹に、女性としては初心である。そんな者がいきなりの危機に、自分の身を挺して守られたとなると、さすがに平静ではいられない。というか、絶賛撃沈されてたりする。

「（け、けど、まあ、嬉しいと言えば嬉しいもんだね。こんな気持ちがあるなんて初めて知ったよ。それにこの男なら悪くないし。）」

更にユーリの魂が、稀に見る極上の魂であるのも拍車をかけている。元々悪魔や天使と言った存在はそういった魂の輝きに惹かれるものだが、それも限度を超えると魅了と変わりない。元々魂の輝きに魅せられていた所に先程の件が重なり、完全に冷静さが吹き飛ぶ。一目ぼれとも言えるが、悪魔の本能とルチル自体に男に免疫が一切無い為、状況はさらに混迷とかすが。無論ユーリはそんな考え、露程にもない。

「・・・おい。」

「ふぇあ！な、何だい？」

ユーリから突然話しかけられ、奇怪な叫び声と共に反応する。眼は左右にせわしなく動き、手は後ろで組んだままつま先で地面をいじるように動かしている。そして、度々こちらを上目づかいで見る。ユーリはそれを見ながら、突っ込みたくないのか、流す事にしたのか、気にせず話を続ける。

「とりあえず話を進めてもいいか？」

「は、話？！何のことだい？」

「・・・はあ、ノヴァの事だ。」

「あ、ああ！そうだったね！ノヴァ、ノヴァね！」

「・・・」

その反応に、先程の猫をやはり捕まえておくべきだったかと自分の判断の甘さを呪う。実際さっきの猫は関係ないのだが。そしてル

チルは、まだ顔は紅いものの、ようやく余裕ができたのか、先程のように挙動不審にはなってない。眼がなぜかギラギラしているが。

「ええと、それでノヴァって奴の話だっけ？」

「ああ。」

「けど、タダって訳にはねえ、こっちにも商売ってものがあるしねえ。」

『ムガムガ！』

そう言うとルチルは商売人の顔つきになり、こちらを眺める。ユーリとしても異論はない。というかこの先の展開も知っているので、どうこう言う気も無い。頷いて返す。

「それはそうだな。」

「それじゃ、アンタと交換でどう？」

「だからそれはことわ・・・今なんて言った？」

「だから、魂だけじゃなくてアンタ自身が気に入ったんだよ。だからさ、アタシと一緒に行かないかい？」

・・・どうやらまだ、混乱は続いているらしい。顔を真っ赤にしたルチルのその言葉に、普通に時間が止まる。しばらくして疲れたような声でユーリは返答する。ルチルとしては本来の勝ち気な性格と悪魔の本能が初心な心を後押ししての一言だったのだが、かなり暴走している。その割にはきっちり本音が出ているが。だがそれゆ

えにユーリには冗談として捉えられ、流される事となる。

ユーリにとっては、そんな急展開考え付くわけがない。恋愛のプロセスとかはどこに行ったかとか、好感度が最初のイベントで振り切れるとか、誰が予想できるというのか。目の前の現実にユーリは断固気付かない。

「普通にそれ以外にしてくれ。」

「なんでだい？退屈なようにはしないからさ。」

「話が逸れてるぞ。」

その言葉に不満をあらわにするルチル、不満なのはこちらなんだが。渋々話を元に戻すルチル。

「けど、アンタお金持ってる？持ってるんなら交渉と行くけど？」

「ふむ、まあない事も無いが。」

「へえ、それじゃあ、いくらで買う？」

別にそれでもいいが、この情報は金で買うとなると、確実に損になる。何せ持ち逃げされるのだから。そのために原作と同じ状況に持っていく。

「・・・ふむ、他の方法でどうだ？」

「他の？」

「ああ、言い値でもいいが、こちらとしてはそう裕福というわけでもないんでな。自然と使う金額も限られてくる。それならあんたにとって有益なものを持ってくる代わりに、情報を提供するっていうのはどうだ？」

「ふ～ん、ま、アタシは構わないけどね。」

そして、紺碧の水晶というアイテムを得意先の客が探しているが、簡単には見つからない、だからそれと交換で情報を渡すという話になった。

「それならそれで頼む。後はエイナ、任せた。俺はまだ仕事があるからな。」

光に包まれエイナに代わる。ユーリとしてはここまでの話を了承させればそれで目的は済んでいるので、用事が無くなると同時にエイナに代わる。そしてエイナの姿を見ると露骨に見下したような顔をして見るルチル。それに対し、目を吊り上げて睨み返すエイナ。いきなりの緊迫感あふれる空気に誰も近づこうとしない。

「・・・ルチルって言ったわよね、あなた。」

「それがどうかしたかい？アタシは忙しいから用事なら後にしてほしいんだけどねえ。」

「なんで初対面のユーリにあんなこというかな？悪魔ってみんな節操って言葉知らないの？」

「アンタにどうこう言われる筋合いはないねえ。アタシが気に入ったからアタシのモノにする。それの何がおかしいんだい？アタシは

悪魔だよ。」

「ユーリは物じゃない！それになんで急に馴れ馴れしくなってんの！」

そして女二人の言い争いは続く。無論ユーリは中でドライアードと大工仕事に励んでいる、そのためにその事実に気付かない。本人が気づいたころには色々手遅れなのだろう、少なくともそれは確定している。ルチルとエイナは本能的に敵同士だと察しているのか、お互いがすでに臨戦態勢になっている。それが終わるころには二人ともクタクタになっていたが。

その後、ルチルと会話という名の戦闘をこなしたエイナは、村人からの依頼を思い出して現在、獅子ヶ峰を登っている。元々ここに居るモンスターならば、獣魔の森や迷いの森の魔物と比べても弱いために、特に問題も無く山を登りきる。そして自分たちが冒険を始めた出発点、ファイファーの住む洞窟前にまで来る。

ちなみに紺碧の水晶だが、村を出た直ぐの所の宝箱からすでに回収していたりする。と言ってもエイナは渡すのを渋っているが、正確にはルチルに会うのを、だが。

「本当、ここから始まったんだよね、短い時間しかたってない筈なのに、凄く懐かしく感じるなあ。」

それはそれだけの密度の時間を過ごしてきたという事だ。確かにエイナがここを離れて今にいたるまで、言うほどの時間は立っていない。今までの経験が余程印象深いという事だろう。

「と、こうしてる場合じゃなかった。ファイファー、会いに来たよ！」

自分の用件を思い出し、洞窟に入っていくエイナ。そして広間に出た時、そこには依然と変わらず、燃える鬣を靡かせ、威風堂々と立つファイファーがいた。

「・・・おお、エイナか、久方ぶりだな。どうした？なにか我に用でも出来たか？」

「そうなの、麓の村の人たちから、ファイファーにって沢山食べ物貰ってきたよ！」

「そうか、村の者達には礼を言わねばならぬな。せっかくだ、食べていくかエイナ？これだけの量だ。腕の振るい甲斐があるというもの。」

「いいの！それじゃ、戴いちゃおうかな。」

「ふむ、それではしばし待つがいい、直ぐに用意しよう。」

そういい、ファイファーは奥へと食材を持って歩いていく。その後ろ姿を見ながらエイナはどうやって料理をしているのかが少し気になったが、なんとなく知らないほうがいいと思った。

「さて、では頂くとしようか。」

その後、料理を作って戻ってきたファイファーと一緒に食事をし、今までに起こった出来事を話ていた。

「・・・そうか、中々に充実した旅をしているようだな。」

「うん、けど、記憶の事も何もまだ手がかりは掴めて無いけど。」

「それでも、自身の意思で進む以上、その先には確実に何かがある。大切な事は自分で考え、行動すること、その結果はなんであれ、必ず形になる筈だ。」

それが、例え自分の望まぬ結果であったとしても。中で聞いていたユーリはそう思った。進んだ先が明るい未来とは限らない、けれどもそれを知らなければ前には進めない。難儀なものだと思った。その事にはファイファー自身気付いているだろうが、言う気はないだろう。エイナはその真意に気付く事は無く、真剣な顔で口を開く。

「うん、そうだよね。まずは自分で動き出さなきゃ、なにも判んないもんね。ありがとう、ファイファー。」

「いや、これからを決めるのはお前たちだ。我はきっかけを与えているに過ぎない。」

「うん、私頑張るよ。ユーリだっているし、私は一人じゃ無い。」

その言葉に満足そうに笑うファイファー、そしてその後も会話を続け、エイナの疑問や意見なんかをファイファーが答えたりしていた。そして幾らか時間が経ち、エイナがそろそろ村へと戻ろうと腰

を上げる。

「ファイファー、私そろそろ行くね。まだまだやることもあるし。」

「そうか、ならば、少しついて来るといい、旅の手助けになる物を教えよう。」

「え？」

その言葉と共にファイファーが咆哮を上げる。その声に反応したのか、広間の柱が下がり、隠されていた通路が露わになる。それを目を見開きながら見つめるエイナをしり目に、その中へついて来るように促すファイファー、意図が掴めないながらもそれに従い中に入るエイナ。そこには見た事も無い装置が存在していた。

それは中央に巨大な魔方陣があり、それは四方にある小さな魔方陣へと繋がっている。そしてその小型の魔法陣は一つだけ光が灯っている。

「なにこれ、こんなのがここにあったの？」

「そうだ、そして、この門は村と繋がっている、これを使えばここと村を直ぐに行き来する事ができるだろう。」

「え？そんな便利なものがあるならどうして最初に教えてくれなかったの！」

「どうして我がこの事をお前たちに伝えなかったと思う？何事も自分で行動しなければ意味がないからだ。安易な方法で何かを成したとしても、それが正しいというわけではない。」

「・・・」

「先ほども言った事だが、我はきっかけを与えているに過ぎない。答えを掴み取るのはお前たちだ。そしてそれこそが・・・」

「この世界の決まり・・・」

「そういう事だ。この門はお前たちの助けとなるだろう。村に着いたら皆に大層美味かったと伝えておいてくれ。」

そして、中央の魔法陣に乗り、村へと転移する。目を開ければそこは、しばらく前にいたツェーゼの村の川の側、本当に一瞬だったなあと、地面に刻まれた魔法陣を見る。

「とと、いけない、村の人に伝えとかないと。」

ファイファーからの頼みを思い出し、村の人たちに伝えて回る。その際にまた、たくさんのアイテムをもらったのは余談である。

そして、その後、すごく嫌な顔でちらちらとある方向を見る。その方向には羽を生やした悪魔が商売をしている。もちろんルチルの事だが、頼まれていた紺碧の水晶を取って来たのだが、なんとなく渡したくないというか関わりたくないのだ。恋愛がらみなのは明白である。

「（ユーリもなんかデレデレしてるし、あんまり近づきたくないんだけどなあ。）」

エイナ視点では、先程のルチルとユーリの会話や行動は、当然アウトとしてカウントされている、ユーリ本人がその言葉を聞いたら、間違いなく否定するだろう。ユーリ本人はそんな意図はないのだから、悲しい程に。エイナとしても正確には、ルチルの行動に対して危機感を抱いている、といったのが正解なのだが。けれど、今まで色々探して何も進展のなかったノヴァの情報、個人の感情でどうこう言うわけにはいかない。重い足取りの中ルチルの側に行く。

「らっしゃーい・・・なんだ、アンタか。」

「いきなり、言ってくれるじゃない。商売人がそんな態度で言いの？」

話し始めからお互いに遠慮も何もない、お互いに性格が攻撃的なためか喧嘩腰になっている。

「勿論相手を見てから対応してるから問題は無いよ。ユーリは？」

「さあ？それより、はいこれ、頼まれてたアイテムだけど、これでいいんでしょう？」

エイナの言葉に不満をあらわにしながらも紺碧の水晶を受け取り、眺める。やがて問題ないと判断したのか、渋々ながら礼を言ってくる。

「・・・まあ、間違いないよ、一応感謝しとくよ、これであの方も満足してくださるよ。」

それで本題に入る。元々この件が無ければ関わりたくは無かったのだ。さっさと要件を済まそうと話を進める事にする。

「それで、ノヴァの事なんだけど。」

「・・・」

「・・・」

「ああ、なんだい。アタシが言うまでも無く、そこに居るじゃないか。」

「え？」

その言葉に反射的に振り向き、指さされた先を見る。しかし、そこには誰もいない。そしてルチルの方を向くと、荷物も含めて影も形も無い。

「・・・これって。」

その結果にしばらく放心していたが、やがて理解したのか。

「騙されたってことだよね、あ～もう！やられたあ！」

その場で大声を出す。元々この結果を知っていたユーリは、特に如何こう言う気はない。ただ、この後エイナに、鬱憤晴らしなのか、ルチルに対する態度について延々口うるさく言われるとは、さすがに予想できなかったが。

「・・・はあ、俺に言っても仕方ないだろうに、騙されたんだろう？済んだことだ。」

「・・・なんか冷静だね？もしかしてこうなるの判ってたとか？」

「まあ、大体予想はついてたぞ、確信ってわけじゃないけどな。」

「どうして言ってくれなかったの！そうしたらわざわざ行かなくてもよかったのに！！」

「そう言われてもな。向こうは商売人なんだから、口が上手かったり、自分が得するように行動するのはむしろ当然だろう？」

「でも！そんなの酷いじゃない！こっちは苦労したんだよ！」

村から出て数秒で手に入れて置いてその言葉はどうなのかと思ったが口にはしない。火に油を注ぐのは避けたい。

「まあ、そうかもな。」

「それにユーリもなんか甘いし。女の子には優しいんだよね、本当に！」

「・・・なんかその言葉だけ聞くと俺が碌でもないように聞こえるからやめてくれ。」

「ふ～んだ！そもそもユーリは！・・・」

「（またか、何時になったら終わるんだろう？）」

ちなみに余談だがユーリと一緒に作業していたドライアードだが、エイナが中に入って来た時点で既に逃走している。是非もない。

その後、ようやく落ち着いて来たのか、村人との交流を再開させる。先程ファイファーに村の食料を持って行った事で、多くの人から改めて礼を言われ、エイナ本人も嬉しそうに対応していた。その中、ガーデニングをしている女性に迷いの森で見つけた種を自分の代わりに育ててもらう事にした。どうやら珍しい物らしく、快く承知してくれたのが印象深かった。

そしてこれからの事で、なにかためになる情報は無いか聞き込んでいると、どうやら旅人が新しくこの村に来ていたらしい。そのうち、会えたらいいなと思いながらも、とりあえず他にも何かないか話を聞いていると、そんな中で何かあったのか、そわそわと挙動不審な男性を発見する。

「どうしたのかしら、あの人。すごくそわそわしてるけど。」

それはエイナの眼から見ても、明らかに何かあったと確信させるもので、エイナの性格上、こういう現場に遭遇すると、必ずと言っていい具合に関わろうとする。それはもちろんこの時も当てはまる。

「うう～ん、どうしよう、困ったなあ、でもどうしようもないし。でも心配だなあ。」

「どうかしたの？」

「ああ、けどなあ。あれを見られるのは問題だし、でも今はあの人の方が心配だしなあ、ああ、どうしたらいいんだ。」

「え～と。」

どうやら自分の考えに没頭しすぎてこちらの声も届かないらしい。焦れたエイナは大声で強引に村人の意識をこちらに向ける事にする。

「ちょっと！」

「え？ああ！なにか？」

漸くこちらに気付き、少し慌てたような感じで対応してくる。そこで、もう一度何があったのか聞いてみる事にする。

「何か悩んでたみたいだから気になっちゃって、何かあったの？」

「うん、僕はハンスっていうんだけど、実は、旅立ちの野の先にある洞窟にある物を取りに行ってたんだけど、そこで大切なものを落としちゃって。」

「大切な物？何を落としたの？」

「え！そ、それは、そのぅ。ちょっと言いづらいんだけど。と、とにかく、僕にとっては大切な物なんだ！」

「そんなに大切なら、どうして洞窟の中になんか持って言ったの？安全な所に置いておけばよかったのに。」

「う、うん。そうだよねえ、でも、ちょっとした理由があってね。」

そこでハンスから理由を聞く。最初は洞窟からとれる宝石を取ろうとして行ったのだが、そこでモンスターに追われ、無我夢中で逃げている間に紛失してしまったらしいのだ。

「で、まだ続きがあってね、実はその後、ある旅の人が代わりに取りに行ってくれるって言ってくれて、ついさっきなんだけど一人で洞窟の方に行ってしまったんだよ。」

「へえ、話に聞いてた旅の人の事ね。それでその人はどんな人だったの？」

「確か、ビャクヤって言ってたような気がする。うん、間違いない。」

「ビャクヤさん、ねえ。」

「でも今になってなんだか心配になってきちゃって。いくら剣士だからって女の人一人に任せちゃったし。」

「え？その人女性だったの？」

「うん、それに後を追うべきなのはわかってるんだけど、逃げてる最中に足をくじいちゃって、こんな状態で行っても邪魔になるだけだし。」

しばらく、考えていたエイナだったが、顔を上げ、ハンスに代わってその洞窟に行くことにする。無論ユーリはこの展開を知ってい

るため、止めたりはしない。不干渉のまま、話は続く。

「・・・その洞窟ってどこにあるの？」

「え？・・・もしかして君が変わりに行ってくれるの？」

「うん、このまま放っておけないしね。」

「で、でも君は女の子じゃないか。危険だよ。」

「あ、聞き捨てならないなあ。私だって強いんだから！それに私には頼りになる相棒がいるから、問題ないよ。」

その言葉で何か思い出したのか、ハンスは納得したような顔をする。

「そうか、そういえば君の中にはあの強い彼氏がいたんだったね。それなら心配しなくても大丈夫そうだ。」

その言葉を聞いて慌てたのはエイナだ。いきなりの不意打ちに大きく声を荒げる。

「か、彼氏！！」

「え？違うのかい？僕はてっきりそういう関係なんだと思ってたけど。」

「違うってわけじゃないけど、まだ早いというか、私としては大歓迎なんだけど、うまくいかないというか、ま、まあ私の事は置いといて。こっちの事は心配いらないから。」

いきなり挙動不審になったエイナを心配そうに見ながら、本当にこれでよかったのかと、なんとなく不安になるハンス。その後、落ち着いたエイナが村人から女剣士が向かったとされる洞窟までの道筋を聞く。

「それで、落とした物って何なの？」

「実は、手紙なんだ。」

「手紙？」

「うん、それで、その・・・見つけても中身を見ないでほしいんだ。」

「？まあ、いいけど。」

「うん、それじゃ、お願いするよ。」

そして、その洞窟に向かう事にする。聞いた場所によると、恐らくもうその女剣士は洞窟に着いているかもしれない、急いだ方がいいと村から出ようとする。だが、それは見知った声によって止められることとなる。

「お姉ちゃん、どこに行くの？もう旅に出るの？」

「あっ、リコちゃん。休んでたんじゃないの？」

その声の主は家で休んでいる筈のリコだった。リコは走ってこちらまで来ると苦笑いしながら口を開く。

「もう、あれからもう結構時間立ってるよ、もう十分休んだよ。」
「そうなんだ。それでなにか用かな？悪いけど私、これから少し用事があるんだけど。」
「どうしたの？もう旅を再開するの？それなら私も行く！」
「ううん、旅じゃなくて、ハンスから頼まれて人助けをしに行くの。」
「人助け？」
いまいち状況が呑み込めていないリコに説明をする。余談だがリコは村に住んでいるためにハンスの事はもちろん知っている。
「それじゃ、お姉ちゃんはそのビャクヤって女の人を助けに行って、ハンスさんの手紙を見つけて帰って来るように頼まれたんだ。」
「そういう事ね。それじゃ、私はそろそろ・・・」
「私も行く！」
「え？でも危険だよ？」
「そんなの今更だよ！それに私は強くなりたい。いつかお兄ちゃんの隣に立てる位に！だからこのくらいの事で尻込み何かしてられないよ！絶対ついて行くから！！」
「・・・判った、それじゃ、一緒に行こうか。でも一人で行動した

りは絶対しないように。」

「うん、判ってるよ！私だって森で戦ったから少しは強くなったもん！足手まといにはならないよ。」

自信満々にリコは頷く。それを見ながら、エイナは先に向かったであろう、女剣士の事を考える。これから行く洞窟は、聞いた話だと壁が崩れたり、巨大なモンスターが生息していたりしていて、危険な洞窟であり、その洞窟にはマグマも流れていると聞いた。

「（早くいってあげないと危ないかも知れない、それにそんな場所なら手紙なんて直ぐに燃えて無くなっちゃいそうだし。できるだけ急いだ方がいいよね。）」

そして、エイナはリコと共に村を出る。まだ見ぬ洞窟への不安と、先に行ったとされる女剣士の身を案じながら、まだ旅を再開させる目途は立たず、けれど今は、目の前で困っている者を助けるために力を振るう。それが現在自分にできる事だと信じて。

その頃、常夜の石の中では～

「ああ、ドライアード、今度はそれをこっちに持ってきてくれ。」

『判ったの。』

「さて、と、これで大体出来たかな。」

『これは何に使うの？』

「これか？これは、物を運んだりするときに使うんだ。」

『ふ～ん、そうなの。』

その眼の先にはリアカーが2台並んでいた。いちいち手で少しずつ運ぶのもなんなので、今回運ぶのが楽になるように作ったのだ。

「それにしても悪かったなドライアード、付き合わせたりして。休みたかっただろ。」

『ううん、私もご主人様と一緒にいたかったから。それにこうやって物を作るのも楽しかったの』

「そうか、それは何よりだ。また何か作るときは頼むな。」

『うん！』

「よし、とりあえず、飯にしようか。少し材料を取ってくるから休んでてくれ。」

『あ、私が行って来るの。』

「・・・何を取ってきていいか、判らないだろうに。」

『あ・・・でも。』

「・・・はあ、それなら一緒に行くか？」

『うん、一緒に行こう、私も何か役に立ちたいから。』

「もう十分役に立ってるよ、ドライアードは、これからもよろしくな。」

『はい、ご主人様』

「・・・その呼び名、やっぱりどうにかならないかな。」

『？』

「・・・もういい、はあ。」

ドライアードはユーリの手を握り、ゆっくりと歩いていく。最初はユーリも渋ったが、何度か頼むと根負けしたのか、成すが儘になっている。ドライアードは今回ユーリと二人っきりで作業したために、終始ご機嫌である。

ユーリから離れたのは、材料を取りに行った時と、エイナが入って来た時だけで、あとはずっと一緒にいる事が出来た。本当に今の時間は楽しいなあと思えた。それを言葉にはせず、握った手をぎゅっと握りしめる。ユーリが少し驚いたような顔をしたが、まあいいかと、特に気にせず歩き始める。その横顔を眺めながらドライアードは笑顔で歩いていく。この時がずっと続いて欲しいと願いながら。

どこかのアジトにて～

「はあ、まったくあの女が生意気だから、つい騙して来ちまったけどどうしようかね。ユーリももちろん知ってるだろうし、失敗したなあ、そもそもノヴァとかいう奴なんて知らなかったしねえ。」

過去の行動を悔いる人物、ルチルがそう言いながら売り上げの計算をしている。その言動はともかく、手は止まる事無く、算盤を弾く。腐っても商人である。

ちなみにこれは、ある飲んだくれの商売仲間に貰った物で、最初はどうかと思ったが、今ではこれの御蔭で計算がとても楽になった。それを伝えると、本人は決まって酒を請求してくるのだが、そのうちアルコール中毒で倒れるんじゃないだろうか。

それはそれとして今は自分の心に新しく居ついた人物についてだ。その人物の名はユーリ。稀に見る魂の輝きに加え、その人物の人柄も、突然の事にも冷静に対処し、身を張って自分を守ってくれたのだ。第一印象ながらその評価は非常に高い。

しかしそのせいで最初はテンパり過ぎて、とんでもないことを口走ってしまったが、後になって気付き、真っ赤になって身悶えたものだ。そして第一印象をもっといいものに変えようと待っていた所にあの女、エイナが来たのだ。

「まったく、このルチル様の邪魔をしようなんていい度胸だよ。」

あの女が表に出ているせいでユーリとは話せない。力ずくでやろうとしても、自分に戦闘能力は無い。それに物の弾みとはいえ、とんでもない事を言ったのだ。気分的に会いづらい。

「ああ、なんであの時アタシと一緒に行かないか、なんて言ったんだか。ニンゲンの女が告白してるんじゃないんだから・・・！！！」

自分が行っていたことの意味に、遅れて気付き、再び羞恥に悶える。言葉上ルチルは勝ち気で、悪魔らしい打算的な所があるように見える、本人もその評価で正しいと判断するだろう。

だが実際の所、本人は割と純粋で感情に流される傾向が強い。そのためにユーリに対しては冷静さが無くなり、後先考えずに過激な発言が出る。そして後になり身悶える。変な循環経路の完成である。

そのために今現在、胸で燃えている感情に対して困惑しているのだ。幾らか時間が経ち、落ち着いてきたが、それでもまだその感情が消える事は無い。元々個人にここまで感情を抱いたのも初めてなので、持て余すのは当然なのだが。

そして本人は過去、爪弾きにされていた経験か、少々本音を隠し、必要以上に相手を挑発する傾向になっている。簡単に言えば天邪鬼になっている。エイナに対し喧嘩腰なのはそのせいもある。

「はあ、これからどうしようかね。」

これからを考え、溜息をつく。このままでは商売にも影響が出る。それは避けたい。色々苦労を重ね、ようやく安定してきたのだ。これで終わりになどしたくない。それにエイナにも言ったが好きでやっているのだ。止めるつもりはない。

そして、一つの結論に達する。それは・・・

「それなら、ユーリと一緒に商売をすればいいじゃないか。それに勢いとはいえ、本人に言っちまったことだしねえ。それなら問題も無い、うん、流石はアタシ、どこにも問題はない。待ってなよ、ユーリ！」

周りに誰かいれば、即座に駄目だしされるであろう意見は、誰もいないがために止まる事は無い。ユーリの事限定で視界が狭くなるのは思いのせいだろうか。ここにユーリを思うが故に、ユーリに問題を持ちかける人物が一人増えた。本人がそれに気付くのは一体いつになるやら。終われ。

村との交流　獅子との再会（後書き）

ハンスの依頼ってあれ、普通に考えるとおかしいんですよね。どうしてダンジョンにまで手紙を持って言ったのか？足をくじいてどうやって帰って来たのか？行き帰りに会うモンスターはどうしたのか？考えると疑問が多いです。まあ、ご都合主義か何かでしょうが。

ルチルですが、なんとなく設定をつけたしてやってたら、こんな感じに。見た目とは裏腹に実は尽くすタイプみたいなものだと思えば。最初にデレル。ジャンルとしてはなんになるんだろうか、これ。

そしてドライアードは漁夫の利、この扱いの差はなんなんだろう。

灼熱を宿す洞窟　その身を削る業火（前書き）

時間がかかりましたが次話投稿です。いつも通りに急ぎ足で書いたので荒いです。もっと余裕を持ちたいなあと常々思ってます。

さあ、戦闘がまた増えるかな？さて、今回は次話に繋げやすい終わり方にしてみました。

後、新キャラがいくつか出たりします。

灼熱を宿す洞窟　その身を削る業火

変わらない晴天の中、再び村を旅立つ、今度は村人の頼みにより、人助けのためにその刃を振るう。今まで自身のために振るい続けた剣は、誰かを助けるために使う事が出来るのだと再認識させられる。そして着実に目的の場所へ近づいていく。

「でも、あのハンスって人、足を挫いて、ここを通って来たって事でしょう？実は強いとか？」

エイナはリコにハンスの強さを聞いてみる。この道を怪我したままで帰れるのなら実際の所、相当強いのではないか、と思ったのだ。実際、万全の状態のエイナ達でも、進むにはそれなりの時間がいる。

「ん～、そんな話は聞いたことないけどなあ、なんか前に水汲みに行って井戸に落ちたとか、自宅の階段から落ちたとかは聞いたことあるけど、運動神経がいいっていう話は私も聞いたことないよ。むしろ、逆、かな。外出しても自宅周辺歩くくらいだし。」

リコから語られたのは思っていたことは真逆の回答、と言ってもエイナもハンスが戦闘者でないのは一目でわかったのだが、だからと言って運動神経が悪いという事にはならないし、仮に悪いとしても召喚術が使えるという可能性もあったのだが、聞いた所、どうやらそれも無いらしい。

「・・・どうやって帰って来たんだろ？」

「・・・判んない。」

とりあえず、何か秘密の通路とかでもあったんだろうと納得しておく。でないとさすがに不可解すぎる。ここまで頑張って村人の方が強いとかありえない。

「まあ、ハンスの事は置いといて、ビャクヤさんってどんな人だろうね？」

「ハンスの頼みを聞いてくれるくらいだからいい人なんじゃないかな？」

「うん、そうだよね。私もそう思うよ。」

二人で雑談しながら歩く。無論モンスターが出ない間の話だが。

「！さて、また、いっぱい出てきたかな、リコちゃん、準備はいい？」

目の前には2，３０匹のモンスターが平原を埋め尽くしている。以前から思っていたが、モンスターの縄張りとかはないのだろうか？

「うん、いつでもいいよ！！お姉ちゃんが獅子王様に会いに行ってる間に、私だって練習してたんだから！！」

リコのその言葉を合図に一斉にモンスターが襲いかかってくる。即座にリコはライザーを召喚、エイナもテテを召喚し、戦闘を開始する。

「行くわよ！」

剣を抜き放ち、斬撃を繰り出す。一撃目で怯ませ、返しの刃で無防備な体を突き崩す。そしてその間に近づいてきた敵はテテが食い止める。巨大なアリの様な外見をしたモンスター、ジルコーダの群れはその早業に僅かながら動きを止める。

「当たって！！」

そのタイミングにリコがすかさず、ナイフを投擲する。不意をつかれたジルコーダは無抵抗でナイフの侵入を許す。周りに撒き散った鮮血がそのダメージを物語っている。だが、その程度では止まらない。まだその命を消すには全く届かない。

そこに青いライザーが上空に浮遊して行く。そして、攻撃の有効射程に入った瞬間、その体が、どういう原理なのか、巨大化していく。ライザーの能力、ビックボスプレスと呼ばれるものだ。

『ｊａｊａ』

それは質量保存の法則を根幹から破壊するかの様に、勢いよく自らの質量を引き上げていく。やがて、その大きさが元の２０倍ほどになった時、重力に引かれるように、勢いよく空から真下に向かって落ちてくる。その着弾点にはもちろんジルコーダが群がっている。自身の命の危険を認識したのか、一斉に離れようとするが、放たれるナイフがそれを許さない。

「逃がさない！」

結果行動がばらけ、お互いの行動を阻害する。そしてそれが齎す結末はその命の終焉。空からの贈り物は見事その目的を無し、範囲内のジルコーダの殲滅を確認する。役目を終えたライザーは体を元

のサイズにまで縮め、クレーターから外へ出る。そして、使えるナイフをさりげなく回収し、リコの元へ戻る。

「やったねライザー、計画通りってやつだね！」

『ｊａｊａｊａ』

笑顔でハイタッチを決める。エイナたちと離れている間に、リコは自分にはナイフしか今の所できる事が無いので、他の戦闘手段を求めるとなると、召喚獣であるライザーに頼るしかないのだ。だからこそ、ライザーができる事を何とか理解して、それが成功するようにアシストすることにしたのだ。これなら、問題ないし今のように不意をつけば多大な成果を上げる事だって可能だ。

本音を言えのであれば、自分の手でユーリ達と同じく前線で戦いたいが、今はそれは敵わない。ならば自分のできる事で手伝おうと考えた結果、今の様な戦法が生まれたという事だ。まだ、拙いながらもきちんとしたチームワークになりつつある。しかし、この戦法の欠点というか、なんというか、当然デメリットもある。それは・・・

「うう～やっぱり、曲がっちゃってるよね、ナイフ。いきなり数が減っちゃったよ。」

それは無論巨大化したライザーが降って来た時、投げたナイフが下敷きとなり、使い物にならなくなることである。早い段階でその事には気づいていたので、できるだけ離れた位置に投げたのだが、あまり離れすぎると敵が有効範囲から出てしまう。

だからこそギリギリのラインを狙うしかないのだ。だが、いくら

なんでもリコにそこまでの腕は無い。それにいくら離れたといっても飛び散る土や石、発生する衝撃波によって、ナイフは簡単にその形状を変える。

「でもこれ位なら、ライザー、お願いできる？」

『ｊａａａ』

そして攻撃後に使えるモノをライザーが瞬時に判別して戻ってくるが、一応とれるものは一緒にとってきている。ライザーのアタッチメントにハンマーがあるので、ある程度は叩いて治せるのだ。元々小さくライザーが加熱して叩くために直ぐに出来る。

ちなみにナイフは、回収するときにライザーが洗浄しているので綺麗である。こうしておかないと毒や酸が付着していた場合とても危険なのだ。ナイフの修復と洗浄は、フェザードラゴンと戦う前にユーリがリコのライザーに頼んだことだ。自分のライザーが常に出ているとは限らないし、リコと協力していくのならこちらの方がいいからだ。

「できあがり！有難うライザー！！」

『ｊａｊａ！！』

余談だが、このナイフはユーリが渡したものの他に、リコ自身のポケットマネーから出ている。かなりの数を買ったので財布がかなり軽くなった。地味に悲しくなった。そして瞬く間にナイフが修復される。この繰り返しでナイフの消耗を少しでも少なくする。資源は大切に。

「向こうも終わりそうだね。」

その視線の先には残りわずかとなった、ジルコーダを相手にするエイナの姿が。途中で一度ユーリに変わって呼び出したのか、そこにはドライアードの姿も見える。ドライアードの魅了で敵を集め、エイナとテテがそれをしらみつぶしに倒している。そしてその斬撃が最後のジルコーダを切り捨てる。

「ふう、やっと終わったわね。」

『キュキュ！』

『大変だったの。』

エイナ達が戦闘を終えたのでそちらに向かう。モンスターを魅了で抑えていてくれたので、こちらはナイフの修復が直ぐに終わったのだ。間違いなくユーリが狙ってやった事なのだろう。まだその横には届かない、けれど確実に近づいているのだ。いつかその横に立てる時まで精一杯頑張ろうと改めて思う。

「皆、大丈夫？」

「ああ、大丈夫よ、それにしても見てたわよ。さすがに言う事あるじゃない。すごかったよ。」

『痛そうだったの。』

「本当？」

「ええ、さっきの攻撃が決まったら、そこいらの奴なら一気にやれ

るんじゃないかな？おまけに範囲も広いし、私も試してみようかな？」

「でも、お姉ちゃんだと離れないと危ないよ。」

「それもそうね。」

そういってその場には落ち着いた雰囲気が漂う。ただ会話している内容は結構危ないが、リコもいい加減染まってきているように思う。良いかどうかは知らないが。この世界に限っては力が無いと生き残れないのだ。それに本人が望んで得た力なのだ、どうこう言うのは野暮だろう。

「さて、それじゃ行きましょうか。」

「あっ！ちょっと待って、お姉ちゃん！あそこに何かある。」

リコが何かを拾って戻ってくる。その手には魔石の欠片が握られていた。恐らくは先程倒したモンスターが持っていたものだろう。それを今持っている魔石の欠片と合わせるとまた一つ新たな召喚獣が現れる。

その魔石に刻まれた名はドリトル。その外見は名前で判るとおりドリルだ。頭を格納する感じでドリルが現れ、ブースターにより掘り進む召喚獣。ランクで言えば、現状手持ちの召喚獣で最高ランクを叩きだす。

『ｊｚａｓａｚａｚａ』

「えーと、よろしくね、ドリトル！」

『ｄａｚｄａａｄａｄ！！』

肯定したのか、ドリルが勢いよく唸る。普通に危険で近寄れない。とりあえずお互いの自己紹介を済ませ送還する。

「お姉ちゃん！次は私にかして！！今度こそ私だって呼ぶんだから！！」

テテ、ポワソと召喚できなかったのが割と堪えているらしい。実際の所、リコの属性は機、鬼属性になるので、獣属性のテテ、霊属性のポワソが召喚できないのは仕方ない。エイナは獣、鬼属性だが、他の属性も呼び出せる、これは元がユーリの体というのが原因になっている。ユーリは全属性に優れた適正があるために、その体を共有しているエイナにも影響が出ているのだろう。

「さあ、来て！ドリトル！！」

リコのその呼び声にしたがい、リコの眼前に光が集い、それが形を成す。光が消え、そこに現れたのは魔石に刻まれた存在、ドリトル。それを確認したリコは喜び勇んでドリトルに近寄る。そのカラーリングは薄い青、水色のドリトル。

「やったあ！私にも呼べた！よろしくね！！ドリトル！」

『ｚａｚａｚａ』

いきなりしがみ付いてきたリコに驚いたドリトルだったが、直ぐに状況を理解したのか、リコが怪我しないように極力動かないようにしている。しばらくしがみ付いていたリコだが、エイナに諭され

てドリトルを送還する。しかしその顔はドリトルが召喚できたのが嬉しいのか、まだ笑顔のままである。

「よし、これで私もまた一つステップアップしたって事だね！」

「よかったねリコちゃん。」

「うん！！」

『よかったの。』

エイナとドライアードもリコの召喚を我が事のように喜ぶ。思いがけず、戦力アップが出来たことを喜びつつ、先を急ぐ。こうしている間にも先行したであろう旅人が、洞窟で危険な目にあっているかもしれないのだ。早く合流するに越した事は無い。

「よし、それじゃ遅れた分、少し急いで行きましょうか。ビャクヤさんの事が心配だし。」

「うん！」

『判ったの！』

全員の同意も得て、旅路を急ぐ。しかし、その後もモンスターと遭遇してしまい、戦闘に入る。無論進むごとに敵の数も増え、その都度戦闘を強いられてしまい、思った以上に時間がかかってしまう。だが、その全てを倒し、ようやく目的地に着く。

「ふう、ここまで来るのに結構手間取っちゃった、とりあえず、洞窟の入り口はあれみたいだけど、この門は何かな。こんなものがあ

るのは聞いてなかったし・・・でも今は先に進むのが優先だよね。」

そこは山のようになっており、奥には石で造られた洞窟の入り口が見える。だがその手前、そこには巨大な門がある。その作りは古く、長い事門が開けられた事がない事を意味している。

その前には村人が立っている。恐らく門番か何かだろう。なんとなくそれが気になったエイナだったが、今は洞窟に行くのが先決だと疑問を振り切り歩き出す。だが、門番の方がこちらに気付いたのか声をかけてくる。

「おい、嬢ちゃんたち、その先は《鬼岩洞》の入り口しかねえぞ。危ねえからさっさと帰んな！」

「私たちはこの洞窟に用があるの。これでも私達、強いんだから！」

「そうか、まあここまで来れてるんだ。嘘じゃないだろうが、その洞窟には火にまつわる強力なモンスターが沢山いるから気を付けるんだぞ。」

「うん、ありがとう。おじさん。それとその門の先には何があるの？」

ついでに先程振り切った疑問を投げかける。既に足を止めた以上、やはり気になった事は聞いておきたい。

「この門の先にはな、そりゃあもう強いモンスターがわんさかいる・・・はずだ。だから俺がこの門を見張ってるんだ。まあ、開け方も知らないし、開いた所も見た事は無いが。」

「そ、そうなんだ。」

その説明を受けてエイナは不思議に思う。何を根拠にそんな話が出来たのか判らないし、もし本当にこの門の向こうが強力なモンスターの巣窟なら、その話がどこから出てきたものかもわからない。おまけに門番が居ても開け方が判らない、しかも知ってる限りで開いた事も無い・・・この人はなぜここに居るのだろう。文字通り見ているだけなのだろうか、気にはなったが深く考えないようにしておく。

「それじゃ、急いでるから私たちはもう行くね。」

「おう、気を付けてな。」

門番に別れを告げ、奥の鬼岩洞へと足を進める。そして入ろうとしたとき、中から燃え盛るような熱気を感じる。

「うわ、あっついわね、ここ。まだ中に入っても無いのになんて暑さよ。」

「うん、私もう汗が出てきた。」

『確かにすごい熱、これじゃあまり長くいられないの。』

急な温度上昇にエイナとリコは共に汗を拭いながら予想以上の危険地帯だと認識を改める。戦闘を行うまでも無く此方の体力を急速に奪うこの環境はきついことこの上ない。しかもここに現れるモンスターは外の物よりも厄介らしい。正に踏んだり蹴ったりである。

ドライアードにいたっては植物から生まれた妖精であるため、草

木一本生える事を許されないこの灼熱の中では、特に消耗が激しいだろう。といっても文句も言わず、まだ涼しい顔をしているが。だが実際はこのドライアードが規格外なだけで、他のドライアードなら十数分で行動不能になっていただろう。

「ここは、時間をかける事はできないわね。ビャクヤさんを探すのもそうだけど、私たちの体力も考えて直ぐに目的を果たして出た方がよさそうね。」

「うん、賛、成。」

既に若干息が上がっているリコが、汗を拭きながら答える。この中では、体の小さなリコが一番きついらしい。それを見たエイナは道具袋から水筒をだし、二人に渡す。

「みんな、辛かったら直ぐに水を飲むように。倒れたりしたら大変だしね。」

「うん、ありがとうエイナお姉ちゃん。」

『助かるの。』

水筒を受け取った二人はそれをしまい、改めて洞窟の中に入ることにする。中に入った途端に見えた景色は一面岩に囲まれた場所、だがそこには赤いマグマが噴き出す場所がいたるところに見える。つまりこの中は活火山と同じであるという事、この場所は火口とないんら変わらない。

「ユーリは念のために待機してて、私ができるだけ進んでおくから、私がダウンしたら後は任せるから。」

エイナはそう言って胸の常夜の石に目を向ける。しばらくした後、石が光り、肯定の意思を感じ取る。今回は軽々しく交代しないほうがいい、その考えはユーリにもあるので受け入れる。だが、少しでも負担を減らせれるように今の間にいい案を考えておく。

「それじゃ、行きましょうか。」

早速、足を動かし、先へ進む。無駄に使える時間は無い。最悪此処で倒れでもすればそのまま命の危険につながる。入ってすぐの所に石碑があり、そこにはこの洞窟が危険な物であり、すぐに引き返すように促す文が彫られていた。

「危険なのは承知してるけど、引き返すわけにはいかないよね。」

石碑に背を向け、先を急ぐ。その先にはモンスターが山のようにうろついている。進むにはどうしても戦闘を行う必要がある。さすがに全てを避けては進めないし、変に回り道をしているとそれだけ体力も使うし、最後に囲まれでもすればどうしようもない。そのために先手を取り攻撃を行う。

「一気に片づけないと。最速で終わらせる。やあああ！」

勢いよくモンスターの群れに飛び込み、自分に近いものから急所狙いで剣を突き入れる。当然その全てが一撃とはいかないが、数匹ほど当たり所がよかったのか、動きが極端に悪くなっている。しかもそれが邪魔をしてただでさえ、狭い洞窟の中でモンスターの動きが阻害される。もたついている間に繰り返し斬撃を放ち絶命させる。こちらもそのチャンスを見逃すほど甘くは無いし、余裕も無い。

「まだまだ！逃がしはしないんだか、ら！」

振り向きざまに一閃、その攻撃でモンスターの首を飛ばす。そして、残りのモンスターに向き直り剣を構える。

『あなたたちはこっちなの。』

横から聞こえた声にモンスターが一斉に振り向く。そこには両手に赤い光を集めたドライアードの姿があった、ドライアードとモンスターの間には溝があり、そこには超高温のマグマが流れている。もし落ちれば一貫の終わりだろう。

『ラブミーウインド。』

その言葉と共に両の手から光が放たれ、モンスターの群れの最後尾にいるモンスターに向かい飛んでいく。そしてモンスターを魅了することに成功する。だがその目的は同士討ちではない。確かに効果的ではあるが時間がかかる。今の状況では少しでも早く戦闘を終わらせたい。

よって今回必要なのは魅了の本来の効果である、使用者に向かうという効果。最後尾のモンスターは他のモンスターなど眼中にないようにドライアードの方へと向かう。前のモンスターごと。

『『『ギャアアアアア！！！』』』

その結果、押されたモンスターともどもマグマの海に突っ込むことになる。後ろの方で尚且つ巨体のモンスターを狙ったの仲間を巻き込んで自滅させるため。エイナはドライアードが所定の位置へ着くまでの囮、そしてドライアードが出来るだけ早く移動できるよう

リコがサポートする。即興で考えた作戦だが今回はうまくはまった。

「ふう、なんとかなったね・・・大丈夫？エイナお姉ちゃん？」

「ええ、結構堪えたけどまだまだいけるわよ。リコちゃんこそ大丈夫？」

「あはは、やっぱり結構辛い、かな。」

例え戦闘で勝っても、その消耗は大きい。しかも休むことさえできない。故に勝利を喜ぶ間もなく、進むことになる。そして奥へ進めば進むほど熱は強くなり、体力も削られる。そしてそこに現れるモンスターもやはり強い。大きな金棒を持つ巨大な鬼、アカ鬼。提灯お化けのようなモンスター、ヒルベエ。小悪魔のような姿をしたプチデビルなど、新たなモンスターはどれも厄介なことには変わりがない。

「まったく、ただでさえ暑いのに、大勢で寄ってこないでよ！」

「ふう、ふう。」

『このままだと不味いの。』

しかもここに生息しているだけあって、この高温の中をものともしないように突っ込んでくる。これにはさすがにエイナ達も疲れが蓄積し、その足取りは見る間に重くなっていった。酷いのはやはりこの中では一番体力の低いリコだ。既に喋る体力も無いくらいに消耗している。

「このままじゃ間違いなくみんな持たないね。」

エイナの言葉が示す通り、全員濃い疲労の跡が見える。このままでは近いうちに限界が見えるのは目に見えている。どうにかしようと考えるも、エイナ自身もこの高熱により、冷静さを若干欠いているため、いい案が浮かばない。その時、エイナが光に包まれ、ユーリが表に出てくる。

「お兄ちゃ、ん、どうして？」

元々、エイナとユーリが交代でいけば二人とも消耗し、いざという時に動ける者がいないためにユーリは出てこないようにし、エイナ達だけで進める所まで進もうと考えていたのだ。

「・・・もう、全員限界だろう。今度は俺が行くからお前たちは休め。さっき思いついたことが一つある、これが成功したら、リコも休める筈だ。」

その言葉と共にライザーを呼び出す。そしてその体が巨大化する。そして、頭部のクリアパーツが開き、その中には人一人が横になれるようなスペースが空いている。簡易ベッドと思えばいい、なぜか布団まで完備されているが。周りには生命維持装置まである。なんなんだろうこのライザー。

その中にリコを寝かせ、常夜の石の中にライザーを送る。光と共にライザーは常夜の石に跳ぶ。リコと共に。本来ならリコが入るのは無理なのだろうが、ユーリの召喚獣の中にいるという特殊な状況のため、例外的に入ることが可能となる。

「・・・よし、これで大丈夫だな。うまくいって良かった。」

軽く言っているが、失敗していたらどうなっていたか判らないので結構切実である。その後、ドライアードも送り、3人共を、常夜の石の中に入れる事に成功し、この場にはユーリ一人が残る。

「・・・さて、行くか！」

気合を入れなおし、呼吸を整える。先を目指し、足を進める。しばらく進んだ先にはまた大量のモンスターが蠢いていた。こちらに気付いたのか一斉に咆哮を上げる。

『『ガアアアァ！！』』

『『ジャシャアアアア！！』』

「・・・まったく、そう騒がなくても聞こえてるよ。」

その光景にうんざりしながら剣を引き抜く。とりあえず時間を掛けたくはないが、自分一人なのでできる事は知れている。そしてユーリのその体が光に包まれる。そしてその光が収まった時、憑依を済ませたユーリがいた。憑依召喚、テテ。

「さて、変に温存するよりかは一気に使った方が効率がよさそうだ。」

ただでさえ、モンスターが多く、犇めき合っている。しかもここは洞窟だ。長時間暴れると崩落の危険も出てくる。結局短期決戦で終わらせた方がいい。しかもこの場所にはマグマなどは流れていないし、落とせそうな岩も無い。割と綺麗なドーム状になっている。つまり、自分で片づけるしかない。とは言っても、ほかに手がないわけでもないが。

「さて、来ないならこっちから行くぞ！」

その言葉と共にその場から飛び出し、モンスターの群れに肉薄する。そこから大剣バムスレイヤーを振りかざし切り払う。その一撃は数体のモンスターを巻き込み吹き飛ばす。間髪入れずに肘から金剛角を出し、突きぬく。この金剛角、額以外にも肘や膝、肩、更には踵、握りこんだ拳の先等の場所からも出せる。それを生かし死角を減らす。

「数が多けりゃ有利とは思わない事だ。」

次の瞬間バムスレイヤーを勢いよくモンスターの群れの中に投げ入れる。回転を加えたまま。巨大な質量をもった大剣が勢いよくモンスターを切り裂いていく。その突然の不意打ちに全てのモンスターが気を取られた瞬間、勝負は決した。

「喰らえ！」

その間にモンスターの群れに飛び込んだユーリは両肘、両肩、両拳から金剛角を出す。だが金剛角の形状は円錐形、突き以外には適さない。だが、その時不思議なことが起こった。金剛角がその形状を変え、反りを持った刀のような形状になる。それを勢いよく体ごと回転させ、周りを切り裂いていく。その姿はまるで竜巻、そしてその切れ味はモンスターの頑強な皮膚をやすやすと切り裂き、途中で止まる事すらない。

「とりあえず、この辺のモンスターはこれだけだな。」

その回転が終わるころにはモンスターの断末魔も止み、静寂だけ

が残る。周りを確認し一通り倒しきったことを確認すると憑依を解き、剣を回収し先を急ぐ。

「む、これは・・・」

その眼の前には先へと続いているのだろう入り口が見える。だがその入り口は巨大な岩によって防がれている。それを一瞥した後、ユーリは召喚術を行使する。呼び出す名は決まっている。

「来い、ドリトル！！」

呼び出す対象の名を叫び、岩の上空にドリトルが召喚される。主の命に従い、その体を巨大なドリルに変形させる。そしてそのまま大岩に向かってドリルを唸らせながら落ちてくる。その威力は大岩を簡単に破砕させ、砂に変える。

「なんか、威力おかしくないか？」

最初は破片ぐらいは出るだろうと思い、回避する気だったのだがそんな事は無く、砂埃が上がったぐらいだ。どんなドリルなのかと不思議に思った。

「・・・まあ、今はいいか。」

少しの好奇心を閉じ込め、ドリトルを送還する。そして今開いた入り口に向かい、足を進める。その先にも変わらずモンスターが溢れ返っている。足を止める事無く憑依を発動し切り込む。その顔には熱さによる消耗など微塵も感じさせなかった。

「多すぎだろう、お前ら。限度を知れ。」

内心げんなりしながら戦う。そこには無数のヒルベエ、中には色違いもいるがユーリにとってはどうでもいい。目に映る敵を殲滅するのみ。金剛角を伸ばし、ヒルベエを刺す。次の瞬間金剛角が燃え上がりヒルベエを焼き尽くす。金剛角を触媒とした術の行使、融合時には及ばないが、簡単なものなら憑依でも可能。そして今度は炎を消し、角を冷気が包み、周りに氷の粒が発生する。

「火属性だっていうなら、氷はどうかな？」

そういい金剛角を構える。そのまま飛び出し金剛角を刃に変え振り切る。その刃の先から青い衝撃が発生する。それはヒルベエが放った火炎弾を切り裂き凍結させる。そしてそれに触れたヒルベエは、瞬く間に凍結し砕ける。この熱気の中で氷を作り出し、尚且つ触れるだけで凍らせる。それがこの術の威力を物語っている。

「さて、次に凍らされたい奴はどいつだ。」

冷気を纏いモンスターの群れを掃討する。そこには油断も何もない。結局一太刀浴びせる事もかなわずこの空間のモンスターは全滅する。

「ふう、終わったか・・・む。」

だが、その直後、煙と共に新しい気配が生まれる。その煙を金剛角で風を起こし吹き飛ばす。そこには３ｍはありそうな位のヒルベエがいた。その名はデカベエ、安直なネーミングだがそれから感じる威圧は冗談ではない。

「次から次へと、いい加減勘弁してほしいんだが。」

無論返答を期待したものでは無い、だが言わないとやってられないのだ。まだ目的は何も達成してないというのに、こっちは無駄に時間と労力ばかりを消耗する。金剛角を構え、有無を言わさず突っ込む。デカベエはそれに気付くと、口を開き火炎放射を行う。その勢いは当然ヒルベエの比ではない。

「だが、このくらいなら！」

金剛角を構え氷を纏い炎を打ち消す。だが打ち消した炎の先からは、さらに火炎弾が襲い来る。舌打ちしつつもストラを纏い、火炎弾を打ち落とす。そして衝撃波も飛ばしつつ接近し、もうすぐといった所でデカベエが何を思ったのか自身を火だるまに変える。

「ちっ！無駄な知能はあるのか、はたまた本能か、面倒なのは変わらないか。」

接近していたためにその炎はユーリにも届く。それをストラと金剛角の結界で防ぎながら飛び退く。そこに間髪入れずにデカベエの巨体が横倒しになってくる。そしてそのまま回転しながらユーリの方に向かい転がってくる。

「おいおい、ドラム缶か何かかお前は。」

見た目的には巨大な燃えるドラム缶が転がってくるようなものだ。といっても自動で追尾してくる分、こっちの方がずっと厄介なのは今更だが。

「逃げ回ってもきりがないな。」

そういうとユーリは動くのをやめ、デカベエを待ち受ける。それに気付いたデカベエは速度を上げユーリを押しつぶそうと迫ってくる。それを見据えユーリは金剛角を地面に突き刺す。そしてそこから光が溢れ、数メートル先の地面が沈下する。それはデカベエよりも若干大きな穴となる。勢いをつけたデカベエは綺麗にその穴に落下する。

「これで終わりだ。」

即座に空中に浮かび脱出しようとするが既に遅く、金剛角が光弾を放ち、無防備なデカベエを消し飛ばす。浮遊できるのに地面を転がっていたために落とし穴にはまる、なんとも皮肉な話である。

「さて、また時間をとられたな。急がないと。」

戦闘の度にそこそこの時間を取られているために急ぎ足で進む。ここまで結構歩いたはずだ。もうすぐ奥まで辿り着くだろう。その時には恐らく、また面倒なことが起こる。それは知識としてもそうだが、勘もそう感じている。

「すんなり終わればいいが、難しいよなやっぱり。」

これからを考え眼光を鋭くさせる。それはこの先に激闘が起こることを暗示していた。

そして、常夜の石の中では熱さから解放され、体を休めている三

人がいた。リコもすっかり体調を回復させ、今は紅茶を飲んでいる。ちなみに入れたのはドライアードだ。

「でもエイナお姉ちゃん達ってこんなきれいな所に住んでたんだね。いいなあ。」

「うーん、住んでるっていうのとはまた違うと思うんだけどな。」

常夜の石の中の世界を羨ましがるリコに、苦笑いを浮かべて返すエイナ。この石は偶然手に入れた物であり、ここに住むというより、これはユーリと互いに話し合える中継地点のようなものだ。ここを改装したのはユーリであり、そのためにきちんとした家に見えるのだ。最初の頃は何もなかった。

「（リコちゃんに最初の頃のここを見せたらなんていうかしら。）」

それが今ではなんとソファーや机、個室にはそれぞれベッドまで完備されている。何故かピアノまである始末、最近ユーリがここにいると何かしらできているように思う。なぜこんなにも色々作れるのか不思議だが、聞いてもなんとなくわかるんだとしか言わない。職人泣かせにも程があると思う。

「でも、ユーリの御蔭でみんな休息がとれるし、ユーリも問題なく先に進んでるし、一安心ね。」

「うん！さすがにあの熱さは疲れたよ。」

「本当ね。」

ここにはリコとエイナが二人で話している。ドライアードは奥に

新しく作られた台所で野菜スティックを作っている。最近料理がマイブームらしい。オーブンではクッキーを焼いている、このオーブンもユーリの手製である。

「・・・それにしても、あれは何とかならないかな。」

「・・・ライザーとドリトル、大丈夫かなあ。」

二人の視線は裏から聞こえる機械音に耳を傾ける。その時、建物の裏に作られたスペースではユーリのライザーとドリトルが様々な装備を使ってリコのライザーとドリトルを改造中である。ちなみにこれはユーリの指示である。大岩破壊以外にドリトルを使わず、リコを乗せた以降ライザーを憑依させないのはこのためである。

『『jjzjjzjjzjjzjjzjjajjaaj?!?!?!?!?』』

なぜか聞こえない筈の悲鳴が聞こえたような気がするが気のせいだと思う事にする。なんとなく想像するのは止めた方がいいと判断したからである。何気に懸命だ。

「でも、なんで急にこんなことをし始めたんだろうね？」

「うん、そうなんだよね。」

今回の改造にしても、村にいる間にすれば良かったのではと思う。そうすれば危険も無く安心してできたはずなのだが、そんなことを考えていると紅茶の御代わりとクッキー、そして野菜スティックを持ったドライアードが戻ってきた。

『村でいた時にはドリトルがいないの。だから無理なの。」

持って来たクッキーと野菜スティックをテーブルに置き、紅茶の御代りを注ぎながらドライアードは言う。それに対してリコが質問する。

「でもそれにしたって、ここから戻ってからでいいんじゃないの？」

『設計図はできてるって言ってたから、今休憩してる間にやっとく積もりだと思うの。」

「急ぎ過ぎじゃない？」

『データを打ち込んで、アタッチメントを増やして変形機構をつけるだけだって言ってたから、そんなに時間はとらないの。それにこのまま作業中でも問題なく戦闘には出れるの。』

「・・・もしかしてドライアードって頭いい？」

『？』

リコの疑問に首を傾げるドライアード、ユーリからするとドライアードは十分すぎるほどに頭がいい。まず覚えがすごくいいのだ。一度言えば大抵の事を覚える。そのために設計しているときもドライアードに手伝ってもらったのだ。そのために改造がどのような物かも知っている。本人は無自覚だが。

「ま、まあ、問題ないんだったらいいんじゃない？さ、さあせっかくドライアードが作ってくれたんだから早く食べましょう！」

「（お姉ちゃんが逃げた！）」

『どうぞ召し上がれなの。』

リコはエイナがあからさまに話題を変えたのを見て理解できなかったんだと判断。無論自分にもわからない事だったが。実際エイナはよく判っていない。聞いている最中に？マークが飛び交っていた。

「それにしても改造したらどうなるの？」

「あ！判った！合体するのよきっと。こう、ジャキーンって！！」

身振り手振りで説明していくエイナ、それを苦笑い気味で見つめるリコ。

「いくらなんでも安直すぎだよ。お姉ちゃん。」

『ううん、それで合ってるの。』

「え！本当に合ってるの？！」

『うん。』

勢いで言った意見がまさか当たっているとは思わず、目を見開いて驚くエイナ。リコもびっくりしている。

『正確にはドリトルを変形させてライザーを電子頭脳代わりに演算させて制御に使うために接続する必要があるの。合体というよりはドリトルの新機能をライザーが補助する形なの。だからどうせなら繋げた方が強度的にも信頼面でも安心できたから今回この形をとる

ことにしたの。』

「「へぇ～・・・」」

目が点になった二人の前で黙々と説明するドライアード、その内容は全く頭に入らず、次第に頭から煙が噴き出す。

「あ、ああ！ドライアード！！そのくらいで判ったから！！もう大丈夫よ！」

「うんうん、とても参考になったよ、ドライアード。」

『それはよかったの。』

二人から捲し立てられ、満足そうに微笑むドライアード。それとは対照的に難しい顔で紅茶を飲む二人、リコはいくら聡明と言ってもまだ子供、エイナはいうに及ばず。理解できない知識を教え込まれ、脳が軽くオーバーヒートしている。

「でも、合体するっていう事は強くなるってことだよね？もう私ってサポートしなくてもいいのかな？」

気を持ち直したリコが疑問を口にする。ただでさえ前線には出れず、自分単体では戦えず、ナイフでサポートするくらいしかないのだ。戦力アップは喜ばしいが、自分の役割が無くなってしまったようにも思う。落ち込みながらそう聞くとドライアードはゆっくりと首を振る。

『そんなことはないの、何故ならこの改造は、リコちゃんが戦闘に参加できるようにするためのものだから。』

ドライアードの言葉に顔を上げるリコ。その思いもしなかった言葉にエイナが口を開く。

「どういう事？リコちゃんが戦闘に加わるって。今でも十分に戦ってると思うけど。」

『この改造はもし、リコちゃんが一人きりになった時を想定してるの。仮にそうなった時は使えるのがナイフだけだと心もとないの。それに召喚術があると言っても、強力なモンスター相手だと何度も術を使って魔力がなくなっちゃうの。だから、そんなことが無いように質を上げようって話になったの。』

「質？」

『うん、この改造が上手くいけばリコちゃんが前線で戦う事も可能なの。』

「え！！」

「私が前線で？！」

リコ自身が戦えるという言葉で再び目を見開く二人。そのことに対して説明を始めようとしたドライアードだったが二人にまた今度と押し切られ、軽く拗ねてしまった。

「で、でもこれでリコちゃんも戦えるんだ。頑張ってね！」

「うん、これで私もお兄ちゃんの隣に近づけるんだ。よ～し、頑張るぞ！！」

決意新たに手を握りしめるリコ、それを微笑ましく見るドライアード。リコの最後の言葉を聞き若干顔が歪むエイナ。反応はそれぞれだが、裏で行われている改造に3人共思いをはせる。その新機能がこれからの力になると信じて、リコは握った手に力を込める。裏では途切れることなく金属音が鳴り響いた。

モンスターを倒し、周囲の確認をするユーリ、そしてその眼がモンスターが落としたであろう魔石の欠片を認める。

「さて、思った通りならこれで完成なんだがな。」

そう言い、文字を確認し、笑みを浮かべる。道具袋から欠片を取出し、繋げる。そして次の瞬間、光が周囲を埋め尽くす。それは魔石が完成したことを表し、新たな召喚獣との制約が出来た事を意味する。光が収まった先には、青白い肌に黒い装束、上下に刃を持った剣を持った召喚獣、氷魔コパルディア。

『・・・』

召喚されたコパルディアはこちらをしばらく見つめる。何かあるのかとユーリも見つめ返す。しばらく周囲に静寂が訪れる。しばらくするとコパルディアが口を開く。

『アンタが次のマスター？』

「ああ、そうなるな。」

『へえ。』

しばらく此方を値踏みするように見た後、納得したかのように頷く。

『どんなやつかと思ったら結構骨がありそうだね。安心したよ、まともそうなやつで。気に入った。』

「褒め言葉でいいのか？」

『まあね、私らは魂の輝きが判るからね。また何かあったらいいな。出来る範囲で手を貸してやるよ。』

「ああ、よろしく頼む。」

そう言ってコパルディアを送還する。戦力が増えたことを喜ぶ暇も無く先を急ぐ。そして、岩でできた入り口を越えて、広間に出る。そこにはやはり相当量のモンスターがいる。だが、今までとは確実に違う所がある。それは奥の方で金属音や破砕音がするという事。これは奥で誰かが戦っているという事に他ならない。

「（へえ、まさか、ボス戦よりも早く会えるとはな。急いだ甲斐はあったかな。）」

内心で笑みを浮かべながら、戦いが起こっている場所へと赴く。大体のモンスターが向こうに気を取られているので近づくのは容易だ。そしてその奥では刀を握り、アカ鬼とつばぜり合いを起こしている女性がいた。ユーリが予想していた通りの人物がそこでは戦っ

ていた。その周囲には無数のモンスターの屍が転がっていた。結構な時間ここで戦っていたらしい。岩場には無数の傷跡が残っている。

「ふっ！はっ！せい！！」

鍔迫り合いを打ち勝った女性が、呼吸と共に斬撃が鬼の首を狙う、それは綺麗な軌跡を描き、最短距離を鮮やかに駆け抜ける。何度か防いだものの、最後の一閃で鬼はその活動を停止させる。

「俺も行くか！」

その時、女性の背後から襲いかかるモンスターをストラを飛ばし撃ち落とす。その光景に女性は僅かに眉を潜め此方を見据えるものの、大して気にせずに残りのモンスターの相手に移る。振り返り際にこちらに目線をよこす。

「（動じず、隙も見せない、か。やっぱ判ってたけど強いな。）」

それに応えるように目線を合わせる。そしてお互いの同時に視線を放し、同時に反対側に駆け出す。女性は刀で、ユーリは大剣で、獲物は違えどその結果はどちらも一方的なもの。それは二つの剣舞を元にしたダンスに見える。ある時は離れ、ある時は至近距離で、二つの剣閃が幻想的な光景を彩る。そしてそれはあらかじめ決まっているかのように、お互いに掠りもしない。

何度かその音を聞きつけたモンスターが増援に現れもしたが、その勢いを止めるには至らない。しばらくするとモンスターも減り、最後の一体を女性が切り払う事で戦闘は終了を告げる。互いに武器におさめ改めて視線を交わす。

「助太刀感謝する。拙者の名はユヅキ、良ければ貴公の名をお聞かせ願いたい。」

女性は時代がかった口調で此方に質問をしてくる。それに対しユーリも特に気にせず名を告げる。

「ユーリだ。」

「ほう、それでは村で聞いた旅人とは貴公の事か。」

「どんな話を聞いたかは知らないがそれで多分あってるよ。」

「そうか、村へは森の魔物を退治するために来たのだが、既に倒されていたと聞き、事情を聴いていくうちに貴公らの事を聞いたというわけだ。貴公とその中に居るというもう一人の事もな。」

少々沈痛そうな顔で言う。エイナが記憶喪失であるという事も知っているだろう。恐らくはセットで俺も記憶喪失とされているだろう。

「そうか。」

「なに、貴公らに害を与ようなどとは思っておらぬよ。それどころか礼を言わねばならぬくらいだ。」

「礼、ねえ。」

「うむ、我ら《白夜》に成り代わり、人々を苦しめる存在を退治してくれたのだからな。」

既にユーリは知っているがエイナ達に聞かせるために口を開く。
「ビャクヤっていうのは組織の名前か？」
「うむ、拙者が身を寄せている集団の名だ。白夜のユヅキ、得心したか？」
「ああ、それはそうと、ハンスが心配していたぞ。ハンスの頼みで俺たちはここに来たからな。」
とりあえずここに来た理由を話す、それを聞いたユヅキは苦笑いを浮かべながら返事を返す。
「やれやれ、心配を掛けさせてしまうとは拙者もまだまだ精進が足らぬな。」
「それでハンスの手紙はまだ見つけていないのか？」
「いや、それなら先程手に入れた。」
そういうとユヅキは懐から一枚の手紙を取り出す。それはユーリからしてもどんな意図で書いた物か直ぐに判る代物だ。ただ・・・
「（なんで、手紙がピンク色？！）あー。」
「恐らくは、こ、恋文かと。」
「なぜそこで口ごもる。」
口ごもったユヅキに対し突っ込むユーリ。それを聞いたユヅキは

益々顔を赤らめる。そして話を変えようとしたのか口を開く。

「ま、まあこうしてハンス殿の手紙も見つけたのだからここにはもう用は無いという事になる。それでユーリ殿には心苦しいが頼みが・・・！」

その時、部屋の奥から地響きと共に唸り声が聞こえてくる。お互いに顔を合わせるとその音源の元へと走り出す。まだ、この洞窟から出るには一波乱ありそうだ。それを裏付けるようにユーリの眼光は鋭く前を見据えている。いざとなれば切り札を切る覚悟を心に秘めて。

灼熱を宿す洞窟　その身を削る業火（後書き）

さて遂にここまで書く事が出来ました。次話はいきなり戦闘からになるのかな。どうしようか。後、何気にリコ強化計画発動。ドライアードの隠れた一面、氷魔との誓約とかこまごまとイベントも進んでます。

洞窟揺らす激闘　悪意持つ茨（前書き）

今回、もう少し早く投稿する予定だったのですが、ある動画を見てバトルものならもっと過激に行こう！！とか阿呆なことを考えてしまい、加筆してしまいました。遅れた原因は全て作者の気まぐれです。さて、毎回書いているような気がしますが、色々急展開です。既に急展開小説になってるような気がする。

感想の方も常連の方みたいなのが出来ているみたいで嬉しいです。新規の感想もちょこちょこ来ているので有り難い限りです。やる気が出ます！

そして、この話は今年中に終わるんだろうか？エクステーゼ部分だけだとしても。作者はストーリー的には相当遅いです。この量を書いたらふつうは終わりそうにも思うのですが・・・やっぱり才能ない？

洞窟揺らす激闘　悪意持つ茨

洞窟の深部、そこから大気を振るわせる振動が伝わる。それは、呻き声に似て心を揺さぶってくる。洞窟に流れ込む風が共鳴して聞こえたようなものでは無く、そこには明確な意思がこもっていた。それが威圧となり、この現象を引き起こす大本がいる事を感じさせる。それは明確な怒り、それも今向かう二人の感覚に脅威を植え付けるほどの強さ。

その気配の元へ一気に走る者が二人、先を行き、その眼に明確な戦意を表す女性、刀を携えし侍、ユヅキ。その後に続いて走る、大剣を背負う青年、ユーリ。迷うことなく二人は洞窟を奥へと疾走する。感覚的に音源と気配の位置を認識しているのだろう。

その中、黙々と走るユヅキとは違い、ユーリは奥に一度目を向けるとユヅキの方に目を向ける。少しの間をおいて口を開く。その間も速度は落とさず走る。

「そういえば一つ聞いておきたかったんだが、かまわないか？」

「・・・拙者に応えられる範囲なら答えよう。」

少しの間をおいてユヅキはそう答えた。それを確認したユーリは口を開く。

「・・・黒い甲冑を身につけて、背に大剣を背負った奴を知らないか？」

「なに？」

その質問が予想外だったのか、顔をユーリの方へ向け聞き返す。しばらくユーリの様子を見ていたが、直ぐに自分の心当たりがないか記憶を掘り起こす。そしてその結果は。

「・・・ふむ、何を指しているのかは判らぬが、拙者は存ぜぬ。」

「そうか。」

その返答に一応の納得を得たのか、視線をユヅキから外す。

「それなら構わない。急に妙なことを聞いて悪かったな。」

「いや、構わぬ。だが、なぜ今その事を聞いて来たのだ？先を急いでいるのは明白、わざわざ速度を下げてまで考える事でもなかろう。」

確かに急いでいる今、聞くような質問ではない。その言葉にユーリは少しの間迷ったような素振りをした後、口を開く。

「・・・大したことじゃない。この先の気配がその黒騎士に似ていたというだけだ。それが気になってな。集団の中に身を置いているのなら何か知っていることがあるかもと思って聞いてみただけだ。」

「その黒騎士という輩がこの先に居ると？」

だが、その言葉にユーリは首を横に振る。

「いや、黒騎士とは違う、似てはいるが別の奴だ。だからこそ気になったんだ。ここまで似ているとなると、少々気味が悪い。」

実際の話、気配というのは個人差がある。召喚獣にしてもそれは変わらない。ユーリとエイナ、リコの三人が同じ召喚獣を召喚したとしても、そこに感じる気配は全く違う。同種族であれなんであれ、同じ気配は本人か、それに相当近い存在しかありえない。しかしそれも実際は本当に小さな差異があったりする。

故に気になったのだ。全く同じ脅威を感じているのに、気配すらも同じなのに、その本質は違うと訴えている。まるで違う人物が同じ着ぐるみを着ているような、外見からでは見分けがつかない部分に差異を感じる。それがなぜか気になる。なぜ、黒騎士と誤認しそうな気配を纏っているのか、なぜ、このタイミングで活動を始めたのか、など腑に落ちない点もある。

「（何かに反応したとか、そんなふうに捉えるのが妥当なんだが、それがなんなのか判らないな。）」

何か引っかかる物を感じながら先を急ぐ。どのみち答えは実際にその眼で見るしかなさそうだ。似ているからと言って過剰に警戒しても仕方ない。とりあえずは先を急ぐ。少し勢いを上げ、ユヅキと並走するように走る。

「もうすぐそこだ。そこの角を曲がれば・・・これは！」

二人が進んだ先、急に開けた場所に出る。だがそこにはその区域を埋め尽くすかのように燃え盛る業火、それは中央の巨大な石の台座から、勢いよく炎が吹き上がっている。その規模は既に山火事と変わらぬ程。それは傍に近づこうものなら一瞬で灰も残さず焼き払われるほどの熱量。現にその場所の入口から奥には進めぬほどの熱気がすでにここまで届いている。

「任せろ！」

だがユーリはその現状を察すると同時に術の行使に入る。この仕掛けがある事自体は想定内、とはいえその炎の勢いは予想していたものよりも桁違いに大きいが。

「（ここまでの規模と勢いの炎、消しきれるか？）」

少々の疑問を持ったまま、召喚術が発動する。召喚するものはこの局面でただ一つ、辺りの熱気が消えうせ、壁面に僅かに霜が張る。周囲には霧が立ち込め、気温が一気に下がる。光が人の姿を象り、その存在を強める。壁面の霜は既に薄い氷の幕となり、それはどんどん分厚くなっていく。光の周囲は氷の欠片が発生し、それは緩やかに回り始め、冷気の風を起こす。

「こ、これは、なんと面妖な。」

光が一層強くなり、人の姿がはっきりと見えた瞬間、周囲の霧や氷の欠片が集結し、巨大な氷柱を作り出す。それはこの業火の中にありながらも溶ける事は一切ない。そしてその氷柱に罅が走る。それは止まる事無く、小気味よい音を立て、亀裂を広げていく。そして次の瞬間、勢いよく弾け飛ぶ。弾けとんだ氷柱はその形を巨大な花へと変える、その中から先程誓約を交わした召喚獣、氷魔コパルディアが現れる。

『さて、何の用だい？マスター。どうせならやりがいのある、派手な仕事を頼んどくれよ。』

「ああ、とりあえず、あの炎をどうにかできないか？先に進めなく

てな。」

『炎、あれかい。』

ユーリに促され、広間を覆う巨大な炎を見据える。その眼を少し細めた後、ユーリの方に向き直る。

「行けるか？」

『余裕だね。まあ、見ときな。といっても問題は消した後だけどね。』

「何？」

そう言ってコパルディアはその手を炎に向けてかざす。白い霧のようなものが炎を包み、かざした手を握りこむ。するとあれだけ燃え盛っていた炎が、その勢いそのままに巨大な氷像へと姿を変える。

「なんと、これは。」

「・・・おいおい。」

炎が燃えている形をそのまま留めた状態で、飛び散る火の粉は無数の氷の粒へと姿を変え、大地へと降りかかる。その光景は幻想的で、この光景を見た物が居れば、その眼に焼き付き、しばらく放心するだろう。現に中から様子を窺っているエイナ達はこの光景に見とれている。

『砕けな！！』

その声を合図に巨大な炎を象った氷のオブジェが無数の欠片となり四散する。その奥には入り口があり、怒りと狂気の気配を感じさせる。間違いなくあの向こうが、この気配の発生している所だろう。

「助かったよ、コパルディア。予想以上の力だな。」

「うむ、よく判らぬが助力感謝いたす。」

『ああ、任せときな！・・・と言ってもこんなくらいで感謝されてもねえ。』

視線を逸らし肩を竦めるように言うコパルディア。本人にとってはどうでもいいくらいに簡単だったらしい。

「まあ、とりあえず行くか。」

「うむ。」

『ああ、私も行くよ。少し気になることもあるし。』

そして、三人で奥の気配をめざし歩いていく。そしてもう少しで辿り着くという所で、消えたはずの炎が再度燃え盛る。

「・・・」

「これは。」

『やっぱりね。』

無言で炎を見据えるユーリ、目を見開き、驚きをあらわにするユ

ヅキ。そして、何が起こっているかを正確に把握していたのか、納得顔のコパルディア。三者三様の反応、その視線はどれも巻き起こる業火に向いている。その規模は小さい、とは言っても小さな家なら覆えるほどであり、まだまだ十分大きいが。

「・・・で、こうなるのが判ってたみたいだが？」

『まあね、予想はしてたよ。何か仕掛けが施されてるのは見て分かったし、通った後に何か起こるだろうとは思ったよ。それに、何か起こるのはこれからだよ。』

その言葉を裏付けるかのように炎が渦巻き、収束していく。密度を高めた火がその形を変える。その姿は巨大な虎。大人と比べても尚、大きく見えるサイズの炎の怪物。その眼光は鈍く燃え盛り、そこに込められた意志はその目に映る者達の絶殺を望んでいた。

『ガアアアアアアアア！！』

その炎は先程とは比べ物にならぬほどに強い。周囲の岩は溶け、蒸発していく。それは小さな太陽、その温度はまさしく太陽に迫るものだろう。コパルディアが冷気を放射して相殺していなければ、ここの温度は上限知らずに跳ね上がっていただろう。

『どうやら、あれはさっきの炎の源か何かだったみたいだね。長い事封じられてたから憎しみやらなんやらが溜りに溜まって暴走してんだろうね。』

コパルディアが簡潔に説明する。それを物語るように唸りを上げ、こちらに飛びかかってくる。ユヅキが刀に手をかけ、ユーリが重心を下げ、大剣を握りしめる。その中、燃え盛る虎に向かい、槍のよ

うな形状をした氷柱が飛び出していく、その速度は視認を許さぬほどの刹那を疾走する。だが虎は難なくそれを躱し、距離を取る。それを見ながらコパルディアが一歩踏み出す。

そして虎が放つ熱気とコパルディアの冷気がその間でせめぎ合い、その都度、小規模な爆発が起こる。せめぎ合った冷気が溶けて水となり、熱に反応し、水蒸気爆発を誘発しているのだ。それを更なる冷気と熱気で強引に押さえつける。爆発した衝撃そのものがそれ以上の圧力により強引にかき消される。その中、前を見据えコパルディアは宣言する。

『こいつは任されたよ、アンタらは先に行きな！』

「・・・」

自信満々にこの場を請け負うと言うコパルディア。それを見つめるユーリ。目を外す事無くそれを見つめ返すコパルディア、しばらくお互いの視線が交差した後、ユーリが口を開く。

「・・・任せた。信じてるぞ。」

そういい、ユヅキを促し、共に奥をめざし進んでいく。既に振り返る事は無い。この場は既に任せたのだ。自分は自分の役割を果たすのみ。

残されたコパルディアは先程のユーリの言葉を反芻して、笑みを浮かべていた。

『・・・信じるねえ、まだ、二回会っただけなのに、そんなことを言うとはねえ。どんだけ人がいいんだかねえ。』

そこに浮かぶ笑みが示すものは喜び、初めて召喚されたのはいつの事だったか、召喚と言うよりは拳サイズの通り道が出来た程度、相手の顔も見た事は無い。その召喚主はコパルディアの力を満足に使う事も出来ずにいた。それは自身を召喚せずに、自身が生成した氷柱をなんとか召喚する程度のもの。しかもそれを召喚獣と勘違いしているような半人前。少なくともコパルディアにはそう感じられた。それ以降も面白味のない事ばかり。

『思えば良い事なんて、数えるほどしかなかったけど・・・』

そして、一度も会合する事も無く誓約は断ち切られた。コパルディアの手によって。本来は召喚獣によって誓約を断ち切られる事は無い、だが、それを可能とするほどに力量差が開いていたのだ。

余談だが、その召喚術士は霊属性ならAランクまでなら召喚可能な熟練した召喚士だったりする。あくまで並みの、だが。この時は氷魔を召喚しようとしたが種族の中から絞り込まずに術を行使したために、特に拒否していなかったコパルディアが捕捉されただけ。しかも召喚獣の力が強すぎてこちらに呼べない状態になった。お互いに運がなかったと言えばそれまでだが。

『もう、どこか半分諦めてたけど・・・』

それをきっかけにコパルディアは自身の力を預けるにたる存在と会う事を願った。同種族の中で桁違いの冷気を持った自分を受け入れ、使いこなせるものを望んでいた。そして、出会った新たな主は、稀に見る強烈な魂の輝きを宿した者であり、その眼光も自らの主に足るものだと満足出来るものだった。

『まだまだ世の中、捨てた物じゃ無いって事かね。』

そして、それは誓約とはいえ、何の負担も疲れも見せずに自身を召喚したユーリの事を見て、自分を受け入れて尚、進めるものだと確信するに至る。誰かと共に歩むことを望んでいた、全力で誰かのために力を振るう事を夢見ていた。とんとん拍子に思い描いた事が重なり、気分が浮き立つ。先程は照れ隠しでつまらなげに反応していたが、頼られることを、信じてくれる者を欲していた自分からすれば、それは焦がれていたもの。

『自分でもここまでうまく物事が進むと怖く思うよ。本当にね。』

そして、その主もきちんと自分を見て判断をしてくれた。ああいった人物は人が良く、なんだかんだ言いながら周りの期待に応えるだろう。不満など何もない。この身とこの心はあの主にささげようと、この短い時間でそう決めた。何せ、待ち望んだ事全てを与えてくれたのだ。何気ない事かもしれない、だがコパルディアにとって、それは命を懸けるに足る理由。

『だけど、悪くない。それどころか・・・』

長い時間抑えてきた想いと力、それを惜しげも無く開放する。周囲は凍てつき、マグマは完全に凍りつき、その流れを止める。綺羅綺羅と氷の結晶が踊り、氷魔の想いに幻想的な美しさを加える。その瞳は深い蒼に染まっている。その眼に確かに敵を捉え、不敵に笑う。それは歓喜、今この場にいる事への感謝、自信を呼んでくれた主への想いの発露。

『十分過ぎておつりがくるよ！約束するよ、マスターユーリ！その信頼、違う事は無いと私の名においてここに誓うよ！」

その言葉を合図に炎と氷がせめぎ合う空間に変化が生まれる。冷気が熱気を押し返し始め、水蒸気爆発の衝撃が虎に向かい始める。負けじと勢いを強める虎だが、恐れるには足らない。今自分を縛るものは何もない。片手に上下に刃のある剣を握りしめ切っ先を炎虎に向け、構える。

『さあ！粋に行こうじゃないか！！』

氷魔にそぐわぬ熱さを持って初陣を飾る。ここに氷魔と炎虎の戦闘の幕が上がった。

「・・・よいのか？あの獣、只者ではないぞ。」

ユヅキが確認するように言う。言われるまでも無く、あの虎が強いという事は分かっている。あの虎が現れた時、その存在から威圧を感じた。それはベクトルは違えど、今向かう気配の強さに匹敵する。そして既に自我を失い、視界に入る物を殺戮するだけの魔獣と化している。そんなものに一人で立ち向かう事は死を意味しているのと同じ。だが、ユーリは揺らぐことなく先を見つめる。

「勝つさ、コパルディアとは会って本当に間もないが、人を見る目位はあるつもりだ。」

自信を持って言う。無論楽ではないだろう。だが、先程見た力は全開ではない。それにあの眼は心配はいらないと、前へ行けと物語

っていた。ならばそれに応えるのが信頼の証だろう。

「いい関係を築いているのだな。」

「違う。」

ユヅキの言葉に否定の意を示す。そして、ユヅキの眼を見ながら口を開く。

「これから、築いていくんだよ。だから、ここで終わりなんかならないんだよ。」

「・・・左様か。」

その言葉を聞き、ユヅキは穏やかに微笑む。もうすでに今の時点で築けている絆の強さに感心と敬意を持った。そして、今の言葉を聞くと、ユヅキ自身もコパルディアが負ける気がしない。ユーリが言ったように、勝った上で来ると確信に近い予感が持てた。

「それに・・・」

前を見たままユーリは言葉を紡ぐ。もう既に最後の入り口はくぐった、引き返す事は無い。狂気を見据える。

「俺たちの方にも目の前のこと以外を考える余裕なんてものは無さそうだし、な。」

その視線の奥には巨大な像が安置されていた。頭には巨大な角があり、胡坐をかいて両の手をその足の上に置いた体勢をしている。その静かに佇む像はここに祀られたものだろうか。だがそれは否。

気配が発生しているのはその像からなのだから。その体には無数の剣が刺さり、過去にも多くのものと戦ったのだと気付かされる。そして、静かに動きを見せる。

その瞳をゆっくりと開く。そしてその瞳が侵入者を捉える。そこには明確な殺意が感じ取れる。見える距離で感じたからか、それとも向こうが此方を認識したからか。初めに感じた気配よりも明らかに濃い殺意を感じ取る。

「さて、どうする？言ったらなんだが、とても友好的には見えないが？」

「無論、決まっていよう。」

その言葉と共に刀を抜き、構える。その眼には迷いも何もない。

「人々に害をもたらすであろう存在をそのままにしておくわけにはいかぬ。」

ユヅキの気に反応したのか唸り声をあげ、怒気を撒き散らす。そこには言葉の入る余地は無く、ただどちらかこの場から消え去ることでしか決着がつかないことを暗に示していた。そして胡坐をかいた体勢を解き、両足を使い立ち上がる。その大きさは優に２０メートルを超える。

「この場で疾く切り捨てるのみ！！」

その言葉と共に巨大な石像の魔物、岩鬼に向かい切りかかる。その速度はエイナよりも更に速い。だが傍に立つ前に岩鬼がその腕に火炎を纏い、そのまま腕を横に薙ぎ払う。その炎はまるで鞭のよう

にしなりを上げ、ユヅキに向かっていく。

「ふっ、小癪な！！」

足を止める事無く勢いを増し、その炎を見据え刀を構える。

「はああ！」

気合を込め、高めた気と共にその刃を振り上げる。その斬撃は炎の鞭を大気と共に寸断する。切り裂かれた炎は小さくなり、掻き消える。

「この程度の目くらまし、児戯にも劣る！覚悟！！」

岩鬼が放つ炎をある時は躱し、ある時は切り裂き間合いを詰める。そして、ついにもうすぐその刃が届く距離にまで近づく。だが、そこから岩鬼は今までとは一線を画す速度でユヅキに突進する。若干の驚きと共に目を見開いたユヅキだが臆することなく速度を上げる。その様は相手が何を行おうがこの刃で切り捨てると言っているかのようだった。

『グオオォオウオオオォォ！！』

「ぬっ、浅いか。」

身を翻し、突進をかわしざまに足に斬撃を放つ。その斬撃は足に切れ込みを入れる。しかし、それはまだ浅い。先の突進で僅かながら剣閃が鈍ったらしい。だが、通り過ぎた岩鬼に追撃がかかる。

「俺を忘れてくれるなよ、おらあ！！」

空中に跳んだユーリが、間髪入れずにストラを込めた大剣、バムスレイヤーで岩鬼の肩に一撃を入れる。その一撃により、肩の一部が陥没し、岩鬼はたたらを踏む。だが、傷つけられるだけではない。その反動を利用し、カウンターをユーリに叩き込もうとする。

「だけど、当たんねえんだよな。」

その拳をストラを噴出して躱す。そして突き出された腕に一撃を加え、着地する。そして、胸の常夜の石が光を放つ。中のエイナ達が出てこようとしている。

「・・・どうやら、行けるみたいだが・・・本当に平気か？」

確認として聞いておく。すると一際強く輝いた、それを見て、交替することにする。その体が光に包まれる、それは、エイナとの交代の証、だが、その光はさらに分かたれ、三つの光となり、それぞれが違う方向に岩鬼を囲むように飛んでいく。その光は形を為し、エイナ、リコ、ドライアードの三人へと姿を変える。

「ここからは私たちが相手になるわ！」

「負けないんだから！！」

『行くの』

三者三様の意気込みを見せ、それぞれ武器を構える。ユヅキも武器を構え直し、四方向から岩鬼に向かい合う。

「行くぞ！人に害なす存在を見過ごすわけにはいかぬ、白夜のユヅ

キ、参る！！」

その言葉を合図に戦闘の幕が切って落とされた。

炎と氷が乱れ飛び、周囲の岩場が刻一刻と削り取られる。既に部屋の広さは元の広さの倍近くなっている。炎に溶かされ、氷に砕かれ、壁面が削り取られた結果、広さが広がっていったのだ。それはその戦闘の苛烈さを物語っている。

『へえ、ここまでついて来るとはね、素直に感心したよ。』

その声はユーリの召喚獣、氷魔コパルディアのもの、その声は疲れなど感じさせず、活力に満ち溢れている。その視線の先に居るのは先程の炎虎、だが、その体が纏う炎は明らかに弱まっていた。

『グアアァアア！！』

咆哮と共に口から炎を放射してくる炎虎、その炎に手をかざし、向かって来る炎を逆流するかのように凍らせていく。その速度は炎の勢いよりも早い、あっという間に炎虎の元にまで凍結していく。

『グァ！！』

さすがに不味いと判断したのか、火炎放射を止め、その場から飛び退く。次の瞬間にはその場は空間ごと凍らされ全ての熱を奪われる。間一髪の所で即死を免れた炎虎、間をおかずに口から球状の火

炎弾を放つ、それはマグマの高熱にも匹敵する程の高温、触れている足場が飴細工のように融解していく。

『バカの一つ覚えかい。』

それに対し、コパルディアは何もしない、ただ、その周囲に綺羅綺羅と氷の破片が舞い踊るのみ、だが、それに意味があるのだと直ぐに気付くことになる。コパルディアに近づくたびにその速度を落とし、やがてその動きを停滞させる。そして空中で緩やかに静止した火炎弾はその身に罅を入れ、氷の結晶となり、崩れ去る。

その後ろから業火を身を纏い、燃える砲弾と化した炎虎が突撃する。それを察知し、手をかざす。莫大な熱量と圧縮された冷気が空間に溝を刻み、せめぎ合う。だが、拮抗していたかに見えた両者だが、直ぐにその力に差が生まれる。見る見るうちにその業火は鳴りを潜め、その動きを停滞させていく。

『私の氷は全てを止める。それを拒むなら、私の冷気を超える力を用意して出直してきな！！』

既に氷は炎を包みこみ始めている。それを感じて炎虎は強引に距離を取ろうと後ろに跳ね飛ぶ。だが、強引な離脱により、力の消耗と浅くない傷を残すことになる。そして、離脱し、相手を確認したところでその動きが停止する。

『こっちだよ、ウスノロ。』

その声は頭上から。反射的にその場から飛び退く。遅れて黒い大剣が突き刺さる。そして、突き刺さった剣の周囲から巨大な氷柱が数十本ほど突き出てくる。その光景は氷の剣山と言っても過言では

ない。そしてコパルディアがその氷山の上に降り立つ。その姿は氷魔の名を語るにふさわしい荘厳な雰囲気を纏っている。

『けど、流石に限界っぽいね。頑張った方だけど、ここで、終わりだよ！！』

氷山が粉雪に変わり、瞬時に再結合、数メートルほどの雪玉へと姿を変え、炎虎を仕留めんと飛来する。そしてコパルディアも剣を握り、炎虎へと切りかかる。雪玉を躱す為に空中へと飛ぶ炎虎、だがその行為が自分の首を絞めるという事を、直ぐにその身をもって知ることになる。

雪玉がその軌道を曲げ、炎虎を追い始める。それは予想していなかったのか、動揺が見て取れる。その動きの鈍りは事この局面にいたっては致命的。ある程度近づくと雪玉はその身を槍に変え炎虎を突き刺さんと迫る。

『ガアアアァアア！！』

周囲の溶けた岩ごと熱気をかき集め、爪に纏う。その結果、巨大な溶岩の爪を形成する。その爪は雪玉に向かい、易々と爪を喰い込ませ、切り裂く。それを見たコパルディアの口に浮かぶは笑み。

『かかった！！』

コパルディアは大地に手を付け、冷気を送る。切り裂かれた雪玉は再び粉雪になり、風に流されるかのように緩やかに炎虎を囲むように吹き付ける。その雪は炎虎の炎に溶かされることなく、降り注ぐ。そして、大地からは氷が樹木のように下から生えてくる。氷と雪が交わる、そしてそれは動きを縛る枷となる。

『グァッ？！』

驚愕により、動きが完全に止まり、その体は雪と氷で構成された重りに覆われる。動きを封じられ、冷気に力を奪われているこの状況は完全に詰み、後は止めを待つのみ。だが、炎虎はその流れから逃れるために全力で熱と炎を全身から放ち戒めを破壊しようと試みる。だが、それを見てもコパルディアは余裕を崩さない。まるでするだけ無駄だというかのように。

『ゴアアアアアア！！』

既に、身に纏う超高温により足元を穿つクレーターが形成されている。その表面はあまりの熱の強さに光沢をもち、限度を超えた炎はプラズマ化を始める。その熱量に戒めが解け始める。このままいけば直ぐにその身の自由を取り戻すだろう。だが、次の瞬間、炎虎を中心とした大規模な爆発に巻き込まれる。

水蒸気爆発、溶け出した氷と雪から生まれた水が炎虎の炎に反応し爆発する。その反動で炎虎の炎を吹き飛ばされ、壁に体を打ち付けられる。衝撃に顔を歪めながらも、その眼を敵へと向ける。その顔が見開かれる。受かってくる黒の剣、それが無防備な自身の腹を貫通する。

『これで、勝負ありって奴だよ！』

その言葉が紡がれると共に剣から氷が根を張り、炎虎の体を張っていく。抵抗しようとするが、その力ごと凍てつかせ、停止させる。やがて、その意思すらも凍結させ、物言わぬ氷像と化す。それを静かに見つめるコパルディア。その足元には魔石の欠片が転がる。

『・・・結構時間を喰っちまったね。向こうの方も心配だってのにさ。』

その言葉と共に魔石を拾い、剣を引き抜く。残された氷像は紗羅紗羅と氷の粒となって周囲に散っていく。それを見届ける事無く先を急ぐ。自身のマスターも今頃は戦っているだろう。少しでも急いで駆け付け、その負担を減らそうと足を踏み出す。

『ん？』

だが、その足はなぜか一度止まり、先程散っていった炎虎の方を向く。しばらく見た後、気のせいか、とつぶやいて先を急ぐ。そして、誰も居なくなった空間に黒い茨のようなものが生える。それは周りの熱気を吸い上げ一つにしていく。マグマを吸い、溶岩を飲み込み、炎を纏わせる。

『グルオオオォ！！』

そしてその場にはいつの間にか黒い炎を纏った炎虎が鎮座していた。

「はあああっ！」

気合一閃、その裂帛の気合を込めた一閃は岩鬼の体を裂き、何度目かの傷をつける。だが、それは浅く、致命の一撃には程遠い。表

面の皮は切れてもその奥、肉に当たる部分は鋼のように固く切った痕跡をつけるのが精一杯。

「むう、これほどの頑強さとは、敵ながら見上げたものだ。」

「戦ってる相手の事を褒めてどうするの！」

「む、申し訳ない。」

「いや、謝る必要はないんだけど。」

「お姉ちゃん達！喋ってないで手と足を動かして！！」

リコの言葉が聞こえると同時に二人は地を蹴り後方に跳ぶ。そこに岩鬼が投げた大岩が落下し穴を穿つ。次いで体から熱波を全方位に噴出させ、エイナ達を吹き飛ばそうとするが、ユヅキの斬撃によって熱波が切り裂かれる。

そして、その後ろから岩鬼に切りかかるエイナは緑色の燐光を放っていた。エイナは交代と同時にテテを憑依させ、炎耐性を上げている。その恩恵により、洞窟の熱気にも体力を削られることはない。そして、それは岩鬼が操る炎にも該当し、その威力を幾らか軽減させる。

「もう、大丈夫かなあ。でも私は私のできる事をしないと。」

二人の心配もしつつ、準備を進める。常夜の石の中で行われていたリコの召喚獣改造計画、まだ、完成とまではいかないものの、実戦に耐えうる性能と安全性はあるらしく、データを見ながらドライアードが戦闘での使用は可能だと教えてくれた。

「来て！ライザー、ドリトル！」

その呼び声に応え、リコの召喚獣が召喚される。共に青を基調とした召喚獣、見た目そのものは大した変化はない。だが、ライザーの出力は確実に向上し、内部兵器も取り付けた、ドリトルも小型のドリルを内蔵している。ちなみにこれらの兵装は全て、ユーリのライザーとドリトルの御下がり的な物だったりする。

「なんか少しドキドキするかも。合体ってどうなるんだろ。」

子どもながらに刺激されるものがあったのか、離れた所から若干期待に満ちた目で見ている。だが、リコは一つ失念している。元々リコが前線で戦えるようにする代物であり、結局それを運用するリコに全てゆだねられているという事に。

つまり、結局の所決意こそしているが自分が中心になって合体が始まるという事に考えが回っていない。大部分が理解できなかったが、リコが理解しているのは強くなるのと、この合体の間だけ自分が人ではなくなること。話を聞いてリニアに似た状態になるのだと納得した。あながち間違いではない。そして常夜の石の中で考えて、出した結論が受け入れるというものだった。

『（稼働は問題ないけど、初陣がこれなのは感心しないの。やっぱりもっと弱い相手に対して許可を出した方がよかったの。）』

それを遠くで見つめるのは内心、この戦闘で新機能を使うのは反対していたドライアード。だが、リコの召喚獣である二体に頼みこまれ、完全に安全が保障されている状況を作るから、その時ならいいと妥協したのだ。リコの方に向かわないように斬撃を繰り出しな

がら岩鬼の眼を自身に向ける。

『失敗はしないけど、リコちゃんがきちんと冷静に使えるのかが心配なの。私の説明きちんと覚えててくれると嬉しいの。』

ドライアードの心配をよそに、リコの指示に従い新たに取り付けられた機構が全力稼働する。ライザーが巨大化し、ドリトルがパーツごとに分離する。ライザーはその体内からパーツを放出した後、今度はその体を縮めていく。そして分離したドリトルとライザーが放出したパーツは空中で組み合わさりながらその全てが同じ方向へと向かう。すなわち、この行動の核であるリコの方へと。

「え！！な、何でこっちに来るの？！」

それに驚いたのは見ていたリコ。実際は常夜の石の中でドライアードに色々逐一説明を受けていたのだが、それが専門用語のオンパレードでしかも長かったために、大体が頭の中を素通りしていた。とはいえ、ドライアードが大丈夫と太鼓判を押したのだ。ユーリの召喚獣だって頑張って作ったのだ。それならばこれも問題なんてないと思い直し、引き気味だった体を元に戻す。顔はやはり若干引き攣っていたが。

「（だ、大丈夫、だよね？）」

余談だが、実験自体はしている、ドライアード本人が核となって。なのでドライアードは何の心配もしていない。と言うより、リコにやらそうとしたら、判ったから、少し休ませてと言ったエイナによってリコごと奥の部屋に引きこもってしまったのだ。それで仕方なく自分で試したのだ。無論これもリコには説明済み。本人は覚えていないが。さすがに子供に理解できる話ではない。そしてドライア

ードはその事に気付かない。

リコを覆うようにパーツが可変し、リコに合うように形を変えていく。それはきちんと防御力を備えるように全体を覆う鎧のようになっている。リコを傷つけないように、けれどもできるだけ早く全行程を終了させるために駆動する。そして、同調するために神経接続を開始する。リコのためだけに作られた新たな機関、それは結果として、リコを合体している間のみではあるが、融機人（ベイガー）と呼ばれる半人半機の生命体へと作り変える

そしてその最後に手のひらサイズにまで縮んだライザーを額のメットの中に収納し、全回路を接続させ全行程を終了する。その眼を静かに開く。その時今まで見ていた世界は一変する。機械的な情報に覆われ、今までの常識が作り変えられる。

『うわあ。』

青い装甲を纏い、その腰には砲身が付き、背には巨大なウイングを備えたバックパックを装着している。腕には手甲が付き、体の動きをできる限り阻害しないように、調整された装甲は付ける前と同じ稼働を可能とする、その上で身体能力の低さを補うために様々なギミックが用意されている。

『これが、私の新しい力。』

半ば放心状態でその現状を見つめる。鎧をつけてもその重さはほとんど感じない。ライザーに仕込まれた新しい反重力装置が正常に起動していることを表していた。その出力は元の数倍を叩きだす。この数値はライザー単体を何とか浮遊させる程度がリコが飛行可能になったと言えばその差が判りやすいだろう。言うまでも無くユー

リのライザーの御下がりだが。

『これなら、私も戦えるかな。うん、私も前に進まなきゃ。』

今、目の前で敵対する岩鬼を見つめ、その体を稼働させる。既にその身は機械を内包した機人、感情を制御し、機械的な思考を始める。だがその上で人としての心は何一つ失っていない。召喚獣たちによってリコの精神を阻害しないようにリミッターが設けられているのだ。

『さあ、行こう。ライザー、ドリトル。』

今、小さな意志が力を手に入れた瞬間、それは確かに未来への可能性となった。

「やれやれ、怒られちゃったわね。」

「だが、言っていることは間違っておらぬ。だが、このままでは少々手間がかかるというもの。何か手があればいいのだが。」

「少し気になったんだけど、何でユヅキさんはこの熱さで普通に動けるの？」

「心頭滅却すれば火もまた涼し！拙者はこの程度で息を乱す事などは無い。」

「・・・そう。」

ユヅキの言葉にエイナは短く返答する。実際は呼吸と出来るだけ無駄な動きをしない事で肉体の消耗を下げているのだ。そして、練り込まれた気はストラ程では無いが熱を防ぐ。元々その気を増幅し放出したものがストラなのだ。

岩鬼から少し離れた位置に着地した二人は岩鬼に視線を向ける、そしてエイナは即座にテテの憑依を解き、新たな召喚術の行使に入る。呼び出すものは炎の対となる存在、氷魔。そしてその術が起こす現象は再び憑依。

「判ってる。任せなさい！きて、氷魔コパルディア！！」

その言葉と共にエイナの周囲に冷気が放たれ、細剣に薄い氷が纏わりつく。自身の適正からは外れるがそれでもこの戦闘では最高の戦力となる。その効果は武器への属性付与。氷の属性を武器に与える事が出来る、更に遠距離攻撃・氷結を行使できる。これにより遠近両方の強化が出来、今回に照らし合わせれば弱点を突くこともでき、メリットがとても多きい。

「さあ、始めましょうか！！」

氷剣を握りしめるエイナ、そしてその横で刀を構えるユヅキ、お互いに視線を合わせる。

「見れば見るほど驚嘆させられるな。人の身でこのようなことが可能とは。」

「あはは、最初は私もびっくりしたんだけどね。」

「ふむ、左様か。（ユーリ殿といいエイナ殿、リコ殿といい、拙者

と同じく放浪者となりうる者達という事か、共によき意志を持っている。）」

「それじゃ、行きましょうか、ユヅキさん。」

「心得た！」

二人そろって岩鬼に向かい駆け出した。そしてエイナは数発の氷の弾丸を形成し、岩鬼へと飛ばす。ユヅキは速度を上げ岩鬼の元へと加速していく。

『ガアアアア！！』

勢いよく腕を振り氷弾を破壊する。そのまま炎を口から放射する。その炎を一気に加速して射線から外れるユヅキ、空中に跳躍して炎を躱すエイナ。それを見た岩鬼は攻撃目標を空中で身動きの取れないエイナに定める。手近な岩を掴み、投擲する。

岩鬼からすれば、片手で投げれるものとはいえ、それはエイナの体よりも大きい大岩、当たればそこで終わるほどの巨岩。既に空中にその身を預けるエイナにそれを回避する術は無く、何とか防御し、即死を免れるのがやっとだろう。本来ならば。

だが、ここに例外が生まれる。あろうことかエイナは空中で身を翻し、空中でさらに跳躍する。それにより大岩は目標を失い、誰もいない岩場に突き刺さる。それは大穴を開け、破片を撒き散らす。

「あっぶないじゃない！か弱い女の子になんてもの投げるのよ！」

不満たらたらのエイナだが、止まる事無く、再度空中で跳躍をす

る。無論これには仕掛けがある。何もない、空気を蹴って空中を掛けるなんてものができるのはエイナが知る限り、今の所ユーリぐらいだろう。エイナが跳躍したところには氷の粒が散っている。

「即興で考えた割にはうまくいったわね。」

その足元には氷でできた足場がある。先程はこれを蹴って空中を駆けていたのだ。氷の弾丸が作れるのなら、それを足場に移動にも使えるのではないかと考えたのだが、これが大成功した。そして、氷の足場を形成し、空中を疾走しながら岩鬼の方へ向かう。

「隙あり！疾！」

加速したまま無防備な足元を強襲するユヅキ。だが、その傷はやはり浅く、足を寸断どころか行動を阻害することすら叶わないだろう。追撃でエイナが作り出した氷弾が襲いかかる。

「くっ！やはり一撃の重みが足らぬか！ならばそれに見合う一撃を見舞うまで！」

その言葉と共に振り下ろされる剛腕を回避し、いったん距離をとる。その隙をつこうと岩鬼が迫るが、それは巨大にして長大な植物の根に阻まれる。その間にユヅキは獲物を鞘に納め、精神を集中する。己ができる至高の一撃を放つために。

『あんまり、暴れられると、ここが崩れて皆困っちゃうの。』

その植物を操るのはドライアード。壁面に手を置き、そこに種を植えこみ、自身の力を注ぎ込み発芽、成長させる。そこに込められた力は植物の生を否定するこの高温の世界でもなお育つほど。ドラ

イアードの力の一端がうかがい知れる。

その根は岩鬼を絡め捕り、その動きを停止させる。そして更にそれにとどまらず、岩鬼の体にじかに根を生やそうとする。そして、その葉は刃となり岩鬼の体に無数の傷をつける。そして、花開いた巨大な花弁には室内に張り巡らされた根が養分の代わりに吸い上げた膨大な熱量を溜め込み、まるで蜜のようにあふれさせる。そしてそれは強大な一撃として放たれる。

『お願い、私の声に応えて。私達の敵を退けて。』

そして自身が生み出し成長させた植物に指示を与える。収束した熱量の解放。それは既に砲撃と呼ぶにふさわしい一撃。以前ユーリとライザーが行った極大のビームサーベルを参考に編み出した攻撃。名づけるのならソーラービームとでも呼ぶのだろうか。とはいえ太陽光は届かない洞窟の中でのお披露目だが。

指向性を持たせられた熱量は、そのエネルギーを推進力に変え、只々目標の殲滅に向かう。その脅威に岩鬼も気付いているが、自身の動きは根に阻まれ、周りの岩を投げようにも葉の刃と氷弾に邪魔され、掴むよりも先に切断される。その結果防ぐこともかなわぬまま、直撃をもらう事になる。

『ウガアアアアア！！』

苦悶の表情を上げながら熱により岩肌が溶ける。そしてその威力によりほんの数秒だが動きが止まる。そこに、小型のドリルが数発飛来し、体に穴をあける。そしてその推進力が切れると同時にドリルが爆発し、追加ダメージを与える。

「リコちゃん！！」

『私はもう、後ろでいるだけじゃない。私だって戦える！皆がくれたこの力で！』

そこには青い装甲を纏ったリコ、その眼は断続的に光が流れ、人とは異なるものだと示している。後悔は無い、求めた力をその身に宿したのだ。その身に宿るのは戦意、ここからは自分で戦える。想いつづけた者と肩を並べ戦えるという歓喜。自身の脳内に送られる情報に従い行動を開始する。

『もう、私だけ見ているなんてできない！だから！アクセス！！』

ウイングを展開しブースターを起動させ、空中を疾走する。その眼から得られた情報を額に内蔵されたライザーが高速処理を行い、戦術を組み上げる。岩鬼を中心に旋回しながら視界に表示される複数の照準岩鬼の損傷の激しい部分に合わせる。マルチロック、そしてその軌道に小型ドリルを射出する。それは先程と同じく、ドライアードの攻撃で溶け出した部分とユヅキにより切り裂かれ、薄くなった部分を正確に穿つ。

「・・・よし！私も見てる場合じゃないよね。」

エイナも再び足場を形成し空を駆け上がる。氷を大量に生成し、周りの熱を消していく。そしてその氷を岩鬼に張り付かせ、そこに氷を纏わせ、槍と化した剣で突き崩しにかかる。リコのドリルと、ドライアードの攻撃で高温になっている所に冷気を当てられ、その強度は著しく下がっている。そのためにエイナの攻撃は苦も無く突き刺さる。

「もういっちょ、いくわよ！コパルディア！！」

憑依を解除し岩鬼の体を蹴り、距離を取る。残ったコパルディアは至近距離で己が力を全力発動させる。アイスストーム、その威力は咄嗟に腕を交差させ防いだ、岩鬼の巨大な腕を凍らせるほど。そして、その奥には刀を鞘に納めたユヅキが静かにその眼を開く、瞳に確かに極限の闘志を宿して。それは一筋の閃光となる。

「我が刃に立てぬものなし。いざ！！はあああ！！」

一種の境地と共に鞘から抜き放たれ、繰り出された斬撃は大気を切り裂き、三日月を描き岩鬼に迫る。その斬撃は凍った腕ごと岩鬼の体を苦も無く切断していく。その斬撃は居合い切り・絶。居合いの最高峰とされる神域の斬撃。それを防げるものなどユヅキが知る限り存在しない。

その一撃により岩鬼の半身は断たれ、バランスを崩す。それだけにとどまらず、洞窟の壁面を切り裂き大きな傷跡を残す。その斬撃を受けた岩鬼にいたっては、既に両腕は無く、胴も穿たれている。足には無数の切り傷が繋がり、致命的な罅を生み出している。ユヅキの攻撃は今ここに最大の成果となって表れている。

『このまま、動かないでほしいの』

洞窟に植物の根を張り、崩落を防いでいたドライアードが余った根を巧みに使い、岩鬼を打ち据える。その攻撃に岩鬼は反撃はおろか、まともな行動をすることも許されない。そしてそのために次の攻撃に対応が追い付かない。

『これでおしまい！行くよ！スクリプト・オン！！』

腕にパーツを集め腕にドリルを装備する。そしてブースターを吹かせ、一気に距離を詰める。それは青い軌跡を描き、岩鬼に飛来する。そしてその胸にドリルが刺さり、鋭く回転する。唸りを上げ前へと進む。もう立ち止まらない。自分は前へ進んで行ける。瞳に静かにやどる意志は退くことなく削り進む。そして岩鬼の体を貫き上空へと飛び立つ。そして、そのウイングを展開し、腰の砲身を眼下に岩鬼に向ける。

額のライザーが出力を最大にし電力を生成する。それを砲身に集め動力とする。生成した電流を入力する。そしてあらかじめ定められた機能を果たすために稼働する。そしてそこから放たれるのは閃光の一撃、音速を凌駕する速度で射出される弾丸。その名はレールガン、電磁投射法とも呼ばれるもの。

『ガッ？！！』

その瞬間、岩鬼は目の前の閃光しか見えず、また自分がどうなったかなど知る由も無いだろう。その威力は岩鬼を吹き飛ばす程の威力を有する。強化したライザーの出力とドリトルが持ちうる耐熱、耐衝撃装甲を応用した砲身を組み合わせ実用化した武装。砲身の熱を外部に放出するために砲身が開く、その瞬間に蒸気が上がる。

『・・・』

それを静かに見据えるリコ。機械により制御された感情は外部へ悟らせる事などは無い。その胸中には自身が手にした力の大きさとその使い道に対しての疑問が渦巻いていた。今更ながら自分が求めていたものの正体が判ったのだ。本来なら悩み苦しむような問題だ。精神的に成熟した大人でも応えあぐねるものなのだ。だが、答えは

出ないものの、沈み込む事は無い。

『（お兄ちゃんだって、すごい力を持っているのに、あんなに自然体でみんなに笑顔にしているんだから。私もお兄ちゃんみたいに強くなりたい。）』

その根源はユーリ、そして、ユーリが起こしてきたことを見てきたから。だから、どんな力だってきちんと使えば皆を笑顔にできる筈なんだと思う。幼さゆえの考え。だがそれは一つの真理にもなっている。どのような力も持ち主しだい。そこに差などなく全てはそれを扱う者の気持ちひとつ。ならば恐れるものは何もない。例え自分が間違えた道へ踏み出したとしても、きっと青年が体を張って止めてくれるから。

『うん、だから、恐れない。私はこの力を受け入れる。だから、これからもよろしくね。ライザー、ドリトル。』

その声に応えるようにひときわ高い駆動音が鳴り響く。そしてその頭に手が乗せられる。そっちに目を向けるとエイナと交代したユーリが優しい目で此方を見ていた。

『お兄ちゃん、私、頑張るから。皆がくれたこの力をきちんと使えるように精一杯頑張るから、見ててね。』

「ああ、まあ、無理しない程度にな。焦る必要はないんだ。だから、周りを頼ることも忘れるな。」

『うん！！』

「どうやら、一件落着と言った所か。」

『うまく終わって良かったの。それに、魔石もゲットしたの。』

その会話を見て顔をほころばせるユヅキとドライアード。戦利品として魔石も手に入れた。戦果としては上々だろう。そして・・・

『なんだい、もう終わっちまったのかい。なんか出遅れた見たいでかっこが付かないねえ。』

炎虎との戦闘を終わらせたコパルディアが佇んでいた。

「どうやら、全員無事らしいな。」

『まあね、私にかかったらあんなの楽勝だよ！』

ユーリの言葉に自信満々に返すコパルディア。何かいい事でもあったのか、その顔は満面の笑みになっている。

『マスター、これからもよろしく頼むよ。』

「・・・ああ、こちらこそ、な。」

目立った傷も無く、全員が無事にいる事に安堵した瞬間、ユーリとユヅキの眼がある方向を見据え、コパルディアとドライアードは獲物を握りしめる。遅れてリコのセンサーにも原因不明の存在が引っかかる。

「・・・倒しきってなったのか？コパルディア。」

『いや、完全に砕いたはずなんだけどねえ。手心を加えた覚えもな

いし、さっぱりだよ。』

「だが、この気配は先程のものと同じとは・・・」

『・・・さっきより禍々しくなってるの。』

『これってさっきの虎だよね？皆これがどうかしたの？』

リコはまだ力になれておらず、経験も無い為にデータのみに目が行っている。無理もない事だが。残りのメンバーは険しい顔を崩さずに一点を見つめる。全員が見る先には、先程コパルディアが通り、その前には自分たちが通ってきた通路。

その奥からはまだ姿こそ見えないものの、確かに先ほどの炎虎の気配がする。だが、正確には本質は限りなく似てはいるものの、それが纏う気配が全く異なっている。ユーリはそれに覚えがある。それはあの黒騎士のもの。

「気配が、変わってる。まるであの虎が黒騎士になったみたいにな。それに、これは・・・！！」

そして、今しがた倒した自身の気配に黒騎士に似た気配を纏っていた岩鬼と同質の状態。そこに思考が行きついた瞬間、振り返りストラを展開する。同時にコパルディアが氷壁を作り、ドライアードが大地に樹木を植え付け崩落に対処する。

『いきなりのドッキリかい？まったく、リクエストはしてないんだけどね！！』

『されても困るの。』

次の瞬間、燃え盛る岩石が次々と障壁に当たる。その勢いは強く、洞窟がきしみを上げる。そして背後の通路から先程倒したはずの炎虎が、なぜかどす黒く染まった姿で疾走してきた。その口から黒く染まった黒炎を放つ。それは先程コパルディアが相手取った時とは天と地の差があると言わんばかりの威力。岩石をユーリに任せ、自分は背後の黒炎に対処する。

『なにがあったかしんないけど、ちったあやるようになったじゃないか！けどね！！』

コパルディアが力を籠め、黒炎を凍らせ砕く。

『所詮アンタじゃ私には届かないって理解しなよ。理解できる頭があったらね。』

その言葉に反発するかのように唸り声を上げる。コパルディアの手には大剣が握られ、周囲には冷気が漂う。

「エイナ達が倒したはずなんだが、やはり何かあるのか。」

ユーリの眼には黒い瘴気を出しながら再生していく岩鬼の姿が映った。しかもその姿は腕が6本に増え、洞窟のマグマを吸い上げている。そして以前よりも狂気に染まり、元々感じていた黒騎士のような気配もより強まっている。だが、その奥、黒い茨のようなものがユーリの眼に映る。

「（あれは・・・やっぱり思ってたよりも状況は悪いか。育ってるって事か。苗床は、やっぱり黒騎士、いや黒騎士の中にいる――か。）」

その現状を見て事態の悪化を確信する。それと同時にこの二体を外には出せないという事を理解する。この二体は間違いなく外の存在に対し害になる。だが戦闘に入る前にユヅキに目を向ける。

「ユヅキ、お前はここから脱出しろ。」

「・・・冗談であろう？拙者の事ならば心配無用。この程度の状況、今までにも潜りぬけておるよ。」

「この洞窟が崩落してもか？ここはもう限界だ。ドライアードが抑えているからこそまだ無事だが、少なくともこの区画はもう持たねえよ。」

少なくとも自分は崩落したとしてもドリトルを召喚すればいい。リコは自分のライザーに入れて常夜の石の中に連れて行けばいい。だが、ユヅキもその中に入れるとなると、難色を示さざるを得ない。あまりこちらの情報を渡したくはない。

というより、ユヅキ自身に何か仕掛けられている可能性があるのだ。既にこちらの事がユヅキに知れている以上、白夜全体に伝わるのも時間の問題だろう。いや、既に伝わっているのかもしれない。

できる事ならここから引き返してくれた方が此方としても楽なのだが。個人的にはユヅキの事は好感を持っている。少々頑固者ではあるが、根はまっすぐで優しい。変に探り合いをするよりかはそちらの方が先を考えるといいのだ。

「・・・」

「まだやる事が有るんだろ？なら、ここは俺が決着をつけておくからお前はハンスに手紙を渡しに行け。」

そして、ユヅキは責任感が人一倍強い。ハンスの事を言えばそちらに意識が行くだろう。さて、それがどうでるか。

「・・・目の前に人に仇なす者がいるというのに逃げるようなまねはせぬ。それは我が忠義に反する。最後までこの刃を振るうのみ！その気持ちだけはありがたく頂戴しよう。」

「まったく、固い事だ。」

「生まれついての性分なのだろう。今更変えられぬよ。それに貴公のことも放っておくわけにはいかぬしな。」

ユヅキが澄んだ目で此方を見つめる。事情を知らぬ以上、これ以上の発言は無理だろう。内心溜息をつき、これからの事を考える。岩石と黒炎の波状攻撃に身動きが封じられている。炎虎は黒化の影響で炎がより強く、また連射が出来るようになっている。岩鬼は増えた腕で岩石を次々と投げ、口からは炎を放射する。

「とはいえ、どうするか。」

『ああ、そういえばマスター、これ拾ってたんだ。すっかり忘れてたよ。』

『私も拾ってたの。はいご主人様。』

「・・・ご主人様？」

「・・・深く気にするな。頼むから。」

ユヅキの追及するような目を見ないようにしつつ、コパルディアとドライアードからそれぞれ魔石を受け取る。そしてそれをリコに繋いでもらう。そして、新たな誓約が成される。その名は炎忍オロチ。炎術を使いし異界の忍びである。

光と共に現れしその姿は黒装束に赤い軽鎧を身に纏い、闇に生きる者の気配を漂わせる。

『某はオロチ、召喚に応じ参上した、汝が我が主か？』

「ああ、召喚していきなりだが、手を貸してもらってもいいか？」

オロチは周囲を見渡し状況を理解する。そして主であるユーリに目を向けると口を開く。

『それが主の命なら。』

『はっ！随分固い奴だねえ。しかも私の嫌いな火の使い手かい。』

オロチの態度に思う所があったのか、はたまた違う理由か、オロチに絡みだすコパルディア。

『・・・汝は何者だ？』

『アンタと同じマスターの召喚獣だよ！まあアンタよりかは先輩だけどね！』

『言うほど差は無いの。』

コパルディアが胸を張って言った言葉にドライアードが突っ込みを入れる。それを聞いているユーリはため息をついていた。

『まあ、そんなことはどうでもいいじゃないか。』

『自分で話振ったのに放り投げたの。』

『気にするなって事さ。とにかく！アンタもこれからはマスターと一緒に頑張るんだろう？同じマスターを持つ召喚獣同士仲良くしようって事さ！」

『さっき上下関係について話してたの。』

『過去の話さ。私は気にしない。』

何の気負いも無く言い放つ。コパルディアのその言葉にドライアードはかぶりを振る。ちなみにこの会話の間、コパルディアもドライアードも黙々と氷壁と根を張り続けている。そしてその一連の会話を見ていたオロチは静かに口を開く。

『・・・私は主の命に従うだけだ。それ以外に必要なことは何もない。』

「（なんで俺の召喚獣って良くも悪くも我が強いのばっかりなんだ？）」

『えっ？活動限界？！』

ユーリが自分の召喚獣事情に首をひねる。そしてユーリもストラ

を乱す事は無い。無駄に高性能な能力を披露している中、突然リコの姿が元に戻る。元々完成していた訳では無く、持久力の点においては限定された時間においてのみの運用を可能としていたのだ。戦闘後はアイドリングモードに移行していたがやはり限界が来たらしい。

「ど、どうしよう。」

「どうしようも何も、エイナと一緒にいるしかないな。そのままだと熱さだけで参っちまうからな。」

無論、融機人化もドリトルとライザーの送還と同時に解かれている。今のリコはいつもの状態と全く同じ、つまりこの洞窟の熱気で再び体力が削られる状況にあるという事。

「で、でも。」

「きちんと自分の状態も把握しとけ。少なくとも今はな。」

「・・・うん。」

「よし。」

ライザーを召喚しリコを収納、常夜の石の中に転送する。それを済ますと改めて敵を見る。

「とは言え、いつまでもこのままでいてもしょうがない。攻めるか。」

「無論。」

『そう来ないとねえ。』

『主の思うがままに。』

『あんまり暴れると危ないの。だから、できるだけ早く終わらせる必要があるの。』

「・・・よし、行くぞ！！」

その声と共に氷壁から氷柱が生み出され炎虎に向かって飛来する。突然の攻撃に跳躍して躱す。その足を鎖鎌が捕捉する。

『ギャ？！』

『・・・もらった。』

『はあ、なんでアンタとなんだか。』

オロチの鎖鎌に足を掴まれた炎虎はそのまま壁にたたきつけられる。それを逃さないかのようにコパルディアが大地ごと凍らせる。肩をすくめていたコパルディアは剣を握りしめ疾走する。

『はん！また私に負けに来たってのかい！！分をわきまえなっての！！』

氷ごと破砕させようと剣を振りかぶる。その時、黒い炎が凍っているはずの部分から染み出し、コパルディアに襲いかかる。

『ちっ！ただの炎とは違うって事かい！けど！！私の氷だってただ

の氷ってわけじゃ！！』

その言葉と共に黒炎を氷が包み込み握りつぶす。蒸発するかのような音を立てて消える炎。

『ないんだよ！！』

剣を炎虎に突き立てようと迫るコパルディア。だが、その時天井から落石が降ってくる。もう洞窟が限界を迎えている。少なくともこの区画はもうだめだろう。

『さすがに崩れられたらたまんないねえ！！』

コパルディアが壁面に手を置き、氷で補強する。氷壁で壁を固定し、氷柱で支える。だがその間に炎虎が強力になった炎を撒き散らし脱出する。

『・・・逃がしはしない。』

それを脅威の速さで追随するオロチ。それを察した炎虎が口から火炎弾を放ち、オロチを打ち落とさんとする。

『・・・ぬるい。』

だがその火炎弾がオロチに届く事は無い。オロチ自身が生み出した炎が火炎弾を焼き尽くす。炎が炎を焼き尽くす矛盾。それほどの差がこの両者には存在するのだ。

『・・・失せろ。』

『グオオォオオ！！』

言葉少なに戦意を表すオロチ。炎を鉤爪の形状に変え、炎で構成された炎虎を切り裂く。その傷からマグマを流しながら苦悶の表情をする炎虎。だが仕留めるには至らず、黒炎を撒き散らし後退する。そして、その炎は洞窟にも当たる。

『ちっ、無茶苦茶してくれるね！！おい、アンタも少しは手伝えっての！！アンタばっか楽しむな！！』

『・・・』

言葉を返さず、炎を操り、壁面を溶かし、穴をふさぎ、壁を接合する。そして、その合間にコパルディアが氷柱を飛ばす。それを躱し黒炎で洞窟を破壊していく炎虎、どうやら洞窟の破壊に切り替えたらしい。

『そうは、させるかっての！！』

コパルディアが能力を本格的に使い、洞窟ごと凍らせる。それはエイナのコパルディアも使ったアイスストーム、だがその出力は桁が違う。青に染まる洞窟。既にそこは氷魔の領域。どこに逃げようとも逃げ場はない。この中では全てが停止する。炎も、岩も、原子振動すらも、そして炎虎すらも。この場を支配するは氷の女王。

『まったく、私がしたいのは戦闘で合って、殲滅じゃないんだけどね。まあ、これをさせた事だけは褒めとくよ。』

既に物言わぬ炎虎に賞賛の言葉をかけ、手のひらに冷気を収束する。だがその前に隣で灼熱がはじける。それを行ったのはオロチ。

全てが制止する氷の世界に置いて、止まる事無く突き進む巨大な熱線。プラズマ砲。本来なら静止するはずのそれを直進させるほどの力、ベクトルこそ違えどそれは、コパルディアと同格の能力だと示している。その技の名は轟炎陣。

『ちょ！』

『・・・無駄口を叩くな。』

その洞窟を埋め尽くすような砲撃により、炎虎は影も形も残さず蒸発する。弱い炎はより強い炎に焼き尽くされる。それをまざまざと見せつけた結果だ。不満が残るのはコパルディアだ。既に仕留めていたも同然だったのに止めを奪われたのだ。

『別にあんなことしなくても良かったんだけど。』

『・・・そう言って逃がしたのだろう？』

『・・・へえ、言ってくれるじゃないか、新入り。』

『序列など関係ない。誰が一番主のために動けるかだ。』

『まったく、可愛くない女だね！』

炎虎を倒したのはいいが、それよりもはるかに険悪な殺気が撒き散らされる。属性が示す通り、相性は悪いらしい。氷魔の名を冠する悪魔に炎忍と呼ばれしくノ一オロチ。この二人が歩み寄るのはいつの日になる事か。

大岩をストラで弾き飛ばし、岩鬼に接近する。大剣にストラを纏わせ、飛んでくる炎を切り裂く。

「洞窟ごと崩すつもりか。本当に時間はかけられねえな。」

「元よりそう長くは持つまい。最大火力を持って臨むのみ！！」

「・・・それはいいが、お前が崩しそうで心配になって来たよ。」

「失敬な！加減は心得ておるよ。」

軽口をたたきながらお互いに炎と岩を切り捨てる。そして剣を振るごとに距離を詰め、岩鬼に近寄っていく。

『もう、これ以上壊してほしくないの。』

ドライアードが植物の根を張り巡らし、岩鬼の動きを封じる。既にそれは蜘蛛の巣にも見えるほどである。そして壁面の根から花が咲き一面の花畑を生み出す。その養分は岩鬼から奪われている。強まる束縛と反比例するかのように弱まる自身。そして、岩鬼は死神がその身に鎌を振りかざす姿をおぼろげながら幻視する。

「これで、終幕とさせてもらう！！」

気を練り込んだ斬撃により両足を切り払う。だが、一撃では切断には届かない。だが、返しの刃で切り替えし、そこから連撃を繰り出す。一撃ごとに深く鋭くなる斬撃。それは最後には岩鬼の両足を

両断することを実現する。

「ユーリ殿！」

「あんま手間かけさせてんじゃねえよ。」

ストラを大剣に込め、光の刃へと昇華する。ストラブレードとでも呼べる蒼の光剣はその長さを増し、輝きを強める。

「これで、終われ！」

最上段から振り下ろす大斬撃。それは再生した岩鬼のより強固になった岩の鎧を軽々と切り裂く。次の瞬間には縦に両断された岩鬼が力を完全に失ったのかボロボロと崩れ去る。その時黒い茨が地面の裂け目に吸い込まれるように消えた。だがそれに気付いた者はいない。

「さて、あっちも終わったみたいだな。それじゃ急いでここから出るか。」

コパルディアとオロチとも合流し、後はここから脱出するのみ。だが、このフロアはドライアードの根とコパルディアの氷壁によって補強され、洞窟の壁面そのものもオロチの炎により作り直されているために言うほど危険という事は無い。

召喚獣達を送還し、ユーリとユヅキは洞窟の出口へと駆け出す。既にここに残る理由は無い。だが、外に出る直前に壁が崩れマグマが噴き出す。そのマグマはユーリは勿論、先行していたユヅキへも降りかかる。既に回避に移っているユヅキだが、既にそのマグマを完全に回避する距離は無い。

「ちっ！」

そこにストラを纏ったユーリがユヅキを突き飛ばし洞窟の外に押し出す。ユーリはそのままマグマにのまれ姿を消す。その後にはボコボコと音を立てるマグマが残る。その奥にはうっすらと縛り付けるような黒い茨が見えた、そして心なしか黒く染まったマグマは全てを飲み込まんと動き出す。

「ユーリ殿！！」

ユヅキの悲痛な叫びが木霊する、その直後、マグマが突如動きを止め切り裂かれる。そこからはマグマとは違う赤い炎が燃え上がる。その炎はマグマを焼き、その中心を照らす。そこには赤い燐光を放つユーリがいた。

「ふう、さすがに冷や汗かいたな。」

憑依召喚オロチ、その力は炎熱系の掌握、忍術、忍具の使用などが可能になる。そしてその支配はマグマでも例外ではない。自身が支配できる物に傷つけられる者はいない。

「ユーリ殿、心配したぞ・・・済まぬな、拙者が不甲斐無いばかりに。」

「気に病む必要はないさ。まあ、流石に肝を冷やしたが、な。」

「だが！」

「それなら貸し一って事にしとこう。なんか困った事が有ったら頼

らせてもらうよ。それでいいだろう？」

「む。」

「まあ、それで納得しとくんだな。これ以上は譲る気はない。」

「・・・承知した。ならばその時が来れば、我が全身全霊を持って事に挑もう。」

「・・・だからそういう所が固いんだって。」

そう言いお互いに表情を緩める。そしてユヅキから手紙が手渡される。

「忘れる所であった。この手紙、ハンス殿へ貴公が渡しておいてはもらえぬか？」

そう言われ、手紙に目を向けるユーリ。

「そのくらい自分でいけばいいだろう。」

「いや、流石に女の拙者から恋、文などを渡されてはハンス殿も心苦しいだろう。」

「だからなぜ慌てる・・・そもそも心苦しいならユヅキに頼まないだろうに。大丈夫だと思うがな。」

「そう言ってくれるな。拙者もこう言った事には疎いのだ。書物程度でしか読んだ事は無いしな。」

「書物って・・・はあ、まあいい、受け取っとくよ。」

「助かる。拙者にはまだやる事が有るのでな。ここで別れるとしよう。」

ため息をつきながら手紙を受け取る。それを道具袋に入れながらユーリはユヅキの背に声をかける。

「また会えるといいな。」

「ああ、拙者も再開を願っているよ。もし、この先旅先を決めかねているのならばアレスパの町に行くといい。そこならば白夜の事も自ずと判ろう。」

「アレスパ、か。どのみち用があるから、いずれ立ち寄るだろうな。」

「そうか、それならばいずれ会う事になるだろう。では、これにて、御免！」

そう言ってユヅキと別れる。残ったユーリは鬼岩洞に目を向け、目を細める。

「（マグマはオロチの憑依で防いだが、その前に俺に入ってきた茨がどんな影響を出すか、だな。）」

あの瞬間、直ぐにオロチを召喚したのではなく、最初はストラでマグマを弾きながら脱出をしようとしていたのだ。だがそのストラを食い破るかのように茨がユーリの体に突き刺さり、体内に侵入したのだ。即座にストラで傷口を防ぐのに回し、マグマを防ぐために

オロチを呼んだのだ。

「（痛みこそないが、少しふらつくな。これがどうでるか・・・なんにせよ碌なことじゃないな。）」

そしてその考えをしているうちに一つの結論が浮かぶ。

「（あの茨が狙ってたのは俺、か？いや、マグマはユヅキの方にも降りかかっていった。俺と決めるのは早計だな。）」

なんにせよ推測にすぎない。今は体を休める事を優先する。エイナに呼びかけ交替する。茨がユーリの体に侵入したのは当事者であるユーリしか知らない。幸か不幸かエイナ達はマグマの方に気がとられ、茨を見逃していた。

「まったく最後まで危なっかしい洞窟だったわね。」

「本当だね。しかもすごく熱いし。」

一緒に出てきたリコもエイナの言葉を肯定する。

「でも、私も戦えるようになったんだし、もうお姉ちゃんより強くなってたりして？」

「そ、そんなことないんだから！まだまだ私の方が上なんだから！」

「あはは、冗談だよ！」

笑顔で話す二人、そこには先ほどまでの戦闘を感じさせるものは無い。だが、常夜の石の中、ただ一人ユーリは険しい顔で己が腕を

見る。その腕は黒く染まり茨を連想させる痣が浮かんでいた。

「ふう、やっぱ俺がラスボスとかじゃないだろうな。これからどうすっかな。」

それは確実な変化、真剣な顔でそれを見つめるユーリ、その先に導き出されるは黒い未来。外で笑顔を浮かべている二人には言えない。だが悪化の一途をたどる状況を防ぐ事も出来ない。常夜の石の夜空はただ光を放ち佇むだけ。星は何も喋らない。何故かそれが無性に悲しく思えた。

洞窟揺らす激闘　悪意持つ茨（後書き）

とりあえず洞窟終了。区切りよくしたかったので戦闘を最後まで書いてたらこんなになりました。

あと書いてから気付いたのですが、リコが某自由みたいになってる。腰にレールガン、マルチロック、ウイング。まあ、流石にドリルはあれにないけど。何故書いてる最中に気付かなかったのか。最初考えてたのは違うものだったのですが。

そして、いまいちエイナが活躍しきれてないような気がする。気のせい？

依頼達成　騒ぐ恋心とすれ違い（前書き）

さてさて出来上がりました。今回は結構ほのぼのしてるかな？多分。色々設定を考え付いてもそれを使えるようになるのはもっと後の方。そしてその頃になるときっと忘れている。なんてもったいない。まあ、そういうのが作者です。

時間が取れないので突発的にしかネタが出てこない。しかも細かいネタは書いてる最中でないと浮かびもしない。書く以前に思いついたものは全て頭から消え失せる、メモは取る気しない。そして続きが思い浮かばない。なんだろうとことん駄目な作者だな。

まあ、そんな作者が作った作品ですが、読んでくださっている方々には感謝するしかないです。応援してくださっている方たちが満足するようこれからもがんばっていく所存です。

依頼達成　騒ぐ恋心とすれ違い

広大な草原には多くの旅人が歩き、その足跡を刻んで行ったのだろう。その大地は固く、道となって多くの者が迷わぬようにはっきりとした目印となって残る。その道を歩く旅人達が草原の先の村へと足を進める。

人を拒む熱気と、全てを飲み込むマグマに満たされた洞窟、鬼岩洞から目的を達成し、村へと帰還しようとしているエイナとリコ。二人は雑談を交えながら前へと進む。その前にはもうすぐ村が見えてくるだろう。道中モンスターの襲撃も幾度となくあったが、エイナと融機人化し、装甲を纏ったリコの前ではそう危険なものでは無い。といっても決して油断していいものでもないが。

「リコちゃん、もう大分その姿に慣れてきたみたいね。」

『うん、結構問題なく動かせるようになってきたよ。』

エイナの質問に頷くリコ。もう何度目かになる戦闘で、この能力にそれなりの慣れが見られるようになってきた。とは言っても全開駆動はせずに、通常駆動においてのみだが。それでもそこいらのモンスターに後れを取らずに、戦闘ができる程度には力を使いこなせるようになってきた。

「でも、魔力結構使うんでしょ？その姿。」

『ううん。魔力は使ってないよ。ライザーとドリトルのエネルギーで維持してるから。でも今のままだと一回１０分が限界だけど。』

送還を行いながらリコが答える。

「最初はびっくりしたんだけどね。」

「それはそうよね。いきなりあんなふうに変わっちゃったら、誰でも驚くわよ。」

表で話されている会話を若干睡魔によって鈍った頭で聞きながら、ユーリはリコの武装を作った経緯を振り返る。その手は自分が休息を取るためにベッドのシーツを綺麗に敷きながら。

「（あれは今までの経験を集めて作りだした装備品みたいなものだしな。）」

当然の事だが、先程の姿は召喚獣を装備して戦うというコンセプトでユーリが立案、計画し、ライザーとドライアードがそれを補う形で手伝い、現状に繋がったものである。この考えは無論、今までに知っている本や、テレビなどで見た物が元になっているが、そのきっかけはユーリ自身が行った融合召喚や憑依召喚にある。

「（最初は、この体に宿っている妙な知識を理解して何かに活かせないかって考えたんだよな、確か。）」

元々、召喚術とひとくくりにされてはいるが憑依と融合は明らかに異なる。憑依は主に召喚獣の意識や力のみを切り離して呼び出し、それを自身を触媒にして行使することを可能とする。これが憑依召

喚が高位の術式とされる由縁だが、融合は召喚獣そのものを呼び出す。その点では普通の召喚術と違いは無い。だが、融合はここから自身と召喚獣を重ね合わせ、新たな存在として昇華させた存在になるという事。召喚術からさらにもう一歩進化した、又は従来の法則を無視した異質な術式ともとれる。

「（それでも融合ができる以上、それを応用する手段もある筈だと思って、色々考えてたんだっけか。）」

融合を行うと、融合前の能力や特性を受け継いだまま、さらなる境地に辿り着くことも可能。融合した術者と憑依を行った術者で差があるのはそのためである。実際、憑依の度合いを引き上げても、最終的には融合に辿り着く。これが先ほど述べた進化したといった意味でもある。例えとしてあげるのなら、憑依を自身の力を数倍に引き上げる倍加とする、そして融合は数乗に引き上げる累乗と呼ばれる数式を使うと思えばいい。融合はさらにプラスアルファが存在するが。

「（これがヒントになってたんだよな。今思うと。）」

これが指し示すものは単純に言えば、質の圧倒的な引き上げ。どちらも召喚獣と言う戦力を一つ減らして自分の力を底上げしているのは同じである。だが、そこにいたるプロセスとその恩恵には絶対的な差があると言ってもいい。そしてどちらにせよ、本来ならそれに見合うリスクもある。

どちらも失敗すれば術者ないし、召喚獣にその被害が行くのは同じ。これは召喚術全般に言える事だが、この二つは失敗と死がイコールの関係で結ばれるものだと言っても過言でもない。唯の召喚術が暴走しても召喚獣の暴走や爆発などになるが、対処の仕方によっ

ては一命を繋ぎとめる事は可能と言える。だがこちらはどちらも術者を媒体にしているのだ。規模の差はあれど、その対象となった者の結末は悲惨なものとなるだろう。

「（だからこそ、そのリスクを失くす、最低でもギリギリまで下げる必要があった。）」

それを考え、リスクを無視とまではいかなくとも、できる限り緩和したままで憑依以上の結果を求めたものがリコの纏った装甲になる。これは憑依と融合を織り交ぜたうえで更にいじくったものである。元々リコの魔力はそう多くなく、憑依は常時魔力を消費する事になるので、実用には向かない。融合は論外。要するに召喚獣を今までの方法で運用することになるのだが、それではリコ本人の強化にはならない。

「（だったら、維持する力を別に用意して、火力も新しく作り上げるまで。）」

昔から人はその非力さを武器や防具で武装して補っていた。これは中世の騎士や日本で言う武士などを見れば判りやすいだろう。つまり召喚獣をそういったものと思えば、この考えには自ずと辿り着くだろう。

「（後はリコの召喚獣にそういう役割を与えるだけになる。機界の召喚獣が呼べるのは僥倖だったな。）」

そして思いついたら後は行動に移すだけ。幸いにも、リコが召喚可能な者達には機械の体を持った者たちがいる。これならば目的に沿った改造さえ施しさえすれば思った通りの状態に持っていけるだろう。無論これで終わるつもりもないが。これからもユーリと何名

かによるリコの召喚獣改造計画は進む。次はだれになるのやら。

そんなユーリの考えなど知る由も無く、話を続けているエイナとリコ。

「それにしても、ユーリってこんな事も考え付いちゃうんだね。」

「本当、どこからこんな事考えてくるのかな？」

「でも、ユーリだったら何でもできそうな気がするけどね。」

「うん、私もそう思う。」

二人の中でユーリは完璧超人か何かにされているらしい。本人はリコの武装を作り出した過程を振り返った後、茨の浸食による疲労で眠りに入っており、この話は聞いていない。もし聞いていれば溜息をつくか、目をそらすだろう。あくまで自分にできる事をやって、その結果がうまい具合にいっているだけであって、本人はそれを如何こうとは考えていない。間違いなく過大評価甚だしいと言うだろう。

「よし、もうすぐ村につくだろうし、早く手紙をハンスさんに届けよっか？」

「うん、きっと喜んでくれるよ！」

そんな話をしていた二人の先に、モンスターの群れが見える。数

は相変わらず２０匹と無駄に多い。そのモンスター達はまだエイナ達の事に気付いてはいないが、このまま進むのであれば、気付かれるのも時間の問題だろう。群れにいち早く気付いたエイナが剣を抜き放ち、戦闘態勢に入る。遅れてリコも気付き、ライザーとドリトルを召喚する。

「それじゃ、さっさとこいつらを倒して先へ進まないとね。」

「うん！」

それぞれ剣とナイフを構え、モンスターの群れに突っ込む。それをライザーとドリトルがサポートする。それに気付いたモンスター達が、戦闘態勢に入る前にエイナがコパルディアを召喚、アイスストームで正面の敵を凍結させる。その氷像をドリトルが唸りを上げて破壊していく。その速攻により、モンスターに乱れが現れる。その動揺を逃すほど、彼女らは甘くは無い。

「まだまだ行くよ！」

その後ろからリコがナイフを投げ、戸惑っているモンスターの体へ突き立てる。ダメージは少ないものの、これで自分の方へ数体のモンスターが押し寄せる。そしてある地点まで来た時、頭上から、何かが降ってきてモンスターが押しつぶされる。それはライザーのビッグボスプレス。今まで行ってきた戦術である。

「そっちばっかり注意してると、危ないわ、よ！」

その轟音に気を取られたモンスター達を、炎忍オロチを憑依させたエイナが、剣に炎を纏わせ切り裂いていく。そして切り裂かれたモンスターは切り口から発生した業火に身を焼かれる。そして離れ

た相手には火炎弾を撃ち、攻撃する。そしてその背後をコパルディアが守る。その連携はモンスターを蹴散らす事でそのコンビネーションの高さを思い知らせる。

そしてリコの方はと言うと、ガゼールが数頭、横並びになって突進してきている。小柄で攻撃力に劣るために、確実に潰しに来たのだろう。だが、その予想は裏切られる。モンスター達にとっては最悪の形で。

「よし、行くよ！ライザー、ドリトル！アクセス！」

リコの呼び声に応え、ライザーとドリトルが装甲となる部分をパージする。その装甲はリコに装着され、そしてライザーは電子頭脳として、ドリトルは武装の制御、装甲の維持エネルギーを捻出する機関として、自身の姿をそれに適する姿へと変える。そして、装甲からの接続を始め、リコの体が変質する。半人半機、融機人へと。

『さあ、一気に行くよ。スクリプト・オン！』

その掛け声はキーワードとなり、自身の武装を展開する。肩部が開き、小型ドリルが射出される。その狙いは寸分たがわず、モンスターへと届く。それはモンスターの体を抉り、体の中に入り込むと、次の瞬間爆発する。さすがにこれには耐えられなかったのか。その命を散らしていく。

『まだまだ！』

そう言って今度は、腰に取り付けられた砲身を稼働させ、モンスターに向かって照準を合わせる。同時に額のライザーが出力を上げ、エネルギーを捻出する。そのエネルギーにより、砲身に電流が迸る。

次の瞬間、秘められたエネルギーが理論に従い、弾丸を音速の壁を超える魔砲へと変える。

『終わらないよ！！』

発射とほぼ同時に着弾する。広がる閃光、撃ちだされた何かに気付く前にその身に突き抜ける。そして、そこにいたモンスターは生み出された余波で多大なダメージを受けている。直撃したモンスターは既に見当たらない。辺りには摩擦熱で焦げたようなにおいと、抉れた地面、大気中に残された放電現象によって、何が起こったかを予測できるのみとなっている。

「あなたで最後！」

一方エイナの方も最後のモンスターに斬撃をくらわせ、絶命させる。そして、その切り口には火が纏わりつき、モンスターへ追い打ちをかける。返しの刃で怯んだモンスターを仕留める。これで此方に居たモンスターは全滅したことになる。後はリコの方にいる数匹が残っているだけとなっている。だがそれもすぐに後を追う事となる。

『纏めて、撃ちぬくから！！』

リコの視界に多数の照準が映る。それを全てモンスターへとセットする。そして、肩部、胸部、そして腕に仕込まれた小型ドリルがそれに従い、射出される。それは満身創痍のモンスターに命中し、大きな爆音を響かせる。そして、その煙が張れたとき、そこには焼けた荒野が広がり、その戦闘の傷跡をまざまざと見せつけていた。

『・・・よし、これで終わり。』

センサーを確認し、近くにはもうモンスターがいないことを確認すると、召喚獣を送還し、元に戻る。

「・・・ふう。」

「お疲れ、リコちゃん。」

その声に振り向くとエイナが此方へ歩いてきていた。

「お姉ちゃん、そっちも終わったの？」

「ええ、リコちゃんの御蔭でだいぶ助かったわよ。」

そう言ってリコの頭を撫でるエイナ。それを聞いて嬉しそうに笑うリコ。傍から見れば仲の良い姉妹か何かに見えるだろう。

「でも、結構すごい事になったわね。」

「あ、あはは。」

二人の目の前には草が焼け、大地がえぐれた無残な姿。しかも実際はこの惨状を戦闘の度にリコが作り出しているのだ。今更とはいえ、なんとなく居た堪れない気持ちにさせられる。

「ま、まあ、早く村に戻ろうか。」

「そ、そうだね。」

そういった二人は、とりあえず村へと歩を進める。俗に現実逃避

と言う。無論近接武器などもあるが、リコは遠距離で戦っていたために、どうしても距離を保って戦いがちになっている。その結果、最大火力での殲滅に繋がっている。これは一人ならともかく、仲間がいる状況だと色々と不味い。自分の攻撃に巻き込む可能性が高いのだ。

それはエイナも気付いているし、リコにもきちんと言ってはあるのだが、今の所、乱戦などにはなっていないので、この方法を取っている。とはいえ、先延ばしにしても仕方ないので、近いうちに近接戦闘について教えようとエイナは思っている。そしてエイナは一度立ち止まり、先ほどまで戦っていた場所を見つめる。

「それに、毎回地形を破壊するのはちょっとね。」

そのエイナの言葉は、誰にも聞かれる事も無く、風に乗って消えていった。

やがて、ツェーゼの村についたエイナとリコは、ハンスの所に向かう。頼まれていた手紙とユヅキの無事を知らせるために。そして、村に入るころにはユーリも目をさまし、外の様子を見ていた。

「あっ！ハンスさん！！」

直ぐにリコがハンスに気付き声を上げる。その声で向こうもこちらに気付いたのか目を向ける。

「あっリコちゃん、久しぶりだね。あれ、君が彼女と一緒にいるってことは、もしかしてリコちゃんも奇岩洞に行ったのかい？」

何気なくハンスが聞いたが、勿論そんなことないと思っている。さすがにリコの様な子供に行けるような所ではない事くらいわかっている。だが返ってきた言葉に度肝を抜かれる。

「うん、私も行ってきたんだ。あの洞窟本当に熱いね。」

「えっと・・・本当に行って来たの？」

「そうだよ。」

「本当に？」

「本当だってば！」

その言葉を直ぐには信じられずに、何度も確認を取り、視線をエイナに向ける。そして確かに頷くエイナ。それでようやく今リコが行った事が真実であると理解してはハンスは驚愕に顔を染める。

「で、でもあそこはリコちゃんにはきついと思うんだけど。」

「うん、私も最後までいられなかった。でも、私だって頑張ってたんだよ！」

小さな体を精一杯動かして、頑張ったという事をアピールするリコ。その姿は、傍から見ていると非常に頬笑ましく見える。それを見てハンスも笑顔を浮かべながらリコを褒める。

「そ、そうか。頑張ったんだね。」

「うん！」

その姿にこれ以上掛ける言葉が無かったのか、曖昧に褒めて終わらせるハンス。そんな感情に気付かず、純粋に褒められたと思い、顔を綻ばせるリコ。致命的に開いた温度差がそこにはあった。それに気付いたエイナが話題を変えるために依頼されたものを取り出す。

「そ、それより！これでしょ？ハンスが落としたっていう手紙。」

「え？ああ、うん。これだよ！有難う。まさか本当に取って来てくれるなんて。」

「これくらい、私達なら楽勝よ！ね？リコちゃん！」

「うん！」

ハンスに手紙を渡す。よほど嬉しいのか。その顔には笑みが浮かんでいる。しかし直ぐに何か気づいたのか、少しためらいがちに口を開く。

「そ、それで、中身は？」

「勿論見てないわよ。」

「そっかよかった。」

やはり、他の人に見られるのは嫌なのか。エイナの返事を聞くと安堵していた。やはり他人に見られるのは恥ずかしいらしい。まあ、

妥当だが。

「それにユヅキさんも無事だったわよ。」

「え？ユヅキ？ビャクヤさんじゃなくて？」

名前が違う事に不思議そうに聞き返してくるハンス。それを聞いてエイナが注意するように言う。

「もう！それでこっちも混乱したんだからね！」

「あれ～おかしいな。ビャクヤって名前で合ってたと思ったんだけど。」

確かにビャクヤと言う言葉はユヅキに関係ある言葉であるため、間違いと言う訳では無い。ただ、それを名前と勘違いしたハンスに非が無いわけではないが。

「ま、まあ、とりあえずみんな無事だったんだし、よかったよ。」

「なんか誤魔化そうとしてない？」

「まあまあ、本当にみんな無事だったんだし。それ位で許してあげようよ。」

ハンスをジト目で睨むエイナを宥めるリコ。とりあえず、言う事は言ったので気は済んだのか。視線を緩めるエイナ。

「はあ、そうね。いつまでも言ったって仕方ないし、この辺にしとくね。」

「あはは、迷惑かけたみたいでごめんね。それはそれとしてそのユヅキさんは？」

「洞窟を出た後、別れたわよ。何か用事があるって言ってたから。」

「そっか、きちんとお礼も言って無いのにな。」

「なら今度会えたらきちんと言わないとね。」

「うん、そうだね。」

エイナの言葉を聞いて、もし次会えたら必ず礼をしようと心の中で誓うハンス。

「そういえば何を取りに行ってたの？」

リコがふと思いついたのか、ハンスに質問する。

「ああ、それはこれだよ。」

そう言って懐から取り出したのはゴルフボール程の大きさをした赤い宝石。それは光に当たり、綺羅綺羅と輝いていた。

「わあ！綺麗！！」

「うん、これは幸運のお守りなんだ。これを取るために洞窟に入ったんだけど、目的の宝石は何とか見つけたんだけど、肝心の手紙を落としてしまって。」

「ねえ、思ったんだけど・・・」

その時何かに気付いたのか、リコが真剣な顔でハンスに顔を向け口を開く。

「書き直したらよかったんじゃないかな？もし誰か拾っても持っていかないだろうし。」

「あ・・・」

「・・・」

その言葉を言った瞬間、その場には沈黙が広がった。ちなみに中で聞いているユーリはうんうんと頷いている。ユヅキと会うために頼みを受けたのだが、それがないのなら、もう一回書くように促すつもりだったのだ。原作はその意見が無いのでユーリも不思議に思っていたのだ。これって徒労にならないか？と疑問に思っても仕方ないだろう。

「で、でもやっぱり誰かに拾われるのも嫌だし。やっぱり取りに行ってたと思う。」

「ふーん。それならもう何も言わないけど。」

「そ、それにしても二人ともすごいね。女の子なのにあんなところに行って無事に帰ってくるんだから。君たちといい、ユヅキさんといい、本当にすごいな。僕なんて男なのにこんな有様で、恥ずかしくなって来るよ。意気地もないし、告白する勇気も無いなんて。」

その言葉を聞いたエイナは、若干眉を吊り上げてハンスに食って

掛かる。それを見てリコは驚く。

「ちょっとちょっと！私達やユヅキさん間で洞窟に行かせておいて、その手紙を使わずに置いておくつもり？」

「え？」

「エイナお姉ちゃん？！」

急に詰め寄ってきたエイナに対応できずに、戸惑った視線を向けるハンス。

「え、じゃないでしょう！！せっかく書いたんだよ！ハンスが想いをこめて！それをそのままにしておく気？」

「けど。」

「だって、それを伝える事で、あなたの気持ちが相手に伝わるかもしれないんだよ。やらずに諦めるなんてもったいないよ。」

「そう、なのかな。」

「そうだよ！告白されて、好きって言われて喜ばない女の子なんていないんだから！！自分の気持ちはきちんと言葉にして伝えないと、何時まで経っても今のままだよ！！」

「・・・」

エイナが勢いよく言った内容を聞いて、何か心に響いたのか、その眼に力が宿っていく。

「それに君は、意気地なしなんかじゃ無いじゃない！その人のために危険な目に合ってまで、怪我してまでして宝石を取って来たんでしょう？十分勇気あるよ。」

「そう、かな。」

「そうだよ！！」

「・・・そっか、ありがとう。何か吹っ切れた気がするよ。すごく清々しい気分だよ。うん、何かやる気がわいて来たよ！そうだよね、何事も言って見ないと判らないもんね！」

「そうそう、その意気だよ！」

「そうだよね！よ～し、やるぞー！！告白だ！！」

「うんうん。」

すっかりエイナに乗せられやる気を持ったハンス。ここで終わっていればまだきれいに終わっていただろう。だが、ここでユーリ以外の面々が、予想もしていないであろう状況に遭遇する。テンションが振り切ったハンスが驚きの一言を口にする。それは・・・

「せっかく君がこの告白は絶対に成功するって保証してくれたんだ！！怖いものなんて何もないぞ！！」

「え・・・ちょっと。私そこまでは言って・・・」

既に告白が成功する前提で話が進んでいる。それに気付いたとき

はもう遅い。エイナは口を開けたまま呆然としており、リコは目を見開いて驚いている。

「よ～しこういう時はやっぱりめでたいんだから祝わないと！今日は御馳走だ！！腕によりをかけて作るぞ！！」

「あの・・・」

「・・・私、知～らない。」

「さあ！君もぜひ僕の恋愛の成功を祝ってくれ！！」

「え、いやあの。」

「そうだよ！それがいい！！遠慮なんてしないで！！何しろ君は僕の背中を押して恋愛を成功させてくれた大恩人なんだから！！さぁ！奥に座って待っててよ！」

「ち、ちょっと～！！」

既に周りの声など耳に入らないハンスに、エイナの抗議の声は全く届かない。成すが儘に家に入れられ、椅子に座らされる。無論リコもである。

「・・・どうするの。お姉ちゃん。これ失敗したらハンスさん、もしかしたら首つるんじゃ・・・」

「そ、そんな事は、ない、わよ・・・きっと。」

「私、知らないよ。お姉ちゃんがいきなりやったんだから。」

「う・・・」

リコに突っ込まれ言葉を失うエイナ。最初は自分たちの頑張りが無駄になりそうだったから口を挿んだのだ。それに想っている人がいる自分からすれば、その行為はとても勇気がいると判っているから。だから背中を押したくなったのだ。まさかこんなことになるとは全く思ってなかったが。予想外にも程がある。

「どうしよう。」

「判んないよ、お兄ちゃんに聞いてみたら？」

「ユーリに？・・・うん、そうだね。ユーリなら、なにかいい事考えてくれそうだし。少し聞いてみる。」

そして、常夜の石の中では、表で意気消沈しているエイナを見ながら、これから来るであろうエイナの前で迂闊な発言には注意しようと、少し思考して話す言葉を用意しておく。そして、その手には手製の湯呑み。中身は緑茶である。

「まあ、旅の事もあるし、そんなに深く関わりもせずに進んでいくだろうな。こっちにできるのは進展を聞いていく位だろうしな。」

どのみち、自分たちには目的がある。ならば関わる時間などはそう長くはないだろうと予測してはいる。そのためにどうであれ、エ

イナの手伝いも中途半端に終わるだろう。できる事ならエイナが囃し立てる前に止めればよかったのだが、今更考えても仕方がない。

「まあ、そういう事は言わない方がいいのかな。原作でも強引に言ってたし、それにもう過ぎた事を言っても仕方ないか。予想外な事が有ったのなら、その都度対処していくだけだし、な。」

一人緑茶を呑みながら思う。

「・・・とは言っても、やっぱり急いで欲しいと言えば、急いでほしいんだがな。」

そう言って腕に目をやる。その服の下には変わらず黒く変色した腕と茨の痣がある。今はまだ小さく、目立ちこそしないが、これを見つけた頃と比べると、僅かだがその範囲は広がっている。それは染みの様に広がっていく。この体を黒く染めあげていく。その様はまるで・・・

「っと悪い方に考えてても仕方ないか。どうにか治す方法か止める方法を探さないと、最悪でも抑える方法は考えないとな。」

現状、自分の一番優先されている問題は腕の茨の痣、どうにかしないとこのまま進めば、もしかするとエイナ達に刃を振るう事になるかもしれない。流石にそれはいただけない。如何にかしてそれは阻止するようにしないと、自分が原因で彼女らを泣かす気はない。

「ったく、やれやれだ。」

そう言って心無し意気消沈していると、エイナが常夜の石の中に来る。そこにはテーブルで緑茶を飲むユーリの姿があった。迷うこ

となくエイナはユーリに近寄り、隣のイスに座る。

「ユーリ、話は聞いてた？」

その声にユーリはエイナに目を向けて答える。

「ああ、それにしても、すごい事になったな。」

エイナはその言葉に少し落ち込み気味に頷く。

「うん、どうしよう。もし、失敗したら・・・」

「まあ、少なくとも、碌でもない事になるのは間違いないな。」

「・・・だよね。どうしたらいいのかな？」

結構深刻に考えているエイナ。そんなに思うのなら、最後まできっちり面倒を見てやれと言いたいが、あいにくこちらにも用件がある。

「とは言っても、こっちは相手の事も知らないからな。せめてそれが判らないとな。考えようがない。」

「そっか、そういえばハンスが好きだって言ってた人が誰なのか、何も聞いてなかったっけ。」

「と言うか、相手の事も判らずに、あれだけ煽れるのは素直に凄いと思うぞ。」

「う・・・」

エイナはユーリの言葉にばつが悪そうに後ずさる。

「で、でも、あのままだったら私たちが頑張って取って来た手紙が、無駄になっちゃってたかもしれないじゃない！」

「だからと言って焚き付けてどうする。せめて冷静に考えるように促せよ。それにあの手紙を使うのも捨てるのもハンスの勝手だ。俺たちが如何こう言える事じゃない。」

「そ、それは・・・そうかもしれないけど。」

何か言いたげに口ごもるエイナ。エイナとしては自分たちのやってきたことが、無意味なものにされそうな気がしたのと、ハンスの想いをこのまま終わりにさせてしまってもいいのかという気持ちによって起こした突発的な行動だったわけだが、それがハンスにとっては自分の全てを肯定されたような気分だったのだろう・・・単に勢いに乗りやすいとか、押しに弱いとか、調子に乗りやすいとかいう事では無い筈、だと思いたい。

「と、言っても、もうそれを指摘しようにも、大分時間が経ってるからな。」

そう、その事を言った直後ならまだ諌める事も出来ただろうが、かなりの時間が経ってしまい、しかも前祝もきちんとやっているし、何より参加すらしているのだ。説得力の欠片も感じ無い。むしろ、ここまでやった後に説得しても反感を植え付けるだけだろう。逆効果にしかならないのは目に見えている。

「とりあえず、その恋が実るよう祈るしかないな。これ以上関わっ

て変にこじれさせるよりは、少しはましだろう。結局はハンスと相手の問題だ。俺らが周りで騒いでも混乱させるだけだ。」

「そうかもしれないけど。」

「上手くいって欲しい気持ちも判らない訳じゃない、手助けもいいだろう。それでもその結果はこれなんだ。俺としてはこれ以上は止めといたほうがいいと思うぞ。背中を押せただけでもいいことだと思うぞ。」

「・・・」

ユーリの言葉に顔を俯けるエイナ。それを見て内心、溜息をつくユーリ。

「（まったく、俺はどこかの相談センターか何かじゃないんだがな。）」

とは言え、目の前で落ち込んでいる人物を放っておくのも後味が悪いので、どうにかしようと思考を巡らす。ただ、一つ問題があるとするなら。

「（流石に恋愛とかは俺にも判らないんだけどな。というか何を考えて俺に相談したのやら。）」

こういった事には今まで関わった事がないという事。女友達はいたが、そんな浮いた話とかは一切なかった。少なくともユーリはそう考えている。

「（判らないで済ませるわけにもいかないし、けどこれ以上関わっ

ても悪影響っぽいしな。）」

しばらく考えた後、ゆっくりと口を開く。

「とりあえずは無責任な発言はせずに事態を見守る事だな。けど、ここから情報を集めて手伝えることはあると思うぞ。」

「えっ？」

ユーリの言葉にエイナが反応し顔を上げる。

「で、でも、もう関わらない方がいいって、さっき。」

「確かにそうだが、それはどんな相手か判ってもいないのに煽るなって事だ。なら知っていけばいい。その上でなら、もう少しまともに考えて助言も出来ると思うぞ。」

「た、例えば！」

いきなり食いついてきたエイナに驚きながらも口を開くユーリ。

「そうだな、相手が好きな場所が判れば、そこに誘えばいいし、好きなものが判ればそれを振る舞えばいい。逆に嫌いなものが判れば、それに関わるような行動や話題に触れないようにすればいいし、色々具体的に助言もできると思うぞ。」

「本当！」

勢いよく体を乗り出してくるエイナ。それに若干慌てながら対応するユーリ。

「・・・顔が近い。とりあえず落ち着け。」

「え？あ！・・・うん。」

顔を赤くしたまま従うエイナ。ユーリは咳払いをして空気を元に戻す。

「・・・何も知らない現状だと、できる事も言える事もあんまりないんだ。やる気にさせただけ効果があったと思うぞ。」

「・・・そっか、そうなんだ！無駄じゃないんだ。うん、無駄じゃないんだよね。そういう事なら私、頑張るから！」

「（なんか、テンションがおかしいような・・・藪蛇だったか？）」

エイナのいきなりの張り切りようを見て、軽率な発言だったかと先程の自分の発言を振り返る。とは言ってもこれ以上は自分にもわからない。在り来たりな事なら言えるが、さらに突っ込んだ事は判らない。とりあえず目の前でやる気を出している女性に、釘だけはさしておこう。

「また旅に出るんだから程々にな。」

「判ってるって！ありがとねユーリ！なんかやることが判ったような気がする。」

「そうか。それはなによりだ・・・それにしてもえらく拘るな。」

「え？」

少し気になった点を指摘してみる。少なくとも原作だったらここまで気にしてはいなかったと思う。一応、エイナが現状に納得出来たのを確認し、疑問を投げかける。

「いや、えらく真剣に悩んでるからな。いつもだったら困りはしても、そのまま流すと思ったんだがな。」

そう言うとエイナは少し慌て気味に口を開く。

「えっと、ま、まあ私にもそんな時があるっていう事よ！！うん。」

「何を納得しているのかは知らないが、まあいいか。何か自分の事のように言ってたから気になっただけだ。」

「自分の、事。」

一応納得して、話題を終わらせようとしたら、エイナが何か悩むように俯いてぶつぶつ言っている。不思議に思い、声を掛けようとするといきなり顔を上げてエイナが此方に目をやる。

「ねえ、ユーリ。その・・・」

「どうした？いきなり口ごもって、もしかして何か悪い事でも言ったか？」

「ううん、そういう事じゃないの。その、ね・・・」

「？」

煮え切らない調子でしゃべり続けるエイナ。それをユーリは理解できないまま応対する。

「それなら、もしかして、何か思い出したのか？」

「え、いや、そう言うんじゃないけど。」

「そうなのか？それじゃ・・・誰か好きなやつでも出来たか？」

「ええ？！」

「・・・え、いや、冗談だったんだが。」

なにか昔の記憶でも思い出したのからあれだけ真剣に言ったのかと思ったが、違うという。とりあえず現状、他に考え付くことは好意を持つ相手がエイナにいる場合、そしてそれを聞いてみるとえらく動揺した。これには流石に本気で驚いたユーリ。

「え、いや、その・・・」

「・・・そっか、エイナに好きなやつがねえ。うん、それは予想してなかった。（くっつく相手は一人だと勝手に思い込んでたな。迂闊にも程があるな。）」

「え、えっと・・・」

「ああ、悪かったな。冗談でもそんなこと言って、流石に驚くよな。うん、もう少し発言には気を付けるようにする。」

「え？」

そう答えるエイナの顔は若干赤い。やはりそういう事なのだろう。エイナだって自分の意志で行動しているのだ。この世界はゲームじゃない。それは判ってはいたが、やはり心のどこかでそういう気持ちがあったのだろう。そう思いさっきの発言を謝罪すると、エイナがなぜか妙な顔で此方を見ていた。

「・・・ねえ、ユーリ。」

「？どうかしたか？」

「その、私に好きな人がいるとして、それに思い当たる人は？」

今までの雰囲気から、急に静かな空気に変わる。その空気の中、エイナが誤魔化しは許さないとでも言うかのような表情で訊いてくる。その眼には何か決意したかのような必死さを感じる。その空気を不思議に思いながら、ユーリは今行ったエイナの言葉を反芻する。

「（卑怯かもしれないけど、やっぱり私はユーリと一緒に居たい。だから・・・）」

そんなユーリをエイナは目を逸らさずに見つめる。両手を胸の前で合わせ、激しくなっていく動悸を感じながら。体は熱を持ち、時間と共にその熱を増す。これから言う事をユーリが受け入れてくれるかは分からない。それでも今この時、きっかけはなんであれ、これから言うであろう言葉を口にしようと思ったのはエイナが振り絞った勇気だろう。だが腕を組んで思考に浸るユーリはエイナの変化に欠片も気付かない。

「エイナの好きな人、か。そうだな。」

「・・・」

ユーリの頭の中で今まであった人物が脳裏をよぎる。自分の知らない人物と言う可能性も考えたが、よくよく考えると、エイナは記憶を失ったままであり、先程も記憶は戻っていないと言ったばかり、ここでエイナが自分を騙す必要性は無いし、余程の事でない限り、自分を欺くことはできないだろう。どうでもいい嘘ならすぐに見抜けると思う。

ならば、自分が知っている人物とエイナが知っている人物は大体同じという事になる。つまり、自分が知りうる人物の中に、今まで旅をして知り合った人物の中に、エイナの好きな人物がいるという事になる。

「（そうなると、該当するのは・・・）」

頭の中で該当する人物をピックアップする。無論相手が人かどうかは関係ない。種族でどうとかは言わない筈。それを含んで考えると、うかんでくる人物は、何人かはいる。

まずはファイファー、性格は普段は温厚ではあるが、道理を重んじる常識人、それでいて厳しさも併せ持つ。まさしく厳格と呼ぶにふさわしい。料理も可能。恐らく似たような具合で家事もできるだろう。手先かどうかは知らないが、器用なのは確かなのだし。それに強さで言っても、この世界でも五指には確実に食い込むとユーリは睨んでいる。

住まいに関しても、山の上の洞窟ではあるものの、その中の広さは中々に広く、生活するには十分だろう。それに風呂や食事、衣服

に関しても潤沢なのは旅の準備をしているときに判っている。移動に関しても、あの転送陣を使えば大した労力も使わずに麓の村まで行ける。

考えれば考えるほど良い所が出てくる。悪い所は言うほど無い。強いて言うのなら、厳格な性格と言うだけあり、無礼を許さないと言った所だが、それでも昔気質の人物と取れば判りやすいだろう。でなければ武人とか、長とかでもいいだろう。感だが、恐らく人を育てる事にも向いているだろう。

「（だけどなあ。好きになるほどの事があったとは思えないしな。）」

そう、良い所を上げだすときりがない、だがそれはそれとして、肝心のエイナが好きになるほどの何かがあったのかと言われると疑問に思う。実際、初対面の印象はよくは無い。なにせ炎に包まれた毛並みをしたした獅子の外見を見て、悲鳴を上げたほどだ。

そしてその後、確かに身の回りの世話や、面倒を見てもらったのは確かだが、その時のエイナにファイファーに恋心を抱くような余裕があったのか、と言われると否と言わざるを得ない。そして、村からの使いとしてファイファーの元へ出向いたときにしても、せいぜいが気の許せる人物に対する行動に見えた。

「（多分、違うと思うが、それとも一目ぼれとかか？）」

確かにそういう事もあるとは思うがそれを言ってしまうと極端な話、誰にでも可能性はあるようなものだ。理屈ではないのだから。

「（とりあえず、ファイファーじゃないように思うし、次にうかぶ

のは・・・）」

とりあえず、自分の感じた印象からファイファーは多分違うと結論付ける。まあ、仮にファイファーだとしたらユーリも特に如何こう言う気も無く賛成するだろう。普通にこれ以上ないくらいに信頼できる人選だ。だが、違うと思うので次の人物へと思考を変える。

「（次と言うと、あの召喚士かな？）」

次に浮かぶのは幽鬼の様な顔をした召喚士。彼の御蔭で召喚術を使えるようになったようなものだ。無論感謝はしてはいるが、今回の話とは関係がないので割愛する。彼の容貌にエイナは怖がっていたし、出会った時間も短く、彼に心惹かれていたようにも思えない。

「（違う・・・となると。）」

次に出会ったのは、村の住人になるが、エイナが恋心を起こすような事態は無かったように思える。無論、自分が知らないだけで、実はエイナは琴線に触れていたこともあるかもしれないが。

「（結局、それらしいと言えば、やはりファイファーが一番近いように思えるが、どこかしっくりこないな。）」

考えても特にそれらしい人物が浮かばない。一瞬黒騎士かとも思ったが、中の人物を知らない今のエイナでは有り得ない。もしかしたら同姓かとも考えたがその場合、余計に判らない。そんな益体もない事を考えているうちに一つの考えが浮かぶ。

「（待てよ、そもそもエイナがこの話をするに至った話の中心人物がいたんだったな。）」

そう、一人重要な人物を考察していなかったことに気付く。それは・・・

「（そういえばエイナが普段以上の勢いで背中を押したハンスがいたんだった。なんでこんな簡単なことを後回しにしたんだか。）」

そう、ハンスの事である。そもそも、エイナはハンスの頼みを引き受け、手紙を取りに行き、その手紙を無駄にしないように、普段見せないような勢いで背中を押したのだ。もし、エイナがハンスに惹かれていたとしたのなら、これらのすべての行動に辻褄が合うのではないか。

「（つまり、エイナはハンスに一目ぼれをしていたって事か。）」

しかし、ハンスには既に好きな人がいた。それを知ったエイナは涙を呑んでハンスの背中を押し、ハンスの恋が成就することを願った。それが衝動的なものだったから後の事も考えれなかった。そしてハンスが予想以上の反応をしたことで、もし失敗すればハンスが死を選ぶかもしれないと思い、不安になり俺に相談に来た。

「（ああ、そういうことなら納得がいくな。なんかどこかのドラマみたいな話になって来たな。）」

ユーリは自分の考えに内心頷き、エイナに目を向ける。記憶がなく、自分の事にただでさえ余裕がないのに人に恋心を抱き、しかもそれは実らない物だと気付いた。なにせ相手も事もよく知らないうちにふられた様なものだ。それでも相手の幸せを考えて身を引く。

「（思っていた以上に人が出来てるんだな。正直見直した。ああ、

それなら、気持ちの整理する時間ぐらい作ってやろう。今まで無理もさせてきた事もあったし、休ませてやらないとな。記憶がない事を考えると初恋になるんだよな。よく耐えてるな。本当強いな。）」

何かすごいストーリーがユーリの脳内で展開されているような気がする。本来ならこんなことは考えないが、この世界なら別のあっても不思議には感じない。と言うかこのくらい普通にありそうだから疑問に思わない。そしてエイナの彼氏候補から、見事に自分を消している。

元々自分はこの世界に関連がないという考えは、まだ心の底に根付いている。そのために、無意識的にそういう関係は無いと思っている。ここまで酷なことはそう無いだろう。この時点でエイナの求めた答えは、出ないという事が証明されたわけである。是非も無い。

「エイナ。」

「え？う、うん。」

若干頬を染めてユーリを見返すエイナ。エイナとしてはユーリが思った以上に真面目に向き合ってきたのに面食らい、内心、動揺する・・・傍目からでも十分動揺しているが。瞳は潤み、頬は上気する。事ここに至り、エイナの女心は上限突破する。それを見ていたユーリはその変化を失恋を精一杯耐えている心から来るものだと判断する。とことんすれ違う。むしろここまで来ると喜劇の類だろう。

「今まで、よく頑張ったな。」

「え？」

予想外の言葉に今までの雰囲気が消え去り、そこには困惑だけが残る。そんなエイナを置き去りにして事態は進む。エイナの予想とは全く関係のない、９次元へと。

「ああ、これからは俺が外に出ておくから、エイナはここで少し休んでおくといい。後の事は俺がやっておくから。」

ユーリのその瞳からは純粋な優しさが読み取れるのみ。エイナはそれを感じ、益々疑問を深める。

「ああ、困った事が有れば遠慮なく言えよ。できる範囲でなら手伝うからさ。」

「え、ええ。（どうしたんだろう？なにかさっきと様子が違うような。）」

「ああ、それじゃあな。」

「え！ち、ちょっと、ユーリ！まだ話は終わってない・・・」

最後までいう事は叶わず、ユーリは表に出ていく。それをエイナは見送るしかできなかった。呆然とした面持ちで、しばらく動くことも忘れ立ち尽くす。用意していた言葉も、固めていた気持ちも置き去りにし、時間だけが刻まれていく。そして、しばらくした後再起動する。

「え？どうなってるの？訳が分からないよ！！ユーリ！」

無駄とわかっていても叫ばずにはいられない。自分が行うはずだった一世一代の告白が、言う前にご破算になったのだ。その気持ち

は推して知るべし。

「なんで、こうなったの？ユーリは何を考えて、あんなにやさしい目であんな事を言ったんだろう。」

叫んだことで若干の冷静さを取りもどしたのか、先程の発言を思い出す。さっきのユーリは突然自分をほめてきた。最初は私の気持ちに気付いてくれたんだと思ったのに、そこから口にした言葉は、どちらかと言うと私を励まそうとするかのような事ばかり・・・なぜか今すぐにでもユーリと話をしないといけないような、このままだと何か不味い様な、そんな感じがする。

「どうしよう。何かが決定的に間違ってるような気がする。なんでだろう。とりあえず、ユーリ、戻ってきて！！今度はきちんと言うから！もう一回お話して！！」

必死になって常夜の石を光らせるエイナ。女の勘が告げる悪い予感を胸にユーリを呼び戻そうとする。そこにはさっきのハンスの事など頭から抜け落ちていた。さっきまでの落ち込みようと悩みようはどこに行ったのか。それはきっと誰にもわからない。

ただ、お互いの気持ちの擦れ違いはともかく、この一件でユーリのエイナへの好感度そのものは割と上がってたりする。ちなみにユーリはいい出会いがあれば、エイナと結ばれるようにしてやろうと内心思っていたりする。主に思い浮かんだのはいずれ出会うであろう眼鏡犬だったり。

表にでて来たユーリは、傍らにいるリコに目を向ける。突然ユーリに変わった事で少し驚いているのか、目を見開いている。服の下で高熱を伴って光る石については、ストラで防ぎつつ意識から外す。

「お兄ちゃん、ハンスさんの事、どうするの？」

しばらくして、落ち着いたのか、リコがそんなことを聞いてくる。

「とりあえずは様子見だな。何か動きがあればその時に考えるってところだな。」

冷静にそう言うユーリを見て、何を思ったのか。

「お兄ちゃんって誰かと付き合った事とかあるの？」

そんなことを聞いてきた。

「いや、そんな覚えは無いな。ついでに好きと言われたことも無いな。」

どうでもいい事のように言う。実際ユーリは恋愛についてはそう貪欲にはなっていない。まあ、そんな相手がいたとして、今現在一緒に居られるほど余裕も無いのだ。ならばいない方がお互いのためだろうと考えている。

「へえ、そうなんだ。（それなら、今からでも私とお兄ちゃんが結ばれるチャンスはあるってことだよね。）」

「ああ、悲しい事にな。まあ、俺を好きになる奴は珍しいのかもな。

」

「わ、私はお兄ちゃんの事、大好きだよ！」

今までを思い返し、適当に返事すると、リコが頬を染め、はにかみながら言って来る。それを笑顔で受け入れるユーリ。

「ああ、ありがとうな。リコ。」

「・・・むう。」

それを見て、自分が子供だからそんな返し方をするのだと気付き、頬を膨らませるリコ。そんなリコを見て不思議そうに内心首を傾げるユーリ。なぜ、そんなことをしているのか理解ができない。だからその思いに気付く事は無い。

「さて、とりあえず、買い物でもしていくか。リコも一緒に行くか？」

「うん！私も行く！！」

とりあえず、これから少しずつ意識して行ってもらおうと考え、傍に居ようと考え、ユーリの手を握り引っ張っていくリコ。それを機嫌を直したと勘違いするユーリ。どこまで行っても交わらない。前途は多難である。

「さて、これであらかた買い終わったかな。」

「そうだね。」

ショップで消費した道具や武器を購入し、装備を整える。道具袋は相変わらず底なしの許容量を持って道具を内包する。やはり不思議である。

「私もナイフを買ったし・・・ごめんね、お兄ちゃん。私、あんまりお小遣い無いから。」

「ああ、そのくらい気にするな。ただでさえリコを戦いに巻き込んでるんだ。これくらい当然だろ？遠慮するな。」

「でも・・・」

やはり、迷惑をかけたと思い俯くリコ。そんな顔をしてほしくは無いのでことさら優しくユーリは話しかける。

「そう深く気にするな。旅をしてれば金だって溜まっていくし、それを有効活用してこそ意味があるんだ。それにこいつもやるよ。」

「え？これって、お人形さん？！」

「ああ、売ってたからな。リコが気に入るかと思って買って見たんだが、いらなかったか？」

「う、ううん！有難う！！お兄ちゃん。この子大事にするね。」

手渡された人形を抱きしめ笑顔を浮かべるリコ。それを見て優し

く笑うユーリ。人形自体には何の効果も無く、単なる置物以上の価値は無いが、リコの機嫌が直るのならば、儲け物だと思う。

「さてと、後は・・・」

「ユーーリーー！！」

次はどうしようかと考えていると、遠くの方から自分の名を呼ぶ声が聞こえる。しかもその声は聞いた事がある。その方向に目を向けると、やはり思った通りの人物がこっちに目を向けていた。悪魔商人、ルチルである。此方に向かって大きく手を振っている。

「大声で人の名を叫ばないでくれ。変に注目されるだろう。」

「まあ、そんなことはいいじゃないか。」

とりあえずルチルの元に向かい、先程の言動について注意する。だが、リコと常夜の石の中のエイナは顔を険しくする。エイナはルチルの気持ちを知っているし、リコも直感でそれを感じ取る。そしてルチルもリコの顔を見てエイナと同じなのだと判断する。

「で、なんだいその子は？まさか娘とかいわないよねえ？」

「なんでそんなに殺気立って言うのやら、無論違うよ。リコは旅の仲間だ。そんな関係じゃないさ。」

「むう。」

「そうかい、そうかい！そんな関係じゃないのかい。それは悪い事を言ったねえ。謝るよ。」

特に申し訳ないとも思っていない表情と言葉で謝罪するルチル。その声色にはどことなく安堵の気持ちが感じ取れる。それを少し不思議に思いながらも、ユーリは自分を呼んだルチルにその真意を尋ねる。

「で、今回はどうしたんだ？見かけたから声を掛けただけじゃないんだろう？」

「いや、それも勿論あるさね。まあ、当然それだけじゃないけどね。」

そう言ってユーリの言葉を肯定するルチル。それを見て先を促すユーリ。それを見て少し息を整えるようにしてルチルは思っていた事を口にする。

「ユーリ！この前はすまなかったね。騙すようなことになっちまって。」

ルチルはそう言って素直に頭を下げる。ルチルが言っているのは恐らくノヴァの情報の事だろう。いくら悪魔と言っても、商売人なのだ。契約をして、此方が対価を支払ったにもかかわらず、それを踏みにじったような結果を謝っているのだろう。義理堅いと言えば義理堅いと思う。

「ああ、気にしなくてもいいさ。確かに驚いたが、そんなに責める気はないよ。」

「ほ、本当かい？」

「ああ。」

とはいえ、ユーリは特にその事については怒っていない。その事については元々ユーリはルチルが逃げる事を知っていて契約したのだから、特に損したわけではない。むしろ、ルチルと遭遇し、その後その品を買えるようになる事こそが目的だったのだ。だからこそ、気に止めてはいない。

「そうかい。それは、本当に良かったよ。ありがとうね。」

無論そんな裏事情を知らないルチルとしては、ユーリが許すと言ってくれたことに純粋に嬉しさを感じていた。一方的に話を持ちかけ、それを裏切る。悪魔としては常套手段かもしれないが、ルチルとて勿論騙す相手は選ぶ。前回はエイナとの口論で頭に血が上り、思わずやってしまった突発的な出来事だ。無論ノヴァの事を知らないため、どちらにせよ契約に応える事は出来なかったわけだが。

「とは言っても、このまま終わらせたんじゃ、アタシの商売人としての沽券に関わるからね。ノヴァの事については真剣に探しておくよ。」

「別にそこまで気にすることは無いんだがな。けど、そう言うなら、その気持ちに甘えておくよ。」

そう言うと、にかっと笑顔をこぼしながらルチルが嬉しそうに口を開く。

「そうしときな。今度からは騙さないから安心しなよ。」

「そっか、なら信じとくよ。」

「あ、ああ。」

そう言ったユーリの言葉を聞いて若干驚いた様子で聞くルチル。

「どうした？」

「いや、まさかこんなに簡単に信じてくれるとはね。少し驚いただけだよ。」

ルチルとしては信じてもらえないので無いのかと不安を覚えていたのも事実。だが、実際は驚くくらいあっさりと自分の事を信じると言ってくれた。それを嬉しいと思う反面、それを不思議に思う。

「どうして、他人をそう簡単に信じられるんだい？アタシが言うのもなんだけど、普通はもっと疑うと思うんだけどねえ。」

「どうして言われてもな。俺が大丈夫と思ったからとしか言えないんだがな。」

実は最初からわかってました。などと言えるはずも無く、それらしい事を言ってその場をごまかす。それを聞いたルチルは一応納得をしたのか、それ以上の追及を止める。

「そうかい、それならもう聞かないけどさ。その内誰かに騙されそうで心配だね。」

「いや、流石にそれは無いだろう。人を見る目はあると思ってるんだが・・・」

さすがに知らない人物を無条件で信じたりはしないと否定するが、ルチルには納得しなかったようで拳を握り、勢いよく否定してくる。

「いーや、まだまだだね！だからさ、アタシがそれを教えてあげるからさ。一緒に来ないかい？ユーリならきっと一流の商売人にだってなれるしさ。アタシが、このルチル様が保障したげるよ。」

「おいおい。いきなりそう言われてもな。」

「ああ、勿論、ユーリ達の事は、この村の住人から話を聞いて大体わかってる。商売人にとって情報は命同然だからね。」

そこまで知っているのなら、話は早いと諌めようとするが、それよりも早くルチルが口を開く。

「それなら・・・」

「だからさ！アタシと一緒に商売しながらいろんなところを回らないかい？それならきっとユーリの記憶だって戻るさ！アタシだって手伝うしさ、どうだい？悪い話じゃないと思うんだけどね。」

ルチルからすればこの理由は後付けのものであり、その本心はユーリを自分の側に置くためであり、ただの方便である。

「駄目っ！お兄ちゃんはリコと一緒に旅人さんするんだもん！！」

「リコ？」

「ねえ？お兄ちゃんはリコを残していなくなったりしないよね。」

「いや、なんでいきなりそんなに大事に？」

「大丈夫だよね？お兄ちゃん。」

「いや、だから。」

此方の話を聞かずに一方的に話しかけてくるリコを、困り顔で対応するユーリ。それを見ながらルチルが口を挿んでくる。

「まあ、急な話だからね。そっちの子が寂しがるのも判るよ。だったらそっちの子も一緒に行くってのはどうだい？」

「え？」

「それなら、離れる事も無く、ずっと一緒だよ。しかも戦う必要も無い。安全に過ごせるんだよ。」

「で、でも私は！」

思いもよらない言葉に気持ちがぐらつくリコ。確かに戦うのはある程度なれた今でも嫌なことには変わりはない。いくらユーリの隣で戦うのが目標とはいえ、リコはまだ少女であることには変わりない。怖いものはどう言い繕っても怖いのだ。戦わずに、しかもユーリの側でいられるのならば、それに越した事は無い。

「お兄ちゃん、どうするの？私はお兄ちゃんについて行く。」

それもいいのかもしれないと、少しでも思ってしまえば、もう勢いのある反論など出来はしない。その判断はユーリに委ねられることになる。リコにしろ、エイナにせよ、それぞれ理由はあるにせよ

今の彼女らにとって、その目的とは別にユーリと共にいるという事は、必須事項になっていたりする。

「さて、どうするかな。」

その事については思いもしていないユーリは、割と真剣に考える。確かにそれならば、周りを傷つけないように行動することもできる。だが、戦闘をしないという事が必ずしもいいというわけでない。それはこれ以上の成長を止める、又は遅らせることと同義である。

「（それはできる事なら避けたいしな。）」

既にこの身には歪な存在が侵食している。これを取り除く方法で一番最初に考え付いたのは、この大元を失くすこと。そしてそれを成すには今以上の強さが必要。ならばここでそれを放棄するのは愚の骨頂。とても頷ける物では無い。しばらく考え、ユーリは結論を下す。

「ルチル。」

「どうだい？考える余地はあると思うけど。」

「ああ、その上で言う。俺の事を思っていってくれたのは素直に嬉しいし、感謝もしてる。けど、さ。今は旅を続けることに意味があると思うんだ。だから、止めるわけにはいかない。」

「そう、かい・・・」

どこかで予想していたのか、諦めるように視線を下げ、俯くルチル。それを僅かに申し訳なさそうに、だが目を逸らさずに見つめる

ユーリ。その傍らと常夜の石の中でリコとエイナが内心安堵の表情をつく。だが、ルチルの顔を見ると心が痛むのも確か、その気持ちは痛いくらいに判る。

「ああ、だからさ。その申し出は受け入れられない。」

「・・・」

しばらく俯いていたルチルだったが、何かを決めたのか、その顔を上げる。そこにあるのは涙でもなく、悲しみや諦めでもない。そこにあるのは決意。

「それじゃあさ！その旅をこのルチル様がサポートしてやろうじゃないか！」

「何？」

突然大声を張り上げてこちらを見たルチルの瞳に宿るのは不屈の精神。元々断る可能性が高いのも、直ぐに違う環境に変えれる程、軽い理由じゃない事も判っていた。それでも言わないよりは言った方がいい。ルチルはそもそも、分の悪い掛け自体を好む傾向にある。だからこそ、例え低い確率だとしても諦める事は無い。駄目なら次をがんばればいいだけなのだ。

「だからさ、ユーリの事はアタシが支えてやろうって言ってんだよ。さすがにこれなら断る事はできないだろう？」

「・・・」

ならば、自分が出来る限りユーリの側に近づくのみだ。とはいっ

ても、自分に戦う力は無く、そもそもそう言った方面ではそこいらのニンゲンにも負けかねない。ならばこそ、自分にできる最大限でサポートする。それが彼女が最後に結論付けた答え。そして、触れ合う機会が多ければ多い程互いの中を深める事が出来る。時間はかかるがきっと振り向かせてみせる。先程の言葉の根底にはそんな気持ちがある。

最初は薬を持ってユーリの気持ちを縛ろうと画策し、実行に移そうとしたが、村から得た情報でユーリが扱うストラはそういった状態異常を全て無効化するという。ならばこの行為はユーリの気持ちを自分から遠ざけるだけに終わると気付き、即刻中止する。

ならば、正面から攻めるのみと、小細工なしで悪魔らしくない正々堂々とした態度で協力を申し出る。それが今回のこの会話である。結果としてこの行動はユーリの好感を得る事に成功する。

「そうだな。なら、これからは支えてもらうとするか。」

「ははっ、そうだろう？やっぱりアタシが手伝ってあげないと、ユーリは何かと危なっかしいからね！」

「そんなに危ないように見えるのか？これでも結構いろいろ気に掛けてるつもりなんだが。」

「ああ見えるね！だから、アタシが手伝ってやろうっていうのさ。これで一安心だよ！よかったねユーリ。」

満面の笑みをユーリに向けて喋るルチル。そこには邪念など一切なく、裏など感じさせない。元々ないから当然と言えば当然だが。その笑顔を横目に見ながらユーリは客観的に見た自分がどう見えて

いるのかが少し気になった。そんなことを考えているとルチルが何か荷物をごそごそと漁っているのに気づく。

「何してるんだ？」

「ああ、もうちょっと待ってなよ。これと、あとはこれもっと、はい！」

「はいって、なんだこれ？」

渡されたものはいくつかのアイテムや装備品、魔石の欠片。これらの品をいきなり渡され、困惑の顔を浮かべるリコと渡された荷物を見ているユーリ。そしてその言葉によくぞ聞いてくれたと言わんばかりに勢いよく語りだすルチル。

「そりゃあ見ての通りだよ。支えるっていっただろ？だからそれはその言葉通り、餞別として受け取っときな。」

「商売人が無料でか。何か釈然としないんだがな。」

「あはは、そう構える事は無いよ。アタシにも生活ってのはあるからね。次からはお金を払ってもらうけど、これはさっきの言葉の証明と実際にお得意さんって奴になるだろうからね。先行投資って奴さ。離れていかれちゃたまんないからね。」

「そういう事か。割と抜け目ないな。」

「これからも御贔屓に！ってね！」

「ああ、そうさせてもらうよ。」

「ああ、それと、新しい商売を始める事にしたんだった。」

何か思い出したかのようにルチルはユーリに目を向け、新しく思いついた商売を話す。その商売とは前回のノヴァの情報の事を教訓として、ルチルが求めるアイテムや金額でルチルの持つ情報を買うといったもの。ようするに情報屋としての側面を持つという事。

「以前はノヴァって奴の事を聞かれても答えれなかったからね。だから、ノヴァの事を探すついでにユーリの利になるような情報があれば、教えるよ。」

「それで、それを商売にしたのか。」

「さっきも言ったと思うけど、こっちも商売を止めるわけにはいかないんでね。」

「ああ、それで構わないさ。」

「（まあ、他の客よりは融通するし、良い商品があったら優先して持っていくけどね。）」

どうこう言いながら、結局ユーリを主に考えているルチル。その思いに気付かないユーリ。まあ、他のメンバーは既に気付いているので、今までのやり取りをハラハラしながら見ていたりする。

「（どうしよう。なんか強敵出現っぽいし、でもでも！お兄ちゃんを振り向かせるのは私なんだから！！頑張れ私！）」

「（ユーリの馬鹿！なんでそんな私を騙した女なんかを信用するの

よ！そいつ自分で悪魔って言ってたじゃない！また騙されたらどうするのよ！やっぱりユーリに私の気持ちをきちんと伝えないと！）」

「（これでユーリの近くにいる事に問題は無くなったね。後は周り連中だけど、所詮は子供と駆け引きに関してはど素人の小娘。なんとでもなるね。ふふっ。これからが待ち遠しいね。）」

それぞれがそれぞれの考えで、目の前の青年を見る。一方、自分に何か視線が集まっているのには気付いたが、なぜそうなったかは全くわからないユーリ。女心は結局わからないまま、事態だけが進んでいく。

「・・・なんか、妙な事になりそうな気がするな。」

「？何か言ったかい。聞き逃しちまったよ。」

「ああ、気にしないでくれ。唯の独り言だ。」

「そうかい。まあ、それじゃ、ここからはお金をもらうけど、幾らか割引価格！さあ、買わなきゃ損だよ。おひとつどうだい？」

本当に気にしていないのだろう。自身が広げていた商品に目を向けそんな事を言ってきた。それを聞いて、とりあえず見せてもらう事にする。

「ああ、それじゃ、そうさせてもらうよ。」

「まいどあり～。」

上機嫌で受け答えするルチル。それを聞きながら商品を見ていく

ユーリ。どこか焦った様子でそれでもやはり気になるのか商品を見ながらユーリに話しかけるリコ。そして、また光る常夜の石。

「それじゃ、これとこれと、後これも頼んでいいか？」

「あいよ、お目が高いねえ。それじゃサービスで3割引きだよ！」

「・・・売り上げはいいのか？」

「なんだい？アタシの心配でもしてくれてんのかい？」

「まあ、ここまでしてくれてその結果、何かあったら寝覚めが悪いからな。」

「大丈夫だよ。まだまだ売るものは沢山あるし、お得意さんとか、高額の品を買ってくれるお客もいるしね。食べてく分には苦労は無いよ。」

「それは何よりだ。」

「ああ、それでね。これなんだけど、この商品は・・・」

直ぐに他の話を振ってきたルチル。そしてそれに負けじと話しかけてくるリコ。そして、一時は収まっていたのに、再び、肌を焼くレベルの熱を纏って光る常夜の石。それをストラで防ぎつつ、ルチルとリコの話を聞いているユーリ。その空間はとても賑やかで、話が途切れる事は無い。

しばらくそうやって話をしていたが、そろそろ打ち切ろうとユーリがルチルに話しかける。

「さて、と話し込んだけど、そろそろ俺らは行くとするよ。いつまでも同じ客を相手にしてるも儲けがないだろう？」

「別にアタシは気にしないんだけどね。もっといてもいいくらいだけどね。」

「こっちが気にするんだよ。まあ、次にあった時はまた頼むよ。」

「あいよ。気を付けるんだよ、ユーリ。」

「ああ。」

そしてルチルに別れを告げ、露店を離れる。そこでいろんなものを買い込んだので、しばらくは補給をする必要はないだろう。

「さて、と」

「これから、旅に出るんだね。お兄ちゃん。」

やる気十分と言った感じで話しかけてくるリコ。それに対して、ユーリは首を横に振る。

「いや、もう少しだけ待ってもらってもいいか？あと一件だけ、寄りたい所があるんだ。」

「そうなの？うん、いいよ！私も一緒に行ってもいいんでしょ？」

「ああ、別にかまわないぞ。」

「やったあ！それで、どこに行くの？」

「ああ、とりあえずは、ここだ。」

そう言ってユーリはリコにある紙を見せる。それは先程ルチルから買っておいた情報の一つで、そこにはこの村にある、家の配置図がのっていた。そしてそのうちに一か所に丸で囲まれた場所がある。そこにルチルから得た情報の人間が住んでいる。

「要するに、お兄ちゃんはこれからここに行くの？」

「そういう事だ。」

「でもこの家に言ってどうするの？」

「それは言っての御楽しみだ。リコはこの家に行った事は無いのか？」

「えっと、この家があそこで、こっちがああだから・・・うん、私はこの家に行った事あるよ。」

しばらく地図と睨めっこしていたリコだが、場所が判ると笑顔を浮かべ返事をしてきた。

「そっか、それなら、挨拶するときに一緒にするか？」

「うん！私とゲンさんは顔見知りだから仲良いんだよ！」

「へえ、そうなのか。」

その言葉に出された人物にどこか聞き覚えを覚えながらリコと会話を続ける。

「うん、だから私に任せて置いて！ほら、こっちだよお兄ちゃん！！」

「おいおい走ると転ぶぞ。」

「大丈夫、大丈夫って、きゃっ！」

「っと、全く言わん事じゃないな。きちんと前を見るようにな。」

「う、うん。そ、それじゃ行こっか。お兄ちゃん。」

転びそうになったリコを抱えあげるユーリ。さすがに恥ずかしいのか、顔を赤らめるリコ。そして降ろされると今度は走る事は無く、代わりにユーリと手を繋いで横を歩く。ユーリはリコの歩幅に合わせ速度を落とす。しばらくするとリコもそれに気付いたのか笑顔でユーリの方を見る。

「ねえ、お兄ちゃんゲンさんに何の用なの？」

「ああ、その人はこの村唯一の、鍛冶師なんだ。」

「カジシ？」

「ああ、剣とか、槍とか、武器を作ってる人たちの事だ。と言っても包丁とか金槌も作ったりしてるから簡単に武器だけってわけでもないんだがな。あとそういったモノの修理とかもしてるな。」

「へえ、お兄ちゃん、物知りなんだね。」
「たまたまだよ。それに知ってると言っても、本職からすれば浅い知識だろうさ。」
リコが褒めるのに対し、やんわりと答えるユーリ。
「そうなのかな？」
「多分な。」
「それじゃ、そこで何をするの？」
「ああ、そこで、少し武器を作ってみようと思ってな。」
そう言って笑みを浮かべるユーリ。そしてその視線の先には目的の家が見えてきた。思った以上に広く、自分が知識の中で知っているものよりも、大きな建物を視界に入れる。そこで自分が思っている展開に持っていけるかを考える。まだ見ぬ鍛冶師を見据え、歩く。その心には少しでも負担を減らせれるように持っていこうとする、確かな決意が溢れていた。
その建物の中からは、金属音と、周りよりも高い熱気が感じられた。この世界で前へ進むために臆せず進む。それが自分たちにとって糧となるように。そして、これから先を歩むための力になると信じて。

依頼達成　騒ぐ恋心とすれ違い（後書き）

さて、今回は召喚獣が出てません。特に理由は無いですが、誰とは言いませんが他のキャラを喰う勢いで存在を主張しているので今回は自粛しました。というか村での会話に召喚獣をどう絡ませればいいのか思いつかなかったので。あとルチルと出会うと、碌なことにならないような・・・戦闘力のないルチルフルボッコになりかねないので、戦闘的な意味で。

さてこの話最後の鍛冶師については当然オリジナルです。あと、剣の事ですが、まだきちんと決めてはいません。というか皆さんはゲンさんを知っているのだろうか？一応名前だけは以前に一回だけでてます。ちなみにあの時は出す予定はなかったです。鍛冶師設定も最近つけました。

鍛冶への挑戦　勝ち気な弟子の試験（前書き）

色々とバタバタして申し訳ありません。今回の話は作者があるアニメに感化されて最初考えていた展開から結構変わってます。

モデルが即ばれのキャラがいますが、アニメの影響です。作者は頭に花がある少女とか、バットもって機械ぶっ壊す少女とかの方が好きですが。

鍛冶への挑戦　勝ち気な弟子の試験

建物からは時折、金属音が響き、周りに独特の存在感を伝える。それは静かに、だがとても力強く打ち鳴らされ、それを聞いた者に強烈な印象を与える。そしてその音の元へと歩いていく者が二人。

「お兄ちゃん、それでゲンさんに会って武器を作るの？」

リコが不思議そうにユーリを見上げ問いかける。

「そうできたらいいんだがな。とりあえずは頼んでみる事から始めるよ。さすがに初対面の者に武器を作らせてくれるとは思えないしな。」

その言葉にユーリはリコの方に視線を向けながら答える。

「とりあえずは実際に会ってみて、それから決めるさ。今は考えても仕方がない。」

まだ顔すら見ていないのだ。お互いがどんな印象を持ち、どんな行動をするのか。そう言ったものを見てから頼むかどうかを決めようと思う。会いもしていないのに如何こういうのは意味がないだろう。

「さて、どうなるかな。」

そう言いながら、目の前の屋敷の門をくぐる。その屋敷は和風な作りとなっていて瓦屋根が印象的ないかにもな雰囲気を出している。見ただけなら確かに、職人の家と言われても納得するだろう。そし

てその人物とはこれから顔を合わすのだ。

「すいません。誰かいませんか？」

まずは印象を悪くしないように言葉づかいを丁寧にしておく。だが、何の反応も返ってこない。不思議に思っていると服をリコに引かれた。顔をリコの方に向けると、何か自身があるのかある方向を指さしながら口を開く。

「お兄ちゃん、ゲンさんはいつもあっちの方でカンカンってやってるの。だからここで喋っててもも、誰にも聞こえないんだよ。」

「そうなのか？」

「うん！だって、こっちに帰ってくる時はご飯食べたり、お客さんが来た時ぐらいだもん。だからこっちの方の家にいるんだよ。」

リコの言葉に従い、指さす方へと足を運ぶ。その向こうにはまた別の建物があり、金属音もそっちからしてくる。確かに件の鍛冶師はそちらに居るらしい・・・というかこっちは誰もいないのか？不用心だと思うのだが。

「うん、いつもはこっちにいるんだよ。多分、今もいるんじゃないのかな？」

「そうか。有難うな。リコ。」

「えへへ。うん！」

そう言って頭を撫でてやると、嬉しそうに笑うリコ。それを笑顔

で見おろし、建物に目をやる。こちらは先程の建物と違い、ところどころから、綺麗と言うより、使い込まれた印象を受ける。

そして中を窺うと、長く赤い髪を後ろで束ね、ポニーテールにした女の子が壺を運んでいた。年のころ、と言うより見た目は判りやすく言えば、中学生ぐらいだろうか。目が鋭く、勝ち気な印象を受ける。その姿は胸まででシャツを結んだへそ出しルックにショートパンツ、その体には汚れが目立ち、今まで作業していたことを現している。

「ん？」

「・・・」

目があった。数瞬の間をおいて、女の子が反応する。それと同時に、奥の方から何かの気配を感じる・・・様子見という事だろうか。

「アンタ誰？見ない顔だけど、もしかしなくても、お客？」

「ああ、確かに客だな。」

その雰囲気につられ、ついつい普段の口調で話しかけてしまう。だが、特に気にしてないのか、何も言わずに壺を奥に置いて戻ってくる。

「師匠なら、奥で刀打ってるから、依頼なら私が聞いとくわよ。何を作るの？それとも修理？」

「エンクお姉ちゃん。ユーリお兄ちゃんは、剣を作りたくてここに来たの。」

そこにリコが口を挿む。知り合いなのだろう。元々リコはここの村に住んでいたのだ。面識があってもおかしくは無い。エンクと呼ばれた女の子は、リコに視線を向けると驚いたように目を見開き、返事した。

「リコじゃない！村を出たって聞いて、すごく心配してたのよ！無事でよかったわ。どこか怪我なんてしてないでしょうね？」

「大丈夫だよ。お兄ちゃんが守ってくれたし、もう私だって強くなったんだから！」

そう言うリコは自信満々に言う。それを見ながら、エンクと呼ばれた女の子は肩の力を抜く。

「とりあえず、本当に問題なさそうね。まったく旅に出るなら一言くらい言ってくれてもいいのにさ。」

「ごめんね。お姉ちゃんの邪魔になると思って、言い出せなかったの。」

リコがエンクの言葉を聞き、落ち込みながらも謝罪する。それを見て慌ててリコに話しかけるエンク。

「ああ、大丈夫だよ。少し気になっただけだからさ。それにこうやって無事な姿を見せに来てくれたんだし。他にいう事は無いわよ。お帰り、リコ。」

それを聞いて嬉しそうに返事するリコ。

「うん！ただいま！エンクお姉ちゃん！」

それを妹を見るような優しい目で見るエンク。そしてその眼が此方をむく。

「迷惑をかけたわね。アンタ。えーと。」

「ユーリだ。」

「ユーリ、アンタには感謝してる。アタシの妹分の事、今まで面倒見てくれて有難うね、礼を言うよ。」

「別に大したことじゃないさ。まあ確かに心配するのも、判らないではないしな。」

「お兄ちゃん、それってどういう意味かな？」

リコが今の言葉は不服です、とでもいうかのように頬を膨らませながら聞いてくる。それを苦笑い交じりに宥めるユーリ。それを微笑ましいものを見るように見つめるエンク。

「っと、本題を忘れてたわね。それで、剣を作りたいって言ったっけ？」

「ああ。」

その言葉を聞くと、今までの雰囲気から一変し、真剣な顔で返事をする。先程師匠と言った以上、此処の鍛治師の弟子と言った所なのだろう。ユーリは即座に結論付ける。

「申し訳ないけど、私らはこの仕事にプライドを持ってる。リコには悪いけど、誰とも知れない奴に鍛冶場を任せるわけにはいかない。」

それは別に不思議でもなんでもない。元々そうなる可能性が一番高いのは判っていた。

「そうか。それは残念だ。一度やってみたかったんだがな。」

「悪いとは思うけどね。こっちも簡単には譲れないものがあるからさ。」

エンクの言葉が聞こえると同時に、奥の部屋の気配が動くのを感知する。どうやら今までの話を聞いた上で何かいう事が有るらしい。

「おい、エンク。そいつぁ客か？」

その声は年月を重ね、大人の重みを感じさせる。奥から出てきたのは、見た目３０代位の男。頭にねじり鉢巻き、作業服のようなものを着崩してきている。鍛え上げられた肉体は、遠目にでも実力者だと如実に理解させられる。

「あ、師匠。」

「ああ、騒がしくしてしまい、申し訳ない。剣を一振り頼みたいと思いまして。」

一応、言葉づかいを変えておく。聞かれていたことは分かっているが、それはそれで別の話だ。それを聞いた男は片目を閉じ、どうでもいいように指摘する。

「別に飾りだてた言葉なんざいらねぇよ。好きに喋んな。」

「そうか。それなら普段通りに喋らせてもらう。」

「ああ、おべっかなんて鍛治には関係ねぇからな。」

そう言うと、男は口元をゆがませ、自身の名を名乗った。

「オレの名は、もしかしたらそこのリコから聞いたかも知れねぇが、ゲンってんだ。よろしく頼むぜ。」

「ユーリだ。こちらこそよろしく頼む。早速だが剣を一振り打ってほしい。」

「えらく直球で言って来るな。」

「そっちの方が気に入るだろう。それに世間話をするために来たわけでもないしな。」

「そりゃそうだ。」

今の答えが気に入ったのだろう。その顔に笑みを浮かべる。

「見ない顔ってこたあ、おめぇ旅人か。どこに行くんだ？」

「とりあえずはアレスパの町を目指してる。」

「ってこたあ、あの森を抜けるって事か。最近あの森はきな臭くなってっからな。」

「ああ、一度行ってきたからな。その時は断念したがな。」

「へえ、今度は雪辱戦って奴か？」

「まあな。」

会話をするごとにゲンの顔の笑みが深くなる。そして何かを決めたのか、その身を翻す。

「いいぜ、剣を一振りだったな。準備してやるよ。」

「ああ、礼を言う。」

「おいおい、俺がやるのはあくまで準備だけだ。実際に打ち上げるのはおめぇだぜ。俺は他にやる事が有って、手が離せねえからな。」

「ちょ？！師匠？！」

その言葉を聞いて驚いたのは、弟子のエンクだ。それも仕方ないだろう。先ほど言った通り、鍛冶師の戦場とも言える鍛冶場を、初対面の者に任せると言ったのだ。驚くのも無理はないだろう。

「なに、さっきまでの会話を聞いてたからな。それにユーリは気づいてたぜ。なぁ。」

「まあ。」

確信を持って聞いてくる。どうやら意識を奥の部屋に割いていた事も判っていたらしい。今までの会話全てを聞いて、自分で判断を

した結果だろう。だが、それに異を唱える者がいた。ゲンの弟子、エンクだ。

「師匠！私は納得できないんだけど、どうして少し話しただけの、素人に打たせるのよ！」

「素人、か。まあ、確かに鍛造なんてしたことなさそうだな。」

「まあ、やった事は無いな。」

隠す事も無く正直に言う。それを面白いとでも言うように聞くゲン。

「ほら！本人もやったことないって！これじゃ悪戯に鍛冶場を荒らされるだけだっての！」

「おいおい、そう熱くなんなよ。なら、エンク。おめぇが判断してみるか？」

「え？」

その言葉を聞いてエンクの視線が此方に向く。その視線には僅かながらに戦意が現れている。そしてそれは、即座に笑みと共に、言葉として紡がれる。

「それじゃ、私が判断してあげる。アンタ！！武器が必要ってからにはそこそこ戦えるんでしょ。さっさと用意して表に出てなさい。私が試してあげるから！」

「おいおい、どうしろと。」

半ば予想のついた答えを一応聞いておく。ゲンがその質問に答える。

「何、簡単なことだ。鍛冶師が自分の作ったものを満足に振るえないなんて、笑い話にしかならねぇからな。俺らは戦闘もできるってことだ。つってもあいつは一応鍛冶場を任せちゃいるんだが、まだまだひよっこだがな。」

「それで？」

「つまり、アイツがおめぇの腕を見る。ようするに戦ってアイツを負かせりゃ良いんだよ。俺らは武器を通して話を聞く。こういうのが一番わかりやすいんだよ。」

「成程、簡単すぎる説明、感謝しとくよ。」

そう言いながら建物の外に出て、道具袋から双剣を取り出す。相手の獲物もまだ判らないが、なんにせよ大ぶりな大剣は止めておく。とりあえず手数でやりあう事にする。そんなことを考えていると、リコが話しかけてくる。

「ねえ、お兄ちゃんエンクお姉ちゃんと戦うの？」

「ああ、そうなるな。」

「あまり怪我させないでね。」

「まあ、極力気を付けるよ。」

そしてリコが離れ、しばらくすると、新たに槍を手にしたエンクが戻ってくる。

「（槍、か。）」

エンクが手にした槍を見ながら、意識を戦闘に向け、切り替える。元来、槍は相手を自身に近づけさせずに戦うための武器。その歴史と研鑽は古くからある。主に使用するのは、突き、薙ぎ払い、穂先での斬撃、石突きと呼ばれる部分での打突などである。

これらを十分に生かすには、基本的にある程度の距離が必要であり、中距離用とも言える。その一方、うまく扱えば相手からの反撃を封じたまま押し勝てたり、周りに代用品が多く存在するので、戦いに縁がない者でもよく使ったりする。竹やりなどがその最たるものだろう。

「（とは言っても、それは戦いに縁がない者の話であって、戦闘者からすれば少々の距離なんて関係ない。）」

相手よりも広い間合いを取る事で、初手を有利に進める事が出来るのは事実だ。だが、それはあくまで基本であり、戦い慣れた者ならば、また違う面を持つ。

「そっちは準備できてるみたいね。それじゃ、そろそろ始めようかしら？終了条件は、そうね、私が負けを認める事だけ、行くわよ！」

そう言うと、エンクは地面を蹴り、一気に距離を詰めてくる。槍は接近戦に不利とされるが、エンクはそれを気にせずに突っ込んでくる。その動きを動かず見据えたまま、双剣を構え、ユーリが口を開く。

「それって、お前が気絶したらどうなるんだ？」

「そんなのは無いから心配しなくていいわ、よ！」

その言葉と同時に槍を突き入れてくるエンク。それを双剣で受け流す。だが、そこからの引手が速い。そして、手首を使って息をつかせぬ連続突きを行う。それを冷静に間合いを測り躱す。そして、バックステップを行い、いったん距離を取る。とりあえず様子を見る。

「どうしたの？もしかして今ので怖気づいたの？」

「・・・」

「もしそうなら、アンタなんかに作ってあげる剣なんて一振りも無いって事よ！」

再び槍を構え突っ込んでくるエンク。今度はそれに合わせ、同時に地面をける。その行動に若干焦ったのか、動揺したのを感じる。だが、柄の持ち位置を変え、広範囲を薙ぎ払う。

「ちっ！やるじゃない！」

槍を横に薙ぎ払い、近づいてきたユーリを吹き飛ばそうとする。だが、それを受け流し、懐へと、すなわち双剣の間合いへと入っていくユーリ。だがそれは思いもよらない方法で防がれる。

「っ！」

直感に従い、攻撃の手を止め、横っ飛びする。その直後、視界の隅に電光が迸る。距離を放した後、エンクに視線を戻す。そこには稲妻を纏ったエンクがいた。そのエンクの頭には先ほどは見えなかった角が見える。一角獣の様な円錐状のその角を見て、いくつかの獣の名がユーリの頭をかすめる。

「（ユニコーン、いや麒麟か？そういや、テテの角もこんな感じだな。）」

「どうしたの？少しくらい予想外だったとしても、条件に変わりは無いわよ。」

「その角は何か聞いてもいいか？」

「ああ、これ？私にもよく判んないけど。私の感情に合わせて出てくるんだから、まあ体質みたいなもんでしょ。」

「（おいおい、さすがにアバウトすぎるだろ。）」

「何よ、その顔！悪い？」

「別に何も言って無いだろうが。」

「うっさいわね！アンタの顔にそう書いてんのよ！」

そう言うと空中から雷光を纏った槍を生み出し、こっちへ飛ばしてくる。その雷槍は、光と共に一直線にこちらへ向かって来る。

「ほら、さっさと避けないと怪我するわよ！」

「怪我で済むのか、かなり重症になると思うぞ。」

そう言いながら、着弾地点を即座に割出し、雷槍を完全に回避する。エンクは構わずに次の雷槍を作り撃ちだしてくる。その顔には笑みが浮かんでいる。純粋に戦闘を楽しんでいるらしい、迷惑な事極まりない。

「だったら、試してみなさいよ！」

「するわけないだろうに。」

そう言いながら、雷槍を躱す。それを数度繰り返していたが、焦れたのか今度は広範囲に稲妻を放射する。雷速で疾走してくるこれには、逃げ場などは無い。回避は無理があるだろう。だが、ユーリはそこから動かずに、双剣のうち片方を自分の前に投げ、地面に突き刺す。

「まったく、危ない奴だな。」

そして稲妻は金属である双剣に当たり、地面へと流れていく。剣を避雷針代わりにして、地面へと流したのだ。それを見たクレアは、目を細めユーリを見る。

「へえ、アンタ、結構頭もまわるんだ。」

「褒め言葉とでも思っておくよ。」

「それなら、これはどうかしら？」

そう言うと同時に角が僅かに発光し、地面から黒い粒が噴き出し

てくる。それは角を中心に渦巻、黒い竜巻となる。ユーリは心無し嫌な顔をしながらも、聞くだけ聞いてみる。

「で、それは何か聞いても？」

「ああ、これね。なんて事は無いわよ。そこいらの砂鉄を集めただけだから。ついでに金属片も交じってるけどね。まあ、鍛冶場なんだし、想定内よね！」

「（ったく、こいつ出てくる世界、間違ってる事ないか？どっかでこんな光景見たぞ。）」

内心悪態をつきながらも、恐らくは磁力で集めたのだろう、砂鉄でできた黒い渦から飛び出してくる刃を双剣で捌く。薄いストラで双剣の表面を包み、刃が欠けるのを防ぐ。

「やれやれ、色々とやってくれるな。」

「別に卑怯ってわけじゃないでしょ？私は、私にできる事しかやってないんだから！」

「まだ別に何も言って無いんだがな。」

砂鉄の刃と金属片の弾丸を捌きながら、受け答えする。時折、そこいらの打ち捨てられた剣も一緒に巻き込んで飛んでくるので、質が悪い。

「ほらほら、どうしたの？全然手も足も出ないじゃない！そんなものなの？」

「・・・」

「ほらほら！動かないんなら、これで終わりにしといたげるわ！」

その言葉と共に砂鉄の剣が迫る。それを双剣で再び捌く。そして距離を取り、構えを解く。そして、自然体のままで相対する。

「？どうしたのよ。まさか諦めたの？」

「あのな、今、これで最後って言っただろ。つまり、今のを凌いだら負けを認めるって事だろ。終了条件はお前が負けを認める事なんだから。無理に戦う必要も無いだろう。」

「なっ！」

その言葉に驚いたように反応するエンク。無論、ユーリの言っていることは屁理屈でしかないが、確かにそう言う受け取り方もあるにはある。だが、そんなことで納得するはずも無く。

「そ、そんなのある訳ないでしょ！あくまで実力で私を負かさないと駄目に決まってんでしょうが！」

「といってもな。」

「いいから！アンタは黙って私に切り刻まれたらいいのよ！」

「おい、これで最後ってさっき言わなかったか？」

「うっさいうっさいうっさーい！！黙って切られなさい！！」

「おいおい。」

ヤケクソ気味に、だが確実に制御されたその斬撃は、正確にユーリの首を狙う。リコが息をのむ。ゲンは口元に笑みを浮かべたまま、状況を見つめる。砂鉄の剣がユーリの首に直撃し、盛大な火花を散らす。

「え?！ちょっと！避けるんじゃないの?！」

その光景にさすがに冷静さを失い、ユーリの元へ向かおうとするが、数歩歩きだした所で、おかしい点に気付く。

「（待って。さっきあいつの首に当たった時に火花が散った。普通はそんな事は有り得ない。ならそれが起こった今は・・・。）」

足を止め、先程ユーリがいた場所を見つめる。そこは先程の砂鉄の勢いによって粉塵がまい、ユーリがどうなっているのかを窺い知ることはできない。だが、その奥から僅かに青い光が漏れる。

「?！」

その光を視認すると同時に槍を構え、戦闘態勢に入る。煙の向こうから感じるのは、先程までは無かった闘志。次の瞬間、青い光は蒼へと変わり、煙を残さず吹き飛ばす。

「まったく、びっくりしたぞ。」

「・・・それはこっちのセリフだっての。」

そこには無傷のユーリが、呆れた目で佇んでいた。

「へえ、アンタも変わった事が出来るのね。」

「俺のは体質ってわけじゃないがな。」

そう言って改めて双剣を構える。先ほどとは違い、そこには明確な戦闘意欲を感じる。それを感じ取ったエンクは笑みを浮かべ、雷光を槍に纏わせる。

「さて、これ以上は時間をかけるだけで進展なさそうなんでな。少しその気にさせてもらうぞ。」

「ええ、構わないわ。私もこんな状況を、待ってたんだから！！」

その言葉と共にお互いが地面を蹴り、距離を詰める。エンクは槍を構え、ユーリめがけて突きぬく。それを体を僅かにずらすことで躱す。纏っている稲妻はストラによって防がれる。ただの突きなら今まで通りの対応で回避できる。

だが、回避したユーリの頭上から、複数の砂鉄の槍が降り注ぐ。その状況は傍目から見ていると、黒い雨のようにも見える。

「私がいつまでもワンパターンなことするわけないでしょ。考えが甘いのよ。」

「お前のな。」

「なっ！」

その言葉と同時に、エンクの左右から双剣が回転しながら迫って

くる。それをバックステップで回避し、前を向くと同時に、砂鉄が吹き飛び、青い閃光が此方に撃ちだされる。ストラによる衝撃波、それは正確にエンクを狙い撃つ。しかもそれは一つで終わらず、連続で迫ってくる。

「くっ！こんなもので！」

稲妻を纏わせた槍で衝撃波を叩き伏せ、風車のように旋回させ、全弾薙ぎ払う、弾かれ青い燐光を浮かべながらストラが消えていく。その向こうに目をやると、弧を描くように飛んでいた双剣が、ユーリの手に再び舞い戻った所だった。

「やってくれんじゃない。今のは少し驚いたわよ。」

「なら終わりにしてくれてもいいと思うが。」

「そうね、終わりにしてあげてもいいわ。ただし・・・」

そう言うと、磁力を使ったのか、その手に抜身の剣が飛んでくる。

「（へえ、結構制御が効くんだな。）」

あれだけ、砂鉄やら金属片をばらまいておきながら、ピンポイントにあの剣だけを引き寄せるとなると、かなりの制御が必要だろう。卓越した能力の片鱗を見て、素直に感心する。

「これを防げたらね！」

そう言ってエンクは角から稲妻を発し、剣を包む。剣は磁力か、それとも、それ以外のナニカの力か、手に触れる事無く宙に浮いて

いる。そしてその剣に水平になるように腕をつきだし、剣を中心に電気の砲身が生まれる。それから生み出される攻撃となると、状況と知識から推測して、いくつか考え付くがその内のひとつを直感で選び出す。

「（レールガンか。）」

それは融機人化したリコの最大火力であり、ユーリが発案した兵装の一つでもある電磁投射砲、すなわちレールガンである。無論、細かい理論で説明すると違いはあるだろうが、もたらす結果は同じだろう。ただし、そこに発生したエネルギーの総量は、リコのそれを軽くしのぐ。ここから導き出されるのは、予想以上の火力であることは想像に難くない。

「さあ、これから何が起こるか判るかしら？」

「まあ、大体はな。」

「それは説明が省けて楽ね。で、どうする？あなたが思ってる以上にこれは強いわよ。負けを認めて降参するっていうんなら、止めてあげてもいいけど？」

「それこそまさかだろ。さっさと撃ってこいよ。それで終わりなんてふざけた考えをしてるんなら、まず最初にその思い上がった考え方をぶっ潰してやるよ。」

「っ！・・・言ってくれるじゃない。後で後悔しても知らないんだから！！」

「するわけないだろう。いいぜ。約束してやるよ、絶対に逃げない

ってな。」

「いいわ、そこまで言うなら覚悟しなさい！！」

その言葉と共に剣が発光する。恐らく磁力の反発か何かで打ち出してくるとみるべきだろう。それを推察すると同時にストラを練り上げる。回避はしない。そして推測になるが、あの一撃はいくらストラを防御に回しても貫いてくる気がする。

ならばここでできるのは迎撃しかない。道具袋に手を入れ、目的のものを掴む。それと同時に剣が射出され、風や音すら置き去りにして着弾する。一瞬遅れて轟音と突風を生み出し、爆煙と共に辺りが煙に包まれる。

「（いくらなんでも、これならあの光を撃ちぬけたでしょ。私の勝ち、ね。）」

確かに今の威力なら、いくらユーリがストラを纏ったしてもダメージは避けられない。ただ、それも直撃すればの話だが。

「・・・これで俺の勝ち、だな。」

そこには大剣を握りしめ、蒼い光を剣に宿したユーリが立っていた。その服にはいくつか焦げた後こそあるものの、その体そのものは無傷で済んでいた。

「う、嘘。」

「へえ、やるじゃねえか。今のはオレも結構やべえって思ったんだが。」

「お兄ちゃん！」

その場に居るユーリ以外の者たちが三者三様の表情と言葉で現状を表す。エンクは驚きを浮かべ、ゲンは本当に面白そうに笑う。リコはユーリの姿を見るなり笑顔でユーリを呼ぶ。

「さて、これで勝負はついたな。」

「ど、どうやって今のを防いだの。生半可な方法じゃ通用しない筈なのに。」

「ああ、別に不思議なことは何もないぞ。答えは簡単なことだ。元から狙ってたことは一つだしな。」

「え？」

そう言ってユーリは今、起きた出来事を説明する。まずは震脚の要領で地面の土を吹き飛ばす。それにより、僅かでも勢いを得る。吹き飛んだ土により、剣の勢いと電流が軽減されるのも狙いの一つ。だがそんなものでは圧倒的に足りない。

だからこそユーリがとった行動は道具袋から持ち出した大剣に全てのストラを集中し、一撃で剣を打ち砕く事。実際の話、撃ちだされた剣を破壊してさえしまえば電気や金属片、生み出された衝撃波はストラで遮断できる。だからこそ必要なのは剣の破壊のみ。

「まあ、言葉にしたら簡単なんだけどな。」

確かに言うのは簡単だが、それを行う事は実際不可能と言える。

普通ならば大剣の方が砕けるだろう。それに相手は音速を越えるのだ。普通に考えれば剣の振りが間に合う筈も無い。だが一転集中し、高密度に圧縮されたストラを纏った大剣、そして、現状だせる最大出力にまで引き上げたストラを纏ったユーリならば、その幻想を現実に変えることも不可能ではなくなる。

その他にも、それを可能とする要素をユーリは準備していた。その内の一つ、ユーリに味方した大きな要素が、弾丸として射出された剣の耐久度である。元々外に放置されていた所を見ると失敗作か、それでなくとも、大して価値などない部類の剣なのだろう。

それ故に劣化が進み、本来剣として扱うには致命的なほどの耐久度の低下が起こったのだろう。そのためにユーリの一撃でガタガタの剣はあっけなく砕けたのだ。恐らく剣の作成者はエンクだろうと思うが。

「これが、破壊しようと考えた理由だな。それの何の用意もしてなかったわけじゃない。」

更にユーリが身につけている物も、目的達成の助けとなっている。ユーリの指には二つの指輪が嵌っている。これは封雷の指輪と四属の指輪と呼ばれるもので、封雷の指輪は、僅かながら雷撃を軽減させる力を持ち、四属の指輪は雷、炎、氷、毒を軽減する。これは両方ともにルチルの所で手に入れた代物である。

そしてもう一つ、それはユーリの髪につけられている簪。その名は雷の髪飾りと呼ばれる。こちらもその名にあるとおりに雷の軽減を行う装飾品だ。本来ならこの簪はエイナの、女性用の装備品だが、ユーリは見た目も特に違和感なく装備している。

と言っても、これらの要素は全て可能性の話であり、元々低かったであろう確立を引き上げる手段とはいえ、確実と言えるほどのようなものでは無い。特筆すべきは、あの瞬間レールガンよりも早く切り込んだユーリの動きにある。あの瞬間確かにレールガンの発射よりも早く動きだしたが、本来なら合わない筈、その現実を覆したことこそが驚嘆に値する。

「な、なんで、そんな危険な方法を？もっと安全な方法があるでしょ！死にたいの！」

「そんなわけないだろう。ただ、お前が剣を構えているときに剣に微細な傷が沢山見えたし、お前が稲妻を纏わせているときに、その罅が広がっていったからな。何とかなるって思ったんだよ。」

「そんな。」

ありえないと言いたげな表情で此方を見るエンク。それを見て、薄く笑いながらユーリは思考する。本来ならばこんな博打をする必要性などは、まったくないのだが、受けてやると約束してしまった以上、反故にはできない。勢いでモノを言うのは止めて置こうと少し思った。

「（まあ、召喚術使えばどうとでもなったんだがな。）」

この勝負はお互いが持つ者のみで勝負した、と言ってもお互いに加減はしていたが。ユーリは召喚術の禁止。エンクも何らかの加減はしているだろう。まだ少ししか話していないが、あれだけ自分を慕ってくれているリコが見ているのだ。

さすがにいきなり本気では来ないと思う。つまり加減した者同士

での勝負。それが今回の戦いの条件とも言える。その中での本気。そしてその結果は、今目の前で展開されている。

「さて、これでもう納得してもらえたか？」

「・・・」

しばらく、険しい顔をして黙っていたエンクだったが、鋭い顔でこちらを睨むように見ると、口を開く。

「あ～もう、判ったわよ！合格よ！といっても、さっきのはあくまでも試験なんだからね！別の私に勝ったとか考えないでよね！！」

「ああ。」

「むっ。な、ならいいのよ。そ、そのうち私の本気見せてあげるから、覚悟しときなさいよ。アンタ！！」

自身の言葉に素直に返事するユーリの態度に何を思ったのか、勢いよく再戦を宣言する。それを聞いて、若干驚くユーリ。

「は？いや終わっただろ？もう戦う必要なんてないだろう。」

「何言ってんのよ！あれくらいが私の実力だって思われるのが癪だって言ってんの！！」

「いやいや、十分強いだろう。それにまだ上があるんだろう？それは分かったから、もういいだろう？」

「そのやる気がない態度は何よ！信じてないわね？いいわ。今度は

私の本気を見せてあげるわ！！」

「なんでそうなる！こっち来るなって。」

「なんで逃げんのよ！こっち向いて戦いなさい！！」

「（なんでこうなるんだ。面倒くさい。）」

なぜか、追いかけっこを始めた二人を見て、リコは微妙な顔をし、ゲンは大笑いする。

「なにあれ？」

「くくっ。中々見どころのあるヤツだな。まあ、タダものじゃないってのには気づいてたが、これは予想してなかったな。これは、あの半人前にもついに運命の出会いってぇ奴が来たか？」

冗談半分のその言葉にリコが反応する。

「お兄ちゃんはリコのお兄ちゃんだもん！だから、エンクお姉ちゃんでも駄目なんだから！」

「へえ、リコもあの男狙いか？こりゃますます面白くなってきやがったな。村総出でトトカルチョでもするか。儲かりそうだしな。」

リコはユーリを見ながら不機嫌な顔をちらつかせ、ゲンは自分で言ったその言葉に、意外といい案かもと本気で考え始める。その間にも追いかけっこは激化する。それはしばらくして堪忍袋の尾が切れたリコによって、強制的に止められるまで続くことになる。その後、リコと、常夜の石の中でエイナにくどくどと説教されることと

なる。そして、なぜそこまで怒られるのか判らないユーリ。

騒ぎがひと段落した後、鍛冶場でゲンからの話を聞く。

「さて、と半人前も認めた事だし、本題を話すとするか。」

鍛冶場に置かれたイスとテーブル、そこに四人が座り会話をする。先ほどの騒ぎの後でもまだ納得できていないのか、角をしまう事もせずにユーリを睨みつけるエンク。ゲンの話を紅茶を呑みながら聞くリコ。ちなみに紅茶はユーリが用意した。ゲンとユーリは番茶だが。

ユーリは居心地の悪さを感じながらも、それに敢えて突っ込まず、スルーすることにする。後々面倒くさい事にはなるだろうが、早々ここに立ち寄る気も無いので、このまま別れるだろうと安易に考える。ゲンも気付いてはいるが気にしない。むしろ面白がっている。

「俺はさっきも言った通り、他にすることもあるし、この後も色々行くところがあるからな。店もしばらく閉めようかと思ってたからな。だから依頼は受けられねえ。」

「だから、自分で作れと？」

「そういうこった。お前さんは確かに鍛治なんてした事は無えみてえだが、俺の見立てだと、そこの半人前よりかは確実に速くできるようになると思うぜ。」

「なっ！」

「・・・えらく高く評価したな。曲がりなりにも自分の弟子だろう。」

「弟子っつってもなあ。そもそもこいつが勝手に転がり込んできたんだがな。武器の作り方を教えろとか言って。」

その言葉を聞いて、視線は自然とエンクへと向かう。視線にさらされたエンクは、何か文句があるのかと言わんばかりに、ユーリを睨みつける。

「仕方ないでしょ。そこらのなまくらだと、私の力に耐えられずに壊れちゃうんだから。」

そっぽを向きながら事情を話すエンク。聞いてみると、普通に戦う分には問題ないが、さっきのように角を出して、電撃を出しながら戦うと武器が持たずに崩壊するらしい。そのために全力が振えないという。それを克服するために、鍛冶師であるゲンに弟子入りしたらしい。聞いてみてなるほどと納得した。

「アンタはいいわよねえ、そんなに便利な力で。身体能力どころか、武器の強度まで上げてるみたいだし。」

「まあな。」

それはユーリも気付いていたことだ。ストラを収束すると、その物質も強化される。だからこそレールガンの弾頭破壊などと言う、力技にも踏み切れたのだ。それに気付いていなければ、剣が破壊さ

れる危険性もある以上、もっと躊躇があっただろう。

「まあ、そんなわけで私は自分が振える武器を欲したってわけ。」

「まあ、理由と言うか、経緯はわかったが、別に弟子入りしなくても、作ってもらえばよかったんじゃないか？」

「何言ってんのよ。せっかく自分専用の武器を作るのよ。そんなの自分で作りたいに決まってるでしょ。」

「そういうものか？」

「そう思うから、アンタも自分で作るなんて言ったんでしょ？」

そう言ってエンクがこちらに目を向けて来る。

「俺のは好奇心が主だがな。こういうのをやってみたかったんでな。」

「ふ～ん。大概の奴は依頼するだけで終わるのに、アンタって変わってるのね。」

お前には言われたくない、とその変わってる事を、現在進行形でやってるエンクを見ながら、ユーリはそう思った。それを見ながらゲンは脱線した話を戻すように咳払いをする。

「とりあえず、そういう事で武器が欲しいなら、自分で作るか、その半人前に頼むかしかなくなる。どっちでもいいが、どうする？」

「せっかくの機会だ。自分で作らせてもらうさ。」

「まあ、そうだろうな。」

「ああ、それと少し気になったんだが。」

「あん？」

「エンクの持ってる槍は彼女が？」

その質問にエンクが割り込んで答える。

「そうだよ、これは私が作った槍だよ。銘なんて考えてないけど、やっとできた一振りだよ。これがどうかしたのかい？」

「いや、見た感じ、いい出来だと思うんだが、どこが半人前なんだ？」

「ああ、その事か。」

その言葉を聞くとゲンは苦笑いしながら答える。

「いや、腕だけならそこそこなんだがな。こいつは自分の武器以外は基本作らねえし、なまじっか作っても、なんでかあんまりいい出来じゃねえんだよな。こいつは他人の武器を作るのは向いてねえんだよ。だから半人前なんだよ。」

「師匠？！」

「事実だろ。」

ゲンの言葉に反論するかのように立ち上がるエンクだが、ゲンに図星をつかれ、納得いかない表情のまま、再び腰を下ろす。

「ああ、それで。」

「なんでアンタはそれで納得してんのよ！！」

「いや、なんとなく。」

「ケンカ売ってんの？！」

「まさか。」

いきなり口論となる二人、と言っても、片方が一方的に言ってるだけだが。

「まあ、必要なものはその半人前にいっときな。口じゃなんだかんだ言ってるが、まあ、嫌っちゃいねえだろうしな。」

「なっ！そんなわけないじゃない！」

「まあ、こんな奴だが、精々面倒見ててくれ。暇つぶしでもいいからよ。」

「結構投げやりだな。」

「そりゃ俺が如何こう言う気はねえからな。これ以上は俺も知らねえよ。好きにやりな。」

本当にそう思っているらしく、これ以上は知らないとでも言うか

のように席を立ち、小道具を袋に詰めていく。それを見ながら、横でぶつぶつ言っているエンクに目を向ける。先ほどの言葉がまだ頭に残っているのか、何か否定的な事を言っている。聞く気は無いので流しているが。

「まあ、そういう事なら、早速始めたいんだが、構わないか？」

「え？ああ、いいわよ。それなら今度こそ、私の力を見せてあげるわ！消し炭になりなさい！」

「・・・剣を作るんだが、その過程で消し炭にはならんだろう。」

「・・・剣？ああ、そっちか。」

今思い出したかのように言うエンク。それを呆れながら見るユーリ。

「お前は何の話だと思ってたんだ？」

「そんなの勝負に決まってんでしょ！」

「はあ。（まさしく災難だな、厄介な。）」

つつましやかな胸を精一杯張りながら、断言するエンクを見ながら、ため息をつくユーリ。

「（これは思った以上に時間がかかりそうだな。）」

ユーリは正直に面倒事に首を突っ込んだと理解した。なぜかそう思うとゲンの対応も、こちらへエンクをなすりつけるための行動の

ように思える気がしないでもない。どちらにせよ、疲れることには間違いない。

「（やれやれ、この選択は失敗だったな。これからどう対応していったらいいんだろうな。）」

此方に指を向け、戦うように言って来る存在から目をそむけ、途方に暮れる。その状況はリコが仲裁に入るまで続く。

そして、ようやく剣を作るという話になり、とりあえず作業に移ることになったのだが、そもそもこういった作業に使うものは、元々用意してないとすぐに用意できる物では無い。

「それでどうするの？言い忘れてたけど、元々、材料自体もそんなに残ってないのよ。師匠が出かけて、店も空ける気だったからね。用意するなら、ちょっと時間かかるけど。」

「まあ、材料は如何にかするさ。」

「？何かあてでもあるの？」

「まあな。さて、オロチ！」

ユーリの呼び声に従い、炎忍オロチがその姿を現す。

『・・・主、ご命令を。』

膝をつき、自身の主であるユーリの言葉を待つ。鬼岩洞でも感じた事だがそれを、固いな、と思いながらも頼みをする。

「ああ、お前の炎の力を借りたいんだが、構わないか？」

『主が言うのであれば、何なりと。』

「・・・ち、ちょっと、アンタ！何よそれ！！」

側で見ていたエンクが目の前の現象に我を取り戻し、ユーリに詰問する。

「ああ、召喚術と言う力だが。」

「アンタ、こんな事も出来たの？・・・ってアンタ！さっきは手加減してたわね！」

「・・・なんのことやら。」

「アンタねえ。私相手に手加減とかいい度胸じゃない！」

「とりあえず、今はこっちを進めてもいいか？」

若干げんなりした顔で鍛冶場を指さす。それを見て思い出したのか、唸りながらも了承するエンク。

「・・・後で、もう一回やりなさいよ。」

「そのうちな。」

とりあえず、今はどうにかなったらしい。だが、既に再戦の話が上がっていることには目をつぶる。

「ああ、それで、お前にも手伝ってもらいたいんだが。」

「わ、私?!」

「お前以外に誰がいるんだ?リコは常夜の石の中に行ってるし。」

リコは訓練と言って、常夜の石の中に行った。この事についても聞かれたので、既にエイナの事と合わせて説明済みである。

「し、しょうがないわね!で、私にやってほしい事って何?」

なぜかどもりながら、先を促してくる。ユーリはそんなことは気にせず、先を話す事にする。もう、色々と面倒くさいのでさっさと進みたいのだ。

「ああ、それはな・・・」

「まったく、なんで私がこんなことを。」

『・・・』

足りない材料、主に鋼などだが、それはエンクとユーリの召喚獣

の能力で解決する。砂鉄を操り、オロチの炎で玉鋼を作り上げる。先程エンクに頼んだのは、砂鉄の収集と餞別。そして加熱はオロチに一任する。これで、簡易的ながらタタラ吹きを再現する。

とは言っても、この場合、エンクの能力で、砂鉄はこの周囲で質のいいものが割と早く手に入る。あの砂鉄と金属片の山の中、正確に一本の剣を引き寄せる事が出来るのだ。これくらいは可能だろう。念のためにライザーも呼び、質の確認作業をさせる。質が悪いのなら、ドリトルで穴でも掘り、人の手が入っていない部分に手を出そうとも考えていたのだが、そこは問題なかった。さすがにそう言うのは考えてこの場所で鍛治をしているのだろう。

そしてオロチの炎は、本人の意思で温度を変える事が可能なので、風を送り温度を操作する鞴がいらず、一定の温度を維持することもたやすい。そして、オロチ本人も経験があるらしく、手際よく完成する時間を見極めていた。そのため、玉鋼そのものは本来の工程をたどるよりもずっと早く、楽に手に入った。

そして、いよいよ鍛造に入るのだが・・・

「まったく、そんなに急いで剣なんて作ろうとしてもうまくいく筈ないでしょ！」

「まあ、そうかもしれないが、言い争いを続けるよりかはずっとましだと思うぞ。」

「うっ！・・・わ、悪かったわよ。もう！過ぎた事をとやかく言わない！」

「・・・はあ。」

「あのね！その溜息は何よ！」

「お姉ちゃん！！」

「え、ああ、ごめんごめん、判ってるからね、リコ。」

「本当に？」

「・・・はあ。」

『主、これを。』

「ああ、ありがとう。オロチ。」

『いえ。』

先ほどから、この調子なのだ。何かあると直ぐにこちらにかみついてきて、それを此方に戻ってきたリコが諌める。オロチが何かと手伝ってくれるのは本当に有り難いが、正直、疲れる。なぜ、ここまで目の敵にされるのか、全然心当たりがないのだが、まさか出会った人物全員にケンカ売ってるのだろうか？だとするなら、本当に面倒な性格だと思う。

「もう！とりあえず進めるわよ。これじゃ何時まで経っても終わらないじゃない。」

「・・・（お前のせいなんだがな。）」

「何か文句でもあるの。」

「いや、別に・・・」

「そうそれなら作業を続けるわよ。」

「・・・」

もう我関せずと言った感じで流すユーリ。それを見て、何かと突っかかるエンク。ましになったとはいえ、所々でそんな様子が見られる。結局リコの仲裁も目立った成果が見られないようだ。その間にもユーリは手を休める事無く作業に没頭する。その作業工程は素人、とりわけ初めての者の手際ではない。全てやった事がない筈の作業を、まるで息をするかのように行う。

「・・・ねえ、アンタ。」

「・・・なんだ。」

「本当に初めてなの？この手際見てると、とてもじゃないけど、そんなふうには見えないんだけど。」

「・・・何をするか自体は知ってたからな。後は失敗しないようにするだけだ。」

「なんで知ってるのよ。」

「以前に見た事が有る。それと本とかで読んだ。」

「そうなんだ。」

これは実際の話だ。この世界に来る前に地元の鍛冶屋に行った事が有り、その時に近くで見学させてもらった事が有るのだ。それにその後に興味がわき、資料なんかを調べたりもしたのだ。なので、普通に作る分には何の問題も無い。唯一問題があるとすれば、自分がそれをきちんと覚えていて、実践できるかどうかという事だが、現状、何の問題も無く進んでいる。

「でも、なんか納得いかないなあ。私はこれができるようになるまで、かなりかかったのに。」

「そう言われても困る。それに、俺には他にする事が有るからな。少しくらい急ぎもするさ。」

「いや、急いだからって、覚える速度が速くなるわけじゃないでしょ！・・・全くアンタって色々とおかしいのね。」

「（お前には言われたくない。バトルジャンキーか、バーサーカーみたいなやつには。）」

「？何よ？」

「なんでもない。」

「そう。」

時折雑談をしながら、エンクやオロチが細かい捕捉なんかをしながら、作業は進んでいく。言われる事を正確にこなし、着実に完成へと近づいていく。ちなみにエンクとオロチはあんまり喋らない。と言うかオロチが口を利かないだけなのだが。ユーリ以外だと同じ召喚獣とは時折話す、とりわけコパルディアとはよく言い合いにな

るが、他の人物とはあまり話さない。少しそれが気になった。

「オロチ。」

『はっ！』

「別に俺以外と話しても構わないし、もう少し肩の力を抜いてもいいんだぞ。」

『・・・しかし。』

「大丈夫だよ。みんな気のいい連中だし、もう少し楽しんだらどうだ？」

『・・・』

「まあ、考えておいてくれ。直ぐに実践しろとは言わないからさ。そうやって真剣に向かい合ってくれるのも有り難いからさ。」

『・・・主がそう言うのであれば、一考してみます。』

「ああ、急に悪かったな。」

『いえ、お心遣い感謝いたします。』

そういって、離れるオロチ、それを見ながら、まだ、時間がかかるかな、と内心思うユーリ。元々、忍びと言う存在である以上、仕方ないものではあるのだろう。だが、共にいる以上はもう少し砕けた方が此方としても付き合いやすい。やはり、こういった待遇は慣れない。

「アンタって、結構、周り気にしてんのね。」

それを見ていたエンクが話しかけてくる。手を止める事無くユーリは聞き返す。

「何が？」

「だって、アンタ、さっきの、えっとオロチだっけ？あの子の事、すごく優しい目で見てたじゃない。」

「当たり前だ。仲間だからな。気に掛けもする。」

「ふ～ん。」

そう言いながら何か言いたそうにするエンク。だが、そんな表情に気付かず作業に取り組むユーリ。それは会話を交えながら、進んでいく。そして、それから時間が経ち、金属音のみが鳴り響いていく。誰も何も喋る事は無い。エンクも、流石に邪魔する気は無く、今は席を外している。と言っても隣の部屋にいるだけだが。

聞いた所、この世界では槌で打ち上げて作るのが主流らしい。まあ、それは知っている、終いにはドリルまで同じ製法で作っているようだし、どうやって溝を入れたりしているのやら、そのうち聞いてみようと思う。

「さて、こんなものかな。」

そんなことを考えていると、割といい具合に打ち上がった。仕上げはライザーとドリトルを呼び、細かな部分を仕上げる。そして更

に時間が経ち、一振りの剣が出来上がる。

「あっ。できたんだ。やったじゃない！」

隣から出てきたエンクが素直に褒めてくる。やはり、自身も鍛治をしているだけに、こういった部分は偽りなく真剣に対応するのだろう。

「ああ、まあはじめてにしては上出来だな。」

「というか、初めてできちんと仕上がってるアンタがおかしいんだけどね。しかも結構いい出来だし。実戦でも十分使えるじゃない、これ。」

「というより、実戦で使えないと俺としても困るんだが。元々そう言う目的で作ったんだし。」

「ああ、そう言えばそうだったわね。でもさ、アンタ、本格的に鍛冶師目指したりしないの？この腕だったら直ぐに頭角を現すと思うけど？」

「別のそんな事は無いし、目指す気も無いさ。他にやる事が沢山あるからな。」

「ふ～ん、なんかもったいないわね。」

「へえ、褒めてんのか？」

「あ、アンタを褒めてるんじゃないのよ！ただ、私は鍛冶師の視点で言ってるだけなんだから！！そこ、勘違いしないでよね！」

「はいはい。」

「・・・なんか腹立つわね。アンタ！！やっぱり私と勝負しなさい！」

「だから、やらないって。」

なんだかんだ言いながらも、仕上がった事を評価するエンクと、その後の勝負について内心どう誤魔化そうか悩むユーリ。二人の会話はこの後も少し続く。

「・・・もう行くの？もう少し休んでいってもいいんだけどね。どうせ、仕事もないし。」

赤い髪を揺らしながら、エンクが見送ってくる。

「気持ちは有り難いが、こっちもやる事が有るし、ここで結構時間喰っちまったからな。少し急いでいかないとな。」

「そう残念ね。まあ、今度会ったら私ときちん勝負しなさいよ！」

「覚えてたらな。」

そういって、出来上がった剣を掴み、歩いていく。剣を打ち上げた以上、もうここに居る必要はない。元々はここに来る予定は無か

ったのだ。それ故に少し急がなければいけない。だからこそ、完成した後、程なくして出発する支度を整えたのだ。

「さて、とそれじゃ、いくとするか。」

「気をつけていきなさいよ。なんか森に行って帰ってくる人がほとんどいないっていうし。」

「ああ、知ってる。」

そのことなら、身をもって経験済みだ。それに今度は前のように引き返す気も無い。

「それと、何か、変な唸り声が聞こえるようになったって、この前狩りに行った猟師が言ってたから、気を着けなさいよ。」

「唸り声？」

なんだそれは？その話は初耳だ。またなにか原作との齟齬が出来たらしい。しかも間違いなく厄介事の類だろう。

「ああ、なんでも、迷いの森の奥から何か苦しむような、変な声が聞こえるらしいのよ。少し前までそんなことなかったのに。後、その声が聞こえると決まって変な植物が生えてるとか。」

「変な植物？」

「なんでも、黒い茨らしいよ。」

その話を聞いて、内心眉を潜める。

「（つまり、もう半分自由に行動しているって事か。原作でもそんな部分はあったけど、この地点だとまだ言うほどじゃない筈なんだが。もしかしなくても、浸食が予想以上に進んでるって事か。）」

まだ、今のままなら、ある女性により、大半の力は阻害されているはず、そこも何か違いがあるのかもしれないが。もっと簡単に思いつく事ならば、その女性が抑えているのにもかかわらず、原作以上に力を持っている事。

それならば、鬼岩洞であの茨が姿を見せた事の裏付けにもなる。本体が何であるかもユーリは知っている。それ故にあの時狙われたのはユヅキであるかもと考えたのだ。だが、良く考えればエイナである可能性もある。

エイナの体そのものは、未だ転生の塔で捕まっているはず、それ故に向こうはエイナが何者かは恐らく知っているだろう、だからこそ先に潰しに来たのかもしれない。なんにせよ、急ぐ必要性がまた増えたらしい。ともかく迷いの森に急いで向かい、抜ける必要がある。

「（まったく、楽はさせてくれないな。）」

「どうしたの？」

「いや、思ったよりも手間取りそうだと思ってな。」

その言葉に何か思案するように俯いた後、視線を合わして、エンクが驚くべきことを言って来る。

「・・・ねえ、私もついて行こうか？」

「は？」

突然言われた言葉に呆気にとられる。その態度を見て、エンクがかぶせるように言ってくる。

「べ、別のアンタが心配とかじゃないからね！私もその唸り声は気になってたし、アレスパの町には届け物があるのよ。」

「届け物？」

とりあえずエンクのセリフ前半は流して、気になった部分を聞く。

「ええ、まあ、急ぎってわけじゃないんだけどね。刀の発注があってね。まあ、師匠が直ぐに終わらせちゃって余裕あるし。」

「で、突然なんでまた？」

「ま、まあ、届けるのはいつでもできるんだけど、今のアンタ見てるとなんか頼りないし、リコが一緒に居るのに放っておくわけにはいかないでしょ！」

「・・・」

「な、何よ。私はリコが心配なのと、届け物があるから行くだけであって、アンタがどうとか関係ないんだから！」

必死に言って来るエンクに呆れながら対応する。

「そんなのは知ってるよ。そんな事より、勝手に家開けていいのか？ゲンさんには何も言って無かったと思うが。」

「ああ、そんなの構わないわよ。好きにしろって言ってたでしょ。きちんと戸締りはするし、結界もはっとくしね。」

「結界？」

「ああ、私はそう言う力もあるのよ。なんでか走らないけどね。」

「（まあ、麒麟って結構力のある存在だし、不思議な事じゃないんだが、なんか納得いかないな。）」

種族を考えれば理由としては判るが、目の前の人物の性格を考えると、少し納得しづらい。

「何よ！その顔は！」

「いや、なんか意外だなと。」

「どういう意味よ！」

「いや、攻めが主なんだと思ってたからな。」

「まあ、私としてもそっちの方が好みだけど、別に苦手ってわけじゃないわ。」

「へえ、少し見直した。」

「そ、そう。」

そう言われ、若干頬が朱に染まり、照れるエンク。

「けど、ゲンさんが帰って来た時に入れないとかないんだろうな。」

「ああ、心配いらないわよ。あの人私より強いから、私の結界位、簡単に砕くわよ。」

「ああ、やっぱ強いんだな。あの人。」

「そりゃそうよ。私より弱い奴なんかに教えなんて請わないわよ。」

「まあ、確かにそんな感じはする。」

エンクを見ながらそう言う。

「なんか引っかかるけど、まあ、そういう事だから問題ないわ。ちなみに拒否権は無いわよ。」

「・・・なんでだよ。まあ、そういうなら断る理由も無いな。」

「そう、それじゃ少し待ってなさい」

そう言うと、準備してくるといい、中へと戻って行く。リコは一緒に行ける喜ぶだろうが、ユーリとしては、また勝負がどうとか言われるんじゃないかと、少し道行が心配になった。

しばらくして、準備を終え戻ってきたエンクと共に家を出る。その格好は特に変わっていないが、新しいものに変えたのだろう。汚れが無くなっている。その途中、店で買い物をしてくるといい、エンクは買い物に行き、リコも一緒について行く。

ユーリとしては、既に買い物を終わらせていたので二度手間になるのを少し、躊躇ったが、そのくらいいいかと口を挿まない事にする。そしてしばらくして、店の方から、賑やかな声が聞こえてくる。

「ほら！モグ郎！可愛いと思わない？」

「あはは・・・そう、だね。」

「ああ！こっちのはこの前買いそびれた限定版！あれもいいわね。」

そこにはぬいぐるみやらキーホルダーに全力を注いでいる珍客がいた。

「（あいつは何をしてるんだ？旅の支度じゃないのか？）」

ユーリの疑問に答える筈も無く、視線の先では、あっちこっちとぬいぐるみを見ては、テンションがダダ上がりになっている人物を見て、真面目に考えている自分が悲しく思えた。一緒にいるリコも引いているのが判る。

ちなみにモグ郎と言うのはぬいぐるみ、又はキーホルダーなどになっているマスコットの名前である。その姿は物によって差はあるが、サングラスをしたモグラだ。ちなみにどう持っているのかは知らないが、コルトパイソンを持っている。どんなモグラだ。余談だ

が他にもペンダントや腕輪、チョーカーなど、その形は多岐にわたる。

「（どこがいいんだ。さっぱりわからん。）」

人によってはかわいいとか思うかもしれないが、ユーリは特にどうとも思わない。というより、仮にかわいいと思ったにせよ、あれだけ派手にはしゃがれるとさすがに引く。

「どれがいいかな。こっちもいいし、あれも捨てがたい。でも手持ちだと足りないし。」

あーでもない、こーでもない、と悩みながら右往左往するエンクを冷めた目で見るユーリ。リコはその視線に気づき、ユーリの側へと帰ってきている。だが、エンクは気づかず、買うものを吟味している。

「・・・はあ。」

諦めたのかユーリは視線を下げ、溜息を吐く。そして顔を上げると店の方へと向かう。そこには、ようやく買う対象を二つにまで絞ったエンクの姿があった。

「う～ん、一応金銭的に余裕はあるけど、買えるのはどっちかにしといたほうがいいわよね。どっちにしようかしら。」

「・・・まだ、かかりそうか？」

「え？ああ、も、もう少しだけ。」

その言葉を聞くと、躊躇無く店主に向かって口を開く。

「はあ、店主、申し訳ないけど、両方もらいたいんだが？」

「え？」

驚くエンクを余所に、最後まで候補に残っていたキーホルダーを両方購入する。そして、購入し梱包されたそれを、エンクへと渡す。呆けたように箱とユーリの顔を交互に見るエンク。ユーリは直ぐに振り向くとリコの方へと戻る。それを見て我に返るエンク。

「ち、ちょっと。」

さすがにこのままにするわけにもいかず、呼び止めるエンク。その声に振り向くユーリ。

「・・・どうかしたか？」

「・・・どういうつもりよ？」

「あのな、これ以上時間を掛けられても困るだろう。だったら、さっさと買った方がましだ。だから、買った。それだけだ。」

そう言って再びリコの方へ歩いていくユーリ。エンクはその言葉を聞き、しばらく視線を彷徨わしたが、俯き、ぼそっと呟くようにエンクの声が聞こえた。

「・・・ありがとう。」

それを聞き、内心肩をすくめながら、リコの方へ戻るユーリ。し

かし、そこに不機嫌な顔をしたリコがいた。

「どうした？」

「むぅ～」

「？」

何が何だかわからないユーリは、リコの機嫌を取るのに四苦八苦する。最終的に今度何か作るという事で落ち着いたが、ユーリには結局判らないままだった。そんな様子を見ながら、エンクはユーリを見据える。

「（まあ、悪い奴ってわけじゃないし、リコも懐いてるし、そこいらの男よりかは骨もあるわね。）」

自分の中で、今の所判っている中でのユーリの評価を下す。その手には先ほどのキーホルダーが握られている。実際異性に贈り物をされたのは初めてなのだ。と言うか、試験とは言え、負けたのも初めてなのだ。必要以上に興味を持つのも、エンクからすれば当然と言える。

ちなみにエンクはゲンとは戦った事は無い。自分より強いとは漠然と判ってはいるものの、店を開ける事が多く、自分も武器製作をしていたりするために、結局戦うことなく今にいたる。それに教わっているという恩があるので、無理に挑む気も無い。

「（まったく、不思議なやつね。それにお人好しみたいだし。私だったらどうしてたかな。）」

先ほどの自分を思い出して、若干の気恥ずかしさと共に思考する。自分ならば、こういった場合、初対面にも近い人物なのだし、買い物が終わるまで待っているだろう。そして終わった後文句の一つでも言うだろう。さすがに買ってあげたりまではしないだろう。

それを躊躇なく買った青年は、余程のお人好しだろう。だが、エンクも相手を放って先へ行くという選択をしない時点で、十分にお人好しの部類なのだが、本人はそこまでは気づかない。

「（ま、まあ、せっかく手に入ったんだし、無下に扱うのも失礼よね！理由はどうあれ、私に買ってくれたんだし。）」

少し慌て気味に結論付ける。傍から見ているリコからすると、その感情は判りやすいにも程があるが、ユーリは面倒を起こしたくないからか、スルーしている。最悪話しかけられても流そうかと画策していたりする。色々と終っている。

「（そういえば、ハンスの様子でも少し見ておいた方がいいか。いや、エイナのためにも今を離れておいた方がいいのか？）」

そして、ユーリの頭の中には、少し前の出来事が思い浮かぶ。それはエイナからしてみれば、全然関係すらなくむしろ、事態をややこしくするだけの事だが、この時は気づいてもいない。ただ、何かが間違っているのと、このまま放っておくとマズイというのが判っているだけだ。

とりあえず、今は会うのをやめておこうという結論に至ったユーリが、エイナのこれからの事を心配して様々な事を考える。その事により、益々、エイナの想いを曲解する。

「（まあ、アレスパの町に行けば出会いもあるにはある、か。それなら・・・）」

そして、勝手にユーリの中で妙な計画が打ち上がっていく。無駄に色々考えているらしく、エイナが気づかないのをいいことに、事態は混迷の一途をたどる。

「ねえ、お兄ちゃん。」

だが、そんな考えを進めていると、横からリコが袖を引いてくる。何の用かと思いリコの方を見る。

「どうした？リコ。」

「これからまたあの森に行くんだよね？」

「ああ、そうだな。」

「でも、あの森に入ってもまた、前みたいに進めないんじゃ・・・」

リコが不安げな声で話しかけてきた。以前の事を思い出しているのだろう。確かにあの時は進めなかったが、本当の所、一度失敗して直ぐに引き返しただけで、特になにかしたわけではないのだ。だから進もうと思えば、どうにかする方法もある。それを掻い摘んでリコに説明する。

「何とかなるさ。俺だって、ただ今まで何もしてない訳じゃないしな。方法も考えてるさ。」

「そうなの？」

「ああ、だから大丈夫だ。とりあえずは戻された場所まで行かないとな。あの場所まで行かないと意味がないし。」

「判った！それじゃ、急ごう、お兄ちゃん！！」

「ああ。」

そう言って、走り出したリコの後を追う。不安はまだあるだろうが、それでも幾らかはましになったのか、笑顔が見えている。そう思っていると、隣にエンクが歩いてくる。

「で、実際の所、迷いの森を抜ける事ってできるの？結構、嫌な話をよく聞くんだけど。」

「お前は迷いの森を越えた事は無いのか？」

「ないわね。そこまで遠出する必要なんてないし、この依頼も師匠が受けた依頼だから、詳しくは知らないんだけどね。」

「そういえば、その依頼をしたのって、アレスパの町の住人か？」

「そう聞いてるけどね。おかしいとは思ったのよね。通れもしないのに、なんで依頼なんてできたのか？とか。」

話を詳しく聞くと、ゲンが森を越えて依頼を受けたのではなく、村に戻ってくる時に受けたものらしい。だからその依頼人の事が少し気になった。どうやってこちらに来たのか。

「（さて、またややこしくなりそうだな。本当に思った通りにはい

かないな。）」

これからの旅は、今までよりも面倒だと気を引き締める。それでも諦める気は全くない。大変だからと言う理由で、歩みを止めるつもりはない。

「（こんな所で止まってられない、よな。）」

例え、どんな難関でも達成できないという訳では無い。自分がそんなものに挑むことになるとは思ってもみなかったが、今となっては本当に些細なことだ。最後までやりぬいた結果、成功したか失敗したかが判るのだ。今の状況で如何こう決められるはずもない。それに目指す目的はずっと向こうにあるのだ。

～常夜の石の中にて～

これは、ユーリが作業している間、リコが訓練と言って常夜の石に入っている間の会話である。

「エイナお姉ちゃん！会いに来たよ！」

そう言って、常夜の石の中のエイナを探す。その言葉に奥の部屋からエイナが出てくる。

「うん、訓練するんだっけ？」

既に外の様子を見ていたエイナは装備を整え、リコを待っていた。

「うん！もっと強くなりたいから、それに、ユーリお兄ちゃんの手伝いはできそうにないから。」

少し残念そうにそう呟く。専門的な知識や経験が無い以上、鍛治に置いてはユーリの邪魔にしかならないだろうと考え、それならばとエイナとの訓練をすることにする。リコが悩んだ末に決めた事である。

「まあ、そうだよね。私もああいうのはちょっと無理、かな。」

エイナも苦笑いしながら頷く。エイナ自身こういった事は向いていないと思う。単に絡まったものを取るとか、簡単な作業ならできるだろうが、物作りとなると話が変わる。なにせ、今作業しているユーリ自身に止められたし、作った物に関しては訓練と言う名目で破壊される。さすがにこれはひどいと思ったが、その後、ユーリと一緒に作業する事が出来たので、本人としては満足している。

「それに、思いついた事が有るから、エイナお姉ちゃんに協力してほしかったの。」

「うん、なにかな？」

エイナはリコの言葉を聞くと優しい笑みを浮かべ次の言葉を待つ。

「私にも、憑依召喚っていうのを教えて欲しいの。」

「うん、わかった。うまく教えられるか判んないけど、頑張ろうね！」

一番詳しいユーリは今作業中、ならば、必然的にもう一人の憑依を扱える存在であるエイナに思い当たる。それを聞いたエイナは快く協力を申し出る。

「うん！」

そして、憑依についてのレクチャーを受ける。そして、一通りのレクチャーとリコの召喚獣の承諾を得た後、訓練を始める。

「それじゃ、始めるよ。」

そう言ってリコの姿が融機人形態になる。ここからリコの考えた方法。その姿に更に濃密な気配が宿る。その姿が発光し、変化する。そして、装甲がそれに合わせ、組み変わる。これはユーリも想定していたものらしく、それに合わせた姿へと機能を変える。

「これって・・・」

そこには、以前と異なる姿をしたリコがいた。その後、リコと模擬戦をした後、エンクの事を話し合い、またユーリの周りに女性が増えるかもと戦慄する二人。そして、それを見張るために外へと戻ることになったリコ。いつの間にやら協力体制になっている。とりあえずは休戦したらしい。いつまで続くかは謎だが。

「（私もまた一つ強くなったんだ、そうしたらお兄ちゃんも褒めてくれるかな？）」

出来上がった自身の新しい姿を思い出しながら、前よりもユーリの力になれるだろう事を考え、その顔に笑顔が宿る。その後、外で

はエンクとユーリの言い争いが繰り広げられ、その仲裁のためにその事を言う機会は無くなっていた分わけだが。

鍛冶への挑戦　勝ち気な弟子の試験（後書き）

新キャラがどんどん出てくる。なんでこうなったんだろう。後、エンクと言う名前は麒麟関係です。判った人はいるんでしょうか？まあ、元から磁力関係の力を持ったキャラは出す気でしたが、なぜかこういう結果に。さて、これからどうしよう。

狂気の森　異質な変化　破滅の暗示（前書き）

さてさて、今回は思ったよりさらにストーリーは進まない。何故だ。この話で森を越える筈だったのに、終わらない。ぎりぎり新キャラが出たといった具合でしょうか。なんだかな。そして、作者もこの作品がどこに向かってるのか判ら無くなってきた。

狂気の森　異質な変化　破滅の暗示

村から出た後、旅立ちの野を進む。以前進んだ道を辿っていく。そして、その先、まだ見ぬ場所を目指して。リコが先頭を歩き、その後に続くようにユーリとエンクが歩いていく。その歩みは確実に前へと進んでいく。止まる事は無く、そして、一度諦めた事に対する気負いも無い。

「そういえばさ。」

「何だ？」

唐突にエンクが話しかけてくる。それに特に驚く事も無く返すユーリ。

「いや、アンタって記憶ないのよね？」

「・・・いきなりなにを言うかと思えば。」

「いや、その割には冷静と言うか、躊躇いがないというか。なんていうかさ、そう言う奴ってもっと迷いとかあると思うんだけど。」

「・・・」

その言葉を聞き、内心顔を険しくする。

「（まあ、そうなるんだろうな。実際に記憶が無いならだけど。それに、この世界についても粗方は知ってるしな。まあ、最近は細かい展開が読めないけど。）」

そう、今更だが、ユーリは記憶を失ってはいない。失っておるのはエイナのみで、自分はいたって問題ない。敢えて言うのなら、この世界に来た瞬間、その事のみが全く分からない。

「（そう言えば、妙な夢を見たんだっけ。）」

この世界に来た時の事を思い出し、それを思い返していると、不思議な夢を見たのを思い出す。それは、ノヴァに洞窟に飛ばされた直後、プラネタリウム、もしくは宇宙空間みたいな所とでもいうのだろうか、そこに見慣れぬ少女が二人いた。どちらも自分の記憶にはない。

「（この期に及んで、あの夢が実は無関係でした。なんて事は無いんだろうな。きっと。）」

既にあの夢はこの先、自分に何か関わってくる夢なのだとなんとなく思った。こういう場合、無関係な夢を見る方がきっと珍しいのではないかと思う。

「（なんて、漫画とかゲームだけだよな。そう言うのは・・・はあ、全てに当てはまりそうな状況に居る自分が嫌になって来るな。）」

とりあえず、あの夢がどう関わってくるにせよ、直ぐに対応できないと、もしもの場合、周りをまきこむ事態になるかもしれない。それはさすがに見過ごせない。

「ち、ちょっと！」

そんなことを考えていると、隣にいるエンクが焦った感じで声を

かけてくる。それを不思議に思い、顔を向ける。

「どうかしたか？」

「あ～その。悪かったわよ。そんなに真剣に思い悩むなんて思わなかったから。」

どうやら、今の思考に没頭していた姿が、エンクには思い悩んでいる姿に見えていたらしい。とりあえず、その認識を正す必要も無いので、気にしないように言っておく。

「そんなに、深く受け取っては無いからさ。気に病む事は無いさ。」

「けど。」

「いいんだよ。気にする事は無い。特に気を悪くしたなんて事は無いしな。ただ、以前の事を色々思い出してただけで。」

「へえ、ここに来るまでの事か。面白い事とかあった？」

「・・・疲れる事なら、色々あったな。」

少し疲れたような声で返すユーリ。そこには本当にどうしようもないと言った感じで、げんなりしたユーリの姿があった。

「・・・なんかいろいろ大変なのね。」

「・・・ああ。」

もちろんその疲れる部分でも、特に多くの比率を取っているのが、

現在自身の半身となっているエイナがらみなのは言うまでも無い。むしろ、それ以外だと、その場のみで終わるために、思い悩み続ける事などあんまりない。茨や旅の事は例外だが。

「お兄ちゃん！」

「さて、早速賑やかになって来るな。」

「そうみたいね。」

リコの叫びと共にモンスターの群れが見えてくる。

「早速お出ましってわけね。やってやろうじゃない！」

エンクは背後の槍を引き抜き構える。

「行くよ！ドリトル、ライザー！！アクセス！」

リコはライザーとドリトルを召喚し、融機人へと姿を変える。

「さて、初めての一振りの出来はどうかな。」

そしてユーリは、自身が打ち上げた剣を鞘から抜き放つ。その剣は、赤い火の粉を放ち、刀身すらも赤に染める。それは、次の瞬間、剣を包む炎となって辺りを明るく照らす。その剣の銘は朱砂。

「へえ、結構いい仕上がりだな。」

「なんで実践で使えるほどの代物が初心者のアンタに作れるんだか、本当に疑問に思うわ。しかも最初に一振りで。アンタ実はどこか狂

ってるんじゃないの？もしくは捻子が一個外れてるとか。」

「どさくさに紛れて怖い言い方をするな。まあ、うまくいったんだから別にいいだろうに。偶々だろ。」

「偶々、ねえ。」

「お兄ちゃんたち！来るよ！」

その声が聞こえると同時に、モンスターが此方へと向かって来る。三人共が戦闘態勢に入り、各々がそれぞれの戦闘に入る。それは時に個人の、時に連携を踏まえ、敵の数を減らしていく。

『スクリプト・オン！』

リコの声と共に撃ちだされた複数の小型ドリルがモンスター達に襲撃をかけ、その威力を持って体勢を崩す。その勢いは爆撃にも似ている。そこを逃さず、エンクとユーリが攻めたてる。

「雑魚は引っ込んでなさい！！」

エンクの槍が横なぎに放たれ、周囲のモンスターを紙屑のように吹き飛ばす。振り切られた槍の後には地に伏したモンスターが残るのみ。

「ふっ！」

そして、ユーリの手にした剣が斬撃時に炎を纏い、敵を切り焼く。その効果は、その切断面から尚も燃え上がる炎により引き起こされる、火傷。止まらぬ火力に傷を焼かれ続ける痛みは、いったいどれ

ほどの物か。その答えは、唸り声をあげ目に見えて動きが遅くなったモンスターが証明していた。

「（属性は炎、効果は火傷。割とありがちだけど、結構使えるな。）」

それを眺め、冷静に自身の剣を見極めるユーリ。製作過程でどんな剣を作るかは頭に浮かんではいたものの、それがきちんと仕上がっているかを実戦で判断する。元々実戦で役に立つものでなくては意味がない。飾りだけの剣では自分の、引いてはエイナの目的には届かない。

「（オロチを呼んだ甲斐があったな。それに、もう一つの効果についても調べて置かないとな。）」

武器などを作る場合、召喚獣の力を加えたりすると、固有の能力や特性が付く事が有る。オロチを呼んだのは時間短縮の意味もあるが、その本来の意図は属性付与。これを同時にできる召喚獣であったためにオロチを迷いなく選んだ。そして、エンクに協力してもらったのもきちんと意味がある。

「来い！」

その声と共に周りに磁場が発生する。そして、その磁場に群がるように砂鉄が集まる。そして、その砂鉄が集まり、高速で回転する刃となる。言わずもがな、これはエンクの能力で砂鉄を集め、選り分けた際にエンクの力が砂鉄に宿り、それを鋼としたために付随した能力。磁場操作。

「飛べ！」

号令と共に砂鉄が弾丸となり、モンスターの群れに襲いかかる。それは一方的な一斉掃射を思わせ、敵を殲滅して行く。その速度はモンスターの行動を全てキャンセルさせ、仰け反る事さえも許さぬほどの連射。ただ、その光景を見て黙っていられないものが一人いるのが問題だったりする。

「ちょ！何で私の力をパクってんのよ！」

遠くでそんな声が聞こえたが気にしない。気付かない方が悪い。そう思い、そこで思考を完結させる。視界の端で、角を生やしたエンクが、砂鉄の弾丸をこちらに向かって飛ばしているようにも思うが、別に何の被害もないし、無視を決め込んでおく。

「って、人の話聞けっていってんでしょ！無視すんなやコラァア！」

その声に明後日の方を向いて徹底的にスルーしていたユーリが根負けする。さすがにレールガンの体勢に入られると無視しづらいものがある。

「・・・はあ。で、何か用か？」

「そんなの決まってんでしょ！アンタ、一体どういうつもりよ！」

あまりにもしつこく言って来るので、渋々答える事にする。流石に勝手に利用して、この対応は酷いと思わないでもないが、そもそも、何が減るわけでもないし、あの試験と言う名の強制戦闘は、結果そのものはともかく、戦闘を行うという事自体疲れたのだ。これくらいの見返りはあってしかるべきだと思う。

その事を話すと、何か言いたそうではあったが、最終的には納得したらしい。代わりにいつか戦う事を約束させられた。

「とりあえず、その剣の事は流してあげるから、絶対に戦いなさいよ！！」

「いずれな。それはそれとして、戦え。」

面倒この上ないという顔をしながら、砂鉄の弾丸を放つユーリは手の止まっているエンクに一言いう。その言葉に不満そうにしながらも稲妻を放射し、モンスターを焼き尽くす。その攻撃された場所は地面が焼け、焦げた匂いがしていた。八つ当たりが入っているのは言うまでもない

「まったく、話は戦闘が終わってからで良いだろう。」

「今の言葉覚えてなさいよ！直ぐに終わらせてやるんだから！」

「そうかい。」

その言葉と同時に、二人は残りのモンスターに向かって駆け出す。その速度はお互いに変わらず、エンクが雷槍を作り上げ、ユーリはストラを剣に収束する。

「消し飛びなさい！！」

「失せろ！」

雷槍がモンスターの群れに放たれ、その大部分をごっそりと吹き飛ばす。着弾と同時に、圧縮された雷撃が放射状に広がり、モンス

ターに麻痺と言う名の追撃を入れる。今、モンスターの状態は満身創痍と言っても過言ではない。そして、そこに情け容赦なく止めが放たれる。

ストラを纏った剣を薙ぎ払う。横に振り切られた剣は、ストラと炎を撒き散らし、動けないモンスターの命を無慈悲に刈り取っていく。その後ろに追い打ちのようにリコが左右の手にドリルを展開し、その威力を持って突撃する。

『これで、決めるんだから！！』

その突撃により、残っていたモンスターがその活動を停止させ、戦闘が終了する。大した痛手を負う事も無く勝利する。

「よかった。誰も怪我しなくて。」

「当たり前じゃない。これくらい朝飯前だって！」

「まあ、そうだな。（朝なんてないのになんでその言葉知ってるんだ？）」

元に戻ったリコの言葉に自信満々に答えるエンクと、疑問を覚えながらも簡素に答えるユーリ。その疑問は恐らく生前の記憶か知識が残っているのだろうと思う。どちらにせよ、朝も夜も無い筈なのにその言葉はそのものはこの世界にきちんとある事からも、生前の情報が全くない訳では無い。それ故に、この世界にはここの常識と人にもよるが、生前に持っている知識を織り交ぜた認識がある部分がある。

「（どちらにせよ、放っておけばこの世界に染まるだろうが。）」

時間が経ってしまえば生前の知識も薄まり、この世界の情報に染まり、全てなくなってしまうだろうが。それでも、先人たちの想いが少しでも息づいている証拠にもなる。この世界に呑まれた者、既に転生した者。経緯は様々だろうが、もうこの世界にはいない者達が今へと続くこの瞬間に確かな存在として認識できる。

「（確かに小さな事だけど、誰も気付かずに流すような事だろうけど、それでもなんらかの形でこの世界に証は残ってる、か。それが未練や後悔で無い事だけは願っておこうかな。）」

いずれ、今この世界の根元である転生の塔につくだろう。そこには今自分を蝕み、未練と後悔でこの世界に根を張る元凶がいるだろう、そして、そこに囚われたエイナの本来の肉体も。

「（今度こそ、きちんと助けてやらないとな。さすがに助けようとして出来ませんでしたじゃ、かっこ悪いもんな。）」

ユーリはもし、そこまで自分が行けたのであれば、過去に失敗した真の意味でエイナを助け出す事を改めて決意する。この世界で目をさまし、此処がどこなのかを知る前に、自発的に助けようとした女性。普段言う事は無いが、エイナをあの時に助けれなかったことをユーリは気にしている。

だからこそ、今度会う事になるのなら、絶対に助け出すと決めたのだ。それは言葉を交わした物では無い、きちんとした約束と言うわけでもない一方的なものかもしれない。それでも、困った時には助けるときちんと約束したのだ。ならば助けようと思う。

「（そして、できる事ならこの世界で今も続いているしがらみを終

わらせる。）」

それはこの世界の元凶に対する宣戦布告。それはこの世界に変化をさせるという事。口にしないその言葉は、内に宿る茨によるその浸食を弾き返す程の思いとなる。

そして、思考に浸るユーリの近くに歩み寄る気配を感じ取る。

「ちょっと、アンタ！もう戦闘終わったんだから私の話聞きなさいよね！」

その声の主であるエンクは、ユーリの想いなんてどこ吹く風と言った感じで話しかけてくる。それを苦笑いしながら対応する。その笑みの意味を気にする事も無く、すごい剣幕で言い立ててくる。

「おいおい、歩きながらでもいいだろう。ほら、リコも行くぞ。」

その剣幕を気にしないかのようにリコを促し、先へと進んでいく。それを見ている。エンクの両肩がプルプルと震える。若干思考を邪魔されたのでその意趣返しもあったりする。言葉にするなら空気読めと言っている事だろう。

「あ、あのお兄ちゃん？エンクお姉ちゃんとお話ししなくてもいいの？」

「だから歩きながら聞くって言っただろう。」

さすがにこの空気は不味いと言った感じでリコがユーリの話しかけてくるが、ユーリは気にせずに進んでいく。そして、その後ろからは膨大な出力の電撃が発生する。その一撃は周囲を焦がし、大地

を穿つ。リコが冷や汗を垂らしながら後ろのその惨状を見つめる。

ユーリからすると無駄に体力を消耗しているようにしか見えないが、本人が望んでやってるのだから気にしないでおこうと思い、なにより、今反応してもしなくても結果は変わらないように思うので気にせず進むことにしたのだ。その行動がエンクの感情を逆なでしていることには気づいているが、まあ、いっかと思いなおす。そして、後ろの現象は臨界を越える。

「だから！無視すんなやコラアア！！」

その声と共に落雷が落ちる。自身に向かう雷はストラで防ぐ。さすがと言うかなんというか、リコには全く電撃が行かなかったのは地味にすごい事だったりする。そして、この後エンクによる一方的な言葉の嵐が発生する。

進んだ先、迷いの森へと通じる場所である、獣魔の森へと着く。以前はここでドライアードと出会ったり、フェザードラゴンと戦ったり、何気にイベントの多い場所だった。けれど今はこの先にある迷いの森を越え、先へと進むことが目的である。だからこそ、こんな所で止まる気はない。ユーリが前を見据え、リコが両手を握りしめ気合を入れる。エンクはこの先に起こる出来事に興味を抱く。

「さて、行くか。」

「うん！」

「さて、何が出るかしらね。」

三者三様の反応をしながら、獣魔の森へと足を進める。そこは以前と変わらず、光があまり届かず、暗い雰囲気を出していた。そして、不意にユーリの首に掛けられている常夜の石が光る。ユーリはその意思を感じ取り、森での奇襲に備え、以前この森で行動していたドライアードと気配に敏感な炎忍オロチ、敵の足を止めるのに適した氷魔コパルディアの三体を召喚し、エイナと交代する。

それは、もしもを警戒した布陣。少し過剰な気もするが、戦力が多いに越した事は無い。どのみち、自分の魔力は休んでいる間に回復するだろう。それにそこまで魔力を使うような事は無い。そこまで考え。ユーリの頭にある事柄が閃く。

「（そう言えば、もしかしたらあれが出来るかも、試してみるか。）」

突然の思いつきだが、試してみる価値はあると、常夜の石であることを試す事にする。それが上手く出来ればユーリの戦闘力が増す事になる。思い立ったが吉日と言う。何かトラブルが発生する前にやってしまおうと真剣にすることにする。そして、そのために表の会話はユーリは聞いていない。

そして、表では女性だけしかいないため、結構賑やかになっている。三人寄れば姦しいと言うが、六人揃えば果たして何と言うのやら、実際の所、実力者の集団であるため、敵しかいないようなこんな場所での会話ができるのだが、ユーリが聞いていれば確実に呆れるだろう。

『で、アンタはマスターにここで会ったのかい？』

『そうなの。』

「へえ、アイツ、結構頑張ってんじゃん。」

話題は獣魔の森でのドライアードの出会いの話になったらしい。コパルディアは面白そうに話を聞いている。ドライアードもあの時の事を思い出しているのか若干肩が震えている・・・もしかしなくてもエイナの事だろう。今では割と普通に接しているとはいえ、流石に思い出すとこみ上げるものがあるらしい。主に恐怖で。

「あの時はびっくりしたよ。茂みから出てきたのが、震えてるドライアードだったもんね。」

「本当ね、それに、あの後がね。」

「そ、そうだね。」

その時、何があったのか思いだし、エイナとリコの顔が赤く染まる。その時にユーリに抱きしめられた事を思い出したのだろう。エイナに至っては、更に子供みたいに大泣きしたという問題があるためにことさら赤いが。それを見て、コパルディアが笑みを深くして切り込んでくる。

『へえ、何か面白い事が有ったみたいだね。何があったんだい？』

「え！べ、別に何もないわよ！！気にするようなことじゃないし、ね！リコちゃん！！」

「そ、そうだよ！そんなに気にしなくてもいいと思うよ！！」

『本当かい？』

「「うんうん！！」」

『あの時は焦って能力を使っちゃったの。さすがにあの光景はトラウマなの。』

「「ちょっと？！」」

リコとエイナが必死に誤魔化している中、何食わぬ顔で暴露するドライアード。それを聞いて、二人仲良くハモリながら驚きの声を上げる。やはり本質的に似ているらしい。

『アンタの能力って確か植物操るのと魅了だっけ？』

『まあ、そうなの。』

『ってことは今回の事は魅了の方かい？』

『そうなの。』

「ド、ドライアード、もうその話は止めにして他の話にしない？」

「そうそう！例えばお兄ちゃんが作った剣についてとか！！」

どうにかして話を逸らそうとして、ユーリの剣を思い出し、それを隠れ蓑に使おうと話題にする。だが、それを聞いたコパルディアは何か不服そうな表情になる。それは本当に納得が言って無さそう

な表情である。

『マスターの剣ねえ。』

「どうしたの？ユーリが剣を作ったのは話したでしょ？」

『ああ、聞いたよ。』

「そう言えばその時も何か機嫌が悪そうにしてたけど、なにかあったの？」

『・・・大したことじゃないよ。』

そう言うと少しばつが悪そうに顔をそむける。そして、その顔はその先に居たオロチを自然とみる事になる。そして、オロチと目が合う。

『・・・何だ？』

『別になんでもないよ！』

若干強く言う。その状況を見ていたドライアードが何食わぬ顔で口を開く。

『・・・もしかして、自分より早く剣の作成にオロチが関わったから拗ねてるの？』

『・・・』

その言葉に無言で返事をする。それは肯定という事に他ならない。

その言葉を聞いてオロチが呆れた眼差しを向ける。本来なら忍びであるオロチが周りに感情を悟らせるようなことはしない。その微かな感情の動きに気付きそうなのはユーリとドライアード位なものである。本人は不服だろうがコパルディアも気付いてたりするが。やはり相性にしろ、性格にせよ、水と油のように真逆で最悪だとどこか通じ合うものでもあるのだろうか。

その本来なら気付きそうもない感情を表に出しているのは、ひとえにユーリの言葉が引き金になっている。ユーリの言った肩の力をぬけと言う言葉を自分なりに解釈し、色々と実践することにしたのだ。とは言っても意識している訳では無く、全ては主の為に無意識的に起こした行動である。従者の鑑と言える

『なんだい、その眼は。ケンカ売ってんのかい？』

『・・・汝はその程度の事で気を荒げていたのか？主が必要とするときに全力を尽くせばいいだろう。』

『その程度だって？！』

二人の会話が熱を帯び、言葉にも感情がこもる。オロチが思う主従関係と、コパルディアの思う関係が違う価値観から生まれているために生じた祖語である。いきなりの雰囲気の変化に周りの者が息をのむ。

オロチは主であるユーリが望めば目的がどうであれ自身ができる全てを持って臨む。忍びとして使える者の命には背かず、一つの道具として主のために使い潰されるのを良しとする考え。故にそこに感情が入り込む余地は無い。とはいえ、感情を否定する気も無く、先程の言葉は不器用ながらも、コパルディアの事を考え、元気づけ

ようとした発言だったのだが、言い方が不味かったのか、その真意が伝わる事は無い。

一方、コパルディアは主との賑やかな時を好む。感情のままに動き、内容によってはユーリにも意見を言うだろう。無論ユーリの意思であるのなら、それを行う事に基本反対は無い。だが、肩を並べ、共に行動したいと思う。それにオロチがきちんとユーリの役に立っているのを羨ましく思ったのも事実。

どちらにせよ、お互いにユーリの事を考え行動する点では同じと言える。だが、そこに込められた意味は真逆になる。とことんかみ合わない二人である。そして、お互いに相手に何らかの感情を持って接している点でも似ていると言える。方向性は違う方へと進んではいるものの意識している事自体はいいことだろう。だが、その会話は唐突に打ち切られることになる。

『二人ともいい加減にするの。皆困ってるの。』

ドライアードがその言葉と同時に能力を使い、手のひらに生成された種から植物の花を開かせる。その花の香りには鎮静作用があり、波立っていた感情が落ち着きを取り戻していく。

『その位にしとかないと二人ともご主人様に嫌われちゃうの。』

『・・・そうだね。』

『・・・』

その言葉に二人とも押し黙る。実際はこの会話はユーリは聞いていない。無論ドライアードもオロチもコパルディアも感覚的にそれ

は気づいている。常夜の石の中で魔力の流れを感じたためである。それにエイナからも常夜の石を探ってもらった所、聞いていないことが判明しているので、女だらけで気軽に話しているのだ。もし、聞かれているのなら、当然言えない事もあったりするのだ。

「まったく、ユーリは別にコパルディアをないがしろになんてしてないでしょ。そこまで目くじらを立てなくたって。」

『確かにそうなんだけどね。どっちにしたって氷を使う私じゃマスターの役には立てないんだけどね。』

エイナの言葉になんとなくではあるが、元気なさげに答えるコパルディア。その言葉はユーリの力になれない事に素直に落ち込んでいる事を窺わせる。ユーリが武器を作ったという話を聞いたとき、その製法なんかを聞き、自分では大して力になれない、だが、それに引き替え、オロチは自身の力を存分に発揮し役に立っている。それが少し情けなく思えたのだ。だが、そんな空気を突然放たれた一言によって粉々に破壊されることになる。

「・・・別に氷でも武器は作れるけど。」

『・・・そうなのかい？』

「ええ、正確には作る材料に使ったり、剣に宿す能力として使えるようになるって事だけど。」

エンクの一言により、今までの雰囲気が霧散する。コパルディアが確認するかのように聞き返す。その言葉に頷くように言葉を返す。

「例えば鉄を熱するためにオロチの炎を使ってるけど、それが魔力

を武器に含ませることになってるから、剣が炎を纏う事になるの。それに強度の面でも普通の炎よりか確実に上だろうし、メリットしかないわね。ただ、炎を宿さないようにするんだったら少し調節する必要があるけど、それに砂鉄を操る能力は私のだしね。魔力を馴染ませれば氷を操る剣なんかも作れるはずよ。」

『そうだったのかい。』

エンクの説明を聞き、自分でもユーリの手伝いができると聞いて、その顔に笑顔が灯る。確かにオロチの炎は自分には真似できないものではあるが、それと同じく、自分の氷も違う事で役に立つことに気付く。簡単な事なのに、目の前の事に夢中になったばかりに視野狭窄に陥っていたらしい。

どうやらユーリの事に関しては思考が鈍るらしい。とりあえず、思考の整理がついた所でオロチの方へ向く。まだ何かあると思ったのか、目を細めコパルディアを見返すオロチ。その眼にはまだ何かあるのかというかのような意志がこもっていた。その眼を見ながら、一度目を閉じると深呼吸した後、その口を開く。

『オロチ。』

『・・・なんだ。』

『その、なんだ・・・イチャモンつけて悪かったね。』

『なに？』

『・・・あ～！だから、謝ってるんだよ！その位察しなよ！』

『・・・』

ところが、コパルディアの口から紡がれたのは謝罪の言葉。さすがに予想していなかったのか、その言葉に目を軽く見開くオロチ。コパルディアは恥ずかしいのか顔を逸らしている。周りの者も誰も何も言わず、その場に静寂が訪れる。だが、その静寂は直ぐに破られることになる。そう、獣魔の森に生息するモンスター達の咆哮によって。その数は８０程。

『ギャルアァアァァ！！！』

「ったく、少しは空気読めっての！」

「まったくね！」

「お姉ちゃん達そんなこと言ってる場合じゃないと思うんだけど。」

『どちらにしても今はモンスターを倒すのが先決なの。』

『そうだね。』

『・・・』

各々の感想を述べ、それぞれが戦闘態勢に入る。リコが融機人形態になり、エンクが額から角を生やし稲妻を帯びた槍を構える。エイナは自分の剣を引き抜き、コパルディアを憑依させる。

ドライアードは両手に魔力を集め、いつでも放てる体制に入る。コパルディアは愛用の、柄を中心に左右に両刃の剣が付いた黒い剣を構え、周囲に霜を作り出すほどの冷気を発生させる。オロチはそ

の手に忍具である鎖鎌を持ち、足元の草を焼く強さの高熱を生み出す。

「それじゃ、始めましょうか。良い所で出てきたんだから、相応の代金は払ってもらうわよ！！」

「一気に行くわよ！」

エンクとエイナが雷と冷気を固めた雹を放射状に撃ちだす。それは前に居るモンスターに当たり、数匹の足を止める事に成功する。

『行くよ！遠慮なんか！』

マルチロックで見える範囲のモンスターをロック、次の行動を予測し、計算に加えたうえで小型ドリルを打ち出す。その軌道は左右に割れないように中央へ押し込もうとする軌道。それはほぼ狙った通りに戦果を挙げ、外した物も着弾時の爆発によってモンスターの動きを止める。

そして、その結果、中央にモンスターを集中させる事となる。それこそがリコの狙い、腰の砲身を敵へと向け、その中に稲妻を発生させながらエンクへと目配せを行う。

「・・・なるほどね！」

リコの起こしたその光景と、敵へと向けた砲身を見ながら、その視線の意味を正確に把握したエンクは、周囲の砂鉄を集め、固める。それは円錐状の弾丸へと変わる。両手を突き出し、電磁仮想砲身を形成、その向きは当然の如くモンスターへと向けられる。

『してあげないんだから！！』

「消し飛びなさい！！」

二つの原理の異なるレールガンがその猛威を振るう。それは、音速を軽く超え、モンスターの視認不可の速度を持って撃ちだされる。躱す術は無く、防ぐ暇すらない。撃ちだされた後には電気が走り、その軌跡を描く。

本来、レールガンに使われる弾丸は発生する熱量の高さにより、プラズマ化するが、この二人にそれは当て嵌らない。リコは、ドリトルとライザーが作られた世界である機界ロレイラルの技術でもってその欠点を克服している。

エンクは自身の能力の一つである結界を使い、プラズマ化を止める事に成功している。どちらにせよ、思考の外の原理であり、本来の手順や欠点とはかけ離れたものを持って成立させた一撃である。

その一撃は大地を抉り、思うがままに蹂躙する。発生した衝撃波で周囲の木々は粉々に吹き飛び、焼け落ちる。大気には稲妻が走り、その凄まじさをこれでもかと見せつけている。そして、相当数のモンスターを片付けたが、まだモンスターは残っている。だが、そのモンスター達が歩を進める事は無い。

『あんまり緑を壊すのはよくないの。だから、そこから動かないでほしいの。』

ドライアードの言葉に応えるように、大地から伸びた根が、モンスターの足を掴み拘束している。そして、その間に周りに蔦が生え、更に蓮に似た植物が生えるこれはドライアードが生み出した植物で

あり、ここで扱う以上戦闘に使えるものであるのは言うまでもない。

『行くの！』

その言葉をスイッチに、蔦が鞭のようにしなり、モンスターを打ち据える。蓮の様な植物はその葉を鋭く硬化させ、鉄の刃のような切れ味を持って、モンスターを切り裂いていく。極稀に拘束を破るモンスターがいるが、その時は両手に貯めた魔力を開放する。

『ラブミーウインド！』

その放たれた力の本流に呑まれ、自由を取り戻したモンスターはその意識を奪われ、同士討ちを始める。

『まだまだ、終わらないの。』

そして、周りの植物の葉や花弁が正確にモンスターの方へ飛び、カッターのようにその体を傷つけ、貫いていく。その光景を眺め、近くのモンスターを鎖鎌で切り裂きながら、オロチは同じく剣でモンスターを切り裂くコパルディアへと言葉を投げかける。お互い、戦闘中だというのに息を切らす事は無く自然体で話す。

『・・・もし。』

『なんだい？』

『もし、次に主が剣を打つときがあれば、汝を共にするよう某からも進言しよう。』

『・・・アンタ。』

コパルディアが面食らったかのように目を見開く。オロチはそれを意に介する事も無く、その続きを口にする。

『別に某も好き好んで敵を作ろうとは思わぬ。汝がそれを望むのなら、できる範囲で手を貸そう。』

『・・・そうかい。まっ、そんときゃ頼りにさせてもらうよ！』

にかっと笑顔を浮かべオロチの言葉を返す。オロチもその雰囲気が若干柔らかくなったのを感じ取る。その時、いけ好かない相手の見方がほんの少し変わった気がした。

『それじゃ、そのためにもこんな所で止まってなんかいられないねえ！粋に行くよ！！』

『・・・参る！』

コパルディアの冷気が収束し氷柱を作る。それは大気を切り裂き、モンスターを絶命させんと飛来する。そのさらに上、オロチが炎を球状に圧縮した火球を展開し、それを豪雨もかくやと言う勢いで放つ。その波状攻撃にモンスターはその数を一つ、また一つ確実に減らしていく。

『まだまだ！こっちは気分がいいんだ！勝手にお開きにしてんじゃないよ！』

「こっちも忘れんじゃないわよ！」

コパルディアとエイナによる、氷柱と雹の波状攻撃。

『逃がさぬ！』

『反撃なんてさせないの。』

その合間にオロチの苦無による攻撃と、ドライアードの花弁の弾丸が混ざる。

『逃がさないんだから！！』

「ほらほら！よそ見してんじゃないわよ！」

そして、討ちもらした敵はマルチロックしたリコの小型ドリルと、エンクの砂鉄の斬撃で散っていく。

『さて、それじゃこれで。』

『・・・その命。』

コパルディアとオロチの手に、それぞれ規格外の冷気と熱気が収束し、渦を巻く。それはどちらも純粋なエネルギーとして破格の量を誇る。相反する力でありながら、肩を並べ、隣り合う。

『そろそろお開きにしようかい！』

『貫い受ける！！』

放たれた膨大な赤と青の光は、残ったモンスターへと吸い込まれるように撃ちだされ、モンスターの断末魔すら打ち消し、その対象全てを灰燼と化す。その威力は周囲を凍らせ、焼き尽くす。相反す

る真逆の現象が同時に存在する矛盾。それを両立する程のデタラメさがそこにはあった。

『それなりに骨はあったかねえ。』

『・・・任務完遂。』

その声と共に周囲に舞い上がった業火がその勢いを消し、凍てついた氷は雪となって散っていく。そこには見るものを引き込むものがあったが、当人からしてみれば些細な事だろう。その光景を最後まで見つめる事無くコパルディアはオロチを見る。それにつられるようにオロチもコパルディアを見返す。

『いつかアンタと酒を飲みかわしたくなってきたよ。』

『・・・判断力が鈍る、推奨はしない。』

コパルディアのその言葉にオロチは淡々と返す。それを苦笑いで見つめ返すコパルディア。

『やっぱりつれないねえ。』

『だが・・・』

やはり駄目だったかと、元々期待していなかったが僅かに落胆した表情を隠し、冗談だと言おうと口を開こうとしたとき、オロチの言葉が続いた。

『いつか、その機会があるのであれば、付き合おう。』

『・・・くくっ、そうかい！』

その言葉に顔を綻ばし、どんな酒を用意しようかを考え始めるコパルディア。その様を見て、早まったかと一抹の不安を抱いたオロチ。おそらくは限界まで呑みまくりそうな目の前の氷魔に軽くため息をつく。だが、その楽天的な思考が少し可笑しくもある。

少し前までは無駄と切り捨てていたが、自身の主の言葉に従い、他者の言葉と気持ちを重視した結果、コパルディアとぶつかり合う必要が減ったのも事実。自分の主人は世渡り術にも長けているのだと少し誇らしく思った。ユーリからすると、それ位で持ち上げすぎだと言うだろうが、実際に自分の身の回りの環境は激変したのだ。驚かざるを得ない。

『だが、そのためにも今は先へと進むことを提案させてもらう。』

『そうだね。こんなジメジメした所、さっさとオサラバするとしようかね！何時までもこんな所でいちゃあ根っこまで腐っちまう。それに、お酒が私らを待ってるんだしね！』

いずれ行うであろう酒盛りについて思いを馳せるコパルディアと、行き過ぎたその考えを止めようとするオロチ。

『・・・汝は酒から少しは離れろ。』

『良いじゃないか！！祝い酒って奴だよ！！粋に行かないとね！』

『・・・まったく。』

だが、その努力が実る事は無く、平行線をたどる。そして、先程

のコパルディアの言葉でダメージを負ったものが一人。

『・・・ジメジメしてないの・・・根っこも腐ってないの。コパルディアが虐めるの。うう。』

「ま、まあまあ、コパルディアは今機嫌がいいんだから、少しくらい行き過ぎた事も言うよ、きっと。それに、暗いのは事実じゃない、ね！」

この森で生活していたために、地味に深刻なダメージを負ったドライアードを、エイナがどうにかしようと口を開く。だが、その言葉はドライアードの心に深くえぐりこむ。何かが刺さった擬音まで聞こえてきそうだ。当然逆効果でしかない。

『フォローになってないの。と言うか追い討ちなの。エイナも虐めるの。やっぱりいじめっ子？』

その言葉に傷ついたのはエイナだ。今は大分普通に接しているとはいえ、それでもちょっとしたことで距離を置かれるのは変わっていない。そして、その言葉でエイナがドライアードに詰め寄る。

「やっぱりって何！ドライアードは私のことどう思ってたの！」

『いじめる？いじめる？』

少し前を思い出すような状況が始まる。終いにドライアードが逃げ出し、それを捕まえようとエイナが追いかける。その結果、ドライアードの中には新たなトラウマが刻まれる。是非も無い。

「・・・本当に賑やかね。いつもこんな感じなのかしら？」

「・・・あはは。まあ。」

そして、そのいっそカオスと呼べる光景を見ながら、最近加わったエンクが呆れた眼差しを向けながら、これまた溜息をつきそうな感じで感想を述べる。その顔には苦笑いが浮かんでいる。そして、乾いた笑い声をあげているのはリコ。時折自分もその光景に交じっているのだから返す言葉も無い。

『よし！今度魂を浄化するって評判の酒でも仕入れて置くとするよ！楽しみに待ってなよ！』

『それは汝が消滅するのではないか？』

『わ、私は実はとんでもなく強いから全力で見逃してほしいの！！』

「見逃すわけないでしょうが！！」

「・・・進まないのかしら？」

「・・・そうだね。」

止めるものが存在しない混沌空間。それはしばらく続き、エンクとリコが先へ行こうと話しかけ、その場のモノを促すことでようやく事態は収束し始める。残された者は意気揚々としたコパルディアとそれを目を細め見るオロチ、ガタガタと震えながら半泣きのドライアードとそれに睨むエイナ。いまだに微妙な雰囲気がそこにはあった。

「・・・こんなので大丈夫なのかしら？」

エンクの疑問に答えれるであろう人物は常夜の石の中で独自に何かをしており、この会話を聞いていない、故にその疑問に答えれるものは、少なくともこの場には存在しない。是非も無い。終われ。

常夜の石の中で轟音が鳴り響く。そこには光の粒子を纏ったユーリが立っていた。訓練用の島で自身が思いついた事を試している最中、更にそこで以前から思いついていたことを丁度良い機会なので試す事にする。その結果はどちらも良好。

「どちらも行けるか。これなら戦力アップも見込めるかな？」

とりあえずこの事を話し会得すれば、少なくともエイナの力も上がる筈、と言うよりこの先の事を考えるとあった方がいい。今までそこに考えが行かなかったのは失点だが、思いついたのだからこれから取り返していけばいい。エイナは剣士であるが、術士でもある以上、これを使う事はできる筈。

リコにもそれは言えるだろう。特に術に耐性のないドリトルとライザーを身に纏うリコは重宝するだろう。リコはその特性上、召喚術の耐性が低い。それに、子供と言う事もあり、物理防御も言うほどない。そちらの方は召喚獣を身に纏う事でましにはなっているが、超常の力や術などに限っては何の防御も無い。魔障壁でも付けてやろうかと計画していたが、これなら、簡単に済むのではないかと言う考えもある。

「それに、これなら俺の出力の下がったストラと重ねればその低下分を補って余りあるし、行けるな。」

なにより、自分の中で弱まっていくストラの代わりができる。無論代わりなどでは無く、きちんと別個の長所や短所もあるが、それでも手札が増える事は喜ばしい。

「なにより、あの茨が体の中に入ってから、さらに弱くなってるしな。」

そうなのだ。鬼岩洞での一件以来ストラの出力はさらに下がっている。６割が精一杯と言った所だろう。以前からさらに１割減か、もしかすると下回りかねないぐらいだ。そんな時にこの力は正直、渡りに船だ。おそらく全開時のストラを振るっている時よりも上になるだろう。欲を言えば全開時のストラでこれを重ねたいが。無理な事を考えても仕方ない。

「まったく・・・とは言ってもさっきは妙だったな。」

先程、ユーリが外で思考していた時、エイナを助け出すと明確に決意した辺りで、茨の浸食が止まり、在ろうことか押し返したのだ。きっかけこそ小さなものだったが事実として起こった事を無視する気はない。

「浸食って押し返せるものなのか？だが、あの時なんかストラが増えたというか、元の量に戻ってきたような気はしたんだよな。」

それは例えるならば一本のゲージがあったとして、その右がストラで左が茨の浸食度。どちらかが増えればどちらかが減る、そう言ったモノのように思えた。そして、ストラは基本戦闘では使いっき

りだったために削られる一方だったという事だろうか。

「けどなあ、何か釈然としないな。繋がってるみたいで。」

その言葉が示す通り、その理屈で言うのであれば、ストラと茨は相反こそするものの、似たものである可能性が出てくる。関連性のないものが対比される事は無い。つまり、自分のストラと茨は根本は同じ、又は近いものであるという事。

「俺のストラが、明らかに知識の中で知ってる原作のストラと違うのはこの所為か？」

不思議には思っていた。なぜ、ここまで違いがあるのかとストラの特徴こそ持ってはいるものの、それ以外にも腑に落ちない点が多すぎる。

「やっぱり、転生の塔でアレの体液を浴びたのがきっかけかな。」

と言うよりそれしかないだろう。それが体に馴染んでどんな変化をもたらしたのかまでは知らないが、その結果としてストラが生まれたのだとしたら、やはり何らかの接点があるのは当然だという事なのだろう。

「・・・そう考えると喜んでいいのか判らなくなるな。」

そういうふうに受け取るのならば、茨が自分を襲ってきたのが必然に思えてくる。最初はユヅキか、エイナだと思ったが、まさか本命が自分だったとか本気で笑えない。面倒なことこの上ない。できれば気のせいで終わらせておきたいものだ。だが、変に説得力があるせいで軽んじる事も出来ない。

「それに、この先にいるだろうデカブツを倒すときも少し不安だしな。」

この先に待っているのは今悩んでいるその茨が関わっている最たるものだ。できる事ならいなくなっていてほしいが、そんな都合のいい展開はあり得ないと、頭の奥の方で理解している。少なくとも敵が強くなっているのは間違いない、それも出鱈目に。その勢いに負けぬようにこちらの戦力もどうにか上げていこうとしてはいるが、少しでもそれを怠ると一気にデッドエンドに直行なんてことも十二分にありうる。ほんの僅かな油断が即命取りに繋がる。

「仮に倒したとして、本当の問題はその後だな。それをどうするか・・・」

そして、ユーリが危険視しているのはその後、敵を倒した後の事だ。おそらく彼女が現れる。それをどう対処するか。今はまだ知り合ってすらない人物を見据え、思考を開始する。求めるものは自分の知っている者たちの笑顔。どうせならハッピーエンドを目指したい。駄目でもより良い未来を模索する。諦める気はない。打つ手はすべて打つ。そうでないなら最後に誰かが泣くことになる。

「俺に今できる事、それをはき違うな。」

間違いは許されない。そして、だからと言って尻込みする暇も無い。チャンスは一度だけだろう。ここで逃せば恐らくもう遅い。最初にして最後のチャンス。不意にする気はない。それを刻みこむように呟く。誰もいない世界にユーリの独白が続く。それは決意であり、全てを知るが故の苦悩。誰にも背負わせる気はないし、言う気も無い。唯一にして確実なイレギュラーである自分だけが成し得る

事。それを導き出す。

「俺は、迷わない。俺は・・・」

その言葉は風に乗って消え、それを聞いたのは静かにたたずむ星空だけだった。

そして、外では再び歩き出した六人が獣魔の森で幾度目かの戦闘を終え、ようやくその出口を越え、迷いの森へと差し掛かったところだった。番をしていた老人からは再び止められたが、それでも行くと伝え先へ進む。

「今度はきちんと前へ進めるかな？」

「大丈夫よ。ユーリだって無計画に何かしてるわけじゃないだろうし、何か考えがあってここに戻って来たんでしょ。心配しなくたってなんとかなるわよ！」

『うん、今度こそこの先に進むの。』

「まぁ、私からしたら依頼もあるし、進んでもらわないと困るんだけどね。」

話し合う三人の後ろでエンクは、自分の荷物の入ったエイナの道具袋を見ながらそんな事を言う。嵩張るので道具袋に入れておいたために、エンクは槍を持っているぐらいで、特に荷物は持ってはい

ない。ちなみに入れた時、道具袋の容量にエンクが驚いたのは本当に今更である。

『今回は私たちもいるし、何とかなるよ！』

『それが任務なら完遂するまで。』

『そう言うわけだから今回はきっと大丈夫なの。』

召喚獣達が自信を持ってそう言うのを聞いて、リコは不安が少しだけ和らぐのを感じる。そして、自分も心の中で絶対大丈夫だと言い聞かせる。

「うん！そうだよね！！皆強いし、私だってあの時とは違うもん！！」

「そうそう、そのいきよ！」

「うん、やっぱりリコは笑顔でいた方が私達も嬉しいわ。」

「えへへ。」

そう言って笑いあう。先ほどの不安は鳴りを潜め、その代わりに暖かな雰囲気が漂う。だが、エイナが今自分の見える景色に僅かな違和感を覚える。

「でも、前に来た時はこんな所だったっけ？」

エイナの声を聴き、リコも周りを見渡す。確かに何かが違うと言われれば違うように感じる。だが、それが何か判らない。コパルデ

ィアやオロチ、エンクの三人は迷いの森に入った事がないためにその違和感を感じる事はできない。

「ドライアードはどう思う？何か妙と言うか、景色が変わってるような気がしたんだけど・・・」

だが、そんなエイナの言葉に耳を貸さず、ドライアードは何かを探すように周りを見る。不思議に思い近寄ろうとするが、その時、ドライアードが不意に上へと視線を向ける。

「ドライアード？どうしたのよ？」

エイナの言葉にもやはり返事を返さず、ただ、一点を見つめているドライアード。その顔は先程までと違い、真剣さに引き締まっている。そして、その口から思いもよらない言葉が紡がれる。

『森が赤く変わってるの。周りも前よりも広くなってるの。それに、根が動いてるの。』

その言葉にだれも即座に口を開けない。どういう事か説明を求めようとした所、足元に何かが動いているのに気づく。

「これってなに？蔦？」

『！離れるの！！』

エイナの言葉に即座に反応したドライアードは、能力で蔦を一気に吹き飛ばす。その表情は依然として厳しい。

「ドライアード！どういう事なの？」

『黙ってないで判るように説明してくれるとありがたいんだけどね。』

「確かに、私らは何が何だか判んないし。」

『森に妙なものが混じってるの。』

周りからの言葉にドライアードは静かに口を開く。その言葉からは困惑と焦りが見える。

「妙な物？それってなによ？モンスターか何か？」

『そこまでは分からないけど、異質な何かが森を覆ってるの。今までこんな事は無かったの。』

その言葉に不吉な何かをその場の全員が気付く。

「いままでなかった、異質な何か。」

『そのナニカが森に宿って暴れてるの。さっきの蔦もその影響を受けてるの。あのままだったらこっちの襲ってきてたと思うの。』

「そうなんだ。」

ドライアードの言葉で、この森が以前来た時よりも、さらに妙な事になっているのを理解する。細かい部分は植物を操り、コンタクトを取るドライアードでなければわからないが、文脈とドライアードの反応から、それが不味い事であると言うのは安易に判断がつく。

『でも、だからってここでまごついてても仕方ないじゃないか。とにかく進んでみない事にはさ。そう言ったのは大抵、奥に元凶がいるもんさ。』

『確かにここで止まってても意味がないの。どうするにせよまずは行動しない事には事態は動きようがないの。それに動くなら早く動かないと、足元の根も移動してるから進む方向が判らなくなるの。』

ドライアードの言葉に全員が足場である根を見る。確かに僅かに振動しているし、景色が変わっているのもそのためだろう。エイナ達は今この森の巨大に育った根を足場に移動している。それ故にその根が動くのであれば、以前の道筋や経路なんかは全て役には立たないという事になる。それを聞いてエイナは直ぐに決断を下す。

「それなら、前へ進んじゃおう！どのみち進まなきゃいけないんだし。それにこの森には今も迷ってる人たちがいる。その人たちが危険にさらされてるかもしれない。私はそれを見過ごしたくない。」

「決まりね！行きましょ！」

『・・・承知。』

「うん、このまま、止まってるわけにはいかないもんね。」

全員が進むことを選択する。その先に一抹の不安要素はある物の、進む以外の選択は無い。それに、この迷いの森には迷って出られなくなった者や、この森に住みついた者もいる。

そういった者たちにとってこの変化は危険であることには変わりない。襲いかかってくるというのであれば、この森のモンスターと

比べても尚危険度は段違いだ。何せドライアードの言葉を当てはめるのであれば、この森全てが得体のしれないモノによって変貌し、だれかれ構わず襲いかかる危険区域となっているのだ。

「なんとか早いうちにこの怪現象を止める。もしくはその勢いを弱める。それが今できた目的ってとこね。」

『！！来るの！！』

エンクの言葉にその場の者が頷く。そして、いざ、進もうとしたとき、ドライアードの声が響く。その声が全員の耳に入るのと、コパルディアとオロチが冷気と熱気を放射し、植物を消し飛ばしたのはほぼ同時、そして、その後から続いて飛んでくる植物の追撃はエンクの電撃で焼け落ちる。

『ったく、勇み足な事だねえ。』

『・・・不意打ちは某には無意味。』

「次から次へと、退屈しないわね。」

だが、更に足元の巨大な根から細かい枝が伸び、その四肢に絡み付こうとする。しかし、その行動は剣を抜き放ち、オロチを憑依させたエイナによって阻止される。燃える剣によって、秒を待たずに燃やし尽くされる。そして、上空から打ち込まれる種の弾丸は、ドライアードの能力で生み出された植物によって弾かれる。

「危ないじゃない。まったく。」

『厄介なの。』

そして、その間にリコも融機人状態になり、戦闘態勢を取る。通常状態からの不意打ちにすぐに対応できないのが、今のリコの最大の欠点だ。そのためにリコ以外の全員がリコを囲むように行動している。融機人としての姿は長時間持たないがために、誰かが、初弾を防ぐ必要がある。今回はそれを全員で行った結果、無傷で済むこととなった。

『もう、私だって戦えるんだから！』

その言葉と共に迫りくる植物を、両手に装備したドリルで千切り飛ばしていく。そして、全員が迎撃態勢に入ったのを確認したドライアードは、森全体に能力で干渉する。さすがに制御するとまではいかない。それを行うにはこの場から動かない事を余儀なくされる。そうすれば他のモンスターによって攻撃を受けるのは目に見えている。

かといって、誰かが残りドライアードの護衛をするにしても、戦力の低下を招く。例えばこの森の異常をせき止めている元凶がこの森の中にいるのであれば、戦力に低下はことさらに望ましくない。仮に制御するのなら元凶の近くがいい。それならば自分は最悪送還すればいいし、それに残りの召喚獣で守る時間は稼げるはず。その間に全員で解決させればいいのだから。ここで望むべきことは元凶の居場所。それが判らないまま無理はできない。

『皆！少しの間、時間を稼いで欲しいの！』

『任せときな！』

『委細承知！』

「なんか判んないけど、了解よ！」

「よし、皆行くわよ！」

『うん！！』

ドライアードの声に返事を返し、迎撃ではなく、攻撃態勢に入る。どこから来るのか判らない以上、守るよりも迎え撃つ。迎え撃つよりも攻め立てる。その思考により、全員が襲いかかる植物を破壊して行く。それは森との戦闘とも見える。圧倒的な物量。けれどもそれに匹敵、もしくは越えかねない質による蹂躙。それを行うのは氷魔と炎忍。

『こういったとこなら、殲滅でもいいかねえ！！』

『見敵必殺！』

撃ちだされる、氷塊とプラズマ砲。燃え上がる炎界。凍てつく氷界。襲い来る植物はそのどちらにも適応できずその生命を終える。近づくだけでその身を滅ぼすに足る世界において、その身は矮小過ぎた。呪うべきは敵の桁違いの強さ、恨むべくは戦うものを見誤った自身、けれど、植物はそのような考えなど持つ暇も無くその身を消し去られる。

「これで、どうよ！！」

そして、広範囲を薙ぎ払うという点ではエンクも当てはまる。その角から発生し、周囲を根こそぎ吹き飛ばす電撃は植物を伝い、内部から破壊して行く。そして、更に悪い事にその電撃により命令系

統が麻痺し、かすっただけでももう戦力としては使い物にならなくなる。大勢に対し効力を発揮できるのはエンクも同じ。

「はああ！」

エイナの剣が植物を切り飛ばし、その切り口から炎が吹き上がる。範囲攻撃に置いて前者3人に劣るエイナだが、憑依により得た炎を散弾のようにばらまき、周囲に飛ばす事で擬似的な範囲攻撃を作り出す。それは切り落とされた植物を媒介にさらに勢いをまし、燃え上がる。無論このままいけば森ごと焼き尽くす業火になるかもしれないが、そこの心配はしていない。何故ならば。

『エイナ！やり過ぎはご法度だよ！！』

『・・・無駄な被害は主が好まぬ。』

コパルディアがそこそこの勢いにまでなった所で危険な部分だけを消化して行く。オロチもその炎の勢いをちょうどいいぐらいにまで下げ、無駄な被害を防ぐ。そして、二人の窘めるような声が響く。けれどもその言い分にはこちらも思う所がある。

「ちょっと！あなたたちは普通に暴れまくってるじゃない！！」

『私らは自分の力できちんと後始末してるし、加減だってしてるよ。森を消すわけにはいかないしね。』

『無論、その程度の配慮、忘れることもない。』

「いや、そういう問題じゃ、ないでしょ！」

剣を振るいながら、エイナは反論する。しかし、コパルディアもオロチも意に介さないと言った感じで言って来る。その言葉に理不尽だと思うエイナ。それを見ながら呆れるエンク。そして、周囲に小型ドリルをばら撒き牽制していたリコが上空から降りてくる。

『これじゃ切りがないよ！森ごと敵になってる気がするし。』

自身のサーチを使い、攻撃してくる植物が森からどんどん出てきているのを理解したリコは、手詰まりになっているのを感じる。

「ちっ！周辺のモンスターまで集まってきちゃったわね。」

エンクの声を聴き、そちらへ目を向けると、確かに騒ぎを聞きつけたのか、それともこのおかしな雰囲気を宿した森が呼び寄せたのか。多数のモンスターの軍勢が見える。

『こっちは私が止めておくよ！皆は植物を！』

そういって、モンスターに向けマルチロックをし、小型ドリルを雨霰と打ち込むリコ。そして、その行動をしている最中も思考を止める事は無い。複数の思考を制御し、多数の事柄に対し対応する。如何にかするのならこの森ごと消し去ればいい。現状コパルディアとオロチなら可能だろう。ドライアードは流石にそう言った事はやろうとしないだろうから候補から外れるが。

だが、それを行ってしまえば多数の命が失われる。故にそれを選ぶことはできない。今の戦闘にしても、周囲にだれもいないためにこうまで広く動けているのだ。それにこの森が崩壊しないように攻撃しているために出来る行動に制限がかかっている。その上でこれ以上の数をいなすのは難しい。だが、今のままではどうしようもな

い。だが、その思いは不意に聞こえた声によって道を得る。

『判ったの！この森がおかしくなってる基点を潰せばこの森は元に戻るの！皆その場所はこっちの方角なの！！』

そう言って植物を呼び出し、周りの狂った植物を取り込み、ドライアードの領域を広げる。それは新緑の園。誰にも害されぬ自然の砦。それは襲いかかる同族をいなし、窘め、取り込んでいく。ドライアードは自身も植物に関連した存在である以上必要以上に植物への攻撃を嫌う。それ故に自身の元へと取りこむ。自分の大切のモノが大切なものを傷つけないように。

『あっちなんだ。それなら急ごう！お姉ちゃん達！！』

「ええ、こんなのはさっさと終わりにしないとね！」

「誰がこんなことを、許さないんだから！」

リコがエンクとエイナと共にドライアードが示し向かった方角へと走り出す。その後をしんがりとしてコパルディアとオロチがついて行く。後ろから迫ってくる植物を叩き潰しながら。

『やれやれ、退屈しないねえ。』

『・・・口を動かす暇があるのなら手を動かせ。』

『・・・アンタも相変わらずだねえ。』

『無論。』

お互いに軽口をたたき合い、最後尾を走る。そこに以前のような嫌悪感は感じられない。そして、その言葉を言い合っている間も迫る植物や、モンスターを駆逐する。どういうわけか植物はモンスターは襲わず、優先的にこっちを襲ってくる。理由は定かではないが、どちらにせよお互いに潰し合ってはくれないらしい。状況は刻一刻と悪くなっていく。

その後、ドライアードの道案内により、森の奥へと侵入して行く6人。その間にも迫ってくるモンスター達を蹴散らし、深追いしない程度に攻撃し、先を急ぐ。下手に追ってはぐれたり、無駄な消耗を避けるためだ。後を追って来るモンスターが増えれば時折足を止め、その数を削ることを余儀なくされる。目的の場所についたら、囲まれましたでは意味がない。

「もう！いつになったらその元凶って奴の所に辿り着くのよ！切りがないっての！」

『もう少しなの！』

エンクの声にドライアードが答える。そしてその声を聴きながら戦闘していたエイナは、ある物を見つけ驚愕する。それは以前見た黒い茨、見ればいたるところにその姿を見る事が出来る。何故ここにあるのかは分からないが、ユーリに知らせて置こうと常夜の石の中に意識を落とす。そして、その中にいるユーリに会いに行く。無論その間耐えるために自身の召喚獣を複数呼び出し護衛させる。

「ユーリ！！」

「エイナか。」

そこにはユーリがエイナに視線を向けていた。その眼にはなぜ、この時に来たのかを問いただすような気配があった。だが、ユーリの疑問はその茨の事によって氷解する。

「ねえ、ユーリ。あの茨って。」

「・・・それで、気になってこっちへ来たのか。」

エイナはその不気味さからユーリに相談しに来たのだが、ユーリからすれば既に知っているために特に悩むようなものでは無い。それ故に今回エイナが今ここに来たことに疑問を覚えていたのだ。

「うん。あの茨って、鬼岩洞で見たアレよね。どうしてここにあるのかしら。」

「そこまでは何とも言えないな。だが、良い事じゃないな。」

「私もそう思う、それに。」

エイナがさらに言葉をを紡ごうとしたとき、突然それは聞こえてきた。

『リゼルドおじちゃん！！』

「「！！」」

「・・・今のは？！」

「・・・」

突然聞こえてきた声に話を中断し、耳を澄ます。エイナは突然の事に驚いているだけだが、ユーリはその声に聞き覚えがあり、顔を若干曇らせる。

「（さて、やっぱりいたか。いない方がよかったんだがな。）」

ユーリは内心舌打ちする。今の声はある天使の少女の声だ。そして、今現在ユーリが最も会いたくない少女とも言える。最も人柄が悪い訳では無く、それを言うのであれば何の問題も無いだろう。だが、問題は所持している能力、少女は心を読む事が出来る。これが一番の問題。そして、自身の内心を知られることは非常に不味い。

「（どうしたものか。何も考えないでいるのも限界があるだろうし。）」

そして、その対応、又は打開策を探る。しかし、その思考を遮るように続けて声が聞こえる。

『リゼルドおじちゃん！返事して！』

その声は切迫し、今にも泣きそうなほど悲壮な物だと判る。その声を聴き、全ての懸念事項をシャットダウン。やることを一つに決める。

「おい！！聞こえるか！」

『え?!』

「今、お前がいる場所を教えろ!今からそっちへ行く!」

『お、お兄ちゃんたちは誰?ピアの声が聞こえるの?』

「ああ、聞こえてる。それで、どこに行けばいい?」

『え、えっと、で、でも、危ないよ!!今ここはモンスターだらけだし、この森自体が今おかしくなっちゃってるし。』

「俺たちなら問題ない。だから、今はそっちの事を話してくれ。」

『・・・』

ユーリの声を聴き、少女は少しの間沈黙する。それは巻き込むことを良しとするか否か。けれど。今、自分が慕っている者の一人が危機に陥っている。この機会を逃せばこれからどうなるか判らない。それに、青年の位置を把握した時、その位置は自身の知り合いがいる場所に近いというより、その場所目指して移動しているように感じられた。少女は青年の心と言葉を信じることを決める。そこにはおびえも恐れも感じられず、強靭な思いを汲み取る事が出来たからだ。

『判った。お兄ちゃんたちの事、信じるね。ピアはね、ピアっていうの。お願い!リゼルドおじちゃんを助けてあげて!さっきから返事がないの!』

「ああ、それで、どこに向かえばいい?」

『そのまま真っ直ぐだよ。お兄ちゃんたちは偶然か判らないけど、今リゼルドおじちゃんの所に真っ直ぐに向かってる。もうすぐつくはずだよ！』

「エイナ！！」

「任せて！！」

エイナはユーリの言いたいことを理解し、表に戻る。それを見送るユーリ。後の心配をして今を取りこぼしはしない。そこにはその全てを受け止める覚悟をしたユーリの視線が、静かに声が聞こえた先を見ていた。

『この先なの！』

ドライアードが示す先には、今まで以上の植物がひしめき、その周りをモンスターが固めていると言った、要塞のような場所。確かにこの奥には何かあると思わせるにはこれ以上ない警戒態勢だろう。先程の少女、ピアが言っていたも者もこの先に居るのだろう。そして、やはりモンスターと植物は不干渉でこちら優先に襲って来るらしい。理不尽極まりない。

「この先って言われても、子供一人入れないじゃない。」

「とはいっても、他の道探してたら後ろの奴らに追いつかれちゃうし。」

『仕方ないねえ。私とオロチが道を作るからアンタらはさっさと行きな！』

『・・・』

『で、でも。それじゃ二人が。』

名乗り出る二人を心配そうに見るリコ。けれど、それを杞憂だと言わんばかりに笑うコパルディア。

『大丈夫だよ。私らは召喚獣だ、そんじょそこらの奴には遅れはとらないよ。それに、本当に危なくなったとしてもマスターが送還すればいい話だしね。』

『あっ！』

『心配は無用だ。』

リコを安心させるように出来るだけ柔らかく言うオロチ。ただ、その変化がリコには伝わらず、いつもの調子と同じと思われたが。

『さて、もういっちょ派手にいくとしようか！』

『・・・任務開始』

モンスターと植物に覆われ、反対側が見えない場所に強烈な業火が見舞われる。そして、その敵で作られた壁に風穴が開く。即座に氷が張り巡らされて行き、それは氷のトンネルとなる。

『さあ、行きな！』

『・・・ここは任された。』

「・・・うん！お願い！」

『あとで、絶対に会うんだから！約束だからね！』

「ほら、リコ。行くよ。」

先を促すその言葉に残った三人が応じ、氷のトンネルを一気に走り抜ける。この奥にはさらに危険な何かがあるのかもしれない。けれど、仲間が稼いでくれた時間を無駄にする気はない。止まる事無く突き進む。例え、その先に待つものが今まで以上に強力な怪物でも。前へと進むのみ。

～迷いの森の外～

「リゼルドおじちゃん、無事でいて。」

そういったのは小柄な小柄、金色の髪と羽をもった天使。微かに空中に浮き、空を見上げている。その瞳には自分の友人を心配する思いが宿っていた。そして、もう一つ。

「お兄ちゃん、どうか森の魔物を倒して。」

少し前に戻ってきた刀を振るう友人からは、青年の特徴や性格などを聞いていたために、先ほど話した青年がその話題の人物だと気付いた。

そして、その友人が言う所では底が知れないほど強いらしい。それに、先ほど話した所、聞いていた通り魂の輝きは他に類を見ないほど強い。そして、友人の言葉も間違っていないと理解した。それは・・・

「優しい、か。うん、強くて優しい人だよね・・・頑張って、お兄ちゃん。」

その声は風に乗って森の奥へと響いて行った。

狂気の森　異質な変化　破滅の暗示（後書き）

今回はこんな感じです。ちなみにリコの新形態は次で出す予定です。多分。次は色々変化点っぽくなります。少し原作ブレイクするかも、今更ですが。

一つの変革　死闘の果ての救いと崩壊（前書き）

今回はいつもよりさらに長い。どうしてここまで書いたのか。きっと作者にもわからない。今回は戦闘ばっかりになったかな。

色々キャラの強化案を考えていくうちに、だったらまとめて書いてしまえと言った感じで書いた結果がこれです。自重を知れと言う話。

一つの変革　死闘の果ての救いと崩壊

暗く淀んだ森の中、外の光りすらも遮断するその空間は独特の気配を醸し出していた。そこには温かさも、明るさも、命の輝きすら霞んで見える、朧な不確かさがあった。そして、遠くでは地鳴りのような振動と轟音が繰り返される。それを振り切り、ともすれば飲み込まれてしまいそうなそれを見通し、臆することなく進んでいく。

元々立ち止まっている暇などない。最速で敵を倒し前へ進む。出来るだけ速くこの森を出なければ後ろから追いすがるモンスターや悪意に満ちた植物に追いつかれ、自身の不利へと繋がる。

「この先にこの森をこんなにした元凶がいるの？」

『その筈なの！』

エンクの質問に先頭を走るドライアードが答える。その間も走る速度は下げない。いくら残った二人が足止めをしているからと言っても、そこにいるのが全てでは無く、その場所以外からもこちらに向かって突き進んでくる敵が当然いる。

だからこそ、残った二人はそれなりに離れているはずのこの場所にまで届くような轟音を立て、全ての敵を自身たちの方へと誘導しているのだ。

「コパルディア達、派手にやってるわね」

『きっと、大丈夫だよね。約束したんだから』

エイナがその轟音を引き起こしたであろう二人の事を言うと、リコが僅かな不安を宿した瞳をエイナに向ける。

「うん。あの二人はできない事を約束なんかしない。だって、ユーリの召喚獣なんだから！」

『・・・うん。そう、だよね』

努めて明るく返すエイナのその言葉に、自身に言い聞かせるような響きを感じた。エイナも不安なのは同じ。それを子供ながらに感じ取ったリコは、今も後ろの方で響く音源に対して、無事であるよう願いをかける。

『皆、此処なの！』

ドライアードの言葉に全員がその先を見る。そこには深い霧が立ち込め、その向こうに何か黒い影が見える。だが、その霧は濃く、奥の影が何なのかを窺い知ることはできない。

「この先、でも霧が濃すぎてこのままじゃ戦う事だってできないわよ！」

『任せるの！　私の力で何とかするの！』

その言葉と共にドライアードは光を放ち、魔力を拳に収束させる。そして、その拳を地面へと置き、数多の植物を生み出す。そして、その植物が絡み合い、巨大な花を咲かせる。そして、その花の奥には光が集い、それは時間と共に大きく強く輝いていく。周りの霧をかき消すように。

『消し飛ぶの！』

花が溜め込んだ力を一気に開放する。それは以前鬼岩洞で放ったソーラービーム。ただ今回は拡散するように放ち、霧を払う。そして、霧を浄化するかのように花が花粉を散布する。その花粉は霧を押しやり、だんだんとその勢いを弱めていく。

『これで霧は無意味なの！』

「それじゃ、後は……」

「親玉を倒すだけね！」

『急がなくちゃ！』

霧が吹き払われた後、今自分たちがいるのがどんな場所か見えるようになる。そこは広く、巨大な根の上。今までよりもずっと開けた空間、そして、周囲に開けられた巨大な穴。そこからは煙が立ち上っている。先ほどまでここで戦闘が行われていた証拠だろう。

ここのどこかにリゼルドって人がいるんだ。ピアの言っていた人物はパッと見渡したところ見当たらない。どこかに落ちたのか、それとも飛ばされたのか。なんにせよここにはいないらしい。ちなみにピアとの会話はこちらに来るまでに周りの者へと話している。注意しながら見ていると、一際大きなクレーターの中に黒い何かを見つける。

「なに、あれ」

最初は見間違いかと思った。けれど、目を凝らしてみると確かに

そのクレーターの底には何かがいた。それも人型のナニカ。それは体から電気をスパークさせ、壊れていることがうかがえる。

『……もしかして、あれがリゼルドって人なんじゃないの？』

リコの言葉に顔を合わせ、頷く。周囲を確認し、警戒しながら全員でクレーターへと近づく。

「とりあえず、私がいって来るね」

「エイナお姉ちゃん大丈夫？」

リコがエイナを心配そうに見つめる。それを安心させるようにエイナは笑みを返す。

「大丈夫だって！　少しだけそこで待ってて、直ぐに戻ってくるから！」

そう言ってクレーターを滑り降りていく。そして、程なくしてクレーターの底にまで辿り着く。

「これって、鎧か何かなの？　この中に入ってるのかな？」

恐る恐る近づいていくエイナ。とりあえず鎧か何かだろうと思い、兜に当たる部分を外してみようと歩いていく。そして、傍まで来た時、不意に頭部の眼に当たる部分が光を放ち、エイナの方を向く。

「！！」

反射的に剣に手を伸ばすが、それ以上黒いナニカは動く事も無く、

その動きを止める。しばらくすると、訝しげに見つめるエイナに向けて機械的な音声が聞こえてくる。

『……オ前達ハ、何者ダ？』

「喋った？！」

その声を聴き、驚くエイナ。その反応を見た目の前の黒いモノはしばらく沈黙したが、変わらずに機械的な返事を返す。

『……ドウヤラ機械兵士ヲ見ルノハ、初メテノヨウダナ』

「……機械兵士？」

聞きなれない単語に首をひねる。

『ワタシノ様ニ、自分ノ意志デ活動スル、人型ノ機械兵器ノ総称ト理解スレバイイ』

「人型の機械兵器……」

『無理ニ理解スル事ハナイ。ソウイッタ反応ニハ慣レテイル』

「え、ええ」

さすがに意味がよく判らないために、曖昧な返事を返すエイナ。とりあえず気にするなと言うのでその疑問は横へと押しやる事にする。

『……上ニモ熱源反応ヲ感知……他ニモ仲間ガイルノカ』

「うん！　皆頼りになる仲間だよ！　すっごく強いんだから！」

『ソウカ』

「ええ、それで、ピアって子に頼まれて、リゼルドって人を探しているんだけど」

ピアという言葉に目の前の機械兵士の反応が若干揺らぐ。

『ぴあと出会ッタノカ』

「えっと、それじゃやっぱり、あなたがリゼルドであっているのね」

『ウム……リゼルドト言ウノハ、ワタシノ機体名称ダ。正確ニハ多目的型機械兵士、ＬＤ５７５ＥＺ、Ｒｅ－Ｘｅ－ＬＤト言ウ』

「え、ええっと。多目型痛いページ、えるでーいなごぜ、りぜぇるど？」

エイナが異界の言語にしか聞こえない言葉をつぶやく。先ほどのリゼルドの言葉がきちんと頭の中に入っていないらしい。それを無言で見ているリゼルド。若干呆れた雰囲気が感じられるのは果たして気の所為なのか。

『……呼称ハ先程トオナジク、りぜるどト呼ンデモラッタノデカマワナイ』

「そ、それじゃ、リゼルドって呼ぶわね。私はエイナっていうの」

エイナという名を言を聞くと、体を若干エイナの方へ向け動かし、その全体像を眺める。そこには少々驚愕したような感じがうかがえた。

『エイナ……ソレデハ、ゆづき殿ガ言ッテイタ者ハ貴方達ノ事カ』

「ユヅキを知っているの?!……それじゃ、もしかしてあなたやピアも」

エイナの言葉に帰ってきたのは肯定。

『ウム、ワタシモぴあモ、ゆづき殿ト同ジク、白夜ノ一員トシテ登録サレテイル』

「そうだったの……ピアがリゼルドと連絡が取れなくなったって、すごく心配してたよ」

『ソウダッタカ。ドウヤラ、コノ森ニ潜ム魔物トノ交戦デ連絡ガ途絶エテシマッタヨウダ。今カラ通信ヲ再開シヨウ』

そう言うとリゼルドの目が何度か点滅し、リゼルドからノイズ交じりの雑音が聞こえ、それはやがて一人の人物の声へと変わる。先程聞いた少女の声へと。

『あっ！　リゼルドおじちゃん?!』

『ドウヤラ、心配ヲカケテシマッタヨウダナ。スマナカッタナ、ぴあ』

『もう！　本当に心配したんだよ!!……でも無事でよかったぁ。

声が聞こえなくなったときは本当にびっくりしたんだから！」

『ソウカ。』

どうやら聞いている限りでは、ピアも安心しているようだ。その光景に少し顔を綻ばすエイナ。けれど、直ぐに自分たちの状況を思い出し顔を引き締める。

「よかった。……でも、リゼルドあなた結構怪我してるけど問題ないの？」

『ウム。今ハ自己修復プログラムヲ作動サセテイル。モウ少シスレバ、問題ナク任務ニ復帰デキルダロウ』

「よく判んないけど、とりあえずは大丈夫って事よね。私達、今少し急いでるの。この先に居るモンスターを倒して、足止めをしてくれている仲間を助けないといけないの」

『コノ先ノ魔物ハ、ソコイラノ魔物トハ桁ガ違ウ。侮ッテカカッテハワタシノ二ノ舞トナッテシマウ』

「それでも、立ち止まってるわけにはいかないの。だって、仲間が苦しんでるのを見過ごすわけにはいかない。それに、私たちはこの先に進まないといけないんだから！」

その言葉を聞いたリゼルドは腰のパーツをスライドさせ、お守りの様なものを取り出し、それをエイナへと渡す。受け取ったエイナは訝しげにそれを見る。

「これは……」

『ソレハ“ピアのお守り”ソレガアレバ、コノ先ニ進ンデモ元ノ場所ニ戻サレズニスムダロウ。ソノヲ通ジテぴあノ力デ守ラレルカラナ』

「……いいの？」

『先ヲ急グノダロウ？ナラバ遠慮ヲスル必要ハナイ。ソレニ、ワタシモマダ暫ラクハ自己修復ノ為ニ、コノ場カラ動ク事ハデキナイ。ソノタメニ貴方方に渡シテモ問題ハ無イト判断シタ』

「そっか、ありがとう。リゼルド」

『礼ヲイウ必要ハナイ……コノ先ニイル魔物ハ強イ。クレグレモ油断シナイ事ダ』

「うん、きちんと胸に刻んどくね！」

そう言うとエイナは踵を返し、クレーターを上っていく。上ではエンクとリコが此方を安堵した表情で見下ろしており、ドライアードは周りを警戒している。そこへ登っていったエイナは仲間を見渡し口を開く。

「リゼルドなら大丈夫みたいだから、私たちは私たちでできる事をしよう。この奥のモンスターを倒せばリゼルドだって、安心して治療に専念できるはずだし」

「それなら、さっさと行くわよ！」

「うん！」

『急ぐの！！』

そして、全員が改めて奥へと向かって走り出す。そして、やがて奥に進んでいくうちに、そのずっと奥に蠢く影を見つける。そこを目指し、全員が走っていく。

所変わり、モンスターの叫びが聞こえるこの場。その声は多種多様有れど、止むことだけは決してない。それはそのモンスターたちの目の前で現在進行中で起こっている自然災害が原因となっている。

『やれやれ、ああは言ったけど、流石に面倒くさいね、こりゃ』

『……無駄口を叩く暇があるのなら、対象を一人でも多く討ち取れ』

『はあ、アンタは真面目だねえ。ある意味尊敬するよ』

その自然災害を起こしている原因となっている二人。氷を扱い、凍った静止世界、永久凍結を生み出した悪魔、氷魔コパルディア。そして、炎を扱い、全てを絶えず燃やし尽くす灼熱地獄を生み出した忍び、炎忍オロチ。二つの異界が侵略するすべてを飲み込み塵と成す。

『それにしても、結構倒したんだけど、一向に収まる気配がないんだけど、どうなってんだかねえ』

『知らぬ。我らはただ目の前の敵を打ち倒すのみ』

『シンプルでいいねえ。アンタは』

『……雑念が多すぎるのだ、汝は』

『行ってくれるじゃないか！　きちんと結果は出してるんだ。どうこう言われる覚えは無いってもんだよ！』

お互いに軽口を叩きあいながら、攻撃を続ける。その余波で周りの植物が次々とそのあおりを受け、消滅して行く。

『それに、ただ、ここで番をするのもなんだ。せっかくだし、どっちがより多く倒せるか勝負とでも行かないかい？』

『……汝はとことん不真面目だな。』

コパルディアの提案に溜息をつきながら答えるオロチ。その反応に不満そうに言うコパルディア。

『娯楽がなきゃつまらないじゃないか！　人生遊んでナンボだよ！』

『……勝手にするといい』

呆れながらも、オロチの言ったその言葉を聞いて、笑みを浮かべ口を開くコパルディア。

『その言葉は了承したと受け取るよ。それじゃ、アイツが地面に落ちたら合図って事でいいかい？』

『……』

そういって、迫り来るモンスターの一体に照準を合わすコパルディア。それを横目で見据えるオロチ。

『それじゃ……ショータイムの始まりだよ！』

その声と共にモンスターの一体が盛大に空を舞う。そして、そのモンスターが地面にたたきつけられると同時に、青と赤の影が無数のモンスターへと躍り掛かり、地獄絵図を形成する。そこに救いは無く、ただ、有象無象の屍が高く積み上がるのみ。

森の中を一直線に走っていった先、謎の影と出会うエイナ達、そのモンスターが恐らくは元凶なのだろうと確信する。

「リゼルドも心配だけど、今はこっちを先に片付けないとね」

「これは、これが、この森をこんなにした張本人ね」

エイナ達の目の前には、大きなカボチャの様なモンスターが存在していた。その大きさは無論、自分たちなど比べ物にならない程巨大。左右にはその巨体に添うように黒い手の平が浮いていた。どうやら、あれが敵の手らしい。自立しているようにも見える。そして、そのカボチャからは大量の黒い茨が伸び出していた。

「やっぱり、あの黒い茨が関係してるんだ」

静かにエイナは呟く。自分が確かに見つけた茨はやはり災いを作り出していた。恐らくはこの現象もあの茨がこの森に発生したからに違いない。エイナはそう判断する。

ハロウィンででも重宝しそうな形の顔をこちらに向け、赤く染まった瞳に悪意を宿す。この先には進ませない。かろうじで、その意思だけは読み取る事が出来た。そしてその眼が妖しい輝きを放ととする。

『もう、元の場所になんか戻させないの！』

その言葉を言うと同時にドライアードの魔力が空間に満ちる。その力はモンスターの瞳から放たれた光を遮り吹き飛ばしていく。そして、エイナの耳に先程聞こえた少女の声が響き渡る。お守りが光を放ち、辺りを照らす。

『お姉ちゃん。ピアも頑張るから！　思う存分戦って！』

周りが薄く発光したかと思うとその光はカボチャ型のモンスターへと集まり、その瞳から放たれる光を段々抑え込んでいく。

『これで、もう戻されたりなんかしないよ！　お姉ちゃん！』

「ありがとう。ピアちゃん！」

即座に走り込み、それと同時にコパルディアを憑依させる。冷気を纏った斬撃を巨大なカボチャモンスターへと突きつける。その剣に相対するモノの名を、影の魔物、カボと言う。その脅威に満ちた姿はともかく、その名は安易なものである。

「止まっているわけにはいかない！　さっさと終わらせてあげる！」

その声と共にカボへと剣を走らせる。冷気を纏ったその斬撃は真っ直ぐに敵へと放たれる。カボは大した反応をせず、その剣を受ける。

『ガアアアアア！！』

だが、その一撃はカボの体を滑るように逸れていく。あまりの固さに刃が通らず、表面を滑ったのだ。

「う、嘘！」

そのせいでエイナの体の姿勢は崩れ、大きな隙をさらすことになる。それを見越していたのか、カボが片手を振りかぶるようにして拳を握り、殴りこもうとしている。今の状態からでは回避は不可能。防御にしても防ぎきるのは難しいだろう。そう考えていると、雷撃がカボを襲い、その攻撃をキャンセルする。

「私の事を忘れてるんじゃないっての！」

そこには角を生やしたエンクがいた。そのまま雷槍を作り、カボへと投擲する。その一撃をカボは巨大な両手を使い殴り落とす。その速さは予想以上に速い。雷に対応したのがその証拠だ。どうやら見た目で遅いと勝手に判断していたが、速さもとんでもないらしい。

「ちっ！　厄介ね。それなら、これで！」

今度は空へと手をかざし、そこに力を込める。そして、その瞬間

変化が起こる。カボの上空、そこから巨大な落雷が真っ直ぐに落ちてくる。真下に居るカボへと。強烈な光を放ち、辺りに衝撃が余波として広がる。そこには煙が立ち込め、大気に残る電気と破壊された根の破片がその威力を物語っている。

「これなら、少しは効いた……って冗談でしょ！」

エンクが手応えはあったと判断し、ダメージを確認しようとした所、煙が張れたそこには無傷のカボが不気味に佇んでいた。よくみれば両手から煙が舞い上がっている。しかし、そこに損傷は見られない。先ほどの落雷でも特にダメージも無く防いだとでも言うのか。それを認識し、内心冷や汗をかく。

「反則もいいとこね。本体もかたくて、あの手は更に固くてしかも速いとか。どんだけだってのよ！！」

面倒な事になったと舌打ちしながら再び雷撃を放つ。そこに合わせるように小型ドリルが降り注ぐ。

『これじゃ効果がない。それなら！』

そして、躊躇うことなくレールガンを打ち込む。それは電撃を撒き散らしながら直進する。けれどその進攻は黒い手によって阻まれる。よりにもよって手でレールガンを掴み握りつぶすという荒業を行い、本体もその手も傷を負うことなく、僅かに煙が上がるだけでそれ以上の効果は望めていない。

『これ以上は、限界が近いの』

それを放った本人であるリコの頭にあるのは驚愕と、残りの活動

時間。ここに来るまでの間ずっと融機人状態を続けていたのだ。待機状態とも言えるアイドリングモードとライザーの発電をエネルギー変換し持たせていたが、それももう持たない。だが、ここで元に戻る訳にはいかない。ここで解けても直ぐに常夜の石の中に入れれば問題はないが、それが出来なければ待つのは死のみ。

とはいえ、現実問題として考えれば自分が能力を制限し少し時間を伸ばしたとしてこの局面で打開策になるとは思えない。リコはそう結論付ける。目線をエイナへと向ける。それに気付いたエイナはしばらくリコを見返し、その意図するところに気付く。確かに頷いたエイナを見てリコは自身の新たな力を使う決心をする。手を掲げ、自身の力、召喚術を行使する。

『それなら打つ手は一つ。行くよ。憑依召喚！　炎忍オロチ！』

リコの言葉により、異界の門が開かれる。そこから流れ出すは烈火の光。それがリコに宿る。光がリコに集まり、その体が発光する。その時不思議な事が起こった。その光に反応するかのようにリコの身に纏っている装甲が動き、形を変えていく。赤い魔力光が引き金になっているかのようにその姿を変えていく。それを見ていたエイナが常夜の石の中でリコと交わした会話を思い出す。

ユーリが剣を作っていた時、常夜の石の中で模擬戦をした後、二人はリコの新形態について話す。

『この姿は前とは違ってあんまり持たないの。戦闘能力は上がるけ

ど、その代わりに活動時間は少なくなっちゃうから』

「でも、その分強いって事でしょ。さっきも戦りあって見て分かったけど、威力なら確実に前よりも上だしね。ちょっとヒヤッとするところもあったし」

そう言ってエイナは苦笑いする。模擬戦と言うより、試運転に近いものであったためにあれが全開だとは思っていない。けれどその状態でも火力は十分ある。けれど、課題もある。

「とは言ってもネックなのは変形するのに時間がかかる所ね。今のまんまじゃ、いい的にしかならないわよ」

『うん、そうだよね。でもユーリお兄ちゃんじゃないと私じゃ今の状態でもきちんと調整できないし』

そう言ってリコは元に戻る。というよりも活動限界になり強制解除されたのが正しいのだが。新形態は5分ほどが限界。それ以上は無理。元の姿が30分、アイドリングモードなどを駆使すればだいたい40分ほど。それを考えるとどれだけ活動時間が削られているか判るだろう。

「……ふう。でも、やっぱり戦闘中じゃないと使う機会は無いし、かといって、いきなり使ったんじゃ攻撃を受けるだけだし」

「うん、そういえばあの時って変形してるとはいえ、装甲なんだから少しは大丈夫なんじゃないの？」

エイナが思いついた事を言って来る。変形中でも装甲である以上ある程度は耐えられるのではないかと聞いてくる。だが、それにリ

コは首を振る。

「うん、耐えるだけなら何とかなると思う。でも、装甲が変形してる以上防御力は落ちるし、私の生身の部分が露出するから、下手すると一撃でやられちゃうかも」

「……それは駄目ね。そうなると、戦闘前に変わっておくのがいいのかしら？」

「でも、そうすると確実に少し時間を使っちゃうから、やっぱり戦闘中に変わるのが一番だと思う。少しでも多くの時間を持っておかないと直ぐに終わっちゃうし」

「それもそうね」

エイナはリコの言葉を聞き少し思案する。少しすると何か思いついたのか、リコの方に顔を向けてくる。

「それじゃ、やっぱりリコちゃんが誰かの側で護衛されながらしか方法は無いんじゃないかな？」

「そう、だね。うん、私もその方がいいと思う。安全だし、何かあってもすぐに対応できそうだし」

エイナの思いついた案を肯定するリコ。

「それじゃ、使う時が来たら教えて。私がリコちゃんを守ってあげるから！！」

「うん！　その時はお願いするね！　エイナお姉ちゃん！」

その言葉と共に笑みを交わす二人。そこから少し談笑し、リコは外へと戻っていく。

エイナはその会話を思い出すと同時にリコの方へと走り出す。エンクは変わらず稲妻を放射し、カボを攻撃している。けれど、その攻撃も両の手で弾かれ打ち消される。

「まったく！　なんであんなに速く動けんのよ！　とろそうな外見してるってのに、見た目に違うことしてんじゃないっての！！」

そう言って毒づくエンク。けれどもその間も攻撃の手を休める事は無い。そして不規則に上空から砲撃が見舞われる。そこにはドライアードがさらに多くの植物を作り出し、複数のソーラービームで攻撃する姿があった。更に周りの植物が攻めてこないように力も割いている。それはドライアードにとってそれなりの消耗を強いる事だが、本人はそれを気にも留めずに攻撃へと力を注ぐ。

『あの手の防御があるから本体に攻撃が通じないの。せめてあの手をどうにかできたら』

ドライアードの言葉通り、攻撃を捌いているあの両手をどうにかしない事には攻撃が通らない。けれどもあの両手をどうにかしようにもあの速さでは迂闊に近寄れない。遠距離で破壊しようにもご覧のありさまだ。

「だったら！」

躊躇いなしに周囲の砂鉄を集め、レールガンを放ってみるが、閃光の中からは変わらない姿のカボが現れた。リコの物よりもさらに上の威力を誇る自身のレールガンをもってしても、あの両手の防御を打ち抜くことはできなかった。少々の焦げ目がついた程度だ。思わず舌打ちをつく。

「それなら、やっぱり至近距離で破壊するしかないか。ドライアード援護して！」

『待って！』

あの堅牢な防御の前に接近戦を挑もうとするエンクだが、それを行う前にカボが行動を起こす。周囲に張りめぐらされた茨が意志を持っているかのようにエンク達に殺到する。

「ったく！　ウザったいっての！！」

『来ないでほしいの！』

それを迎撃する二人。そしてその茨は当然リコの方にも殺到する。けれどもその茨は辿り着いたエイナによって切り刻まれることになる。

「さて、まだまだやられてなんかあげないんだから！」

冷気に包まれた剣を掲げ、茨の相手をするエイナ。その剣に集まった冷気が突如炎へと変わる。憑依をコパルディアからオロチへと切り替えたのだ。剣から生み出された炎を茨へとぶつけその勢いを

そぐ。更に乱れ切り。切り返し、薙ぎ払い、燃えつくす。時折、火炎弾で反撃をする。

「こっちは大丈夫だから！　安心して、リコちゃん。」

返事は無い。けれど、届いていると判っている。それ故に自分の成すべきことを行うのみ。

静かに世界が揺れる。視界が変わる。凄まじい情報が流れ塗りつぶしていく。

《ーーーーモード移行、ストライクフォームからブレイジングフォームへシフト、プログラムドライブ》

エイナの声が高らかに聞こえるその後ろで、リコが光の中で何かの駆動音と共にその姿を変える。機械的な音声で脳内へと流れるデータ。それに従い自身を変化させる。今までのは標準的な状態であり、一番安定させた姿であるストライクフォーム、けれどもその最大武装であるレールガンではあの敵には届かない……装甲が外れ、形を組み換え再装着される。

今までの力じゃ通用しない。

それは試してみて痛感したことだ。それにレールガンは左右の砲身それぞれ一発ずつのみ。これでは足りない。ならば残りのエネルギーを全てレールガンへと足し合わせて打ち込めばどうか。だが、

恐らくはそれでも届かない。エンクでも無理なのだ。自分ではなお厳しいだろう……神経接続され、肘と膝部分の装甲に鉄柱が撃ち込まれ装填される。

『（それにもう活動限界が間近に迫っちゃってる。もう猶予も無い。）』

しかもどうにかしようにも回せるエネルギーもほとんどない。そして数で押そうにも、あの手の速さを越える事は難しい。それはドライアードの複数のソーラービームが通用していない事からも判る。

単発の威力でもエンクのレールガンクラスの威力があるあれを弾くには、桁違いの強度と、それ以上に人外じみた速さがいる。そうで無くては今頃、確実に本体へと攻撃が雨のように通っている事だろう……光が流れ、砲身が腰部から肩部へ移動する。そして開いた腰へ剣の柄が取りつけられ、回路とリンクする。

《――プロテクト解除。エネルギー形成、外装駆動、基準値クリア。武装展開、開始》

工程が進む、それと共に変化する装甲。痛みは無い。迷いも無い。それはただ予定調和であるかのように進行して行く。そして、より強く苛烈に体を包む光が赤に染まる。

憑依させたオロチの炎を核にドリトルの生成エネルギーを補助動力として扱う。そのため、生み出されるエネルギーは今までの比ではない……頭部に熱排出のためにウィッグが取り付けられる・・・それに伴い熱が放出され、髪が紅に染まる。

この姿の稼働時間は変形終了から5分。それは今までの消耗とは

関係なく固定。だから今まで使わなかったけど、もう後がないし、今なら迷う必要も無い。

今、リコが思った通り、既に自分に残された時間はほんの僅か。どう動くにせよ、もうすぐ元に戻ってしまう。それならば出し惜しみは無し。唯一の懸念事項である変形時間の確保もエイナが稼いでくれている。それにエンクやドライアードの攻撃もカボの狙いを逸らしていてくれる……足元に杭が微かな振動を上げる。

《ーーープラズマ砲、展開。振動剣稼働確認。パイルバンカー動作確認終了。アンカーボルト始動。兵装、紅炎朱新設。全武装オールグリーン。ブレイジングフォーム駆動開始》

脳内で流れる声が変形終了を告げる。その声と共にリコは目を開き、視界を見渡す。様々なデータが飛び交い、情報を埋め合わせていく。その工程は刹那の合間に完了され、即座に処理される。倒すべき敵を見据え、体を動かす。

『余裕なんてあげない。最大威力で終わらせてあげる！！』

そこには機械的な赤い眼光を光らせ、それに負けない赤い装甲を纏ったリコが、自身の背丈ほどの赤色のツインテールから火の粉を散らしながら立っていた。

もう都合3度目ののレールガンを放つ。けれどもそれはあの両手に阻まれ、結局届かずに終わる。今はドライアードの攻撃で何とか

足止めできているが、倒すにはいたらない。

「まったく、時間が無いって時に。仕方ないわね。少し無理をするとしますか」

そう言うとエンクの角に複雑な紋様が刻まれる。何かしようとしているのに気づいたドライアードが一層砲撃を強める。その勢いにカボの鉄壁の防御が押され始める。

あの茨と植物を抑えながらの戦闘はきついの。もうすぐ限界が来るの。それまでに何とかしないと。

内心でそう考えるドライアード。もう自分の能力であの茨以外の周囲の植物全てを黙らせて、その上で多数の植物を生成し、それの行使。精神的にも限界が近い。けれども止まる事は無い。まだ打つ手はあるだろうし、まだ、主がいる。まだ、自分がリタイアするには早い。そして、そのわずかな時間を持ってエンクの力は解放される。

「できる事ならやりたくなかったけど、状況が状況だし、躊躇できないわね。」

幻獣として祀られる麒麟であるエンクは本来、今以上の力の行使が可能。けれども、まだその力に目覚めていないエンクは自由にその力を行使することはできない。真の力を引き出そうとすれば多大な負荷がかかる。故に短時間の戦闘に限られる。戦闘終了時には動くのも辛いぐらいに消耗しているだろう。それにこれを行うとしばらく角を使った能力が使えなくなる。

「まあ、後の事は、後から考えましょうか！！」

それほどのリスクを伴っての限定解放。それでも潜在能力の全てを開放するには至らない。けれども現状だせる真の最高出力。それを躊躇いなく発動させる。紫電が空間を閃かせ、周囲を焼く。緑の光を放ち、紋様を描かれた角を天へと向ける。それと同時に威圧が膨れ上がる。そこにはエンクが先ほどの焦るなどみじんも無い表情で佇んでいた。

『さあ、もう手加減なんか期待できないわよ。覚悟しなさい！！』

その言葉と共に今までの規模を上回る稲妻が走る。それを先ほどと同じように手を使い防ぐカボ。驚くことに倍以上の威力の稲妻を片手で防ぎきる。けれどその程度織り込み済みだ。今までその防御を貫けていない以上、通用しない可能性がある事など承知の上。それ故に次の一手を取る。

『これならどうかしら？』

続けてカボの後方に雷槍を形成、間を置かずに射出する。それは雷速を持って敵を殲滅にかかる。それを開いているもう片方の手を持って防ぎにかかる。その動きを見た瞬間。更にエンクは行動を起こす。

『もう一丁！』

カボの上空から落雷を落とす。今左右に手を使っているカボには防ぐ手段は無い。先程までなら即座にかき消すなり握りつぶすなり出来た筈だが、今の攻撃はエンクのリミッター解除した一撃。そうやすやすと消される事は無い。その一撃は消えぬ閃光。

『ゴアァァァァ！！』

けれど今度はカボのカボチャに似た本体が上を向きその大きな口を開く。そしてその中には赤黒く染まった球体があった。その不気味な球体が発光し、黒の砲撃を放つ。それは落雷と衝突し轟音と共にせめぎ合う。その勝敗の結果は相殺。今のエンクの力を相殺できる時点でその凶悪な威力の片鱗は理解できる。けれども、その球体の不気味さと、相殺と言う結果自体は予想外だが。それ以外は想定内。

『懐がガラ空きだっての！』

その開いた隙にエンクの角が紫電を放ちそれは体を伝い覆う。そこにはエネルギー状の体へと変化したエンクが雷光と共にカボを睨みつけていた。カボは上への砲撃のために視線を上に向けこちらを見ていない。もうすぐ此方へ視線を向けるだろうが、それでは遅い。この行動を止める事はできない。そう、雷となったこの身を止めるには遅すぎる。次の瞬間、文字通り光となって駆け抜ける。

『？！　ギャァァァァ！！』

その突然の痛みにモンスターの悲鳴が上がる。何が何だか理解できぬままに体を蹂躙する激痛。その原因であろう場所に目を向けると、そこには槍を構え、こちらへと突きぬいた姿勢で此方へと不敵な笑みを向けるエンクと目が合う。その槍の穂先は正確に己が体に刺さり、この身へと刺さっている。そのことを認識した瞬間、それを振り払うために怒りと共に黒い波動を衝撃波として吹き放つ。

『不味いの！！』

「ち、ちょっと！」

離れていたドライアードが刹那の間に大樹を生成し、自身とエイナを衝撃波から守る。その時、常夜の石が光、エイナはユーリが交代しようとしていることに気付く。

「まだ、まだ大丈夫。ユーリまで消耗しちゃってたらこの後戦える人がいなくなっちゃう。だから、もう少しだけ待ってて。如何にかして見せるから！」

エイナはそう言って常夜の石に笑顔を向ける。それは根拠も何もない。けれど、事実としてユーリをここで消耗させれば無事なものが居なくなってしまう。だからこそエイナは今は止めようと判断した。もしかしたら今こそユーリに交代するときなのかもしれないが、何か不安を感じる。それの正体が何かは分からないがあの茨を見ているとなにか取り込まれそうで嫌になってくる。

ユーリ。もう少しだから。だからあの茨には近づかないで。

自分でも気づいていない思考。それはユーリはもちろん、本人すら意図していないそれゆえにエイナすら気づかない。無意識の思考。けれどその不安だけはなぜか確信めいたものがある。まるで過去に経験しているような、そんな根本的な納得感がそこにはあった。

しばらく明滅していたが、その光が消える。どうやらこの場で交代する気は無くなったらしい。けれど、その代わりに常夜の石がまた別の意図で光り始める。その光に込められたものは知識。先程試していた事柄を伝える。間違えないように、きちんと扱えるように、丁寧に噛み砕いて教える。

「え……」

その知識を飲み込んでいく。けれどそれだけでは全てを扱う事はできない。けれど、実戦で教える暇は無い。故に行うのであれば今この戦闘で扱うしかない。分の悪い掛け、けれどこれがユーリが譲歩する限界。何とかするのであれば方法は如何にかするから、せめてここで引き下がっても大丈夫だと思える結果を作り出せと暗に告げている。

それはユーリなりにエイナを心配して行った事。本来なら今頃は自分が表に出ていたのだ。それがどういうわけかエイナが妨害しているのだ。理由は不明だが、なぜかユーリの事を出すのを渋っている節が見て取れる。

不思議にも思ったが、その眼は本気で自分を出す気がないと受け取った。お互いに負担がかかるために無理に外に出ていくことは出来ない。ならば手段を考える。エイナでも目の前の困難に立ち向かえるだけの力を。

「まだ、私は、戦える。まだ、こんな所で止まれない。そうじゃないとまた、失っちゃう」

無意識に口を突いて出た言葉の意味を理解する事は無く、けれどその言葉に恐怖を感じた。自分がこのまま何もしなければ青年が居なくなってしまいそうな、孤独感を感じた。

けれど戦場は個人の意思を置き去りにしてただ熾烈に大袈裟にどうしようもなく加速して行く。

『へえ、まだ元気はあるみたいね。それなら、これも耐えれるかし

ら？』

雷となる事で物理的な衝撃を無効化するエンク。既に衝撃波による脅威は無い。故に突き刺した槍へと視線を向ける。エイナでは憑依を行い、冷気を纏わせ鋭くさせた刃でも届かなかったが、今の自分は槍に最大級の稲妻を纏わせ、雷速を持って突撃し、無防備な場所を全力で突き抜きに行ったのだ。これで刺さらなければ、それこそどうしようもないと思っていたが、どうやらようやくこちらに流れが来たらしい。

『ウゴアアァァアア！！？！』

突き刺した槍へと雷を伝わらせ、その体内へと一気に流し込む。容赦なし、全力のそれを受けたカボは、声にならない悲鳴を上げる。そして、その声にはほんの僅か、消えかかった意志が灯っていた。

マ、マダ、オ、ワル、ワケニハ……イカ、ナイ！！

けれど、森を進ませず封じてきたモンスターはこれ位では倒れない。怯みはしたものの、まだ足りない。少々体の動きは麻痺により鈍ったがそれだけだ。まだ問題は無い。まだ、動く。動く以上は止まる訳にはいかない。何が何でも止めに行く。もとよりこの体は既に止まらない。選択肢などもう自分にはない。

『ギャアアアアァァア！！』

漸く稲妻を打ち消し自由になった両手を振り上げる。この一撃を持ってこの少女を止めよう。明確な意志を込めた一撃、稲妻を流し込み続ける少女はその一撃な対応できないだろう。けれど、その一撃は、横合いからの砲撃によりその意図を失う。そこには赤い装甲

を身につけ、肩の砲身から電気を放つリコの姿があった。

『それ以上は私が許さない！』

『リコ！　けどその姿は……』

エンクの声に顔をそちらに向け、口を開くリコ。その口調は冷静さに溢れていた。憑依したオロチの影響だろうか。

『エンクお姉ちゃん、話は後だよ。時間がないの。あんまりこの姿でいられないから、全力で終わらせたいの。協力して』

『え、ええ！私もあんまり時間がないの。そういう事なら一気に行くわよ！　リコ！！』

『うん！』

怯んだすきにいったん距離を置いたエンクがリコと合流する。恐らくこれ以上電流を流しても、大きな成果は見込めないだろう。それにその方法では時間がかかりすぎる。それ揺れの仕切り直し。二人が横に並び、槍と振動剣を構える。

槍に紫電が伝い、振動剣に火が灯る。流れるように戦闘態勢に入る二人。それを一瞬何か眩しいモノを見るかのような視線をしたカボ。正確にはその中の存在。けれどもそれはあまりにも短く、気付いたものは青年ただ一人。

『行くわよ！　括目しなさい！！』

『もう、誰も傷つけさせない！！　そのために望んだ力なんだから

！』

同時に飛び出す二人。先手は雷速で掛けるエンク。その動きは既に目でとらえ切れるものではない。けれどカボはその手の枠外の速度と、浸食する悪意を持って反応する。だが、それは既に判っている事、雷槍を打ち落とし、あまつさえレールガンに対応したのだ。けれど、だからどうしたというのだ。追随するというなら、さらなる一手を持って突き放すのみ。

『行きなさい！！』

即座に砂鉄を集め、矢と変え撃ち放つ。その狙いは先程あけた穴。それは塞がれる事無く開いたままとなっている。あの強度があるからなのか、再生などといった反則技は無いらしい。雷速を越える動きで矢を叩き落とす。止まらずに雷撃と砂鉄の刃で全包囲攻撃を仕掛ける。そして、その全てに対応するカボ。

『まだまだいけるの、油断大敵なの……』

「こっちを忘れてんじゃないわよ！」

けれど、エンクに集中している余りに、意識から外れていた後方から衝撃を受ける。それは肩で息をするドライアードと、流れてくる知識に顔をしかめながらもドライアードを支えるために肩を貸したエイナから放たれた物。そして、それにより、赤い閃光がその懐へと侵入する。そして、蓄えられたエネルギーがここぞとばかりに爆発する。

『はあああ！！』

細剣の形をした振動剣をカボに向けて突き刺す。エンク程の威力があれば貫けるがリコではどうやってもそれはできない。ならばほかの手段を用いてそれを行うまで。例えとる手段が違っても、至るべき結果が変わらないのであれば問題は無い。微細な振動を繰り返すその刃は、物体の強度を度外視したかのように易々と侵入する。

『これ位じゃ！』

その言葉と共に、膝と肘から機械音が聞こえる。引き抜いた振動剣の代わりに拳をその体へと突き入れる。けれども刃ならまだしも、強度を上げたとはいえ子供の細腕でダメージは望むべくもない。けれども、その認識は数瞬の後に訂正されることになる。

《ーーパイルバンカー射出》

脳内音声と共に拳からパイルバンカーが撃ちだされる。その勢いはカボの体を僅かながら押し返す程のモノ。けれどもその衝撃はリコにも反動となって返ってくる。その大部分は装甲で緩和しているが、それでも少しは体に負荷がかかる。歯を食いしばり、それに耐える。

幸い今の状態なら痛覚をごまかす事が出来る。無論、元に戻った時に辛い思いをするだろうが、今はそれを気にしてなどいられない。止まる事無く今度は逆の拳を打ち込もうとする。

『グアアアア！！』

それに気付き腕を振り上げるカボ。けれどその腕は動くことなく止まる。それどころか特定の方向へと引き寄せられていく。その方向の先にはエンクが角を光らせ、笑みを浮かべていた。

『ようやく思った効果が出たわね。時間がかかるとは思ったけど、ここまでとはね』

そう言って能力を全力始動、カボの両の手に纏わせた砂鉄が磁力によって引き寄せられる。それは砂鉄と磁力を使って、あの両手をどうにか止めようと考えたエンクによる作戦。少なくとも両手を防げば後は茨と本体の砲撃に気をつければいい。そしえ、その隙を全力をつぎ込んだリコが見逃す事は無い。

『終わらせない！！』

続けて逆の手でパイルバンカーを打ち込む。反動でお互いに僅かに交代する。けれどリコはそこからさらに前に進む。跳び膝蹴りの要領で跳躍し、膝のパイルバンカーを射出、止まる事無く、もう片方のパイルバンカーも打ち込む。その威力に顔がゆがむ。

カボがそのわずかな隙をつき体を回転させることで振り払う。吹き飛ばされたリコは若干離れた位置に着地する。時間はどんどん迫っている。けれどまだ止まれない。痛みを誤魔化した体に鞭を打ち立ち上がる。

『ガアァァァァ！！』

リコを捉えようと大量の茨が殺到する。その太さはその一本一本がリコの体よりもさらに太い。捉えるのではなく、どちらかと言うと蹂躙と言った言葉が当てはまる。通り過ぎた後には何も残らないだろう。それを見据え足の裏に仕込まれたアンカーボルトの具合を確認。兵装の準備。そして、今の状態の本領を発揮する。

《ーー兵装、紅炎朱作動。駆動、開始。ソードエッジ解放。ベクトルドライバースタート》

その声と共に　リコの長く伸びたツインテール、それに巻かれた帯が解かれる。螺旋を描くように巻かれていたそれは空中で勢いのままに揺れる。その数は左右それぞれ４本の計８本。正確にはこのウィッグは熱排出のためだけのあるのでは無く、これこそが、この形態最強の兵装使用に当たって開放された新設武装。それを展開する。

『無駄な時間はかけられない。受けに回るのは悪手。なら、攻め続けるだけ！』

それは演算によって成り立ち、その帯の一本一本が個別の行動をとり、物理法則を逸脱した軌道を取る。本来ならば、それを完全に予測することはできない。それは融機人となっているリコも例外では無く、この軌道を自身の支配下に置くことは不可能だ。けれど、ライザーに搭載された隠しプログラム、この形態のために搭載され、今その息吹を上げたシステム。

『目の前にあるのはただの遮蔽物。気にする必要なんかない。だから！』

その名をベクトルドライバーと言う。これは演算システムで、その名の通りベクトルを割出、対象の動きを予測、制御、操作、支配するシステム。

無論対象だけではその動きを完全に読み切ることはできない。その周辺には大量の分子があり、その運動により必ず若干の差異が生まれ、その積み重ねで予測から外れていくからだ。けれど、このシ

ステムはその分子運動すら読み切る。それ故に外部の影響すら視野に含んだ完全演算を実現している。

『切り裂くだけ！　ブレード・フルスラスト！！』

振り払う。その計８本から紡がれる軌跡は、止まる事無く茨を切り裂く。数秒の沈黙の後、そこには無残に切り刻まれた茨だったもの。そしてそれを成した本人であるリコはそれを意に介することも無く、ただひたすらに前へ進む。

『ガアアァァアア！！』

『ぐっ！　まだそんな元気があったのね。やってくれんじゃない！』

その進路を塞ぐようにカボが茨を放つが、元から足を止める事などできない。残骸が増えるだけ。それならばと茨でエンクをけん制し、磁力から逃れた両の手を持って迎撃に入る。正体は不明だが、この手ならばあの少女の刃にも耐えれるだろうと予測を立て拳を握る。その予測は半分正解となる。

『行くよ！』

リコがソードエッジに指令を伝達し、その指令の通りに動くソードエッジ。振り上げ、急降下する拳、それが空中で衝突する。果たしてその結果は、火花と共に、リコのソードエッジが弾かれるという結果で終わる。だが、無論リコも馬鹿ではない。今までその防御を崩した、更にはまともに手を傷つけたモノすらないのだ。いくらこの兵装とは言え、この結果も十分に予測できた。だからこそ、この次がある。

『捕まえた！』

振り切ったその手にブレイドを絡みつかせ捉える。このブレイドは一見、切るためだけに存在しているように見えるが、きちんと他の意味がある。完全にその動きが自分の思い通りになるのなら、切らずにとらえる軌道もあるという事。今回はそれを使い、両手を一時的に封じる。これで防御は無くなった。

『！！』

気付いてももう遅い。すでにリコはその射程に入っている。自身の兵装、その第二の機能が始動する。

《ーーーー兵装、紅炎朱。ブレイズラジエーター出力上昇。攻撃転用可能。》

リコのツインテールが更にその舞い散る火の粉を増やす。それに伴い周辺温度が下がる。周りの温度を下げ、その熱量を自身へとプラスする。熱量の略奪。そしてその熱量はリコのツインテールの蓄積される。既にその髪は発熱し、大気を歪める。その変化にカボも気付くが圧倒的に遅い。その筈だった。

『アアアアアア！！』

『！』

唸り声と共に口を開き、赤黒い球体が露わになる。その球体に光が集まり、閃光が宿る。そのチャージは早い、何せ落雷の発生に気付いた後からでも相殺することが可能なほどなのだ。チャージ時間などないと言っていい。その一撃はリコの行動を封殺し、先手を取

り吹き飛ばすはずだった。

『リコ！！』

エンクは茨を排除しきれておらず、ドライアードも周囲の植物を止める事に力を使い他に回すほどの余力は残っていない。ここでその奮闘は止まるかに見えた。けれど、再度その行動はキャンセルされる。打ち込まれた桃色の魔力光によって。

「……これで、いいのよね？ユーリ。」

確かめるように呟くエイナ。その手からはカボの打ち込まれたモノと同様に、桃色の光が煌めいていた。それは魔力。ユーリが扱っているストラを応用した〔魔抗〕と呼ばれるモノ。

それを戦闘用にユーリが改良したもの。いわば魔力版のストラ。無論ユーリ程でたらめな物では無い。けれど、それは元々ユーリの肉体にエイナが宿り変化したもの。ならば想定されたものなど越えて見せる。何より、考案したユーリが伝えた来たものだ。不満などは無い。

「私だって！」

そして、発動するはユーリが考案したもう一つの秘奥。呼び出すはコパルディアとオロチ。それが青と赤の光となってエイナへと宿る。その二つは本来相容れない存在。けれどそれを差し引いても2体以上の憑依は高いリスクが付きまとう。まず一つに制御、一体でも本来ならば失敗のリスクが存在する。

ユーリと、その体を扱うエイナはともかく、リコは憑依をすると、

多大な負荷が体にかかる。ブレイジングフォームをここまで使わなかった理由の一つはそれである。エイナとて負荷がない訳では無く、長時間の憑依は心身ともに消費する。

「出来るって事を見せてあげる！！」

けれども、体から放出する魔力がその荒業を強引に成功へと向かわせる。並みの術士と比べても圧倒的な魔力量を持ってして、リスクを抑え込む。故にこれに臆することは無い。赤と青が深い所でまじりあう。本来なら憑代となる術者の奪い合いが発生し、術者ともども死滅する未来はその類まれなる才能と、本来の所有者から借りだされた特殊な肉体が拒絶する。

――二重憑依――

「うあああぁぁあ！！」

光が空間に満ちる。それが収まった時、左右それぞれを目を赤と青へと変えたエイナが影の魔物へと闘志を放ち影の魔物を見据えていた。そして、それに気を取られていたせいで懐の少女の動作を逃す。

《――熱量臨界、開放》

『制御律、ヒートブラスター、イグニッション！！』

リコの声と共に前面へと向き、螺旋を描くように砲身を作り出したツインテールから蓄積された熱量が吹き上げる。それは圧縮され、全く別の一撃へと昇華される。事実上自身が耐えられる限界までと言う上限はある物の、それも常時熱排出を行っていれば、最高熱量

を保ったままの砲撃も可能。至近距離からの砲撃に影の魔物のカボチャ型の本体が焼け始める。

『ガアアアアア！！』

『まだまだ！　終わるんじゃないわよ！』

重ね合わせるようにエンクからの極大の雷撃。後の事など度外視の全力開放。閃光が肌を焼く。周囲が光の呑まれ、全てを消し飛ばす。けれど、けれど。

マ、ダ。マ、オ、ワレ。イ、カセ

不明瞭な、しかし何かの言葉にも聞こえるようなそんな声が口から出た。その主はその事実に気付いていない。既に動けない体で耐える。このまま進ませてはいけない。あの存在に会ってはいけない。この子たちの未来を閉ざすわけにはいかない。真実を伝えられない自分を無力に感じる。けれど、せめて、ここを止めて見せる。不退転。

『嘘、でしょ。こっちもいっぱいいっぱいだってのに、どうしろってのよ』

『まだだよ！まだやれるんだから！』

『リコ』

『諦めない。私はこんな所で終わりたくない！』

『・・・そうね、こうなったらどっちが先に根を上げるか勝負と行

きましょうか！』

全力を注ぎこみ続ける二人は、既に限界を半ば超え始めている。エンクは体から力が抜け、放つ雷撃の威力も下がっていることを自覚する。リコは余った時間を破棄し今の攻撃へのエネルギーに転化し、少しでも威力を上げる。もうすでに半ばまで本体の体を削ったがそこからの進みが異常なほど遅い。

けれどわずかながら砲撃は進んでいる。しかし、しかしだ。貫くにはエネルギーが足りない。時間が足りない。どちらももう余裕どころか後も無い。残った力を限られた時間で全て叩きつける。それでも届かないという事を自覚する。二人ならば。

「はあああぁああ！！」

剣を足元の根に刺し、エイナが両手に魔力を込める。片手に冷気を、片手に熱気を生み出す。それを両手を合わせ混ぜ合わせる。自身の魔力を緩衝剤に冷気と熱気という相反する要素を混ざり込ませていく。慎重に、けれど迅速に、初めての作業で成功したとしても、どうなるかはエイナにも判らない。

でも、私一人じゃ無い！だから、失敗なんてありえない！

その身に宿ったコパルディアとオロチが、自分で出来る限りの制御を持って、それぞれの力を操作する。その甲斐あって徐々に徐々にではあるが、混ざりあっていく。それは白色の発光体へと姿を変える。それを維持したまま、足元の剣へと手を向ける。エイナの魔力を受けていたその剣は、その刀身を少しずつ削り取られながらもその原形を保ち、その力に耐えていた。

「私たちは立ち止まらない！例えどんな事が有っても」

言葉と共に剣を頭上へと掲げる。白い光が暗い森へ夜明けを示すように輝き照らす。それは影を焼き、消し去ろうとする。影の魔物はその脅威に気付き、消し去ろうとするが、その動きは目の前の二つの砲撃によって全て不可能となる。

よって、回避も防御も不能。もとより、当たればそれで終わり。それを感覚的に理解する。エイナは額に汗をうかばせながらその剣を不屈の想いと共に振り下ろす。

「前へ歩き続けるんだから！！」

轟撃。全てを置き去りに放たれた白い斬撃はその途上にあるすべてのモノを切り裂き、分解する。消滅とまではいかない。エイナの召喚状ではそこまでの出力を出すことはできない。故に削り取っていくのみ。だからこそ、切り裂く斬撃として扱ったのだ。これならばただ貫通させればいい。面では貫通する前に霧散する。点では範囲が狭い。それゆえの線の斬撃。これならば当たりさえすれば切り裂く事が出来る。

『ワタシ、ハ。アアアアア！！』

ノイズと共に断末魔が木霊する。白い斬撃は影の魔物を貫通し、通り過ぎていく。本体に裂け目が開く。

『今よ！』

『はあああ！！』

そのタイミングを逃さず、エンクとリコが残ったエネルギーを叩きつけるように放出する。その奔流が影の魔物の切り裂かれた部分を中心に撃ちこまれる。すると、僅かずつではあるが裂け目が広がる。

『いっけええええ！！』

『お願い！』

「まだ私だって力は残ってるんだから！」

そこにエイナがありったけの魔力をかき集めて、それをエネルギーとして撃ちだす。更に威力と勢いは増し、その裂け目の日々が広がっていく。

『アアアアアアァアア！！』

影の魔物から光が溢れ、その場を閃光が襲う。そのあまりの光の強さに直視できずに目をつむるエンクとエイナ。融機人のセンサーでも見通せないほどの光に視覚センサーが僅かな時間正常な動作を阻害される。そしてその光がやんだ時、その後には静寂がその場を覆う。動くものは4人のみ。目の前には先ほどの衝撃波によって作られた大きなクレーターだけが残った。

「……はあ、はあ、はあ。……やった、かな」

息を切らせ、エイナが憑依を解除する。解除と同時に膝をつく。魔力を身体強化にも回していたために、二重憑依の反動を軽減できたが、それでもなお、体の自由のほとんどが奪われている。既に魔力もほとんど無い。魔抗本来の使い方である、術への耐性を十二分

に生かしていたが、それでも炎と氷を混ぜ合わせた白い光による手の裂傷は避けられなかった。その手は血に塗れ、感覚も感じない。

「これ、は、けっこう、辛い、わね。あ、はは」

もう体に力が入らない。けれどそれは、この場にいる全員に言える事だ。残った者も大きな消耗を強いられている。

「あ、はは。私ももう駄目ね。限界」

「私も」

『皆ボロボロなの』

エンクは自身の渾身の雷撃で焦げた服を見下ろしながら、地面に横になる。リコは活動限界を超え、元に戻った瞬間新形態を使った反動で全身が悲鳴を上げていた。ドライアードはそれを心配そうに見ながらも尚も力を消費し続ける。この状態で襲われるのはさすがに勘弁願いたい。

「本当ね。まったく、いい女がみっともないったらないわね」

「あはは。でも、勝ったんだね。私達」

「うん。これで前へ行ける。まだ、進める」

自分たちの勝利にその顔を綻ばせる。まだ森を出た訳では無く、依然として危機は去っていない。けれど、今少し落ち着くことを許してほしい。これだけみんな頑張ったのだ。少しの休息はとっても構わないだろう。この程度ならば何の問題も無いだろう。そして、

それは無かった、否、無かったはずだった。

高熱が地面を焼き、凍結した植物が微かに漏れる光を反射して光り輝く。そこは地獄の体現。モンスターは依然後退の二文字を忘れたかのように、否既に思考能力などないのだろう。ただ愚直に突き進むのみ。

それは、雪崩のように、それは津波のように。全てを飲み込む黒い奔流となる。それは確実に氷を、炎を飲み込んでいく。そこに展開されし、灼熱地獄と極寒地獄を押し返す力となる。第三の地獄、有象無象による阿鼻叫喚。終わりなき断末魔とそれすらかき消す。退却を視野から除外した軍勢。地獄絵図。

『やれやれ、今何体倒してるんだい？』

『……3桁に入った時点で数えるのを放棄した』

『そうかい。まあ私ももう数なんて忘れちまったけどね。お互いに数が判らないってんならこの勝負はお流れって奴だね』

『……何時まで持つ？』

軽口をたたき、疲れた笑みを浮かべるコパルディアを横目で見ながらオロチは今の現状を顧みて真意を訪ねる。それを聞いたコパルディアは僅かに視線をオロチに向けると直ぐに視線をモンスター達の方へと向ける。

『……本当にまじめだね。もって、あと半刻だね。それ以上は気合と根性って奴さ。』

『……そうか。』

少し長い沈黙の後、オロチはそれを最後に視線をモンスターへと向ける。そこには、既にモンスター一体一体の判別など付かないほどに混沌とした非現実が広がっていた。

『ウゴアアアアアア！！』

『ギュシュウルウウル！！』

『アギャアァアアアア！！』

その声が響くほどに熱気と冷気が密度を上げ、その音源を残さず潰していく。それを既に作業と何ら変わりない。この短時間で３桁を優に超え、４桁に手を伸ばそうとしている撃墜数。エイナ達が一戦始めてからまだそう時間は立っていない。ここまでの戦績を上げるのは普通なら不可能。けれどそこには無論その結果を迎える事になった理由がある。

『本当にうるさい連中だね。少しは周りの迷惑も考えろってね』

『……汝が言えたことではないがな』

『うっさいよ！　まったく、殲滅戦に物量で対抗っておかしいと思うんだけどね。戦略的に』

『だが、死者を贄とし、新たな軍勢と成せるのならば無駄ではないし、それ以上の損害を出さないというのであれば、そちらの方が効率的とも言える』

『贄ってか、材料だろう？　見ていて気持ちのいいもんじゃないけどね。悪魔の私が言うのもなんだけど、ああいうのはやっぱり肌に合わないねえ』

『手段を択ばないのであれば有益かと思うが、心理的には受け入れづらいがな。』

二人の会話が目の前の現象についてシフトする。元々は普通の戦闘だった筈なのだが、無論それ続くのであるのなら、これだけ多くの数を倒す事も無く、また今ほど余裕のない戦いはしていない。その原因は空中で此方を観察するかのように蠢いている黒い茨。それが死んだはずのモンスターを黒い茨が包み、又はその身を突き刺し、蘇生、もしくは新たな個として形成し直す事にある。そのため数が減る事は無い。

『反則も良い所だよ！　それにこっちの精神的にもよろしくないと来た。うまい具合にやってくれるもんだよ』

『こちらにとって状況が不利になるというのならば。それはすなわち、向こうには有利になるという事。疑問に思う事などない筈だが』

『限度ってものがあるだろうに。尽きる事がないってどういうことさね。というか塵にしてみても減った気がしないしね』

『……確かに、この流れは驚異的であると言わざるを得ない』

『死活問題だと私は思うんだけどねえ！』

言葉を交わしながらも、氷壁を生み出し、黒い流れをせき止めようとする。そして、その上から焼けた大木がこれ見よがしに降り注ぐ、その勢いを止めるために。けれど、止まらない。どれだけ犠牲を出そうとも、どれだけの損害が予想出来ても、その流れを止める事はできない。

『はあ、最初から不自然っちゃ不自然だったんだけどねえ。無視するんじゃなかったか』

『もっとも気づいていても対応に差は無いが』

『まあ、ね！！』

最初は減らないことに微かな疑問を抱いた。しばらくすると、向かって来るモンスターの行動が単調になってきたことに気付いた。そして、目を上げると、倒したはずのモンスターの屍の山がきれいさっぱり消え失せており、広がった視界に知らず焦りを抱く。空中に黒い茨が滞空していると気付いたのは果たしていつだったか。そして目の前で起こされたその現象をみて、流石に余裕が掻き消えた。

『どうしようもないねえ。こっちは傍から選択肢が限られてんだしさ』

『……八方ふさがりか』

『むしろ包囲されてるけどね』

今はコパルディアもオロチも、自分の領域を可能な限り最大範囲

で能力使用をしている。けれど、最初は即座に死へといざなわれたモンスター達は、蘇生され、再び死にゆく。その繰り返しをするごとに僅かにほんの僅かに耐えるようになる。

それを繰り返し、その果てに今進軍を可能とするようになっていた。けれどその進軍も数秒で終わる。元々生き物が住める世界では無い。けれど、狂気に近い、原初の欲望と執念を持ってそれを乗り越える。

『雑魚相手にこの体たらく、嫌になるよ』

『恥じる事ではない。某とて感じていることだ』

『慰めかい？諦めじゃないだろうね？』

『……無論、このまま終わる訳にはいかぬ』

数秒の行軍も、後ろに続くものが数限りなく、力尽きた自分も即座に復活するのであれば、徐々に徐々にではあるが、距離を狭めていける。勿論氷魔と炎忍はそれを見逃すわけも、黙って見続ける事も無く、力付くでその進軍をねじ伏せていく。

けれど、その物量は次第に増える、どこから送られてきているのかは定かではない。けれども確実に増えていく。増殖するかのように、あるいは侵食していくかのように黒い染みとなって広がる軍勢、風景が汚染されていく。

『さて、このまま、能力で足止めするのも限界だねえ。もう奴さん割と涼しげに歩いてきてるよ』

『……ならば直接奴らに刃を見舞うまで』

『本気かい？　と言っても、まあそれしかないかねえ。できたらあの中には入りたくは無いんだけどねえ。気分的に』

『……逃げはすまい？』

『まあね』

少ない言葉のやり取りでお互いに刃をその手に握る。もう既に二人の自慢の炎と冷気は足止めになっているかも怪しい。先ほどから会話中にもさまざまな攻撃を行ってきたが、結局は同じように元へ戻る。ほんの少しだけ強くなって・・・手詰まり感はある。空中の茨を狙えばいいかもと破壊してみたが、次から次へと生えてくるため、徒労に終わるのは同じ。ならば結局変わりは無い。

『さて、どうにかなるかねえ。絶体絶命って奴だねえ』

『ならば死中に活を見出すまで』

『それしかないかねえ』

のんびりした動作で剣を構えるコパルディアと、それとは対照的に、機敏で無駄なく刀を構えるオロチ。どちらも目の前の群れから目を放さず、いつでも動けるように体勢を低くする。既にお互いの体は大小さまざまな傷により、血がにじんでいる。それを意に介する事無く、あくまで不退転を貫く。

ここを抜ければ既に後ろにいるユーリ達は目と鼻の先。向こうは向こうで余裕があるとは思えない。ならばこれだけの常識はずれの

軍団を送ったらどうなるかなど答えなど一つしかない。

ならば、もう炎と氷が足止めにもならぬようになったこの戦場に残ったものとして、今は少しでも多く、少しでも長く敵を足止めする。それに尽きる。覚悟などとうにしている。あの優しくて、温かくて、誰よりも強いであろう主に全てをもってついて行くと、自身のすべてをささげるに足る存在だと決めたのだ。ならば選択に迷いは無い。全てはマスターのために。

『……それじゃあ、行くとしようか』

『……うむ』

『途中でくたばったら置いてくよ。文句は言わせないよ』

『抜かせ。そちらこそ、助ける義理は無いぞ』

『言うじゃないか。その意気だよ』

『汝も相変わらずだな』

軽口はいつもと変わらず、けれど万感の思いを乗せて。変わらぬと、これからも共にふざけたものいいと、生真面目な言葉の応酬で繋がっていく腐れ縁になるのだろうと信じて疑わない。だから、この言葉はいつも通りの冗談。別れになどなる筈は無い。だからこそ、だからこそ、軽口で済ます。ここから生き残れば笑い話で済ますために。大変だったと、お互いに言葉として終わらせれるように。

『さて、行くよ！二次会の開始だよ！』

『……炎忍、オロチ、参る！』

絶望的な戦力差に望む二人の召喚獣はそこに不敵な笑みを浮かべ、取るに足らないと切り捨てる。そこに悲観も焦燥も、ましてや諦めなどただの一つも無い。

休息をとり、数分もたたない間に変化が訪れる。それは、望まぬ変化、否定したい破綻した未来の到来。

「な、なに？」

微かな揺れを地面の根から感じる。それは微かな物けれど、少しずつ大きくなっていく。全員がその原因に気付くことなく、混乱しながらその場に留まる。それは最悪の結果。その前兆、つまり・・・

「ち、ちょっと。冗談でしょ」

「あ、あれだけやっても駄目なの？！」

「そん、な」

そして、激しくなっていく揺れがピークに達した瞬間。クレーターを突き破り、巨大な根が上空へと舞い上がる。どれだけ傷つけられようと、どれだけ環境が変化しようと、生きるために光へと伸び続ける植物と同じように、また、影の魔物もどれだけ辛くとも生きる事を放棄などしたりしない。

その根の先端には顔が割れ、中の球体が露出した、見るも無残な姿となった影の魔物、カボ。そこにはもう先ほどまでの活力は無いと言える。だらんと下がった両手がそれを彷彿とさせる。

けれど、けれどもまだ、その活動は止まっていない。その現実を見た者達は、残らずその顔に驚愕と若干の諦めを感じさせる。既に疲労で体の自由も効く事は無い、けれど、その中で動くものが一人。他の誰よりも早く行動を開始する。それは残された抵抗。

『まだ、どうにかなるの！』

生み出した種を即座に弾丸にし、撃ちだすドライアード。けれど既に体力も魔力も、加えて精神力も限界に達している現在のドライアードではまともな効果が期待できるはずも無く、影の魔物の体に弾かれ、暗い地の底へ落ちていくのみ。けれど、その行動は他の者への、一つの行動を促すきっかけとなる。

「もう少し、動いて！　私の体！」

『ｂｉｂｉｂｉ！』

ドライアードが渾身の力で植物を生み出し、影の魔物に攻撃を仕掛ける。それを影の魔物は茨を持って易々と迎撃する。そして、その間にエイナは残された一欠けらの魔力を持ってライザーを召喚。巨大化させ、その中にエンクとリコを強引に放り込む。

「ち、ちょっと！！　エイナ！　これはどういうつも、わっ！」

「エイナお姉ちゃ！」

エイナのライザーはユーリのライザーのように、中に人を乗せるスペースなどは本来想定されてないがために、ライザーが若干苦しそうだが、この際我慢してもらおう。そうでないと此方も色々と余裕がない。強引に乗せたために二人の声には慌てた感が混じるが、気にしてはいられない。

「このまま、常夜の石の中に連れて行って、ライザー！」

そして、さらなる指示をライザーに下す。それは常夜の石への非難。ここまでやってきたが、もう二人とも限界だろう。ならばここらが潮時。それに、それは自分にも当てはまる。急激なな魔力使用によりエイナを睡魔が襲い始める。ドライアードが何とか足止めをしているが、もう長くは持たないだろう。ならばこれで自分の役目は終わりだろう。

「あ、はは。さすがにもう限界。一歩も動けないや。」

そんな一言と共に、伸ばした腕が力なく降ろされる。瞼が重い、体が動かない。もう巨大な根の上で横たえた体は微塵も動かない。動いた所でどうしようもない。そして、横たわるエイナに気付いた影の魔物がその猛威を振るう。強大な茨を鞭のようにしならせ、エイナめがけて振り下ろす。エイナは薄く開いた眼でそれを目撃する。けれど、もう何も考えられない。

もう、これで精一杯、もうなんにもできない、かな。

静かにそれを眺め、目を閉じるエイナ。そして、その意識が最後にとらえたのは見慣れた、そして、何よりも大切で愛しい、青色の光。この場に出て欲しくないと内におしこめた人物。それを複雑な

感情で見つめる。それは、嬉しいのか、それとも悲しんでいるのか。気付くものは誰もいない。

うん、後の事はお願いね。ユーリ。本当は嫌だけど、それでも、もう私じゃどうしようもないから。

鞭が直撃し、大きな振動を生み出し、その勢いで粉塵がまいあがり視界を遮断する。ドライアードの体が光に包まれ消えていく。それは送還の光。全力で力の行使をし、残った力すら振り絞ってこの森の異常を抑え続けてくれた仲間を休ませる。そして、この場に残ったものはこの森を通らせることなくその道を閉ざす影の魔物。そして、もう一人。

「……さて、もう終わりにしよう」

静かな声の中に感情をこめ、影を睨む青年ユーリ。その体からは青い光が静かに、けれども何より苛烈に開放の時を待っていた。

『ヴァガアアアア！！』

「……もう意識も無い、か。いや、元々ないんだった。」

静かに呟く。ここにその言葉を聞いている者は一人もいない。全員戦闘の疲れ、もしくは負傷が原因で意識が落ちている。ならばこの場に限っては特に事情を隠す必要はない。

「さすがに、この事態は予想の上だったけど、もう終わりは見えた。全くエイナの奴、もう少し早く外に出せと言うに」

今までユーリはエイナによって外に出られないように遮断されて

いた。エイナにしては珍しい程に本気で自分を出さないようにしていた。それが何故なのかはわからない。けれどもエイナは冗談や酔狂でこんなことはしない。それに疑問を覚えるが今はそれを気にしている時間は無い。

「時間も押し迫っているんだ。悪いがさっさと目的を済まさせてもらうぞ。」

言葉と同時にストラでは無く、エイナが見せたように魔力を全開で放出する。様子見などは無し。傍から持てる戦力の全てを投入する。その色は灰色、そしてその光は少しずつその強さを光を増していく。それはユーリの魔力光。目立った色では無く、けれどもそれが個性というかのような中立を示す、灰色。それがユーリの魔力が示す色。それが森の闇を照らす。渦巻く気迫が更に威圧を伴い肥大化する。

「魔抗っていうのもなんか味気ないな。少し改名でもするか。」

この力は別に術に対抗するためや耐えるためのものでは無く、自身を高みへと引き上げ、約束を守るための方法の一つ。ならば少しだけ趣向を凝らして名を変えよう。これが俺の力だと見せつける意味も込めて。ここで自身がどうなったとしてもこの世界に証は残る。

「字を変えて魔晄とでも呼ぶか。悪くは無いだろう。なぁ？」

まるで世間話をするかのように語りかける。伝わる事は無いけれど、時間が迫っているのも知っているけれど、自分が狙っている通りになれば自分は無事では済まないだろう。

それでも、成功した時のメリットが計り知れないしな。

確信する。なぜかまではわからないが、あの茨をじかに見た瞬間、予想が確信となり、予定は決定事項となる。そして、それに伴うデメリットも受け入れる。誰かに打ち明ける事も、相談する事も無く決めた事、自身が全て背負い込む。その気はまったく無いが、現状そうなっているのも事実。

せめて、最後まで持ってくれよ。そうじゃないと、意味がない。

思考を打ち切り、目の前の影の魔物へと視線を向ける。未だ赤い球体は揺れ動き、茨が制御を失ったかのように暴れ狂う。そして、ドライアードが居なくなったことにより、周りの植物も、いや、森全体が敵へと切り替わる。孤立無援。たった一人の者に対して、森が、いや、この場合既に世界が敵となる。ここに味方はいない。一人きりの戦場。

「行くぞ！」

先手はユーリ、魔眩を極限まで引き上げ、空中を疾走する。その速さは今までのユーリは勿論、先程のメンバーの速さを軽く凌駕する。ユーリの魔力の高さがうかがえる最たるものだろう。その動きに気付いたのか、自身を害する威圧の押されたのか。こちらへと顔を向けその手で拳を作り、此方を破壊しようと勢いのままに正拳を繰り出してくる。

「舐めるな！！」

その拳をあろうことか自身の拳で迎撃する。どう考えても勝負は見えている。けれどもユーリの狙いは拳の衝突では無い。

「ふっ！」

拳を触れた先から受け流すように回転を用いて捌いていく。自分の体全体をいかして、見た目には巨大な拳を高速で転がっているようにも見える。その結果拳は通り過ぎ、螺旋を描きながら速度を上げたユーリは変わらず影の魔物へと向かう。

『ジャアアアア！！』

周囲の植物が種を弾丸となして撃ちだしてくる。それはただの一発ももらさず全てユーリへと向かう。それをユーリは気にも留めずに瞳を閉じる。そして、闘気と共に魔力を開放する。

「舐めるな！！」

全ての弾丸がその一声と込められた魔力によって弾き飛ばされる。言霊と呼ばれる力を秘めし力も相まって、それ相応の速さで弾かれ、周りに揺蕩う植物に当たり、その数を減らす。

「飛べ！！」

魔力を散弾のように撃ちだす。影の魔物はそれを両手を持って撃ち落とす。けれど、それを打ち落とした後、その後ろに灰色の砲撃が見えた。言うまでも無く、ユーリが放ったものだ。

「次だ！　持って行け！！」

その砲撃も鉄壁を誇る両手で無力化させようと手を砲撃へと向け構える。微かにユーリがその安易な選択に内心笑みを浮かべる。そして、砲撃と手が接触しようとしたその瞬間、砲撃が消える。その

灰色の魔力光を霧散させながら……

『ギャリャ？！』

影の魔物も突然のその事態に流石に驚いたのか、動きが乱雑なものとなる。けれど、消えた砲撃の行方は直ぐに判る事になる。無論消えたわけでも、破壊されたわけでもない。その行方は……

『ガァッ？！』

後方からの突然の衝撃に振り向く。そこには自身の体を蹂躙する灰色の閃光。先ほど見失った砲撃其の物だ。恐らく砲撃を曲げ、後ろから撃ちこんだのだろう。だが、それは在りえない。いくらなんでもその程度では欺けない。仮に本体からはそう見えても、今の自分はこの森全体と言っても差し支えない。それを誤魔化しきる事など果たして可能だろうか。答えは無理。そんなことはできようはずは無い。けれども現実に自分は不意打ちを食らっている。その疑問に答える理性も感情も無くしたまま、戦闘は続く。

「少しは驚いてもらえたか？　俺の仕掛けは」

そう言うユーリの眼にはしてやったりと言う笑みが浮かんでいる。それを正しく挑発と受け取った影の魔物はその行為をした人物を滅ぼそうと躍起になる。それが目の前の人物が狙った通りの事態であるとも知らずに……

なるほど、結構うまくいくもんだな。仕掛けとしては使えるな。結果としては上々といった所か。

それを内心冷めた目で分析するユーリ。今のは魔力をこの森に立

ちこめる雰囲気と気配、質を出来るだけ近づけ、相手の危機感をそぐ。更に魔力光を操作し、光の屈折や透過、回折を利用した光学迷彩。これにより視覚的にも気付かない。

そして、魔力の気配を消す方法もある。正確には誤魔化す方法だが、それは目の前で霧散した魔力。あれをばらまくことにより、あの一帯周辺を自分の魔力の気配で埋め尽くす。それにより、感覚的にも気付くのを遅らせる。無論ずっと誤魔化せるものでは無い。けれどそうしないように自分が威圧しながら向かっていったのだ。向こうからすれば相手せざるを得ない。

「まあ、奇術とかの類だが、割と虚は付けるな」

確かな手応えを感じながらユーリはその距離を縮める。そして、腰の鞘から朱砂を抜き、影の魔物へと切りかかる。

「当たれ！！」

『ガアアアア！！』

炎を纏わせたい一撃は、微かに影の魔物の肉を切るにとどまる。けれど、付随する能力でそれを後押しする。炎が傷口から燃え上がり、その傷を広げる。

「おまけだっ！」

そして、そこにすかさず周囲の砂鉄を弾丸として撃ちこみ、更に魔力弾を撃ちだす。

『グッガッアア！！』

それを手で防ぎながらも、全てを捌くことはできずに何発か被弾する。それだけの速さと量。無視できない威力によって傷つけられる体。先程までエイナ達相手に優勢を誇った力は、けれどもそれ以上の理不尽によって断罪される。

「これなら！」

一気に距離を詰め、赤い球体へと触れようとするユーリ。だが、その行動に気付いた影の魔物は、それを禁忌とするかのように被弾を気にも止めず、最優先で妨害をしに来る。

『ガアアァアア！！』

「がっ！！」

間一髪速かったのは影の魔物。その渾身の張り手を受け、大きく吹き飛ばされるユーリ。爆炎と共に大地にたたきつけられる。煙が晴れるよりも先に灰色の光が影の魔物に向かって突き進んでいく。けれど、今度は正確に対応し、ユーリの行動を阻害する。

カウンター気味に殴り飛ばした拳を振り切り、影の魔物は確かな手ごたえを感じる。今のは確実にダメージとして通った筈。ただでさえ先程の超スピードとこちらの拳の速度が掛け合わされた一撃。とても立ち上がれるものでは無いだろう。

本来なら今の一撃で終わりだろう。けれど、その拳は依然として握られたまま。周りの植物を叩きつけ、黒い茨を纏めて放出する。更に赤い球体から砲撃が放たれる。それはこれ以上近寄らせるのは危険と本能で察したのかもしれない。爆音に次ぐ轟音。そこにはそ

の余波として煙で覆われ視界が晴れる事は無い。

『ウウゥウウゥウ……』

唸り声をあげながら、殴り飛ばした方を注視する影の魔物。その声音には警戒心がにじみ出ている。まだ終わっていない。次の瞬間、それを裏付けるかのように灰色の光が先程よりもさらに速く影の魔物までの最短距離を疾走する。その変わり映えしない行動に、再び拳を構え振りぬく影の魔物。

『？？！？！！』

けれども今度はその拳がユーリを捉える事は無く、空を切る。思いがけない事態に影の魔物の動きが止まる。そして後ろから静かな声が聞こえる。

「……残像だ」

それは宣告。これは致命的なミス。先ほどと同じトリック。それを応用し、今度は自分で行ったに過ぎない。そして、本体が此方をむく前に、その手が此方を捉えようとする前に、ユーリの手が背後から赤い球体にその手を刺しいれる。

これが狙っていた事、それは原作を知るが故に、ここで行っておきたかったもの。救えるかどうかはともかく、その可能性を捨てきれなかったがための行動。同情や憐みもある。けれど、それでも助けたいと思った者がいた。これはただそれだけの事。

「……これで、詰み、だ」

そういって、今度はストラを全開にする。元々ストラはこの局面のためにとって置いた物。この戦闘で使う気はなかった。魔眩があると気付いてこの方法を考え付いたのだが、なぜこの方法にいたったのかはユーリにもいまいち判らないとしか言いようがない。

如何にかしようと考えていたら、結果的に天啓のように閃いたのだ。故に詳細は自身も判らない。けれど、目の前で見て間違いないと確信を強めることとなった。勘だが、きっと大丈夫だと、どうにかなると考える。

「さて、持ってくれよ。俺の体！行くぞ！！」

その思いと共にストラを収束する。青の光が鮮やかに森を照らし上げる。その光は森の異常を停止させ、一時の停滞を促す。影の魔物も自身の核に接触されているせいなのか、動きは無い。ユーリはそれを気に止める間もなく、ストラを集め、核である赤い球体に注ぎ込んでいく。一心不乱に、惜しみなく全てを注ぎ込んでいく。

「はあああああ！！！」

裂帛の気合を持ってストラを練り上げ、注入して行く。それは赤い球体へ絶えず注がれていく。その間、激しく点滅し、核が何か異常な事態に陥っていると察せられる。けれど気に留める事は無い。

「まだまだあああ！」

そして、どれだけの時間が過ぎ去ったのか。まだ数十秒程度なのか、それとも数分か。はたまた一時間になるのか。それはユーリにも影の魔物にもわからない。既にそんなことはお互いの頭にはない。あるのは青の光と、点滅する赤い球体のみ。そして、ついにその変

わらぬ光景に変化が訪れる。

「これは……」

『……ァアア』

微かに聞こえた声、それは高い、女性的な声。明らかに形に出た事柄に冷静に対応する。思った通り、このまま行けば、恐らく成功する。ただ、ただ一つだけ懸念事項が存在する。それは・・・

「ぐっ！……ったく、持つかどうか、微妙な所だな」

体を襲う痛みに顔を顰める。それはただの痛みでは無く、魂ごと浸食する呪いの極み、原初の痛み。本来なら耐えられるものでは無い。けれど、ユーリの此処まで生き残っている。それは偶然だ。ただ、混じり込んだ異常が異常を呼び、周り回って正常に近い動作を起こしたに過ぎない。けれど、それはストラを持って押さえ込んでこその話。現在進行形でストラを消費し続けているユーリには間違いなく死活問題になる。

「もう少しなんだ。だから持ってくれ！」

その声には余裕はない。今体の中では抑え込んでいた枷が外れ、黒い茨がここぞとばかりに侵食し、ユーリを汚染して行く。服の下は既に大半が黒く染まり、赤い筋が浮き出ている。抗いを度外視し、どれだけ黒く染まろうと気にせずストラを注ぐ。

そして、今ようやくこの茨とストラは真逆のものであると確信する。つまり、ストラを使えば茨が、赤い光が強くなり、仮に赤い光を使えるのなら、使えば使うほどストラが強くなるだろう。感覚と

して理解できた。

「（といっても、少し遅かったかな……いや、諦めるのは早い。対処が判ったのならまだどうにかなる筈だ！　今は目の前の事だけを考えろ！）」

自身が抱えている問題の一つの対処法が確信へと至り、核心をつく。そして、目の前の変化も段々顕著になっていく。流れる光は止まる事無く、命を燃やすかのような勢いで発光する。そして、核に突き入れていた手に、微かだが、何かの感触がした。

「！！来た！うおおおおぉぉ！！」

待ち望んだ変化を捉え、残るすべての力を注ぎ込む。影の魔物は罅が入り、その体が塵となっていく。そんな事には目もくれず、ただ目の前の球体のみを見つめる。そして、その赤い球体にうっすらとだが、影が映る。

「！！」

それを逃さず掴み取ろうとする。そして、その行為は、見事ユーリの思い描くシナリオに移動する。

掴んだ。掴む事が出来た。もう、自身の体力もストラに上乗せし、肩で息をしている。けれどここから、ここからが本番。前座はようやく終わりを告げる。

「はあああああ！！！」

更に掴んだ部分を起点に、更に収束したストラを流し込む。球体

が震え、その形状を変えていく。

『アア、アアァ！……アアアアア！！』

甲高く鳴り響く声を聞き取りながらもその手を緩める事は無い。握りしめたまま、ありったけを込める。そして、その体は目の前の色が抜け始めた球体とは逆に、赤に染まっていく。それは、まるで交換しているかのように、色が変わっていく。

「もう、少し！」

そして、ユーリの体に微かな温かみと共に、何かが流れ込んでくる感覚に気付く。それは包み込むように入り込み、自身を守っているようにも感じられる。その出所をたどって視線を上げてみると、微かな笑みを浮かべたまま、目の前の初対面の女性が、此方を見ていたような錯覚に遭遇する。

「こ、れは！」

それは止まる事無く行き交う。ストラと白色の光がお互いに行き交い、入り込む。そして、薄くなった球体が白に染まり、弾ける。その中からは、異質な形をした異形の姿があった。

『ア、アアア！　ウアア！』

物言えぬその姿を見つめ、更に力を込める。赤い光が浄化されるように霧となって消えていく。大気に溶け、その異形の色を鮮やかに照らし出す。

『アァアアアアア！！』

その声は森へと響き、木々を揺らす。森は不動のまま、既にその動きを止めている。微かに揺れる緑の葉が、異常の終了を告げる。そして、眩い閃光がその場を覆う。そして、あろうことかその異形から妙な物、スライム状のものが腕を伝って上ってくる。

「おいおい……どうしろって言うんだか。」

もう喋る気力もさほど残ってないのか、疲れをにじませた声でユーリは呟く。そしてできた一瞬の緩み。その隙を異形は逃さない。ユーリへと手が延ばされる。ユーリがそれに気付いたころにはもう遅い。

「しまっ！」

『ーーーー』

なにか微かな声を聴きながら外される手。そして突き飛ばされる。唐突に、そしてあまりにも危険を感じなかったが故に、反射的に手を伸ばせずに終わる。一番の理由は既に限界を迎えていたことだろう。そのまま消えていく異形。スライム状のものはそのショックで影の魔物の残骸に落ち、その身を揺らす。

「がはっ！」

受け身もストラや魔力の加護も無しで空中から落下し、そこから生まれた衝撃に顔を歪める。もう既に戦える状態では無い。けれど、まだ終わらない。それに、エイナ達はまだ目を覚ましていない。今戦えるのは自分のみ。休む事は出来ない。

「・・・く、ったく、うまくいかないな、どうも」

悪態をつき、何とか立ち上がるユーリ。その眼の前には壊れかけた影の魔物の残骸がゆっくりと動き始めていた。それを冷めた目で見つめ、溜息をつく。

「やれやれ。本当に、愉快だな。退屈しなくていい事だな」

軽口をつぶやき、残った気力を総動員させる。もう、やるべきことは終わった。後は目の前の残骸を処理するのみ。けれど……

「ちっ。体が動かない、か」

もうユーリの体はストラの枯渇による体力消耗に加え、魔力もほとんど残っておらず、召喚獣によっては使えて後一回か二回。魔晄として使っても、数分で限界となり枯渇するだろう。それに加え戦闘によるダメージもある。そして何よりも茨による浸食。それがユーリの身を縛っている。気をぬけば倒れかねないほどの激痛を持って。

「さて、どうする、かな。誰かは当てにしても仕方ないし。仲間も限界。魔力はもうほんの少しだけ。これでできる事なると……どうするかな」

頭の中でできる事を組み立てていく。けれど、それがまとまる前に影の残骸が動き出す。本体を植物で支え、巨大な根を胴体として、蛇のような姿となる。そして、核となる球体は消えたが、そこに赤い光を集める。その威力はもう既に影も形も無い、が今のユーリにとっては脅威に違いは無い。

『ジャアアアア！！！』

「おいおい、こういう時は静かに待ってろっての！」

撃ちこまれる砲撃に何とか体を動かし、余波を受けながらも何とか射線から逃れる。衝撃波で吹き飛ばされながらもまだその体は無事だ。まだ、動ける。そして、立ち上がろうとしたとき、最後のきっかけが訪れる、訪れて、しまう。

「ぐっ！！」

体勢を崩したまま何とか起き上がろうとした所を黒い茨が槍となってユーリの胸に突き刺さる。即座には頭が理解できず、判断が止まる。

「（・・・ささ、れた？　おい、洒落にならねえだろ。）」

現実を何とか受け入れる。不思議な事に血こそ出ていない。けれどもこの身を裂かれそうな痛みがある。その痛みの中、倒れないように、気を失わないように、虚勢を張る。

「（例え、助からなくっても、せめて、この森は抜ける！だから、後少しだけ、後少しだけ、持ってくれ！）」

それは切なる思い、そして……異変が起こる。

「がっ！」

や、べえ。頭が割れ、そうだ。

頭を押さえ、反対の手で胸を抑えるユーリ。突然の悪化。急激なそれはユーリの行動を阻害する。それを見逃す事無く、二度目の砲撃を撃ちこむ。ユーリは今度こそ、まともな反応を返す事も無く光へと呑まれる。その最後、赤い光がよぎる。そして、微かに何かが割れる音が聞こえた。

業火と氷河の世界に立ち尽くす二つの影、その体には無数の傷跡が残り、武器もすでに手元にはない。戦いの最中、既にその手から弾かれてしまっている。お互いに背中合わせのまま、肩で息をつく。その周りを囲むように展開された黒の軍勢。既に勝敗は見て判るほどに明らかとなっている。

『……ふう、どうにもこうにも、手詰まりだねえ』

『……』

いつも通り飄々とした感じで喋るコパルディアだが、若干諦めの色も交じっている。オロチは返事を返す事も無く黒い壁となった敵を見つめている。

『まったく少しぐらいは反応しろってのにさ』

『……汝は』

『ん？』

『汝はここからどうする気だ？』

気が付いたときにはオロチはこちらへ目を向け、そう問いかけていた。真意が測れず見つめ返す。元々今の状況で選べる選択肢など、無いに等しい。

『某は一体でも多く地獄へ引きずり込むつもりだが、汝までそれをする必要はない。この場から下がっても構わぬ。それ位は可能だろう』

『……何をいうかと思えば、アンタは馬鹿かい？』

『む』

『今更そんなこと聞く段階じゃないだろうに。それに引く気なんてないよ』

諦めが混じっていた筈のコパルディアに、確かに活力が戻る。そして自身の手に、残った力で冷気を纏わせ氷剣を形成する。それを眺めながら、少しはやる気になったかと思いつつ、オロチも腕に炎の鞭を撒きつける。だが、コパルディアの言葉によって、また状況が変わる。

『どちらも生き残るんだろう？それに、この後アンタのおごりで飯食うんだからさ！　退けるわけないじゃないか！！』

『……なぜ、某が？』

『アンタが諦めたような寝言をほざくからだよ！　だから勝負は私の勝ち！　その報酬さね！』

『……勝負は流れたのでは？』

『さあ？私は聞いてないよ、そんな事。期限なんて決めてないしねえ』

『……』

コパルディアの言葉に、目を細めるオロチ。隙を窺い、飛び出してきたモンスターを二人の拳が一閃し吹き飛ばす。例え傷だらけでも、例え満身創痍でも。そこらの雑魚にくれてやるほどこの身は安くない。敵へと目を戻した二人は言葉を交わす。

『……いいだろう。その遠慮のない申し分を今回に限り聞いてやろう』

『敗者が偉そうに言ったって、みっともないだけだっての！』

『飯を食わせてやるのを了承しただけだ。勝負まで譲ってやるとは……言ってはいない！』

『ギャアアアア！！』

業火一閃。まとわりつくモンスターが今の一撃で相当数削られる。それを横目で見ながら、笑みを浮かべるコパルディア。お互いに終わりのない戦闘に限界を感じていた。だが、今の会話がきっかけとなり、僅かながらも闘志が奮い立った。

『それじゃ、私に認めさせてみなよ！そうしたら考えてやるさ！』

『無論、言うまでもない』

そして、戦意を取り戻した二人が一歩を踏み出した瞬間、事態は急変する。

『『?!』』

閃光が二人を包み、強制的に送還される。彼女らを送還できるのはただ一人。その意思によって彼女らは元の場所へと戻る。そして、その次の瞬間、二人が居なくなった空間に、敵ごと押しのけるような、赤く、そして、黒い風が吹いた。

静かに時が刻まれる。止めを放ち、この場の決着はついた。その筈だった。

『……』

影の残骸の前で煙が上がる。今のは確実な一撃だったろう。躱す事も防ぐ術も無い。不完全な体制で受けていた事からもそれは明らか。けれど、その明確な現実は、あまりにも理不尽で強大なものを生み出すきっかけとなり、決められた結果は覆され、無残に踏み砕ける。煙が張れる。

「……」

そこには赤い光を纏ったユーリの姿があった。怪我は全て完治し、

見る限り体力も戻っているらしく、息も整っている。だが、何も喋らず、それが不気味さとなって辺りに漂う。

「……」

そして、その視線には、以前のユーリからは考えられないほどの獰猛さが感じられた。静かなその空気は、まるで嵐の前触れとでもいうかのように緩やかに、けれども確実に歪みだす。

「……さあ、はじめようか……殺し合いを！」

風が悲鳴を上げる。赤い光が爆発し、視界を染める。全てを飲み込む災厄。あるべき全てを破壊せし混沌。考えられる中で、最も救われない未来への歯車が回る。誰も救われない。血と呪いに塗れた破壊の衝動全てが狂気に染まる。

『ゴアアアアア！？！』

気付いたときにはもう懐に飛び込まれていた。一切の感知を許さない。それは転移と言っても差し支えない。その場所へと至るまでの移動を阻めないのであれば、そこからの攻撃に対処できないのであれば、転移であろうが不意打ちであろうが、唯の常軌を逸した速さであろうが同じこと。それを今、この場で体現し、実演している青年。その眼に込められているのは殺意のみ。

「……どうした？たかだか、拳ひとつで怯む程度なのか？それじゃ殺し甲斐がないぞ。さっさと、構えろ。でないと……」

『ガッ？！！』

「直ぐに死ぬぞ？」

回し蹴りを決められ、本体の残骸を支える根ごと空中を吹き飛び、大地へと叩き落される。即座に両の手を飛ばし、ユーリを叩き飛ばそうと攻める、影の残骸。けれど、相手が悪い。

「おせえよ」

その攻撃の全てを片手で捌く。そして、空いた手は赤い光を集める。その色は紅へと変わり、全てを飲み込むながら放たれる。

「この程度で終わるなよ？」

『ギャアアアア！！』

それを両手を急いで戻し、盾と成す事によって防ぐ。かろうじでそれを行えた影の残骸は、人知れず自身の身を守れたことに安堵の息をついた。けれど・・・

『ガ？！』

その両手が煙を上げ、蒸発し始める。今までのダメージの積み重ねもあるだろう。けれど、傷自体ついていないし、そもそもこれはダメージの蓄積での破壊では無く、蒸発だ。原因が違う。それは限度を超えた一撃に耐えきれず、悲鳴を上げ、限界を超え消滅しかかっている己が肉体の末路。それを見た時純粋な意識が芽生える。死にたくないと。

「へえ？結構丈夫だな。それなら、こんなのはどうだ？」

手を掲げる。収束するは魔力。必要な量は一回分。そして、呼び出す者も、行うことも決まっている。迷いは無い。そして、そこに白い光と黒い光が混じる。それは微かだが、明確な変化をもたらす。激変する術式。

「来い……ドリトル！！」

その声に応え、呼び出されたのはいつものドリトルでは無く、別の存在。黒と白のカラーリングをし、装甲に身を包んだ女性。その眼に戦意を抱き、今主のための武器となる。

「……やれ」

『……セット。バレルオープン』

機械的な声で淡々とシステムを作動させる女性。その両手はいつの間にかドリルへと変わっており、ブースターからフレアを噴出しながら加速し、両手を盾と成している影の残骸へと突撃する。

『ジャアアア！！』

『ドライブ、イグニッション！』

ドリルが甲高い音を立て周り続ける。そして、両手がその威力に負け、罅を生み始める。

『シュート！』

そして、それを気に止める事無く、ドリルの先端から砲撃を放つ。その勢いは影の残骸を再び吹き飛ばし、森の大樹へと叩きつける。

『ア、ガ』

事ここに居たって影の残骸に余裕はない。核たる者も解放され、何かを思う意思も無く、生み出された理由も理解できないまま、ただ、暴力にさらされる。けれど、目の前の状況は悪化の一途をたどる。

「よく耐えたな。それで、賞品をやるよ。その顔にちなんでな。ハロウィンパーティでもやるか？」

軽口の間も威圧感はそのままに、いや、時間と共に増しながら言葉を紡ぐ。終わりの言葉を。

「確か貴様の名はカボだったか？冥途の土産だ。喜べ。この術を使ったのは貴様で二体目だ！」

そしてドリトルが光に包まれる。その光がユーリへと集まり輝きを増す。既に今のユーリに配慮は無い。ストラは完全に底をつき、今、僅かなそれは常夜の石を守るように意志を覆っている。それが最後の良心とでもいうかのように。

光が集い、術を紡ぐ。召喚せし者をその身に宿し、新たな上位存在として生まれ変わる。

――融合召喚―天元破砕――

光が晴れた後、青年の姿は、装甲に覆われ、銀の眼を開き、銀の髪をなびかせる。駆動音と共に、機械の翼を広げる。空中を飛翔するその体からは、電子的な作動音と明滅を繰り返しながら、その存

在を世界へと知らしめている。

『さて、お披露目をここまでいいだろう。そろそろお別れの時間だ』

判決を下す。今までのユーリには無い、高圧的な物言い、全てが変わっている。そして、それにより、影の残骸の未来も決まった。

『ゴオアアア！！』

それを認める事は当然できないとでも言うかのように、影の残骸が責め立てる。片手を後ろに引き、全力を賭して矢として放つ。それは内に芽生えた恐怖の具現。それから逃れるための行動。されど・・・

『おいおい、そんなもんか？どうした？笑えよ、カボ。せっかくの笑顔が引き攣ってるぞ』

その拳はユーリをダメージどころか、仰け反らせることも出来ないまま、片手で抑え込まれる。そして、軽くつかんでいるはずなのに、その手を振りほどけない。焦りがつのる。

『ギャシュアアアア！！！』

再び光を集め砲撃へと変える。ユーリは掴んでいた影の残骸の拳から手を放し、その砲撃へと無造作に歩き始める。そして、着弾。

『ゴフォォオオ！！』

その力は自分の精一杯、既に残った力を全て込めたモノ。そして

その結果は、今目の前にある。

『なんなんだ？今のは。攻撃のつもりか？』

無傷、直撃しかも無防備な所に当たった筈、それでもなお傷一つない。どころか悠然とこちらへ歩いてきている。その歩みすら止められない。

『貴様は一人でよくやったよ、けど、もう終われ。』

空間が捻じれ狂う。大気ごと捻じれたそれは、不可視のトンネルの様に一直線に進む、影の残骸へと。

『ゴギャアアア！！！』

空間歪曲を伴った不可視のドリルは防御など関係なく貫く。それはあの鉄壁の両手をバターのように穿つ。防御不可、そして、当たれば致命傷。そんな一撃。そして、蹂躙は続く。

『……歪め！』

視界に捉え、その対象を歪曲させる。視界内に置いて効果を発揮する魔眼に近いそれは歪曲の機眼。機械によって作り上げられたシステム。その一撃は影の残骸の本体を半ばから捻じりきる。

『ギッグッギャザ？！』

その突然の現象に対応できず、疑問のままに深手を負う。だが、その断罪場に数多のモンスターが姿を見せる。

『ゴオオオォ！』

『ジャギャアア！』

『……目障りだな。消えろ！！』

その一団を睨み、機眼を発動。全て捻じりきる。だが、そのモンスターは即座に復活し、その場に立ち上がる。ユーリはそれを気にした訳でもなく。

『我（オレ）は消えろと言ったんだがな。聞こえなかったか？』

今度は空間ごと削り取る不可視のドリルが豪雨となって雨霰となって降り注ぐ。そこには塵しかない。流石に空間ごとねじ切り、空間のはざまに飲み込まれれば再生も効かないらしい。

『貴様らもだ。疾く失せろ！』

赤い奔流がモンスターを飲み込む。浸食し、モンスターを飲み込み、咀嚼する。そして、数を減らし、その場に現れたモンスターはその姿を全てなくす。

『さて、空気を読まない輩は排除した。続きを始めよう。とはいえ、興がそがれた。これを持って終わりとしよう』

空間を螺旋を描いて収束させ、それを圧縮する。その結果そこには黒い球体が生まれる。それを無造作に影の残骸に向かって放り投げる。それは影の残骸の真上でその圧縮を止め、開放する。解放されたそれは全てを消し飛ばす。エネルギーを有する。その開放に伴い、爆発範囲内は瞬時に沸騰し、蒸発する。後には何も残らない。

草も木も、命も、大地さえ。

「さて、少しばかりやり過ぎたか。仕返しとしても度が過ぎていた気がしないでもない。まあ、今更だが」

融合を解き一人呟く。そして、白い光が微かに輝く。

「・・・成程、まだ、壊れきっては無かったか。それは重畳だな」

その姿は赤い霧に包まれ消えていく。そして、霧が晴れた時、そこにはいつものユーリが横たわっていた。浅い眠りの中、次に目が覚めた時、青年はこの記憶を持って何を思うのか。それはまだ判らない。けれど、既に壊れたのは変わらない。未来は確実に変わっていく。

〜〜迷いの森、外れ〜〜

赤い光が灯る。急に発現したそれは苦しんでいた。青い光がそれを癒すように光る。そして、赤い光は弱まり、消えていく。それを見届け、安心したかのように僅かな燐光を残して青い光も消えていく。残されたものは、白いドレスに身を包んだ女性。

「ア、アア・・・うあ、わた、しは」

長い間、闇に苛まれ、孤独の中死を迎えようとした意識と肉体は、久方ぶりの生の活力と自由を取り戻し、本来の役目を行う。本当に

当たり前の呼吸が嬉しい。自由に動く体が懐かしい。苦しみから解き放たれた事が不覚にもその眼に涙を宿した。誰かのためにその身を削った女性は初めて自分のために涙した。

「私は、まだ、ここに居る。まだ、居続けられるのですね」

慣れない呼吸を行い、むせかえりながらも女性はその事実を受け入れた。青年がわが身を削った結果、確かに救われた者はいた。今、流れは完全に方向性を失い、道なき道へ迷い込む。

「あの方を助けないと、今度は私があの方を助けないと！そして、この異変を今度こそ終わらせてみせましょう」

決意を込め呟く。その意思は確かに世界へと響いた。

一つの変革　死闘の果ての救いと崩壊（後書き）

色々と危ない感じになってきました。良くも悪くも一人助かり、一人反転状態、主人公の口調が違ったり、オレという字が変わったりしてるのは仕様です。

他にもいろいろ出したものはありますが、案だけは一応少し前からありました。入れると決めたのは最近ですが。後、融合に名前を付けてみました。何か味気ないので。

次以降は結構時間かかるかも。作者が少し忙しいので。

動き出した旅路　小さな勇気（前書き）

今回時間がかかって申し訳ありません。リアルに時間が無かったもので、少しづつ書いて行って漸く仕上がりました。今回少し鬱展開っぽいのと、不思議展開みたいなのが入ってます。

後々関係あるような無い様な、それと少し遅くなっても辞めたりはしないので歯がゆいかも知れませんが、待っていていただけると嬉しいです。

後、しばらく過去作の修正や加筆なんかをしようと思ってます。気が付いたら話が少し変わっているかも、です。

動き出した旅路　小さな勇気

森を覆う威圧が消え、そこは元の薄暗い風景を取り戻す。それはいつもの迷いの森、けれど、影の魔物を倒してからほんの僅かながらの時間、その森の中に迷う人々を導くような光源が存在した。それは赤の光を放ち、迷い人を出口に案内するように周囲を照らす。

その光につられ、幾らかの者が森を出る事に成功する。それはその赤い光を放った者も予想していない成果。それは褒められたものなのかどうか、判断するものも今はいない。けれど、今この時、その何名かを助けたのはこの世界の事実として刻まれていく。本人も気付かないまま、けれど、確実に残る証となって。

――俺は、どうなった？ここは、どこだ。

何も見えない。覚醒し始めた意識を強烈な光が視界を奪いにくる。それを反射的に顔を手で覆い隠して防ぐ。疑問の中で今の自分の状況を整理する。疑問を一つ一つ確かにしていく。

――ここは森の中、それで、俺は胸を貫かれて、その後は……

だんだんと記憶が繋がっていく。そして、その顛末も思い出す。結果として自分は彼女を救えたのかどうか、それを確認する術はない。だから今は先へ進む。そうすればなんにせよまた会うだろうから。意識が鮮明になり、だんだんと光にも慣れてくる。手を放し目を開く。果たしてそこにはいつか見たような宇宙空間が広がっている。

「……」

さすがにこれは予想してなかったな。俺はまだ夢の中なのか？どうにもまだ寝ぼけているらしい。さっさと起きないとモンスターに喰われるんだが。寝てるところを咀嚼されるとか、悲しいにも程があるだろう。勘弁してほしい。

余りにも現実的な危惧を抱き、どうにかここを出ようと、自身の覚醒を促そうと考える。だが、どうすればいいのかがいまいち判らない。とりあえず自分の腕を抓って見る。痛みで目を覚ますのはある意味基本だろう……痛いだけだった。その後にもいくつか思いついたものを試していたが、結局出る事はできなかった。

「……どうすればいいんだ？このままここでこうやっているわけにはいかないんだが」

そこまで言葉にして、動きを止める。そういえば以前此処に来た時に自分は誰かとあったのではなかったか。ならば今回も目覚めるにはその人物と会う必要があるのだろう。無論推論でしかないが、今はそんな些細な情報でも活かすしかない。

「……さて、そうは言ってもどこにいるのやら」

周りを見渡す。そこには星と思わしき光源と、どこまでも暗い空間が広がるのみ。人影など何処にも無い。しばらく漂うようにその中で誰かを探す。名も知らず、まともに話したことなどないに等しい。

「やっぱりそう都合よくはいかないか」

少し落胆する。こういうのは探していると割と出会ったりするも

のと少し期待していたがそんな事は無かったらしい。とりあえず、収穫はこの空間での動きをなんとなくだが理解する事が出来た事。魔晄を使い空間を蹴るようにして、推進力を生み出し、前へと進む。最初はそうやって速度を得て移動していたが、次第に魔晄なしでも進めるようになってきた。

こういうのもなんだか慣れると楽しいものだな。今まであんまり楽しむ余裕なんてなかったからな。こういう事もたまにならいいかもな。

内心で楽しむ程度には気持ちの余裕が出来たらしい、そうして移動して行くと、ようやく目当ての人物を発見する。前と同じ姿をした二人組。

「ようやく見つけた。まったく時間がかかることこの上ないな」

ため息と共に少女たちの方へと視線を向ける。今度はからかう事などせずに話し合おう。さすがにあの対応は無いだろうと思い返しながら。よくよく考えてみれば右も左もわからない状況でよくあんな対応をしたものだ、と思い返す。

「……っと、止まってる場合じゃ無かったな」

何とか当初の目的を思い出し、少女の方へ進む。しばらくすると、向こうもこちらに気付いたのか、顔をこちらに向ける。その顔つきからは特に感情を読み取ることはできない。表情に出すのに慣れていないのか、それとも、元から無いのか、それを判断するにはまだこの子らの事を知らな過ぎる。そして、何故自分がここに居るのかも。

『『……』』

「こんにちは」

とりあえず挨拶をしてみる。してから気付いたが、この二人にそんなことが分かっているのかという疑問が浮かんだ。

『『？』』

案の定二人の少女は首を傾げている。正直もう少し早く気付くべきだった。見た感じここには自分たち以外には誰もいないのだ。挨拶なんて言う習慣がこの二人にあるとは思えなかった。なんとなく気恥ずかしいものを感じる。とりあえず何か突っ込まれる前に話題を変えようと口を開く。

「……俺の事は覚えてるか？」

その言葉に二人は顔を合わせ、しばらくした後こちらに向き直り、二人同時に頷いた。自分の事を忘れていたり、以前の事が単なる夢だったらどうするかを考えていたので、その反応は割と歓迎できるモノだった。

「それじゃあ、ここから出る方法も判るか？俺はここでずっといるわけにはいかない。やる事が有るから」

出来るだけ刺激しないようにやんわりという。以前はどういうわけか、からかう目的で話しかけていた。勢いというのは怖いなと過去を振り返る。その言葉を聞いた少女は再び顔を見合わせ、何事か呟く。その後また此方へ向く。

『……あなたはどうしてここに居るの？』

『……ここには誰も来れない筈なのに』

唐突にそんな事を言われた。以前は何か意味ありげなモノを言っていたが、今回は割とわかりやすい疑問をぶつけられた。

「……そう言うのは最初にあった時に言う事じゃないか？」

『そういうものなの？』

『知らない』

此方の言葉に片方の少女が反応し、もう一人に顔を向け、向けられた少女は顔を横に振る。どうやら、特に意図は無いらしい。今疑問に思ったから聞いて来ただけらしい。

「それなら、ここはどこか聞いてもいいか？」

『ここは割れた世界。誰もいない、何もない。無の世界。けれど、特異点とほんの少しだけ交わってる箱庭』

『ここは封じられた籠、界を揺るがすモノを閉じ込めた虚ろな世界。その結果、世界の境界が薄くて特異点に似た空箱』

「……同時に喋るのはやめてくれ。聞きづらい。どちらかにしてくれ」

『『……』』

とりあえず、違う言葉を同時に言われては聞き取る方も大変だと思う。それを伝えるとなぜか非難めいた視線が此方へ向かう。知った事では無いが、俺は聖徳太子では無い。

『ここは…』

「ああ、さっきの言葉なら判ったからもういいぞ」

『『……』』

今度は片方づつ言おうと思ったのだろう。二人の内一人が口を開き、先程の言葉を言おうとする、が此方もさっきのは聞き取りづらいと思っただけであって、聞き取れなかったわけではない。割とこんなこともできる自分に驚いたが、不可思議な能力が増えていくのはいつもの事と割り切る。でないとさすがに自分の変化が怖くなる。

そして、少女の視線は更に冷たいものになる。確かに聞き取りづらいとは言ったがそれは一人と比べて聞き取りづらいのであって、別に聞けない訳では無い。そこを言って無かったせいか、誤解があったらしい。言葉とは難しいものだ。

『……あなたは意地悪だ』

『……性格が悪い』

「……そんな事は無いと思うんだが」

言葉少なに不満を言う少女たち。その言葉に苦笑いを禁じ得ない。説明不足だったのは認めるが、意地悪ではない、少なくとも今回はそんな意図はない。

『あなたは不思議な人、ここにきたのはあなたが初めて』

『どうやってここに来たの？何か目的でもあるの？』

「いや、俺にも何が何だか判らなくてな。色々困ってるんだよ」

正直に答える。実際の所、なぜこうなったのかが分からない。目の前の少女はどうやら関係がないらしい。この少女たちが原因で自分がこの世界、ひいてはエクステーゼという世界に迷い込んだのかもと思ったが、違うらしい。

「そういえば、お互い自己紹介がまだだったな」

『自己紹介？』

『そういえばそんなものもあったんだ』

此方は単純に言い出すきっかけがなかっただけだが、目の前の二人は初めて気づいた、又は思い出したと言わんばかりに軽い驚きを露わにする。

「まあいいや。それじゃあ俺からだな。俺の名はユーリ。改めてよろしくな」

『……どうしようか』

『……どうするの？』

「？なんかまずいことでもあるのか？名前を教えると都合が悪いと

かか？」

此方は名乗ったが、なぜか目の前の少女たちはその言葉にひどく狼狽えていた。まるで、それがどうしようもなく重いモノであるかのように。

『別に都合が悪い訳では無いの、意地悪だけど、あなたなら何とかできそうだから』

『うん、少しくらい性格が悪くてもあなたなら大丈夫だろうから』

「……割と根に持つのな」

先ほどのやり取りを若干早まったと後悔しながら言葉を返す。けれど、何とかできるとはどういう意味なのか。そして、この二人の名前にどんな意味があるのか。それを問いかける。

「まあ、俺への文句は俺に言ってくれたので良いからさ、さっきの言葉の意味を教えてくれ、どうするっていうのは？」

『……失くしたの』

『今はもうわからないの』

「何がだ？」

『私たちの名前』

「……」

その言葉に言葉を失う。自身の名前が判らない。それがどんな気持ちなのか察することはできても理解はできない。元から持っているもので当たり前にある物それが目の前の二人にはない。エイナもそうだが、こう言った事に関してはその気持ちが判るなどとは決して言えない。同情や憐みなどはするだけ無駄だ。少なくとも目の前の者たちは望んではいないだろう。

『でも、今まで誰にも言う必要はなかったから、あっても無くても変わらなかったけど』

『言われてみるととても不便に感じるかな、気付いてみると大変な事なんだよね』

少しだけ悲しみを湛え呟かれた言葉、それを聞いて軽率だったと反省する。けれど、言った言葉は戻らない。ならば、落ち込むよりも先に聞くことを聞こう。そう思い二人を見る。

「なら、大丈夫ってなんだ？何かあるのか？狙われてるとかか？」

『ううん、私たちの事を知ってる人達はもういない。少なくとも私たちの事を知ってるのは多分一人だけ』

『その一人もきっと忘れてる。最後にあったのはずっと前だったから、仕方ない事だけど』

そう言って二人の少女は俯く。まるでその事実を信じたくないかのように、耳をふさぎ都合の悪い事を聞くまいとする子供みたいに。

『『私たちを知る人はもういない、もう、いなくなったから』』

「……」

繰り返される言葉、それに込められた思い、できる事なら笑顔に変えてやりたいとは思う。けれど自分は彼女たちの事を何も知らない。それでも、何かしてやろうと思った。きっと、その気持ちは嘘じゃない。確かに今ここで思った事実。

「ここに俺が居る」

『『え？』』

「お前たちを知る奴はここに居る。確かに俺はお前たちの名前も知らない、何をしているのか、ここはどこなのか。知らない事だらけだ。それでも」

『『……』』

「それでも、お前たちとこうやって話す事にそんな理由はいらない。お前たちとこうしている時間は確実にあるんだ。だから俯かずにこっちを見てくれないか？」

膝をつき、目線を少女たちに合わせて言う。言われた少女たちは無反応。その現状に少し傷つく。けれど、その直後に流れた涙にそんな気持ちなど直ぐに吹き飛ぶ。

「お、おい！」

『気に、しないで』

『嬉しかっただけ、だから』

「……」

交互に喋る少女たちの眼からは静かに涙が流れる。それをしばらく見つめ、その涙が止まるまで誰も何も言わず、無言の時が続く。けれど、不快なものでは決してない。やがて、涙も止まり、改めて少女たちが此方をむく。その瞳には今までと違い、若干の光が灯っているようにも見える。

「もう、大丈夫か？」

『はい』

『問題ない』

また、そっけない口調に戻った。けれど、そこには確かに感情が読み取れる。そして、二人の少女は静かに笑みを浮かべる。

『やっぱりあなたなら大丈夫そう、意地悪だけど』

『うん、あなたに決めた。性格悪いけど』

「？何の事だ？というか、根に持ち過ぎだ」

そう言った時、周りが淡く発光する。それは夢からの目覚め、覚醒の兆し。また、こういった必要な言葉が紡がれる前に起きるパターンかと内心愚痴る。その間も光は世界を包む。そして全てが光に包まれ消え失せる瞬間、確かに少女達の声が聞こえた。

『『私たちを探して、ユーリ、貴方が、貴方ならきっと大丈夫だか

ら、私たちをうまく使えるから』』

「だから、最後まできちんと言えって」

以前と変わらず、中途半端に終わった会話に対し突っ込みを入れる。光の向こうで二人の少女が微かに困った顔をしたのが伝わった。そして、全ては白に染まる。

光が覚醒を促す。決して強いというわけでは無いが、その変化はこちらの感覚を目覚めさせるきっかけになり得ている。そして、離れた所に何かが動きた気配がした。少しの倦怠感と共に目を薄く開く。その視線の先には、黒い塊が此方へ向かって歩を進めていた。それを見て一気に意識が浮上する。

「っと」

即座に跳ね起きその塊と距離を取る。

『……フム、ドウヤラ眼ガ覚メタヨウダナ』

「……リゼルドか」

そして、その黒い塊の正体を確認しようとみてみると、破損し、体を動かせない筈のリゼルドが此方を見ていた。微かに聞こえる駆動音。それが大気に響き、目の前の者が機械であると認識させる。

『貴方ガ話ニ聞イテイタゆーり殿カ』

「ああ、そうなんだろうな。どういうふうに言われたのかは知らないが」

「成程、ナラバ先程ノ高エネルギーノ正体ハ貴方ダッタカ」

「……多分な」

その言葉を聞いて若干眉を寄せる。あの戦闘時、力を注ぎ過ぎて自分に余力が残らなかったのは確かだ。だからこそあの時の様な圧倒的な戦闘状況には成り得ない。

俺はあの時、ほとんど動けなかった。体の芯から力を絞りきってたから当然と言えば当然だったんだが。

ユーリはあの時の戦闘を思い出す。そして、自身に起こった変化それにより勝ちえた今の時間。もしあれが無ければ、下手をすると今この場に自分はいなかったかもしれないと思うと、一概に危険なだけとも言えない。何せどんな現象であれ、それに助けられたのだから。

あの時自分の変化を不思議と変だとは思わなかった。それどころか自分が正しいと感じてさえいた。今考えれば傲慢というか、勝手というか、そんな気がする振る舞いだったように思う。

あれはないな。正直どうしてああなったんだ。

微妙にへこむ。けれど、性格面はどうであれ、強いのは確か。あの時の状態にはどうやっても届かないだろう。自分の力なのだから

そんな事は無い、となるかも知れないが、あれは元々あった物とは違う。ストラはあれが原因で生まれたものだが、それでも今は自分の力と言える。魔力もしかり、魔力を自分の物として洗練したのが魔晄という戦闘法なのだから。

そこまで考え、とりあえずこのまま話を続かせるのはよくないと思い、話を変えようと口を開く。なんであれ、少し考える時間がいる。

「そんな事よりもリゼルドは平気なのか？結構破損がひどかったと思うんだが」

『ソノ事ナラバ自己修復ニヨッテ、歩行スル程度ニハ機能ガ復活シタ』

そう言い、リゼルドは駆動音と共に腕を上下させる。軽く動ける程度には回復したと言いたいのだろう。

「それはよかった。けど、ここに来るまでにモンスターとかにはあわなかったのか？」

気になっていることを聞いた。あの影の魔物を倒した以上、あの再生するモンスター達や森が襲いかかって来る事はないだろうが、なにかあったらと思い尋ねる。その事に対するリゼルドの返答はとくに問題のないモノだった。

『貴方ガ最後ニ放ッタエネルギーニヨッテ、コノ森ヲ包ム謎ノフィールドハ消去サレタ。アノ場ニ残ッタモンスターハイナイ。スベテ貴方ガ倒シタカラナ。ソレ以外ノモンスターハ、此処トハカナリノ距離ガアッタガ故ニ、脅威ニハ成リ得ナイ』

「……そうか、まぁ無事で何よりだよ。もしかしてそっちに被害があったらどうしようかと思ってたからな」

少し心配していたのは本当だ。けれど、本当はその事を追及されるのを嫌って出た言葉だったが。

『心配シテモラッテ有リ難イガ、コレデモ白夜ニ所属シテイル身。遅レハトラナイ』

「そうかい」

暗に心配はいらないという意味なのだろう。苦笑いと共に返事を返す。そしてその時に少女の事を思い出す。

「そう言えばピアは問題なかったのか？」

ここから離れているからとはいえ、ピアも確か森の出口付近にいた筈だ。それならば何かあっても不思議ではない。

『問題ナイ。先程連絡を取ッタ。今通信ヲオープンチャンネルで開コウ』

その声と共にノイズが聞こえ、しばらくすると少女の声が聞こえてきた。

『リゼルドおじちゃん？急にどうしたの？』

『ゆーり殿がぴあノ身ヲ心配シテイタヨウダカラナ。ソレナラバ直接会話スレバゆーり殿モ安心スルダロウト思イ、通信シタ』

「……ああ、元気そうだな」

声を聴く限り特に問題はなさそうだ。その事に少しホッとする。

『お兄ちゃん、ピアのこと心配してたの？』

「それはするだろう。元気そうで何よりだよ」

『えへへ、うん！』

『ダガ、先程ぴあハ突然ノ通信ニ驚キ、舌ヲ？ンダ様ダガ』

『おじちゃん！？』

突然のリゼルドの暴露にピアから驚きの声が上がる。それを横で聞いていたユーリも、何故それをわざわざ言ったのか判らなかったがためにリゼルドを見やる。

『なんでそういう事言うの！？お兄ちゃんが居るのに！』

『イヤ、特二口止めモサレテイナカッタタメ二、空気ヲ和マセヨウト努力ヲシタマデダガ？』

『絶対努力の方向性間違えてるから！』

リゼルドの一言から賑やかになる。意図はどうであれ、空気が弛緩したのは確かだ。ピアにはご愁傷様としか言えないが。

『お兄ちゃん！』

そんな事を思っているとピアに呼ばれた。何かあるのかと思い耳を澄ましてみると。

『べ、別に少しびっくりしただけだから、いつもはそんなことないんだよ』

どうやらさっきの言葉を訂正したいらしい。別にどうでもいいことだと思うのだが、隠しておきたいのならとりあえず口裏を合わせておこう。

「ああ、そうだろうな。何か思ってるわけじゃないから気にするな」

『本当？』

「本当だよ、だから心配するな。それはそれとして、とりあえず話を進めてもいいか？」

このままだと話が脱線しそうなので軌道修正する。

『うん、それと、本当に普段はそんな失敗しないんだよ』

どうやら、結構気にしているらしい。

「そうか……ええと、それでだな。二人はこれからどうするつもりなんだ？」

なんとか話を切らないようにする。あまりここで悠長にしていても仕方がない。

『トリアエズワタシハ拠点ニ戻リ、完全修復ヲシヨウト思ウ』

『ピアもこの事をみんなに伝えないといけないからリゼルドおじちゃんと一緒にいったん戻ろうと思うの』

やはりそうなるだろう。この流れは元々予想できていた。けれど、今はこのまま一人で行動するのは色々とマズイ。あの赤い光が自分に何か影響を与えていた場合、戦闘もままならない場合が考えられる。

「その戻る場所というのはどこなんだ？」

『アレスパの街だよ！ピアたち白夜はそこに集まってるんだよ！』

「そうなのか」

ユヅキからも聞いているし、わざわざ聞く必要はない、けれど、もし、何かの拍子でおかしなことを喋ってしまうかもしれない。それを防ぐために先に話題にしておく。

とは言っても言えない事もある。例えば白夜の中心人物の名前や、その正体について。そういう事は出来る限り控えて置く。言っても信じないだろうが。それとは別に、思考に上げるのも不味い。少なくともピアの前では。

それ故に一緒にいるのは得策ではないが、今は生き残る事を考えると背に腹は代えられない。共に行動することにする。

「それなら一緒に行かないか？こっちも先の戦闘で消耗してるし、悪い事じゃないと思うが」

『え？……えっと、どうしよっか？リゼルドおじちゃん』

『……ダガ、今ノワタシデハ戦力足リ得ナイ。足手マトイダト思ウガ。ソレニ、ぴあニハ戦ウ能力ガナイ』

『うん……ピアは力ないから』

力なさげな声が聞こえる。ピアにとって、戦える力というのは確かに好きでは無いのだけれど、守るために必要な物だという事も勿論判っている。

「なに、リゼルドの修理は俺がどうにかするさ」

『……可能ナノカ？設備ハモトヨリ、部品モナニモナイゾ』

「ああ、けど、俺は一人じゃないんでな」

そう言ってユーリは召喚術を使用する。呼び出す者はもう決めてある。それは先の戦闘に置いての疑問の一つ。本来ありえない状態になった存在。何か見間違えた、もとい、記憶違いだろうと思うが確認も兼ねて呼ぶ。白い光が集い喚起する。ユーリすら気づかぬ変化。強化されし術式、それは対象の姿さえ変革させる。それは件の女性から送られし力の一端。

「来い、ドリトル」

光と共に現れるはよく知っている、ドリルに変形する機械の従者、そう、機械なのだ。だからそれが人型、まして女性なんて事は無い筈、気の所為だよな？と思いながらも若干緊張気味に目を光へと向

ける。

『……』

「なぜにこうなった」

召喚された者は、白い光に身を包み、優しく此方を見返す。光が消えた後には銀髪を靡かせ、白いワンピースが風にはためかせる女性がいた。目があった。即座に脳内で考える。まさしく今言った言葉を、こうなった理由を。

いや、いつもと比べて光が強いとは思ったし、何か召喚術が強くなってる気はしたんだ、けど、なんで姿が変わる、しかも人型に。こういうのはもっとごつい姿になるんじゃないのか？なぜに擬人化？有り得ねえ。

頭の中で高速で思考しながら現状を把握する。

だが、戦力的には強くなってる、筈だ。少なくともこれで戦えないなんて状況は無いだろう。基本的にこういうのは強くなってるとみるべきだ。ありえるかどうかは別として。

それはそれとしても、何故女性？そこに疑問を感じる。機械に性別ってある物か？人格上はあるのかもしれないが、実際こうなると不思議なんだが。

待て、論点がずれ始めている。ここはまず本人に尋ねてみるのが先決だろう。そこからまた考えればいい、今のままでは推論でしかない。

それこそ、問題じゃないのか？仮にドリトルだとして彼女？を傷つける事になるのではないか、それならば、ここは気にしないようにして進めてはどうだろう。

複数の思考が意見を出し合い、脳内会議が始まる。これも先ほどの戦闘で起こった変化だろうか。自然と行えたそれにユーリは気づかないまま没頭する。総数２４にも及ぶ思考が飛び交い意見を出し合う。その討論は心でも読めない限りは垣間見ることもできないだろう。

そして、話し合った結果、とりあえず予定していた修理を頼みつつ、遠回しに聞いてみる事に落ち着いた。体感時間で３時間、実際の時間０，００１秒内に置ける高速思考で出た結論は何とも微妙だったりする。

『……』

不思議そうにこちらを見るドリトルの筈の女性。それを極力気にしないようにする。

「あ～とりあえずリゼルドを治せるか？」

若干しどろもどろになりながら、女性に話しかける。話しかけられた女性はその言葉を聞くと優しく微笑みその口を開く。

『了解致しました。これより修復作業に入ります。』

高い女性特有の声で了解の意を伝える。そして、何もない空間から、突如として巨大なバックパックが出現する。さすがに少し驚いたのか、ユーリとリゼルドに若干の動きがあった。

その理由は少し違うが。リゼルドは単純な驚き、ユーリのはそれを見た事が有ったが故の驚き、間違いなくドリトルが使っていたバックパックだ。そのバックパックは変形し形を変える。そして、ベッドから様々な工具を先端につけたアームが大量についた、改造用にしか見えない装置に形を変える。

『それではリゼルド様、マスターの命により修復をいたしますので、こちらに横になっていただいても構いませんか？』

『ア、アア。頼ム』

まだ頭の中で整理が出来ていないのだろう。上ずった声でリゼルドがドリトルの声に従い、用意された装置に体を預け横になる。それを確認し、ドリトルが此方に視線を向ける。

『マスター』

「……どうかしたか？」

いきなり話しかけられ、意図が読めずに困惑する。するとドリトルから先程の思考の答えとも言える言葉が放たれる。

『この作業が完了してからでも構いませんので、私がこうなった理由が知りたいのですが、何分召喚される少し前に、いきなりこの姿に変わってしまったもので』

「……召喚される少し前、か。成程な。それなら納得がいくような気もする。」

恐らくは光から判断するにストラを流していた時、こっちに流れて来た白い光の影響だろう。あれが色々と影響を与えているらしい。そんな事を考えているとドリトルから意外な発言が飛び出す。

『というと、これはマスターの趣味か何かでしょうか？』

思わず吹いた。

「なんでそうなる！と言うか、女性人格だったんだな。ドリトル」

その言葉に彼女は眉を吊り上げる。腰に手を当て、もう片方の手の人差し指を立て、口を開くドリトル。

『確かに、あまり話してなかったので判らなかったのかもしれませんが、その発言は失礼ですよ、女性と思ったのなら控えるべき発言です』

子どもをしかるかのように指を突き出し、めっとでも言うかのようなしぐさで注意するドリトル。それを見ながら少し気になった事を聞く。

「もしかして、元々その人格自体はあったのか？その姿になる前から」

『そういう発言がそもそも駄目なのですが、でも聞かれた以上は答えますね。はい、この人格は元々の物です。この姿は突然光に包まれたらこうなっていたので、私も何が何だか』

注意しながらも聞かれたことには律儀に答えるドリトル。そして、最初の疑問をぶつける。ドリトルの姿と言うより、戦闘時の事だ。

自分が変化した人格だった時、召喚したあの時のドリトルは目の前の者とは違う、そんな気がしたのだ。

だから聞いておきたい。もし違うのなら、あの人格は今の自分とは違う誓約を交わしているという事になる。何をしたかは覚えているが、その時の心情なんかは全くわからない、映画か何かを鑑賞していたようなものだ。結局推論や後付けになるだろう。

「なあ、ドリトル」

『はい、何でしょうか、マスター』

「今以前に俺に呼ばれたのはいつだ？」

『……急にどうしたのですか？それはマスターならご存知だと思いますが』

「ああ、けど少し気になる事が有ってな悪いが教えてもらえるか」

『了解しました。最後に召喚されたのはリコ様の召喚獣を改造した時ですね。それ以降は呼ばれた記録は有りませんが』

「そうか、有難うな」

『いえいえ』

ドリトルとの会話を打ち切って思考に埋没する。今の言葉が確かならあの時のドリトルは今ここに居るドリトルとは別物になる。けれど、自分が誓約を結んだのは目の前のドリトルであって、他のドリトルとは誓約していない。ならばあのドリトルは誰の召喚獣なの

か。

考えるまでもない、あの時の俺が誓約した召喚獣なんだろうな。だけど、それならなんで俺に呼べなかったんだ？ドリトルを呼ぶとき、特に他のつながりは無かった。感じたのは今いるドリトルだけだ。呼べないという事は、つまりあの時の自分は……

『マスターそろそろ作業に入りたいのですが、許可を頂いても構いませんか？』

考え事に浸っていると、横からドリトルが話しかけてきた。そちらに目を向けると、ドリトルから作業を始めてもいいかと言う旨の意見が出された。

「ああ、時間をとらして悪かったな、始めてくれ」

『了解です』

その言葉を聞いて装置に近寄る。リゼルドは依然として横になったままだ。

『それではリゼルド様、作業に入りますのでシステムを落としていただけますか？』

『了解シタ……』

その声と共にリゼルドの眼から光が消える。稼働音も消え、スリープ状態へと入ったのだろう。そして、ドリトルが装置に近寄り何かの操作をする。そして、最後の操作をする。

『では、スイッチ、オン』

その声と共に装置が動き出す。ドリルが回転し、ハンマーが叩き、ガスが噴き出し、又は電気が走り溶接を行う。ベッドの下からは多数の合金が現れ、破損個所を埋めていく。その作業は見ていると視力が下がりそうな気がする。ちかちかと目に悪い。それを見つめるドリトルは心なしか楽しそうだ。本人いわく機械が動いているのを見るのが好きらしい。傍から見るとマッドにしか見えない。

「とはいっても、実際は元々のドリトルと変わりはないんだろうな。強さとかは変わってるのかは知らないが、おいおい試してみるか」

とりあえず、いくつかの収穫があったので良しとする。ものすごい轟音を立てながら行われる作業。さすがにこれでモンスターが寄ってこられても嫌なので、どうにかしようと思う。

「ドリトル、とりあえず音が大きい。如何にかできないか？防音とか」

『私としてはこの音がいいんですが、それに別にモンスターが来てもいいんですけどね、私が倒しますので』

「そう言われてもな」

『マスターが仰るなら仕方がありません。防音に切り替えます』

そう言って何かの操作を行うドリトル。その一連の会話をして、ああ、こいつも癖があるんだ、と少し目を細めて思う。個性が強いなぁと他人事みたいに思う。今更だが。

『……さて、これでマスターの意見通り、防音に関しても問題ありません』

「ああ、ありがとう」

少し目を放していた間に装置は透明なドーム状の障壁に包まれ、音が外に漏れないようになっている。どう張ったのか少し過程が気になったが、まぁいいかと思いなおす。それは別に今言及する必要はない。

「そういえば」

『はい？』

此方の言葉に顔を向けてくるドリトル。

「その姿になって強さに変化があったとかは無いのか？」

『そうですね、変化はありますね』

その言葉に自分を見下ろすように視線を向けるドリトル。

『この姿になって、と言うより、この姿になるときに包まれた光によってでしょうか、武装強化、並びに追加武装がいくつか、後は出力も上がってます。全体的に底上げされた感じでしょうか。そこに様々な用途の武装を足した感じですね』

「なんだそのてんこ盛り」

『はい？』

「いや、気にするな。思っただけだ、他意は無い」

話を聞いてそれが本当なら、どれだけの戦力アップになるか、考えてみるだけでもこちらが余程楽になるだろう。それにこの流れでいくと、他の召喚獣も変わっている感じがする。

もしそうならいいことだし、現状強くなって損はない。何かデメリットがあるのなら問題だが、今の所そんな感じはない。完全にメリットのみが在るように感じる。

とはいっても、どこか裏があるかもしれないし、注意しておくことに変わりはないか。

内心、召喚獣の変化を気に留めて置くようにする。もし、取り返しのつかないような事態に繋がるのなら、それ相応の対応が必要となる。そう言ったものは総じて時間がかかるものが多い。

だからこそ、気付けるものなら、早めに早めに気付いておきたい。これからも共に進む仲間であり、今を一緒に過ごす家族の様なものなのだから、なんだかんだ言ってきちんと愛着は湧いている。だからこそ失いたくはない。

そんな考えをしていると、ドリトルが話しかけてくる。その眼には何か好奇心の様なものが見え隠れしているような気がする。

『ところで、マスター』

「なんだ？」

『今度はリコ様の召喚獣をどう改造しますか？それとも、今度はエイナ様の召喚獣でも？』

「……」

ああ、本当に我の強い召喚獣達だなぁ、と内心汗を流しつつ答えていくユーリ。やっぱりマッドか、と開き直りながらも、いずれ人体実験とかはじめないよな？と一抹の不安を残しながらも気にしないようにする。気にしたくない。

世の中知らない方が、気にしない方がいい事もある。綺羅綺羅と目を輝かせながら聞いてくるドリトルを見ながら、そんな事を思う。是非もない。

ここは夢の中、それを認識する事も無く、一人の女性はおぼろげな風景を見る。女性にとってこれは現実と何ら変わりはない。ここで行われる事は、まさしく取り返しのつかない現実で行われた物だと認識している。これはそう言ったモノ、いわゆる悪夢と言う分類に置かれる内容だろう。

『ここって、私は……』

目をさまし、周りを見る。そこは変わらない風景、見知った常夜の石の中、その風景を目にしたまま、女性、エイナは現状を把握する。

『そうだ！モンスターと戦ってて、それでその後ユーリと変わったんだった！』

簡潔に自分の置かれている状況を認識した後、外に意識を向ける。そこには青い光を纏いながら戦うユーリの姿が見える。その戦闘はユーリが優勢に進めている。

『よかった、怪我とかもしてない、よね。うん、大丈夫そう。』

パッと見た感じどこか負傷しているようにも見えないし、動きにも欠けたるところはない。どうやら、問題はないらしい。そのことを確認し安堵の息をこぼす。

『このままなら大丈夫だよね。ユーリは強いし、何だってできるんだから！』

見える景色に満足しながら、その戦闘を見守る。とは言っても既に自分には戦う力は残っていない。出て行った所で足手まといだろう。だから見守る事しかできない。

『……ごめんね、いつもいつも最後は任しちゃって、最初出会った時からかっこ悪いところ見せてばっかりだよね』

自分にできる事は無い今の現状、気持ちに少し余裕が出来た今、思い出すは今までの自分。それは青年との記憶。今この身に宿っている記憶はまさしくユーリと出会ってからの物しかない。それ以前の部分は破れたページの様に見る事は叶わない。けれど、エイナはそれでも今の記憶があるのなら、これからも進めると思う。

『本当はね。初めて見た時は、なんだこいつって思ってたんだ。知

らない人の中でいて、不安だったんだと思う。けど、君の必死な姿をみて、頑張ろうって思ったんだよ？それで、私が倒れて弱音をはいちゃったんだよね。その時も本気で起こってくれたし、見も知らない私のために。興味を持ったのはその時からかな。その後もいろいろ助けてもらっちゃったし』

その独白は誰にも聞こえない。そして、その視線は外で戦う青年へと続いている。誰よりも大切で、誰よりも好きだと言える、この世界でただ一人の人物。判らない事もある。不安な事もある。けれど、彼とならなんだって乗り越えて見せる。乗り越えて見せる。そう決めた。自分で、自分の意志でそうすると決めたのだ。

『だから、いつか、責任とってね。私は高いんだから！』

既に決着が着きそうな戦闘を見ながらそんな言葉を言う。聞こえない、届かない言葉を重ね、想いを表す。けれど、まだ正面切って言う勇気はない。もし断られたらと思うと、どうしても言い出せない。彼女にとって青年は彼女のすべてなのだ。最初から見た風景は彼と同じもの、全てを共有し、共に進んできた。それは紛れもない事実だし、そこで育まれた気持ちも嘘はない。

だからきっと、絶対に打ち明けようと思う。油断していると直ぐに足元をすくわれかねない。主に青年の召喚獣とか、出会う人々とか。どこに下手人が潜んでいるか判らない。その事に関しては、結構敏感になってきている。やはりどうしても自分を見て欲しい。こういう所は女の子だなぁと自分でも思う。

そう考えているうちに戦闘が終局を迎える。ストラを纏ったユーリがモンスターを切り裂く。ストラを纏わせたその一撃は、長大な剣となって振り下ろされる。モンスターはその体を切り裂かれ、絶

命する。それと同時に周りの植物なんかも静けさを取り戻す。

『よかった、やっぱり怪我なんかしてほしくないもんね』

その姿を見て安心するエイナ。あの茨は見ていて不安が募ったのだが、特に何事も無かったようだ。そして、こと此処に来て、ようやく他の人物の事を思い出す。確か自分がこの中に連れ込んだのだ。つまり近くにいるという事になる。ババッと左右を確認し、周囲を見渡す。少なくとも見える範囲には誰もいない様だ。

『はぁ～、よかったぁ。さっきの聞かれてたら、何を言われるか判んないもんね』

誰もいない事に息をつく。恐らくは建物の中にいるのだろう。結構改装されている内装は最初の殺風景な部屋と比べると同じものか疑問に思う。知っている者ならば、驚くこと受けあいである。

『そういえば、ユーリって暇なときって何か作ってばっかりの様な気がするなぁ。どうして、あんなに色々作ってるんだろう』

ユーリは元々はそんな事をする気はなかった。けれど、エイナが常夜の石で暮らす以上過ごしやすいように色々作っていたのがいつの間にか趣味みたいになっただけだ。少なくとも最初は小さな思いやりから始まっている。

けれど、そんなのんきな思考は外を再び見たことによって吹き飛ぶこととなる。

『……えっ？』

エイナの視線の向こうには、ユーリがいる。それは当然だ。自分がここに居る以上、外に青年が出ているのは明白。けれど問題はそこではない。問題はその青年に突き刺さった黒い茨。それはうねり、ユーリへとより深く刺さっていく。膝をつき、苦悶の表情をするユーリの顔は汗が流れ、余裕などないと理解できる。

『……どういう事？何で？もう倒したんじゃ』

エイナの頭の中で処理できない情報が行き交う。なぜ、どうして、そんな疑問ばかりが溢れかえり、思考を満たす。既に余裕はない。そこには現実の直視を何とか止めようと必死に否定する思考のみ。

『嘘だよね、もう終わったんだから。だって、さっきユーリはモンスターを倒して、いつもと同じように、笑って話しかけてくれて、それで』

冷静さを欠いた思考は延々と目の前の出来事を否定する。この戦闘中、自分は茨に言い知れぬ不安を感じたのではなかったか？それでも、青年なら何とかなると言い聞かせ、目をつむったのは誰だ？

知らせればよかった、あれは不吉な物だと、触れてはいけないと、直ぐにこの場を去るように言えばよかった。のんきに想いを語っているべきではなかった。

目からは涙がこぼれ、喉はカラカラになっている。両手を握りしめ、肩は震えている。心臓の鼓動がうるさい。今は大変な時なんだから少しおとなしくしてほしい。エイナは青年の名を叫ぶ。戻って来てと。

『ユーリ！！』

何が起こっているか、理解することを拒みながらも青年の名を叫ぶ、叫び続ける。答えてくれるのだと、帰って来てくれると信じて。けれど、その思いは届かない。

黒い光に包まれ、その姿が変貌する。黒い、どこまでも黒い球体に包まれ何も見えなくなる。そして、そこに群がる黒い茨。声なき悲鳴を上げ、それを見続けるエイナ。

その体は金縛りにあったかのように動かず、その眼は否定したいと思いながらも離す事が出来ない。魔に魅入られているかのように。そして、終わりが訪れる。

黒い球体が巨大な闇に変貌し。森を覆っていく。飲み込まれた物はもう戻らない。全て消え失せていく。全ての光はあの闇に呑まれ消えていく。その光景をみて、エイナは足元が崩れていくような感覚に襲われる。世界から色が消える。白黒の世界の中、全ての感情が抜け落ちる。

『なん　で　こんな　事に　私が悪い　のかな？……ワタシノ　セイ？』

既に瞳に光は無い。そこにはただ茫然と同じことを、自分が悪いと繰り返す、女性の形をした人形のみ、いずれこの世界も消え失せるだろう。青年が身につけていた常夜の石はもう既に闇に侵食され始めている。もうすぐ消えてしまうのだろう。

『アハハ、アハハハハハ！』

けれど、もうどうでもいい。彼に会えないなら、彼のいない世界

に何の未練もない。それならばいっその事、すべて消えてしまえばいい。黒い思考は広がり、狂気となって染み込んでいく。

スベテガ　ヤミノナカヘト　キエテイク……

とりあえず、あの後、ドリトルには断りを入れ、常夜の石の中に入る。そこにはエイナとリコ、エンクが草原に倒れたままになっている。とりあえずこのままは不味いと思い、寝室に運ぶ。色々作って置くといざという時役に立つな。そう思いながらも全員を運んでいく。

誰かを呼ぼうかとも思ったが、また姿が変わってたりしたらどうしようかなとか思っていたが、自分が運ぶのもまずいと思い、無難にコパルディアとエンクを呼ぶ。

「いきなりすまないな。疲れてるだろうに」

『いや、問題ないよ。どういうわけか、あの後白い光に包まれてさ。そしたら疲れもみんな消えちまったよ』

『某もあの面妖な光によって、消耗した力は元に戻っております』

「そっか」

どうやら、召喚獣全体にあの白い光の効果はあったらしい。それがいい事なのかどうかは知らないが。今ここで考え得る限りはこち

らにメリットがある。何せ自分とその召喚獣だけとはいえ、万全の状態で戦える戦力が増えたのだ。これならアレスパの街まで行くことも楽になるだろう。

『それにしても、こっちはこっちで派手にやってたんだねえ。まさかほぼ戦闘不能とはね』

「まぁ、何回も形変えて襲ってきたからな。正直面倒なことこの上ない」

『それでも倒した以上は問題ないかと、後はこの森を出て目的の場へと赴くのみ』

「そうだな」

二人と会話しながらこれからの事を考える。後少しでこの森から出られるだろう。けれど、アレスパの街まで直ぐと言う訳では無い。まだ戦う力は必要だという事だ。だからこそストラで治療しようと考え常夜の石の中に来たわけだが少々予想外の事が起きた。

二人を送還した後、眠っている3人にストラを行使しようとした所、その出力が目に見えて下がっていた。体全体を包んで尚、周囲に溢れていた以前の状態でも幾らか削減された状態だったが、今は体を薄い膜の様なものが覆っている程度のストラしか練りだせない。

「やれやれ、このままだと本当にバッドエンド直行って事になりかねないな。カルマ値なんてなかったはずなんだがな、この作品」

自身の知識を振り返るにそんなものは無い。溜まり過ぎたらバッドエンド直行になるポイントなんてなかったはずだし、少なくとも

まともに最後までは行けるはずだ。けれど、実際問題としてはストラはどんどん弱まっていく。今は何とか４割だろうか。次に減れば恐らく３割を切る。そうなるとどうなるのか、想像するだけでも少し気分が暗くなる。

「愉快だねえ、こっちが必死にやった結果、バッドエンドとかデッドエンドとか、笑えないにも程がある」

どうやって回避するか、まずはそれを考える。とりあえず茨に触れるのは危険なので却下。続いてラスボスにも触れない方がいい。後、ストラの大量放出も注意。今までの経験から危険と判断したのはこれくらいだろうか。融合についてはあまりはっきりしない。今まで駄目だと思っていたが、あの時確かに自分は融合を使っていた。

「その割には負担も何もない。つまり、融合時でもストラさえ使わなければ短時間使用なら可能って事か？」

推論を立てる。無論きちんと立証できるほどの確証はない。けれど、試してみる価値はある。これなら、皆を傷つける度合いも下がる筈だ。

「っと、それは後にして、今は治療をしないとな」

思考をとりあえず脇へと追いやり、ストラを収束する。手に集めてもそれは弱弱しい輝きとなっている。かき集めてもこの程度なのかと思うと、少し悲しくなる。ストラは生命力の具現、ならばこの弱弱しい光が自分の命の灯なのだろうか、やるせない。それに反して自身の体調は良好なのだが、そこが解せない。

「まぁ、俺の事は後でいいか。考えても仕方がない、暇があればま

た続きでも考えるか」

そんな事を考えながらストラで治療を施していく。最初はリコ、続いてエンク。治療に使うだけでも結構消費したなぁと思いながら薬も用意する。今のストラだけだとどうしても完治まではいかないので、アイテムに頼る事にする。

「さて、これで、二人は終了と、後は、エイナだけか」

ようやく残すはあと一人。少し疲れが見えた顔を隠しながらユーリはエイナの傍らに立つ。薬を手前の棚に置き、そしてストラを行使しようとした瞬間、エイナに変化がみられる。

「う、うぅ」

「む、起きたか？」

「ううぅううう」

「なんだ？」

どうにも苦しんでいるような魘されているような、治療をする直前だったから面食らった。その顔には汗が浮き上がり、苦悶の表情を形作る。とりあえず汗を拭こうとベッドの向こうにあるタオルを取りにその場を離れる。すると再び変化が訪れる。

「う、ん」

「……おさまったか」

エイナが表情を若干崩し静まる。それを見て大丈夫と判断し、少し離れた所に用意したタオルを取らずに戻る。けれど、近づいた瞬間再び苦しみだすエイナ。

「おい、これは新手の嫌がらせか」

思わずそんな事が口をついて出た。あの後タオルを取ろうと離れると静かになり、近づくと苦しみだす。さすがに傷つく。けれど、これが偶然と言うわけではないだろう。

つまり、あの茨に突き刺されたわけだが、その影響が同じ体を使うエイナにも現れたという事になるのでは？と考えるユーリ。その結論に至った瞬間、ストラを開放し、少し離れた所からの治療を始める。近づくと不味いのなら遠くからすればいいだけの事。疲れるがエイナが苦しむよりかはましだろう。

「これくらいで苦しまずに済むならそれでいいしな」

軽口と共に治療を行う。やがて、その表情が落ち着いたものとなり、唸り声も止まる。ゆっくりと近づいていく。側まで来ても何の反応も無い。どうやら問題ないらしい。内心安堵する。とりあえずストラの治療はこれでいいだろう。そして今度は薬で治療しようと考えたが、タオルを取りに回ったせいで薬はベッドの反対側にある、まぁいいかとあまり気にせずに、エイナの体の向こうにある薬に手を伸ばした時、衝撃が走る。

「ユーリ！った！！」

「っづ！」

突然人の名を呼びながら跳ね起きたエイナと問答無用の頭付き合い。お互いの頭に星が舞う。正直不意打ちだったのに加え、若干疲れていたために正面から激突した。さすがにこれは痛い。うずくまり痛みに耐える。とりあえず下手人に説教でもしてやろうかと体を起こし、顔を向ける。

「おい、エイナ。お前は起き抜けから人にヘッドバットをかます習慣でもあるのか？」

「……」

「？おい、話を聞いてるのか、じゃじゃ馬。だいたいな、もう少し落ち着きと言うものを知れと…」

「……」

「……どうした？まさか打ち所が悪かったとかか？」

何を言ってもこちらを凝視したまま無反応なエイナに、流石に心配になり、側により顔色を見る。すると、突然エイナが動き出す。

「ユーリィ！！」

「はっ？おい！ちょっ！」

いきなり稼働し、抱きしめてきた目の前のじゃじゃ馬に驚きを隠せない。というか状況が読めない。何があったのか、というか何があった。駄目だ思考がまとまってない。一部混乱気味な思考を置いておき、とりあえず引きはがしにかかる。

「よく判らんけど、とりあえず俺はここに居るから、手を放してくれないか？」

さすがに力付くというのは躊躇われたのでやんわりと言って見る。無言で首を横に振り、拒絶の意を示すエイナ。それを見て、どうしようかと考える。そしてその間に自体は更に加速する。

「う、うぅわあああぁぁああ！！」

「いい！なんで泣く！というか離せって！その体勢辛いだろうに」

「うぅう！！」

「いや、言葉喋れ」

いきなり泣き出し、しかも手は離さない。上半身だけ起こしてこちらに抱き着いているので辛い体勢の筈なのだが、それに構わずしがみ付いてくる。一切の遠慮なしにサバ折り気味に。しかも呂律が回ってないのか、自分でも声が出ないのか、こちらの言葉に泣きながら唸り声と共に首を左右に振る。こちらが泣きたい。

と言うかなんかデジャブを感じるなぁ。ああ、ドライアードの時もこんな事が有ったんだっけか……どうしようか。本当、どうすればいいんだろう。

途方に暮れる。さすがに今回はストラで治療しても意味はない。力付くが出来ない以上、離すのを待つしかない。とりあえず、抱きしめられてもエイナが苦しくないように立ち位置を変える。それからエイナは抵抗を失くしたユーリにしがみ付いたまましばらく泣き続けた。その結果ユーリの服は涙や何やらでぐしゃぐしゃになった。

こっちが泣きそうだ。

「……」

「はあ」

「……」

「黙っててて進まないんだが」

「だって」

「だっても何もあるか、というか怖い夢見たってなんだ。子供かお前は！」

落ち着いた後、エイナはようやくユーリを開放した。さすがに女性に長時間密着しているときつい。こっちも男なのだ。正直色々と勘弁してほしい。誰にも見られなかったのがせめてもの救いか。忘れよう。

そして、落ち着いたエイナは泣き過ぎで声が枯れてしまい、水分を補給させる事にした。そしてその後に改めて何があったのかを聞いてみると悪夢を見た、という素晴らしい意見が返ってきた。やってられない。

「だって…怖かったんだから仕方ないじゃない！」

「そう言われてもな」

「……」

「はあ、一応聞いておくがどんな夢だったんだ？」

「……リが……くなる夢」

「なに？」

一瞬聞き間違いかと思い、もう一度聞き返す。帰ってきた言葉は先程と同じ言葉。

「だから、ユーリが、居なくなる夢」

「……」

「あのモンスターとユーリが戦ってて、勝ったと思ったら、黒い茨に貫かれて、そして真っ黒な闇が出てきて、全部真っ黒に染まっちゃって、もう何も見えなくなって…うっ、ぐす」

エイナの言う悪夢の内容を聞くと、どうやら影の魔物との戦いで勝負には勝ったものの、ユーリが茨に刺され、その姿が変わり、全てを飲み込む存在となったという事らしい。それを聞いて少し驚愕した。

一部合ってるな。俺が貫かれた部分と俺が変わったっていう部分、あの戦闘の別の結果と言うふうに捉える事もできるか。正直、運がよかったと言えたのかもな。とはいえ本当に貫かれたなんて今のエ

イナには言えたものじゃないが。

そう考え、適当に濁して終わらせることにする。治療前に苦しみ方からして、同じ体を使うがために起こったフィードバックみたいなものかもしれない。どちらにせよ、安心させるのが先決だろう。

「どんな夢を見てもいいが、現実とごちゃ混ぜにするなよ。さすがにあの頭突きは痛かったしな」

「むぅ」

「というか、俺が居なくなるくらいでそんなに重くとらえなくても「大事だよ！！」……」

「大事、だよ……私にとっては、どんな事よりも」

エイナの言葉に掛ける言葉が見当たらず、黙り込む。顔を俯け、前髪で顔が隠れたエイナ、その表情を窺う事はできない。けれど、何を思ったのか、急にこちらを睨むように顔を上げるエイナ。無言で次の言葉を待つ。

「ユーリ、今だから言うね……私「あっ！お兄ちゃん！ここに居たんだ！」…私！「まったく、いるんならいるで返事位しなさいっての！探し回ったじゃない！」……」

一言で言うとぶち壊しである。今まで保たれてきた真面目な雰囲気がくしゃくしゃにされて不法投棄される。入ってきたリコとエンクは自分たちを探していたのか、こちらへと近づいて来る。エイナはそれを何とも言えない微妙な表情で見続ける。

「お兄ちゃん、怪我とかしてない？」

「アンタ一人でいいとこどりなんて、やってくれるじゃない！」

「お前ら起きてすぐなんだから少し落ち着け」

直ぐに形成されるいつもの雰囲気、それをしばらく恨みがましく見ていたエイナだったが、溜息を一つはくと、苦笑いをし、自分もその会話に混ざる。

言葉は言えないまま、けれど、彼と共に居られる今がある事に幸せを覚えながら。その声をその言葉を忘れないように記憶していく。今度はあんな夢を見ないように、見てもすぐに抜け出せるように。彼を失わないように。

とりあえず三人と会話をした後、大事をとって休ませることにする。エンクが渋っていたが、何とか納得してもらう事に成功する。そして、外に戻った時、ドリトルが装置の端末をいじっている所に遭遇する。

「どうだ？まだかかりそうか？」

『いえ、もうすぐ終わりますね、もうどれほどもかからないと思います』

「そうか」

治療が終了した後、もう一度リゼルドと話してみて、同行できないなら仕方ないが諦めよう。もし可能なら問題はないが。この案にはこちらの情報が伝わるのを遅らすという意図もある。既に大まかには伝わっているだろうが、ここで起きた事はまだ伝わっていない筈だ。それならば少しでも伝わるのを遅らせた方がいい。

これから会うであろう人物は色々と曰くが付きまとっているのだから。慎重に行くに越した事は無い。もう既に自分の知識は参考程度にしかならないのだから。

「できる事なんてたかが知れてるし、な」

そう思いながらリゼルドを修理している装置に目をやる。音こそ防音ガラスで聞こえないものの、中ではめまぐるしく機械が動作を繰り返している。その上では赤いランプが明滅している。

その赤い色を見て、影の魔物の核となっていた女性を思い出す。果たして、本当に開放できたのか、もしそうならどこにいるのか。仮にできていたとしても向こうに見つかる前に此方が見つける必要がある。そうでないとまた同じことの繰り返しになるかもしれない。

「さて、これからはもっと忙しくなるな、ゆっくりとしていたいんだけどな」

かなわないとは知りつつも、そんな事をつぶやく。もうすぐ、黒い機械兵士が修復され、その姿を見せるだろう。その時、どう交渉しようかを考える。もう、今ある事を一つづつ終わらせていくよりないのだから。

常夜の石の中では、外の様子を見ていた三人が色々と女同士の会話に花を咲かせていた。常夜の石の中にいる方の人物、この場合、エイナの許可があればリコやエンクでも外の様子がうかがえるようになっている。

この事に気付いたのはまったくの偶然で、先程リコとエンクが外の様子が知りたいと言い始め、どうにかできないか色々考えていた所、急に外の様子が二人にも把握できるようになった。

無論エイナが許可しなければ見えないので、リモコンをこっちが常に握っていると思えばいいだろう。ちなみに、エイナが表に出ているときは当然ユーリがその権利を持つ。

「というか、あの女は誰？」

「知らないよ、私だって初めて見るんだし、エイナお姉ちゃん、何か知らない？」

「……私も知らない、初めて見る人だよ」

「え？けど、お姉ちゃんってユーリお兄ちゃんと同じ記憶しかないんじゃなかったっけ？」

「その筈、なんだけど……」

「とりあえず、アイツは今度会ったら丸焼きにしてやりましょうか」

「ちょっと！エンク、放電しないで！危ないから！！」

「え、あ！ごめんごめん、つい」

「もう！びっくりするじゃないの」

「だからごめんって」

「あ！二人ともお兄ちゃんが近づいていくよ！」

「「！！」」

外に行動にいちいち過剰に反応している3人。傍から見ていると非常に面白い。めまぐるしく変わる表情と感情が手に取るようにわかる。誰にせよ顔に出やすい性格なので当然だが。ちなみに、一番顔に出にくいのはこの中ではリコだったりする。他の二人は良くも悪くも直情傾向にある。年長者の威厳はこの時点であんまり無い。

「何か話してる！えっと」

「疲れたんなら少し休めるようにするけど大丈夫か？…だって、仲良いんだ、初対面だと思うんだけど、なぁ」

「エイナ？目が怖いんだけど……それにその低い声出すの止めて、なんか怖い」

「えぇ？」

「笑顔でこっち見ないで！なんか怖いから！」

「二人とも気が散るからちょっと黙ってて！」

割と混沌とした雰囲気が広がっている。女性三人寄れば混沌と化す。収拾がつかない。この会話はこの後もユーリを起点に続くが、とうの本人はまったく知らない。知らない方が幸せと言うのは案外身近にあったりする。

「さて、本当にいいのか？いくらこっちが言った事でも、無理に付き合う必要はないんだが」

『構ワナイ、ソレニ、噂二聞イタソノ実力ノ程ヲ見テオキタイ』

「ピアはいいのか？」

『ソノ事二関シテハ問題ナイ。此方デ話ハ付ケテオク。元々ぴあダケナラバ、転移ヲ繰リ返セバ、安全二あれすぱノ街二戻ル事モ十分二可能ダ』

「それならいいが、もし危険と思うなら……」

『此方ノ独自ノ判断デ同行スルノダ、気二止ム必要ハナイ』

リゼルドが完治した後、改めて同行する事を頼んだところ、自身の状態をチェックしたリゼルドの口から、二つ返事で了承がとれた。渋って来るものと思っていたユーリからしてみれば、予想外であり、

なんだか釈然としない展開となった。喜べる事態なのだが、逆に勘ぐってしまう。なにせ、ここまですんなりいくと疑問の一つくらいは出てくる。

理由としてはドリトルの修復機能が思った以上に有能で、武装のほとんどが使用可能になった事。それに、ユヅキが認めたという人物の把握、そして、戦闘に開ける自身のモーションの微調整も兼ねているらしい。こういうのは実戦で調整しているらしい。危険じゃないかとも思うが、以前からこうやっていたと言われれば何も言えない。そんな理由もあって、リゼルドは同行を了承するに至ったのだ。

「そこまで言うならこっちとしてはいう事は無い、な」

『ナラバ、あれすぱノ街マデノ道中、ヨロシク頼ム、ゆーり殿』

「ああ、こちらこそよろしくな、リゼルド」

『ウム』

「それじゃあ、ピアにも言っておかないとな」

『アア、少シ時間ヲモラオウ……ぴあ』

少しの時間を置いてピアとの通信が繋がる。ピアの声には若干の驚きがあった。

『おじちゃん？どうかしたの？』

『ワタシハコレヨリ、ゆーり殿ト共二あれすぱノ街ヘト移動スル事

二シタ』

『えっと、どういう事？』

『ゆーり殿ノ力ニヨリ、ワタシハ現状二置ケル最大火力及ビ戦闘機動ヲ行ウ事ガ可能トナッタ、コレニヨリココカラ徒歩ニテ帰還スル選択モトル事ガ出来ル』

『それじゃあ、ピアも一緒に！』

『ソレハ承諾デキナイ。ぴあニハ戦闘二置ケル自衛手段ガ存在シナイ』

『でも！』

『ぴあ』

『う～～お兄ちゃんが守ってくれるもん！！』

『ム？』

『お兄ちゃんだったらいくら敵が強くてもピアを守ってくれるもん！だってユヅキお姉ちゃんが認めるくらい強いし、リゼルドおじちゃんが苦戦した敵だって倒したんだよ！』

『ぴあ、それは……』

『だって、もう待つのは嫌だもん。ピアだってできる事はあるもん』

通信先から聞こえる声は震えていて、どういう状況なのかは察し

が付く。リゼルドは今までピアがずっと戦場に行く者が帰ってくるのを待つばかりだった。不安だっただろう。怖かっただろう。それがここにきて爆発したのだろう。誰が悪いわけでもない。けれど、何時かは訪れる状況であることには変わりない。ただそれが今だっただけ。

『ぴあ、キット何時カズット共二居ラレル時ガ来ル。ソレマデノ間デイイ。モウ少シダケ我慢シテモラエナイダロウカ』

『でも……お兄ちゃん』

ピアの涙混じりの声が聞こえる。リゼルドは少し距離を置いて話しているが、既にこちらまで届く音量となっている。溜息を一つ。別にピアは戻っても良かった、

恐らくピアならば詳細な説明はできないだろう。元々純真無垢な少女なのだ。詳しい話と言うのは少し酷な話と言える。けれど、今の状況で否定するのもためらわれる。けれど、肯定した所で必ず守りきるなどと言えるわけがない。そこまで楽観はしていない。だから……

「ピア」

断るのが正解なのだ、けれど、その声が、その思いが。

『お兄ちゃん……やっぱり、駄目だよね、私なんかじゃ役立たずだもんね』

今常夜の石の中で休んでいるであろう、共に歩んでいる少女と重なった、その瞬間ユーリの中で答えは決まった。

「……そうだな」

『！……っす、ぐす』

その言葉に通信機から泣き声が聞こえる。これには流石にリゼルドも顔色を変える。

『ゆーり殿！』

「けどさ」

静かに、ゆっくりと、けれど、力強く言葉を続ける。

『？』

「その意気込みは買ってやる。怖いだろうけど、怪我するかもしれないけど、それでも、前へ進むっていうんなら、俺が全力で守り通してやる。」

必ずとか、絶対なんて無責任な言葉はつかえない。だから自分の全てを持って守り通す。それが自分にできる精一杯。

『……お兄ちゃん』

『……』

「誰にも反論なんてさせやしない、ピアが自分で選んで決めた事だ。だったら俺はそれを尊重したい。笑いやしない、いい加減な対応もしない。だから素直に答えて欲しい。ピア……前へ進む勇気がある

か？」

それは最後通告であり、最終確認、我ながらくどいとは思うが、やはり本人の口からきいておきたい。感情に任せた一言では無く、全てを冷静に受け止めたうえでの答えを。そして、通信機の向こうで小さな、けれど、力強い声が響いてくる。そこには確かな決意があった。

『ピアだってきっと何かできる事が有るから、待っているのはもう嫌だから！誰かが傷ついていくのを黙って見ていたくないから！だから、お兄ちゃん！ピアを連れて行って下さい！』

「……判った。それじゃ、改めてよろしくなピア」

『！……うん！！』

『……ゆーり殿』

「悪いな、リゼルド。こっちで勝手に決めちまって、けど、どうにも俺は甘いらしい」

『イヤ、礼ヲ言ウベキナノダロウナ。イズレコウナッテイタダロウ。ナラバぴあノ背ヲ押シテモラッタノダ。責メルツモリナドハ無イ、本来ナラバワタシ達ガ対処シナケレバナラナイ問題ダッタノダカラ』

「そう言ってくれると助かるよ」

『デハ、ぴあト合流シヨウ』

「そうだな、出口の方に行くのか？」

『ソウダ、ワタシ達ニトッテハ入口ニアタルガ』

そう言い、二人は森の出口へと向かい歩を進める。そしてしばらく進むと森が開け、広い場所へとたどり着く。そしてそこにはそわそわとせわしなく飛び回る天使がいた。

『ぴあ』

「！リゼルドおじちゃん！お兄ちゃんも！」

その声に元気よくリゼルドに返事を返し、ゆーりの胸へと飛び込んでくるピア。

「えへへ」

「ああ、さっきぶりだなピア」

元々ピアがどういう容姿をしていて、どんな性格なのかも知っているユーリからすれば特に驚く必要性はない。問題なく言葉を返す。

「ありがとう、お兄ちゃん」

「どうした？急に」

「ピアが一緒に行くのを許可してくれて、あのままだったらきっと、ピアはずっと待ってるだけだったから」

「俺はピアの意見を尊重しただけだ。特に何もしてないよ。進むと決めたのはピアだ」

「うん！これからよろしくお願いします！ユーリお兄ちゃん！」

「ああ」

とりあえず、短期間だけだが同行者が増えた。白夜の一員にして機械兵士リゼルド、同じく白夜の一員にして金色の天使の少女ピア、この二人と共にアレスパの街を目指す。

～常夜の石の中にて～

「……結局ピアって子は天使だったんだ、私天使って初めて見たかな」

へぇ～と珍しい物を見たというふうに気軽に見ているエンク、けれど、その顔には汗が流れている。その理由は隣の二人にある。

「……また、増えた、どうしよう。いい加減ユーリを閉じ込めて、私がずっと表に、ふ、フフフ」

「……エイナ、何ぶつぶつ言ってんの？」

「え？なんでもないなんでもない、そう……なんでも」

「お兄ちゃん、私のお兄ちゃんなのに！」

暗い表情でぶつぶつと何かを呪詛の様に呟くエイナ。ピアに嫉妬全開で目を向けているリコ。溜息をつきながら、それを見ていたエンクはその原因である青年へと目を向ける。

「本当、見てて飽きないっていうか、よくもまあこんな事態になったもんね。けど、アイツなりに色々考えてはいるのね」

その声には呆れと感心が混じっていた。自分は決着をつけたいだけ、だからこんな所を見ても特に何も思わない、思わない、筈。だから気楽に気ままに見ている。けれど、どこか釈然としない。それをエンクは気の所為と切って捨てる。

「それにしても、私達、ずっと見てたけど、休まなくてもいいのかしらね？」

そんな疑問をつぶやいてみた。結論＝ただ疲れただけだったりする。何のための休息なのやら。

～とある遺跡内部～

「ようやく、向こうの眼を掻い潜れる所まで来る事が出来ました。でも、まだ警戒されている。繋がりが消えたのは既に向こうに知れ渡っているはず」

推測ではあるが間違ってはいない筈、これは確実と言い切れる。

「けれど、まだ私がこうやって無事であるとはまだ知られていない筈、今は力を取り戻すのが先決、せめて、一矢報いる力を、あの青年を助けるために、恩は返さなければいけません。唯ゆっくりと死にゆく筈だった私に、再び生を与えてくれた彼に、そして、この世界のために」

誰もまわりにおらず、静かな遺跡内部でそんな声が響く。その女性は数刻前にユーリが命を賭して救った女性、女性はあの後、何とかこの遺跡まで辿り着き、傷つき、疲れ切った体を休める場所を確保する事が出来た。これからは、この世界を蝕む根源を滅ぼすための、激しい戦いとなるだろう。

そのためにはぜひあの青年に協力が欲しい。そのためにはまず青年に侵食したであろう黒い光を取り除く必要がある。けれど、半端な状態で行けば今度こそ取り込まれ、消滅するだろう。だからこそ、万全を期さなければいけない。けれど、急がなくてはいけない。青年が取り込まれては既に手遅れとなるのだ。

「力が戻った後はまずは……あの方を探せば、確かあの方は分身体を作られていたはず、まずはあの方と接触しないと……ノヴァ様」

その口から紡がれた人物は、白い衣を纏った少年、ノヴァ、エイナが探している人物。今ここに、誰も知らない未来へと挑む者がまた一人その心に火を灯す。

動き出した旅路　小さな勇気（後書き）

さて、今回ストーリー的にはほぼ進んでません。会話で終わってます。そして主人公弱体化、ストラは既に紙切れ状態です。ただし召喚獣は強化。後、ピアとリゼルドが仮入部しました。魔改造？しませんよ。したら後々困ると思いますが。主人公が。やってみたいですけど。

エイナ、微ヤンデレ化、一応これも意味はあります。作者はこの事に関しては案外マジで計画してます。さて、みなさんはこれの行きつく展開は読めるでしょうか？正確に読めてもびっくりですが。

その人はきっと作者と似たようなタイプになるのかな？きっと喜んでくれる人はいない。誰得なんだか。

最後の女性については特に意味ないです。なんとなく書いてみました。けど何かそれっぽいエピソードは考えようかなと思います。

当初のストーリーは既に星の彼方へ消え去ってしまって独り歩きしてます。どこに辿り着くか若干作者も混乱気味です。あと外伝は４割くらい完成してます。とりあえず、過去作の修正をしながらちびちびとかいていきます。

素直な思い　歪んだ想い（前書き）

お待たせしました。次話投稿しました。今回はあんまりストーリー的には進んでないです。いつものことかもしれませんが、おかしいな。もう次の街に入ってるところなんだけど。

キャラが増えて書く方は大変です。書いてて楽しいのは有りますが、時折どんな口調だったのか忘れます。やばいです。

素直な思い　歪んだ想い

熱砂が吹き荒れ、広大な土地を吹き抜ける。ここは今までとは違い、大量の砂に覆われている。この場所は《砂礫の荒野》と、呼ばれる広大な砂漠地帯。

太古に生きていたであろう生物の骨がそこらかしこに存在し、砂嵐が吹き荒れる無人の荒野、そこに踏み込んだ二人と二体の声が微かに風以外の音を作り出す。

「う～～～！！暑いよう……」

『ぴあ、無理ヲスルナ。急イデモ体力ヲ消耗スルダケダ』

『ピア様、私の武装から冷風を吹かせますので、どうぞ此方に』

「ほんとう！？」

『はい、これ以上、水分を失うのは脱水症状を引き起こし、状況を悪化させますので』

「……まあ、砂漠なんて早々歩いたりしないしな」

ユーリがピアを見ながら呟く。連れて行くと決めたのはいいが、その後、直ぐに通る場所がここだと思いだし、内心しまったと思った。案の定、子供であり、体力の少ないピアには相当酷な環境になってしまった。

言い出した手前、来るなともいえず、ため息が漏れたのは少し前、そして、迷いの森を抜け、この砂礫の荒野に出たのだ。時間にして数時間程、方向はリゼルドが記憶しているので何の問題も無い。問題はピアの体力が持たないという事。

やっぱり、このマップも知ってる物より数倍広いな。戦いじゃなくて、周囲の環境に苦しめられるとはな。こういう持久力とかが求められるものはやはり辛いものがあるな。

思考の縁でそう思う。とはいえ、思った所でこの猛暑をどうにかできるわけでもなく、空から降り注ぐ熱に視線を向けるのみ。その傍らピアに水筒を渡しに近づく。既に荒い息をついているピアに近寄ると、ドリトルが起こす冷風でなんとか涼をとっているピアが此方に目を向ける。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「とりあえず、これでも飲んで落ち着け」

「あ！有難う！！お兄ちゃん！」

「悪いなドリトル、世話をかける」

『いえいえ、この程度問題などありませんよ、お気になさらないで下さい』

「……そうか」

『はい』

ピアが水を一気に飲もうとしていたので、ゆっくり飲むように促しながらドリトルと話をする。ドリトルは自身のドリルをパラソルの様に開き、ピアを日陰に隠す。

『これなら少しはすごしやすいかと』

「うん！すごく涼しいよ！有難う！ドリトルお姉ちゃん！！」

『お気に召したのなら嬉しい限りです』

「……一応ドリトルには来てもらってよかったな。いなかったらもっと時間がかかってたかもな」

本来、砂漠を移動するのなら夜間に移動した方が効率はいい。けれど、この世界で天候が変わるという事は無い。この空にも光は降り注いでいる物の、大本の太陽は無い。光源はなんだと言われれば空としか言えない。恐らく空を飛んでそこまで行ったとしても何もないだろう。

天候が変わらないのであれば出来る限り早く移動した方がいい。無論、可能な範囲で、ではあるが。それに、ここにはモンスターが生息しているのだから。しかもこの過酷な環境ででも生き残れるようなタフなやつらが。

『ゆーり殿！』

「考えた側から戦闘に入るとか、本当に愉快な奴らだな。少しは引きこもれと言うに。行くぞ、リゼルド！」

『了解シタ！！』

土台無理な文句を言いながら、背中に背負った朱砂を引き抜くユーリ。そして、自身の武装を展開するリゼルド。その手にはサブマシンガンが握られていた。

砂の中から現れたモンスターは、この過酷な環境の所為か骨格が変形し、硬化した猪型モンスター、デザガゼール。その背にファンを装着したそれぞれ赤と青の浮遊機械、フロットオムとフロットファム。それが砂塵と共にそれぞれ４０体ほど現れる。それを見た瞬間ピアが傍にいたドリトルの袖を握る。それを庇うように抱きしめ、背後から複数のドリルを装填したバックパックが飛び出す。

『マスター、こちらはピア様を連れての戦闘になりますので万が一のために増援を進言します』

「ああ、俺も同意見だ。来い！ライザー！ポワソ！」

砂漠という事もあり、呼び出す対象は、空を浮遊している二体を選ぶ。その呼び声と共に光が自身の従者を、異界の仲間を呼び寄せる。

『……私が必要？』

『さ～て、行きますよぉ！相手は誰ですかぁって、多っ！！』

呼び出された片方は、砂漠であるという事を気にも留めないかのように無表情で口数も少なく、全身に赤い装甲を装着した状態で、無感情に正面に目を向ける金髪の少女、こちらがライザーだろう。もう片方は出てくるなり、手に持った杖を勢いよく振り回しバットみたいに素振りする少女、黒を基調としたゴシック調のメイド服み

たいなものに身を包みながら、やる気満々に目の前を見て、その瞬間ノリ突込みを行う。個人的には割と意外だが、これがポワソだろう。色々と予想外だ。

「また、個性的と言うか、なんというか、っていうか、男の召喚獣っていないのか？」

それを見ながら、今まで敢えて考えていなかった疑問を口にする。今までの召喚獣はすべて女性、もしくは女性人格、そして、それ以外の仲間はリゼルドを除いて女性ばかり、流石にこれはどうかと思う。なんであれ、男性の旅人と言うのはリゼルドとベクサーくらいしか見てないような気がする。やはり女性の方が強いと言うのはどこの世界でも共通事項なのだろうか。なんだか、少しやるせない。

「気にしたら負けか。とりあえず指示だけはしとかないとな」

そう思い、召喚した二人の元へと近づいていく。向こうもそれに気が付いたようで、此方に視線を向ける。

『……マスター』

『あぁ！主様！！私、頑張りますからね！』

「ああ、頑張るのはいいがこっちの話を聞いてからにしてくれ」

『良いですよぉ！何でも言ってくださいな！なんでもいう事聞きますよ！』

『……言って』

「本当に大丈夫か？……あっちにいる女の子を、ピアっていうんだが、守ってやってくれないか？戦闘はこっちが前衛に出るからさ。後衛を頼みたい」

『え～後衛！？……せっかくいいところ見せようと思ったのに」

『……わかった、行く』

『ち、ちょっと！スカート引っ張らないで！』

ライザーがポワソを引っ張りながらピアの方へ向かう。その背を見つめるユーリはなんとなく溜息をついた。意味はない。きっと。

そのまま、銃でモンスターを足止めしていたリゼルドの元へ向かう。流石に数が数なので、足止めもすでに限界になっている。だが、リゼルド本体にはまだ傷は無い。横に並び剣を軽く振る。

「……さて、と、またせたな。リゼルド、行けるか？」

『無論、コノ区域二足ヲ踏ミ入レルノハ、慣レテイル』

「それは、たのもしい、な！」

お互いに同時に足を踏み出し、リゼルドは銃を放ち、ユーリは朱砂の能力で周囲の砂鉄をかき集め、弾丸として射出する。その弾雨の中、モンスターが悲鳴すらかき消され吹き飛ばされる。けれど、この荒野に置いて、この程度の衝撃など日常茶飯事、それは贔屓目に見ても、足止めにしかなりはしない。次々と起き上がるモンスター、けれど目の前の敵は手を休めず、次の手を繰り出す。

「まだまだ行くぜ！」

その声と共に、剣を炎が包みこみ、縄となって周囲へと広がる。そして、それはモンスターを縛るための力となる。

『敵性戦力ノ行動範囲ガ急速二縮小、グレネード投下開始！』

「更に！これでどうだ！」

動きを封じたモンスター達の頭上にグレネードが投げ込まれ、さらにその上から砂鉄が円を描いて集まっていく。グレネードはモンスターの傍に落ちた瞬間、周りを飲み込み爆発する。その轟音は衝撃波となり、周りに拡散する。それと同時に詰め込まれた破片が撒き散らされ、モンスターの皮膚へと突き刺さっていく。

そして、その威力に体勢を崩したまま、頭上からの黒き征服者が飛来する。集まり塊と化した砂鉄は既にその重量を狂気の沙汰へと持ち上げている。その重量を惜しげも無く眼下に振り下ろす。今自身のダメージに苦しんでいるであろうモンスターにこれを感知するものはいない。既に命を脅かす攻撃を与えられた直後なのだ。それも、動きを封じられ、体勢を崩している。こんな状況で気付いたとしても何が出来たのだろう。

そして、その時は訪れる。重力に沿い、黒い幕が落ちる。それは範囲内の敵の圧殺を意味する。全てが黒に染まり、暴風と共に敵を踏み潰す。逃げれた者はいない、ここに、現れたモンスターの三分の一はその息の根を止める事となる。けれど、これで終わりではない。まだ、今倒した以上の敵が此方へ向かっている。当然二人ではその全てを相手にはできず、取りこぼしも出てくる。

「さて、そっちは任せたぞ。三人共！」

その方向を軽く一瞥し、直ぐに目の前の前の敵へと目を戻す。自分は目の前の敵を倒し、向こうへ行く分を出来る限り減らすまで。それに、あの三人が本当に強化されているのかどうなのかを確認することのできるいい機会でもある。

向かって来るモンスターを見据えながら、ライザーは自身の背についている剣の柄を握る。そして、それを引き抜く……けれどその先に刃は無い。持ち手のみの剣。それは剣とは言えない。けれど、それは確かに剣なのだ。光が走る。それは柄についたレンズから発生している。その光は一直線に伸び、光の剣を形成する。それを静かに構え、モンスターへと目を向ける。

『……いつでも……来い』

その隣では杖をぶんぶん振り回しながら不敵に笑みを浮かべているポワソがいた。

『ふっふっふ！私の有能さを主様に見せつけるチャンス！そして、好感度アップ！！こ、れ、は、い、け、る！！』

『……煩い』

『アイタッ！……酷いじゃない、別に何もしてないのに……』

『……無駄話、しない』

『むぅ～いいですよ～だ！手柄は貰いますから。これで主様をこっちに振り向かせる機会が！早速我が世の春が！』

『……口閉じて』

『アイタァ！！』

「……大丈夫かなぁ」

ピアは後ろでドリトルと共にそれを見ながら妙に不安を感じていた。戦闘もそうだが、この二人で大丈夫なのかと。特にポワソ。今までの会話を見る限り、その気持ちも当然と言える。特にポワソ。そんな感想はつゆ知らず、テンションを上げていくポワソとどんどん無口になっていくライザー。対照的だが、何気にビームサーベルの光がどんどん強くなっている、いずれ、ポワソはどこかが焦げる事になるだろう。

『……用意して』

『もう！さっきから邪魔ばっかりするからでしょ！……まったく、いくら私と主様の関係に嫉妬しても、ねぇ？ってわぁひゃおう！！』

『……次は刺す』

唐突につきだされた斬撃をかろうじでよけながら、ポワソはそれを行ったライザーに恨みがましげな視線を向ける。その本人は至って涼しげな顔をしている。

『むぅ、わかりましたよぉ。準備すればいいんでしょ！すれば！といっても、もういつでもいいのだけれど』

『……来る』

『さて、私の輝かしい未来の踏み台になって貰いましょうかねぇ！錆びた鉄くずと、干からびた獣達諸君！』

杖を構え、モンスターの方へと視線を向ける。既に近くまでモンスターが迫ってきている。それを不敵な笑みで迎え撃つポワソと、無表情で剣を持ったまま見るライザー。お互いに、示し合わせたかのように同時に走り出す。

『さぁ、どんな死に方がお望みで？切って刻んですり潰す。燃やして、爆ぜて絞め落とす！どれでもお好きなリクエストをどうぞ！おすすめは私の魔法での、秒変わりの地獄めぐりコースですけどねぇ！』

『……死にたいなら、来るといい』

お互いに物騒な事を口にしながらモンスターに突っ込んでいく。

『行きますよぉ！それっ！』

杖を振る、その先から星形の光が飛び出す。それはモンスターに向けて放射状に飛んでいく。そして、当たった先から爆発していく。それは絨毯爆撃もかくやと言った勢いで行われる。その勢いでモンスターの進撃は止まろどころか、押し返していく。

『まだまだっ！こんなんじゃ終わりませんよぉ！』

次に杖に光が集まり、光の矢が構成される。そして、杖を上空に向け、撃ちだす。その光の矢は放物線を描き、空中からモンスターに迫る教団となる。既にその連射力と範囲は光の弾幕と呼べるもの、その圧倒的な火力にモンスターは近づくどころか、その場で耐える事すら許されない。

『グルァアアア！！』

『ざまぁってな感じですよ！まぁ、私相手に正面から突っ込んで来るなんて事をした、頭の足らない無知無謀無茶で無力な有象無象は、お引き取りしちゃってくださいな！』

更に杖から一条の閃光が迸り、残ったモンスターを消し飛ばす。巨大な光は勢いをまし、後ろで見ていたピアの視界を覆い尽くす。その威力は砂漠の砂ごと押し返し、巨大な砂嵐を作り出す。それに巻き込まれ、モンスターが砂に埋められる。そして、それ以降の行動を強制的に終了させられる。

『うんうん！やっぱり弾幕はパワーですね！清々します』

清々しい笑みと共に杖を振り上げモンスターが埋まっているであろう場所をみる。既に大量の砂に埋もれ、脱出不可能であろうモンスターのために黙祷、０，０００１秒ほど。そして記憶から抹消する。

『さて、今ので主様の好感度のアップが！俺の嫁宣言も近いのでは！？きゃ～言っちゃいましたぁ！！』

杖をぶんぶん振り回しながら、戦いそっちのけで自分の世界に入

っているポワソ。だが、それを突っ込む者はいない。なぜならポワソの周辺にいたであろう者は既に倒されている。そして、仮にここで彼女を襲おうものなら、思考を妨害されたことでさっき以上に悲惨なことになるのは目に見えている。ユーリならまた違うだろうが。

その少し向こうで砂塵が上がる。そこには赤い軌跡が縦横無尽に、舞っていた。剣を持ち、モンスターの一撃を躱しカウンターで切り落としていくライザーは、ポワソとは対照的に接近戦で戦っている。

『……』

そこには油断も躊躇も何もない。まるで機械作業のように正確に予測演算をした内容に沿って体を動かし、確実に一体ずつ仕留めていく。そして、モンスターが接近戦が分が悪いと感じたのか距離を取る。距離にして１０メートルほど。剣では届かない、モンスターもきっと、そう思ったはずだ。けれど、現実は予測を超える。

『……』

無言で剣を振り切る。その斬撃は光を放ち、刀身が伸びその距離をあっという間に詰める。そして、無抵抗になっていたモンスターの体を苦もなく切り捨てていく。そして、開いた手をモンスターの方へとかざすと、即座に砲身へと変わる。手が腕にしまわれ、腕そのものが砲身に変わる。

『……そこも、私の距離』

その砲身から巨大なエネルギーが撃ちだされる。その一撃は相当の速度を持ち、防御の姿勢を取る前にその距離を詰め直撃する。その威力たるや一撃でモンスターを破壊し、その後ろにいた数匹のモ

ンスターを真っ直ぐ貫通する程だ。そして、そのバスターとサーベルを駆使し、あっさりとモンスターを殲滅する。

『……』

何も口にせずに、走ってきた道を戻る。ユーリの言われたとおりにピアの護衛をするためだ。

『……でも、必要なさそう』

静かに呟いたその視線の先には、吹き飛ばされるモンスターの姿。獣はそのドリルの餌食になり、機械ならば即座に分解して、必要なパーツだけ回収して行く。その行動を行っているのはドリトル。

『さぁて、私の射程に入ってくる以上は、それ相応の被害を覚悟して頂きます。……一体たりともこの先へはお通しできません』

背中からアームをいくつも出し、その先端には様々なユニットがついている。そのうちの一つはドリル。その威力でもって接近してきたモンスターを弾き飛ばし、距離が開いた瞬間に違うパーツがエネルギーをその砲身から放つ。その一撃は正確にモンスターに当たり、その動きを確実に止めその生命力を奪う。

『聞き分けが悪い方々は、少しながら苦しんでいただきます』

アームが集い、彼女の正面にそれぞれのパーツを組み合わせた巨大な砲身を作り出す。粒子がその周囲から放射され、光が溢れる。そこから放たれるは、砂漠に大きな穴を穿つような強火力。その名は荷電粒子砲。持続して放たれる光の本流は全てを押し流す。そしてそれを撃ちきった時、此方に来ていたモンスターは既に全ていな

くなっていた。

『これで、掃除も終了、ですね』

武装を自身の内に戻しながら呟く。結局彼女は戦うためにピアから距離を放していたが、それだけだ。周囲のアームを動かし、敵を消し去ったが、彼女本人は一歩もその位置から動いてはいない。アームを動かしていただけだ。

「へぇ、流石に問題なかったな。とはいえ、思った以上に強くなってるな」

今までの戦闘を横目で見ながらそう呟く。明らかに強くなっている。しかも予想以上に。もう同じ種族同士で戦ったら勝ち目がないであろう程に。剣を振るい、最後のモンスターを切り裂いて剣を鞘にしまう。剣に付着した血は炎で焼き払う。もうここには敵はいない。けれど、ユーリは気付く。遠くから何かがこっちへ来ているという事を。

「ナニカが複数こっちへ来てるな。さて、どうするか。迎え撃つとしてもピアがいる以上、どうしても攻め辛い部分はある。隠れた方がいいか。しかもこの気配には覚えがあるし、な」

そう思い、周りへ視線を巡らす。既にリゼルドと召喚獣達は全員気付いているらしい。それなら話が速いと思い、口を開く。

「とりあえず、ここはやり過ごそう。いきなり戦闘に発展させる必要はないしな」

『アア、賛成ダ』

『そうおっしゃるならそれで構いません』

『……好きにして』

『うぅ、アイツらの所為で、主様の気があいつ等に逸れた、許すまじ！』

ドリトルとライザーが武装を展開し、巨大な岩に見せかけた即席シェルターを組み立てる。ポワソだけが渋っていたが、とりあえず時間も無いので、その手をつかんで引っ張っていく。

『え！えぇ！こんな所でサブイベントが！これが、この選択が正解だったんですね！私感激です！』

「？」

後ろで何か言っていたが、特にこっちを見てなかったのでひとりごとかと思い、放置する。その後ろでは内心狂喜乱舞する魔法使いが頬を染め、掴んでいる手を見てはにやにやしていたが。すぐさま隠れるように気配遮断の結界をポワソに張ってもらい、全員が隠れる。

「さて、これでどうにかなるか」

『センサー二捉エタ反応ガ間モナクヤッテクル』

『……前のと一緒』

『ライザーから頂いたデータに符合するパターンあり！』

『さ～て、なにがでますかねぇ』

それぞれが放つ言葉を聞きながら此処へ来るものを見る。正確にはここに来る者“達”だが。その姿が鮮明になるにつれ、面倒な事になったと溜息をつく。砂塵の中から現れたその正体は……

『識別名、フェザードラゴン。その数は七体です！』

そう、以前戦ったフェザードラゴン。それが七体。考えただけで厄介なのだが、その姿がさらにややこしい問題にする。

『……姿が違う』

ライザーが言った通り、その姿は以前戦った時のフェザードラゴンとは全く違っている。砂漠と言う環境に適応するためか、両手両足は肥大化し、尻尾と見間違うほどの長さとなっている。巨大な砂嵐によって飛んできた樹木がその巨体にぶつかる。避けるしぐさもせずに直撃したそれは、全くダメージを与える事無く砕けて散っていく。

見た感じその鱗の堅牢さは前のまま、下手をすれば前以上となっているかもしれない。なにせ、住む環境としてはこちらの方が段違いに過酷なのだ。より強く進化していても全く不思議では無い。

「これは、見つかったら割と面倒なことになるな」

４足歩行をしながら巨大なフェザードラゴンが姿を見せる。その数はドリトルが告げた通り七体ほど。最初の時から比べるとこちらも強くなってはいるが、やはり好んで戦いあう気は無い。だからこ

そ、見つからずに済むのが最良なのだが。

「見つかった時の事もきちんと想定しておかないとな」

そう言って、もし見つかった時の戦闘も考慮するユーリ。不意の遭遇ではあるものの、対処を考える時間はある。故に戦うとしてどう動くかを思考する。

『ジャシャアアア……』

「ふぇっ」

『この中にいる限り、外部へは匂いも声も何も通しません。安心してくださいピア様』

「で、でも、こっち見てるよ！こっちになんか近づいてきてるよ！！」

『気付かれてはいません。もしそうであるのなら既に攻撃してきているはずです』

『……見敵必殺』

『それにしても、さっさと離れればいいのに……頭まで砂でいっぱいになってるんですかねぇ？』

それぞれが意見を言いながらモニターを見ている。今、このシェルターの周りには七体のフェザードラゴンが獲物を探してうろついている。あるモノは顔を上げ、鼻をひくつかせている。無論、匂いは嗅ぎ取れては無いだろう。あるモノは周囲に目をやり、何か動く

ものがないかを探している。中にいる以上、外からは大岩にしか見えないだろう。

「あっ！どこかに行くよ！」

しばらくそうやって探索をしていたが、諦めたのか。群れのまま去っていくドラゴン。それを見送り、去っていった方向を見る。だが、その向こう、その奥に何か引っかかるモノを覚えた。

今のは……もしかすると……

内心思考を巡らせたまま、その方角を睨みつけるユーリ。けれど今の状況を考え頭を振る。

「……今は無理、だな。先を急いだ方がいいな」

「お兄ちゃん？」

「ああ、気にしないでいい、何でもない」

ピアがそれに気付き心配そうにユーリを見上げる。それに気にしないように笑顔で告げる。先程微かに感じた黒い感覚をとりあえず後回しにし、前に進むことにする。仮にどうにかするにしても一旦街までついてからになるだろう。それから探せばいい。

「それじゃ、外に出てもいい？」

「ああ、もう特に何もいないみたいだしな。それと悪いけど、少しの間頑張ってもらえるか？」

視線を召喚獣達に向け確認する。その意味を正確に把握した召喚獣達は全員が頷き、その頼みに応える。

『それじゃ、これから私たちが護衛についていればいいんですね！……この間に主様とのフラグを！』

『……了解』

『それでは、引き続きこの状態のままという事ですね』

「ありがとうな」

その返事を聞いて、感謝の言葉を言う。渋る事も無く、即座に頷き協力してくれた事に笑みを浮かべる。

『ええ、心配しないでくださいな！私と主様が居ればどんな難関だってちょちょいのチョイですって！』

『……五月蠅い』

『いったぁ！！だから何で叩いてくんですか！！たんこぶになったらどうしてくれるんですか！』

『……静かにする』

『そんなもったいない！ぜひこの間に私の想いを存分に知らしめないと！そこらの有象無象に盗られちゃったらどうすんですか！』

『まあまあ、お二人ともピア様が吃驚されてますよ。だからとりあえずは矛を収めてはどうです？それにあまりしつこいと逆効果なの

では？』

『むぅ、それも一理ありと言えばありですね。まぁ、少し時間を置いて、ふふふ』

「……こいつら大丈夫なんだろうか。特にポワソ』

ユーリは視線を何かぶつぶつ呟いている少女に向ける。何を考えているのか、その表情はめまぐるしく変わっていく。それを見ながらこれからが少し心配になった。主に普段の溜息の量が増えそうな気がした。

簡易シェルターから出て、アレスパの街へと向かう。その途中、またモンスターに襲われたりもするが、このメンバーの前ではそれも大した障害とは成り得ない。精々幾ばくかの時間がとられると言った所か。

～常夜の石～

「ねぇ、あれって召喚獣って言うんでしょ？全員女の子なの？」

「えっ？」

「だってアイツが呼んでるのって全員女の子じゃない」

「……そういえば、そうだよね」

エンクが何気なくエイナとリコに尋ねる。それは召喚獣には女性、又はそれに類する人格しかいないのか。ユーリの召喚獣を見て疑問に思ったのだろう。そんな事を聞いてきた。

「で、でも！私たちの召喚獣って男とかいたと思うけど、私が呼ぶオロチは男性だし」

「ドリトルも男性人格だって言ってたよ」

エイナとリコがそれぞれそう言う。つまり同じ種族の召喚獣でも性別が同じとは限らない。普通に考えれば男女混合であるのが普通なのだが、ユーリに限って言えば今まで召喚したもの全てが女性なのだ。そう考えると、本人がそれを望んでいるような気さえしてくる。

「まぁ、アイツは割とそれを狙ってたりしてね」

エンクが何の気なしに言ったその言葉がエイナとリコの心を激しく揺さぶる。

「つまりお兄ちゃんは……」

「ああいうのがお好みという事かしら？」

「……ちょっと」

何かすごみを利かせた眼光をのぞかせたエイナと不安そうな顔で外の様子を探るリコ。勝手に進んだ、と言うか進めてしまった状況に、頬を引きつらせながら対応する。自分が発した一言でとある青

年が窮地に立たされている。本人が知らぬ間に。それはどうかなとも少し思ったが。

「落ち着きなさいって。別にアイツが誰と知り合おうが構わないじゃない」

「駄目！ああいうのは気が付いたら増えてたりするの！どうにかしないと……でも誓約しないとユーリが危険にさらされるし……どうしよう」

「でも、最近お兄ちゃんとあまり話してないような気がする。」

「あ～それは仕方ないじゃない。アイツはこっちでいたんだし。あの森にいる間はあんまり余裕も無かったんだし。今は休憩中だしね」

「私も外に行く！」

「止めなさいって！今は外砂漠なんだからリコじゃ倒れちゃうから」

「それじゃ私が！！」

「エイナが出ても入れ替わるだけでしょ！とりあえず今は休んどきなさい！」

エンクが矢継ぎ早に二人に突っ込む。冷静さが欠片も無い二人を相手に、内心面倒だと思いながらも対応する。このまま回復しきってないのに砂漠に出られると、直ぐに倒れてしまうかもしれないのだ。流石にこんな事で倒れられても困る。しかもその引き金を引いたのは何気に自分なのだ。後味が悪いにも程がある。

まぁ、私も見ててなんかもやもやするけど、アイツ私と戦う事忘れてないでしょうね。

ふと外の様子を見ると仲良く喋っている青年。何故か見ていて腹が立った。やはりこのままこの二人を行動させた方がいいかもとか少し思った。

「とりあえず体がきちんと休まってからにしなさい。別にアイツは逃げないんだから」

「むぅ、でも……」

「アイツだって悪気があってやってるんじゃないし、それぐらいわかってるでしょ？」

「うん……ユーリお兄ちゃん、誰にでも優しいから、でも、あの子はダメ！ユーリお兄ちゃんはリコのなんだから」

「……呼び方の話よね？他に意図なんてないわよね？」

今のリコのセリフを聞いてこの子の事が心配になってきた。この子とアイツの間にはいったい何があったのか。少し問いただした方が良さそうだ。

「それに、今はこの時しかないんだから！迷ってる暇なんかない！」

「だから落ち着きなさいって！私の話が全く意味ないじゃない！」

ヒートアップして行く二人に振り回されながらも如何にかその場に留める事に成功したエンク。余計な体力を消費した。

「はぁ、こうなったのも全部アイツの所為ね。こうなったら後でいつをシメテやらないと納得がいかないわね」

エンクはエンクでユーリに対して思う事が出来たらしい。青年は自分の知らないところで勝手に包囲網を敷かれていることに全く気付かない。良くも悪くも平常運転だったりする。是非もない。

砂漠の熱気を切り裂き、斬撃が飛ぶ。青い光を纏ったそれはモンスターへと当たり吹き飛ばす。けれど、その一撃で絶命させる事はできずにモンスターはその足で立ち上がる。それを見たユーリは内心舌打ちをする。

ったく、ここまで弱くなってるとはな。正直ストラは雑魚戦用だな。今はストラより魔晄の方が強さとしては上だな。とりあえずストラは回復用か防御用に回しておくか。

そう思うと同時に青い燐光は消え去り、灰色の光が辺りを照らす。その光が敵を照らし、モンスターはその眼を細める。

「さて、始めるか。行くぞ！」

剣を翻し、斬撃を放つ。魔力を纏った斬撃は衝撃波となり、斬撃の正面にいるモンスターに向かって待機を切り裂きながら飛んでいく。その速度はモンスターに回避行動をとらせない。瞬く間にモンスターを両断する。止まる事無く他のモンスターに肉薄し蹴り飛ば

す。その威力にモンスターが吹き飛んでいく。ゴム毬の様に跳ねながら飛んでいくモンスターを見据え、剣の能力を開放する。

「くらえ！」

砂鉄が集まり形を為す。それは投擲用の槍となる。腕くらいの長さになり、螺旋を描いて真っ直ぐに飛んでいく。狙いは正確無比。モンスターが咄嗟に防ごうとするが、それもろとも貫通する。鮮血が舞い。その命を奪い去る。そのまま、他のモンスターを相手取る。そして、ふと自分が以前試していたことを思い出す。

そう言えば、同時に使ったらどうだ？森の時はする事が有ったから結局試してなかったけど、実際、練習の時はうまくいったんだけどな。

モンスターを灰色の弾丸が吹き飛ばし、距離が開いた瞬間に灰色に青の光が混ざる。そして、水色の光が一気に吹き上がる。その力が起こす暴風に周囲の砂が舞い、吹き荒れる。

「……よし。同時使用は問題なし。それに、戦闘への効果はどれくらいか見とかないとな」

試しとばかりに足元を蹴りモンスターに肉薄する。

「吹っ飛べ！！」

その一撃は言葉通りモンスターの体を空中へと弾き飛ばす。空高く蹴り上げられたモンスターは、その衝撃で体勢が崩されたまま空を舞う。それを跳躍することで一気にモンスターの傍に近づく。砂鉄を纏ったまま巨大な槌の様に剣を上から力まかせに振り下ろす。

「これで、終わらせる！」

その凶悪な一撃はモンスターの意識を刈り取り、砂の大地へ最短距離で叩きつける。舞い上がる砂塵。砂柱がその威力を示すように巨大な塔のように聳え立つ。それは巨石を投じた水面のごとく。無論、その一撃をまともに受けたモンスターの生存は既に絶望的と言える。

「朱砂！砂鉄を纏いて剣と成せ！」

ユーリの言霊に応え、剣に砂鉄が収束して行く。その見た目は砂鉄が黒い巨大な渦となり、剣に集っていく光景。そして、それがしばらく続いた瞬間、突如として剣から炎が吹き上がる。それは砂鉄を飲み込み、その姿を変えていく。炎が砂鉄を剣の一部として溶かしこみ、外で舞い上がる砂鉄がその部分を打ち上げ鍛え上げていく。そうやって繰り返し繰り返し高速で打ち上げられた結果。ユーリの手には巨大な斬馬刀もかくやと言わんばかりの巨大な剣が掴まれている。

此方へ向かって来るモンスターの大軍をこの一振りで切り開く。大軍すらも一撃で屠るその威力が手加減抜きで振るわれる。地獄絵図。

「……思った以上に強化されてるな。これなら、いざという時でもどうにかなるか。とはいえ、練習より弱いのは仕方ないか」

光を消しながらユーリは、今上がった成果について思案する。その威力は想定していたものよりも上だった。けれど、その出力は常夜の石の中で練習していた頃よりは幾分劣る。ストラの総量が下が

っているために仕方ない事とは言える。けれどこの力なら今までの戦闘力を下げるというような事にはならないだろう。それはユーリ本人にしても願ったりかなったりだ。

とはいっても、魔晄をあまり使うと今度は召喚術を使うのに支障が出るから、ストラの様にガンガン使えるというものではないけどな。少なくとも残量を考えて使っとかないと後々困りそうだ。

思考しながら魔晄のデメリットを考える。ストラの主な長所は堅牢な防御力と治癒力にある。そして、魔晄はストラと比べると攻撃力や衝撃波としての放出に置いてはストラよりも上になる。今ではその最大値や出力に置いても上だが。とはいえ、その強化はともかく、使えば使うほど召喚術を使う事が出来なくなる。魔晄は魔力を使うので当然の事ではある。つまり今までの様に後先考えず全力しようというわけにはいかず、計画的な運用を心掛けられるという事になる。

現在は仲間が多い為、そのデメリットはあまり気にしなくても大丈夫なようにも見えるが、また強大な敵や仲間と離れたりすることが何時あってもおかしくない。もしくはエイナやリコが危険にさらされ、自分が長時間戦う場合。そう言った可能性も考える。故に、無駄遣いは控えておくべきだと結論付ける。

「さて、とりあえず、次の力を試してみるか」

魔晄に置いてはこのくらいだろう。次はある意味で最重要な要件だ。これはボスを相手取るという点においてかなり重要な部分を占める。その内容は迷いの森で自分が変わった時に行った事。

融合召喚が出来るか否か。

これが成功すれば戦力は飛躍的に跳ね上がる。今まで使ったのは二回。その両方とも強大な敵との戦闘で追い詰められていた時だった。迷いの森では謎の現象で圧倒出来ていたが、あのままであればこちらが倒れていただろう。融合が手札にあるかどうかでこっちの戦力は大幅に変化する。

当然の事だが、成功しなかった場合を考えるともう少し考えるべきことかもしれない。けれど、迷いの森で融合して以降、なぜか以前から感じていた融合召喚に対する危機感がなくなっている。今ならば恐らく成功するだろうと言うのが直感的に判る。これはその予感を確かめるためのものでもある。

「色々悩んで結局使わないのなら、一回使ってみるのも手かもな」

そう言うと、召喚術を行使する。呼び出すものはテテ。最初の融合を行った召喚獣。今回テテを選んだのはライザーやポワソ、ドリトルは戦力として他のモンスターと戦闘をしている。コパルディアとオロチはそのランクから。まだきちんとできるかどうかわかっていないのに高ランクの融合は避けておこうと考えたからに他ならない。それ故に選ぶは最初の召喚獣。

「行くぞ。来い、テテ！」

光が溢れ、その光はユーリを中心に顕現する。それは臨界を越えその中にいるものを新たな存在へと変える。召喚術の常識を超えた新たな力が現出する。

――融合召喚――独鈷練角――

青き髪を靡かせ、青き眼を開き、威圧と共に敵を見据える。状態は特に問題なし。体も違和感なく動く。拳を握り力を込める。それを見ると敵へと再び視線を向ける。

『どうやら成功した見たいだな。ついでだ。このまま方を付けてやる』

鋭く睨みつける眼光からはその存在の強さを知らしめるかのような闘気が感じられる。それはこの戦場で戦う者を止めてしまうほど。リゼルドも、ピアも、そして、常夜の石の中で見ている者も、その姿と放たれる威圧に目を奪われる。それはモンスターさえ例外では無い。動いているのはユーリの召喚獣のみ。

だが、その召喚獣達の視線には少し羨ましそうな感じを受けた。それは融合したテテへの視線。それに気付かずユーリは眼前の敵との戦闘を開始する。

『はぁああ！！』

拳を引き、一気に撃ちだす。拳の先からは金剛角がその姿を見せる。金剛角が光を放つと共に巨大な砲撃が撃ちだされる。それは砂漠をも飲み込み、広範囲を打ち払う暴力となる。無慈悲な極光と残虐な閃光が暴風と轟音を引き連れ軒並み全てを吹き飛ばしながら前進する。その速度も風と音を置き去りにし、光そのものと言える速度で打ち出される。だからこそ、その一撃は刹那の瞬間に全てを終わらせる決戦兵器と言える。

『ふっ！』

一息で砂漠を蹴り、疾走する。ただでさえ動きづらい筈の砂地を、

まるで気にしないがごとく走り抜ける。それは真実気になどしてはいない。この姿の前に、そのような些末なことはそも問題としてすら上がりはしない。その速度は一向に下がる事は無く、むしろ上がってすらいる。一息の間に一足で詰めた距離は大凡百メートル程。そして、そのまま膝から金剛角を突出し、膝蹴りを行う。

尋常ならざる速度と、想像がまるで及ばない硬度をした一撃はモンスターを刺し貫き、その速度のまま後方へ大きく吹きとんでいく。ユーリは吹き飛んだモンスターに向けて足を蹴りあげる。そしてその足から再び砲撃が放たれる。その出所を選ばない一撃はオーバーキル気味にモンスターを消し飛ばす。

『まだまだ！』

肩から肘から膝から拳から、そして額からも、様々な所から金剛角が生成される。そして、その場で回転し砂地が穿たれていく。その回転により、砂がユーリの足元へと集まっていきその体を砂の中へと埋没させる。これは所為アリ地獄と言えるモノと同じ。標的を自分が中心にいる場所まで引きづり込んで仕留める。クレーターの様に穿たれた砂地はそのまま流砂を作り、取り込んだモンスターを中心にいざなっていく。

『ギャジャアアアア！！』

『ｚｉｚｉｚｉｚｉｚｉｚｉｚｉ！！』

取り込まれたモンスターも自分の末路が判るのか、何とか脱出しようともがく。けれど、その願いが成就する事は無く、無慈悲に無感動に無遠慮に現実と言う名の悪夢は正夢となる。モンスターが全て中心に集まった時、そこから光が天へと撃ち放たれる。

『……消し飛べ！！』

その声が響き、全てを消し去る極光が自身の上にいたモンスターを軒並み消し去っていく。撃ち放たれた光が空へ消えた後、砂柱が上がり、砂が周囲へと吹き飛んでいく。その後に残った者はそれを引き起こしたユーリただ一人のみ。

『……どうやら、問題は無いみたいだな……むっ？』

融合に何の支障もない事を確認した時、ささいな違和感を感じる。そして、次の瞬間、光が放たれる。その光が晴れた時元に戻ったユーリがいた。

「……時間制限つきって事か。これは考えて無かったな」

ユーリは静かに言葉を紡ぐ。戦闘には何の支障もないが、時間制限がついているようだ。けれど、これは戦力の大幅な増強が望める。元より強力無比な融合召喚、それが時間制限ありとは言え、自由に扱えるようになったのはかなり大きい。これをデメリットとしてもその恩恵は計り知れない。

「これなら、今度はエイナ達を少しは危険から遠ざけれるな」

ぽつりとつぶやいた言葉を最後に、戦闘を既に終わらせたのであろう他のメンバーの所に歩いていく。その手にしっかりとした手ごたえを感じながら。

～常夜の石の中～

「……」

「お姉ちゃん！！しっかりして！」

「なんか煙出てない？」

今ここでは、先程のユーリの一言がしっかりと聞こえていた。無論ユーリはそんなことは気にせずに発した一言なので、特に言葉以上に思う所は無い。けれど、エイナからすればその言葉一つで、思考が止まるほどの衝撃があったらしい。小さな呟きであろうとはっきりと聞き取る事が出来る。

「ちょっとお姉ちゃん！いい加減に目を覚まして！」

「……リコ、少し離れてなさい」

「えっ？」

「それっ」

「ぱきゅ！」

エンクがリコをエイナから遠ざかるように言い、怪訝そうにしながらもリコはエンクの言に従い、エイナから距離を取る。次の瞬間リコが目撃したのは電気がエイナへと放たれ感電した姿。妙な悲鳴と共に煙を上げ、派手にぶっ倒れたエイナを驚愕の眼差しで見つめ

る。

「ち、ちょっとエンクお姉ちゃん！！」

「ちゃんと加減したから問題ないって。それにいつまでもこうやっていられてもね……なんか腹立つし」

最後に小さくつぶやいた言葉は誰にも聞かれずに空気に霧散する。そして、どこか香ばしい様な焼けた臭いを漂わせ地面に突っ伏すエイナ。慌てながら詰め寄ってくるリコを落ちつけようと言葉で宥めようとするエンク。そして、二人の視線はエイナへと向く。

「うぅ……」

なんとか気を取り戻したらしいエイナが立ち上がる。それを見たリコがエイナへと駆け寄り体の安否を尋ねる。

「エイナお姉ちゃん！大丈夫なの？」

「うん、とりあえずは。ちょっと！何するのよエンク！危ないじゃない！」

「いや、呼びかけても反応なかったし、それなら少し実力行使でもと思って」

「なんでいきなり最終手段にいってるのよ！もう少し頑張りなさいよ！！」

「なんでその原因のエイナに言われてるのかが判らないけど、とりあえず面倒な気がしたから直ぐに終わる方法を取っただけよ。それ

にあのままにしても元に戻りそうになかったし」

「むぅ……」

どこか自覚はあったのか唸るエイナ。反論がない所を見ると、自分でも呆けていたのは判っているらしい。それだけさっきの一言は嬉しかったのだ。不意打ちではあったが、きちんと気に掛けていてくれた事が判ったのは喜べることではある。けれど、不満がない訳では無い。

私だってユーリと一緒に戦えるんだけどなぁ。肩を並べて戦ってるわけじゃないけど、もう少しは頼りにしてくれてもいいのにな。

ただ守られるだけというのはやはり納得いかない。こっちだってユーリを守ることはできる筈だ。そう思う。だからこそエイナは密かに願望を持つ。ユーリを守る力を。ユーリを越える力があれば自分が表で戦い、ユーリが危険になる事を減らせる。

あの夢を引きずっているのかな？でも、またあの茨を見る事もあるだろうし。だったら私が進んで戦わないと。ユーリが居なくならないように。

心の奥底で暗い感情が生まれる。それは焦るように、急ぐように。体を駆け巡る。けれど、まだその思いが形にはならない。それは願望。それがどのような現実となるのかはまだ、だれにもわからない。

「さてと、それじゃ、そろそろ私達も外へ出ましょうか。休憩はとれたし」

「うん！私も大丈夫だよ！」

エンクとリコが休憩を止め外へ出ようとする。

私は、まだしばらく出番ないのかなぁ。

エイナはユーリと交替すると言う性質上、ユーリが変わらない事にはすることがない。そんな気持ちを閉じ込めて二人へと話しかける。

「それじゃ、二人とも、また今度ね！」

「うん！またね！エイナお姉ちゃん！！」

「まぁ、直ぐに会えるけど、そっちもきちんと休みなさいよ。さっきのはちゃんと加減してるからもう痛いとかは無い筈だけど」

「ええ、もう大丈夫だよ。けど、今度からはもう少し考えてからするようにしてほしいけど」

「あはははは」

乾いた笑いで応えるエンク。それをジト目で見つめるエイナ。けれど、しばらくして二人ともが笑い出す。なんだかんだ言って仲は良いのだ。今のはちょっとしたじゃれ合いの様なものだ。会話が終わり二人が外へと出ていく。それを見送りながら、エイナは先程の想いを反芻する。

「……強くなりたい。ユーリよりももっと。そのためなら私は……」

その声は誰にもしられないまま空気にとけて消える。けれど、確かな感情としてエイナに刻まれる。

砂漠での戦闘を終え、皆の元へ戻るユーリ。融合召喚や魔晄などをきちんと試しておきたかったので一人離れて戦闘をしていたのだ。そして戻るなりポワソが近づいて来る。

『主様！』

「……どうかしたか？」

いきなり話しかけられたが、どことなく不機嫌なポワソに全く心当たりがない。何かあったのかと疑問を覚える。

『なんでテテと融合してんですか！』

「なんでと言われても、コパルディアやオロチは融合がきちんできるか調べてからにしようと思ったし、お前らはここで戦闘をしてたし、そうなったらテテが出てくるのは当然だと思うが」

とりあえず消去法でそうなった事を言う。それを聞いたポワソは不満そうに此方に視線を向けて口を開く。

『そこは私を選んでくれないと困りますよぉ！うぅ、密かに楽しみにしてたのに……』

「……おいおい」

その言葉を聞いて呆れたのはユーリだ。何で不機嫌になっていたのかと言うと、自分との融合が出来なかったからしい。それは予想外な言葉だったために返す言葉もない。

っていうかそんなに楽しみにするようなものか？まったくこいつの考えは判らないな。普段は何を考えてるのやら。

ポワソを見ながらそんな事を考えるユーリ。そう思っていると袖を引っ張られる。何事かと目を向けるとそこには赤い装甲を纏った金髪の少女、ライザー。彼女はこちらを見上げながら静かに言葉を発す。

「どうした？なにかあったか？」

『……あれは気にしないで良い』

その言葉はなんとも味気ない物だった。感情を込めない瞳はポワソの行動を冷めた目で見ている。それを見ていたユーリは静かに溜息をつく。

ポワソとは違う意味で対応に困るな。というか、ライザーってこういう性格だったのな。

静かに、あまり感情をこめずに喋るライザー。誓約当初は割と活発に動いていたようにも思うが、今のライザーを見るとそうは思えない。

「もしかしてあまり呼ばない方がよかったか？」

気が付くとそんな事を口にしていた。それを聞いたライザーは、しばらく瞬きした後此方に目を向け、少しばかり非難するような感じで話しかけてくる。

『……説明』

「いや、どうにも迷惑してそうな気がしたんでな。ライザーはあまり活発そうには見えないし、呼び出したら戦闘ばかりと言うのも嫌だろう？」

『……関係ない』

「おいおい、自分の事だろうに」

『……だから関係ない』

「……」

『……私は望んでマスターと誓約した。他の者は知らないけど、きっと同じ。マスターは私たちを効率的に運用すればいい。私達がマスターの望む道にある障害を排除する』

ライザーが静かな口調こそ変わらないものの、いつもより饒舌に喋る。そこには確かに感情が込められていた。それをじっと見ていたユーリにライザーがしっかりと視線を合わせその先を言葉にする……身長差のせいで上目づかいの様になっているが、些細な事である。

『……だから、迷惑なんて考えてない』

「……それはよかったよ」

それだけを返す。多くを語る必要はない。その思いは今知った。ならばこれからの旅を通して共に頑張っていこうと思う。そんな事を考えていると横合いから大きな声が聞こえてきた。

『あぁ！何人を置き去りにして桃色空間作りやがってんですか！そう言うのは私の、私の！役目なんですってば！！』

『……邪魔』

「何か言ったか？」

『……別に』

ライザーが何かを言ったように感じたが気の所為だったらしい。それにしても何か不満そうに思える。何かあったのかポワソをじっと見つめている。ポワソは砂漠を踏みつけて悔しがっている。何が琴線に触れたのか、その様子はかなり機嫌が悪いと判る。

「はぁ、それなら、今度はポワソに融合召喚を頼めばいいのか？」

『なんですと？』

妙な言葉遣いのまま、ポワソが此方へと視線を向ける。そのあまりの反応のよさに若干引いたユーリ。何かを期待するようにこちらを見るポワソを見ながら藪蛇だったかな？と少し後悔したユーリ。けれど、前言撤回する事も無いと開き直る。それに本人がしたいと言っていたのだ。遊園地のアトラクション感覚か何かなのだろう。

見るからに好奇心旺盛なようだし。

「だから、次に融合するときはポワソを呼ぼうかなと」

『マジですか！！』

「あ、ああ」

詰め寄ってくるポワソに驚きながらも返事を返す。次の瞬間その顔を嬉しそうに笑顔に変え、腕を振り上げる。

『いやっほぉー！！ついに、ついに！主様からお呼びが！ふふふ！こうしてはいられない！戻って体を洗っておかないと！！』

「……は？」

『いや、こういう時はやはり洗う時からいっしょとか！いやしかし！ああ、ついにこの想いが主様に届く時が！』

「……どうしたんだ？」

『……任せて』

『いったぁ！！』

暴走がちに何か言っていたポワソだったが、ライザーがサーベルの柄を伸ばし、槍の柄の様にしてポワソの頭を打ち付ける。それに当たったポワソは頭を抱えうずくまっている。そして隣ではなぜか無表情の筈なのに何かをやり遂げたかのような達成感をにじませるライザーがいる。

「大丈夫なのか、あれ」

『……大丈夫、問題ない』

指の先にはポワソ。耳を傾けると微かに唸る声が聞こえる。さすがに心配になってライザーに聞くが問題ないの一点張り。この召喚獣も割と喰えない性格をしているらしい。そんな事を考えているとライザーが再びこちらの袖を引く。

『……マスター』

「？」

『……アレとの融合は推奨しない。効率面を考えて私にするべき』

「……」

何を言い出すのかと思ったらそんな言葉を聞いた。融合召喚はそんな取り合いになるようなものだろうか？不思議に思った。

「まぁ、検討しとく」

『……そう』

そう言うとライザーは口を閉じ前を見る。蹲っているポワソの方を。そしてポワソも再駆動を開始したのか立ち上がる。

『何すんですか！さっきといい、今といい、あなたは私に何か恨み

でもあるんですかっての！』

『……特にない』

『だったら何でちょっかい出してんですか！うぅ、せっかくの良い雰囲気が台無しです』

『……そんなもの始めからない』

『ガーン！なんでそんなこと言いやがるんですか！』

『……事実』

向こうの方で何か言いあっているポワソとライザー。それを見ていると、腰に何かが当たってくる。視線を向けるとそこには笑顔のピアがいた。

「えへへ、お兄ちゃん！大丈夫？」

「ああ、特に怪我もしてないし、俺は問題ないよ」

「そっかぁ！よかったぁ！！」

笑顔で話かけてくるピア。それに優しく笑みを浮かべ会話するユーリ。たわいない会話が続いている中、光がユーリの側に溢れる。

「えっ？」

「ああ、心配するなピア。これは敵じゃない。これは……」

言い切る前に光が消え、その中にいる者が露わになる。そこには常夜の石から出てきたエンクとリコがいた。

「俺の仲間だ」

そのユーリの言葉にピアは二人に目を向ける。そのピアの側にリコが歩いてくる。

「あなたがピアちゃん？」

「うん！ピアはピアっていうの！」

「そっか私はリコっていうの！」

「そうなんだ。よろしくねリコちゃん！」

「うん！よろしくね！」

子ども達の微笑ましい会話を聞きながら身を引くユーリ。自分がいない方が話が弾むだろうと考え、気を使ったのだ。そんなユーリの側にドリトルとエンクが歩いてくる。

『お疲れですね』

「そうでも無い。まだまだいけるさ」

「へぇ、言うじゃない」

「事実だからな」

ユーリの言葉に笑みを浮かべるエンク。何か嫌な予感がした。そして次の言葉でその予感の正体を知る。

「それじゃ私と戦ってみましょうか」

「また今度な」

「な、何でよ！！」

否定されたのを不満そうにするエンク。それに内心溜息をつきながら答える。

「お前な。何もこんな砂漠のど真ん中で戦う必要なんかないだろう？もう少しましな所にしとけ」

「……むぅ。別にいいじゃない。減るもんじゃないし」

「いや、俺の精神の安定が崩れるから。」

「やらないと私の不戦勝になるわよ。それでもいいの？」

これならどうと言わんばかりに挑発的な顔で言って来るエンク。けれど、特に気にはならない。

「ああ、どうぞどうぞ」

「何よその反応！舐めてんの！？」

「はぁ、難儀なやつだな」

執拗に勝負を挑んでくるエンクに対し、割といい加減に対応するユーリ。確かに自分も勝負事には割とまじめに取り組むが、さすがにこんな場所で望んで戦いたいとは思わない。それに急ぐ必要などない筈だ。むしろ何故ここまでこだわるのかが気になった。

「むぅ、まぁいいわ。今回はこっちが引いてあげる。でも、その内絶対に勝負するんだからね！わかった！！」

「ああ、いずれな」

「本当に判ってんのかしら？」

疑問符を上げながら、ピアとリコの方へ歩いていくエンク。それを見送りながらため息をつく。

『大丈夫ですか？』

「ああ」

『嫌ならきちんと断った方がよいかと。曖昧な返事は不快感を相手に与える場合も多いですから』

「嫌ってわけじゃないさ。いずれ機会を設けてきちんと勝負はするさ。けど、今はまだそんな暇は無い」

『それならそうと仰れば宜しかったのに』

「それでまた話が拗れたら嫌だからな。なんでかそんな気がするんだよ」

『そうですか』

笑みを浮かべながら此方に話しかけるドリトル。それにこちらも応じる。そこには穏やかな時間が流れていた。だが、その時間も終わりを告げる。ピアとリコが此方へ近づいて来る。どうしたのかと見ていると、二人が同時にこちらを見上げながら口を開く。

「「お兄ちゃん！！どっちがいいの！！」」

「なにが？」

「ピアとリコちゃんのどっちがいいって聞いてるの！」

「私だよね！ユーリお兄ちゃん！」

「ピアだよね！お兄ちゃん！」

「どうしたんだ？二人とも。急にそんな事を言い始めて」

「お兄ちゃんはピアのお兄ちゃんだもん！！」

「私のだよ！ね？ユーリお兄ちゃん！！」

「……なにがどうなったんだ？これは」

『あらあら』

突然ピアとリコに詰問される形となったユーリは、まるで話が分からないといった具合に困惑する。ドリトルは笑みを浮かべたままそのやり取りを見ている。そして先程ピアとリコの方へ向かってい

ったエンクが此方へ来る。

「大人気ね。アンタ」

「どうしてこうなったんだ？」

「知らないわよ。私が行ったときにはもうこんな感じだったわよ。よかったじゃない。モテモテよ」

「皮肉か？笑えないにも程がある」

「でも、愛されてるって事でしょ？喜べばいいじゃない」

「そうだな」

「「お兄ちゃん！！」」

「ほら、お呼びがかかったわよ」

「面白そうに言うな。こっちは困ってるんだが」

「今すぐ勝負するんなら助けてあげてもいいけど？」

「……言って来る」

エンクとの会話を終わらせ、ピアとリコの元へと歩いていく。この後、二人の少女に所有権を提示され困惑が加速する。既に人権すら無い様な会話に、子供って割と怖いんだな。と認識を改めた青年。二人の将来が真剣に心配になった。

何時の間に戻って来たのか、ポワソやライザーもその光景を見ていた。ポワソが急ぎ参加を表明していたが、ライザーに沈黙させられる。ドリトルは笑顔でそれを眺め、エンクは呆れながらそれを眺めていた。そんなたわいない時間。誰もがそれを望んでいる。だからこそ、前へと進む。そんな時間を当然とするために。

誰もいない空間の中、爆音が響く。岩山が崩れ、煙が立ち込める。そこは周囲がえぐれ切り刻まれている。強大な暴力によりその原形をとどめる事を許されない。緑は消し飛び、無残な荒野が広がる。その中、一人の女性が荒い息をつきながら膝をつく。桃色の髪の女性、エイナだ。

「はぁ、はぁ。まだ、こんなのじゃ足りない。これじゃユーリには追いつけない」

何とか立ち上がり、再び力を込め、魔晄を発動させる。跳躍し、空中を舞う。身体強化された体は、想像を超えた動きと力の行使を可能とさせる。その力を剣に込め振り下ろす。

「はぁああ！！」

その一撃は岩を砕き、そのままに両断する。止まる事無く体を回転させ、岩を高速で輪切りにしていく。そして、その岩だったものに魔晄を弾丸として叩きつけ破壊する。すでに魔晄の制御も大体うまくできていると言い切れるくらいにはなった。けれど、これを考え付いた青年はこんなものでは無いだろう。もとよりこの力を生み

出したのは件の青年、ユーリなのだ。同じ土俵では一生追いつけないだろう。

「まだまだ！」

鬼気迫るような顔で岩を見据えるエイナ。その体を光がつつむ。

「来て、オロチ！ドリトル！！」

ーーー二重憑依ーー

莫大な光がエイナを包み、その力を引き上げる。業火に包まれ、赤みががった瞳からは闘志が溢れる。赤い火花と火の粉を舞わせながら剣を構える。

「貫いて！」

大気を捻じれさせ、炎が螺旋を描く。その火流は岩に突き当たり、その高熱と螺旋運動によって溶かし貫く。炎を髪へと集約し巨大な炎のウイッグとして使用する。不可解な事に炎が岩を物理的につかみ、空中へと放り投げる。エイナの数倍くらいの大きさの岩は空中で重力に引かれ落ちてくる。

「いっけえええぇぇええ！！」

体全体から炎を発散し、灼熱の火炎地帯を形成する。拳を握り、一気に振り上げる。大気が螺旋を描き上昇気流となり炎を押し上げる。巨大な火柱が岩を飲み込むほどの範囲を持って空へと駆け上がる。

その一撃は空を焼き、赤く染める。それが過ぎ去った後には灰が降り積もるのみ。岩は影も形も無い。燃え尽きたのだろう。今の一撃でさすがに力を使い果たしたのか憑依が溶けエイナは地面に倒れ込む。

「はぁ、はぁ、はぁ。遠いなぁ」

そう呟いた。今の一撃でもユーリには届かないだろう。そう思う。自分ができる事は、ほぼすべてユーリから教えてもらった事だ。ならばその第一人者とでもいうべきユーリに敵うはずはない。けれど、違う何かで対抗しようともそれが思いつかない。結局今ある手札でどうにかするしかない。

「いつから、こんなに差が開いたのかなぁ？」

思い返す。この差はどこから着いたのか。今は融合や憑依などの召喚術。そして召喚獣も比べ物にならないほど強い。ならその前は？最初はそんなに差は無かったはずだ。けれど、思い返していて気が付いた。差がないとはいえ最初から青年は自分より強かったのではないか？

「……そっか。初めから私より強かったんだね。それじゃ、どうしようもないのかな」

今更な事を考え一人自嘲気味に哂う。考えてみれば当然の事なのだ。青年は初めから強かった。けれど、自分はそうじゃない。誰かに頼らなければ生きてはいけない。そう思ったらなぜか自分が小さく思えた。

「私じゃユーリの隣には居続けられないのかな？もう、だめなのか

な？」

弱音が聞こえる。ここには誰もいない。青年の顔を思い出す。彼と居たい。傷ついているのを見たくは無い。だからこそ彼よりも強くなろうと思った。そうすれば彼が傷つく事は無い。けれど、彼は自分の力など届かないほどに強く、高く存在している。それが何より残念だった。

「私だって頑張りたいよ。私だって、力になりたいよ。でも私は剣を振るくらいしかできないから」

静かにそう呟く。自分は青年と違い多芸多才と言う訳では無い。だからこそ、その限られた者を精一杯生かしてきたつもりだ。けれど、その事柄についても青年には劣る。それに青年には強力な仲間がいる。召喚獣と言う名の類まれな存在が。自分がいなくとも、彼なら何の問題も無いのではないのだろうか。

「はぁ、駄目だな。ユーリはそんなこと考えたりしないのに。間違ってもそんなこと言ったりしないのに」

どうも気分が落ち込む。考える事全てが暗い方向へと向かう。如何にか気分を変えようと建物へと戻っていく。とりあえず風呂へと入って汚れを落とそう。そうすれば少しは気分も晴れるだろう。

「でも、私は……もう失いたくない」

最後に風にかき消されるような小声でつぶやいたその言葉はエイナの無意識へと強く刻まれる。彼女はまだ真実を知らない。けれど、何かを感じ取っているのかもしれない。それが何を成すのか、まだ誰にもわからない。彼女にも、青年にも。

素直な思い　歪んだ想い（後書き）

さぁ、今回で少し不穏な空気が出てます。彼女は純粋な想いでいるのですが、ある事が原因でそれが少し歪んで行ってます。このままいくと割とシリアスなことになるかも、です。

そして、表では主人公の取り合いが勃発してたり、この温度差はなんだろうか。書き終わって不思議に思った。後、ライザーとポワソは元ネタと言うか参考にしたものはあります。わかりますかね？ヒントとしては外見と正確はそれぞれ別キャラから来てます。同じだと考えると判らなくなります。

ちなみにドリトルは特に考えてなかったです。皆さんはドリトルでどんなキャラを連想しましたか？少し興味があります。

砂漠を越えて　電撃姫　星へと挑む（前書き）

さぁ、作者がまた妙な話を作ってしまいました。だからストーリーが進まないのだと何度も考えてたのに……

いつの間にかこんな話が、本当にいつの間にかできてました。後、本当はもう少し長くするつもりでしたが、ここで切ってみるのもいいかなと思ってとりあえず投稿。

もういい加減お気づきかと思いますが、主人公は弱体化してますが、短時間ながら融合できるので総合的に強くなってます。後、弱体化は割合なのでレベルが上がると量も増えます。

砂漠を越えて　電撃姫　星へと挑む

砂漠を越え、服についた砂を払いながら前へ進む。あれからもかなりの時間をかけて歩き続け、ようやく街の建物が視界に入る所まで来る事が出来た。それを見てピアが顔を少しだけ綻ばせる。よろよろとしながら目を凝らし、間違いないと悟ると後ろに振り向いて口を開く。

「あっ！やっと見えてきた！あれがアレスパの街だよ！」

「あ～結構遠かったわね」

エンクが汗を拭きながらそんな事を言う。砂漠を歩くのは初めてだが、こんなにきついとは考えてはいなかったために、その顔はきつそうに歪んでいる。だが街が見えたと知ってか、その顔に少し気力が戻る。

「それじゃもうちょっとだね。もう少し頑張ったら終わり。それで私もう暫らくは歩きたくない、かな」

リコが砂地の上で微かにそう言った。いくらドリトルが風を起こし、ポワソが魔法で温度を幾らか下げていたとしても、それはずっと続くわけでは無い。既にポワソは魔力節約のために魔法の使用を控えているし、ドリトルも起こす風で砂埃が舞い上がり、リコやピアの顔にかかったりしていたのであまり強くはできない。だから何もしないよりはましではあるモノの、暑くない訳では無い。

「さてと、これは急がないと干物が出来そうだな」

割と平気そうな声でそう言うユーリ。笑みを作り周りを見渡す。そんなユーリにエンクが怪訝な顔で口を開く。その顔には少しの疑問と、なぜ自分だけが普通にしているのかと言う思いが内在していた。

「アンタ、なんでそんなに平気そうな顔でいられんのよ！こっちは参ってるってのに」

その言葉に僅かに肩を揺らす。勿論、気付いていない訳では無い。知らない筈は無い、自分の事だその異常性は判っている。けれど、それを悟らせる気は無い。

「……そう言われてもな。どういうわけか特に暑く感じないんだから仕方ないだろう」

この言葉は正しくない。正確には暑いとは思う。だが、どういうわけか汗が流れないのだ。無論そう言う体質の者もいる事だろう。けれど、自分はそうでは無い。きちんと汗もかくし、この暑さなら自分も参っているはずだが特に問題無く普通に行動している。

何かがおかしくなってきてるな……まぁ、今に始まった事でもないが。

原因などを考えても、あの茨ぐらいしかないだろう。発汗機能がうしなわれているのだろうか。それが機能しているようには思えない。けれど、さっきの戦闘時はきちんと汗をかいていたような気がする。つまりまだまだおかしくなっていっている途中なのか、暑さでは汗をかかなくなっているのか。なんにせよ、内心で焦燥感が募っていく。

治す方法は未だ判らず、体は自身の知らない力と知恵を身につけ、意識はどこかずれたモノへと変わってきている。猶予はいつまであるのか、どのくらいあるのか。それも今は判断できない。頼る者も無く、真実を語れるものもいない。話した所で状況は好転しない。ただ問題が増えるだけだろう。

俺はどうなるんだ？このまま変わっていけばその果てに何がある？

知らぬ技術を当たり前のように使い、新しい力をその場で使いこなし、どんな状況でも臨機応変に対応できる心。全てが歪だ。そんな奴いる筈がない。

本来ならば知らぬ技術を時間をかけて解析し理解し、新しい力は長い努力と経験によって体得する。様々な環境を凄しそれ相応の年月を経てようやく刻一刻と変わりゆく状況に柔軟に対応できる精神に成長を遂げていく。

だが、今の自分にはそんな過程などは無い。もたらされるのは不可解な能力と技術。違和感を感じず全てに対応して行く奇妙な精神。それはどれも自分のモノではない。いつの間にかもたらされ当たり前の様にあるモノ。それは不気味で底が見えず、不安をあおる。

かじった程度の大工仕事で本職を唸らすくらいの物を軽く作り上げる。使った事のない武器で、見た事のない命を躊躇いなく切り捨てる。やった事のない鍛治仕事で失敗無く一振りの刃を打ち上げる。それらの事を何の疑問も無く、ただ気の向くままに成功させ、当たり前の様に作り上げ、奪い取る。まるで……今までそれを何度も繰り返し行っていたかのように。

俺はこんなことした事は無い。今までやった事のあるモノはそれ

まで以上の完成度で、やった事のないモノでも自然に成功へと持って行けるという事実。どれだけの理不尽が起こっているか、知らない筈は無い。この世界に来た時から全てが狂ってきていた。それが今ようやく目に言える形で崩れ始めた。言えばそれだけの事。

内心の焦りはあるにせよ、それが同様にまで発展することは無い。果たしてそんなに気持ちを押し殺すのが得意だっただろうか？俺はそんなに何かに耐えながら行動できる人間だっただろうか？……俺は果たしてどんな人物だったのか。

きちんと記憶している。失ってなどいない。今でもすぐに思い浮かぶ。けれど、それが自分だと言う現実味がない。夢遊病か何かの様に、虚ろな思い出の先に霞むように感じている。それがどれだけ鮮明に思い出せてもすでに現実感がない。実感を感じない。顔や体型が同じで、同名の違う誰かを見ているような、映画やドラマの様な一種のフィルターの様なものがかかっているような曖昧さがある。

……もう、俺は、過去にいたその人物とは、どこかが根本的に変わってしまったのだろう……もう戻れない。そんな気がする……少しだけやるせない、な。

そんな思いとは裏腹に表面的には感情の波などは悟らせない。この思いがばれる事を自分は望んでいない。だからこそ誰かが知る事は無い。今の自分ならうまくこなせるだろう。そんな事を考えていると横合いから声がかけられる。

『……どうかした？』

その声の主はライザーだった。彼女はその眼に少しの感情を乗せてこちらを見据えている。何かが気になったのだろうか、口数が少

ない分、態度で何かを察したのかもしれない。けれど、此方も何の反応も出さず無難に返す。

「どうもしてないが、急にどうしたんだ？」

いつも通りに返事する。それを聞いてどう思ったのかこちらを見たままで口を開くライザー。

『……寂しそうに見えたから』

「……気の所為だろ」

その言葉に心の奥が少し悲鳴を上げた。けれど、それだけだ。何も変わらない。

「こんなに賑やかで頑張ってるのに、寂しく思うはずはないさ。そんな暇なんてないだろうしな」

寂しく思う暇などは無い。感傷に浸るのならば前進しろ。前へと手を伸ばせ。この手が続く限り、この体が動く限り。

「だろ？」

『……そう』

追及する気がないのか、元々大して疑問を持っていなかったのか、ライザーはそれで引き下がる。今自分の周りにいる者達は総じて勘がいい。何が原因で疑念を抱かせるか判らない。

『主様！寂しいなら私がいつもそばにいて差し上げます！！それで

そのまま最後まいたぁ！！！』

『……煩い』

『だから叩くなって言ってんです！こぶが出来たらどうすんですか！この美貌に傷がつくなんて、世界の損失ですよ！！』

『……それは無い』

『ヒドッ！一言でぶった切らないで下さいな！この繊細なハートがガラスみたいにブロークンしますよ！』

『……それも無い』

『だから、なんでそんなザックリ切り捨てちまってんですか！そんなだから友達少ないんですっての！』

『……』

『ちょっ！無言で切りかかってこないでくださいな！！コワッ！』

「お前らは何をしてるんだ……」

ポワソが横合いから口を挿み、いきなり勃発するショートコント。砂地であるのを気にしないかのように苦も無く動き回るポワソとライイザー。地味に技量が高い事が判る場面だ。それを見ている者も笑顔でそれを見ている。

「お兄ちゃん、止めなくてもいいの？」

「……まぁ、疲れたら勝手に止めるだろう。ほっといたらいい」

「いいのかなぁ？」

「あれはあれで一種のコミュニケーションだろう。大丈夫さ」

「こみゅにけーしょんって何？」

「喧嘩するほど仲がいいって事だよ」

「そういうものかなぁ」

リコと目の前で行われている二人の追いかけあいを見ながらそう言う。二人とも特に本気ではないし、気にする必要もない。だから問われた言葉に対し軽く流しておく。

「しばらく続けてたら終わるさ。俺たちは先を急ぐか」

「アンタ、割と鬼ね」

「そうでもない」

「どうかしら」

エンクとどうでもいいことを会話しながら進んでいく。エンクも内心どうでもいいと思っていたのか、なんだかんだ言いながらもついてくる。

『あれ？皆いない？ってあんなところに！！主様、置いてかないでくださいまし！』

『……転移装置、作動』

『何こっちを無視して冷静に対応しやがってんですか！』

ユーリ達の姿が見当たらない事に気づき周辺を確認し、放っていかれたのに気づくと悲痛な声を上げる。ライザーはその声を右から左へと流し、ユーリの元へと体内にある転移装置を起動させる。座標を入力し、動力炉を回しエネルギーを開放する。光に包まれ姿を消すライザー。次の瞬間にはユーリの側に出現していた。

「「「……」」」

『あらあら』

リコとピアが目を見開いてびっくりしている。エンクも無言でライザーを見つめている。流石に驚いているらしい。ドリトルは事態を何食わぬ顔で見守っている。けれど、それを容認できない者が一人いた。

『くっ！先を越された！私だってあのくらい！！』

負けじとポワソの杖が光り、魔方陣が地面に浮かぶ。空間が僅かに揺らぎ、場を繋ぐ。魔力が陣を満たし、その効力を発揮する。その魔方陣の効力は転移。ポワソの体が指定された場所へと跳ぶ。そうユーリの真上へと。

『あっるじ様ぁあああ！！』

突如、上空から聞こえた声に全員が空を仰ぎ見る。そこには両手

を広げてユーリへと向かって落ちてくるポワソの姿が。全員の眼がその下にいるユーリへと向く。ユーリは何か考え事をしているのか、俯いたまま歩き続けている。ピアとリコがそれを見て声を上げる。

「お兄ちゃん！」

「上！上見て！」

余程深く考えていたのか、その声にようやく思考を打ち切り、反応を示すユーリ。

「……上？」

とりあえず言われたとおりに上に顔を向ける。するとそこには自身の召喚獣が満面の笑みで此方に落下してきていた。さすがにこれには驚いた。

「……は？」

『さぁ、私の愛を受け止めてくださいまし！！』

何か妙な言葉を聞いたような気がするが、今はそんなことはあまり問題では無い。予想外の事態に体の動きがほんの少し止まる。けれど、それは致命的。殺気や害意がないために周りをスルーしていたのだが、そのせいで動くのが文字通りワンテンポ遅れる。その空白の時間をポワソは逃さない。

「うわっと！」

『うふふふふ。主様ゲットだぜ！！』

ユーリの体に勢いよく抱き着いたポワソはこれ以上ない笑顔で勝利宣言を下す。抱き着かれているユーリは事態が読めず困惑するばかりだ。

「……何がどうなってるんだ？」

『……安心して、直ぐにごみは掃除する』

「こっちは暑いのを我慢してるってのに良いご身分ね！」

「なんでお前らはそんなにイラついてるんだ？」

「お兄ちゃん、とりあえずポワソを放してあげて。ただでさえ暑いんだからかわいそうだよ」

「ピアもやってほしいな……」

『人気者ですね。』

それを見た周りのメンバーの反応に呆れる。ライザーとエンクは何故か戦闘態勢に入っているし、リコは何故か俺がポワソを拘束しているような流れで話を進めている。ピアの期待するような視線とドリトルの優しい視線が唯一柔らかく感じた。

「お前ら少しは落ち着けって」

「あら、私はこれ以上ないほどに落ち着いてるけど。落ち着かないといけないのはアンタじゃないの？」

「何故に？」

「このたらし！」

「おいおい、なんでそうなる」

エンクはユーリにかみついていき、ユーリはそれは無いと首を振る。それを見て青筋を立てながら稲妻を身に纏う。これにはユーリも辟易する。言いがかりにも程がある。

「そもそも飛び込んできたのはポワソだろうに」

「受け止めたのはアンタでしょうが！！」

「いや、ただ単に気付くのが遅れたからなんだが……」

「どうだか！これ幸いに抱き着かれたかったんじゃないでしょうね？」

「どれだけ俺のせいにしたいんだお前は……」

「まぁ、とりあえず、一回死んでみましょうか！」

「落ち着けって」

「うっさい！！」

言葉と共にエンクの稲妻がユーリへと向かう。それを魔眩で回避しながら内心どうしてこうなったと思う。その傍ではライザーがポワソに向かってバスターを連射していた。

『わひゃ！危ないでしょうが！ついに熱暴走でもしやがったんですか！！』

『……遊びが過ぎる』

『私は主様の事には常に本気ですっての！まぁ、他の事には手をぬきますけれども』

バスターを躱しながらどや顔で自分の気持ちを吐露する。それを聞いたライザーの反応は軽蔑の視線。感情を感じさせぬ瞳なのになぜかその事だけは感じ取る事が出来た。バスターの弾速と威力が２割ほど上がった。

『って！なんか殺しにかかってません！？威力がおかしいんですけど！このロリっ子』

『……むしろ消えて』

『殺害予告！？ちょっと主様！乱心した人いますよ！こっち見てくださいまし！』

『……大丈夫。少し痛い、かも？』

『なんで疑問形！？しかもどこに大丈夫と言い切れる部分があるのか判らないんですけど！！』

大声でわめきながらもライザーの攻撃をかわし続けるポワソ。それを見ながら行動を予測し、着々と直撃させようとするライザー。それを見ながらさすがにポワソも冷たい汗が背中に流れるのを感じ

た。光が飛び交う中、このままだと不味いと確信する。如何にかしようと頭をひねる。

「……もう街が見えてるのに、皆早くいこうよ」

「ピアも暑くて辛いの」

『マスター、そろそろ進んだ方がいいかと』

『ゆーり殿。トリアエズ街二入ルノガ先決ダト思ウノダガ……』

「ああ、そうだな。それじゃ、遅れた分を取り戻すか」

「ちょっと！人を無視すんじゃないわよ！！」

「後で聞くから今は先へ進ませてくれ」

リコとピアが不満を訴える中、ドリトルとリゼルドが先へ進むように言って来る。リゼルドは今まで口を挿まず、周囲の確認に努めていたため、会話にはあまり入ってこなかったのだ。けれど、街が近づいたことで余裕が出来たのか、こちらへと意識を割いている。

そしてユーリはその言葉をこれ幸いに了承し、エンクを説得する。エンクはそれを聞いて渋々と、本当に渋々と引き下がる。その態度を見ながら溜息を吐くユーリ。

「なによ」

「いや、なんでもない」

エンクが怪訝そうに見つめてくる中、この先も面倒くさいことになりそうだと呆れた。とりあえず進むことにする以上、ポワソとライザーにも声をかける。

「街に入るのを優先したいから二人とも戻ってきてくれ」

『はいは～い！今直ぐに戻りますね！』

『……やり損ねた』

ユーリの言葉に直ぐに飛びつくポワソ。それを合図に砲撃がやむ。その先には残念そうに舌打ちするライザーが。割とマジだったらしい。側に戻ってきた二人を見ながら改めて先を、アレスパの街へと目を向ける。

「さてと、行くとするか」

ユーリの一言で全員が進みだす。もうアレスパの街までは大した距離は無い。もう戦闘も無くすんなり街まで進む事が出来た。リコとピアは砂漠から出られたことが嬉しいらしく、笑顔も明るい物だった。リゼルドはあまりしゃべらないものの、やはり砂漠の猛暑は辛かったらしく、何度も自分でメディカルチェックをしていた。

ユーリの召喚獣達は全員砂漠の中でも割と元気に動いていた。全員が全員、何らかの方法で暑さをしのいでいたからだが。エンクは子供たちの入る手前、あまり文句も言わずに耐えていたらしく、若干表情が和らいだ。ユーリにいたっては涼しい顔のままスイスイと進んでいく。

ようやく、多くの者たちが目的としていたアレスパの街へと到着

する。ここに何があるのか。ここからどうなるのか。それは誰も判らない。唯一青年がこれから起こるであろうことの一部を知っている程度。もう既に青年の知識はほとんど役には立たない。けれど、それでも、似通った部分はある。そういった意味で一番真実に近い人物ではあるだろう。

ここで、ようやく会える。俺はどうする。どうすればいい。ここで終わらせた方がいいのだろうか？すべてを敵に回して、切り捨てた方がいいのだろうか？

ユーリの中にはこれから会い、これから起こるであろうことが頭に浮かぶ。全てを終わらせる選択肢もある。けれど、それは全てを敵に回す事だろう。それは自身の中にいるエイナも巻き添えにするという事。だからこそ、そんな選択肢はとる事が出来ない。

様々な思いを重ね、街へと足を踏み入れる。そこに宿った思いはこの街でどんな結果を生むのか、知る者はいない。

多くの人々が行き交い、活気にあふれた街。ツェーゼの村とは比べるべくもないほどの規模を誇る街。《アレスパの街》ここは大きな家が並び立ち、種族も関係なくまじりあっている。ツェーゼの村では大半が人間だった。エンクの様に人間以外の種族は割と珍しかった。だが、こちらではどちらも半々くらいの比率になっている。

ちなみにあまり大人数で入るのもどうかと思い、召喚獣であるドリトルとライザー、ポワソは送還済みである。今ここに居るのはピ

アとリゼルド、エンクとリコ、そしてユーリの五人。

「ここがアレスパの街か」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

「どうした？ピア」

声の方に目を向けると、自身の服の袖を引くピアが見える。何事かと見ていると、自身の前に出てきて笑顔で口を開く。

「ようこそ！アレスパの街へ！！」

元気いっぱいでそう言うピア。これにはユーリも面食らったが、直に優しい笑みを作る。

「えへへ。一回やってみたかったんだ！」

「そうか。それはよかったな」

「うん！！」

笑顔でピアの頭に手を置き撫でてみる。慣れない事だが、気持ちよさそうにしているピアを見て、胸をなでおろす。その傍らで、今度はリコがユーリの袖を引く。

「ユーリお兄ちゃん！」

「リコ、探しに行くのか？」

どこか決意をにじませながらユーリに視線を向けるリコ。それが以前言っていたおばあちゃんと呼んでいた人物を探すという目的を果たそうとしているのだと直ぐに気付いた。

「うん。どうして、私はおばあちゃんの事を覚えていないのか。いつから行かなくなったのかとか、知りたいことが沢山あるから」

「……辛いことかもしれないぞ？」

今更だが、その決意のほどを聞いてみる。ユーリの言葉を聞いても視線をそらさず、真っ直ぐに見つめ返して言葉を発する。

「それでも、気付いちゃったから、知りたいから。このままにはしとけないから、私は知りたい。それが辛い事でも」

はっきりと紡がれたその言葉を聞いてユーリはリコと目線を合わせるためにしゃがむ。真剣な表情で此方をみるリコへと言葉を投げかける。

「もし、この先に辛い事が有ったらいつでも相談してくれ。解決できるかはわからないが、俺にできる事ならいくらでも手伝うからな。リコは一人じゃ無いんだから」

「ユーリお兄ちゃん……うん！本当にどうしようもなくなったら助けてね！！」

ユーリの言葉を驚いた表情で聞き、笑顔で返事する。この調子ならこの先に辛い事が有ってもきっと耐えてくれるだろう。ユーリはこの先に起こる出来事の察しはある程度ついている。無論ただの推測でしかない。けれど、もしも、思った通りなら。

リコとは会わせないほうがいいんだがな。今のままじゃ立場上知らないことになってるから、実際そうは言えないのが痛いな。

できる事なら関わらない方がいい。だが、リコの性格上必ず関わろうとするだろう。だからこそ、せめて心は強く持っていてもらいたい。例え悲しみがこの先にあったとしても。

「ああ、約束する。きっと助けて見せる」

「約束だよ！指切りしよ！」

指切った、と小指を繋いで言葉を紡ぐ。必ずこの旅が終わってもこの笑顔を守り抜こうと決める。そして、そう思っていると、リコが此方をむいて何かを言いたそうにする。

「あ、あのね。お兄ちゃん！」

「どうした？」

「それで、今すぐ探しに行きたいんだけど、いいかな？勿論お兄ちゃんの邪魔にならないように出来るだけ早く探すから！」

「……今すぐじゃないとだめなのか？」

「……うん。気になって仕方ないから。」

「そうか。」

その言葉を聞くと、ユーリはピアとリゼルドの方へと顔を向ける。

「二人とも、すまないがリコの用件を優先したい。だから、白夜に行くのは少し遅れてもいいか？」

「うん。問題ないよ。キサナ様はだいたいこの街にいるから」

『我々ガソノ事ニツイテ白夜ノメンバー二説明ヲシテオコウ』

「キサナ様、か。その人が白夜のトップか」

「そうだよ！キサナ様だったらきっとお兄ちゃんたちの疑問にもきっと答えてくれるの！」

『アノ方ナラバ、必ズ貴方達ノ力ニナッテクレル筈ダ』

「そうか。それならすまないが少し遅れると伝えてもらっても構わないか？」

『構ワナイ。ソレデハぴあ。我々ハ一旦拠点ニ戻ルトシヨウ』

「え！ピアもお兄ちゃんと一緒に行きたい！」

『駄目ダ。一度きさな様ヘトアッテオク方ガ先決ダ。ぴあもきさな様ニ心配ヲカケタクハナイダロウ』

「あっ……」

リゼルドに諭され、少し気落ちした表情でこっちに顔を向ける。

「出来るだけ早く会いに来てね、お兄ちゃん」

「ああ、用事がすんだら向かわせてもらうよ」
「うん！待ってるね！！」
『ソレデハゆーり殿。我々ハコレデ失礼スル。マタ後デ会オウ』
「ああ、そうだな」
機嫌を直したピアを連れて去っていくリゼルド。帰り際に手を振っていたピアに手を上げて返す。そして、リコに視線を向ける。
「それじゃ行くとするか。リコ」
「ユーリお兄ちゃん、良かったの？お兄ちゃんだってやりたい事が有ったんじゃ……」
「別にリコの用が終わってからでも問題は無いし、そんなに心細そうな顔をされるとこちらも気分が沈むからな」
「お兄ちゃん……」
「それじゃ行くか」
顔を向けてリコを促す。しばらく放心していたリコだったが、状況が判ると笑顔でユーリの手を握って近づいて来る。
「うん！」
「エンク」

「なによ？」

リコへと笑顔を向けた後、ユーリはエンクへと眼を向ける。エンクは不思議そうにこちらを見返す。

「お前はどうする？」

「どうするって何の事よ？」

「お前はお前の用があるだろう？だからここで別れるのかどうかを聞いてるんだが？」

エンクはこの街に剣を届けるために同行していたのだ。だからここでその人物の所へ行くと思い聞いたのだが、どういうわけかエンクは目を吊り上げこちらを睨む。

「なんだ？」

「アンタねぇ。私がリコを放って自分の用を済ますわけないでしょうが！舐めてんの？」

「いや、そう言うわけじゃないが……」

「だったら一緒に行くってすぐに判るでしょうが！！全く、アンタって時々鈍いときがあるわよね」

「いいのか？」

「いいのよ。別に急いでるわけじゃないし、それにアンタだってそ

う言う意味では似たようなもんでしょ」

暗にこちらの事情も今すぐでは無いのだから同じだろうと言って来るエンク。そう言われると断る必要もない。

「それならいいがな。それならリコの探し人を探しに行くか」

「そういえばリコ。場所は分かってるの？」

改めてリコの探し人探索へと乗り出す。するとエンクがリコにその場所を聞いてくる。するとリコが少し気まずそうに口を開く。

「それが……大まかな位置は何とか思い出せるんだけど、どうしても細かい所が判らないの」

「それで、どうして一人で行こうとしたの？」

「だって、お兄ちゃんの邪魔になると思ったから」

リコの自信なさげな言葉にエンクが諭すように言葉を掛ける。するとリコはユーリの迷惑がかかるのが嫌だったと言う。それを聞いたエンクは若干不機嫌にユーリへと詰め寄る。

「へぇ～想われてるわね、色男」

「……悪意しか感じないんだが」

「それは変ね。耳がおかしくなってるんじゃない？」

「何を怒ってるんだ？」

「誰も怒ってなんてないでしょうが！！」

エンクの言葉に不満げな感情を読み取り、聞いてみるとなぜか怒られた。理不尽だ。その後もなぜかクドクドと不満を言われたが、リコが止めに入った事でなんとか鎮静化する。

「まったく急にどうしたんだ？」

「はぁ、苦労するわね。リコも」

「あはは……まぁ、お兄ちゃんだから」

「？」

なにか馬鹿にされたというか、どこか納得がいかない評価をされたような気がしたが、突っ込むと藪蛇になりそうなので流す事にしておく。だが、二人の会話はこれで終わりでは無かった。此方に聞こえないようにボソボソとした声でしゃべっているが。

「でも、お姉ちゃんも同じじゃないの？」

「なにが？」

「だってお姉ちゃんも気になるんでしょ？」

「なっ！誰があんな奴！」

「ほら、お姉ちゃん直ぐに怒りっぽくなる。昔からお姉ちゃん図星を刺されたらむきになって否定するよね？」

「そ、そうだったかしら？」
「うん！だいたい丸わかりだったよ」
「そ、そう」
「だからお兄ちゃんの事も好きなんでしょ？」
「べ、別にそんな事は！」
「ほら、直に怒り出す」
「別に怒ってるわけじゃ……」
「気になってるのは間違いないでしょ？だってお姉ちゃんこれだけ誰かに自分から喋りかけたのって初めてだよね？」
「えっ？」
「いつもお姉ちゃんって会話に積極的に混ざろうとしなくて、誰かに話しかけられたから返事してるって感じだったんだよ」
「……そうだった？」
「うん。私にはそう見えたよ。だから、今お姉ちゃんがお兄ちゃんと話してるのを見ると少し安心するんだ」
「そう……知らない間に心配かけてたんだ。ごめんね変な気を使わせちゃったみたいで」

「ううん。いいの。今は本当に楽しそうにしてるから……でもね、お姉ちゃん」

「？」

「ユーリお兄ちゃんは渡さないから！」

「……」

笑顔でそう言うとリコはユーリの方へと走っていく。呆気にとられたようにその後ろ姿を見る。エンクは話からいつの間にか外されて、気持ち置いてけぼりにされているユーリに目をやり先程の会話を振り返る。

確かにここまで誰かに話しかけたのは私もあんまりないけど、でも、それは勝負をするためであって、別にアイツの事が如何とかそう言うのじゃなくて！ただ、アイツに下に見られるのが嫌なのであって、好きとかそう言うんじゃなくて！というか好きって何よ！私がアイツを？……無い！それは無い！無いったら無いんだから！それにアイツの周りには女の子ばっかりでとっかえひっかえしてるような奴なんだから！そんな奴を好きになるなんてある訳ないじゃない！

腕を組んで小声で何かブツブツと呟いているエンク。傍から見ると非常に怖い。ユーリは勿論、先程話を振ったリコも頬が引き攣っている。その視線に気づかず思考に浸り込むエンク。

だいたい、私がこれだけいるのもアイツが勝負に応じないのが悪いんじゃない！そうよ！アイツが全部悪いんじゃない！よし！だっ

たらアイツに勝負を挑んできっちりきっかり白黒つければいいじゃない！よし。やってやろうじゃない！！

エンクの思考など知る由もないユーリは果敢にもエンクに話しかける。その行為が地雷だと気付かずに。

「お、おい。エンク。何かあったのか？」

「アンタ！！勝負よ！」

「はぁ？いきなりなにを……」

「うっさい！今すぐここで白黒はっきりつけてやるんだから！」

「だから、後できちんと相手をするって言ったろうに」

「いつもそう言って後回しにしてるじゃない！！本当はする気なんてないんでしょ？都合のいいこと言って逃げるつもりでしょ！」

「……」

「エ、エンクお姉ちゃん！？」

感情に突き動かされるままにユーリへと食って掛かるエンク。その言葉にリコが慌ててエンクの名を呼ぶ。原因は確実に先程の自分の言葉だろう。だが、ここまで追い詰めるとは思わなかった。

今のエンクは、完全に前後不覚になっている。だからだろうか。その言葉にも容赦はない。ユーリも何か思う事が有るのか、表情が硬くなっている。

「……リコ」

「え！？な、なに？お兄ちゃん？」

「悪いけど、少しだけ時間をもらってもいいか？」

「どういう事？」

「俺はエンクと戦う事にした」

「「！！」」

はっきりと口にする。それを聞いた二人の表情が変わる。エンクはその顔に笑みを浮かべ、リコはそれが自分によって引き起こされたモノであると判っているために驚愕する。

「だ、駄目だよ！！お兄ちゃん！お姉ちゃんと喧嘩なんて絶対ダメ！！」

「だけど、このまま引き伸ばしてもエンクは納得しないだろう。どこかで区切りをつける必要はある」

「で、でも今じゃなくても……」

「確かにそうだ。けど、この要件が終わったらエンクは村に帰るだろう。だから次が何時になるかは判らないんだ」

「あ……」

「だからエンクは慌ててるんだろうさ。確かに前々から言ってきたことを後に引きのばしてきたのは事実だからな。不満にも思うだろう」

そう言ってユーリはエンクへと視線を向ける。その眼には戦意を宿し、冗談では無い事をはっきりさせる。

「だけど、せめてこの街での用事が終わってからでも……」

「それに……」

リコの言葉にかぶせるようにユーリが言葉を紡ぐ。それはユーリの数少ない信念。色々と変わり、失ったユーリが今でも変わらず持ち続けている一つの決まり。

「それに約束を破るつもりはない。だから、ここまで切迫させたのなら、せめて可能な限り早く約束を果たしてやりたい」

「……」

「へぇ～逃げるつもりかと思ったけど案外真面目に考えてたんじゃない。見直して上げるわ」

リコは口を閉じ、ユーリを見上げる。もうこの青年は既に勝負を止める気は無いのだろう。それを察したからだ。エンクはユーリの言葉に笑みを深くする。エンクは気が付いていないが、先程の言葉が自分の言葉をユーリが真面目に捉えて考えていたことへの喜びも含まれている。無論勝負への闘争心もあるが。

「ここじゃ周りに被害が出る。場所を変えるぞ」

「いいわよ。その意見は私も同感だし。人が巻き込まれるのは私も嫌だしね」

「お兄ちゃん」

「悪いな、少しだけ待っていてくれるか？今誰か呼ぶから先に捜してても「私も行きたい！」リコ……」

「だって……だって、今回の事は私の所為だもん！私がエンクお姉ちゃんに余計な事を言ったのが悪いんだもん！！だから、だから……」

涙ぐみ、服を握りしめるリコを見てユーリは優しくリコの頭を撫でる。

「あ……」

「別にリコが悪いわけじゃない。これはいつか行うつもりだったし、それが少し早くなっただけだ。誰が悪いとかいうわけじゃない」

「でも……」

「それなら、見届けるか？」

「！」

「自分の所為だと言うのなら、自分が原因だと言うのなら、最後まで見届けてみるか？それも一つの選択だ」

「……いいの？」

「ああ、別に問題ないだろう？常夜の石の中から見れば危害を加える事も、意識を割く事も無いからな」

「ええ。問題ないわよ」

「そう言うわけだ。リコ、どうする？」

「見たい！せめて何もできないなら見届けたい！私にできるのはそれ位だから」

「わかった……ライザー！」

即座に召喚獣、ライザーを呼ぶ。赤い装甲をした少女が召喚され此方へとその金色の目を向ける。

「リコを常夜の石の中に連れて行ってくれ。細かい事情はリコから聞いてくれ」

『……了解』

言葉少なくユーリの言葉に応えるライザー。リコの手を取り、瞬時に赤いカプセルがリコを包み込む。リコは心配そうな目をユーリとエンクに向けたまま、常夜の石の中に転送される。

「……これで、もう問題ないわね」

「ああ」

そして二人はこの街から少し離れた場所の岩山地帯に足を運ぶ。砂漠での戦闘はお互いに戦闘の妨げになるので足場のしっかりした場所での戦闘を行う事にした。

周りに人はおらず、見ている者は誰もいない。唯一常夜の石から見ている者がいるくらいだろう。ここは既に決闘場。邪魔をするものは無い。

「さぁて、それじゃ、そろそろ始めましょうか」

「そう、だな」

「言っとくけど、召喚術を使ってもいいわよ。あれもアンタの力なんだから、卑怯なんて言わないわよ」

「そうか。だが、使っても憑依か融合だけだ。さすがに数に頼って戦う気は無い」

「そう、変に律儀なのね」

「律儀な訳では無いが、そういう事だ」

「言いわ！それならそれで行きましょうか。勝敗条件はどちらかが気絶するか、負けを認めるか。あぁ死んでも負けだからね」

「……殺す気か？」

「一応ね。何が起こるか判らないからね。決めるのは重要よ」

「おいおい」

お互いに目を合わせるとユーリは自身が作り出した剣、朱砂を引き抜いて手を下げた自然体でエンクを見据える。

エンクはユーリを鋭く見据え、額から角を生やし、自身が何度も打ち上げた末に作り出した槍、鳴神を構える。

「……来ないのか？」

ユーリがエンクに誘いをかける。それに対し、エンクは獰猛な笑みを隠しもせずにユーリへとその戦意を叩きつける。

「まさか！私はこうなる事をずっと……」

稲妻が迸る。既にある程度の手の内はお互いに知れている。故に探り合いは無し。だから遠慮は無用。

「ずっと待ってたんだから！」

槍を振り切り、その先端から稲妻が放射される。それは槍の軌跡に沿い、広範囲を薙ぎ払う鞭となる。

「そうかよ！」

その稲妻を剣の力で砂鉄を引き寄せ避雷針代わりにしてしのぐ。けれど、この程度はお互いにとって序の口以前の話。

「行くわよ！」

槍に稲妻を纏わせ、此方に突っ込んでくる。その雷光の一撃を炎を持って対抗する。共に浸食し合う雷と炎。辺りを明るく照らす光と熱が相手を飲み込もうとせめぎ合う。

「ふっ！」

「はぁっ！」

ユーリの剣劇がエンクの槍を弾き飛ばしその体勢を崩す。その勢いを保ったままさらに斬撃を振り下ろそうとするユーリ。けれど、それは更に高速の一撃によって防がれる。甲高い金属音を鳴らして、場が硬直する。

「あんまり甘く見てんじゃないわよ」

「そんなつもりはないんだがな」

弾かれた槍をそのままに体を回転させ、遠心力を取り込んだ一撃でユーリの斬撃を防いだエンク。そのままに今度はエンクがユーリを弾き飛ばし、回転を繰り返しながらユーリを攻め立てる。その連撃を受け、捌き、時には躱しながらユーリは凌ぐ。

「どうしたの？こんなもの？」

「まさか！」

受けに回っていたユーリの行動が変わる。槍の一撃をなぞるよう

に剣を振り、槍の軌跡にそって剣を走らせる。槍の表面を滑るように走った剣はエンクの持ち手を狙い突き進む。

「ちっ！このっ！」

在ろうことかエンクは槍から手を放し、周囲へ稲妻を放射状に放つ。これにはユーリも一気に下がり、回避するしかない。ここで、ダメージ覚悟で飛び込んでもリスクの方が高い。

「残念だったわね！」

再び槍を手に取ったエンクが此方へと突っ込んでくる。電気を操り、自身の体内に流れる電気を操作し、筋肉や反応そのものを強化する。それを魔晄による強化を持って対抗するユーリ。

「はぁああ！」

「行くぞ！」

両者が交差し、火花が散る。背後にいる相手に向かって振りかえる。振り返った先にいる相手に向かい、エンクは速さ重視の突きを行い、ユーリは剣よりも最短距離を突っ切る蹴りを選択。お互いの攻撃が再び交差する。

「なっ！」

その結果は、ユーリの蹴りがエンクの槍の側面を蹴り飛ばし、軌道を逸らされた槍が空を切る状況。顔を狙う上段蹴りを何とか体をかがめる事で回避する。だが、その瞬間エンクの直感は危険を感知する。

「ふっ！」

上段蹴りが突如軌道を変え、踵落としへと移行する。槍を振った勢いを利用し、体を回転させる。そのまま強引に槍を足と自分との間に滑り込ませる。次の瞬間、激しい衝撃が手にかかってくる。

「くぅっ！」

「へぇ……」

自身の攻撃を不格好ながらも止めたエンクへと感嘆の声を上げるユーリ。今のは自分でもうまく誘い込んだと思ったが、中々にさすがと言うべき反応の良さで防がれた。さすがにこれで終わるほど甘くないか、と思い直す。

「余裕かましてんじゃないわよ！！」

足を跳ね上げたエンクが連続で突きを放つ。それを体を反転させ冷静に剣で捌くユーリ。幾度となく響き渡る金属音。それは音楽の様で、主演である二人の動きに色合いを加える。エンクのしなやかな槍捌き、ユーリの剣戟の結界とも言うべき軌跡。それを一種の芸術として見るならば、他に類を見ない光景だろう。そこには恨みも憎しみも無い。お互いが戦いたいから叩くと言うシンプルな理由。

「はあああ！！」

速度を上げ突きを放つエンク。それを見据え、カウンターを狙うユーリ。だが、その意図は外される。周囲には黒い渦が収束している。磁力を引き上げ、周りの砂鉄を弾丸に変え全方位からのオール

レンジ攻撃を行うエンク。

「舐めるな！」

即座に魔晄を使い、魔力放出によって全ての砂鉄を吹き飛ばす。その行動によって辺りには粉塵が舞う。お互いの視界がふさがれ、その姿を見失った次の瞬間、背後から巨大な雷槍がユーリに向かい迫ってくる。

「ちっ！」

舌打ちと共に身を翻し、足から魔力を吹き上げ、フレアの様に光を撒き散らしながら、雷槍の射線から逃れる。だが、着地点から砂鉄の鎌が伸び、真っ直ぐにこちらを狙って来る。

「この！」

朱砂の力で炎を剣に纏い、砂鉄の鎌とせめぎ合う。砂鉄を若干焦がしながら押し返すユーリ。その背後から磁力を帯びた岩が大小合わせ数百個ほど飛んでくる。どうやらこの場所は鉄鉱石や砂鉄が豊富らしく、その規模は他の所で磁力を使う時よりも広く大きく作用する。

その弾丸を砂鉄の壁を作り上げる事で対処する。だが、その壁により、ユーリは周囲を囲まれ逃げ場を失う。上空以外の。

「くらいなさい！」

響くエンクの声。それと同時に唯一開けていた上空から光速と同義の落雷現象が起こる。膨大なその威力は集まっていた岩や砂鉄を

すべて吹き飛ばし、大きなクレーターを穿つほどの威力。大気には放電が起こり、しばらくこの一帯には近づけないだろう。そしてこの一撃を貫ってしまえば、これ以降の戦闘どころか、命すら失う威力だろう。それを躊躇なく撃ちこむエンク。そこには一欠けらの迷いすら存在しない。

「……」

煙が視界を防ぐ。けれど、油断はしない。あの人物はこちらの予想を超える。最悪無傷で現れる可能性もある。なぜかそんな可能性まで考え着く。その最中、感覚に何かが引っかかった。それは僅かな風の音。

「くっ！」

反射的にその場から飛び退く。次の瞬間、黒い斬撃が横切り、その後には巨大な亀裂が走っていた。

「……やっぱりそう簡単にはいかないか」

予想できていたと言った感じで目を向けるエンク。そこには砂鉄を周囲に渦を巻くようにしているユーリが無傷で岩山の上に立っていた。

「どうやってよけたの？結構タイミング計ってたつもりなんだけど」

けれど、エンクはそれよりも回避方法が気になった。回避したという事実よりも、その方法が重要なのだ。目の前の人物は過大評価無しで実力者だ。だからこそどんな手を使ったのかが気になる。

「炎と魔力を推進力にして砂鉄を雷の防壁にしてそのまま上空に跳んだ。一瞬さえ凌げば雷の脅威はほぼ凌げたようなものだからな。砂鉄の壁で防げる位置まで離れればそれで十分だった」

つまり、剣から生み出された炎と、自身の魔力を噴出し、落雷の直撃を避け、砂鉄を雷を凌げるくらいの量をかき集めて防いだという事らしい。恐らく感電しないように砂鉄との距離を幾らかとっていたのだろう。服に焦げ跡なども無い。

「でも、それだけの砂鉄を雷よりも早く集めるなんてできるわけが……アンタ！まさか！」

「まぁ、あの時集まってた砂鉄でもギリギリだったけど、あらかじめ来ると判ってたら用意するのは無理じゃないだろう？」

「最初から落雷が本命だって読んでたって事かしら？」

「まあな。なにせ逃げ場をなくそうとしてたのは、なんとなくわかったからな。後は最後に何が来るかを考えればいい。」

「それで落雷だと思ったの？」

「ああ、何せお前の性格からすれば大技で終わらそうとするだろうし、あの局面で横からの攻撃はまずない。なら遮蔽物が無く、且つ最後の回避場所である空の封鎖もできる落雷が効果的だって思ったのさ」

ユーリの言葉は大体当たっている。とはいえ、だから何がどうなると言う訳では無い。既に仕掛けは剥がれた。同じ手はもう通じない。あの青年の事だ。ばらすという事は他にも凌げる手があるとい

う事だろうが、これで、一つ手は潰した。今攻めているのは自分だ。ならばこのまま押し切ればいい。

「でも、ここまで押されてるんじゃない？さすがに疲れたかしら？もしかしてもう本気だったりする？」

「そう見えるか？」

「なら見せてもらおうかしら！本気っていう奴をね！！」

言葉を言いきった瞬間、角に紋様が刻まれ、一種の暴力とも言えるほどの膨大な量の稲妻が発生する。その奥には光り輝く角を持った聖獣、麒麟の力秘めし存在が誕生する。

『さぁ、手加減は無用よ！全力でやりましょうか！！』

その赤き眼には圧倒的な威圧が込められている。周囲に帯電する雷が解放の時を待ちながら光を強くする。それを静かに見据え、ユーリは剣を構える。前座は終わり、ここからは全開の勝負。

～常夜の石の中～

「す、すごい……」

常夜の石の中でリコは今までの戦いを見つめ、そう評した。確かに自分も戦う術はある。けれど、それは短時間だけの物であり、ま

だまだ外で行われている戦闘には届かない。それを少し悲しく、少し悔しく思いながらも眼を放さない。自身が引き金を引いたこの戦い。せめて見届けようと思ったから。

今、この場にエイナはいない。最初は不思議に思ったが、今はそれを気にしている暇も余裕もない。恐らく外を見ていないか、それか眠りについているかだろう。ならば今は外の戦闘を優先しよう。外の光景が見える以上、エイナの許可は続いているらしい。それならば特に問題は無い。

「でも、お姉ちゃん、楽しそう」

リコの目に映るエンクはとても楽しそうに映った。今まで誰でも明るく気ままに話しかけていたエンクだが、自分から会話に混じったり誰かに話しかけると言うのはあまりなかった。それこそ誰かが誘わなければ周りとの交流も浅く広くであまりなかっただろう。けれど、青年とあってからのエンクを思い出す。積極的に話をし、昔とは比べないほどの笑顔を見せるようになった。

「これもお兄ちゃんと知り合ったからかなぁ」

その行動を思い返し、リコは僅かに笑う。けれど、直に表情を真剣なものに戻し、戦闘に意識を戻す。幼いながらも戦闘に身を置いた者として、この戦闘を生半可な気持ちで見届ける気は無い。見ている側も全てを賭して見届ける。それが二人への礼儀だと思ったのだ。

「二人とも頑張って。でも大怪我だけはしないで」

相反する願いを口にする。それが可能かは判らない。確率で言え

ばとても低いだろう。けれど、どちらかが居なくなったりするのは嫌だし、痛みに顔を歪めているのも見たくは無い。だからこそ、最善、最優の未来を願う。叶わない訳では無い。信じれば叶うとは言わない。けれど、それでも、信じたい。笑顔の結末を。

少女の祈りが届くのかは誰にも判らない。けれど、今、その願いとは関係のない所で、少しずつ少しずつ歯車は狂っていた。決定的な破綻までもう少し……

稲妻が飛び交う中、ユーリは防戦一方となる。そもそも出力が先程とは桁が違う。一撃一撃が重く鋭く、速い。動きそのものは変わらない。けれど、基本能力が段違いに跳ね上がっているために全くの別物に感じてしまうのだ。槍の穂先は既に見えず、放たれる雷はこちらの反応を超え始めるほどの速度を持ち始めている。槍にせよ、雷にせよ、砂鉄にせよ、直撃をもらえばそこで終わり。仮にまだ戦闘続行可能でもそれをきっかけに押し込まれて終わりだろう。

『どうしたのよ。反撃どころか回避も満足もできてないじゃない。やっぱりさっきのが限界だった？』

「そう言うわけじゃないんだがな」

『へぇ、まだ喋るくらいの元気はあるんだ。ならもう少し踊って貰いましょうか！』

砂鉄が津波の様に押し寄せる。その量は先程とは比べる事すらお

こがましい。朱砂で砂鉄を操ろうにも、向こうの力の方が巨大であるために、こちらで制御できる砂鉄が全くない。故に今の朱砂は炎を生み出す能力のみを持つ丈夫な剣でしかない。決定力に掛ける。

魔晄にせよ、その出力はエンクの角から放出される力には流石に今のままでは後れを取る。単に全力で戦闘すればそれなりには拮抗するだろうが、そうやって後先考えずに使い過ぎれば、切り札まで使えなくなる。故に無駄な放出は避けたい。召喚術、とりわけ融合が出来なくなるのは間違いなく痛い。

ストラは既に戦闘で攻撃に使えるほど有効な手とは言えない。正確には雑魚ならば問題にならないが、今いるのはそれとは隔絶した存在。一撃に全てを込めれば対抗できるが持久力に置いては余り余裕がない。

迷いの森で使った赤い光は使い方が判らない。とは言っても知っていたとしても使う気はないが。どんな危険がまっているか、知れたものでは無い。命の危険がある戦闘ならいざ知らずここでそれにかける気は無い。

つまり、エンクが本気になった時点で、此方の手は大体潰されたことになる。既に接近戦はどうやってもダメージは免れず、遠距離戦では電撃や落雷を掻い潜るほどの威力や速度がない。中距離では砂鉄の
射程を躱し、飛んでくる岩石を防ぐ必要があり、それだけで体力を持って行かれるだろう。

いくら向こうにも時間制限があるとはいえ、迷いの森は全力の行使を続ける必要があったために短かっただけで、自分との勝負ならそこそこの時間を持つと予想している。長期戦は不利。ならば短期

決戦しかない訳だが、それも厳しい物がある。

「けど、このままでも意味がないか」

やるべき方針を固めると、自身が取るべき最善の方法を持ち出す。すなわち、魔晄とストラの同時使用。これなら魔晄の消費を抑えたままエンクの力に並ぶ事が出来る。とはいえあまり長時間する気はないが、疲労をためるのは得策じゃない。

「さて、試してみるか」

『何か狙ってる？でも、押してるのは私！このまま押し勝つ！！』

青と灰色が混ざり、一層強く輝く。そのユーリの姿を捉え、エンクは砂鉄を巨大な槌へと変え、一気に振り下ろす。それに対し、剣から炎を吹き出し、正面へと加速する。その速度はさっきまでの物とは文字通り桁が違う。止まる事無く此方へ突っ込んでくるユーリを見据え、エンクの体に電流が走る。最速で突っ込んだユーリの剣が剣を振り下ろしエンクの頭上へと迫る。

「喰らえっ！」

『残念ね……それじゃ、届かないわよ……』

声を残し、姿が掻き消える。稲妻を大気の残しながら。その後を高速で振り降ろされる剣が通過する。その直後、周囲一帯から雷撃が放たれる。絨毯爆撃のごとく放たれたその爆発は岩山を吹き飛ばし、更地に変える。側の岩山に雷が落ち、それは人型を取り声を発する。

『今の私にはその速度じゃ届かないわよ』

静かに言うエンク。先程の一撃は確かに速かった。けれどもこの状態の自分は十数秒程度なら雷そのものとなる事が出来る。先の一撃はそれで躱したのだ。そして置き土産とばかりに周囲を走り、雷球を設置し、全方位から放ったのだ。

目の前にはその攻撃で吹き飛ばされ原形を失くした岩山。さすがに今回は無傷ではすむまい。それに今の一撃は自分でもそれなりに威力を込めたものだ。これを無傷で済まされると沽券に係わる。

『さて、流石にリタイアかしら？』

「そんな筈ないだろうが」

『！！』

声が聞こえた方向を見る。そこから黄色い閃光が放たれる。それを再び雷化することで躱す。驚きと共に別の場所で実体化する。その視線の先には、魔方陣を空中に作り、紫色の光を放つ異質な魔力を纏ったユーリが静かにエンクに視線を向けながら佇んでいた。

『無傷、ね。結構自信あったんだけどね』

「確かにあのままなら直撃だったんだがな。けど、あいにく俺も負けず嫌いなんでな」

『それは初耳ね』

「負けず嫌いじゃないのなら、そもそもここまで来れてないさ」

『確かにね。それじゃ、ここから最終ラウンドと行きますか』

「ああ、いい加減この戦いも終わらせるとしよう。後が使えてるんでな」

『言ってくれるじゃない！終わらせれるものなら……やってみなさい！！』

戦いは最後の局面を迎える。お互いに本気対全力、ここに、邪魔が入らぬ私闘は決着を迎える。

『……先手、貰うわよ』

「ああ、お好きなように」

『それなら……消し飛びなさい！！』

今度は自身が持ちうる全力、能力を開放した自身の全てを使い雷を放つ。それは巨大な砲撃となり、ユーリへと雷速で迫る。それを見据えたままユーリの姿が掻き消える。先ほどと同じく転移で躱す。このポワソが憑依した今の状態ならば魔法の使用、更に結界なども使える。飛行や転移なども自由に行える。

「今までと同じなら、俺には通じないぞ」

『そうみたいね。なら、こっちもやり方を変えるまでよ！』

当たらなければどんな力や速さを持とうと関係ない。大事なのは自身への影響を完全になくすこと。それをエンクに告げる。すると

エンクは笑みを深くしながら磁力を操る。

エンクの力に呼び寄せられるように砂鉄が宙を舞う。それはしんしんと舞い散る黒い雪。この岩場一帯にそれがふりまかれる。

『姿が消えて捉えきれないなら……』

手を上げる。それはさながら大軍を指揮する将の如く。号砲を打ち鳴らす。

『その全てを押しつぶす！！』

雪の様な砂鉄の勢いが竜巻に変わる。磁力を浴びた砂鉄に触れた岩がさらに磁力を帯び、その範囲は劇的に広がっていく。岩山が崩れ、その岩山そのものがユーリの敵となる。

『砕けろぉおおぉおお！！』

裂帛の気合を乗せて能力を開放する。その威力は巨大な隕石のようでもあり、全てを吹き飛ばす大噴火と見えなくもない。黒き奔流が全てを飲み込む。轟音を立て、鉄の匂いが充満した絨毯を敷き詰める。

『……』

立っている者はエンクただ一人。けれど、その顔は依然険しいままだ。これで三度目。この戦いで自身が勝負を決めにかかった回数だ。そして今まで行った二度の攻撃はどれも不発に終わっている。だからこそ、ここでも何かをしでかすのではないかと気を張り詰める。その直後微かな振動を感じ取る。舞い散る砂鉄がその場所を特

定する。

あらかじめ砂鉄をばらまいたのは先程の広域攻撃を行うためなのが一つ、そしてそれが本命だと誤認させるためと言うのが一つ。その本領は探知。例えどこから現れようが此方がいち早く気付く事が出来れば言うほどの危険は無い。だからこそ相手の位置を掴むために、この戦場を掌握するために張り巡らせた蜘蛛の糸。それに今獲物がかかった。

『そこ！』

「！！」

驚愕に染まった顔を最後に、ユーリは極度に圧縮された雷槍にその身を貫かれ、その威力に吹き飛ばされる。そのまま吹き飛んだ先の岩山へ叩きつけられ、半身が埋まりこむ。それに確かな感触を感じる。

『奇襲をする気だったのかしら？けど、私の方が一枚上手だったみたいね』

「……」

『さぁ、これで私の勝ちね。負けを認めなさい！』

槍を突きつけ自身の勝利を宣言する。ここに勝敗は決した。少なくともここからの逆転劇は存在しないだろう。満身創痍のユーリとまだ余力を残したエンク。地に倒れ伏したものと、大地にを踏みしめ見下ろす者。それは傍目からでも十分に勝者と敗者を分かつ。

……これが真実本人であるのなら、だが。

「……」

エンクは気づくべきだった。先程雷撃の槍を当ててからと言うもの、ユーリが一言もしゃべっていない事を。ユーリの像がゆがみ、掻き消える。そこには巨大な魔力を詰め込んだ球体が存在感を放っていた。

『なっ！』

驚愕し、目を見開くエンク。けれど明確な危険を感じ取った体は即座に雷化していく。完全に雷化した直後、周囲を巻き込んで魔力が荒れ狂った。

爆煙をあげ、轟音と共に見上げるぐらいに巨大な岩山が崩れ落ちていく。この戦闘で破壊された岩山がまた一つ細かな破片となって景色を埋め尽くして行く。

そこから少し離れた場所に雷が走る。先程雷化して爆発を避けたエンクの姿が現れる。その表情は険しい。

『……やってくれるわね。流石に今のは背筋が凍った気がしたわ』

小声で毒づき周囲を警戒する。周りはまだ煙に包まれ、その奥の様子を伺い知ることはできない。

『……さっきまでとは逆の状況になっちゃったか。ちょっと不味いわね』

エンクはこの戦いにおいて相手をしたに見たりはしない。迷いの森で自分の全力に耐えきったモンスターを倒しているのだ。楽観的でいられる筈もない。

守るのは性に合わない。此方から攻め込み活路を見出す。それが自身の性格であり、戦闘法。今までそれで乗り切ってきたのだ、今回も切り開いて見せる。

『さぁ、私の攻めを上回れるものなら、やってみなさい！！』

その言葉と共に、エンクが雷化する。けれど、今回はそれだけでは無い。砂鉄が渦を巻き、黒い竜巻となり吹き荒れる。大地を砂鉄で作られた人型が闊歩する。雷雲が生まれ、いたるところに落雷を浴びせる。

狙いは広域殲滅。どこにいるか判らないならもろともすべて打ち滅ぼす。その方法は結果的には功を奏したと言える。もし、ここで守りに入ればユーリが畳み掛けに入っていただろう。けれど、そうはならなかった。だから、此処は静観した方が上策。勝手に疲労して行くのだ。ユーリからすれば儲けものだろう。

だが、これはそう言ったものは余分であり、無粋。だからこそユーリは動く。魔方陣が杖の先に作られ上空から光の本流が雨霰と撃ち放たれる。

「大暴れと言った感じか。映画みたいだな」

その言葉を言いながらエンクの領土を破壊して行く。けれど、この行動はユーリをおびき出すための撒き餌。そして、次のための布石。

そして、その目的のために全てが動き出す。

黒い竜巻は磁力を帯び、雷をその身に宿した後、その出力を一層引き上げていく。螺旋を描き臨界へと向かう稲妻。砂鉄の人型が大地を埋め尽くし、電流を走らせる巨大な回路となる。雷雲が雷を作り出し範囲を広げていく。

『これが！』

それによって作られた、巨大なエネルギーの場が形成される。今度はそれに雷化したエンクが自分を重ね合わせる。個人が生み出し、それぞれが独自の方法で練り上げた膨大な出力が、今個人の力へと還元されていく。そのエネルギーたるや、生み出した張本人であるエンクすら扱いきれずに一部持て余す程のモノ。

『私の！』

凝縮されたエネルギーはその質を変え、より目的に沿うものとなる。すなわち純粋な破壊の力へと。それを更に一点に集まる。その場所は指先、その先には巨大な砲弾に加工された砂鉄の岩山が存在していた。

『全力！』

その向かう先は既に突き止めた空中で砲撃を放つ青年。無論直撃すればその命は無いだろう。けれど、こうまでしないと勝てないと、心の中で何かがそうささやいている。その直感に近いナニカは今までもエンクを支えてきたものだ。だからこそ今も疑う事は無い。

『だぁあああ！！』

圧倒的な質量とエネルギーを纏って、今までで最高最強の一撃が空間を最速最短で疾走する。それはその先の者へと勝たんがために。止まる事無く進軍する。けれど、その先にいる者こそがあらゆる全てを塗り替えるイレギュラーであることが最大の壁となる。

「落ちろ！」

既に展開していた魔方陣、その数は実に十枚。おたがいに作用しあい、相乗効果で威力を増幅して行く。一つ一つは小さな灯。けれど、それも数を集めれば、空に輝く星と並び立てる光となる。

振り下ろされる光の槌。それに対するは天へと振り上げた雷光の砲弾。一瞬の空白の後、全ての音が消え、あらゆる景色が消え去った。

『はぁあああ！！』

「おぉおおお！！」

お互いがその力を結集させ撃ちこんだ必殺の大技。打ち勝った方が勝つ。これはそう言う戦い。引くことは既になく、そんな段階はもう過ぎた。後は前へと進み続けるのみ。その先に何があろうとも。

『負けられないのよ！！アンタには！！』

その言葉の真意はユーリには判らない。声は聞こえず、唇の動きを読み取った事で判った言葉。何を思い、何故こんな事をするのかは自分では推し量れない。けれど、唯一つこの場で自分にできる事

はある。

その言葉と共に、エンクの力が強くなり、星の光を押し返す。そこに込められた強き思いがユーリへと伝わる。ほんの少しだけ表情を緩める。まだ余力はある。けれど、このまま勝ってもエンクは納得しないだろう。少なくとも心の一番深い所では認めはしないだろう。

融合と言う手札を切らなかったユーリは手加減していたと。それはエンクにとって傷となって残るだろう。だからこそ、完膚無きまでに叩き潰すつもりで挑む。

「……お前がどれだけこの一戦を望んでいたか、今の言葉とこの威力でだいたい把握した。けど、やっぱり……」

光がユーリを包む。そこには先ほどの表情は既に無い。光はユーリを包み、その姿を変質させる。髪は金色に染まり、服装は魔法使いの様な黒いローブを着た姿になり、体に存在する魔力の回線がつながる。それは集積回路の様に複雑に広大に目的を果たすために形を為す。

魔力の密度が跳ね上がり、それは空間すら軋ませるほど。そしてそれすら意に介さず、目は前へ。その奥の相手へと向ける。

――融合召喚――魔道心霊――

『……負けてはやらん！！』

魔方陣がより複雑により濃密に描かれ、その全てが極光を放ち、星の光がその身を持って雷神を大地に叩き落とす。そこに言うべき

言葉はなく。ただ結果として、片方が勝ち、片方が負けたという結果のみが残った。

砂漠を越えて　電撃姫　星へと挑む（後書き）

気付いたでしょうか？エイナが出てない。作者は書いてから気付きました。あとがき割いてる最中に気が付いた。もう駄目だ。なんか色々と。

最後は融合で〆てみました。なんかこういうのもいいかなと。

エンクはこれが今の所の見せ場ですね。この後は作者が使いたいと思えば再登場もありとしてます。召喚獣のキャラ作りが面倒で困ります。

リクエスト　今の所、特にないので良ければどうぞ。

白夜との会合　黒く染まりし思い（前書き）

さて今回は割と暗めな気がしない事も無い。けど、そこそこ明るい所もあるし、まぁいいかな？

さて、今更ですが、作者はリゼルドが苦手です。キャラが如何とかでは無く、一回一回打ち直してカタカナに変える作業が面倒で面倒で、どうにかならないだろうか？

今回も急展開になってますが（そうでもないか？）次はしょっぱしから戦闘です。

白夜との会合　黒く染まりし思い

遠目には人口の建造物。そこには人の気配が感じ取れる。そこに向かっている人影。足音は一つ、共に歩くも者は誰もいない。

光射す道を無言で歩く。その足は止まらずに街へと向かう。もうすぐ街の中へと入る事が出来るだろう。

「……俺、何やってんだろう……」

不意にぽつりとつぶやいた。意識しての言葉では無い。けれど、それは本心からの言葉だ。今現在、その声の主、ユーリはある意味で途方に暮れていた。街へと歩いている自身の背中にいるある人物に対して。

「……うっかりって怖いな。場の勢いに任せるもんじゃないな」

その背中には、先ほどまで壮絶な私闘を演じた相手であるエンクが眠ったままユーリに背負われていた。

「初めから常夜の石に入れればよかったんだよな。なんで気付かなかったんだ？」

思い出すはあの戦闘の後。

ユーリの攻撃が周囲を吹き飛ばし、戦闘に終止符をつけた。融合を解き、何故か上機嫌なポワソを送還し、自身の足で立つユーリと、既に意識がないまま、けれど、両の足でその場に立ち続けるエンク。

だが、その体勢が唐突に崩れる。既に立ち続けていられるほどの体力も無く、姿勢を維持する意識も無い。ユーリの一撃はエンクから倒れる暇すら奪ってその意識を吹き飛ばした。

けれど、その体には目立った外傷はない。先ほどの一撃は生命以外になら破壊を齎すが、生命あるモノには精神に負荷をかけるだけで終わる。つまり、強制的に意識のみを刈り飛ばす砲撃であり、それがポワソの操る魔法の一つ。非殺傷魔法である。

そして倒れる前にエンクに近づき、その体を支える。その体の細さと軽さに少し驚きながらも、自身の背に背負う。

……後になって思えば、これがそもそもの間違いなのだが、本人も改めてエンクを間近で見て、自分が行ったのだと少し罪悪感を覚えたために、それを拭おうと、自分の手の届くところで目を覚ますのを待とうと考えたのだ。常夜の石の事は、エンクの事に思考が集中し、この時忘れていたりする。

そんなこんな歩き続けて数分後、潔く思い出す。というか常夜の石の中で看病すれば問題ないのではないか？確かに急いではいるが、ここまでは進み続けなければいけないというものとはまた違う。だからこそ、一旦降ろそうと腰を下ろしたのだが、何故かエンクの体が自分の体から降りない。

さすがに不思議に思い、顔を後ろに向ける。そこには……ユーリの服を握りしめ、両足でユーリの胴体を挟み込んだ状態で眠りこけ

る電撃の眠り姫がいた。

「……おい」

「……んにゅ」

んにゅってなんだ！お前そんなやつだったか！？というか結構余裕あるなお前！？

内心そう思った。本当にその瞬間偽物でも担いでいるのかと疑った。相当失礼である。元々、エンクに対するユーリの印象はバトルジャンキーであり、それ以外の印象はあんまりない。精々面倒見がよく、妙なぬいぐるみを気に入っているくらいだろう。

「……なんかどっと疲れた……とりあえず何とか降ろさないと」

このまま背負った状態で歩いて帰るのは遠慮したいので、降ろそうと色々挑戦してみる。まずは軽くゆすってみる。

「……すぅ」

効果なし！！

次は若干強めに振ってみる。これなら眠りが浅ければ問題なく目を覚ますだろう。目を覚ました後に少し問題があるかもしれないが、しなくてもいい苦労を進んでしたいとは思わない。体をゆする。

「……うぅ～ん」

効果無いっぽい！！

さすがに座ったままだとこちらが疲れるので、いい加減立ち上がる。そして、どうにかしようと考える。思いついた事は色々やってみようと考える。もしかすると目覚めた瞬間に電撃が走るかもしれない。けれど、まぁ、それも仕方ないかと思う。成り行きとは言え勝手に背負ってしまったのだ。在って間もなく、よく知りもしない男の背になど乗っていたくは無いだろうと結論付ける。

「おい！いい加減に起きろ！！」

声をかける。耳元で結構音量を上げる。これなら少しは効果があるかなと期待したが。

「……ふふっ」

なぜか笑われた！

「……これ、手を放したらそのうち落ちるんじゃないか？」

思いついたら即実践、手から力をぬき、そのまま待ってみる。思った通りエンクの体が重力に引かれ下がってくる。これならと思ったが、突如手が首に回り、こちらをチョークスリーパーの様に締め上げてくる。

「……お前、起きてないか？起きてるよな？絶対に目覚めてるよなこれ！」

その声にも返事は無い。本当に寝ているのだろうか？けれど、呼吸やら筋肉の弛緩具合を感じ取るに眠っているのは本当らしい。それが判る自分がなんか嫌になったが、この反応が無意識で行われち

るのは間違いないらしい。

「……吹き飛ばすか」

さすがに面倒になったらしく、結構危険な言葉がでる。加減した魔晄で弾き飛ばしてやろうと思い、体に力を込める。戦闘が終わり、やはり疲れもあったらしく、考えが投げやりな物へと変わっていた。

「……すぅすぅ」

けれど、幸せそうに眠りこけるその笑顔が目に入り、なぜか毒気を抜かれてしまった。

「……まぁ、いいか。こんな時もある、のか？」

少々納得はいかないが、女を怒らせると後が面倒くさいと言うのは桃色の髪をしたじゃじゃ馬で痛感しているので、とりあえずほっておくことにする。問題の先送り、もしくは現実逃避とも言う。

「とはいっても、誰かを背負うなんて、そんなのは今までなかったから、少し、新鮮な感じがするな」

なんとなく、本当になんとなく、このままいこうかと考えた。今はそれでいい、問題は街中に入ってからだが、それまでには起きるだろうと楽観的に考える。

「さて、決まったら早速行くか！」

立ち止まっていた足を動かし、前へと進む。行き先はアレスパの街。今度こそリコの目的を果たし、エイナの記憶を戻すために、そ

して、自身を元に戻すために。

ちなみにユーリは召喚獣は呼ばない。この姿を見られるのはさすがに嫌なのと、何故かそれをすると面倒くさくなると直感で理解した。まさかと思うが下心でやったとか思われるのだろうか？さすがに勘弁願いたい。

そして、常夜の石の中では、リコが複雑な顔でそれを見ていた。外に出ようにもユーリがストラを常夜の石に結界を張るために割いているので外へは出れないのだ。エンクの攻撃で常夜の石が傷つかないために配慮だったのだが、それは今も続いている。

「うぅ～！！いいなぁ、エンクお姉ちゃん！私もお兄ちゃんに背負ってほしいなぁ。外に出たいけど何度やっても出れないし」

ユーリの両手はふさがり、エンクを背負っている分どうしても初動が遅れる。だからこそ、念には念を入れている。それが今のリコにとっては不満なのだが。

「もう！これでエンクお姉ちゃんが起きたらどうしよう！まだ、少し微妙な感じだったけど、流石にあれじゃエンクお姉ちゃんもお兄ちゃんを好きになっちゃうかな？」

焚き付けたのは自分であり、さっきの戦闘の原因でもあるが、それでも気持ちは複雑なものだ。仲がいい二人がさらに近づくのはいいことだが、それを羨ましく、不安そうに見る自分も確かにいるのだ。

「うぅ、どうかお姉ちゃんが起きませんように！！」

両手を合わせて祈るリコ。割と必死に祈っている。それが成就するかは別だが。

そして、リコの祈りは全く通じていなかったりする。

うわぁ！！ちょ！ちょっと！……どうすんのよこれ！！

ユーリの背中で目を覚ましたエンクがあたふたと狼狽えているのが今現在、そして、寝ているものと考えているのか、ユーリは気づかない……真相は何をやっても起きず、寝相が悪いのかそれとも背負われているのが嫌なのか、身じろぎを繰り返すばかりなのでもう気にしないようにしているのだが。

なんでこんなことになってんのよ！！というか、私はなんでこんなとこいんのよ！！

声を必死に殺し、内心パニック状態で体を硬直させる。目が覚めたのはほんの少し前、ユーリが戦闘後の改装を行っている間にエンクは目を覚ましたのだ。

なんか寝心地良いなとか思ってたら、な、なんでこいつの背中に私がいるのよ！！どういう状況よ！どんな不思議トリックよ！モンスターの罠！？

思考がまとまらず、関係のない方向へ爆走する。顔は耳まで真っ赤で、心臓は破裂しそうなほどに高鳴っている。とりあえず、なん

とか少しだけ落ち着いた頭で起きる前に何があってこうなったかを思い返す。

え～と、確か、アレスパの街について、色々話した後にアイツに勝負を挑んだのよね。それで、アイツがそれを受けて、そうだ！岩山に移動したんだっけ。さすがに砂漠で戦うのは嫌だろうって事で。それからアイツと戦って、それで……

記憶をたどり、そこまで思い出して、エンクは静かに息を吐く。何の事は無い。自分がここに居る理由が判ったのだ。つまり意識を失った自分がユーリに背負われている以上、そして、勝負の最終局面、砲撃の撃ち合いから先の記憶が無い。これが示すものはつまり……

負けちゃった、か。あ～あ、強さには自信持ってたんだけどなぁ。そっか。私、負けたんだ

静かに受け入れる。それが本当の事なのだと、心に刻み込む。思えば戦った相手が、自分に勝ったのがユーリでよかったのかもしれない。他の者ならもしかすると気絶した自分に対してよからぬことをするかもしれない。自分だって女なのだし、自覚もある。

……待って！という事は、こいつ気絶した私を見て何も感じなかったと。悠々と背中に背負うくらいには女として意識してないと、そういう事なのかしら？

どういうわけか、思考が捻じれ曲がった。そして、目の前にいる青年の後頭部を睨みつける。背負っているユーリは何故か寒気を感じ振り返る。すると、そこには顔が赤いままこちらを睨みつけるエンクがいた。

「……おぉ」

「何よ、その反応。起きてちゃ悪い？」

「いや、そんな事は無いが。起きたならそう言え」

少しは驚いたが、直に冷静さを取り戻すユーリ。淡々と喋っているその姿に、さっきの考えが当たっていると確信する。確かにそんな仲ではないが、これほどまでに意識されないのも腹が立つ。何事もきちんと相対しないと納得がいかないらしい。ユーリからすると別に意識してない訳では無く。むしろ、意識しているからこそ何とか気にしないように振る舞っているだけでしばらく前まで歩き方がぎこちなかったりする。

「……とりあえず、もう大丈夫だろう？降ろすぞ？」

「え？」

その言葉に疑問符を上げる。だが、気付いてみれば当然の事だ。目を覚まさないから背負っていただけで、本人が目を覚ましたのならもうその必要もない。この言葉は妥当な物だろう。けれど、エンクは納得しない。

このままいったらこいつが私を意識しないままで終わるじゃない！！私だって女なんだからそう言うのをコイツにも知らしめないと！……なんか悔しいし。け、けど！好きとかそんなんじゃなくて、ただ、納得がいかないだけなんだから！

心の中で色々考えるエンク。無論ユーリが知る由もない。降ろそ

うと膝をつき、下りやすくしても、一向にエンクが下りない。不思議に思い振り返る。その視線の先には俯きながらボソボソと何事か呟いているエンクがいた。

「……おい、早く降りろ」

「……いや」

「……は？」

「下りない！」

「なんで！？」

「うっさいわね！アンタはこのまま私を運んでったらいいのよ！！ほら！さっさと行きなさい！」

その理不尽な言い分にさすがに驚くユーリ。どこがそうなってそんな結論に達したのかは謎であるが、その言葉を実行すると疲れるのは自分である。

「おいおい、なんでそんな話に……」

「う、うっさい！アンタはこのまま歩いてったらいいの！それとも何？こんないたいけな女の子に歩かせるつもり？！」

「いや、今の言葉には該当しないと「何か言った？」……なんでこうなったんだか、不幸だな」

その言葉を耳ざとく聞き取るエンクの頬が引き攣る。

「……へぇ、私を背負うのが不幸ね。言ってくれるじゃない！」
エンクの手から雷撃が迸るのを見て、ユーリもさすがに不味いと悟る。渋々とエンクを抱えたまま街へと進む。一歩一歩、歩数を重ねるごとに悲しくなってきた。
「ちょっと！私を背負ってるんだからもう少し喜んだらどうなの？」
「さっきの会話の後でこの状況になって喜ぶ奴がいるとでも？」
「嬉しいでしょう？」
「どういう理屈で？」
「アンタ、男でしょう？」
「そうだが」
「だ、だったら女の子背負ってる今の状況嬉しいでしょう？」
「……はぁ」
「なんで溜息をつくのよ！」
「はぁ」
「何よ！私背負うのがそんなにいやなの？」
ユーリの背中でバタバタと暴れるエンクにまた厄介ごとか、と達

観するユーリ。何を血迷ったのか、自身の背中から降りず、それで自分に感想を尋ねてくるエンクを見て、結局何がしたいのか判らない。とりあえず考えて思った事は……嫌がらせという思考に行きつく。

「ちょっと！人の話聞いてんの！？」

「ああ、聞いてるよ。というか首絞めるな」

背中に覆いかぶさり両手をユーリの首に回し、背中に胸を押し付けるような体勢になっている。けれど、特に反応は無し。まぁ、言うほどないのも事実だが。それでも無反応と言うのはあんまりでは無いのか。絶壁では無いし、ふくらみくらいは傍目からでも判るのに、この男は何の反応もしない。さすがに落ち込む。あまつさえ首絞めと思われたのだ。落ち込むなと言う方が無理だ。

「……」

「……？」

急に黙ったエンクにユーリが疑問を抱く。とりあえずもうすぐ街へと入る。できれば街にはこの状態で入りたくないのだが。その願いはかなえられそうもない。そう思ったが次の言葉で流れが変わる。

「……もういい。」

「？」

「下りる」

「そうか」

その言葉を聞いて少し安心する。これで、街で面倒な事態にならなくて済む。早速降ろそうと思い、膝をつく。思えば目を覚ますまでは少々動かれたが問題は無かった。目を覚ましたらこの状況。ああ、本当に……

「……眠ってる時はかわいいのにな」

「！！」

小声で言ったのだが、どうやら耳ざとく聞こえたらしい。だがユーリはそれに気付かず降りるのを待つ。けど、一向にその気配がない。

エンクはユーリの背中から降りようとしてさっきの言葉で顔が再び真っ赤になっていた。かわいいという言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡る。その度に体温が上がっていく。何気ない一言。それも面と向かって言われたわけでは無い。けれど、だからこそ伝わるものもある。嘘や飾ったものでは無い言葉。それがエンクの耳を打つ。

「おい、下りるんじゃないのか？」

「……うぅ～」

「……どうした？」

「ア、アンタ！！」

「なんだ？とりあえず、早く下りて……」

「何してんの！！とっとと歩きなさいよ！！」

「はぁ！？さっき下りるって言ったろうに」

「誰がそんなこと言ったのよ！早くいきなさい！！焼くわよ！！」

「……理不尽な」

なぜか活き活きとした声でこのまま進めと言うエンク。対してユーリは気落ちした様子でエンクを背負っていく。何を間違ったのかを考えながら。

「ほらほら！さっさと行きなさい！走ったっていいわよ！！」

「疲れるから却下だ」

「何よ面白くないわね」

「そういうのは彼氏とか見つけてやればいいだろう？俺を使わんでも……」

「か、彼氏ね。そういう事なら仕方ないわね！よし、走りなさい！！」

「お前人の話聞いてたか！？……まったく」

なんだかんだ言いながら走り出す。頬を撫でる風が気持ちいい。誰かの背で、普段見ない視点で見る世界も良い物だと思った。これが、このまま続けば楽しそうだ。少なくともこの青年と共にいれば

退屈はしそうにない。けれど、別れは近い。それを思い出し、物足りなさを感じた。

「ほら！もっと早く！！誰よりも早く！！！」

「無茶言うな！ああもう、どうしてこうなった！」

終いには魔晄を使って疾走するユーリ。結局言われたとおりにしている所を見るとやはり根元の所で人は良いらしい。それを笑顔で見下ろす。

まぁ、コイツとならいいか。そう言う関係でも。きっと楽しそうだしね！！

密かに想った考えを胸の中に秘める。

けど、そうなるとライバル多いわねぇ。リコもそうだし、エイナもそうだし、召喚獣達も狙ってる、わよね？

ユーリに好意を寄せる者をピックアップする。結構な数がいると判明した。少しいらっとした。

ま、まぁ、私もやる以上は負けたくないしね！そうよ、これは勝負なんだから！！コイツ以外の誰にも……ううん！誰にも負けるつもりなんてないんだから！！

新たに心の火を灯す。完全に持ち直した心が力強く脈動する。

「アンタ！」

「なんだ？」

「今度は負けないからね！首を洗って待ってなさい！！」

「……え？」

「何よ！その顔は！今度は私が勝つんだから！！」

「……いや、またやるのか？これで終わりじゃ……」

「そんなの……」

思えば勝負して初めて意識したんだった。そして勝負に負けてそれに納得がいかなくて再戦を約束して、色々な事が有った。それで、様々な顔を見た。冷静に前を見る顔、戦闘者としての顔、屈託なく笑う顔。困惑顔。そして、こちらを見据え、真剣に見つめる顔。その果てに再戦を行い、自分は負けた。けれど、これで終わりじゃない。終わりになんかしてはやらない。

アンタは私の獲物なんだから！！

「私が勝つまで続くに決まってるじゃない！！」

「……理不尽すぎるぞ」

「何よ！いいじゃない！！良かったでしょ。私みたいな子と一緒にいられるんだから！」

「……それが戦闘じゃないなら、普通に喜ぶんだがな」

「え！？」

不意の言葉に驚く。つまり、この男は自分と戦闘以外で一緒にいたいという事なのだろうか？それなら、こっちもきちんと応えないと……

「べ、別に私だってそ「ユーリお兄ちゃん！！」ちょっと！」

ユーリの言葉にかえそうとしたエンクの声を遮ってリコが常夜の石から出てくる。さすがにエンクの目が覚めれば不意打ちや不測の事態にも十分対処できると考えたのかストラの結界は解除した。だからこそリコが外に出てこれるようになったのだ。

「お兄ちゃん！！」

「どうした、リコ？」

「私もおんぶしてほしい！」

「……急にどうした？」

「むぅ～エンクお姉ちゃんはよくて、私はダメなの？」

「いや、そう言う問題じゃないと思うが」

「お兄ちゃんはエンクお姉ちゃんじゃないと背負いたくないの？」

「「ぶっ！」」

この言葉にさすがに吹き出す。エンクも驚いたらしく、同時に咳

き込む。

「……どういうふうに考えたらそうなるんだ？」

「中から見ててそう思ったんだけど」

「そう見えたのか？」

「そうとしか見えないよ！！だから私にもやって！！」

「だからの意味が分からないんだが……」

「そうよ！べ、別に私たちはそんな関係なんかじゃないんだから！」

「それじゃ、ユーリお兄ちゃんとは何にもないんだね？」

「む、むぅ……そ、それは……」

「ほら！答えられないじゃない！」

「……後でやってやるから、そんなに暴れるな。もうすぐ街へ入るから、おとなしくしてような」

さすがにこのまま街に入って注目の的になるのは避けたいとユーリはリコとエンクの言い合いを止めに入る。そのかいもあってか、何とか仲裁に成功する。

「なんか戦闘よりもこっちの方が疲れたな。やれやれだ」

疲労感をたっぷりにじませた言葉をつぶやきながら街へと入る。

結局エンクを背負ったまま……何度言っても下りなかった。隣にいるリコが握っている手を抓りながら頬をふくらましている。地味に痛い。女難の相と言うのは本当にあるのかもしれない。と少し逸れた事を考える。

「不幸だ……」

なぜかそうとしか思えなかった。傍から見れば羨ましい光景にしか見えないのだが、本人からするとそんな気が全くしない。むしろそこに考えが行きつかない。笑い話と言うより、道化とかいて滑稽と読む。

アレスパの街に入り、とりあえず、周りの眼もあるので早々にエンクを振り下ろし……散々文句を言われた。それに対してリコがなぜか笑顔で笑っていたが。とりあえず元々の目的を果たすために行動する。

とりあえずファイファーの元に通じる魔方陣を稼働させる。なんだかんだですっかり忘れていたし、今ではあまり必要では無い。けれども、村や街の交流の場としては十分利用価値がある。これでツエーゼの村とアレスパの街の行き来が出来る。

ファイファーの元へは一度大本の魔法陣から入った者しか行けないみたいだが。これはのちに村人から聞いた事でもある。

「さて、リコのおばあちゃんを探すとするか」

「うん！」

「それで、場所は覚えてるのか？」

「それなんだけど……大体は覚えてるんだけど、細かい所は判んないの」

「そうか……それなら覚えてる所まででいいから行って見よう！」

「そこからはどうするの？」

「まずは聞き込みだな。それで、判ればよし、判らなければリコの記憶にある顔を探すだけだな」

「大丈夫かな？」

「リコがどれだけ覚えてるかにもよるしな。まぁ、慌てずに行こうか」

「それじゃ、とりあえず、移動しましょうか」

エンクの言葉と共に移動を開始する。エンクはリコの目的が終わってからでも剣を持っていくのは問題ないと言い、一緒についてきている。なぜかリコが残念そうにしていたが。女の子は判らない。

しばらく行くと、奥の方に様々な武器や道具を並べているの建物を発見する。

「あれは、店だな。ちょうどいいから何か買っていくとしようか」

「そうね。なんだかんだで迷いの森と砂礫の荒野で結構道具とか使ったしね」

「後は水もだよね！」

「そうだな、どうする？一緒に来るか？ここで待っててもいいが」

「行く！！」

「そうね。ここまで来るなんて初めてだし、何があるか見ときたいし、鍛冶師としてはね！」

「それなら行くか」

三人で店の方へ歩いていく。こちらが近づいているのを向こうも察したのか、笑顔で応対してくる。

「らっしゃい！！何が入用で？」

「とりあえずポーション濃い口をいくつか買っていくか……後は」

商品を見渡して買い物を行っていく。リコとエンクは他の商品を見ているらしく、こっちには見向きもしていない。

「これは……」

ユーリはあるモノを見つけ手に取る。それは召喚獣の名前の欠片。魔石である。こんなものまで売っているのかと不思議に思った。

「これももらいたいんだが……」

「んん？……これはウチの商品じゃないな。やるよ、そんな石ころはした金にもなりゃしねぇ！」

「まぁ、そう言うなら貰っとく」

内心儲けたと思いながら他の物を買っていく。淡々と買い物を続け、あらかた買った後、リコから名前を呼ばれる。

「ユーリお兄ちゃん！」

「どうした？リコ？」

「これ、どうかな？」

そこには青いローブと白いワンピース、縞模様のストールをつけたリコの姿があった。

「似合う？」

「……ああ、結構にあってるぞ」

それを見て笑顔で感想を述べてやる。それを聞いてリコの顔が満面の笑みに変わる。

「本当！？」

「ああ、その服を買うのか？」

「え？ああ！そう言うんじゃなくて！ちょっと来てみただけで……」
「金なら心配しなくてもいいぞ。別に余裕あるし」
「けど……」
「今更遠慮するようなものでもないだろうに」
そう言ってリコが今来ている服の清算をしようとカウンターへ向かう。その時、傍にエンクが来る。
「……どう？」
静かにそう聞いてくる。そっちに目をやるとエンクが赤いコート、黒のスカート、白のシャツに着替えた姿が映る。
「……悪くないんじゃないか？」
「……なんか言い方がそっけない様な気がするんだけど」
「気の所為だ」
「それじゃ、これもよろしくね！」
「おい、これもこっち持ちか！」
「当たり前でしょ！女の子にお金払わすなんて甲斐性がないわよ！」
「甲斐性とかそう言う物か？違うと思うぞ。少なくとも今回は……」

「いいから！ほら！」

「……まったく」

せかされるままに二人の服を購入する。買った時の店主の生温かな視線が、何となく納得がいかなかった。そして、買い物を済ませた後、店で手に入れた魔石を組み合わせる。目立たないように光を抑え、蜃気楼のように現れる新たな召喚獣。その名はプニム。

『おおっ！どしたのこれ！？あたしは誰よ！？』

「「「……」」」

現れるなり自分の姿に驚きあちこち引っ張っている少女。紺の髪を振り回し、恐らくは耳だろう兎以上に長く、垂れ下がった耳が振り回すたびに壁へと当たり穴をあける。藍色をしたダボダボのシャツにジーパンと言った格好をしている。

『なんで！？なんでこんな姿になってんの！？』

「とりあえず落ち着きなさい」

『え？……何よ？』

「いや、何じゃなくてそのままだと建物壊しちゃうから、とりあえずやめなさい」

『え、ああ、本当だね……？』

不意にユーリに目を向けるとじ～ッと見つめる。いきなりのその

態度に若干驚いたユーリ。二人の視線が鋭くなる。けれどそんな事には構わずにユーリを凝視するプニム。

『貴方！貴方があたしを召喚した人？』

「ああ、そうだが」

『へぇ、それじゃ責任とって！』

「「「はぁ！？」」」

その言葉に驚く三人。しかもほかの二人は何を考えたのか。顔がやばいくらいに怖い。

「アンタ、まさかはじめてあった子に……」

「お兄ちゃん、そういうのはいけないんだよ」

「……お前ら、多分今考えてるのは間違ってると思うぞ」

押しとどめるユーリ。今にも爆発しかねない二人。それを気にせずプニムは言葉を繋げる。

『貴方の所為でせっかくの木の実を落としちゃったじゃない！！どうすんのよ！』

「は？木の実？」

『そうよ！あれ美味しかったのに……』

そう言って落ち込むプニム。とりあえず道具袋からあるモノを取り出して渡す。

『何これ？りんご？』

「ああ、これじゃだめか？」

『むぅ。けど、食べ飽きてるのよね』

「そうか、それならこれならどうだ？」

更に道具袋からあるモノを取り出す。

『これは……何？』

「アップルパイ、作り方は知ってたからな暇を見て練習がてら作ってみた」

常夜の石の中でもこの道具袋に入れておけば中と外で出し入れができると最近気づいた。つまりこれが中と外を繋ぐアイテムボックスだという事だ。しかもこの中だと鮮度は落ちないし、虫食いに会う事も無い。つくづくありえないくらいに高性能な道具袋だ。

『あ！！おいしい！！』

「そうか、それはよかった」

『あ、あのさ！もっとある？』

「ああ、結構作ったからな。まだまだあるぞ」

『やりっ！それじゃいただくわね！』

そのまま食べ続けるプニム。その横からエンクとリコがそれを見ている。

「……二人も食べるか？」

「「いいの！？」」

「構わないが」

そう言うが早いかエンクはユーリの手からパイを強奪し、リコに半分を渡し食べ始める。リコはユーリにいいか聞いてから小さな口を一杯に開けて食べ始める。

『あ～おいしかったぁ！ありがとうね！えっと……』

「ユーリだ」

それに続いて他のメンバーの紹介や状況を教えておく。

『へぇ～結構大変そうなんだ。うん！なにかあったら遠慮なくよんでね！あ！それと、さっきの気に入ったからまた作ってね！』

「いずれ、な」

『うんうん！それじゃまたね！ご主人！』

そう言って消えていくプニム。元気いっぱいのその姿を見送りユ

ーリは笑みを浮かべる。

「また個性的なのが来たな」

これからがまた大変そうだと思った。すると後ろから声がかかる。

「それじゃ！お兄ちゃん！！」

「どうかしたってうおっと！」

リコの声に振り向こうとしたユーリの背中に重みが乗りかかってくる。言わずもがなその正体は今話したリコだろう。

「えへへ～」

「まぁ、後でしてやるとは言ったけど、別に今でなくともいいだろう」

「いいの！」

「……やれやれ」

背中に乗ってきたリコを苦笑いと共に、抱えなおし、きちんと背中に背負う。リコはどうやらご満悦らしく笑顔であっちこっちを見ている。それに比べて不満そうなのがエンク。

「ねぇ、アンタって小さい子が好きなの？」

「……お前は街中で急に何をほざいてんだ！？」

「だって、おかしいじゃない！なんで私の時よりリコの方が扱いいいのよ！！」

「だからここでそういう事を言うな！社会的に俺を抹殺する気か！？」

「何をふざけたこと言ってんのよ！そんなのどうでもいいのよ！こっちの質問に答えなさいよ！！」

「……なんか俺の扱いひどくないか？」

「何をいまさら、アンタは私のいう事を聞いてりゃいいの！」

「理不尽な……」

「ほら！さっさと答えなさい！」

「……別に普通だと思うぞ。誰だって子供にはある程度甘くなるだろうに」

「……本当にそれだけ？」

「ああ、それだけだ」

「ホントに？」

「やけに疑うな。それだけだよ。と言うか他に何がある？」

「そ、それは……」

なぜか頬を赤らめ、言葉を濁すエンク。それを呆れた感じで見つめるユーリ。後ろに背負われているリコは嬉しそうにはしゃいでいて気付いていない。

「……まぁ、この話はこれで終わりだ。だから、もういいな」

強引に話を打ち切る。そうしないとどこまでも続いていきそうな気がしたのだ。

「わ、判ったわよ！今回は信じたげる！！けど、あんまり誤解を招くようなことをするんじゃないわよ！」

……誤解ってなんだ？

ユーリのそんな疑問に答える者は誰もいない。

「さて、リコ」

「え？何お兄ちゃん！」

「この道で会ってるのか？さっきからずっと真っ直ぐ進んでるだけだが……」

「え？何が？」

「……」

「忘れてるわね」

リコがユーリの背ではしゃぎまわるのに夢中で目的を一時的に忘

れていたために、来た道をいったん戻る。いつもの視線で道を見せた方がいいと判断したユーリは、リコをおろし改めてリコに道を尋ねる。

「え～と、こっちだよ！」

「さて、この先にだれがまってるのやら……」

「おばあさんでしょ？」

「……ちゃんといてくれるといいんだがな」

「え？」

「いや、なんでもない」

真剣な顔でリコの後姿を見ながらついて行くユーリ。それを怪訝に思いながらもユーリの隣を歩くエンク。ユーリの顔は何かを知っているように険しい。まるでこの先の展開が判っているかのように。決して喜ばれる結果ではないと悟っているように感じて、ほんの少しの不安を覚えた。

「アンタ……もしかして何か知ってるの？」

「何かって何をだ？」

「よく判んないけど……私たちが知らない事、かな」

「……そりゃ、少しはそう言うのもあるだろうさ。別にずっと一緒にいたわけじゃないんだ。そういう事もあるさ」

「そりゃそうだけど、私が言いたいのはそう言う事じゃ無いんだけど……」

「とりあえず、おいて行かれるから少し急ぐぞ」

「あ！ちょっと待ちなさいよ！！」

エンクの言葉を振り切るかのように歩を進める。別に本当に嫌な結果になるかはわからない。けれど、この世界の真実を知っているユーリからすると十分に起こりうる事態なのだ。だが、どちらにせよ自分にできる事は無い。リコは話した所で納得はしないだろうし、自分で確かめに行くだろう。元々言う気はないが。そして、仮に思っていた通りだったとしても、それをどうにかすることはできない。あまりにも遅すぎる。既に自分が何らかの策や手段を講じて対処するラインの話では無いのだ。

さて、どうなる事やら。此処が正念場だぞ。リコ。

心持ち急ぎ足になりながらリコを追うユーリ。もし、ここでリコが挫ければ、最悪定着せし者に戻りかねない。それを避けるために何ができるのか？考えても考えても答えは出ない。できる事なら杞憂であってほしい。この探索の果てに再開があるのなら、それはとても素晴らしい事だろう。だが、この世界がそこまで優しいかは保証しかねる。

「ユーリお兄ちゃん！！」

リコがこっちを振り返り叫ぶ。その声を聴き、ユーリが駆ける。その後をエンクが追いかける。リコは両手を胸に建物の角で待って

いる。

「どうかしたか？目的の家が見つかったのか？」

「ううん……ここまでは覚えてるんだけど、ここから先が判らないの」

リコの眼の先には分かれ道が続いている。それぞれが違う所へ続いているようだ。一つ目の道は上へ続いている。西洋風の建物が多く、賑わいがある。二つ目の道は木造建築が多く、武家屋敷の様なものも幾つかある。人通りはあまりない。けれど、ちらほらと人を見かける。知り合いが多いのか、それとも近所付き合いとかなのか、誰もかれもがすぐに誰かを誘っている。三つ目の道は街の果てに向かっているらしく、人通りは無い。

「さて、中々に判りやすい分かれ道だな」

「どうするの？私達も三人だし、ここは別れて探す？」

「……そうだな。と言いたいが、それよりも……ライザー！」

あまり街中で目立つことはしたくないが、下手に判れるのは避けたい。だからこそ、ここは騒ぎになる危険性承知で術を使う。今回は任意で光を発さ無いようにし、陽炎のようにライザーが現れる。

『……何か用？』

「ああ、この街の詳細な地図が欲しい。頼めるか？」

『……』

少しばかりきょろきょろと周りをぐるっと見渡し、また此方に向かい合うライザー。

『……了解、少し待って』

直ぐにライザーの腕が僅かに開き、そこからカラー印刷された地図が現れる。それを取ってこっちに渡してくる。

『……これでいい？』

「ああ……カラーとか無駄にすごいな」

『……無駄……』

「ち、ちょっと！あの子傷ついてるじゃない！！ほら何とか言ってあげなさいよ！」

ライザーは特に表情は変わってないが、少し俯きがちになり、元気がなさそうに見える。それを見たエンクが慌てて此方にフォローを要求してくる。

「あ、ああ……地図有難うな。ライザー。今度なにかお礼するからさ。無駄とか言って本当にすまない」

素直に謝る。予想外に高性能だったので思わず口をついて出たのだ。果たしてそれを聞いたライザーが此方に興味を示したのか、こっちを見る。

『お礼？』

「ああ。俺にできる範囲でいいならどんな要望にでも応えるぞ！」

『……本当？』

「本当だ。だから今すぐじゃなくてもいいから、何か考えててくれ」

そう言うと少し思案した後、此方をむく。

『……それじゃ、今じゃなくてもいい。落ち着いたらで良いから……私とマスターの二人の時間が欲しい』

「「！？」」

「？……それでいいのか？別に欲しい物とかでもいいんだが……」

『……物なんていい。私は、それがいい』

「……まぁ、ライザーがそう言うならそれでいいんだが……それなら、落ち着いたときに二人で適当に話でもするか？」

『……うん』

「そっか、それじゃ、地図有難うな。大切に扱わせてもらう」

『……うん、それじゃ、また』

「ああ」

控えめに手を振り、小さな笑顔を見せながら呼ばれた時と同様、

陽炎のように消えていく。それを笑顔で見送ってやる。そして、振り向いた瞬間、背筋が凍る。

「……ユーリお兄ちゃん……」

「……アンタ……」

「……どうしたんだ、お前ら」

ユーリは二人の変わりように驚いた。少なくともさっきまでの二人は普通だったはずだ。それが今は何故だか自分が責められているような錯覚に陥る……客観的にみると明白な事態だが。

「お兄ちゃん！私もお兄ちゃんと二人っきりがいい！」

「いや、どういう事だ？」

「お兄ちゃん！私と一緒なのは嫌なの！？」

「そうじゃなくてだな」

「アンタ！！リコを泣かせるんじゃないわよ！！」

「待てって！別に泣いてないからな……」

「それじゃ私にケンカ売ってんの！！」

「なんでそうなる！？」

「お兄ちゃん！私も一緒がいい！！」

「アンタ！！私を放っておいたらどうなるか判ってんでしょうね！」

「……勘弁してくれ」

目的そっちのけで責め立てられるユーリ。何が何だかわからず、終いにはこっちがすべて悪く言われる……何が悪かったのか、それに気付けない間は理解できないだろうが。気付く日は来るのだろうか？

「なんか、どっと疲れた。早く休みたい」

「何、年寄り臭い事言ってんのよ！は、早く歩きなさい！」

「お兄ちゃん、早くいこ！」

片方の手を満面の笑みのリコに繋がれ、もう片方の手を、顔を真っ赤にしたエンクに引っ張られている。既に移動に関しては自由は無い。肉体的にはともかく、精神的にどっと疲れる出来事からようやく解放され、詰問を何とか治め、その結果二人と手を繋ぐ羽目になった。どこがどうなってこうなったのか、会話を覚えてない。正確には面倒なので思い出したくないのだが。

「で、地図は……両手を繋がれてると見えないんだが」

「あ～もう！使えないわね！！私が見たげるから貸しなさい！」

「いや、手を放してくれればそれでいいんだが」

「なんか言った？」

「はぁ、なんでどいつもこいつも人の話を聞かないんだか」

「さぁ？アンタの日ごろの行いでしょ」

「日ごろの行いが悪いとでも？」

「違うのかしら？女の子をとっかえひっかえ、良いご身分ね！」

「……反論できないのが悲しい所だな」

「お兄ちゃん、リコと一緒だと悲しいの？」

「そう言うわけじゃないから、そんな顔するな」

泣きそうな顔をするリコの手を握りながら笑いかける。本当は頭でも撫でれればいいのだが、あいにく両手はふさがっている。だから笑いかけるくらいしかできない。けれど、リコはそれでも笑顔を見せてくれた。本当に出来た子だと思う。時折、よく判らないところがあるが。

エンクはそれを見ながらため息をついている。まだ、きちんと好意を自覚して間もないとはいえ、誰にでも優しくして笑いかけるその姿を見ると、複雑な気分になる。どうしてこんな奴に惹かれたのか不思議ではあるが、それもおいおい判ってくると気持ちを切り替える。

「……よし、まずは目的の所に行かないとな」

流れを切って初心に帰る。と言うわけで地図をたどり、居住区に

進んでいく。ここを選んだのは一番可能性が高いからだ。人が集まる場所はいくつかあるが、ここが一番広いのだ。こういったコミニュティの中にいる場合が高い。だからこそまずここを選んだのだ。もし、リコが残りの記憶を思い出せば辿り着くだろうし、ここは止まらず動くことが肝要。

「人が多いね。前が見えないや」

「……確かにな。人が壁のようだ」

「多すぎるって考えものよね」

三人の目線の先には予想を超えた住人が歩き回っている。先ほども多いと思う場所はあったが、それでもここには及ばない。人がまさしく雪崩の様に押し寄せ蠢いている。少々引きそうになる光景だ。入りたいとは思わない。

「なんでこんなに人がいるのかな？何かあるのかな？」

「それを願うわね。いつもこんな感じで動き回られちゃ気味が悪いわ」

「……多分あれじゃないか？」

ユーリが何気なく指差した先には、バーゲンセールの文字。気付いてみると判りやすいが、行き交う人は女性が多い。それが戦場もかくやと言う勢いで商品に群がっている。時折鈍い音を混じらせながら賑わいを見せている。

「バーゲンセールってなに？」

「色々な物を特別に安く売る事だと思えばわかりやすいな」

「……アンタはなんでわかんのよ」

「気にするな。それにしてもこういうのは大概何か理由が在る筈なんだが……あれか」

ユーリの視線の先には、一つの張り紙がある。そこには白夜開催、区画対抗技能大会と書いてある。

「……なにあれ？」

「……知らん」

「……大会？」

三者三様の反応で視線を集める張り紙。詳細など読む気も無いが、街規模の大会だと言うのは判った。それが運動会の様なものなのか、それとも工作メインの物なのかは知らないが。

こんな事は知らねぇぞ。全くここまで未知な事が出てくるとはな。本当に先が読めない世界だな。

内心溜息をつきながら目の前の集団を見つめる。何はともあれ、ここを抜けないと話にならない。さぁ、どう抜けようかと考えていると、不意にリコが袖を引いてくる。

「リコ？」

「お兄ちゃん！これ、出て見ない？」

「はぁ！？」

ユーリが驚く。どうやらリコは張り紙の詳細を呼んでいたらしい。その横ではエンクがアップを始めていた。

「優勝は私たちがもらうわよ！」

「……話が見えん。説明しろ」

「あのね、さっきこれをエンクお姉ちゃんに読んでもらったんだけど」

そう言って張り紙を指さす。ユーリはその話を聞いて張り紙に改めて目をやる。そこには様々な競技を行う運動主体の種目と、技術を競い合う種目、他にもさまざまなものがある。キャッチコピーは可能性を試してみませんか。である。果たして白夜と言う組織は何がしたいのか？理解に苦しむ。一応仮説はあるが。やり方がずれているのではないか。と思わなくもない。

「何々……優勝者には１０万バームか……結構出してるな」

「そっちじゃないっての！その下！」

「……さまざまな種類の食文化めぐり、文化観賞。面白そうだな、ぜひ行って見たい」

「そっち！？下行き過ぎよ！その上！」

「……アレスパの街随一のホテルアレスパの宿泊無料券。ペアでお越しください……なんだこれ？これがどうかしたか？」

「何、言ってんのよ！ホテルアレスパって言ったらこの界隈でも超有名所なんだから！！知らないなんてありえないんだから！！」

「俺は知らないんだが……」

「世間知らず甚だしいわね。もっと社会について勉強しなさい」

「……」

「で、でね。お兄ちゃん。これに優勝したら私と一緒に行ってくれないかな？」

「ちょっとリコ！それはずるいんじゃないかしら？」

「私が最初に気付いたんだもん！！だから私となの！！」

「へぇ、まさかリコと勝負するはめになるとは思いもよらなかったわ」

「私もだよ……負けないからね！エンクお姉ちゃん！！」

「おい、待てって！！話が参加前提になってるぞ！」

急いで止める。このままではどう変わっても参加することになりそうな気がしてならない。さっきの文化めぐりは魅力的だが、ホテルなんかには興味ない。泊まる所など常夜の石で十分だ。特に魅力を感じない。幾らか時間を割いて説得するが全く頷かない。

「でも！」

「ほら、早速いくわよ！」

「あのな……とりあえず今は探すことがあるだろうが、せめてそれが終わってからにしてくれ」

「終わったらいいの！？」

「……好きにしろ」

結局こっちが妥協する羽目になった。我ながら甘い事だとため息が出る。変にやる気を出している二人を見ながら張り紙に目をやる。他にも優勝者の副賞は色々ある。その中には世界一周とかもあったりする……危険じゃないだろうか？止めた方がいいと思う。他にも１０位くらいまでは賞金と副賞がついている。

「結構資金が豊かなのか白夜。羨ましい事だ」

こっちは余裕があるとはいえ、大抵が拾い物を装備するなり売るなり加工して使っているのだが。大人買いとか少しやってみたい。無駄なことこの上ないが。

路地裏を見つめる。何もなかったそこには突如として複数の影が見え、その影が手を振った瞬間に懐に重みが加わる。それを確認し、行動を開始する。

「さて、とりあえずこの人だかりを越えないとな」

「えっ！！」

「ちょっと！！」

まだ喋り続けていた二人を抱え上げて一気に跳躍する。人だかりを一足で飛び越え、奥の方に降り立つ。脇に抱えられていた二人は最初こそ呆然としていたが、我に返ると視線をこっちに向ける。

「あ、危ないじゃない！！下噛んだらどうすんのよ！！」

「お兄ちゃん、もっと大切に抱き上げて欲しかったな」

二人の言葉を聞き流しながら抱え上げた二人を下ろす。

「あのままだと、一向に進みそうになかったからな。悪いが大会の話はまた今度だ」

「むぅ」

「いいじゃない、それ位」

「文句言うなって」

二人の言葉を呆れながらも返していく。これから先にあるかもしれない悲しい事態を前に、この雰囲気はなんだろうか？下手に真剣に取り込んで落ち込むよりかはずっといいのだが、やはりこれでいいのかとは思う。文句を言えるくらいに元気なのはいい兆候と思いたい。

「この角はこっちに曲がってみるか」

「アンタ、さっきからあんまり悩まずに歩いてるけど、どこに行ったらいいのか判ってるの？」
「判る訳がないだろう？判るのはリコだけだ」
「それじゃ意味ないじゃない！」
「そうでも無いぞ」
そう言うと、懐から通信機を取り出す。
「ドリトル、何か進展あったか？」
『こっちは何もありませんね。申し訳ありません』
「いや、構わない。ライザーはどうだ？」
『……こっちも何もない』
「そうか、二人とも引き続き頼む」
『はい、了承しました』
『……了解』
そう言うと今度は地面が隆起し、小さな植物が芽をだし、瞬く間に開花する。その花を摘み、顔の前に持っていく。そしてその花からは訊き覚えのある声が聞こえる。

『こっちは植物の声を聴いてみたの。そこよりさらに奥でリコちゃんに似た子が走っていったらしい情報があったの！』

「よし。有難うなドライアード」

『どういたしましてなの』

「また何かわかったら教えてくれ」

『判ったの』

話を終え、前を向くユーリ。状況が判らない二人、エンクとリコは呆然としている。

「ア、アンタ……何時の間に召喚術を使ったの？そんなそぶりなんてどこにも……」

「お前らを抱えて飛ぶ前に路地裏にまとめて召喚した。探し物の内容は以前リコから話を聞いたドライアードが知ってるからな。後は何か見つけるのを待つだけだ」

「お兄ちゃん、凄い！」

リコの賞賛に頭を撫でる事で応える。優しく笑うその顔を見ながらエンクは少し悔しそうな顔をする。

はぁ、つまりアイツは私相手にまだまだ余裕があったわけか、まぁそれも当然か。あの融合だって、私を気にして使ったみたいなところあったし、憑依の段階で私を倒せたかもしれないし。まったく中々固い壁ね。

あの勝負で目の前の青年の底はまだ見る事は出来ていない。本当に全力を引き出すことが出来るのか？そして、その上で自分が勝つことはできるのか？目標は遠い。けれど……

「だから目指し甲斐もあるってもんよね！」

「どうした？」

「え？ああ！なんでもない！」

「そうか」

誤魔化しながらも目を青年から離さない。いつか超える、勝ってみせると意気込みながら……

その時にはこっちのいう事を何でも聞かせよう。うんいい考えだ。是非実行しよう。

本人が知らないところで事態は進む。それがいいのか悪いのかは関係なく。

「それじゃ、ドライアードの情報を聞いた限りだとこの奥に以前リコに似た子が走っていったのを見た事が有るらしい」

「え？それじゃリコの姿を見た人を探してたの？」

「ああ、でないと相手の顔も体格も、特徴と言えるモノは何も知らないからな。だったら以前のリコを知ってる人物、又はそれに繋がる情報を探すだけだ」

「でも、よく覚えてたわね」

「そうだな。案外植物の記憶力はいいのかもな」

……人とは違って、な。

そう閉じた口の中でつぶやいた。それがどんな意味を持つのか、正確に知るのはこの世界ではそう何人もいないだろう。既に世界に溶け込み、一部となった植物が故に、人よりかは記憶が多くあるのかもしれない。もしくは世界の末端として全てを記憶しているのかもしれない。どちらにせよ、その情報の大本はこの世界であるという事。

この世界を構成する存在を思い舌打ちする。同情もしよう。哀れみもする。だから俺はその中には入らない。少なくともその気は無い。入らせるのなら力に訴えて見ろ。だから……だからせめて……

「……行くか」

思考を打ちきり、前へと進む。なんであれ、使えるのなら使うまで。それに変わりは無い。そこに迷いもためらいも挟まない。だからその結果がどうであれ受入れよう。精一杯反抗した後で。

街をしばらく歩き、角をいくつか曲がる。召喚獣の情報を聞きながら。浮かれた声のポワソに情報を聞き向きを変える。オロチに前

方に人だかりが在ると言われ路地裏から迂回する。コパルディアがリコの目撃情報を白夜の末端兵士から聞き伝えてくる。テテにあらかじめ人通りの少ない近道を調べてもらい、それをたどっていく。

そうやってしばらく歩いていく。すると途中からリコに反応が出た。

「私、この道知ってる！！」

「本当！？」

「うん！！確か、こっちだよ！」

「……」

ユーリは召喚獣達に探索を中止させ、全てを送還させる。恐らく表情から察するにリコは最後の道筋まで思い出している。その証拠にその足取りに迷いは無く、必死さが見て取れる。

「これで、此処を曲がって……」

「ちょっとリコ！そんなに急がなくても！」

「……」

嫌な予感が強まる。ユーリは誰に言うでもなくそれを感じた。

「あとは……この角を曲がった先の向かい、そこがおばあちゃんの家だよ」

「つまり曲がった正面に家があるってわけね！ようやくこの探索も終わりね！」

あ～歩いた～とのんきに構えているエンクと違い、リコの顔は固い。ユーリはそれを静かに見つめ、常夜の石を掴み、何かを伝える。

「不安か？」

「うん……でも、行かないと、おばあちゃんが心配してると思うから……」

「そう、か。それなら、行かないとな」

「うん！！」

ゆっくりと建物の角へと歩いていくリコ。そして、その最後の角を曲がる。エンクが笑顔でそれを見ている。ユーリが目を細め、それを視界の納める。そして、リコが角を曲がり切り、その正面に目を向ける。

「……あ」

だが、そこまで。そこからリコは一歩を踏み出す事は無い。驚いた表情のまま、その場に立ち尽くす。エンクはさすがにそれを不思議に思ったのか表情を変える。その横を拳を握りしめ、険しい顔をしたユーリが歩いていく。その顔を見たエンクがほんの少しの違和感を覚える。

「……リコ」

「……ユーリお兄ちゃん、おばあちゃんが……おばあちゃんの家が……」

角を曲がり、その正面を見据える。そこには何もなかった。人どころか、家すらも。正面には広場が広がっているだけだった。途方に暮れているリコ。遅れてそれを見たエンクは絶句する。

その傍に人が通る。ユーリはその人を呼び止める。その人物は男性で気さくな感じの人物だった。

「すまないが、ここに住んでいた人がどこに行ったか知らないか？この子の知り合いでね」

その言葉に怪訝そうな表情をして返事をする。

「……何言ってるんですか？ここには昔から人なんて住んでませんよ」

「え！？」

「嘘！？」

「……」

驚くエンクとリコ。ユーリは何も言わず静かに目を一度閉じる。そして目を開きリコへと目を向ける。そこには無言で俯く姿があった。だが、顔を上げると震える声でもう一度男性に尋ねた。

「あ、あの！」

「え？」

「ほ、本当にここには誰も住んでなかったんですか？おばあちゃんがいたと思うんですが」

「……誰もいないよ。というか家も建ってた記憶も無いよ。ここは随分前から空き地になってるよ」

「……」

今度こそ言葉を失くすリコ。俯き肩を震わす。そして近くにいたユーリの服を握りしめ、静かに語りだす。

「……確かにここ、だったんだよ。間違ってなんか、ない！絶対に、ここに、おばあちゃんがいたの！！」

「ああ」

「どうして！？どうしておばあちゃんが！おばあちゃんの家がないの！？ねぇ……お兄ちゃん。おばあちゃんはどこにいったのかな？」

「……」

「ちょっと！！アンタ！嘘ついてるんじゃないでしょうね！！」

そのリコの様子を見たエンクがその男性の胸ぐらを掴み上げ食って掛かる。その勢いと力に焦る男性。

「な、何だってんだ！？こっちは聞かれたから答えただけだってのに！」

「エンク」

「アンタは何も思わないの！！今の言葉がどういう意味か……」

「判ってるからその手を放せ」

「言っていい嘘と悪い嘘があるって今からその体に判らせて……」

「エンク！！」

「ぐっ……」

さすがに強めに呼べばエンクも少しは感情を収めたらしく、その手を放す。開放された男性が苦しそうに咳き込む。それを見てユーリが前へ出て謝罪する。

「申し訳ない。連れが迷惑をかけてしまって。長旅で少し気が滅入っていたらしくて」

「……ああ、もういいよ。けど、ここには誰もいないし、何もない。それは紛れもない本当の事だ」

「……ああ、重ねて申し訳ない。よければ手当もするんだが」

「いや、いいよ。また凄まれそうだし。帰らせてもらうよ」

「そうか」

去っていく男性を追いかけそうなエンクを視線で黙らせながらリ

コに目を向ける。

「……おばあちゃんは、どこにいったのかな？」

「き、きっと引っ越したのよ！それにさっきの男の言った事は間違いか嘘だったのよ！もしくは最近来たとか、だからそんなに気にする事じゃないわよ！」

「でも、さっきの人は昔からって言ってたよ。どうして最近来たはずの人が昔なんて言うの？」

「それは……」

「それに、嘘をついてもあの人は何も得なんかしないよ」

「……」

もうエンクも欠ける言葉がないのか、黙ってしまった。リコはユーリに視線を向け、口を開く。

「もしかして、お兄ちゃんは気づいてたの？こうなるって……」

「どうしてそう思う？」

「だって、私が近づいていくにつれて笑わなくなっていったもん。私はお兄ちゃんの事はよく見てるから」

「……いない可能性があるっていうのは考えてた。だが、これは想定外だな」

……嘘をついた。これがユーリが考え付いた結論。既に定着し、この世界へと溶け込んだという可能性。さすがに家ごとなくなっているのは想定外だが、言えばそれだけで他は予想はできていた。

即座にライザーを召喚し、常夜の石の中に連れて行く。そこではエイナが心配そうにこちらを見ていた。

「ユーリ！！リコちゃんは……」

「ああ」

エイナの声に頷きリコの前に膝をつき、目線を同じにする。

「……っく、お兄、ちゃん、こんな時、どん、な顔、ぐすっすれば、いい、のかな？」

「……我慢せずに泣いていい。もうこの周りには俺たち以外には誰もいない。」

ここなら知っている者以外誰もいない。だから……

「だから、どれだけ泣いたって問題なんてない、辛いなら泣いたっていい。泣けるんだから」

「う、うわぁあああぁああ！！」

耐え切れずにユーリに胸で泣きだすリコ。その嗚咽は常夜の石の中に響き渡った。静かに抱きしめるユーリ。それを沈痛な顔で見るエンクとエイナ。

「おばあちゃんが！おばあちゃんがあぁああ！」

「……」

「ぐすっ！ひぐっ！ううあぁあぁあぁあ！！」

響く慟哭、そこには悲しみとひび割れた思い出、一つの目標は砕けて消え去り、少女の心に多大な傷を刻みつける。青年はそれを止める事も、防ぐこともできないまま、その両手を持って少女を抱きしめる。判っていた結果に、必ず通る道に歯噛みしながら。

あの後泣くだけ泣いて眠ってしまったリコを抱え、あらかじめエイナに頼み、ベッドの準備をしてもらっていたのだ。その上にリコを寝かせ、三人で一息つく。ユーリが淹れた紅茶を飲みながら。

「でも、こんなことになるなんて、ね」

「うん、私も中で見ててびっくりしたよ」

「……」

無言を貫いていたユーリが口を開く。

「……さて、これからだが、どうする？」

「どうするって？」

「いくつか案はある」

そう言ってユーリは指を立てる。

「一つはこのままリコのばあさんを探して回る事。けど、さっきの男性が嘘を言ってたようには感じられない。はっきり言えば徒労に終わる可能性が高い」

「ちょっとアンタ！！それだとリコが嘘ついてるみたいじゃない！！」

「そうは言って無い。リコも嘘は言って無い。けど、そうなら矛盾が起きるだろう。お互い昔から居る、いないと真逆の事を言っている。なら、その妥協点はどこだと思う？」

「……どういうことよ？」

「つまり、だ。お互いが嘘を言っていないという事は、だ。リコのばあさんは確実にいて、けれど、周りの人間はそれを知らないってことになる。そうじゃないとおかしいからな」

「……リコにしか見えないって事？」

「その場合もあるってだけだ。だが、現にリコもいないと感じた。だからこれは違う。けど、周りが知らないってのはそこに何かの力が働いているって事だ」

「ナニカって何よ？」

「それは分からない。けど、緘口令を強いてるわけでもない。嘘とか何かを隠してるって感じじゃなく、本当に知らないってふうに見えたからな」

「それじゃ……」

「特殊な何かが作用してるとしか感じられないんだがな。例えば、記憶をどうにかできるような奴にさらわれた、とかな」

「嘘！それじゃ、リコちゃんのおばあちゃんは！！」

「ここでこうしてる場合じゃないじゃない！早く助けに行かないと！」

「……落ち着け。今のは俺の推測だ。根拠なんてない、その場合わせの空論だ。とりあえず座れ」

腰を浮かした二人を落ち着かせ、席に座らせる。ユーリは手を組み合わせ、真面目な表情で思案する。

さて、どこまでなら言っても問題ないのか。その線引きが難しいな。下手な事は言えないし、真実をありのままにと言うわけにもいかないし。まったく。

内心一人呟く。元々全てを言う気は無かった。というより、今言っていることも言う気は無かった。けれど、何も知らないままだとリコの様に一気に崩れかねないと再認識したがために、ある程度の範囲までを知ってもらう事にした。これで自信を疑う可能性が飛躍的に上がったが、もし、うまくいったならこれで心の動揺を減らせる。

本当に最悪な状況になったら俺一人でも行くしかないんだがな。難儀な事だ。もっとてっとり早くいければいいんだがな。

「話を進めるぞ。二つ目は白夜に頼んで探してもらう事だ。」

「えっと、白夜ってユヅキさんとかピアたちがいる所よね？」

「ああ、組織だって動いているのならそれだけ情報が集まるのも早いからな。これを利用しない手は無い」

とは言ってもそれが敵に回れば厄介なことこの上ないが。

口にはすることなく、心に浮かべる。

「そっか！それじゃ白夜に伝えて探してもらえばいいんじゃない！」

「よし、それならさっさと行って頼めばいいじゃない！」

「現状、俺らも記憶探しっていう目的がある。だからすべての時間を探索に費やす事は難しい。とりあえずはこの件を追ってくれる者が必要だという事だな」

ユーリが締めくくる。最後にもう一つ案はあるが、現状それは叶わない。

言えはしない、な。まさかその組織を攻めに行く、とは、な。

どうにかしないといけない。このまま行くと誰かが傷つく。けれど、今行ってもどうしようもない。それこそ今は無いが、エイナの

記憶と同じことになるだろう。
「それなら、俺らも白夜には用があるし、このまますぐに向かうとしようか」
「ええ！」
「うん！」
「よし、二人とも、リコの事を頼んだ……落ち込んでるだろうからな」
「任せときなさい！それでアンタは……」
「わかってる。協力は取り付けるから、安心してろ」
「それじゃユーリお願いね！」
「ああ、行って来る」
ユーリの姿が消え、表へと戻っていく。それを見送ったエイナとエンクはお互いに顔を曇らせる。
「でも、驚いたよね。こんなことになるなんて……」
「そうね。けど、こんなことを予想できる奴なんていない。今一番つらいのはリコなんだから、私達が沈んでても仕方ないでしょ！」
「そう、だね。でも、どこか腑に落ちないよね。こういうのって」

エイナが静かに言う。その言葉にエンクも黙る。

「どうしてなんだろうね？頑張ってここまで来て、苦しい思いまでしてやっと来たのに、なんでリコちゃんがこんな目に合うんだろう？」

その言葉を聞いて視線をエイナへと向ける。どこか心ここに非ずと言った感じでうわごとのように呟いている。これにはエンクも違和感を覚える。

「……エイナ？」

「おかしいよね。どうして、頑張ってもそれが実らないんだろう。どうしてうまくいかないんだろう。最後はいつも悲しい事ばっかりなんだろう」

「……ちょっと、エイナ！」

「こんなの！おかしいじゃない！！どうして、どうして！！」

「エイナ！！」

「！！」

額を汗でいっぱいにしながら、エイナは肩を震わせる。ゆっくりと顔をエンクへと向け、見開いた眼をゆっくり閉じる。

「はぁ、はぁ……ごめん、少し思いつめてた」

「全く、エイナが思いつめてどうするの？私たちはリコを気に掛け

てあげないといけないのに」

「あはは、ごめんね」

その場はこれで何とか落ち着いた。少なくとも表面上は。けれど、エンクは気づかなかった。エイナの手のひらから僅かに黒い茨が芽を出したのを。エイナ自身もそれを知らない。誰にも知られないまま糧を得る。先は見えない。

ユーリは足早に街中を駆ける。人だかりを避け、路地裏を疾走する。今はとりあえず急ぐ必要がある。中の二人に言ったように、白夜に言うのは早い方がいいし、俺自身のために行く方がいい。けれど、思っていたよりも時間が経った。その結果が何を招くかは知っている。だからこそ足早に走っていく。

「あれか」

やがて、大きな宮殿の様なものが見えてくる。その周辺には兵士が数十人ほど槍やら剣やらで武装し巡回していた。他にも弓矢や斧、ドリルや銃を持っている兵士までいた。

「個性的すぎるなっと、そんな事言ってる場合じゃないな」

ユーリは近くにいた兵士を引き留め、自身の名前を名乗り、白夜の指導者への面会を希望していることを告げる。

「はい、ピア様から承っております。どうぞ此方へ！！」

快活な口調でついて来るように促され、素直について行く。

やがて、建物に入り、その奥へと進んでく。原作では直ぐだったが、実際はいくつか扉をくぐった先にあり、見渡す限り他にも部屋や通路は多そうだ。

兵士は大きな扉の前で止まり此方へと顔を向ける。

「この先に我ら白夜の指導者であられるキサナ様がおられます。どうぞお進み下さい」

「ああ、感謝する」

そのまま扉を兵士が開け、ユーリは部屋の中へと入っていく。

中は装飾で彩られた豪華な部屋と言う訳では無く、部屋こそ広いものの、割と簡素な感じになっている。権力を振りかざすような組織では無いと言うのがなんとなくわかる部屋でもある。

その奥に長い緑の髪をなびかせた女性がいる。その人物にユーリは眼を向ける。その人物は白のドレスを着た姿で、玉座に当たるであろう所に座り佇んでいる。

「貴方は……」

「俺は「お兄ちゃん！！」……ピアか」

自己紹介をしようとした所で横合いから声がかけられる。その声

は知った声で翼を翻し、空中を飛んでくる天使の少女を視認した。
少女ピアは止まる事無くユーリの胸へとダイブする。それを表情を変える事無く勢いを殺し受け止めるユーリ。

「お兄ちゃん！いつ来たの！？」

「今しがただ。時間を取らせてしまってすまなかったな」

「ううん！大丈夫だよ！」

そしてピアと喋っているとさらにその奥から二つの声が聞こえる。

「ピアよ。キサナ様が話されてる所を邪魔するのはよくないぞ」

『ぴあ。今ハ少シゆーり殿カラ離レテ置イタ方ガイイト思ウノダガ』

その後ろからユヅキとリゼルドが姿を見せる。両方ともに元気そうだ。

「二人とも元気そうだな」

「それはお互い様だ。そちらも息災の様だな」

「それなりには大変だがな」

「ふふふ、仲がいいのですね」

「キサナ様！……場をわきまえず申し訳ございません！」

「構いませんよ。私もあなたたちが笑っているのを見ると嬉しいの

ですから」
「キサナ様……」
『ぴあ。今ハきさな様ノ前ダ」
「うん。ごめんなさい。キサナさま」
「いえ、私もピアの笑顔が見る事が出来て嬉しいのですから、謝る必要はありませんよ」
「うん！……じゃなかった、はい！」
「ふふ、よくできましたね。ピア」
「うん！」
「さて、話を戻しましょうか。貴方が皆の言っていた放浪者の青年で構いませんか？」
「ああ、俺以外にこんな妙な状態の奴が居なければ、だけどな」
「そうですか。では、今まで白夜がしなければいけない数々の事件の解決。白夜を代表し、お礼を言わせていただきます」
「別に礼が欲しかったわけじゃない。俺が、俺たちが自分の意志で関わったんだ。誰にどうこう言われることでもないさ」
「貴方達は、本当に聞いていた通りの者達ですね」

「？」

「富や名声を求めず、自分の判断を信じ、正しい行いが出来る者。今の世の中で貴方達のような若者に会えたこと素直に嬉しく思います」

そしてキサナは一度口を閉じ、話を再開する。

「では貴方は私に聞きたい事が有るという話でしたね。私で答えられることなら答えましょう。それが貴方達にとって望んだ事かは判りませんが」

それを聞いて少し逡巡した後、ユーリはあらかじめ考えていた言葉を口にする。

「それならいくつか聞きたいことと、頼みたい事が有る」

「はい」

「今の俺達の状態をどうにかできる方法を知らないか？」

「……貴方達の状態を知るために、ここでもう一人の方と変わっていただいても？」

「構わない」

光に包まれ、エイナに変わる。１０秒後に再びユーリへと戻る。

「確かに、聞いていた通り、二つの魂が同居した状態ですね」

「ああ、どうにかならないか？」
「事例がない以上、調べてみないと何も言えないのが現状ですね」
「……」
「ですが、調べてみれば何かが掴めるかもしれません。もう少し時間をいただいても構いませんか？」
「構わない」
「有難うございます。詳しい事が判るまではこの屋敷を住処として使っていただいて構いません」
「それなら遠慮なくそうさせてもらう」
そして、不意に思いついた事を聞いてみる。
「……俺たち以外にこんな状況の人物はいなかったのか？」
「確かに、貴方達以外には記憶を失うといった者は今はいません。そして、肉体に二つの魂が同居している前例もありません」
「今は、という事は記憶がない人物は以前はいたのか？」
「はい。けれど、その者は既に記憶を取り戻し、自分の生活に戻っていますが」
「そうか」

「……」

質問を打ち切り、次の話へと移行させる。

「次だ。これは頼みだが、リコと言う名の少女のばあさんが行方不明になっている。これを探してほしい」

「……手掛かりはありますか？」

「いや、まったくと言っていいほどない。だから、正確には行方不明者が出たという事件を調べて欲しい。何か接点があるかもしれないからな」

「そういうことでしたら、了解いたしましょう」

「そうか、感謝する。次に……」

その後、知識の補填のために様々な質問をする。それにより、エイナやエンクの知らなかった事実が知らされる。そして、ある程度の質問を終えた後、ユーリは切り出す。

「それで、今の所最後の質問だが……」

「はい」

「黒騎士について、何か知らないか？」

「……その件ならばユヅキに聞いています。こちらでも掴んだことが幾つか……ユヅキ」

「はっ！」

キサナに呼ばれ、ユヅキが一歩踏み出す。視線がユヅキに集まる。

「ゆーり殿。最初に断わっておくが、恐らくゆーり殿が言っていた黒騎士だという可能性は高いが、それも確実では無い。そこは踏まえて聞いて欲しい」

「ああ」

「この街から砂礫の荒野を南西に向かった所に黒い騎士が出たという報告が上がっている。他にも、黒い騎士がモンスターを従え、岩山を拠点にしているという情報も手に入れている」

「やけに具体的だな」

「我が白夜の隠密は優秀なのでな」

「そうか」

「……行くのか？」

「ああ、あの黒騎士を放っておくことはできない。それと、早速ここに二人ほど休ませてもらいたい者がいるんだが、構わないか？」

「それは構わない。後で兵士に案内させよう」

「助かる」

「だが、もう少しすれば、白夜の精鋭を集めた討伐隊が出来る。そ

れまで待ってからでも」

「悪いが、出来る限り早く終わらせてやりたいんだ。すまないな」

「いや、どうしても行くのだな？」

「……アイツは俺の敵だ」

静かに告げ、その場を去っていくユーリ。それを目を細め見つめるユヅキ。心配そうな顔で見送るピア。駆動音を鳴らしながらその後ろ姿を視界に収めたリゼルド。そして、微かな笑みを浮かべ、青年をみやるキサナ。

白夜の本部を出て、周りに目をやる。武器を持ち、何やら隊列を組んでいる。つまりはあれが討伐隊なのだろう。そう思っていると、兵士が此方に近づいてきた。

「ユヅキ様から部屋に案内するように言い使った者です！お連れする方は二人と聞いていますが、今はどこに？」

「ああ、今すぐに呼ぶ」

常夜の石に手をやり、中に行く。中ではエイナとエンクが二人で待っていた。

「エンク。悪いがリコと二人で待ってやっててくれないか？」

「アンタ！ここまで来て私達を除け者にするつもり！？」
「……今のリコは色々一杯一杯だ。戦闘に連れて行くことはできない。だから今回は休んでいてほしい」
「私はリコを一人にしないためにって事ね」
「ああ」
「でも、それならここでいればいいじゃない！別に外に行かなくても、この中で休めば……」
「駄目だ。今回は此処も安全とは言い切れない。だから、此処には居させられない」
「それってどういう……」
「俺にも詳しくは判らないんだが、嫌な予感がするんでな。慎重になり過ぎて悪くなる事は無い」
「でも……」
「なに、すぐに会えるさ。それともお前は俺がそこいらの奴に負けるとでも？」
「何言ってんのよ！アンタを倒すのは私なんだから！そこいらの雑兵になんかに後れを取ったりしたら許さないんだから！」
「その意気だ。それでこそエンクだな」

「なによそれ。ったく」
「ユーリ、大丈夫？」
「ああ、問題ない。エイナはどうだ？」
「うん……私も、大丈夫だよ」
「？」
その言葉に何かを感じたユーリ。けれど、気の所為だと流す。ここで気付いておけばまた何か違ったのかもしれない。けれど、誰み気付かず事態は進む。
「……お兄ちゃん」
「「！！」」
「リコ……」
「……私も行く。私だって戦えるんだから」
「駄目だ。今回は休んでろ」
「嫌！私も行く！」
「……今のままでまともな戦闘が出来ると思ってるのか？」
「……出来る、もん！」

「……エンク！後の事、任せた」

「え！？ちょっと！」

常夜の石が発光し、リコとエンクが外に現れる。兵士はその現象に驚き、目を見開いている。反射的に腰の剣に手が近づいているが、抜く前に我に戻ったのでまぁ問題ないだろう。

急に外に追い出され、呆然とした所にユーリが近づく。目線を合わせ、頬を撫でる。

「少しは落ち着いたか？」

目から一筋の雫を流し、少女は俯く。

「……うんっぐす」

当然まだ、完全に吹っ切った訳では無い。それどころかまだ心は傷ついたままだろう。だからこそ、戦場に近い所にはついてこさせたくは無い。それにこれから相手をする存在はそんな心理の者をこそ取り込む魔性。尚更連れていけない。

「直ぐに会える。元気なリコなら俺も何も言わない。けど、今のリコは休むのが必要な事だ。だから精一杯悩め。悩んで悩んで答えを出せ」

「出るのかな？」

「出す必要はないさ。そんなに難しく考える事は無い。けど、どん

な結果になっても後悔だけはしないようにしろ」

「後悔？」

「ああ、後で振り返った時に落ち込まず、正面から向かい合えるようにするためにな！」

「私……」

「帰って来た時、また話ししような」

「あ……」

リコを撫でて立ち上がる。視線の先にはエンク。

「すまないな。面倒掛けて」

「構わないわよこのくらい。リコのためだしね！」

「ああ、出来る限り早く帰ってくる」

「ええ！負けないでよね！」

「当然、俺はお前より強いんだぞ。負けるかよ」

「言ってなさい！すぐにその体に電流流してヒクヒクさせてやるんだから！」

「……言って来る」

「ええ」

「うん……」

そう言って足を街の出口へと向けるユーリ。その足によどみは無い。

やっぱり砂礫の荒野で感じたあの感覚は気の所為じゃなかったか。

そう思った。あのフェザードラゴン亜種とでもいうべき存在が去った後、僅かに黒騎士の気配を感じた。あの時はアレスパの街へ行くのを優先したが、これ以上あの黒騎士を放置することはできない。

これ以上時間をかけて苗床として完成されても困るしな。

砂礫の荒野を目指して進む。ライザーを呼び出し、以前フェザードラゴン亜種と遭遇した所まで一気に転移装置で飛ぶ。

「さて、この先にいるんだったか今もそのままいてくれればいいんだがな」

隠そうともしない気配を辿り、道を進んでいく。地図も何もなくとも、この駄々漏れの気配をたどっていけばいずれ辿り着くだろう。そしてしばらく歩いて行ったとき、不意にユーリが立ち止まる。

「さぁ、おいでなすったか」

言うが早いか砂地が膨れ上がり、下から七体のフェザードラゴン亜種が飛び出してくる。その眼には明確な敵意を見つける。経緯を見る限り黒騎士の配下と言った所だろうか。

「へぇ、向こうも俺を敵とみなして潰しに来たって所か」
魔晄を開放し、灰色の光に包まれるユーリ。
「けどさ……」
朱砂を引き抜き、構える。炎が剣を取り巻き刃が光を放つ。
「お前らにくれてやるほど軽い命じゃないんでな！」
一気に踏み込む。それと同時に向こうも突進を開始する。
「押し通らせてもらうぞ！」
黒騎士との因縁を終わらせるために前へと進むユーリ。誰もいない砂漠の中で、壮絶な死闘が幕を開けた。

〜常夜の石〜

エイナは一人胸を抑え、荒く息を吐いていた。
「……どうしたのかな？もしかしてさっきの特訓で体に負担かかっちゃったかな？」
苦しそうに呻くエイナ。けれど、しばらくするとそれも治まる。

「……ふぅ。どうしたんだろう。私」

不安を覚えるが、少し体調を崩しただけだと言い聞かせる。少し前もめまいがして寝込んでいたのだ。ユーリとエンクが戦闘を行っていた間、エイナは眠っていたためにその前後の状況は知らない。けれど見ていたら大体分かったので問題自体は無いのだが。

「こんな事じゃだめだよね。頑張らないと！」

両手で頬を叩き、気合を入れる。あまりに強くし過ぎて痛かったが、まぁそれはいい。

「今度はあの黒騎士だもんね。それに他にもモンスターが多いみたいだし。ユーリの側にいるのは私だけ」

そう呟いて視線を外へ向ける。そこではユーリがフェザードラゴン亜種に向かって走り出すところだ。

「ユーリ……」

心配そうに見つめるエイナの背中からは黒い茨が蠢いていた。痛みも苦しみもその全てを取り込んでいくかのように成長して行く。限界は近い。

白夜との会合　黒く染まりし思い（後書き）

さて、しばらく前に書きましたがライザーの見た目は某石男零を少女風にした感じです。正確はどこぞのフューマノイドインターフェイスをいじってます。

ポワソはどこぞの弾幕はパワーとかいってる魔法使いの見た目で性格キツネ型良妻賢母です。判る人にはわかるかな？

ドリトルは作者が勢いで決めてます。何か該当するキャラっていたかな？プニムは気づいたらああなってました。

今回は変なフラグが建ってます。主人公よりもむしろエイナがやばいという状況です。何気に体が一緒なので感染してます。どこぞのハザードみたいに。

フェザードラゴン亜種、見た目はどこぞの轟竜でいいかと、こう巨大な両手両足でズドンズドンって走ってきます。一応飛べます。ナルガでもいいかな？

白夜主催の大会、実際に使うかは悩んでますが、こんなのがあってもいいかと。見たい人とか居るんだろうか？

熱砂の行軍　召喚獣の団結（前書き）

さぁ、ストーリーが進まない。こんな展開ばっかり考え着くから進まないんだ。けど、やってみたいと思ったのだから仕方ない。本当はもう少し長く書く気でしたがスケジュール的にこの辺が妥当という事で一旦切ってます。

今回は召喚獣の出番大目になってます。しばらく書いてないのと、数が多いのとで作者は一杯一杯です。

熱砂の行軍　召喚獣の団結

砂が舞い、風と共に舞い上がる。熱風となり、広大な砂漠を駆け抜ける。その変わらぬであろう景色の中、確実な変化が起こる。金属音、それも何度も繰り返し打ち放たれる音撃。それはこの生命が果てたような環境の中で誰かがいる証拠。

その音を奏でている場所では、巨大な獣とそれに向かい剣を振り下ろす青年がいる。剣は炎を纏い、砂鉄を集め、何より早く大剣として砂鉄を打ち上げる。斬馬刀とも言えるその巨剣を片手で振り上げ、迎撃態勢に入る。

「はあああ！！」

『『ガアアアァァァ！！！』』

真正面から跳びかかって来るその巨体に巨大な砂鉄剣を振り下ろす。お互いの速度に加え、振り下ろされた砂鉄剣は重力に引かれ、その威力を高めていく。細かな砂鉄を振りまきながら速度を上げる剣。

「潰れろ！」

その一撃でフェザードラゴン亜種の一体を砂漠にたたきつける。けれど、地面が砂地であることが災いし、その威力を半減させる。僅かに身じろぎした後、勢いよく跳ね上がり変わらない速度で此方に向かって来る巨竜。

『ギャァァァァ！！』

「ちっ！」

舌打ちをしながら、魔晄を体に纏い身体能力を上げ、その一撃を躱す。躱しざまに斬撃を振るおうとする。けれど、その刹那、砂地が盛り上がり、巨大な腕がその姿を見せる。轟音と衝撃を纏い、その一撃は青年へと向かう。直撃すればそれこそ、そこでその命運は尽き果てるだろう。

「舐めるな！」

けれど、その程度で終わるほど、簡単な旅をつづめていた訳では無い。魔晄の力を瞬間的に跳ねあげ、腕を弾き飛ばす。この瞬間、攻めてはその体勢を崩し、守る側は攻めに転ずる。ここに攻守は逆転する。

「お返しだ！……！？」

だが、それは再び変わる。ユーリの斬撃よりも早く、上空からの火炎弾がユーリへと迫る。反射的にそれを躱し、地面に当たった火炎弾が周囲に炎を撒き散らし、その温度を上げていく。

「くっ！」

その時後退したユーリを、三体のフェザードラゴン亜種が嬲り殺さんとその腕を、尾を、牙を振るう。その連撃を剣で捌き、魔晄で吹き飛ばし、体をひねり回避する。

「吹っ飛べ！」

剣から灰色の斬撃が切り放たれる。大気を切り裂き真っ直ぐに揺らぐことなく飛び交う三日月の衝撃波。それは巨竜の咢を打ち抜き、僅かにその顔を上空に跳ねあげさせる。けれど、そこまで。それ以上の効果は期待できない。

「一撃で駄目なら……数で押し込むまで！！」

剣に纏った砂鉄をそのまま弾丸に変え、前面に弾幕として放つ。その数は数百にも及ぶ。そして、それと並列して魔晄を剣に纏わせ、斬撃の嵐を生み出す。

「行けっ！」

言葉と共に圧巻の光景が展開される。黒い弾丸と灰色の三日月が津波の様に巨竜を飲み込もうと迫る。だが、そもそも相手は少なく見積もっても竜種。このままおとなしく飲み込まれるような存在だろうか？

それは本来、おとぎ話でも大量に描かれ、ある時は強大な敵として、ある時は最上級の守護者として、またある時は世界を支える神として。元々竜と言うのは他の存在と違い、おおきな影響力を持つものとして描かれる側面が多い。そして、それはユーリの世界しかり、この世界もその例には漏れない。

詳細はともかく、竜というのはこの世界でも先程あげた例にもあるとおり、敵として落ちた者もいれば、守護するために一か所にとどまり奉られる者、世界の意思が形を為した姿としてなど、密接に関係している。

『ガァァァァァ！！』

咆哮。その口から放たれた竜の声は振動となり弾幕を吹き飛ばす。あたかも、ろうそくの火を吹き消すように、実に呆気なく。そして、残り六体のフェザードラゴン亜種は己が体に流れる魔力を力付くで叩きつけるように口から膨大な奔流として撃ちだす。すなわちドラゴンブレスと呼ばれる物だ。

「ちっ！厄介だな」

それを見ていたユーリは、空中に疾駆し、少しでも距離を放す。飲み込まれれば最悪そこで終わりかねない一撃。今ここに居るフェザードラゴンは、以前迷いの森で戦った時の個体とは雲泥の差がある。あれ以降ストラこそ減じたモノの、総合的にはかなり強くなったであろう自分が防戦に徹する程、無論そこには数の不利がある事は否めない。

「ふっ！」

竜の息吹を空中で回避しながらも、ユーリはフェザードラゴン亜種に衝撃波を叩きつけるように飛ばし、砂鉄を鎌の様にして切りつける。だが、回避を考えた一撃では竜の体を傷つけるには至らない。だてに砂漠で過ごしていた訳では無いらしい。その肉体は屈強、皮膚に当たるであろう。鱗……竜鱗と呼ばれる部位は元々の強度に加え、竜が過ごした環境に合わせ、さらに密度を上げてその厚みを増している。

『『ゴォアアアア！！』』

竜の方向が全方位に振動として放たれ、そのあまりの音量にソニックブームとして周囲に物理的な破壊をもたらす。その威力と音に

ユーリの速度が若干落ちる。当然、本能で生きているであろう目の前にいる竜たちは、狩っている最中の獲物の隙を見逃すほど甘くない。即座に口から火炎弾が、竜の息吹が、尾からは棘が放たれユーリを囲むように迫りくる。

「……」

無言でそれを眺めるユーリ。剣を地面に刺し、力を込める。次の瞬間、足元から圧倒的とも言える炎が吹き上がり、壁となってユーリへと向かう悪意を阻む。炎の壁は高く、そびえるように存在する。ユーリを囲むように、守るように。だが、それはこちらから向こうの行動が見えなくなる危険もはらんでいるという事。

『ガァアアァ！』

そしてその後ろから巨大な影が、炎を文字通り強引に突破しユーリを喰らうためにその身を躍らせる。それに対しユーリは無反応。既に竜の咢はユーリの真上。もう既にどんな事をしようと回避は間に合わず、その巨大な咢が閉じるのを防ぐ術は無いだろう。結局その口は閉じられ、一人の青年は、その口に体の上半分を食いちぎられる光景が次の瞬間に血しぶきと共に広がるだろう。

『ガァ！？』

……今口を閉じた中に本人が居れば、だが。噛み千切られたはずの青年の姿は掻き消え、その口にはなんの歯ごたえも無い。まるで、霧や霞を喰ったような、そんな感じが竜の中に広がった瞬間、頭上から衝撃が訪れる。

『ギャウウ！？』

不意を打ったその一撃は竜にダメージを与えこそしないものの、その関心を引くことはできた。無論竜は上へと視線を向け、警戒する。下から上へと、意識が集中する。次の瞬間、竜の意識は混濁することになる。

『ガァアァァ！？』

腹部に衝撃、それも今までない程の激痛。それは自身を傷つけている一撃。今まで弾き飛ばし、通用しなかった物とは次元が違う。

伝説と呼ばれる竜鱗、けれど、絶対では無い。フェザードラゴンは種別で言えば亜竜と呼ばれるモノに分類される。竜人や生物としての竜はこっちに当たる。本来の意味の【竜】には及ばないものの、強力な種であることは間違いない。

だが、亜竜として考えるのであればフェザードラゴンは亜種であれ何であれ下位に属する。だからこそ、付け入る隙はある。意識が違う所に向き、筋肉が弛緩し、意識が意識外の所から鱗の薄い場所の急所に全力を叩き込めば打ち砕ける。そこに遠慮も手加減も一切ない。文字通り絶殺を狙った物。だからこそ、次は無い。体の下には、砂に塗れながらも笑みを浮かべる、先程竜が一気に喰らったはずの青年がいた。

「……油断大敵ってな。といっても、こっちもあんまり余裕とは言い難いが、まずこれで一体」

全力の魔晄にストラを上乗せし、剣の炎を一点集中し、一気に突き貫く突撃。もしこれで通用しなければ、それこそこれからの展開は間違いなく不利になるだろう。結果だけを見れば速攻を決めたこ

とになるが、貫け切れなければカウンターの危険もあった。

それにしても、咄嗟にやったがものの見事にうまくかみ合った。膨大な熱量に包まれた炎の空間内ならば、蜃気楼を生み出すこともできる。自分は砂地にもぐり、後は餌にかかるのを待つのみ。そして、踏み込んできた獲物に砂鉄を伸ばし、頭上に攻撃を加える。だがそれこそブラフ。意識を上に向け、四つんばいの体勢で動いていた体が完全に無防備になる。そこを狙う。

「燃え尽きろ！！」

剣を押し込み、その体内で炎剣を開放する。目から口から、ありとあらゆる場所から炎が吹き上げ、焼き尽くす。ぶすぶすと音をたて、その命を奪う。下手に生かせば今度はこちらの足がすくわれるだろう。だからその可能性を潰す。あまりの強度のために焦がすのが精いっぱいだったが、それでも既に命は尽きただろう。剣を引き抜き、竜の体の下から抜け出る。

「ふっ！」

その勢いのまま跳躍し、距離を取る。その表情は険しい。炎の壁を解除し、外の光景を見る。そこにはまだ六体のフェザードラゴン亜種が此方を殺意のこもった目で見ている。

「不意打ちでようやく一体……防戦一方ってのもなんだかな。まったく一体ずつ来いって話だ……それも面倒だな」

自分の発言に苦笑いを零す。状況は悪い。けれど、こんな所で止まってはいられないし、止まらせてもくれないだろう。なら、やる事は一つ。

フェザードラゴン亜種一体がその両手、両足を使い、まるで戦車とでも言わんばかりの突進を仕掛けてくる。その後ろでは火炎弾を放つフェザードラゴン亜種が二体。横合いから竜の息吹を吐くのが一体。空中では残った二体が尾に生えているとげを勢いよく飛ばしてくる。それを見据え、魔力を循環させる。

このまま自分一人では戦況は硬直するだろう。なら、一気に押しつぶしにかかってみるまで！

「さぁ、ここからが本番だ！」

体からは魔力が質を変え顕現する。その色は青。憑依召喚を行い、自身を強化する。そして術に使われたのはコパルディア。砂漠と言う環境に置いてその真逆の属性は確かに効果はあるだろう。けれど、それははっきりと言えば今のユーリそのものにも言える事である。氷を砂漠に持っていけば溶けて水になり、砂地に吸い込まれるのが常識。

「始めようか！！」

けれど、その氷が大陸よりも巨大な氷河であれば、砂漠の温度がずっと低ければ、それこそ零度を下回ると言った具合にまで。要するに砂漠の環境を氷が解けないように変えれるのなら。氷が溶けて消えると言う現実は幻想となり、幻想は現実に打ち砕かれる。

「時間をかける気は無い！だから……ここで散っていけ！！」

アイスストーム。極寒の冷風が吹き荒れる。それは大気中の僅かな水分すらも凍らせ、吹雪として吹き放つ。それはこちらへ襲い掛

かってくる巨竜の足を止め、火炎弾をかき消し、とげを風が逸らす。

『『『ゴァアアア！？』』』

急速に激変して行く環境に困惑するフェザードラゴン亜種。けれど、それも困惑どまり。確かに今までにこのような環境に居た事は無いのだろう。今までいたのは灼熱の大地であり、極寒の世界とは無縁だったのだから。けれど、だからといって、直に弱ると言う訳では無い。それは毒と同じような物。影響を及ぼすまでには時間がいる。

その内の一体が吹雪の中を猛然と突進してくる。他の竜は離れた所から火炎弾を撃ってくる。だが、それこそが狙い。一体ずつならば此方に分がある。

「はぁああ！」

氷の氷像が作り上げられ、それは意志を持つかのように何の支えも無く動き出す。西洋甲冑の様な外見をした氷像は、兵士の様にただ与えられた命令をこなす。竜へと挑むためにその手に氷剣を握り、果敢に立ち向かう。

だが、それも、竜の前では児戯にも劣る。尾を振り回し、その一撃で簡単に砕け散る氷の兵士。だが、それでいい。立ち向かって来るものならば相手にせざるを得ない。なぜならいくら自身に通用しなくとも動きを束縛される、又は手間をかけられるものは誰だって嫌がるものだ。

『グァッ！？』

そして、変化は攻撃したはずのフェザードラゴン亜種に現れた。動こうとしても前に進まない、不思議に思ったのか後ろを見てみると、先程砕いたはずの氷像が氷のまま尾を巻き込み、その場に縫い付けていたのが見える。無論これはその場しのぎの物。その気になれば打ち砕く事はたやすい。だが、戦場に置いてこの隙は致命的。

『よそ見してると！』

目を前方の獲物に戻す前に声が聞こえた。青年とは違う女性特有の声。だが、竜はそれを気にしない。だが、自身に何等かの脅威が訪れている現状は認識する。今必要なのは一刻も早く迫りくる敵を排除すること。だが、それは成される事は無い、永遠に。

『死んじまうよっ！』

ユーリが憑依を解き、コパルディアを攻撃に回す。術から解き放たれたコパルディアは氷を槍の様に細長く作り、それを此方に向いた竜の口に突き刺す。さすがに頑丈な肉体でも口の中まではそこまでもないらしい。強引に突き入れた氷槍が凍っていく。竜の体ごと。

フェザードラゴン亜種は火炎弾を放とうと口に力を込めるが、僅かに遅い。既に喉の奥、肺の横にあった火炎を生み出す機関、火炎袋と呼ばれる部分が凍っている。これでは火を作り上げる事はできない。その事実に気づき、若干体の動きが止まる。それが止め。もう抵抗する方法も、その時間も存在しない。内から冷やされそれは外には見えないものの、確実に竜の命を奪う。

『……一丁上がりってね』

振り向き、指を鳴らすと、フェザードラゴン亜種に罅が入り、次の瞬間砕け散る。あっけなく。簡単に。それは散り散りになり、細かい破片となり砂漠の砂に混じっていく。けれど、すぐに溶けてしまうだろう。そうしてまた一体減らすことに成功する。

「続けていくぞ！」

その声と共に、ユーリの体から黒色の光が漏れる。再びの憑依召喚。憑依させたのはライザー。その能力は兵器の召喚、金属化、及び化学的な武装である。他の個体へ駆け出していくコパルディアを見ながら、ドライアードとドリトル、オロチを呼び出し向かわせる。そして、更に向かって来るフェザードラゴン亜種を視認し、片手を虚空につきだす。

「さぁ、どうやって潰してほしい？……リクエストに応えてやる」

その手にはグレネードランチャーが。大き目の筒状の砲身からは拳大の砲弾が放たれ、向かって来ているフェザードラゴン亜種を牽制し、足止めをする。爆破し吹き飛ぶ砂塵。視界を覆い、目を潰しにかかってくる砂粒。だが、フェザードラゴン亜種はそれを気にしないように、否。真実気にも止めずにこちらを見てその突進を再開させる。

それを見たユーリはその手から空き缶の様なものを投げつける。それはフェザードラゴンの顔に当たり、僅かに跳ね返る。そこには何の変化も見られない。だが、この戦場に置いて、意味がない事などするはずがない。変化は次の瞬間、如実に表れた。

『ギャァアアア！！！』

閃光発音筒、スタングレネードと呼ばれるソレは、フェザードラゴン亜種の目の前でその効力を発揮し、光と轟音を持ってその動きを奪うと言う目的を達成する。しかも被害はそれだけにとどまらない。本来非殺用であるはずのスタングレネードから無数の破片が飛び交い、フェザードラゴン亜種の顔に向かって飛んでいく。これは殺傷用であり、通常のグレネードの様に飛散する。傷こそ与えられなったものの、冷静さを完全に奪い去ったその衝撃は此方に流れを呼び込む。

「止まってる暇は無いぞ」

距離を詰め、上空に兵器を呼び出す。呼び出したものはナパーム弾と呼ばれる油脂焼夷弾。これは平たく言えば燃えるための燃料であるガソリンをさらに燃えやすくし、粘性を上げる事で消し辛く、集中的に燃やすための薬剤入り火炎弾と思えばいい。フェザードラゴン亜種に着弾したそれは広範囲に広がり、スタングレネードで動きを止めたフェザードラゴン亜種と、その周りにいたもう一体も巻き込み容赦なく燃え上がる。

『ゴァアアアア！？』

『ギジャアアア！！』

絶叫、けれど、その声もすぐに聞こえなくなる。燃焼し続けるナパームは周りの酸素を驚くほどの速さで消費して行く。ここが砂漠であることを鑑みればそれは既に呼吸などできる状況では無い。無論、フェザードラゴン亜種が人間と同じく酸素を吸い、二酸化炭素を吐く、とは限らない訳だが、少なくともこの一撃で酸素を吸っていることは確信できた。苦しみあえぐ、その姿を視認すればすぐに理解できる。

ナパーム剤によって常時焼かれ続ける苦しみよりも、呼吸を封じられ窒息していく苦しみの方が上だろう。のた打ち回っている。ユーリは完全にこちらへの意識を外したフェザードラゴンに向かって手を意のばす。そして手には巨大な銃身を持った銃器の引き金が握られる。

「終わりだ！」

それには銃口が複数あった、数にして１２．それだけの銃口を円状に取り付け、その場で固定砲台として機能する。エネルギーが充填され、目の前の敵へと死を与えるために稼働する。その一撃は音速を越え竜へと食らいつく。その名はレールガン。

だが、唯のレールガンではない。今戦っている存在には単発のレールガンでは仕留めきれない。精々鱗に傷をつけるか、少々の凹みを穿つ程度だろう。それでは足りない。だからこそ、質は数で埋める。だからこそ、この銃器の名はガトリングレールガンとでもいうのだろう。

その連射力は一秒間に３５０発と言った異例の速度を誇る。それはおよそ３０秒ほど撃ちっぱなしにしておけば、軽く一万発を越えるほどである。それはフェザードラゴン亜種に向かって放たれる。全てが音速を軽く越え、ソニックブームを作り上げながら一直線に進む。一発一発はその強靭な体を前に僅かな傷や歪み程度しか作れないが、それも一万ともなると話は変わる。瞬く間にその形は変わり、原型から離れていく。

『アァァァ……』

短く、弱弱しい断末魔とも言えない声が僅かに大気を振動させ、その巨体が沈む。残るは二体の巨竜の亡骸。それを一瞥し、残りのフェザードラゴンの方へと視線を向ける。そこでは召喚状たちが巨竜とせめぎ合っていた。

『……燃え尽きよ！』

オロチの声と共に極炎が渦を巻き、巨竜を包み込む。だが、秒を待たずにそれは吹き飛ばされる。フェザードラゴン亜種が起こした強烈な回転によって生まれた暴風で。だが、動きが止まった瞬間、轟炎陣によるプラズマ砲がその顔面へと突き刺さる。その熱量で目を潰され、絶叫を上げるフェザードラゴン亜種。だが、それには目もくれず、足元へ苦無を投擲する。その柄には起爆符がまかれ、着弾と同時に爆発する。

『ガァッ！』

無傷で爆風に耐えたものの、突然足元が崩れたせいで体勢を崩す。そして、その横合いから、巨大なドリルが迫りくる。

『参ります！』

ドリトルが腕を自分よりもさらに大きなドリルへと変え、一直線にフェザードラゴン亜種の脇腹へ突っ込む。火花を上げながら削り合う鱗と突き進もうとするドリル。一見それは拮抗しているように見えた、だが、しばらくすると明暗が分かれていく。少しずつドリトルのドリルがフェザードラゴン亜種の体内へ向けて前へ前へと進んでいく。

『申し訳ありませんが、その命、奪わせていただきます』

淡々と告げる。その瞳に感情の波は無い。ただこの身を前へと走らせるのみ。背中のバーニアが唸り、フレアを吹き上げながら推進力となり、出力を上げていく。既に鱗は抜き去り、肉体へとドリルがその力を振るう。周囲へと響くほどの音を上げながら自分の命を刹那ごとに削っていく死神を見つめながら痛みに声を上げる巨竜。そしてそれを気にも止めず先程の自分の言葉を実行するために腕に力を込めるドリトル。

更にフレアが輝きをました瞬間、ひときわ大きな衝撃が走り、ドリルが空に舞う。貫通した威力と速度のまま、空へと走る。その後ろには大穴を開けた亡骸が物言わないオブジェと化していた。

『残りは二体。ミッションを続行します』

その声と共に小型のドリルを展開し、残ったフェザードラゴン亜種へと、牽制として放つ。それは着弾する前に爆発し、煙幕を張る。一時的に姿を見失った状態になったフェザードラゴン亜種に対し、コパルディアがなんと煙ごと氷漬けにする。

『さぁて、これで終いだよ！やりな！ドライアード！』

コパルディアの言葉に応えるように、影が生まれる。その影の本体は巨大な煙幕ごと凍らせた氷塊を越えるほどの、本当に巨大な花を咲かせた植物がその花を向ける。そして、その植物の葉の上にはドライアードが座っていた。

『これなら、唯では済まないの』

光が集い、大きくなっていく。ここは迷いの森とは違い、光が溢

れている。故に蓄えられる力も比較にはならない。既に目を向けていられないほどの光量を持った花がそれを正面の敵へと解き放つ。直後、白い閃光が視界を埋め尽くす。時間を引き延ばした空白の一瞬、フェザードラゴン亜種は氷を砕こうと力を込めたが氷は砕ける事無く、我が身と共に蒸発する。そこに声は無く、動きも無い。ただ、それが過ぎ去った後、射線上がきれいに半円状にくりぬかれ、亡骸さえも残さず敵の面影ごと消し去った事実のみが残った。

『これで、全滅なの』

ドライアードの声が静かに響く。それで戦闘はひとまず終了。だが、まだこの先にも敵は潜んでいるだろう。油断はできない。まだ、目的の相手とは遭遇してすらいないのだから、この戦いは前哨戦ですらないのだ。いうなればデモンストレーションと言った所だろう。

「……さて、進むか」

周囲の気配を確認し、憑依を解く。ライザーは他の召喚獣達と共に進む。纏めて送還してもいいが、恐らくすぐに再び呼び出すことになるだろう。だからこそ、このままで進むことにする。そして、ふと一つの事柄に気付く。

これって、術式をいじったら召喚獣が自分の意志でこっちに来れるようになるんじゃないか？

きっかけ自体は何でもない。魔力を消耗したくないなら召喚獣自身から負担してもらえばいいだけの話。だが、それを行うには術式を色々いじくっていく必要がある。無論頭の中にある知識はその結果に対し可能だと告げている。

いい加減慣れたが、この知識と経験はなんなんだろうな？旅が続けば続くほど鮮明に、力強く刻み込まれてるような気がするんだが……

内心この現象に慣れた自分に呆れながらも有効利用しようとする。腐らせておく気は無い。それこそ、意味がない。ただでさえこの身は蝕まれている。それも既に何か決定的なものが崩れている予感さえある。今普通にしていられるのは嵐の前の静けさと言う物だろう。いつ終わりが来るか判った者ではない。

だからこそ、使えるモノは使えるうちに使っとかないとな。後悔なんてしても仕方ないしな。できる事なら笑いあえる結末が欲しいけどな。

そのためにリスクをある程度は度外視して未知の事象を受け入れている。約束を守りとおす為、己が目的のため、何より失わぬように。

そんな考えと共に術式を脳内で調整して行く。行軍しながら分割された思考の幾つかでそれを行う。そんなユーリの後ろでは召喚獣が色々と話をしていた。戦場の中にいると言っても、いつまでも難しい顔をしていては息が詰まる。緊張感は適度に、緩めすぎる事も無く、絞めすぎる事も無い。その加減をわきまえている召喚獣たちは慌てる事無く、自然体で歩いていく。

『なんか最近、面白い事が無い様な気がするんだけど、なんか無いかい？』

『面白い事、ですか……』

『……無い』

『……同じく』

『私も無いの』

『あ～もう！誰も無いのかい！？特に無口なそこの二人！もう少し意見言いな！！』

コパルディアがだれも発言しないことにげんなりしながら大声を出す。その言葉にドリトルは困った顔をし、ライザーとオロチは我関せずと違う方を向いている。ドライアードは片手を上げながら言っているが、結局意見としては変わらない。活気づいた場所を好むコパルディアとしては我慢できるものでは無い。

『くっ！こうなったら……マスター！』

「……ん？」

突然前を歩くユーリに声をかけるコパルディア。それを疑問に思いながらも振り返るユーリ。他の召喚獣たちは、一応横目で確認する程度の反応は示している。そして、全員の視線が向かう中、コパルディアの口が開く。

『他の召喚獣達も呼ばないかい？せっかくだし、全員の顔合わせってのも悪くは無いだろう？』

その言葉にユーリは少し思案にふける。どのみちここはユーリ以外は召喚獣のみ、危なくなれば送還すればいい。しかもそこいらの雑魚位なら、問題なくあしらえるくらいの強さは全員が持っている。

しかも、憑依や融合を使ったりもするから最初の魔力消費を除けばメリットの方が大きいとも言える。そして、それを考慮に入れ答えを出す。

「そう、だな。それならどうせだし全員呼んでみるか」

『さっすがマスター！そう来なくちゃね！』

パチンと指をならし、上機嫌で答えるコパルディア。ユーリは術式を起動し、残った召喚獣を全て呼び出す。

テテとポワソ、プニムをさらに召喚し、人口密度が上がる。そしてその光景を見たユーリにある感想が浮かぶ。

俺って黒一点とかそんなのか？紅一点じゃなくて。肩身が狭いどころじゃないな。どうして俺の召喚獣って女性人格ばっかりなんだか。不思議通り越して不気味だ。

ユーリが内心戦慄していると、女性だからなのかは分からないが、即座にその場が盛り上がる。此処が戦場なのにもかかわらず。それを複雑な目で見るユーリ。けれど、何も言わず黒騎士の気配をめざし足を進める。その後ろでは複数人の声が聞こえてくる。

『で、今回この大人数はどういった理由で呼んだの？』

『いや、結構時間かかりそうだし、他の奴らも見当たらないし、どうせなら顔合わせもかねて、全員呼んだらって私が行ったらマスターがゴーサインだしてくれてね。こうなったわけさ』

『へぇ、けど、流石に多くありません？これ。主様一人男とかハブ

ってるようにも見えますし……』

周囲を見ていたプニムが質問すると、コパルディアが捕捉をする。その言葉にポワソが呆れながら口を挿む。

『……今更』

『……愚問だな』

口数が少ないながらもライザーとオロチが肯定の意を告げる。そこにはなんとなく投げやりな感じもする。

『ご主人様の召喚獣はなんでか女の人ばっかりなの。いつ男の人の召喚獣が来るか、コパルディアと賭けとかしてるの！』

『って！何ばらしてんだい！』

ドライアードが何食わぬ顔で極秘事項であるはずの賭けを言う。これだから天然は……とコパルディアは頭を抱える。これで、ここに居る者たち全員に知られることとなった。ちなみにこの賭けはアレスパの街で情報収集に呼ばれた際に行った物である。

『あっ！それ私も便乗させて下さいな！ちなみに何がもらえるんで？』

『ご主人様との一日デート権なの！』

『乗った！』

『……私もやる』

とりあえず面白そうなので自分も加わろうとするポワソ、そして景品をドライアードから聞いて目が本気になる。ライザーもそこに言葉を重ねる。それを見てポワソが肩をすくめながら言葉を発する。

『なんでいきなりやるき出してんですか！まったくこれだからお子様は……』

『……』

『ちょ！なんで無言で剣を構えてらっしゃるのか聞いてもいいですか？』

『まぁまぁ、それならみなさんは何時ぐらいに男性が召喚されるとお思いで？』

『『『『『……無いと思う』』』』』

『ですね』

満場一致で意見が確定する。そしてこの瞬間、賭けにならない事が判明する。選択肢一択の賭けなど、成立しないにも程がある。ギャンブル性の欠片も無い。結局お開きになる。幸いなのはこの会話が本人に聞こえていない事。まだ青年は、きっとそのうちこの肩身の狭さから抜け出せると信じていたりする。思うのは特に悪くは無い。

『それにしても、まぁ、よくここまで個性的な面子が揃ったものね』

『そうですね。同じ召喚獣にしても良くも悪くも個性がありますし、

環境とかにもよりますし、後は才能とか』

『運もいいんじゃないのかしら？割とこういうのは偶然選ばれるのが多いしね。それと、今まで暴走させた事ってないんでしょ？』

召喚術というのは、基本暴走の危険が付きまとう物だ。だが、ユーリ以外のエイナ、リコにいたっても特にそんなことはなく、普通に扱えており、問題が無いように見える。

『無いね。元々マスターはそう言った事は無意識で制御してるみたいだし、エイナとリコは最初はおっかなびっくりってとこがあったみたいだけど。ねぇ、テテ』

『そうでしたねぇ。割とこういうのは慎重なんだよ。あの二人』

『ご主人様は自然にやってるみたいなの。まるで最初から使えてたみたいに』

『……不思議な物ね。そんな簡単な物なのかしら？』

『さぁ、召喚される側の私達からは何ともいえませんね』

召喚獣達によって話される召喚術談義。それは白熱しているらしく、結構長く話し込んでいる。それは前を歩いているユーリからすれば仲がいいなと言う一言で済むが。

「……はぁ、俺の話し相手は誰もいないのか……」

そう言うと、常夜の石が明滅する。それに気が付いたユーリは自分の思考の一部を常夜の石の中に送る事にする。割と話し相手が欲

しいと思ってたりする。

常夜の石では変わらない星空が瞬く。その下にエイナが切り株に腰かけたままこっちに笑いかけていた。

「ほら、ユーリ。こっちこっち！」

「全く、いきなり呼んで何か気づくことでもあったか？」

「うん、まぁね……それにしても、ユーリ」

「なんだ？」

「なんか友達がいないさびしい子に見えたよ」

恐らくさっきの状態を言っているのだろう。それに肩をすくめながら答える。

「いじめになってるぞ、それ。アイツらも悪気はないしな。さすがにあれだけ賑やかだと話に入りづらくてな」

「ふ～ん。喧しいのは苦手？」

「いや、唯、雰囲気を壊すのが嫌なだけだ」

「そうなんだ」

「ああ」
「まぁ、私が話し相手になったげるよ！喜んでね！」
「おいおい」
「あはは……いいじゃない。最近はあまり話してなかったし、さ」
軽く言う。その一言に何か含む物があると気付いた。心なしか眼が細まる。
「……それで、どうしたんだ？」
「あの、さ。ユーリ。フェイファーの所で約束したの覚えてる？」
「約束……ああ、風呂場の一件か」
ユーリは振り返るように言った。あの時と比べると結構遠くまで来たものだと笑う。だが、その笑みをどう受け取ったのか。エイナは顔を真っ赤にしながら捲し立てる。
「あ！あの時は許したけど、つ、次やったら張り倒すんだからね！」
「いや、やらんから」
「……むぅ。やっぱり私って魅力ない？」
「それはあの時答えただろう。蒸し返すな」

「ユーリだって！約束の事を聞いたのに、その前の事なんて聞いてないのに……」

不貞腐れたように言うエイナ。それを見て溜息をつくユーリ。とりあえず何とか諌めようと口を開く。

「悪かったよ。それじゃ何が言いたいのか聞いてもいいか？」

その言葉にまだ納得が言って無さそうに見えるがなんとか本題を言う気になったらしい。

「うん。あのね。あの約束ってまだ有効？」

「まぁ、少なくともこの旅が終わるか、お前が記憶を取り戻すぐらいまでは有効だな、多分」

なんとなくそう答える。恐らくはそんなくらいだろう。それ以降は、一緒にいるとも限らないのだから。むしろ、生きているかさえ。

「そっか」

その言葉に安心したような、どこか残念なような、そんな声色で短く言う。それに違和感を強めるユーリ。目の前の桃色の髪の持ち主はこんなに儚げだったろうか？これではまるで……

「それでね」

続く言葉に意識を引き戻す。エイナはどこか少し迷った後、真っ直ぐにこっちを見る。

「約束の内容は、覚えてる、かな？」
「困った時は助けるだったか？」
「うん。覚えててたんだ」
「忘れててほしかったか？」
「ううん。嬉しいよ……お風呂の一件は忘れてても良かったけど」
「……」
再び紅潮しながら言うエイナ。眼はこっちを恨みがましく見ている。それを気まずげに目を逸らすユーリ。けれど、直に笑顔に戻る。不信感が募る。
「少し質問してもいい？」
「……答えれる範囲ならな」
「うん、それは大丈夫だよ。簡単な事だから」
そう言って、ユーリから一旦目を放し、空を見る。決まった位置にいる光源が光を放っている。慣れてしまえばきっと飽きてしまうのだろう。それが少し悲しく思えた。視線をユーリに戻し、笑顔で問う。
「もし、もし、私に何かあったらユーリはどう思う？どんな事でもいい。怪我をしたときでも、敵に囲まれた時でも……私が……だ……も」

最後の言葉はかすれて聞こえる事は無かった。けれど、ユーリは考えるより先に答える。

「助ける」

「あっ……」

「俺がそう決めた。例えきっかけはあの時の約束でも、俺は守ると決めた。だから、守れるようにあらゆる手を模索する」

迷う事も目を逸らす事も無く、ただ、思った事を口にする。それを驚きに目を見開きながら凝視するエイナ。肩が小刻みに震える。ユーリは気付いているのか判らないが、既に涙腺が僅かに緩んでいる。

「そ、それは約束を守りたいから？」

目を逸らし、若干震える声を押し隠しながら問う。それを真剣に見つめユーリは答える。

「それもある、が、俺が守りたいと思ったからだな」

「……そっか」

「それにあの約束の後お前が言ったんだろ？」

「え？」

「困ったら頼るからきちんと応えろってさ」

「……うん」

それをきいてエイナが笑う。これなら大丈夫だと信じれる。目の前の青年ならどんな時でも前へ進めると確信する。

「……それじゃ、質問はおしまい！さて、他のお話しよっか！」

今までの雰囲気が霧散し、そこにはいつものエイナがいた。先ほどまでの儚さはもうない。それを見ながらユーリはその話に付き合う。笑顔で笑いあう二人。けれど、ユーリはその心のうちに何かを溜め込んでいることに気付いた。そして、近いうちにその原因を知ることになる。

ユーリの分かたれた思考の一部がエイナと話している間、砂漠を歩き続けていく。無論ただ歩いていくだけで終わる訳は無く、幾度となく襲ってくるモンスター。それに応戦する召喚獣。だが、そんな時、ひときわ大きな振動が地の底、砂の下から響いてきた。

「これは……」

『地震とかじゃないわね。こういう時はこっちにとって都合の悪い事が起きるのよね』

『ありがちですよね～そういうのって』

プニムとテテが軽く言い放つ。だがその言葉と裏腹に戦闘態勢に移る。どことなくこの先の展開が読めたのだろう。

『センサーに反応。１０時の方向。データに該当種族なし。接敵まであと１４秒』

『……こっちのデータにも該当なし。全長１３０メートル。蛇に類似したモンスターの姿を確認』

ドリトルとライザーが詳細を伝える。敵かどうかはともかく、何か巨大な生物が原因だと判明した時点で全員が警戒態勢に入る。

『本当に退屈しないねぇ。』

『でも、そう言うのが好きなんでしょ？波乱万丈っていうんでしたっけ？こういうの』

『シルターンの諺かい？確かに単純な力比べとかっていうのは嫌いじゃないねぇ！』

『まったく、脳筋ですかっての！』

笑みを浮かべ、軽口を言い合いながらお互いに上下剣と杖を構えるコパルディアとポワソ。そこに緊張も動揺も無い。あるのはまっすぐな戦意のみ。

『……もうすぐ開戦と言うのに、呑気な』

『でも、オロチも丸くなったと思うの。最初の頃なら無言で終わらせてたの』

『……主が頼んだことだからな。無下にはできん』

『固いの。でもらしくていいかもなの』

周りを見て心なしか、うんざりしたような声で言うオロチ。忍びと言う存在で在る以上、看過しづらいのだろう。けれど、それをドライアードがやんわりと横から口を挿む。なんだかんだいってもこの空気に染まっているのだと二人は気づいている。それがどれだけ大切なのかも。

「さて、と、敵なら容赦しない。関係ないなら去ってほしいが、無理そうだな」

ユーリが呟く。今此方に向かって来る気配に黒騎士の気配が若干混ざっている。つまり……

「茨が噛んでいるなら、避けてとおってくれる筈は無いよな」

剣を引き抜き、揺れを起こす存在を、砂の中からこちらへ向かって来る存在を感覚で掴む。全員がその方向を見、体に力を籠め、各々の一歩を踏み出した瞬間、大地が爆ぜ、大気が鳴動する。

そこから現れたモンスターは今までのどのモンスターよりも大きく、異形だった。一言で言うならワームと呼ぶのが正しいだろう。

蛇の様に長大な体をし、その幅と同じくらいの口を前面に向け、砂漠と同じ色をしたその対象は、いうなれば巨大なポンプのように見えなくもない。率先してユーリが真正面から魔晄で斬撃を当て、興味を引く。自身を囮にする心算らしい。

『うわっ！キモッ！！なんなんですかあの嫌悪感の固まりみたいなのは！？』

『ポワソ、気持ちはわかるけど、もう少し落ち着いたら？』

『けどですねぇ、プニム。女性としてあれは受け入れたらだめだと思うんですけど』

向かって来る巨体から離れるように跳躍する間にそんな軽口の応酬をする。

『まぁ、それには賛成ね』

『って二人とも何悠長に話してんの！さっさと戦う！親分だって頑張ってるんだから！』

そこに横合いから檄が飛ぶ。そちらでは拳で大地を殴り、地を這う衝撃波を繰り出しているテテがいた。

『はいはい、テテもああいってるし、ほら行くわよ』

『気が乗らないんですけど、気分が悪くなりそうですし……』

『それなら遠距離から攻撃すればよろしいのでは？』

空中で小型ドリルを打ち続けているドリトルがやんわりと言って来る。と言っても自分が装着しているアーマーの自動制御で撃っているので、実質彼女は上から見ているだけだが。

『……どっちかっていうと視界にも入れたくないんですけど』

『それは、ご愛嬌という事で』

その言葉に、目をドリトルの方へ向け、大声で文句を言う。

『あんなご愛嬌がありますか！？アンタも天然ですか！？』

『ほら、せっかくの大舞台だ。粋に行こうじゃないか！！』

サンドワームの前方で剣を構え、氷の斬撃を繰り出しながら臆さず切り込んでいくコパルディア。それを見て、ポワソはげんなりする。

『こら！脳筋！！こっちを無視しながら嬉々として走り出さないでくださいな！』

『……敵の行動予測、及び最適な武装の選択。演算開始』

『……無駄口を叩くよりほかにする事が有るだろう』

文句を言うポワソを、周りが宥めたり注意しながら戦闘が始まる。中には気にせず戦闘を行おうとする者もいるが。

『それならさっさと倒しちゃえばいいの』

『……いや、そうなんですけどね』

『なら早くやるの』

ドライアードに言われ渋々杖に魔力を込める。砂の中を水の様に泳いでくるサンドワームを見ながら諦めたように溜息をつき、杖が光を放つ。

『ああもう！判りましたよ！！やればいいんでしょうが！まったく』

魔方陣が浮かび、サンドワームを狙って紫色の光が複数飛び交っていく。それはサンドワームを砂漠ごと爆撃して行く。

『……砲撃、開始』

ライザーが腕をバスターに変え、射撃を行う。砂から出た瞬間を狙い、確実に当てていく。だが、その動きが止まる事は無い。反撃と言わんばかりのその巨大な口から砂の砲弾を放ってくる。それは水の代わりに砂を使っている鉄砲水と何ら変わらない。砂の膨大な流れの前に、威力の劣る攻撃は全て弾かれる。

『だったら！』

コパルディアが砂漠ごと一気に氷漬けにする。それはサンドワームのいる場所にまで及ぶ。だが、異様な破砕音と共にサンドワームが空中に跳び立つ。その時、尾を振り回し、氷をこちらに向けて破片として飛ばしてくる。それを能力の一部を消すことで解除し、破砕した氷を失くす。

『ちっ！私の氷を力任せに砕くか。やってくれんじゃないか！』

『私も手伝うの！』

『某も手を貸そう』

ドライアードとオロチがコパルディアと並び、能力を行使する。植物の根がサンドワームに巻きつき、その動きを制限しようとする。更にオロチが注連縄と護符による結界を張る。それはモンスターであるサンドワームを封じる力となり、拘束する。

『これなら問題なく当てれる！』

『……目標確認、全弾解放』

『それでは駆逐いたします』

金剛角を腕から突き出したテテが角に力を籠め、大型の砲撃を放つ。ライザーは周囲にミサイルポッドを多数配置し、数に任せた殲滅を行う。ドリトルは回転を臨界まで上げ、空間が揺らぐほどまでになった巨大なドリルをサンドワームに向かって発射する。

『まだまだ行くわよ！』

『まったく、本当に気が乗らないんですけど』

プニムが髪を束ね、長い耳に巻きつける。その髪の束は槍の様になり、次の瞬間、花の様に咲き誇る。中心から紺色の光を撒き散らしながら一直線にサンドワームに砲撃を行う。更にその眼光がサンドワームを睨む。次の瞬間、サンドワームの皮膚が僅かに動き、ついで爆発する。そこに容赦なくプニムの砲撃が突き刺さる。その場所はテテの砲撃と同じ個所。

ポワソが放っていた紫の光弾が全て砂漠に魔方陣を描き、それはさらに大きな魔方陣を形作る。その中心に雷光を収束する。今まで

のポワソの攻撃はこのための布石。対象を設定された雷光は電光石火の勢いを持って敵の殲滅を行う。

全員の攻撃に合わせ、ユーリが魔晄を込めた巨大な炎を叩きつけ、白い光と音を失った刹那、全ての威力がサンドワームに殺到する。その煙が晴れた時、奇怪な姿に変容したサンドワームがいた。だが、既に命は無いだろう。既に半身どころか、僅かに口の部分が残っているだけの残骸。

『さて、案外早く終わったわ、ね！』

プニムがその残骸を睨み、融解させる。変化の魔眼。使うごとに効力の変わる魔眼。ある程度何が起こるかは自分で選べるが、ランダムで放つと自分でも知らない効果が出たりする。可能性の詰まった魔眼である。同じ効果を連続で使えない。数秒のタイムラグがあるなど、使い勝手が多少悪いが、それでも恩恵は大きい。最初は爆発、先程のは融解、と効果は全く違うものになる。他にも発火や簡易的な結界も可能。

だが、これだけの攻撃を行いながらも、サンドワームの能力には次の瞬間驚愕することになる。砂が蟻地獄のように一か所に流れていく。その中心にはサンドワームの残骸が飲み込まれていく。そしてその穴に砂がつまり、穴をふさぐ程になれば、次の瞬間、傷一つないサンドワームが飛び出す。

『嘘っ！』

『再生した！？』

『……』

「ちっ！」

驚愕するもの、無言で対応策を練り上げるもの、反応は様々だが、そこには苦々しさが混じっている。あれだけの火力を浴び、即死していたはずなのに再生とかどういったからくりがあるのか疑問に思うレベルだ。

『なら！何度でも凍らせてやるよ！』

『……調子に乗るな。そう言ったものは真っ先に怪我を負うぞ』

『へぇ、アンタは私があんなのに後れを取るって言いたいのかい？』

『二人とも、今は戦闘中なの』

『そうだよ！さっさと倒してから言い合えばいいじゃないか！』

『……再生時、妙な力場の発生を感知。恐らくあのモンスターには核があると推定』

『なら私はそれの観測、分析に移りますね』

『そう、それなら、アイツの注意を引くのはこっちで引き受けましょうか』

『全く手間ばっかりかけさせて、冗談は姿だけにしといてもらいたいもんですね』

「それなら、俺も行くか」

そう言ってユーリが行こうとすると、何故かポワソとテテに腕を掴まれた。疑問に思い、顔を向ける。

『主様は目的地に先行しといてくださいまし、あんなごみ処理場にいそうなやつはすぐに片付けちゃいますので！』

「いや、そういうわけには……」

『それにまだ先に敵がいるんでしょ？だったらここはアタシらに任せて先に行ってよ！こっちは大丈夫だからさ！』

「……」

二人に諭され、周りを見る。確かにここで止まっているよりかは前に進んだ方がいい。召喚獣である以上、迷いの森でしたように最終的に送還すればいい。周囲の召喚獣も同じ意見なのか頷いて返される。それを見て、僅かな笑みを浮かべながら口を開く。

「俺を先に行かせる以上、怪我なんかしないでくれ」

『任せといてくださいな！主様に珠のお肌を見せるためにも傷なんてつけるものですか！』

『そんなの心配することないからさっさと行きなさい』

『……行って』

『そういう事ですので、申し訳ありませんが、この場は私たちが預からせて頂きますね』

『……ご武運を』

『さっさと行っちまいな！こっからは私らの喧嘩さね！』

『そういう事だから……それにアタシらを信じてくれるんでしょ？それなら、絶対大丈夫ですから！』

『あっ！行くときはこれを身につけていってほしいの！』

全員に言われ、その場を振り向き先を急ぐ。歩きながらドライアードが渡してきた花飾りの様なものを、服の胸の部分に花の後ろについていた、実質安全ピンの代わりなのだろう棘をさし、固定する。効果のほどを判らないが何か意味があるのだろう。

「さて、出来るだけ急ぐか」

一気に砂地を蹴り加速する。足場が悪い事など関係ないとでも言うように走っていくユーリ。砂塵を巻き上げ、悪意を放つ元凶の元へと走っていく。しばらく走り、景色の変化に気がつく。その視線の先には、砂漠の中に聳え立つ岩山が見えた。

一方、残った召喚獣達はドリトルが分析を終えるまでの間、サンドワームに攻撃を幾度となく浴びせ、その体を八つ裂きどころか、灰燼に帰す。他にも超高熱で焼き尽くしたり、魔法で抉り取ったり、凍らせて砕いてみたり、硫酸弾を体全体にかぶせるように撃ったり、

様々な手を使うが、結局再生を止める事は出来なかった。

『ちっ！いい加減くたばれってんだ。敗者復活も回数こなすと腹立ってくるね！』

『……任務をこなすと言う分には有用だがな』

『あんなの欲しいかい？』

『……知性があれば、考えなくもない。欲を言えば小さければなおいいが』

『……なんで真面目に返すかねぇ。この堅物は』

『ほら！そろそろまた復活してくるよ！準備して！』

不穏な空気を作り出す二人を普通に叱って戦闘をするように促すテテ。

『テテは元気ね。ご主人を送り出したのはいいけど、この繰り返しの状況は何とかしないとね』

『……体力と弾薬の無駄遣い』

『私も魔力を使い続けると疲れるんですけど、後ろで休んでていいですかね？』

ライザーはこの戦闘における消費についての意見を述べる。ポワソは既に嫌になっているのか杖をくるくる回して上を見上げている。

『ポワソはまだ余裕があるの。嘘はよくないの』

『何を根拠に行ってるんです？』

『植物は嘘を見抜くの』

『本当ですか？それ』

『……一応、論文もある』

『意外な伏兵が！？』

『ほら！もう再生しましたってば！構えて構えて！』

テテの声で全員が戦闘態勢を瞬時に整える。なんだかんだいっても、ユーリに怪我をするなと言われた以上、目指すは無傷の完勝のみ。誰も傷つかない結果を望む。

『……千日手だな』

『……ええ、ですが、それもここで終わりです。皆さん解析終了しました。これより攻勢に移ります』

ドリトルが声を発し、それを聞いた全員の眼に力がこもる。これで終わる。そうすればユーリの元へ行ける。それを考えテンションを上げていく召喚獣達。ここに準備は整った。後はそれを実行するのみ。大気を振動させ、ドリトルの声が他の召喚獣の耳に直接声として放たれる。

『戦闘中に声は聞き取りづらいと思うので、この振動通信で会話さ

せて頂きます。其方からは普通に喋っていただければこちらで声は拾いますので』

『そりゃ、便利な事だね』

『有難う御座います。チャンネル回線を開きましたので、お互いに会話も可能です。通常時と同じように会話してくださって結構です』

そして、ドリトルからの話を聞き、それを行うための前準備を行う。

『……任務を開始する』

『よし、それじゃ行っくよ〜！』

まず、オロチとテテがサンドワームに砲撃を行い、動きを制限する。オロチが注連縄を周囲に放ち、苦無で固定し、それをテテの金剛角が増幅する。その結界に包まれたサンドワームは空中で貼り付けになったようにその動きが止まり、巨体が空中で静止する。

『それじゃ！私らの出番って訳かい！』

『頑張るの！』

『……作戦実行』

『それでは、行きます』

サンドワームはコパルディアの氷で凍らされ、ドライアードの作り出した樹木で覆われ、ライザーとドリトルが呼び出したミサイル

で、はるか上空へと運ばれていく。

『まったくいい加減消えてくださいな。もう見飽きましたっての！』

『確かに、だからこれで終わらせてあげる』

空中で待機していたポワソが空中で魔方陣を描き、その横で伸びた自分の髪を回転させながら浮遊するプニム。魔力でプニムの体の負担を軽減させ、サンドワームに強力な圧力をかけていく。そして、プニムの眼が見開かれる。そこで起こった事は全方位からの圧力が中心点に向かって進む現象が起こる。これは爆縮と言われる現象に酷似している。

全方位から狂いなく均等に圧力をかけられ、球状に潰れていくサンドワーム。その姿は氷と植物によって視認こそ叶わないが、既に拳よりも小さいサイズになっている。だが、爆縮というのは核兵器にも関わっている程の現象である。その本来の意図は爆弾生成に使われるものだ。だが、ここではそのビー玉くらいにまで圧縮された状態こそが望まれている。

無論この状態で生きているはずはない。それに仮に生きていたとしても戦闘は不可能だろう。だが、ここで地表に変化が訪れる。それを見ながらドリトルが口を開く。

『本来、あれだけの攻撃を与えられて尚、再生できるというのはおかしいんです。だからこそ、核はあのモンスターの体外にあると考えるのが普通。けれど……』

ドリトルは砂地に目を向け、再びその眼を上空に向ける。

『その核が移動して、尚且つ複数あったらどうでしょうか？あのモンスターの細胞一つあれば再生できますし、保険として細胞一つを核が持っておけばいざという時に再生できますし』

『それじゃ、これも無駄になるんじゃ……』

少し疑問を持ったテテの声にドリトルは首を振る。

『いえ、その再生にはどうやら距離があるらしく、一定の距離がないと再生できないようなのです。先ほどのデータからその距離の逆算もできましたし』

『それじゃ、その核から潰せば良かったんじゃないの？』

『いえ、その核こそがあのモンスターが吐き出していた砂に潜んでいたとすれば？』

その光景を想像し、結論を出す。

『……恐らく処理が間に合わない』

『そうですね。レーダーに確認しているだけでその数は6桁にも及びます。だから、これを排除しきるのは不可能とも言えるでしょう。地上では』

最後にそう言うドリトル。確かに砂漠に散った数多くの核を潰す暇は無いし、そんな事をしている間にまたサンドワームに砂を吐かれて終わる。だが、サンドワームは調べた所、一体しか作れないらしく、完全に倒せば核が再生させに来て、完全に消してしまえば核が本体の代わりに本体として機能するらしい。だから、それを逆手

に取る。

『どうやら核が反応して本体の再生をおこなえる距離と言うのが存在するようなのです。ですから、その距離よりも遠くに持っていくと、一体どうなるでしょうか？』

ドリトルの声に応えるように砂漠の至る個所が盛り上がり、沈んでいく。

『あれが、核ってわけだね』

テテの眼には極小の砂粒程度の大きさの黒い粒が見える。それが大量に砂漠から上空に向かって飛んでいく。

『はい。距離外にいると核が自分から本体に接触しに行動します。本体を消し去ってしまえば、核が本体と入れ替わってしまいますので、ですから殺しても、亡骸は消してしまってはいけないんです』

その声を上空で拾ったポワソとプニムはお互いに頷くと行動に移す。ポワソは先程までサンドワームに圧力をかけていた大量の魔法陣を周囲に展開、配置、稼働させ、プニムは髪を大量の刃に変え、目を見開く。残った仕事は後片付け。

『それじゃ！ごみ掃除と行きましょうかね！』

『そうね。これ以上はやってもしょうがないし、楽にさせてあげましょうか』

上空から多数の火炎弾が、雷光が、レーザーが降り注ぐ。それは天災規模。そして、その隙間を掻い潜り、髪がまとまった刃が砂粒

を切り裂いていく。更にプニムの視界に入った核は内側から破裂して行く。だが、これだけでは終わらない。

『私達の事も』

『忘れてんじゃないよ！！』

『なの！』

『……殲滅開始』

大気が螺旋を描き、飲み込まれていく。空中に跳んでいった球形の装置は空気と一緒に核を吸い込み、砕いていく。そして、地上から氷河が生まれ、そこから無数の氷塊が空に向かって降り注ぐ。樹木が蔦を伸ばし、微細な核を潰していく。数に物を言わせた追尾ミサイルが空中に色とりどりの爆発を起こす。

『……ねぇ、オロチ』

『……なんだ？』

『もしかしなくても、アタシらが結界ずっと張ってるって事、忘れられてない？』

『……忘れているだろうな』

『……だよね』

そう言って項垂れるテテ。オロチも溜息をついているらしい。結界を気にせず派手に撃っているせいで結界が綻ぶ綻ぶ。それを直す

ためにこっちは大忙し。しかも、気遣いゼロなために壊れ方も一律では無く、大きかったり歪だったりして、とにかく気を使う。面倒なことこの上ない。

『結構大変なんだけど、な』

『……これも任務だ』

『真面目だね』

『……でなくば、貧乏くじを引いたとでも思え』

『現実的で何よりだよ』

お互い言葉を交わしながら今起こっている殲滅戦を眺めている。この分ならもう終わりそうだ。もう核は全て結界内に入り、空中で囲ったがためにもう抜けられない。しばらくすると、プニムの手を掴んだポワソが転移で地上に戻ってくるのを確認する。そして、耳にドリトルからの合図が聞こえる。

『それじゃ！これで！！』

『……任務、終了だ』

二人が一斉に結界に干渉し、結界を外から内に向けて移動させる。全方位から範囲を狭めるように。その結果、結界は縮み、中の物すべてを押し込んでいく。そして、全てを潰した後、結界は消えていく。その後には一片の核も存在してはいない。これで、この戦闘は終結した。

『ふぅ、結構時間かかったね』

『倒すだけだったら速いんだけどねぇ』

『……毎回そんな簡単な任務な訳なかろう』

『まぁまぁ、もう今回は終わったんですし、ね？』

『そうそう、いらない体力消費なんてしたって仕方ないでしょ』

『とりあえず、ご主人様の所に行くの！』

『……肯定』

『ふふふ！この結果を教えれば主様の好感度アップは間違いなし！この映像魔法を見せれば主様の私を見る目もきっと……』

『ってポワソ！いつのまにそんなの撮ってたの！？』

『世の中、事前準備をきちんとしたものが勝つんですよ！』

『あらあら、楽しそうですね』

『とりあえず、私達もご主人を追うとしましょうか』

召喚獣達はユーリの後を追う事にし、ポワソの転移で一気に飛んでいく。本人は映像魔法の編集のための魔力を削られると嘆いていたが。

召喚獣がサンドワームと戦っている頃、ユーリは雑魚との戦闘を極力抑え、体力を温存したまま、岩山に到着する。既に周りには黒騎士の魔力と圧力で染まっている。そして、ユーリが岩山に入ってからは岩山全体が黒い茨に包まれ始めた。

「……どうやら、向こうも決着をつけるつもりだな」

ユーリはそう推測する。この茨は自分の道を妨害すると言うより、帰り道を潰して言っている。つまり、この先での戦いから帰らせるつもりも無く、恐らく勝ったら勝ったらで其処を狙う気だろう。

「……姑息な事、だな」

そう言いながらユーリは胸に軽い痛みを感じる。それを気にしたのか。常夜の石が光を放つ。

「ああ、問題ない。心配するな。少し歩き疲れただけだ」

安心させるように、優しく言う。内心は真逆の意見を発している。この場にいるだけで浸食が強まっている。この場で戦うのは不利。如何にかして岩山の外で戦うのを推奨する。

「……さて、行くか」

その意見を聞き流し、足を進めていく。もうすぐ頂上につく。既に覚悟は決めた。生き残るために、命を懸けて。死なないために全力を尽くす事。

「……どうやら、そっちは準備万端って所か」

岩山から下を眺めている黒一色の鎧を付けた存在は、ゆっくりと大剣を引きぬき、こちらを振り向く。その姿は以前見た時よりも禍々しく、歪になっていた。

『……』

「こっちも譲れないんでな。悪いが倒させてもらうぞ」

朱砂に手をかけ、魔眸を開放する。岩山の頂上にて、黒い茨の城の中で、二度目の会合を果たし、そして、二度目の死闘の幕が切って落とされようとしている。

熱砂の行軍　召喚獣の団結（後書き）

今回は黒一点でお送りしてます……いつもか。

サンドワームはどこぞのＲＰＧにいたと思う。あれを大きくした感じで。強くは無いです。倒しても倒しても再生するだけで。どちらかというと面倒な手合いです。時間がかかって仕方がないタイプ。

黒騎士はなんかごつくなってると思ってください。普通の甲冑がデビルガンダムの最終形態みたいになってると思えばいいかも？違う？

断たれた絆（前書き）

今回はいつもより僅かに短いかな？結構悩みました。今回、今まで以上にダークな表現が入ってます。これもこの作品の色みたいなものと思って頂けると嬉しいです。

こんな展開は割と最初の方から画策してました。で、今回流れ的にこんな感じになりました。

次回どうしようか。

断たれた絆

黒き茨に覆われた大地を踏み抜き、黒騎士が此方に視線を向ける。その眼にはおよそ理性と呼べるものが感じ取れない。けれど、怯む事は無い。朱砂を引き抜き、魔晄を纏わせる。灰色の閃光が辺りを照らし、死闘の合図となる。

「はぁああ！！」

『ガァアア！！』

お互いの一閃が交差する。小細工も何もない全力の斬撃。黒い波動と灰色の閃光がせめぎ合う。その結果はお互いがその反動で弾き飛ばされることになる。

「これでっ！」

即座に間合いを詰め、朱砂での連撃を行う。だが。

『ガァアアァ！！』

黒騎士もその行動に高速を持って対応する。止まらぬことなき剣戟の嵐がぶつかり合う。一秒が経つまでに、都合数百数千の斬撃を撃ちあうそれは、金属音が奏でる音楽とも言える。二人の主演が織りなす絶世の剣舞。

「飛べ！」

体勢を変え、黒騎士の腹部に蹴りを放つ。それを受け、大したダメージでは無いものの、僅かにユーリとの距離が開く。その隙間をユーリは剣を走らせる加速距離として使用。先ほどまでよりも、さらに速く強い一撃が黒騎士へと迫る。それに対し、黒騎士は、赤い光を放出することで対応する。

「遅い！」

だが、ユーリは止まらない。懐にまで駆け込んだその速度のまま、剣を振るう。その一撃は黒騎士の胸を捉え、轟音と共に圧倒的な一撃が放たれる。

『ゴァァァァ！？』

その威力は黒騎士の体が浮かび、岩山にたたきつけられ、めり込んでいくほど。それでもおさまりきらず、巨大な風穴をあけながら、さらに奥の岩壁に吹き飛ばされていく。自分が飛んできた方向を見た黒騎士に戦慄が走る。灰色の魔力光がすでに眼前に迫っている。岩山を巻き込み、それは既に自身に鎧に触れる所まで肉薄している。着弾。

溢れだした光は止まる事無くその光を放つ。そして、消える事無く、更に多くの光が撃ちこまれる。片手を黒騎士の入る方に手をかざしたユーリが魔眩を氣功弾として放っている。連続で放つその灰色の光弾は、当然の如く光速で翔けていく。一撃一撃が岩山に亀裂を生み、消し飛ばしていく。

「……」

無言で魔眩を操り、周囲に数十の魔力球を生み出す。これは一つ

一つが単体で行動し、魔力弾や魔力刃、突進などによる攻撃、魔力障壁、形状変化、性質変化による回避、防御。魔法の使用による補助といった様々な能力を持つ。無論、数をそろえれば相互作用により、さらに大きな力を生む。

「行け！」

ユーリの号令と共に魔力球が黒騎士がいる場所の周囲に跳んでいく。周囲に即座に転移し、絨毯爆撃を開始する魔力球。その威力はユーリ本人が放っていたものと比べても遜色ない。その身に宿った魔力分だけ絶えず攻撃する魔力球。それを見ながらユーリは剣を鞘に戻し、両手をまるで球を包むような形にしながら腰だめに構える。片足を前にだし、体を半身にし、後ろに手を持ってくる。

前を見据え、灰色の燐光が両手の中に灯る。僅かな点滅を繰り返し、何か音を立てる。何かがたまるような、これから何かが起こりそうな、その音源は間違いなくその両手の中。その音が大きくなり、点滅していた光はその力を強め、蛍の光程度の光はいつの間にかソフトボール位になり、両手の感覚を埋める。

「……」

だが、まだ終わらない。その光は両手の拘束を逃れるように光を強め、手の中から光が溢れる。その周囲にはその力により、小さな石が飛び、空気が渦を巻く。岩山に罅が入り、足元から地割れが周囲に広がる。

「吹き飛べ」

静かにつぶやいたその一言、次の瞬間、両手を前に突きだし、手

首を合わせた状態でその手を前面に開く。そして、押しこめられていた光が拘束を解かれ、その力を解き放つ。そして、圧倒的な光の本流と、音すら無くした空間に破壊の境界が駆け抜ける。

『……！？！？』

魔力球の攻撃を大剣と赤い光を使い、なんとか防いでいた黒騎士の眼光が凝結する。それを見た瞬間、ほんの僅か、刹那どころか、時間の揺らぎすら感じない無音の世界の中、迫りくる灰色が世界を埋めるのを知覚する。成す術は無い、気付いてももう遅い。後はこの身を貪り食われるのみ。悲鳴なき悲鳴の中、光に押し流される。

『ガァ……』

僅かに声が漏れた。内臓を圧迫され、鎧の中にある苗床が音を上げる。体をねじりあげ、把握できない動きをしながら果てしない距離を吹き飛ばされる。

その光を放ったユーリは息一つ乱さず、肩を揺らす事も無くその場に佇む。驕る事も、侮る事も無い。ただ起こりうる事態を想定し冷静に対処し、その芽を摘んでいくまで。その眼が僅かに細まる。灰色の砲撃が通った後、綺麗な三日月状に切り取られた直線の向こう。そこに赤いナニカを見た。

「……」

その視線の先にある赤いナニカは大地から何かを引きづりだし、それに絡み付く。砕け、傷ついたソレを包み、赤い光が灯る、黒い奔流と共に。ユーリが剣を引き抜き、魔力を注いだ斬撃を飛ばす。光速で迫る来るその斬撃は茨を綺麗に切り裂く。けれど、その中は

何もなく、ナニカがあったであろう空洞があるのみ。

「！っち！」

それに気付くと同時、舌打ちと共にその場から後ろに飛び退く。大地の中から大剣が生え、一閃する。ユーリは朱砂から炎を作り出し、大地へと叩きつける。轟音を上げて切り開かれた地面の中には無数の茨と傷ついた鎧が修復している最中の黒騎士がいた。

『ァァ……ァ』

だが、流石にダメージがない訳では無く、静かな呻き声と共に今までとは何かが違う声を聴く。それはこの空間ではなぜかひどく浮いているように感じた。

『ぁ……ァァ』

ほんの少し混ざったその声は、どことなく、意志ある人を感じさせる声だった。それを聞き取ったユーリは表情は全く変化させないまま、剣を握る手を僅かに強く握りこみ前へと踏み込んでいく。

揺らぎを見せながらも黒騎士は茨を周囲に放ち、ユーリの接近を阻もうとする。その茨を切り裂きながら、ユーリは後ろに距離を取ろうとする黒騎士を追おうとする。

「くっ」

だが、その動きは赤い光の爆撃により阻まれる。僅かに動きが止まり、歩みが止まった隙をついて黒騎士が一気に距離を取る。距離を取った黒騎士は赤い光を剣に圧縮し、紅い剣を横に構え突っ込ん

でくる。ユーリもそれを見て周囲の茨を吹き飛ばす。

「ふっ！」

ユーリは一手早く体勢を立て直し、朱砂の力を発動させようとする。だが……

砂鉄が、集まらねぇ！？……あの茨か！

即座に行動を変え、朱砂から炎を生み出す。だが、先程の驚愕により、微妙な天秤に乗っていた秤が傾き、先手を取り逃す。再び交差する刃。ぎりぎりと押し合いになり、火花を散らす。炎を混ぜた灰色の閃光と、紅黒く光る閃光が周囲に飛散し、岩を削っていく。

『ガァアァァ！！！』

「ちっ！調子に……」

黒騎士が力まかせに斬撃を繰り出してくる。それを見据え、ユーリは剣を引く。権を握った片手を後ろに引き、もう片方の手を前面に押し出す。体をかがめ、全ての力を前へと向ける。それはさながら矢のように。一点を狙う突きを放つ。

「乗ってんじゃねぇ！！」

その突きは大剣の刃の部分を滑るように突き進み、その結果、大剣の軌道はずれ、空を切る。そしてユーリの剣は黒騎士の肩を打ち抜く。甲高い金属音がその手ごたえを代弁する。

『ガッ！？アアアァアア！？』

痛覚は生きているのか、声を上げる黒騎士。先程とは違い、その声は最早、人の者ではない。だが、ユーリは止まらない。魔晄を収束し、剣に集中する。だが、その行動は防がれる。周囲の茨によって。

「おい、こういうのは手を出さないのがセオリーだろうが！」

悪態をつきながら後ろに下がる。だが、次々と迫りくる茨に対し、剣で切りながら応戦するものの、結果的に黒騎士からの距離を開けられてしまう。その間に黒騎士の方に茨が集まり、沈み込んでいく。それが終わった時、今までの破損を埋め、少なくとも外見上には黒騎士にダメージはないように見えた。それどころか鎧が肥大化し、角が生え、さらに禍々しく強化された姿へ変わっていく。

「……戦闘中のドーピングありってのは、いくらなんでもひどくない、か……」

若干の疲れを見せながらユーリが言う。既に手加減なしの全力を注いでいる。エンクの時の様に節約している訳では無い。それ故に先程の一撃は完全に肩を撃ちぬいたと感じたのだが、やはり、通用してはいない。その前の砲撃にしても、かなりの魔力を込めたものだ。相手に修復能力があるなら此方が不利なのは当然だ。

とはいえ、結果的に考えれば押しているのは自分だ。このままやりあえば押し切れる。回復するならそれ以上の威力で押し切る。だが……

やっぱり力押しでも時間はかかる、か。不味いな。

胸に手を当てる。鼓動は早く、静まる事は無い。ここで戦闘を行った直後、胸の痛みが一気に酷くなった。原因はこの岩山を覆う茨のせいだろう。だが、ここから黒騎士は離れないだろう。それに茨も隙あらばこちらを狙って来る。せめて、この茨だけでも消せればいいが、高望みはできない。眩暈がする。頭痛が収まらない。動悸は鳴りやまず、体は鉛の様に重い。コンディションとしては最低だろう。

「なら、手は一つって事か」

剣を大地に刺し、魔晄を大地に伝わらせ、ついでストラを送り込む。手加減抜き、全てを注ぎ込む勢いで。茨が灰色と青色の光に祓われていく。ぎしぎしと岩山が軋む。それは呪いにも似て、また悲鳴にも聞こえた。

そして黒い歪んだ岩山は、ユーリから発せられるその莫大な力により、一時的にその本来の姿を取り戻す。だが、ユーリはそれを確認する暇すら惜しいとばかりに力を込める。まずは自身にかかる負担を軽減する。だが、それを正直に待つほど目の前の敵はおろかでは無い。

『オオァァァァァ！！』

「ぐっ！こ、のっ！」

剣を引き抜く暇すら与えず、大剣で大上段から切り降ろす黒騎士。それを剣の側面に両手で白羽取りをすることによって受け止める。魔力とストラ、赤黒い光がせめぎ合い。拮抗した力が岩山をものすごい勢いで削り、その原形を失わせていく。それは岩山の倒壊を意味する。足場が崩れ、お互いの足場が不安定になる。だが、拮抗し

たその状態が終わる事は無い。

「そう、簡単に行くと思うなよ」

黒騎士が更に力を込め、押しつぶそうとすれば、ユーリがさらに力を籠め押し返す。それがしばらく繰り返され、その度溜め込まれた力が周辺を吹き飛ばす。既に二人を中心にクレーターが出来、岩山は更地になり始めている。だが、その状況が一変する。ユーリが光に包まれ、急に押し返していた力がなくなる。

『！？』

黒騎士もそれには驚愕し、体勢を崩す。そこに頭上から斬撃がくわえられ、その威力で吹き飛ばされ、岩山に撃ちこまれる。休ませる暇などないと言うかのように、雨霰と魔力弾が撃ち込まれる。まるで力付くで釘を鉄板に打ち込むかのように。釘ごと押しつぶすつもりで放たれている。

その魔力の色は桃色。それは青年ではない。華奢な手から放たれるその魔力は、今までの少女のそれと違い、その威力を大きく増していた。いっそ不自然なくらいに。

「これ以上は私が許さない！以前の借りは返させてもらうわよ！！」

エイナは桃色の魔晄で身を包み、細剣を構える。構えた剣はルナティニール。アレスパの街で購入できるモノでも最上級の物だ。月の光を浴びた鉱石を鍛え、生まれた剣は並みの剣を軽く凌駕する強度と鋭さを併せ持ち、魔力を増幅する機能がある。そして、簡易結界により、敵の攻撃から身を防ぐと言う役割も持つ。

「ユーリ、少し休んでて。私がコイツの相手をするから！」

そう言ってエイナは気迫に満ちた表情で剣を構える。中でユーリがその事に疑問を覚えるが、けれど、それが形になる事は無い。何かがある。けれど、そのナニカが判らない。何か決定的な物を見過ごしているような、そんな気がした。

「さぁて、行くわよ！」

ルナティニールの切っ先を黒騎士に向け、桃色の魔晄を開放する。ユーリのそれと比べ、明るい色のそれは勢いこそユーリには及ばないものの、力としては十分すぎるものだ。最初黒騎士にエイナが後れを取ったのは、黒騎士の赤い光に対応する力がなかったためだ。だが、魔晄を得た今なら。

「私でも、戦える！！」

地面を蹴り、一気に距離を詰める。桃色の光を纏った斬撃が大気を切り裂いていく。それは突き出された大剣と打ちあい、火花を散らす。

「あぁああ！」

裂帛の気合と共に剣に力を込める。そして、不意にその力を抜き、押し込んでいた体勢を元に戻す。あまりの速さの緩急に黒騎士はつんのめり、前のめりに体勢を崩す。その隙にエイナは体を回し、側面から遠心力を加えた横薙ぎを行う。だが、鎧に阻まれ、致命打にこそならなかったが、それでも衝撃は通る筈、何より。

通った！私でもコイツと戦える！戦い続ける！

そう、エイナでも黒騎士を相手取り立ち回れる。その現状に攻めの意欲を強くしていくエイナ。ルナティニールを魔力の増幅に使い、剣の刃からさらに光の刃を作り出す。剣を包むように光を纏ったそれは、剣を一回り大きく見せる。これならば大剣の威力にひけはとらない。おまけに此方は軽さの分で速さも兼ね備えている。

「行くわよ！」

黒騎士へと猛然と切りかかるエイナ。それを眺める黒騎士。大剣を構え、悠然と待ち構える。エイナもただ向かって切りかかるだけでは無い。その体から別の光が漏れる。それは憑依召喚の光。

憑依対象はドリトル。その効果はクリティカル率の増加。同じような斬撃が同じような所に当たっても、それが致命的な場合とそうでない場合がある。これはそう言った場合に僅かながら自分に有利な状況へ持っていくと言う物。この場合ならば普通に急所へと斬撃が向かうようになるという事。

体が必殺を求め軌道を変える。本来の軌道から一番急所に近い、もしくはダメージを期待できる部位への追尾斬撃。それがエイナのドリトルの憑依効果。ユーリの憑依効果は本来の物とは違うために考慮には値しない。それは彼の召喚獣だけの物。故にそれ以外の召喚獣の効果は大体同じである。時折違う個体もいるにはいるが。

「当たりなさい！！」

『！！』

不自然な軌道を描きながら、それでも正確に自分を狙い来る刃を

見据え、心なき黒き瞳に揺れが混じる。それに気付く暇も無く、エイナは剣を走らせる。甲高い金属音がなり、黒い鎧に僅かな裂け目を入れる。だが、その傷跡もほんの数秒でふさがり始め、１０秒もすれば元通りになる。

カウンターで振るわれる大剣を細剣でいなし、後退する。置き土産に土砂を蹴りあげ、黒騎士の視界を防ぎにかかる。目の前に腕を構えられ不発に終わったが、追撃を防ぐことはできた。着地し、再び油断なく剣を構える。

「……厄介な感じね。以前はこんなんじゃなかったと思うけど、やっぱり強くなってるって事なのかしら？」

しばらく黒騎士を見つめながら思案するエイナ。確かに以前はまるで歯が立たなかったが、それでも、あんな回復して行くような能力は無かったはず。つまり新たに手に入れたか、身につけたか、なんにせよ前ほど力押しで行けるわけでは無いらしい。とはいえ、魔眩さえ使えれば、以前とは違い拮抗できている。つまり前回の戦いでも、その差ぐらいしかなかったのではないのか、と考える。

どうであれ、あの回復を考えると長期戦は不利ね。最大火力で一気にやっつけるのが理想ね。それなら……手は一つ！！

エイナの思考が一つの結論に達したと同時に、黒騎士が大剣を構え突っ込んでくる。それを細剣を前方に切っ先を向け、体勢を低くすることでカウンター狙いの方向に待ち構える。柄を握っている方の手を弓を引くように後ろへ引き、もう片方の手を刃に添え、相手に刃先を向ける。足に力を籠め、力をためる。

『ガァアアァ！！』

黒騎士の声に呼応するかのように茨が地面を突き破り出現する。魔晄で迫りくる茨を弾きながら四肢に力を込める。大剣を振りかぶった黒騎士を視認し、溜め込んだ力を爆発させる。光が足元からフレアの様に噴出し、強力な加速を伴って疾走する。

「せやぁああ！！」

後退はしないとでも言うかのようなその勢いは真実、前へと突き進むのみであり、阻む物があれば全てを穿ち貫くとその眼が語っている。引き絞られた片手を大剣を振りかぶった黒騎士に向けて突き出す。桃色の燐光が確かな軌跡を描いて空を描く。

大剣と細剣が打ちあいその衝撃が二人を中心に吹き荒れる。風が砂塵を起こし、大地に亀裂が走る。大剣は前へ進まず、細剣も貫き切れない。均衡が生まれ、戦場が停滞する。だが、それは一時の事、次の瞬間には崩壊する嵐の前の静けさ。

「ふっ！」

『ガァッ！』

両者が同時に剣を引き、即座に次の斬撃を放つ。エイナは大きく振りかぶった、兜割りとも言える斬撃。黒騎士は大剣を横に倒した刺突。先ほどの行動を逆さまにしたような行動。だが、最短距離を貫く黒騎士の方が速い。

だが、エイナは止まらず体を螺旋を描いて全ての力を込める。この局面、エイナは本来その速度を生かして攻めるべきだった。ここでこの選択は愚策としか言いようがない。この後には無残に貫かれ

た姿をさらすことになるだろう……一人であったなら。

『！？』

黒騎士の体勢が突如揺らぐ。その動きのために剣先がブレ、エイナから外れた軌道に逸れていく。エイナは黒騎士の行動など意に介さないかのように剣を走らせる。黒騎士が自分の動きを阻害した物へと目を向ける。そう、自身の足元へと。そこには小さな獣がいた。

『キュウ！！』

『ピュイ！』

そこにはテテとプニムが黒騎士の目線の先にいた。先程は黒騎士の後ろからテテが体当たりを当て、プニムがその背を巨大な耳で殴り、その体勢を崩したのだ。そして、その効果は攻撃を逸らし、黒騎士の注意を自身に引き付ける事に成功した。その成果は次の瞬間を呼び寄せる。

「貴方にとっての不幸は」

迫りくる斬撃は大きく円を描いた斬撃であるために、鎌のように見えなくもない。まるで止めを宣告するかのように。速度を、遠心力を、重力を、魔力を、全ての力を集約した全力の一撃は無抵抗となり、ただこちらを見るだけしかできないその巨躯を凄絶に打ち据える。

『ガッ！？ゴァアアア！！』

その一撃は黒騎士の兜に直撃し、黒騎士の顔に罅を入れる。それ

でもまだ足りないとでも言うかのように衝撃波黒騎士の鎧を縦横無尽に駆け、亀裂を走らせていく。それを僅かに一瞥し、エイナは振り向く。呻き声を上げるその姿を視界に収めながら呟く。

「誰の助けも無く、ただ一人だけでいた事。私には、私達にはそれじゃ届かない」

静かに告げる。エイナは知っている。一人でも確かに強いものはいる。だが、個人の力では限界はある。けれど、その者は誰かと力を合わせ、共にいる事によって、さらにその力を未知の領域にまで高めていくことを。少女は青年を思い出す。自身の半身であり、少女にとって最強と言える人物を。苦戦しても必ず最後には必ず勝つと信じれる最愛の者を。

「私はそれを知ってる。だから、暴れまわるだけの貴方には負けない」

罅が重なり、兜が音を立てて崩れていく。あまりの威力に一部が砂の様にさらさらと風に乗って崩れる。そして、兜が割れ、破片が重力に従い地面へと落ちる。黒騎士は両手で顔を抑えている。僅かにくぐもった声が聞こえる。その間も鎧は壊れていく。隠していた何かが光を浴びる。まだ、晴れぬ闇の中にあるその鎧の力。けれど、包まれていたものが初めて外の空気に触れる。

「……え？」

疑問の声が上がる。それは困惑。それは戸惑い。エイナは目の前の光景に言葉を失う。エイナの視線の先には兜が完全に割れ、更地となった地面に落ち、黒騎士の露わになった素顔がある。両手によって隠されてはいるものの、そこから得られる情報はエイナに驚愕

を与える。

外気にさらされる橙色の髪。肩に届きそうな若干長めのその髪は長い事手入れされていなかったのか、それともあの鎧に包まれていたからか、くすんだ色となっている。痛みが抜けたのか、それとも、隠すのを止めたのか、その両手が下される。

「……あなたは」

そこには、エイナと変わらぬくらいの年であろう人物が立っていた。狂気に染まった瞳で、自我も無く、闇を走っている誰とも知らぬ人物。けれど、何か感じ入る物があった。気の所為かも知れない。けれど、違うかもしれない。判断が出せぬままエイナはその人物を見つめる。どこか悲しみを覚えながら。

『お、オオ、おオぉオおオォ！！』

不明瞭なその声は本来の声とは違うのだろう。雄たけびをあげ、咆哮する。黒騎士。落ちていた大剣を拾い、力まかせに振り切る。赤い衝撃が周囲に伝搬する。

「きゃあああぁ！！」

不意を突かれ、無抵抗で吹き飛ばされるエイナ。地面に当たる前にエイナの手がふるわれ、その姿は光に包まれる。そして、即座にその動きが止まる。

「ふぅ、有難うライザー」

『ｇａｇａｇａｇａ』

召喚したライザーに受け止めてもらい、地面との激突を防いだエイナ。目線を戻すと、赤い茨と、黒い瘴気の様なものが集まり、黒騎士を包んでいる。それは、なにか、形容しがたいナニカが群がっているようで、僅かに拒絶感が募る。

「……どうなってるの？」

エイナは依然として目の前の事態を飲み込めない。あれは誰なのか、どうして黒騎士となっていたのか、なぜ、自分はあの顔を見て悲しみを覚えたのか。答えは出ない。あれが鎧である以上、中に誰かがいるのはある意味予想してしかるべき。エイナとて、中に誰かがいても本来ならここまで驚きはしないだろう。だが、その中の人物に自分が何らかの既知間を覚えたのであるならば、それは驚愕に値する。

「……でも、話を聞けそうにはないわね、なら！」

改めてエイナの眼に意志の光が灯る。剣を強く握る。テテとプニム、ライザーを送還し、憑依しているドリトルも解除する。これからは後の事を度外視にした全てをレイズした一発勝負。茨と瘴気が過ぎ去った後にはより凶悪に、より堅牢に、より屈強に密度を上げ変異した黒き鎧。既に顔は新たな兜に覆われ、窺う事はできない。

「とりあえず叩きのめした後で確かめる！！」

行き当たりばったりだが、この場合無力化してからでないとどうしようもないだろう。よって、取る手段は自身の最強手。

――二重憑依――

異界から誓約のより繋がれた仲間を呼び寄せ、その意思を束ねる。呼び出すは氷魔コパルディアと炎忍オロチ。相反するその性質は制御こそ難だが、現状の組み合わせとしてはエイナにとって最強の組み合わせ。無論、それに伴う消費も大きい。だが、意に介さない。常夜の石もエイナを後押しするかのように光り輝く。

「うあああぁあああぁ！！」

瞬間激しく大地が鳴動する。まるで、これから起こる戦闘が、とてつもなく壮絶であると知らしめるかのように。震え、叫びに呼応する。エイナは魔力を放射しながら反発する二つの因子を飲み込んでいく。赤と青の燐光がそれを知らせる。片手は冷気を放ち、反対側の手は熱気を放つ。

「……」

上を向き咆哮していたエイナが静かに前を向く。見開いたその両目はそれぞれ翡翠と琥珀の色に染まっていた。オッドアイ、これこそが二重召喚の証と言える。

「貴方はこのままにしておけない。してちゃいけない！どうしてかそんな気がしたから……私は、私の全てを持って、貴方を止める！」

明確に告げる。今でも判らない。あれが誰なのか、どんな関わりがあるのか、もしかしたらすべて気の所為で、実際は初対面かも知れない。けれど、それでも。

「そんな悲しそうな顔はもうさせない！」

先ほど見えたその表情が泣いているようで、何かを訴えているような、そんな気がした。だから、手を差し伸べる。痛烈に、壮絶に、容赦なく、自分らしくどこまでも真っ直ぐに！

「……行くわよ！」

その一言から初動が始まる。遠慮を取っ払ったその機動は先程とは比べ物にならない。移動した後には氷のレールを残し、残像すら遥か彼方に置き去りにする超高速の疾走。身をかがめ、剣を握り、黒き鎧へと肉薄する。先ほどのままならこの一撃で討ち取れただろう。それほどの差がそこにはある。けれど……

『……』

無言で腕を上げ、迫りくる斬撃を悠々と防ぐ黒騎士。見た目の禍々しさに比例するかのように、その戦闘能力は先までのそれを軽く凌駕する。エイナはまるで止められるのを判っていたかのように流れるような体捌きで黒騎士の脇を過ぎ去り、後ろ手で火炎を生み出す。

黒騎士もそれを確かめるよりも先に茨を腕に纏う。次の瞬間には放たれた茨と炎が二人の中間点でぶつかり合い、爆発を引き起こす。だが、お互いにそれを気にも止めない。

「はぁっ！」

『ガァッ！！』

最速の連続切りと、剛力から繰り出される大斬撃。連続切りは決定打にはならず、大斬撃は空を切り、空気を伝わるのみ。けれど、効果がない訳では無い。

「くっ！」

『グゥッ！』

斬撃に込められた強烈な冷気と熱気のコンボにより、その強度を削られた鎧は悲鳴を上げる。

大斬撃は空気を寸断し、切り取られた部分に大気が押し込まれ、次の瞬間周囲へと広がる莫大な衝撃となり、少女を空高く吹き飛ばす。

「これくらい！」

『ガァアアァ！！』

お互いが同時に体勢を整え、またしても交差する。数と質の応酬、そこには、そのどちらかが劣っているわけでなく、真実、完全に拮抗した戦場があった。放たれる熱気と冷気が周囲へと広がり、黒き波動が吹き上がる。大地は崩れ、大気は歪む。何度も攻撃し、防ぎ、逸らし、返す。その応酬の果て、変化が起こる。

気が付けば、二人の周囲は、二人を包むようにエネルギーの固まりに囲まれていた。球状のそれの中で戦う二人。その球状は拮抗した二人の力が、相手に届くことなく周りの空間に堆積したモノ。あまりにも近い実力であるために、お互いの力のベクトルが前へ進まず、その場に停滞することを余儀なくされ、それが積もり積もった

結果、巨大な空間を形成するまでとなったのだ。

「あぁあああ！！」

『グォオオオ！！』

だが、二人にはそんな事すらその足を、その手を止める理由にはならない。高速で移動し、交差し合う二人。相手の死角で踵から氷柱を生み出し、踵落としを行うエイナ。不意打ち気味に鎧を隆起させ、下から角で突き上げる黒騎士。ぶつかり合ったそれは、お互いの威力で崩壊する。

エイナはその反動で回転し、遠心力を味方につける。黒騎士は砕けた部分が即座に修復を始め、茨を巻きつけた大剣で薙ぎ払いを行う。

続く次手、お互いの剣がそれぞれの軌道を持って衝突する。その結果は再びお互いが弾きあう事になる。その反動で距離が空き、二人が離れた位置に足をつく。

「はぁっ、はぁっ」

『……』

荒い息をつき、膝をつくエイナ。黒騎士も肩を揺らし、大剣を地面に突き刺す。それはまるで杖の様にも見える。

「まったく、中々しぶといじゃない」

悪態をつくエイナ。まさかここまで一進一退の展開になろうとは

思っていなかった。此方は全力、向こうは判らないが見ている限り、これ以上は無いように見える。もしあるのなら、とうに使っているだろうし、ここまで長引かせる必要はない。

とはいえ、決め手に欠けるのも事実。このままジリ貧を続けていても仕方ない。ならば、それを覆す一手を出すまで。そして、そう考えて周囲を一瞥する。そこには緩やかに、けれど、力強く流れるエネルギーの渦。

いつの間にこうなったのかは知らないが、恐らくこのエネルギーの場は、今の状態だからこうなっているのだと直感で判断する。つまり、勝敗が付けば敗者に向けて一気に流れるだろう。高い所から低い所へ滝が落ちるように、真っ逆さまに。

つまり、押し負けたら追加で周りからも攻め込まれるって訳ね。まったく、引く気は無いけど、引くに引けない状況と言うのもなんか嫌な気がするわね。

息を整えながら思考する。既にこの空間では動くだけ、呼吸の一つ一つ、挙句の果てにはこの中にいるだけで負荷がかかるのだ。正直な所、息を整えている今の状況が辛い。腰を下ろせばもう立てなくなりそうなほど、それは既に勝敗を分かつ要因になっており、敗者に与えられる容赦なき世界からの拒絶。

「それでも、押し勝てばいいだけか」

口の中で静かに呟くエイナ。それと同時に場の空気が熱を帯び、冷たく凝固する。その変化を感じた黒騎士からも淀んだ歪曲場が広がる。お互いの力が衝突し、その中心点ではその衝撃で不可視の力場が生まれる。押されず引かない。停滞し続ける力場は周囲へと散

らされ、二人を覆うフィールドに取り込まれ、場は更に重い圧力にさらされる。

だが、それも二人は意に介さない。静かに立ち上がり、剣を構える。お互いに無言。熱気と冷気が収束し、白き燐光を生み出す。それは触れたモノを消し飛ばす禁断の白光。莫大な力の密度を持つエイナの現在の最大出力。黒騎士も剣を起点に歪んだ場を収束する。大気が呑み込まれ、軋みをあがる。この打ちあいこそが終点。押し負ければ場に喰われる一回限りのデスファイト。

「……」

『……』

場の時が凍りつく。それは永劫に時を止めたかに見え、はたまた刹那の一瞬でもあった。二人の眼が見開かれる。踏み込んだ足は大地を踏み砕き、盛大に破片を撒き散らす。けれど、その舞い散る破片よりも早くその剣閃は空間を両断する。観測すら許さず、全てを置き去りにする終末の剣閃。

「はぁあああぁあああ！！」

『オオォオオオオォオオ！！』

お互い全てを振り縛り剣を振りかぶり、又は剣を突きぬく。阻むものは何もなく、それすらも両断し己が一撃を先に叩き込む。そこに雑念は無く、只々前へと進むのみ。速度で勝るエイナの突きは黒騎士よりも速い。このままならば先に当たるのはエイナの剣だろう。体が動くまま、振りぬけば決着が訪れる。無心のままで。

「あぁあああぁああ！！」

けれど……

「あああぁあああ！！」

けれど。ひた走るその一撃は、誰を傷つけようとしているのか。傷つけても構わないのか。そんな言葉が何故か頭を過ぎ去った。体の中で赤い茨が胎動する。生かすために、殺すために。

「あああぁああ！」

自覚すらなく、剣閃が僅かに上を向く。最短距離を外れ、速度で勝るエイナの突きは、そのアドバンテージを失い、速度に差は無くなる。黒き妄念が脈動し、真っ白な意識を染める。腕が鈍り、体が重く感じる。理由すら知らず、膝が折れそうになる。

「あぁぁあ……」

叫びは力なく掠れ、その方向性を失くす。目の前には歪んだ大剣。もう迎撃は不可能。それでも目をつむる事すら忘れ、目の前を見据える。意味などない。けれど、恐怖は感じなかった。

『ガァアァァ！！』

結局、少女は剣を振り切れず、黒き騎士がその刃を叩きいれた。これはそれだけの事。そして、世界がたわみ、収縮する。敗者へと、全てを押し流す膨大な力場を無理矢理に押し付ける。抵抗すらさせず、唯、木の葉を散らすようにたやすく踏みにじる。全てが光の中に呑まれ、形を失う。

「ああ……」

僅かに漏れた吐息は果たして何を言いたかったのか、答えは見つからないまま鈍痛の元、意識が遠ざかる。代わりに浮上する何かを感じながら。僅かに覚醒した意識を外へと向けながら。

「……」

その光が過ぎ去った後には、無言で黒騎士を見つめるユーリの姿があった。その顔に感情は無く、ただ、あるがままを見つめているように見える。けれど、その手だけはぎりっという音を上げるほどにきつく握りしめられていた。

「頑張ったな、エイナ。今度はお前が休んでてくれ」

語りかけるように言う。目線はあくまで黒騎士から離さず、此処から逃がさないとでも言うかのように、その眼には覇気に満ちている。この眼光の前に背を向ければ即座に切り捨てる。無言の視線はそう語っていた。

『グゥルァアアア！！』

獰猛な声を上げ、大剣を振りかぶる。ユーリはそれを気にも止めず、自身と少女に害なす存在を大地ごと吹き飛ばす。文字通り、塵芥として。

「……来い」

まだ離れた位置にいるであろう仲間を呼び出す。その声に応え、

現れる者が。

『そのお言葉のままに！』

忠実に従う炎忍がその姿をユーリに重ねる。

――融合召喚――灼熱炎天――

前置きも無く、己が感情を爆発させる勢いで変化を行う。烈火のごとく燃え盛る炎は、ユーリの髪であり、紅く赤く朱く染めあがる。その姿は忍び装束に変わり、口元を布で覆い隠し、その眼光はどこまでも敵を射抜く。周囲に溢れた炎が空間を歪め、蜃気楼を作る。

黒騎士にはその光景はどう映っているのか。だが、たとえどう映ったとしても、既にその存在にそれを認識する意識は無い。感想を考える思考も無い。心は既に消えかかっている。

『……もういいだろう……ここで終われ』

口数少なくそう言うと、黒騎士の体が宙へと吹き飛んでいく。地面を突き破って放たれた鎖分銅が、黒騎士の胴を打ち上げる。見上げた先には苦無の雨が待ち構え、四肢は鎖に繋がれている。それに対して何か対応を起こす前に鎧に手が置かれる。

『吹っ飛べ』

ゼロ距離からのプラズマ砲、ついで四肢の鎖が爆発を起こす。宙に揺らぐその体に回し蹴りが叩き込まれる。止まる暇も無く、灼熱を冠すその炎が、無防備な黒い鎧へと迫る。表面が即座に融解し、その形を失っていく。だが、その状態も即座に修復され始めていく。

『……』

手から生まれた炎が拳へと収束して行く。小型太陽とでも言えるその見た目のそれは。敵を滅ぼす一筋の閃光となるだろう。放たれたそれは、修復速度を優に超え、原初の炎を彷彿とさせる。すなわち、全てを無に帰す神代の炎。

『ガァ、ァ』

漏れた声はひどく小さかった。あまりの衝撃と激痛に、久しく忘れていた痛覚が役目を思い出し、鼓動を始める。傍から見れば気付かないであろうそれを見て、僅かに眉を動かすユーリ。炎が渦を巻き、黒騎士を飲み込む。渦は黒騎士を束縛するかのように動きだす。

『そうだな。ソレは貰っていく。お前と一緒に消すには惜しいんでな』

今度は若干優しく、手を鎧へと触れる。青い燐光が手から放たれる。茨を退け、中へと染み渡っていく。淀んだ泉に湧き出す真水の様に。黒き思念を弾きだしていく、求めている者はこの先にある。

『ふっ！』

手が鎧へと入っていく。沈み込んでいくかのように。やがて、ナニカに触れたのか、その手の動きが止まる。肘まで沈み込んだその腕にストラを集中する。既に残量に余裕はない。けれど、戸惑わない。このまま放置しておいた方がよほど悔いが残る。ならば精々足掻くまで。

抵抗するかのように茨がユーリへと巻きつこうとする。けれど、それは周囲を取り巻く炎によって灰へとなり、大気へと散っていく。ゆっくりと動いた黒騎士の腕が、ユーリの腕をつかむ。だが、触れた先からストラに浄化され、黒い蒸気のようなものと共に消えていく。ユーリはこれが最後とばかりにストラを強める。

『だから、お前だけ消え失せろ！』

その言葉と共に腕を引き抜く。その手には黒く濁った橙色をした球体、恐らく言葉とするのなら魂と呼ばれるのだろうソレを、壊さないように力加減をしながらそっと握る。やがて、青い光がその光を包み、淀んだ部分を洗い出していく。そして、光を放ち、周囲を照らして行く。やがて、その光球が動き始める。意志を持つかのように。

『……』

その行き先はユーリ。吸い込まれるようにその胸へと近づき、光の粒となって染み込んでいく。波紋の様に、溶け込みその形を混ぜていく。それを見つめるユーリ。やがて完全に光がユーリへと入った後、茨や鎧の残骸は物言わぬ躯の様にぐったりとしている。核を失くしたためか、既に死に体とも言える。

「……」

融合を解き、息をつく。既にストラは切れかかっている。魔力はまだあるとはいえ、無理をする気は無い。保険を掛けてあるとはいえ、無駄に使う気は無い。

アア、憎ラシイ。マタ、モドルノカ。イヤダ……イヤダ、イヤダ

！許スマジ、ワガ血肉トナレ。カヨワキ命ヨ！

だが、その気のゆるみともいえる思考が不味かったのか。それとも、他に何かがあったのか。崩れかかった妄執が動き出す。

「なに！？」

気付いたときには僅かな遅れ。それは明らかにユーリを狙ったもの。何とか躱したものの、その眼光には僅かに驚きが見て取れる。

どういう事だ？さっきは確かに動く気配はなかったのに。それとも、何か動く理由、動ける要因が出来たのか？外部から何かの力が働いているとか、そういったものか。

静かに思考する。だが、茨は確実に動き、こちらへ向かって来る。そして、その時、どういうわけか、体の動きが鈍くなり、自由を失う。

「な、ん、だと！？」

驚愕は一瞬、体に力を籠め、強引に動かそうとする。だが、それでも致命的に遅い。茨はユーリの顔に向けてその一撃を見舞う。

「ちっ！？」

何とか体を逸らし、直撃は避ける。だが、完全に避ける事はできず、肩に深く刺さる。

「ぐっ！痛っ……」

呻き声を上げながら肩に刺さった茨に手を掛ける。茨は細かな振動を繰り返し、傷口をより深く、より広く抉ろうとする。

「がっ！くそ……」

何とか魔晄を使い、茨を吹き飛ばす。傷口を抑えた手の隙間からは、黒い液体が流れる。本来、人の血は赤い。確かに時間を置けば血は黒く変色する。けれど、これは違う。流れるそれは墨のように、焦げ跡のように黒。元からそう言った色であるかのように。苦しそうなユーリの顔が何かをこらえるように歪む。頬に汗が伝う。

我が目を疑った。あれはどういう事だろう。

「ユーリ！？」

なんとか目を開けてみていた外界で、信じられない事が起きた。どうして、なぜ、疑問は尽きない。思考は鈍り、眠りに落ちかけている今、答えなど出ようはずもない。

「どうなってるの……あの黒い血は、何？」

手が震える。と同時に思い出す。夢の鮮烈な映像を。忘れていた。忘れていたかった、その、あまりにも色濃いその内容を。

「夢じゃ、なかったの？もしかして、本当に？……」

答える者は誰もいない。けれど、世界は回る。そして、世界は優しくは無い。誰かを笑顔で居続けさせることなど、ありはしない。

「なに！？」

気が付けば周囲からは黒い煙が噴き出ている。気になってみてみると、その出所は……エイナ自身だった。

「え？……ドウイウ、コト？」

遠ざかる意識、最後に見た景色は黒く染まった大地。そのエイナの姿は、体中から茨を生やした何者か。既にそれは異形の姿となっていた。黒い肌、刻まれた紋様。それは妄執に捕まり、染まった者の証。

喰ラッタ！コレデ、マダ動ケル。マダ、イキテイラレル。死ニタクナイ、死ヌノハ、モウ嫌ダ！！

これは溜めに溜め込んだものが遂に決壊したと言うだけの話。ユーリでは耐えれたモノがエイナへと流れだし、その果てに堪えきれなくなった、その結果。運が悪かったのは、それの眷属である黒き鎧が傍にあった事と、それを止めれるストラをユーリがほぼ使い切っていたことである。

そのためにシナリオは狂う。誰も望まぬ最悪の方向へと。

顔を顰め傷口を見る。黒く濁ったその色は、この先の未来すら暗示しているようで気分が悪い。

「……く、そっ」

流れ出す血は大地に吸われ、その光景はなぜか貪り食われているようで、気分が悪い。

「はぁっ、はぁっ、っづ！」

呼吸は乱れに乱れ、体は望まぬ不調に震えを呼ぶ。体温は下がり、頭の中は高熱で思考すら霞む。汗は止まらず、倦怠感が駆け抜ける。割れそうな頭痛に顔を顰め、それでも目を閉じる事は無い。

「さぁて、どう、したもんか、な」

切れ切れになった言葉をつぶやきながら、目の前を見つめる。黒い鎧の残骸が宙に浮かび、茨が押し寄せる。この岩山を覆っていた茨が今、自分を中心に集まってきているのだろう。なんとなくぼんやりとした思考でそう思った。

そして茨のうちの一本が鋭い一撃でユーリを襲う。一直線に背後から、貫くように。

「舐めてんじゃ、ねぇって……」

それを紙一重で避けるユーリ。けれど、その動きに精彩は無く、本当に何とか避けたといったものだった。

苦しみに顔を歪め、それでも現状を打破しようと歯を食いしばる。

だが、次の瞬間、完全に体の動きが止まる。自分の意志とは関係なく。

「くっ！がっ！！」

その隙に右足に茨が速度を上げ突き刺さる。それは止まる事無く突き進み、足を貫通する。勢いよく黒い血潮がふく。

「こ、のっ！」

茨を引き抜こうと手を延ばす前に、体が他の茨に突き刺される。その横腹をごっそり抉られる。そのまま空中に放りあげられ、大地にたたきつけられる。

朦朧とする意識の中、自分の体から、黒い茨が根を張るのを視認する。それは周りの茨と繋がり、巨大な植物のように蠢いていく。そのまま体が引きずりあげられる。その姿は十字架にはりつけにされたようにも見える。

「……」

既にか細い呼吸を繰り返しているユーリ。滴る血は茨の養分になっているかのように吸われていく。血の気が引いた肌は白く、片目をつぶり、若干肩が上下していることを除けば、既に生きているとは言えない状況。そしてその状況は悪化の一途をたどる。

「！？……こ、れは」

何とか目を開き、起こった変化を確認する。常夜の石から黒い靄が吹き上がり、体から流れる黒い血がその霧に飲み込まれていく。

まるで。ユーリを贄としてこの世に生を受けているようで、その光景はどこか浮世離れしていた。そして、その霧は茨と繋がり、鎧の破片を飲み込む。

「……」

それを見つめ続けるユーリに一つの喪失感が湧き上がった。即座に気付いた。在るべき存在が消えた。そして消えた繋がりは、目の前の光景の中心からその気配を見せていた。

唖然として見ていたユーリだが、一度目を深く閉じ、大きく見開く。覚悟を決めるかのように。そして、その眼にまだ絶望はうかんでいない。

「……がっ！あぁぁぁぁ！！」

残った魔力を総動員し、周囲に放つ。制御も何もないその力は、その体に刺さった茨を根こそぎ吹き飛ばす。けれど、その反動で更に血を吹きだすユーリ。

……もう、どれくらい出血した？このままだと意識が先に落ちる。死ぬにしろなんにせよ、どっちになったとしても、そうなったら終わる。なら、できる事は知れている、か。それに、まだ寝るわけにはいかない。そう、まだ！

魔力はまだある。蛍の光よりもか細いその光で体を包む。ほんの微かながら傷口が癒されていく。戸惑うことなく術を行使する。

――融合召喚――独鈷練角――

光と共にユーリの姿が変わる。その姿は今までで一番多く使った姿。融合を行えば、それ以前に受けたダメージは棚上げされ、万全の状態での姿になる。無論、融合を解けば先程の死に体に逆戻りだが。

『……まさかこんなことになるなんてな。さすがに……辛いな』

変化し終えたユーリの眼前で、黒い霧は、瘴気となり、やがて形を為す。今までと違い、動きやすさを重視した軽装の鎧。黒いそれには色濃い邪念が付きまとう。そしてその顔は、兜をかぶっておらず、隠す気も無いかのように空気に触れている。

『……外での顔合わせがまさか、こんな形になるなんてな。やりきれないと思わないか？』

気軽に話しかける。けれど、その拳は黒い血が流れるほどに握りしめられている。

『なぁ、エイナ』

ユーリの視線の先、そこには瞳から光を一切なくし、物言わぬまま、黒き鎧を身に纏う少女の姿があった。見慣れたその顔は、けれどもただの一度も見た事がない表情で此方を見つめていた。

『……』

無言のまま、細剣を握りしめるエイナ。漆黒に染まったルナティニールを突きつけ、戦闘態勢を取る。それを見てもユーリは無反応。

俺は

静かに思いを重ねる。

俺は……

それは、漆黒の具現、見ただけで心が折れそうになる、けれど。

俺は、守れなかった、約束を……

明るく笑っていた少女を、あえて取りこぼす可能性を作ってまでやる必要はあったのか？今までやってきたことは余分だったのか？俺は、一番身近な者こそを守れないのか……

その時、少女の瞳から僅かにこぼれたモノを見た。それを見た瞬間、全てが白熱する。

だが、それでも……

困った時はちゃんと頼るから、きちんと応えてね。約束だよ！

『……まだだっ！まだ間に合う！まだ約束は、無くなってない！なら……』

抗う。自身の行動の結果、招いたこの事態。なら、決着をつけるのは自分以外の誰でもない。例え誰から否定されても、自分自身でも無理だと悟っても、このまま終わらせてたまるものか！

『絶対に連れ戻す！』

拳を握り魔力を開放する。その眼の先には自身の半身だった女性。

苦楽を共にし、確かな絆を持った相手。なんだかんだ言いながら、それでも笑い合っていられた。なら、取り戻す。このままになんてさせはしない。

荒野の中、誰もが予想だにしないその死闘が、静かに幕を開ける。想いを込め、守るために、傷つける。そんな死闘が。

断たれた絆（後書き）

さぁ、エイナ、ボス化しました。後、地味ですが、あるキャラを回収しました。

ちなみに主人公の約束はエイナを守るのではなく、エイナが困ってたら助けると言う物です。ですので厳密には約束は破ってません。この段階では、ですが。

さて、本当は黒騎士の中の人を助けて終わりだったのに、なんでこんなことしたんだか……

主人公は既に中身が色々やばいです。内臓とかボロボロと思っていただければ。見た目無事に見えますが、いたるところに茨の痕とかが浮かんでます。と言うか脈打ってます。服の下はもう茨まみれです。

約束の果て（前書き）

今回は前回よりは明るいです。この次から色々明るくしていこうかなと思います。

エイナとの戦闘はもっと後にしようと考えていたのですが、なぜかここに入れていました。消すのもどうかと思い、そのまま進んでます。その結果が今です。

約束の果て

無言の中、今までと一線を画した戦闘が始まる。これを逃せば恐らく次は無い。あったとしても無事に済むかどうか、これは、負けられない戦い。決して逃れられぬ一戦。

テテと融合召喚を行っているユーリ。けれども、融合召喚を解いてしまえば、瀕死の重症に戻ってしまう。しかも融合召喚は長時間使えない。故に、出来るだけ時間を掛けずに終わらせる必要がある。

『……行くぞ』

静かに告げる。口に出す言葉に意味は無い。ただ、それを合図に二人の姿がその場がから掻き消える。

『ふっ！』

『……！』

空中に跳躍したユーリと、大地と平行に飛翔するエイナ。あの鎧の力か、空を自在に移動する力も得ているらしい。エイナが手をかざす。大地を割って茨が溢れだす。それは銃の掃射のように一斉に撃ち放たれ、空中のユーリへと向かっていく。

『ちっ！』

金剛角を拳からだし、向かって来る茨を叩き落とす。角が光り、無数の落雷が発生する。その力で茨が焼き焦げ、大地へと落ちてい

く。エイナへの反撃は……ない。

『……』

ルナティニールをかざし、地脈から魔力を吸い上げる。水分を木が吸い上げるかのように、光が剣の先端へと集約し、それは漆黒の砲撃となって放たれる。遮蔽物のない空中でそれは止まる事のないまま、ユーリへと向かっていく。

『はぁあああ！！』

金剛角を刃に変え、下から上へと逆風に切り上げる。その刃は淀みなく真っ直ぐに進み、振り切った後には両断された砲撃が、数秒経って、思い出したかのように後方で盛大に爆発し、その閃光が二人を眩しく照らし上げる。

空中に静止し、変わってしまったエイナを見下ろすユーリ。無言のまま、倒すべき敵を見上げるエイナ。それが今の二人の位置関係。目の前にいるのにどうしようもない程に遠ざかってしまった今の現状をわずらわしく思う。

『……っ！』

何かを振り切るように、突っ込むユーリ。それを視認し、剣を構え、迎撃に移るエイナ。ユーリは向かった先で金剛角を躊躇いなく突き刺す……大地へと。エイナを無視するかのような動き。

『くっ！』

何の対処もせずにいたエイナの斬撃が、すぐそこにまで迫る。そ

れをギリギリの所で躱す。今までのエイナの斬撃とは、速度や力そのものが別次元となっている。だが、次の行動に移られる前に、大地へと突き刺し、そこに残しておいたままの金剛角が反応する。

『！？』

無表情なままその光を見つめるエイナ。金剛角は光の膜となってエイナを覆い、その動きを制限する。その隙にユーリは、周囲に金剛角で傷をつけていく。それは何らかの刻印にも見える。

〈親分！これからどうすんのさ！このままじゃジリ貧だよ！せめて攻撃しないと！〉

頭の中にテテからの言葉が聞こえる。そんな事は百も承知だ。今やっているのもその場しのぎでしかない。だが、このまま戦う事はできない。

――悪いけど、唯倒すって訳にはいかないんだ。下手にエイナにダメージを与えて弱らせるのは、なんか不味い気がする。

それに対し、ユーリは私見を述べる。よくある相手を弱らせてから捕獲するというのは、その後に何も起こらないから、弱らせれば洗脳や呪縛みたいなものが解けるから、といった理由があるから有効なのだ。

だが、これはそれとは違う。何か別に意識が介在している。根拠も何もないが、自分の深い所がそう言っている。エイナを痛めつけるのは浸食を進ませるだけであり、エイナを弱らせたいのは向こうも同じなのだと。

〈だけど！それだと何もできないじゃないか！このままだと融合が解除されて親分が！！〉

テテの悲痛な声が聞こえる。エイナも心配だが、テテはユーリの召喚獣であり、本人もそれを嬉しく思っている。誰がそんな相手が苦しむ姿を見たいと思うのか、僅かにそれを気付きながらも無視をする。

――俺の事よりもエイナだ！俺は別になんとでもなる。だから今は力を貸してくれ、テテ！

〈……親分は馬鹿だよ……〉

その言葉を最後にテテからの声は消える。とりあえずはユーリの頼みを聞いてはくれるらしい。先程よりも体が軽い。意識もテテの部分が同調してきているらしく、更に頭が澄み渡る。

『……よし』

自分の無茶につき合わしているテテに、若干の感謝を抱きながら全力で疾駆する。速度を一切下げず……もとよりそんな余裕はない。融合が解ければ重症の状態に加え、再び茨の浸食が始まる。そうなれば今の状況すら保てない。

『ウァアアア！！』

大気を振るわせる声と共に、力付くで光の膜を破壊する。膜は数秒ほど壁の役割をした後、散り散りになって消えていく。その間に周囲の岩や地面に金剛角で傷をつける。そのユーリの姿を捉えたエイナが剣を掴み、無感情の瞳を向けたまま、突貫してくる。

『ちっ！少しは躊躇ってくれると嬉しいんだがな』

さすがに全ての攻撃を避ける事は無理と判断し、剣を構える。傷つけるためにでは無く、助けるために。

……本当は、どうなろうと知った事じゃなかったんだけどな。いつの間にか、愛着でも湧いたのか、この状態に慣れただけなのか。どちらにせよ、あいつがいなくなったら俺は……寂しいんだろうな。

わずかな間に思考する。弱音を叩き落とし、現実に向き合う。今のエイナは味方では無い。敵と言い切る気も無いが、それでも害なす存在であることは変わらない。だからこそ止めて見せる。あのいつも必要以上に明るく馬鹿みたいに笑っていた笑顔をまた見るために。溜息をつきながら、呆れながら、それでも悪くないと思ったのはいつだったか。この旅を楽しく感じたのはいつからだったか。きっとどちらの瞬間も彼女は笑っていたと思う。あの屈託のない笑顔で此方を見ながら……

『アァアァァァ！！』

茨を纏った剣がユーリの体を掠めていく。それだけで浸食は進む。今は融合状態であるために問題は無いが、もし、これが元の状態であるなら一撃で終わる。それほどの濃度だ。けれど、それでも恐れるわけにはいかない。取り戻したいものが、見続けたいものがある。黒い砲撃がこの身を飲み込み、岩盤へ吹き飛ばす。血を吐き、岩が黒い絵の具をぶちまけたみたいに勢いよく染まる。それでも、この体が停止する事は無い。

『ああ、本当に』

本当に面倒ばかりかけてくれる。

思い出すと、笑みがこぼれる。そんな日常が、失いそうになって初めて気づかされた。考えないようにしていたのかも知れない。いつか終わるのを考えないように。だけど、だけど……こんな終わり方など認めはしない。不条理も、理不尽も認めるし、判ってる。そこまで世間知らずじゃない。だからこそ、ここで屈する気は毛頭ない。

『……退屈しないな』

眼光に光が灯る。エイナの眼を見つめる。その眼にやはり感情の灯は無い。先ほどの涙の痕がうっすらと見えるだけ。それでも、涙一筋分くらいは、今までの日常を大切に感じてくれてはいたのだろう。それなら、迷う事は無い。約束を交わしたのだ、ならば守り抜こう。

『……行くぞ』

エイナの剣を捌き、続く連撃を遅れる事無く防いでいく。もう既に、折れかけた心は不屈の意思で叩き上げられている。今度は止まらぬように、足を止めないように。最速で連れ戻す。勝手に出ていったじゃじゃ馬をもう一度自分の側へと引き止める。

『オオオォォオォオオ！！』

青と赤の光が空中で衝突し、光の軌跡を描きながら、空中を疾走する。空へ描かれるアート。幾何学模様のようであり、どこかで見たような絵にも見える。それを綺麗な空模様とみるか、幻想的な光

景と取るかは人によるだろう。それほどに広大で、止まらぬ閃光。視認できるは過ぎ去った軌跡のみ。衝突音が遅れて響き、断続的にさまざまな場所で破壊が起こる。岩が抉れ、大地が削れ、雲が吹き飛ぶ。

『はぁあああ！！』

止まる事は無い、ここにもしも見る人がいれば、飽きる暇などなく、様々に展開される、空と言う名のキャンバスに描かれた絵に心奪われたことだろう。破壊音や衝突音すらその光景をさらなる高みに昇華するスパイスになるだろう。

『オォオオオオ！！』

幾度となく剣閃がユーリの体を切り刻む。その度、傷つき、鈍っていく体。けれど、エイナへと切りかかる事は無い。ユーリが振う斬撃は、全てエイナの剣を逸らし、防ぐために振るわれる。ユーリの瞳にはまだ光が灯っている。

さすがに、約束した相手を傷つけるわけには、いかんよなぁ！

内心、強く思う。どうあってもこれ以上。エイナを傷つけさせる気は無い。だから、彼女に一撃もいれない。そう決めたのなら、無傷で取り戻す。代償は、自分。彼女を取り戻すための痛みを全て持ち去ろう。

『まったく、自分の馬鹿さ加減にうんざりするな』

そう言いつつ、動いている体は全力で生にしがみ付こうとする。心臓を狙い突き出された剣を魔眩で僅かに逸らし、体をずらし回避

する。続く次弾、背中から大量の茨がわき出る。その全てが、此方を串刺しにしようと迫る。金剛角で結界を生み出し、茨の侵入を防ぐ。繰り返し薙ぎ払らわれる斬撃。その狙いはユーリの首。

『このっ！』

状態を逸らす事でその斬撃をやり過ごす。ついで横合いからの回し蹴り。それを腕を上げて防ぐ。その隙に結界を逆の手で破壊される。

『しまった！』

即座に足に茨が刺さり、浸食すると同時に、ハンマー投げのようにユーリを投げ飛ばす。

『がっ！ぐあああっ！』

その勢いは大地を穿ち、大穴をあける。まるでミサイルを炸裂させたかのような、そのクレーターの中で、影が蠢く。

『ちっ、少し油断したか』

言うが速いか、すかさずエイナに突撃する。時間をやれば逃げるかもしれない。それが一番まずい。少々のダメージは覚悟しながら突っ込む。そして、再び光を生み出しながら空を駆け巡る。轟音を生み出し、光の波動が空を彩る。

その戦闘は、ユーリとテテの融合が解ける時間までの間、ほんの少しも衰えを知らないまま終わりを告げる。

『そろそろか……』

〈親分！もう時間がないよ！このままだと……〉

――判ってる。だから心配するな。きっと、きっとまた皆で笑いあえるようにするから、安心してろ。

〈でも！そのために親分が傷つくことは無いじゃないか！〉

――勘違いするな。傷つく気は無い。俺だって不必要に怪我なんてしたくないし、そんなのないのが一番だ。

〈なら！〉

――けどさ。今やらないと、どうにもならないんだ。だから、今少しだけ走ったら後が楽になるんだ。なら、誰だって走るだろう？誰だって、楽になると判ってるのなら、多少は頑張るもんさ。

〈……〉

――……はぁ、その気持ちはその気持ちは素直に嬉しい。だから、礼は言っとく。有難うな、テテ。

〈……言葉じゃなくて、後で態度で返して。そうじゃないと信用できない。安心して還れない〉

――……どうしろと。

〈……デート一回。それで納得しとく〉

――……

〈ど、どうなの？やっぱりアタシなんかじゃ嫌、かな？〉

――別にそうは言わないが……随分唐突だな。

〈そ、それより！どうなの！いいの？それとも……〉

――はぁ、了解だ。とは言っても、時間が取れたらの話だからな。

〈ぁ……うん！それじゃ、気を付けてね、親分！〉

テテの声が止む。さっきの会話を聞いて僅かに苦笑いする。この状況で、冗談のないこの最悪な環境で、まさか笑っていられるとは。

ああ、頼もしいことこの上ない。

『失敗する気も失せたよ！』

そう言ってユーリはテテとの融合を解除する。正確には制限時間を越え、強制的に解除されるところを自分で解除しただけだが。けれど、この選択にはまだ先がある。

――融合召喚――魔道心霊――

ポワソを呼び出し、コンマゼロ秒、解除をすると同時に、再融合を行う。これならば傷だらけの姿に戻る事も無く、融合状態を続ける。融合は短時間しか使えないのに加え、一度解除すると召喚獣を否応なく送還してしまう欠点がある。この場では再召喚する魔力も惜しい。故に一度使った融合は行えない。全ての召喚獣との融合

を果たすまでがリミット。必ず成功させる。

動きやすいラフな格好から、魔法使いにも見える黒いローブ姿になり、金色の髪がかぶっているフードから溢れている。その手には長大な杖を持ち、周囲には噴出した魔力が光を放つ。その眼はエイナの事を逸らさず見続けている。

『……さぁて！行くぞ！』

〈最近、お呼びが多くて嬉しいです！ああ、主様！〉

――……お前な。

先ほどと比べて活力にみちた言葉が響く。ユーリが主体なのは事実だが、融合した召喚獣の性格なんかもある程度反映されるらしい。さっきテテと融合していた時も、普段よりもやる気と言うか気力が張っていた。今、目の前で行われている状況を嘆く事も無く、前へ進む。諦める事無く。

――さっきの傷跡に込めた魔力を、繋げて解放。後付けの魔方陣として起動！

〈任せてくださいな！〉

ユーリの思考に対応するかのように、ポワソの声が聞こえる。さっきテテとの融合時に金剛角でつけた傷痕が、うっすらと輝きだす。それはある法則の元に描かれ、周囲の物体、石や岩、山など、風の流れすらも要素として組み込み、より高度な、より複雑な陣を組み上げ、肥大化して行く。

『まだまだぁ！愉快なサプライズは終わらねぇぞ！』

〈どんどん行きましょう、主様！どこまででもついて行っちゃいますよ！〉

融合により、いつものユーリと比べ、幾分明るい、悪く言えばはっちゃけたような状態で言葉を紡ぐ。魔方陣はそこからさらに、いつもポワソが使っている魔方陣を組み込み、尽きる事無くそれを新たに縦横無尽に配置し、それすら繋げ、更に巨大な一つに円陣とかす。

大規模積層型立体魔方陣。魔方陣は一般のよくあるイメージでは、平面上で描かれるものだが、これは三次元を駆使し、円では無く、球を持って作られている。そしてその中に通常の平面魔方陣や、幾分小さな球形魔方陣を敷いてある。何層にもわたり、魔方陣の中に魔方陣。その中に魔方陣。

例えを上げれば、近いモノにマトリョーシカがある。あれは民芸品的なお土産としては、割と一般的だが、その構成は人形の中にそれより小さな人形、そしてその中にさらに小さな人形、と、どんどんサイズが小さな人形が入っている物だ。この人形を魔方陣に置き換えれば判りやすいかも知れない。こういったものを入れ子構造という。

無論、そのままと言うわけでないが、今回作り上げた魔方陣も魔方陣を複数重ね、巨大なドーム状になっている。その中にエイナを包み込み、逃げられないように、そして、これ以上浸食させずに引きはがすために発動させる。

『ガ！アァァァァァァ！！』

呻き声を上げ、動きを止めるエイナ。苦悶に顔を歪め、腰を折る。それを見据え、ユーリは魔方陣に力を込める。相手の脅威がどれくらいか、浸食の度合いがどれくらいか、おぼろげにしか判断がつかなかったために、必要以上に強力な魔方陣を組み上げた。やり過ぎた感がするが、これもアクシデントを防ぐためだと割り切る。

『さて、どう動く？……このまま出てきてくれることを願ってるんだが、な』

まぁ、もう一波乱あるだろうな、と内心判断する。いくら魔方陣で束縛し、浸食を防いでも、あの茨と瘴気を外へ追い出さない限りは、安心できない。

眠気が襲う。体が、ふわふわ浮かんでいるような、そんな奇妙な感触。なんだか全てがどうでも良くなっていくような倦怠感。それはこのまま身を任せ、この世界から消えてしまってもいいかのような、錯覚を引き起こす。

――私、どうしたんだっけ？なんか、思い出せない。

おぼろげな思考で、そんな事を考える。纏まらず、次の事柄にまで考えが続かない。

――ここ、どこだろう？私、なんでこんな所にいるんだろう？

答えが導き出せない。現状把握すら満足にできない。迷い子のように思考が右往左往する。そして、思考は一巡し、同じ考えに舞い戻る。

――私、なんでここに居たんだっけ？

堂々巡りを繰り返す、考えを断ち切る誰かはいない。ふと、自分の事に考えがシフトする。自分の情報を頭から引き出そうとして、何も引っかからない事に気付く。

――？私の名前は、そういえば……何て名前だったっけ？思い出せないな。

失くして行く。己が名前さえも、今までの旅路も、そんな状態にあっても、全く危機感を覚えれない。それこそが異常であると言うのに気付けない。

――名前……名前って何だっけ？どんな意味だっけ？……ワタシ、ナンダッケ？

言葉すら忘れ、人であるという事実すら思い出せない。体が薄れていく。苦痛は無く、何か大きなものに身を任せているような、疲れてベッドに倒れ込み、全て忘れてただ深く、どこまでも深く眠るような、そんな心地よい眠気が体を覆っていく。既に体は動かず、心は霧がかかったようになっている。もう間もなくこの身は心ごと無くなってしまうだろう。その時こそ、黒騎士として生まれ変わり、エイナは消え失せるだろう。そんな時、何か聞こえた。

記憶を失った時、最後まで覚えていた名前すら忘却し、本当に真実全てが消えうせた、この体に何が残ったのか。ほんの少し生まれ

た興味と、背中を押されるような温かさを感じながら、少し目を開く。直ぐに眠るのだからと、最後の景色として、微かにでもその正体を見る。

「後少しだから、静かにしてろっての！このじゃじゃ馬！」

――エ？

驚いた。何に、と言う訳では無い。何に驚いたとかでは無く、何故こんなものが見えたのかが分からない。それこそが疑問。目に映っている青年は誰なのか。そこに僅かな何かを感じ、眠りに落ちかけた意識を引きづり上げる。倦怠感に襲われ、すごく体に重みを感じても、それが気になった。理解する力も、考える思考を失っても尚、それに、その姿に惹かれた。それが奇跡なのか、今も力を尽くす青年が干渉した、その結果なのかはわからない。

「泣くのも、弱音を吐くのも別に構わないけど、溜め込むのはやめた方がいいぞ。疲れるだけだから。どうせなら楽しいことでも考えることだな。そっちの方がいいだろ」

――コレハ。

聞いていると、心に何かが湧き上がる。嫌なものでない。むしろ心地よく感じる。今の、この直ぐにも訪れそうな眠りよりも。それは、掛け替えのないナニカ。目をそむけず、先程ののんびりした動きではなく、確固とした意志の元で目を見開く。

「別に今決めろなんて言わんさ、じっくり考えろ、自分がどうしたいか、何を望んでいるのか。決まってから言ってくれればいいさ」

――コンナコト、アッタッケ？……あッタよウナ、ナかッタヨうナ……

思考が、ほんの少し、ほんの少しだけ色を帯びる。色黒の世界の中、そこだけが色を持つ。見える光景が変わっていく。そして、それを見るたび僅かに世界に色が戻る。食い入るように見続ける。それが必要な事だと無意識的に察知しているかのように。

魔方陣を保ったまま、その中へと身を転移させる。エイナを連れ戻すために逃げを封じる。まずはそれを行った。この魔法陣は逃亡防止のためのもの。転移やそんな物もできなくする。例外はこれを作った自分のみ。そして、この魔法陣のもう二つ目の役目は、暗示、それも度を越えて強力な。

その内容は、自身であるエイナと言う存在への認識を強める事。上手くいけば自我を取り戻させることもできる筈。尚、付加効果として対象であるエイナへ重圧をかけている。これは自身が近づきやすくするためと、不意を突かれるのを僅かでもなくすためと言う理由がある。

そして三つ目。これは言わずもがな、エイナから茨を引きはがすためのもの。これで、なんとかエイナが自己を取り戻せばそれで付け入る事が出来る。後はこちらから揺さぶりを掛けて行くだけ。

『これなら、少しは付き合ってもらえるか？特別製なんだがな』

そんな事を言いながら、エイナへと高速で近づくユーリ。それを察知したエイナが、苦しみながらも、ルナティニールを構え、ユーリを見据える。

『ガァアァァ！！』

『……そんなキャラじゃねぇだろ。お前はさ……お前は！』

迫る斬撃を杖で受け止め、鍔迫り合いになる。お互いに押し合い、戦場がほんの少しの時間だけ静止する。

『お前は！いつも馬鹿みたいに明るくて』

ユーリが知っているエイナは笑顔が多かった。話しているときは他の顔も多かったがその笑顔につられ、気持ちが和らいだ。

『そそっかしくて』

思い出すは、常夜の石の中での探索の時、エイナが門をくぐるとき、なぜか全力疾走で突っ込んできて、勢いのまま激突してきた時の事。今も度々、見当違いの発言をしていたりする。

『不器用で』

常夜の石の中、建物の裏の倉庫には、いくつかありえない造形の、変なオーラを放つ謎物体が陳列している。それはエイナ作の工作品。それはユーリが知らない間にエイナがせっせと作った一品たち。ユーリを見返そうと躍起になって作ったはいいが、やはりどこかおかしく、壊されないように倉庫裏に貯蔵している物。

本来エイナは運動能力は決して悪くは無い。というより格別にいい類だろう。剣も細かな技術を重ね、器用に立ち回る。髪の手入れや、自分の部屋の簡単な掃除に限っては問題ない。

だが、どういうわけか、掃除も簡単な物ばかりで、本格的にやりだすと何かが無くなっていたり、もっとひどくなったりという事もあったりする。ただ、手先自体は悪くない。包丁や針なんかを使っても怪我をする事は無い。けれど、結果として失敗する。修復は全部ユーリがやってたりする。この所為で家庭的スキルが身近に感じるものとなった。

『けど』

不安を押しこめ、それでも前を向いて歩く。記憶が無いのに、それを苦痛だと言わず、心に押しこめ、自分よりもこちらの心配をして、怖くても、俯いてしまいそうになっても、最後には立ち上がれる強い心の持ち主。知識としてだけでなく、実体験で確信したこと。だから、こちらも精一杯頑張る事にした。いつか、その小さな体に込めた思いに潰されそうになったら、自分がどうにかしようと思って。

『お前は、思いやりがあって、誰にも親しく接して、持ち前の前向きさでみんなを引っ張って』

どんなに些細な事でも、きちんと受け止めて自分から進んでいく。それが全ていい方向に向かう訳では無い。けれど、そんな行動力に驚かされた時も多々あった。村人たちとも持ち前の性格であっという間に仲良くなった。今では冗談を気軽に言い合える村人もたくさんできた。

『皆、そんなお前が好きなんだよ！だから、そんな、似合わない顔してないで』

心からの咆哮。同時に鍔迫り合いに動きがみられる。杖の軸をずらし、剣を逸らす。そのまま懐に入る。手のひらに、ストラを集め、足りない分は自分の魂を削り取るようにして補填する。

『俺達の所に戻ってこい！』

拳をエイナの腹部に打ち込み、ストラを開放する。青色の輝きが魔方陣内を満たす。それは今までにないくらいに輝き、二人を埋め尽くし、青い光源となる。

色々な言葉と景色が混じり合う。そんな中、少しずつ、色を取り戻していく。もう白黒の世界の世界は消えかかっている。

「その……あなたの事教えてくれないかな？」

「は？」

「だって、私は君の名前も知らないんだよ。少しくらい教えてくれたっていいじゃない。それにこれから一緒に頑張るのにそれは変でしょ」

「まあそうだな、俺はユーリ、これからよろしくな、エイナ」

――わタしはエイナ。ソレであレが……ユーリ。

忘れていた何かが噴き出す。大切にしまっていた記憶の宝箱。記憶を失う以前の事は浮かばないけれど、それでも……それでも、今までの自分は取り戻せた。

「好きなように行動してみろ、なんかあったら、俺を頼れ、大丈夫、俺がお前を守るから」

――そウだ、ワたしはうれしかったんだ。あのときはほんとうに。

思い出す。

「リコが心配なのと、この村の外に興味があってな。駄目か？」

――このあと、リコちゃんといっしょにむらからでたんだよね。

その後、リコに戦闘技術を学ばせたり、ストラの呼吸を教えたりしたのだ。そして、それを若干羨ましく思った自分。

「・・・黒い騎士か、何者だ？」

――この時が初めて黒騎士とあった時なんだよね。考えたらこの時から結構時間立ってるんだ。

思えば、ここから奇妙な悪寒は生まれていたのかもしれない。この時は気づかなかったが、今となって考えてみれば何か引っかかる物があったように思う。

「好きだよ、ユーリ。」

――ああ、そうだ。うん、そうだよね。

自分の気持ち、願った未来、自分を形作る気持ち。その全てに大きく関わる存在を、その存在に対する想いを改めて自覚する。様々な光景が流れては消える。それを見るたび振り返り想いを繋げる。そして、世界は完全に色を取り戻す。自身の現状、置かれている状態を正確につかむ。もう眠気は無い。倦怠感も、自身を蝕んでいた全てが解かれる。

――こんな所でなんか、止まってなんかいられないよね、ユーリ！

明確な意志の元、体を動かし、外へ意識を向ける。目覚めた意志は魔力を放ち、桃色の光が溢れる。

青色の光が全てを覆う中、その中から桃色の光が湧き上がってくる。それを見た瞬間、ユーリの顔に笑みがうかぶ。

『……まったく、眠り過ぎだぞ。遅れた分はきっちり後で取り戻してもらうぞ』

軽い文句と共に、一層光を強める。桃色の光はユーリの周囲に漂うように放出される。黒い鎧から、エイナと言う核が、次第に薄れていく。それは、開放を意味する。一息の間を置き、完全に鎧からエイナの姿が掻き消える。それに合わせて、ユーリが融合召喚を解く。

「結構疲れてるんだ。さっさと戻れ」

黒い血を覗かせながら、ぼろぼろの体でユーリは言う。融合状態でエイナを受け入れるのは難しい。もし、戻る過程で何かがあっては今の自分では対応しづらい。それゆえに、少々の激痛と苦痛には目をつむり、術式を解いた。そんなユーリの元に桃色の光が集まり、ユーリの目の前で人型と成す。

「ユーリ！！」

何も身につけていない、生まれたままの姿のエイナが両手を広げ、ユーリを抱きしめる。

「……ごめんね。傷つけて、心配させてごめん」

ユーリを包み込むように、桃色の光が集まりその体に入っていく。

「もうこんな事、起こさないから、強くなるから！」

完全に光を飲み込んだ後、ユーリの体に再び変化が起こる。

――融合召喚――形成変異――

間を置かず、ゼロ秒で行われる再融合。今度の融合相手はプニム。プニムと同じように若干のびたダボダボのシャツとジーパンを着た姿になる。藍色の髪と目を黒い鎧に向け、溢れるほどに伸びた長髪を靡かせる。その髪の長さはユーリの身長よりも長く、地面について尚、余りある。平均以上の身長を誇るユーリの身長のゆうに三倍を越えるほどの長さの髪。長さにして６メートルにもなる。その髪

はゆったりと風の流れに身を任せ、重みをまるで感じさせないような動きで宙にうかぶ。

『……さて、と、もう遠慮する必要はねぇな。今までの分、全額叩き返してやるから、覚悟しろ』

〈面白いわね。私も付き合ったげるわ！〉

既に広域を包み込んでいた魔方陣は、ポワソの融合解除に伴い、消滅している。そして、ユーリが視認すると共に、黒い鎧の片手が捻じれきれる。そして、ついで爆発を起こす。

『へぇ、これがプニムの魔眼か。効果が変わるっていうのは面白いな。リコにもつけてみるかな？』

〈なんでよ……〉

変化の魔眼。ユーリと誓約したプニムのみが持ちうる異端。その効果は多岐にわたる。視認した全てに効果がある、広域に効き目を持つ魔眼や、視認した中で対象を決め、発動する魔眼、その用途、用法は様々だ。そして、ある程度未知の効果を持つものもある。

『行くぜ……どれだけ持つか、せいぜい耐えてみやがれ！』

髪が集まり、螺旋を描いて編み込まれる。そして、三つ編みの様に編み込まれた髪はそのまま黒い鎧を貫かんと突貫する。鎧の表面に当たり、大きな火花を散らす。そして、鎧の曲線にそって髪が逸れていく。そして、正面には既に間合いを詰めたユーリの姿がある。

『おらぁ！』

髪を瞬時に解き、髪が拳の形に変わる。そして、鎧に向かって振り下ろす。巨大な槌の様な拳が鎧を叩き落とす。

『まだまだぁ！』

髪が拳を複数形作り、そのまま鎧に向けて幾つもの拳を振りかざす。比喩では無く、真実、百の拳打が降り注ぐ。

『おらおらおぉおおぉおおおらおらおらぁ！』

自身の拳も合わせこんだ拳のラッシュ。黒の鎧が金の髪に埋め尽くされ、見えなくなる。絶え間なく聞こえる。打撃音がその凄まじさを雄弁に物語っている。

『これでぇ！』

空中に打ち上げられた鎧が……へこみ、傷だらけになり、ひび割れ歪んだ鎧はそれでも、中から茨をのぞかせまだ活動が停止していない事をうかがわせた。

イヤダ！コノママデハマタトマッテシマウ！ソンナノハイヤダ！

ナニカが聞こえ、次の瞬間、鎧がたわみ、黒い空間が広がる。茨が黒く、どす黒く染まり、世界が黒く染まっていく。

『……手は抜かねぇ。お前はここで朽ちていけ！』

〈すべてを、見通せ！我が魔眼！〉

ユーリの眼が黒い空間を視認する。そして視界に縦横無尽に走る、黒い空間で尚黒く見える線を凝視する。そして、線と線が重なった部分や、特定の部分に黒い点が見える。直感的にその効果を見極め、髪を数百の刃としてナイフのような形状に変化させる。

『ふっ！』

その線をなぞるように髪を走らせる。抵抗なく刃は進み、空間を切り裂いていく。そして点をつけば、空間そのものが崩壊した。既に判っていた効果に足を止める事も無く、空中へと躍り出る。

〈このまま……〉

『崩れてろ！』

最後の一刺しを鎧へと突き刺し、なんの苦も無く、あっさりと突きぬいたその一撃で、鎧の動きは完全に停止し、ぼろぼろと崩れ去る。ユーリは融合を解き、その光景に背を向ける。

イヤ、ダ。マダ、オワリタクナイ。コンナトコロデ……コンドコソ、セイコウサセルンダ……

「……なぁ」

意味がないと知りつつも、なんとなく声が出た。ただ、聞こえた声がなぜかひどく懐かしく思ったから、自分の知り合いとかではなく、この体に刻まれた茨の痕がそう感じている。だからこそだろう。先ほどの言葉が耳に届いたのは。

「何を成功させたいのか、それは俺には判らない。けど、ここで諦

めずにまだ頑張りたいって言うなら、俺が手を貸してやる。無論、誰かを蹴落とすのを前提の考えなら論外だけどな」

本当に意味のない言葉。けれど、意味はあったらしく、その風化した筈の黒い粉が、風に逆らい、ユーリの周囲へと集まってくる。その光景は何かに群がる蟻にも見えた。けれど、ユーリはそれを意に介さないかのように言葉を繋ぐ。

「お前らが何を思ってやってるのかは知らんし、興味もない。けど、そんな声で終わらされてもこっちの気分が悪い。だから、誰も傷つけずに続ける覚悟があるんなら、手伝ってやるって言ったんだ」

ユーリ自身、この言葉に驚愕している。こんな事言う気は無かった。だが、体の中に染みついた茨がなぜか打ち震えた。そして、その茨の目的、そしてその動機に気付き、なんとなく居心地の悪さを覚えたと思ったら、自覚するより早く言葉を発していた。

……ホン、キカ？

どうやら、まだ話せるくらいの力はあったらしい。けれど、それも後少しで消えるだろう。声は力なく、既に消えかかっている。意識すら先程の一撃に殺され始めているのだろう。

「なにがだ？」

ホンキデ、ワレラノテツダイヲスルト？

「まぁな。けど、さっきに言った通り、誰かを蹴落とすとかそう言うのは無しだ。そういうことなら、少しはどうにかしないでもない」

……

無言のまま時間が過ぎる。消えたかとも思ったが、どうやら、考えているだけだったらしい。しばらくした後、相変わらず消えかけた声が響く。

ドノミチ、コノママイケバ、マタ、オナジコトノクリカエシダ。ナラバゼヒモナイ。

「そうかい」

ワレラハ、オマエノナカデ、モクテキヲハタスノヲ、マチツヅケヨウ、ズット……オマエガスベテヲアキラメルマデ。

「諦めねぇよ。どうせならみんなで屈託なく笑っていたいんでな」

その言葉の後、風に流されて消えていく筈だった黒い粒子がユーリの中に集っていく。既にストラは枯れている。だから抵抗する力は無い。精々魔晄を常夜の石に集め、エイナやもう一人に流れるのを防ぐ程度だ。

「成程な」

そして、その結果分かった事は、エイナの暴走は元々、自分の体の茨が、エイナに感染したことで起こった、二次的な物だと気付いた。今回はそれに加え、黒騎士が近くに居た事で過剰反応したという事か。

「それに……」

どうやら、誰かを蹴落とす気は本当にないらしい。それどころか様々な知識や経験が流れ込んできている。そしてそれにより、推測していたことの一つが証明される。

そうか、やっぱりこの異常な知識や、練習度外視の様々な能力はこの茨から流れてきたものだったか。

つまり、この茨はある事情により、様々な存在の集合体と言えるモノだ。だからこそ、その一部をこの身に受けた時から浸食が始まり、何の偶然か、それとも理由があるのか、この体に馴染み、逆に此方に力を貸すように作用していたという事だ。鍛冶師としての業や、戦闘者としての技。そのほかの召喚士の知識も、機械を改造する経験も、全てどこかの誰かがかつて行っていたものにすぎない。

そこにユーリ自身の能力は関係ない。これは、内包する存在が多ければ多い程強く、巧く賢くなると言う事であり、本人の元々の能力はあまり関係ない。ただ必要だとすれば、適合する因子を持っているとか、自我を保つ精神力とかだろう。だが、そんなものに心当たりは無い。という事は運も必要なのだろうか？何事にも例外はあると言うし。

「判ってみたら、あんまり驚かないもんだな。それこそ、使い古されてる事だしな」

納得するかのように一つ頷く。

「それにしても、戦っている相手の一部に今まで助けられてたと考えると、何とも複雑な気分だな」

若干苦笑いが浮かぶ。それもそうだろう。結局自分で何かを成す

と言うより、他のナニカに助けられて、何とかここまで来た様なものなのだから。しかも、それは戦っている相手の力だと言う。皮肉にもほどがある。

「それでも、今は俺の一部なんだしな……」

確かめるように言葉にする。握った拳には、強く力が込められていた。

暗い部屋の中、無音の闇の中で膝を抱え、思いに浸る。他には誰もおらず、ベッドの上で思考に浸る。

「……なんでおばあちゃんがいなかったんだろう？あそこに住んでたのは間違いなかったのに……」

リコは思う。自分の思い違いなのか。もしかすると、本当はそんな人はいなくて、他の誰かと間違えているのかもしれない。一度思い始めると、それは止まることはなく、思考を覆い尽くす。

「やっぱり、私がかってにおもってただけで、最初からそんな人いなかったのかな？」

そんな事を考えていると、不意にドアがノックされる。この部屋は白夜に案内された一室であり、自由に使っていいと言われた部屋の一つ。リコの部屋だ。そんな所に来るとなると……

「リコ！私だけど、入るわよ」

ドアを開けて入ってきたのは、予想に違わずエンクだった。その手にはトレイを持って、その上にはカップが二つ、他にもおやつの様な物が乗っていた。

「エンクお姉ちゃん……」

「ずっとそんなに膝抱えて考え込んでると、体壊すわよ。ほら、少し息抜きしましょ」

「うん……」

エンクに促され、ベッドを離れ、テーブルに近づいて来る。それを見ながら、僅かに微笑むエンク。

「ほら！ケーキとか用意してくれてたみたいだから貰ってきたの。早速食べましょ！」

どうやらおやつと思っていた皿はケーキだったらしい。

「……エンクお姉ちゃんって料理できなかったっけ？」

「へ？一応できるわよ。ん？ああ！これはもうできてたからね。作る手間が省けたから貰ってきただけよ」

「そ、そうなんだ……」

思わず苦笑いが漏れる。どこに作る手間が省けると言った理由だけであらかじめ作った物を持ってくる者がいると言うのか。その視

線に気づいたのか、エンクが大声で否定してくる。

「ち、ちょっと違うわよ！元々私たちの食事に出るものなのよ！それの余りをもらったって言うだけで別に無理言った訳じゃないのよ！」

「う、うん……」

その勢いに押されるリコ。思わず頷く。それを見てうんうんと首を縦に振るエンク。

「そうなの。だからリコが考えるような事は無いの！わかった？」

「う、ん、え、えっと！じゃあせっかくだから食べよっか！」

さすがにこれ以上引っ張るのはよくないと判断したのか、直に食事に入ろうと促すリコ。それを聞いてエンクも勢いを落とし、視線を落とし食事に目をやる。

「そうね、それじゃいただきましょうか！」

「うん！」

手を合わせ、恒例の頂きますをした後、フォークを使いケーキを食べる。

「あ、美味しい」

「そうね。思ってたより美味しいわ」

二人ともケーキを口に運び、感想を述べる。

「でも、ユーリお兄ちゃんが作った物を食べた後だったら、少し、ね」

「アイツは多芸すぎんのよ！可笑しいでしょ！？なんであんなに色々できんのよ！上達していく過程とかすっ飛ばしてるし！」

「でも、ユーリお兄ちゃんって初めてあった時からそんな感じだったよ」

「そうなの？」

「うん、初めて見た時、ユーリお兄ちゃんは、屋根の上走ってたんだよ！」

「……なんでよ」

「えっとね、確か女の子のペンダントを猫から取り返す為だったって聞いたけど……」

「なんでそんな理由で屋根の上走ってんのよ……変な所で全力投入してるのね、アイツ」

「でも、すごく綺麗だったよ！ストラを使ってこう、ガーって走ってくの！」

「へえ」

「それでその後、ユーリお兄ちゃんとお話して、おばあちゃんの所

に行くって言ったら、ついてきてくれて……」

そのまま語尾が弱くなり、最後には言葉が途切れてしまう。

「リコ……」

エンクも何の話題になったかに気付いたために、かえす言葉が思いつかない。それは単なる慰めであり、リコが求めるものでは無いと思ったから。

「変なんだよ。今でもおばあちゃんはいるって思うのに、それでも、あの時の事を思い出したら違ったのかなって、そう、思っちゃうんだ……」

「……」

「もしかしたら、違う誰かと勘違いしてて、本当はあの場所は何にもなくて、あの人が言ってたことが本当なんじゃないかって……そう考えちゃうんだ」

「リコ」

「だって、本当にいたって思っても、実際あそこには誰もいなかったし、結局何もわからなかったし、どうなってるのかな？私、どこかおかしいのかな？」

「リコ！」

エンクが席を立ち、リコの傍まで歩き、その肩に手を置く。

「確かに私には本当が如何なのか判らない。けど、それなら調べればいいじゃない！これまでだってそうした来たんでしょ？だったら探せばいいじゃない！直ぐに答えなんて出ない、アイツだって答えを出す必要はないって言ってたじゃない！だから、結論を急ぐんじゃないの」

「エンクお姉ちゃん……けど」

「けどは禁止！あのねリコ、助けになるかは判んないけど、リコがおばあちゃんに会いに行くっていうのは私も聞いたし、それに出かけるのも見た事が有る。だから、アンタのおばあちゃんがいないなんてことはあり得ないの！」

「でも、この街の人は知らないって……」

「そ、れ、で、も！私はリコの言葉を信じてる！それに、アイツも、なんだかんだ言ったって、リコの言葉を嘘だなんて思ってないって言ってたんだし！大丈夫よ、きっと！」

「……」

「それに、もしかしたらこの街の人自体が、洗脳とかされてるかもしれないし、以前から居た人を忘れる力とか使われてるかもしれないし、まだ判んないわよ！」

「それはちょっと、ないんじゃないかな？」

「あるかもって話よ！だから、まだ諦める事なんてないんだから！」

エンクの言葉を聞きながら、リコは少しだけ、心が軽くなるのを

感じた。まだ、自分を信じてくれる人がいる。まだ、自分の記憶が嘘となったわけじゃない。

「……そっか」

「そうよ！だから、塞ぎ込むことなんてないんだから！リコには私と、ちょっと納得いかないけどアイツだってついてるんだから！何も心配することなんてないんだから！」

「うん、そうだよね」

「まあ、ちょっと騒いじゃったけど、私が言いたいことはそれだけだから、それじゃ私は食器を片づけてくるわね」

勢いよく言った事が恥ずかしかったのか、そそくさと食器を盆にのせ、あたふたと出ていくエンク。それを見ながら笑みを零す。

「ふふっエンクお姉ちゃん、顔真っ赤になってたなぁ。そんなに恥ずかしがることないのに……本当に嬉しかったんだし、ね」

扉に目をやり、そんな事を言うリコ。その顔は安らいだものとなっている。

「そうだよね。今まで頑張って来たんだ。こんな結果で終わらせたくなんてない。けど、どうしたらいいんだろう？」

リコは考える。このまま終わらせたくは無い。けれど、具体的にどうすればいいのかが浮かばない。

「諦めたくない。でも、何も浮かばない」

リコは考えながら今までの事を振り返る。砂漠ではあまりの暑さで意識がもうろうとした。ピアと一緒に頑張って歩いた。迷いの森はドライアードによって少し恥ずかしい思い出が出来た。二度目に迷いの森を越えるときに、全員で力を合わせた時の事、あの時は何度かもう無理かもと考えた、流石にもう一度は勘弁願いたい。

「思えば結構長い事旅してきたんだなぁ」

エンクとの出会い、まさか一緒に旅をすることになるとは思いもよりはしなかった。鬼岩洞では、初めて召喚獣であるライザーとドリトルと一体となり、融機人となったのだ。あの時は戦える力を得て、嬉しかったのを覚えている。

「そういえば……」

リコは初めてあった時ユーリと約束したことを思い出す。

ああ、約束だ俺はリコを助ける。ああそうだ、約束ついでにそのうちすごく綺麗な風景を見せてやる。

思い返した言葉は今でもこの心の中に刻まれている。

「……うん、約束きちんと守ってくれてるよ。助けてくれてるし、知らない風景が一杯見えた。全部大切な思い出だよ」

改めて諦めたくないと思った。ここまで色々頑張ってきたのだ。こんな終わり方なんて認めたくない。それなら前へと進んでいくだけだ。判らないなら、探せばいい。思えば簡単な事だったのだ。今までだって自分たちの手で全て成し遂げてきたのだ。今回だって進

み続ければどうにかなる筈だ。大切なのは気持ちだ。

「よぉし！頑張ろう！」

一回深呼吸をし、力いっぱい手を握る。小さな手に力がこもると同時に、手から緑色の光が溢れる。

「え？……」

普通に驚いた。これはなんだろう？急に出てきたが、今までこんなものが出てきたことは無かった。けれど、しばらくすると、一つの答えに辿り着く。

「もしかして、ストラ？」

それはユーリが放っている強大な力の源の一つともえる物。色こそ違えど、同じような暖かさを感じる。けれど、ユーリ程の力強さは感じない。精々その何十分の一かくらいだろう……元々ストラとはそのくらいの物なのだが。

「でも、どうして、今になって、確かに練習は欠かしてなかったけど……」

その光は新たに進む道を見つけたリコを祝福するかのように、成長したリコに応えるかのように。

「よくわかんないけど、とりあえずやる事はなんとなく判ったし、まだ、終わらせない！」

「リコ、とりあえず、これからだけど……って、なに、それ？」

「エ、エンクお姉ちゃん！？えっと、特に問題ないから！だからそんな角生やさないで！大丈夫だから！」

戻ってきたエンクが、リコのストラを目にして驚いたり、それをリコが宥めるのに時間を要したのは余談である。結果として、リコは自分の気持ちを確かめ、やりたいことを再認識したのだから些細な事である……咄嗟の放電で、部屋が焦げて兵士に妙な目で見られたのも余談である。

「ユーリお兄ちゃん、なんとなくだけど、私、判ったから、だから、早く帰ってきてね」

リコは窓の外を見やり、今はいない青年を想う。そこには確かな笑顔があった。

自分の体の変化に一応の区切りを付けた後、意識を常夜の石に向ける。

「一応、今度は浸食されないようにしっかりと防いだんだが、大丈夫だったかな？」

手をかざし、茨が言って無いかを確認する。きちんと認識した今なら、茨の有無程度なら確認できる。しばらくした後、心配は杞憂だと知る。

「……問題なかったか、良かった。またこんな事になったら、目も当てられないからな」

既にこの身は、茨を意識的に受け入れているため、黒い肌に変わっている。肩の下くらいまで伸びていた髪は、今では腰くらいまで伸びている。そして、所々、刻印の様な物が浮かんでいる。負の感情が度を越えると、暴走する危険性があるが、自身をしっかりと持っていれば何の問題も無い。長い事苦しんでいた苦痛や疲労も、今は無い。

「けど、流石にこれは隠せないよなぁ……どう説明したものやら……まいったな」

むしろ、中にいる人物を納得させるのが大変そうだと嘆く。これからの事を考えると面倒なこと、この上ない。言い逃れしようにも既に服の下も見えている部分も全て日焼けしたみたいに黒くなっている。どうすればいいのか、全くわからない。この再融合状態で話でも進めるか？……怪しいことこの上ない。

「やれやれ、まだ二人の意識が戻ったわけでもないのに、楽観的にすぎるな」

そう言いながら、常夜の石の中に意識を飛ばす。これだけの苦労をしたのになぜか嫌な予感がひしひしとする。このまま眠っててほしいと少し思った。

常夜の石の中では、オレンジ色の髪をした人物とエイナが野ざらしで倒れていた。エイナにいたっては服を着ていない。

「……何でだよ」

なんか前にもこんなことあったなぁと思った。よく見ると服が建物の中に落ちている。体だけ外に跳んでったらしい。溜息をついた。

「まったく少し前に命削ったとは思えないなぁ、これは」

肩をすくめながら現実逃避を終わらせる。そして向き合うは目の前の事実。

「はぁ、どうするかなぁ……」

とりあえず、服を着せるか、召喚獣を呼ぶのが一番の筈なんだが、どういうわけか地雷にしか思えない。……まぁ、変な目で見られるのは間違いないし、いや、けど戦ってたのは知ってるし、説明すれば行けるか？この体の事は……まぁどの道隠せないんだから説明しておこう。

一応全ての召喚獣は送還している。魔力も茨を受け入れた影響か、一気に量が増えた。これならストラの分も補える。とは言ってもストラ程の防御力や治癒力は無いが。そして、今回使用した魔力は戦闘終了後、ドライアードからもらった花が散ると同時にある程度回復した。ある程度と言っても消費分の内七割は回復している。これなら十分だ。どうやらあの花は魔力を蓄え、持ち主の魔力がある程度消費されると、自動で回復してくれる物らしい。

「今度は許さないとか言ってたし、さて、どうするか……」

しばらく悩んだ後、やっぱり召喚獣に頼る事にする。呼ぶのは無難な者にしときたい。コパルディア……無理、というか絶対騒ぎになる。オロチ……悪くは無いが、なんか視線が悪くなりそう。けど、

案としては有り。ポワソ……絶対に言いふらすし、後々まで言ってそう、面倒な事この上ない。プニム……なんか、変な誤解がされたままで終わりそう。テテ……気にはしないだろう、これも案としては有り、ただ、デート云々のくだりがある以上、なんとなく頼みづらい気がする。ライザー……特に何も言ってこなさそう、十分にあり。ドリトル……これも問題なさそう。ドライアード……また能力暴発させそうな気がする。

「とりあえず、ドリトルでも呼んでみるか」

考えていても仕方ないし、特にエイナは風邪とかひかれてもなんなので、早速召喚術を行使する。別にこのチョイスに意味は無い。ただ、着替えさせるのにライザーは身長が足らないので苦労するかもと思ったのと、ドリトルならあのバックパックみたいなの使えば早いんじゃないかと考えたからだ。オロチはあまり人と触れ合うのが好ましくないらしい、以前そんな事を聞いた。如何にも苦手なのだとか。その結果ドリトルになった。

『あら？もう戦闘は御済みになったのでは？何のご用でしょうか？』

「ああ、悪いんだが、ドリトル、エイナの着替えを頼んでいいか？」

『はい？』

ユーリが向けた指の先にはあられもない姿で横たわっているエイナの姿。

『あらあら、これはどういう事ですか？』

「いや、戦闘の最中にエイナを奪われてな。何とか助けだしたのは

良いんだが、どういうわけかこういった事態になってる」

隠す必要もないので、正直に言ってみる。ドリトルの眼がなぜか気持ちつりあがった様な気がした。

『マスター、今さらですが、言い訳しなくても私は分かっていますから……』

「待て。いきなり何の話だ？」

『大丈夫です。マスターが何人傍に置こうと私は構いません。ただ、ほんの少し構ってさえいただければ……』

「だから、一体何の話だ！」

思わず吠える。如何にも話がかみ合わない。まさか地雷がドリトルだったとは。迂闊にもほどがある。

『ですが、そう言う関係を持ったのならば正直に申し上げて欲しいです。それを受け入れないほど私の器は小さくなどないというのに、ああ、けれど、少しの嫉妬は問題ないですよね、せめて一言欲しいとか、相談してほしかったとかいうのは我儘かもしれませんが、きっと問題ない筈ですから……』

「落ち着け！！」

そのままドリトルと少しばかり口論になった。終いになぜかやったやってないの応酬になった。結局最後まで話の主軸が判らなかった。ドリトルはなぜあそこまで取り乱したのか、とりあえず考えないようにしておく。その先はなんとなく、まずいと思ったから。

『ところで、マスター。そのお姿は？』

「ここまで来てその質問か。中々いい根性してるんだな」

『褒め言葉として受け取っておきます』

「褒めてない……この姿は、隠してもしょうがないから言うけど、黒騎士の鎧と茨を取り込んでな。その結果こうなったというわけだ」

その言葉にドリトルの眼が見開かれる。確かに良い物とは思ってはいなかったのだろうが、その内容は看過できる内容を越えている。ドリトルは普段の優雅な佇まいがなかったのかのように焦りを出す。

『マスター！それはどういう事です！？きちんとして説明を！事と次第によっては他の召喚獣も呼んで対策を練らないと！』

「いや、それには及ばない、今の所は大丈夫だからさ」

『今は大丈夫だからと言って安心できるはずがないでしょう！仕方ありません！みなさんを呼ぶことにします！』

「は？」

『実は先程、他の召喚獣達と話した結果、私達ももう少しマスターのように何かを呼び出せるようになった方がいいのでは、と言う結論に至り、こちらからマスターに会いに行けるように色々機能を拡張していたのです』

「まぁ、そう言うのは俺も考えてたけど、それで？」

『その結果、マスターの魔力なしでも此方に来れるように、全員が召喚術を自分に使えるようになりました！このように』

ドリトルが手を掲げ、魔力を散らすと、それが合図であるかのように光が乱舞し、次の瞬間には他の召喚獣が勢ぞろいしていた。本来なら喜べるはずの現象だが、事ここにいたっては、面倒事にしかなりえない。

ああ、なるほど。召喚獣の内、どれかが面倒事になるんじゃなくて、どれを選んでも面倒事になるって事か。どんな地雷原だ。

心の中でなんとなく悟る。そして、こちらを見た他の召喚獣全員に詰問されたのは本当に予想道理で、エイナの状態を見て更にヒートアップ。場は混乱の極みにあった。

『主様！別に裸が見たかったのならいつでも見せましたのに……』

「誤解を招くからそう言う事は言うな、後、違うからな」

『へぇ、マスターもそういうの興味あるんだ？』

「威圧しながら言うな。不可抗力だ」

『ご主人様、不純なの』

「色々待て！おい、俺今不可抗力って言ったよな！？」

『ご主人……さすがに無理矢理は……』

「なんでそうなる！？勝手に捏造するな！」

『主、話は後でするとして、彼女は置いておいてもよいので？』

「……頼んでもいいか？」

『御意』

『親分……』

「なんでそんな悲しみに満ちた目でこっちを見るんだよ」

『だって、だって！』

『……落ち着く、全ては話を聞いてから』

「その流れだと、話が終わったら俺が面倒事に巻き込まれることになるんだが？」

ちなみにエイナの服は、なんだかんだ言いながら、オロチとドリトルが口論の最中にやっておいてくれた。さんざん人の事をどうとか言ってきて、何とか説得し、送還しているときも、何故か妙に感情のこもった目でこちらを見ていた。どういうわけか、こちらが悪い訳では無いのに心が締め付けられる気がした。理不尽だ。

「……なんだかんだあったけど、とりあえずこれで問題なしだな」

とりあえず突発の台風に巻き込まれた様な、そんな理不尽さを若干嘆きながら、椅子に背を預ける。そこには、二つのベッドがあり、手前にエイナが、奥の方に黒い鎧から救い出した人物が寝ている。

恐らく、もう間もなく目を覚ますだろう。

「……これで、ようやく元通りだな」

自身が知る世界と同じ人物構成。後は自分がいなければ完璧だろう。とはいえ、そうはいかない訳だが。

「さて、ともう起きるか」

なんとなく、エイナの顔から覚醒の兆しを見つける。これもどこかの誰かが身につけた特技なのだろうと当たりをつけ、二人分の水を用意しておく。そして、ちょうど水を持って来たところでエイナが目を覚ました。

「う、うぅん……」

うっすらと目を開け、周りの確認をするエイナ。あまり働いていないであろう思考を、何とかかき集めて現状を把握しているみたいだ。見ていると結構頼りなく見える。

「えっと、ここは……」

「やっと起きたか」

そう言ってユーリは椅子に座りなおす。ユーリの声を聴いて勢いよくエイナが反応する。

「ユーリ！！ってユーリ！？……ユーリ？」

「人の名前を連呼するな……見た目の事なら説明するから少し落ち

つけ」

「う、うん」

まぁ、エイナが驚くのも無理は無い。今のユーリはどちらかと言うと敵に見えるだろう。とりあえず、水を渡す。

「これでも飲んで落ち着け」

「あ、ありが、とう」

恐る恐る水を受け取り、口につける。その間もちらちらと此方の事を窺うエイナ。その行動は分からないでもないが、見られている方からすれば、いい気はしない。

「はぁ……この姿はさっき戦った黒騎士とか茨を取り込んだというか、一体化したと言うか、とにかく、それが理由で少し変わったんだ」

説明もおざなりになる。さすがにさっきの視線は嫌だったらしい。問題はそれを聞いたエイナだ。水を飲んでいる最中に、突然そんな事を言われたので、驚きの余り、水を勢いよく吐き出す。それはもう水鉄砲の如く、そしてその行く先はユーリの顔面。直撃した。ビシャアアっと、その勢いのままユーリが水でびしょびしょになる。

「……」

「……」

「……おい」

「え、えっと、ごめん……ってそうじゃなくてユーリ！！さっきの言葉はどういう事！？何で茨なんてモノを取り込んでるのよ！」

「順を追って説明するからとりあえず落ち着いてくれ。起きてすぐに暴れるな」

タオルで顔や服を拭きながら、淡々と説明する。その落ち着きようを見てエイナも少し冷静になったらしく、残った水をゆっくりと飲み干すと、ユーリに視線を向かわせる。

「……それで、今の話、本当なの？」

「ああ、流石にこんな状況で嘘は言わんよ」

「どうして！？どうしてユーリが！？……もしかして、私を助けるために、また無茶を……」

そう言ってエイナが俯く。彼の負担を少しでも軽くしたかったのに、自分の所為でまた彼に迷惑をかけてしまった。その事実にエイナは打ちひしがれる。だが、その様子を見ていたユーリの言葉で俯いた顔は再びあげられることになる。

「……勝手に思考してる所悪いが、これはお前を助けた後の話だ。別にエイナが如何こうってわけじゃ無いから、安心しとけ」

「え？」

呆けるように顔を上げたエイナに、事情を説明する。この状態になったのは、消え去る筈の茨に感じ入る物があったために接触し、

その結果、両者合意の上で同化するという事になった。そして、その話を聞いてエイナの感情が爆発する。

「なんで、なんで、そんなこと勝手に決めてるのよ！！」

「おいおい、お前は意識無かっただろう」

「そうだけど！そうだけど……それでも！どうしてユーリがそんなことしないといけないのよ！」

「どうしてと言われてもな……成り行きみたいなものだしな」

あまりのエイナの勢いに逆に冷静になるユーリ。落ち着いた視線の先では激昂するエイナが映る。

「なんでそんなに落ち着いてられるのよ！あの黒騎士と茨だよ！？何回も私達と出会うたびに苦しめて、痛めつけてきた、そんな奴らだよ！！どうしてそこまでされて救おうとするの！？」

「……共感する部分があった、きっかけはそんな所だ」

「共感って……もしかして、ここに来る前から様子が変だったのって、ずっと前から茨とかに影響受けてたからじゃないでしょうね！！」

「……」

正直、その言葉には驚いた。本人は勢いのまま言っているだけであろうが、真実、そのものずばり当たっている。そもそも発端を言えばエイナを助けようと転生の塔で茨の体液をこの身に受けたのが

始まりだったので、最初のエイナの言葉はあながち間違っていない。

なんだ、全部当たってるじゃないか。と苦笑いが浮かぶ。けれど、エイナはその沈黙を肯定と受け取ったらしく、ますますその顔を怒りに染める。

「どうして！？どうして一言相談してくれなかったの！？」

「……相談してどうにかなる訳じゃなかったし、それに、無駄に気に病むことになるだろうからな。」

「だからって！」

「それに、俺の事で変に悩んでほしくなかったからな。エイナには、自分の事を第一に考えて欲しかったし」

「けど、それでユーリが苦しむのは嫌だよ……」

弱弱しくエイナが言う。注意しなければ聞き逃してしまうほどに小さく、呟かれたその言葉を聞いて、ユーリは溜息を吐く。

「別に今苦しいってわけじゃない。それに今回エイナがおかしくなったのは主に俺が原因だ。だから結局、俺の落ち度だ……本当にすまなかった」

頭を下げる。その行動にエイナは目を見開く。ユーリからすれば今回黒騎士を倒した後の事は、完全に予測外の事だった。まさかエイナと戦う事になるとは考えてもいなかった。それもあそこまで無理をすることになるとは。もし、あの時、自分が迷いの森のような状態になっていれば、恐らく目の前の少女とこうやって笑いあう事

などなかったのだろうと思う。あの状態の自分は敵なら恐らく完膚なきまでに消し飛ばす。そう言うモノだから。

「次からこんなことは起こさない。だから安心してくれ」

「そんなの……」

「心配なのはわかるけど、そこは結果で証明する。だから、俺を信じて欲しい」

「そんなの、やだよ！」

「……エイナ」

「ユーリは今まで言った事は実行してきてる。それは分かってる。でもね、それで、ユーリにいらない労力とか、気をまわしてほしくない。その結果ユーリが傷つくっていうんなら、私はそんな結果はいらない！今回の事だって私を庇ってそんなことになったんでしょ！」

「そんな事はないが……」

「私が覚えてないとでも思ったの！？あの時のユーリ、血だらけだった！！なんでユーリがあんなに傷つくの！？私を優先したからでしょう！だったら、だったらやっぱり私がユーリを苦しめてるんじゃない！！」

「……いや、あれは」

エイナが言っているのはエイナを取り戻した時の事だろう。それ

以外思い当たる所は無い。確かにあの時は傷だらけだったが、あれは黒騎士との戦いで負ったものだ。エイナが気にするものではない。エイナとの戦いは常に融合状態だったのだ。その時のダメージは融合を解除すれば消滅する。そして再融合すれば再び全開状態に戻る。だから気に病む必要などないのだが。それにそう言う事もきちんと説明済みだ。けれど、エイナはそうは受け取らなかったらしい。

「ユーリ、私ね。一つやりたいことを、叶えたい夢を見つけたの」

「？」

「だけどね、今のままじゃそれも叶いそうもない。だから、夢をかなえるために精一杯頑張る事にしたの」

「そうか」

話の流れは分からないが、エイナが何かやりたいことを見つけれたのならば、素直に喜ぶべきだろう。

「よくわからんけど、頑張れ」

「うん、だからそのためにユーリには傷ついて欲しくない。」

「なに？」

「だから決めたの。私も強くなるって！もう誰にもユーリを傷つけさせないって！」

「……」

「私はもう、見ているだけなんて嫌！私だってここまで戦ってきた！今更引き返したりなんかしない！だから、ユーリ！……私達の間に遠慮なんてしてほしくない」

「エイナ……」

「もっと私を頼って、私を、信じて」

そう言ってエイナの眼から涙が零れ落ちる。その真剣な言葉を聞いて、ユーリは内心で思う。

……どうやら結構、気を遣わせてたらしい。やれやれ、こうまで言われたら無碍にはさせれないな。

そう思ったユーリはゆっくりと口を開き、建前を口にする。

「エイナ。そこまで言われたら俺も、これからは遠慮はしない。とは言っても、今まで染みついてきた部分もあるから、直ぐにとはいかないが、きちんと頼れるように努力はしてみるだから、泣くな……俺が泣かしたみたいだろう？」

「っ！……ユーリが泣かしたんだよ」

「そうか。そう言うならそうなんだろう。なら、一層早く泣き止んでもらわないとな」

「もう！……絶対だからね、ユーリ！」

「ああ、出来る限りエイナには遠慮しないようにするよ」

「うん！」

エイナの笑顔を見ながら、ユーリは思考する。

確かにエイナの言も一理ある。協力しなければこの先は辛いだろう。けれど、エイナにはこれから過酷な道が待っている。だからこそ、俺の事で心配なんてかけるわけにはいかない。せめて、自分の記憶を完全に取り戻すまでは、他の事は出来るだけ関わらしたくは無い。エイナ本人は、そう言う扱いをこそ嫌うだろう。なら、折衷案でそれなりのラインまでは関わらせようと思う。これが譲歩の限界。エイナには悪いが、元々俺はこうする気だった。それが少し早まっただけ。出来る限りエイナには最低限しか関わらせない。

本音をひた隠しにしながら、ユーリはエイナを見る。ユーリの言を信じているのか、エイナは笑顔で話してきている。この笑顔を陰らせないように精一杯手を打つ。それがエイナへの返答になるだろう。

「それで、漸くお目覚めって所か……」

「え？」

奥のベッドへ視線を向けると、オレンジ色の髪をした人物がうっすらと目を開けた所だった。まだ、この話は終わらない。室内の空気が変わったのを感じた。

ふと気になったので聞いてみた。

「……そういえば、エイナのしたい事ってなんだ？」

「え！？え～と、な、内緒！！」

「あそこまで堂々と言っといてか」

「いいじゃない！！」

言えないよぉ、お嫁さんだなんて。

エイナは暑くなった頬を隠すようにそっぽを向く。それを見たユーリが呆れ混じりに笑う。それを見て、いつまでもこのままだとそれはそれで恥ずかしい。誤魔化すように二、三言話し、空気を換える。それでもエイナは恥ずかしげに笑う。この夢がかなう日は来るのか。それはきっとまだ誰にもわからない。

約束の果て（後書き）

最後に書いたエイナの夢の、誰のお嫁さんかと言うのは書かなくても判るかと。まだ想いを伝えてすらないのに、勝手にステップアップしていくエイナ。

そして、次話でようやくもう一人の主人公が出ます。長かった。この作品の男主人公は、ユーリ一人ですが。

後、これ以降、ユーリのストラはしばらく出しません。もう完全にガス欠状態です。変わりは考えてますし、ストラ自体はリコが習得しかけてます。地味にパワーアップしてるリコ。

ようやく次話から本筋に戻ります、多分。

二人目の記憶喪失者　暴走した狂気（前書き）

今回はいいことと悪い事、両方起こります。新キャラの加入。後、ボスフラグが一つ。作者がワルノリした結果がこれだったり。まだ本筋に戻れてない！どうしよう……

二人目の記憶喪失者　暴走した狂気

変わらぬ夜空の元、常夜の石の中はいつもの時間を刻む。それが本当に移りゆく時間なのか、ただの止まった時間の中に起きた錯覚なのかはわからない。けれど、常夜の石の中、その一室で、部屋の空気はなぜか、ピンと張りつめた。そこに新たな存在を見出し、見つめる二人の視線の先で、この常夜の石の中に居座るであろう、新たな人物を直視する。

「あ、ここは……どこだ？」

僅かに身じろぎし、周囲を確認する視線の先の人物。本来なら名前さえ知らない、何もかもが未知なる人物。味方か敵かすら断定しかねる不確定要素。けれど、その人物を見つめる二人の内、一人はその素性を知っている。

さて、ここからどうするかな？助けれたのは素直に良かったが、この状況をどうするか。どこから話をすればいいか。とはいえ、体が無い以上、ここに居てもらうしか無いのは変わらないんだが……

助け出した時、もし目の前の人物が体を持っていたのならユーリに宿らず、体ごと引きづりだしていた。それは迷いの森で彼女を助け出そうとしたときに予測できていた。つまりこの常夜の石の中でいる以上、リコなどの外部からの特別入場者以外でここに居るという事は体のない、魂だけの状態という事だ。エイナと同じだと思えば判りやすいだろう。

出ていくのが無理なら、後はこっちを受け入れやすいように話を

持っていくか。どのみち一緒にいてもらうしか道は無いし、どうしても出ていきたいと言うなら、選択はどうあれ、未来は無いわけだしな……

そんな物騒な思考を展開しているユーリの前で、静かにゆっくりと、けれど確かに周りを見渡していた人物の視線がユーリ達に向く。

目が覚めた時、暖かな温もりに包まれた。長らくそんなものは感じた事も無かった。どこまでも心地よく、このまま身を任せたくなる。けれど、自分がそんな事を感じる事は無い筈で、けれど、次の瞬間、何故そう思ったのかが判らなくなる。不思議に思いつつ、この疑問と、温かさの正体を探ろうと言う好奇心によって、うっすらと目を開く。

「あ、ここは……どこだ？」

最初に見えたのは薄い橙色の布団。誰の趣味かは知らないが、その色は、やけに目に明るく見えた。そして、自分の体がやけに軽い事に気付く。今まではどうだったのか、と言われると、おぼろげになり思い出せない。僅かな鈍痛と共に、表情を歪める。

次に周囲を見る。白い壁面、けれど、きちんと手入れは行き届いており、蜘蛛の巣や、ひび割れ一つなく、埃も見えない。常に誰かが掃除しているという事だろう。清潔感に溢れたその部屋を見ていると自然と心が落ち着く。次に見えたのは移動型のテーブル。そこには果物ナイフと、いくつかの果物があった。みずみずしさがあり、

食べごろなのが何となく感じ取れた。

そのまま視線を動かしていると、こちらを見つめている二対の視線を目があった。そしてその瞬間、体が反射的に動いた。

「……っ！」

反射的に体が動くまま、命ずるままに、傍にあったナイフを掴み、その人物へと切りかかる。血液が沸騰する。目の前の人物を生かしては置けないと、声なき悲鳴が耳元で泣いたような気がした。自分に掛けられていた布団を惜しげもなく……内心、少しもったいなくも思った。その人物へと投げ、そのまま切り込む。狙いは喉。視線を防がれ、初手から急所を狙えば大抵の場合それで終わる。そこには本当なら鮮血が舞い、そこで終わる筈だった……自分自身、その行動の意味すら分からないまま、惨劇が起こる筈だった。けれど……

「おい、いきなりご挨拶だな」

その人物は呆れたような声でしゃべりかけてきた。その声に何か、大切な出来事が思い浮かんだ。闇に染まった自分の手を掴み、光の元へ連れ出してくれたような、そんな情景が浮かんだ。けれど、それも一瞬、一気に飛びのき、距離を保つ。側にいたもう一人の人物……桃色の髪をした人物は、突然の事に目を見開いて固まっている。そして、布団ごと刺し貫かれたはずの人物は……

「まったく、のっけから元気がいいな。手荒い目覚めだな」

今度は苦笑いと共にその布団が掴まれ、脇に抱えられる。見えたその人物の顔は、黒い肌、夜の中で尚、黒く見える瞳。腰まで届いている長い黒髪。けれど、体中に刻まれた刻印と共にその隠す事の

出来ない邪気が体を包んでいるのが感じ取れた。どこか自分にとって嫌悪すべきその気配を感じ取りながら、視線を険しくする。

顔を笑みに変えているその人物は、敵意もさっきも何も発する事無く、こちらを見据えている。その手には、先程自分が使ったナイフが握られている。自分に突き刺さる前に、手で握り受け止めていたようだ。

「……お前は誰だ」

「知らずに切りかかって来たのか？……成程、体が動いたって所か……ん？」

実際、その通りだったのだが、それを簡単に見透かされて目の前の青年への警戒心が跳ね上がる。自分の何をこの人物は知っているのか、何故ここに自分がいるのか、その疑問を胸に秘め、最初の疑問を叩きつける。

「貴様は誰かと聞いたんだ、答えろ！」

「……はぁ」

「答えろ！！」

どういうわけか、此方を上から下まで一瞥した後、青年は溜息と共に、ひどく疲れたような顔をした。少し気にはなったが、どのみち、ここは相手の領域だ。どうにかしてここから脱出する必要がある。そのために僅かに足を後ろにずらした瞬間、横合いから濃厚な敵意が発された。出所は先程から青年の横でベッドで休んでいた女性から。

「貴方……今のはどういうつもり？」

「何がだ？」

横合いから向けられた殺気混じりのそれを受け、気持ちを完全に戦闘態勢に移行させながら言葉に応じる。今のままでは状況が把握できない。目の前にいる青年は、感じる気配から恐らくは敵だろう。状況を察するに、自分はこの人物にとらえられたと考えられる。それ以前の事は判らない。そこに疑問を覚えながら、視線を外さない。

「なんでユーリに攻撃を加えたのって聞いたのよ、答えて！」

「……」

女性から発された言葉を聞いて考える。ユーリに攻撃を加えたと言う事は、青年の名がユーリという事が判る。そしてその青年は、自身と彼女のやり取りを気の所為か、どこか複雑そうな顔で見つめている。まるで想定外と言わんばかりに。

今、目の前では、少しばかり予想外な事が起こっていた。ナイフを持って跳びかかって来たこと自体驚きだったが、よくよく考えれば、今、自分は茨と同化しているのだ。本能的に戦闘体勢に入ってもおかしくは無い。しかも一度取り込まれかけているのだ。警戒心は他の比では無い。仇敵と言った所か。そう思いながら、目の前で起こっている主人公同士の争いを眺める。知っているものからすれ

ば、どうにも気持ちの良い物では無い。知らない者からしても恐らく、良い物ではないが。

やれやれ、穏便にとはいかないものだな、それよりも……

先程、件の人物を見た時に気付いたが、その事が精々気の所為であってほしいと少し思った。

私は、若干痛む体を動かしながら、目の前にいる人物を睨みつける。先程の出来事は、私にはどうしても看過できない。なぜ、この人はユーリを目覚めるなり襲ったのか、もしかして知り合いか何かかとも思ったが、例えそうであっても、今の私は止まらない。

目の前で想い人を傷つけられそうになってまで、平静を保ってなんかいられない。今回は無傷でも、いつか大けがを負うかもしれない。いつか取り返しのつかない事態になるかもしれない。今回、私の所為で余計な事すら背負ってしまったのだ。これ以上苦しめたくない。

「どうしてこんな事したの？ユーリはあなたの事を助けようとしただけで」

「……その言葉を信じろと？あれほどの邪気を纏っている者が、俺を何の見返りも無しに助ける事などにわかには信じれないが？」

その言葉に頭が沸騰しそうになる。その原因の一端を持った者が

何を言っているのか。本人はどう思っているか知らないが、その言葉は、ひどく感情を逆なでする……ユーリをそうした原因のもう片方は、自分に他ならないのだから。

「……それでもそれが本当なの。どうか信じて欲しい」

感情を押し込めて言葉にする。既に手はベッドに立てかけられた剣に伸びかけている。それを寸での所で意識的に引き戻す。ここで争っても、ユーリが困るだけだ。多分、ユーリはそんな事は望んじゃいないから。

「……俺には、それが本当なのか判断できない。判断する材料がない」

「それなら、少し話し合わないか？お互いに色々言いたい事が有る見たいだしな」

ユーリがそう言う。目の前の人物はその言葉に警戒しながらも、頷く。そして、警戒していた体勢を少しだけ緩める。それを確認してから、こちらも鋭く尖らせていた視線を若干和らげる。いくらなんでも警戒するなと言うのはもう無理だ。けれど、それなのに、あれほどの事を、いきなり命を狙われたにもかかわらず、ユーリは落ち着いたままだ。まるで、警戒するに値しないとでも言うかのように。

「ユーリ？」

「悪いが、そう睨むな。戦われても困る」

「む……」

知らずに睨んでいたのだろうか、ユーリに比は無いのに……意識的に深呼吸し、感情を沈める。納得なんかこれぽっちもしていないが、していないがそれでも、襲われた本人であるユーリがまるで気にしていないのだ、何時までも私が如何こう言っているわけにはいかない。

「……でも、私はまだ納得できない」

これは正直な気持ちだ。知らず拳を強く握りしめる。目の前で起きた出来事は未だ目に焼き付いている。ユーリ本人が防がなければ、ナイフは喉へと到達していた。ただ、無力に見ているしか出来なかった自分に心底腹が立った。

「……気持ちは分からなくもないが、だからこそ、話し合う必要があると思うんだが？」

そう言われても、できる事なら話したくない。せめてもう少し気持ちを落ち着ける時間が欲しい。けれど、二人っきりにさせる事もできない。またいつ襲って来るか判らない。今度こそ傷つけさせなんてさせない。私が守って見せる。

「判った。けど、私も同席させてもらうから」

「最初からそのつもりだ」

ユーリは溜息と共にそう言うと、自分を襲った張本人と向き合う。私はそれを緊張しながら見ていた。

落ち着いた雰囲気の青年が此方に視線を向ける。まるで先程の事が無かったかのようなその態度が、ひどく場違いに見えて、戦意を挫く。警戒が必要なのは変わらないが、どこか底が知れない、そんな印象を受けた。壁に背をつけ、持たれたような体勢で此方に語りかけてくる。女性の方はベッドで上体を起こしたままの体勢だ。

「それで、まずはどこから聞きたい？」

「まず、ここはどこだ？」

「ここは常夜の石と言う、見えざるものと会話、もしくは触れ合うためのアイテム、その中だ」

「常夜の石……」

「その様子を見るに知らない様だな。とはいえ、これはそう言うモノだと思ってくれないとどうしようもない」

その言葉に嘘は無く、判断材料がない以上、自分では判断しかねる。ここはそう仮定して置いた程度でいいだろう。

「次だ。貴様は何者だ？いくらなんでもその邪気は異常だ」

「……俺の名はユーリだ。邪気と言うか、この体については、そう言われても何も言えないな。この状態になったのはついさっきなんだからな」

その言葉に疑問を感じ聞き返す。ということは少し前まではそんな状態ではなかったという事になる。まさか、ほんの少し前は普通の人だったとでも言うのだろうか？

「どういう事だ？」

「貴方と私を助けるために、ユーリはこうなったの」

「……エイナ」

横合いからの言葉に視線を向ける。そこにはどこか言いづらそうにした女性がいた。

「何？」

「貴方は黒い鎧を着こんだ姿をしていて、私達を襲ってきたの。私たちはそれを何とかやり過ごして、さっきまたあなたと戦ったの。その結果、ユーリは貴方が取り込まれていた鎧や茨を取り込んで……今の姿になったの。私は、ユーリがあなたを助けた後に取り込まれたんだけどね」

「黒い鎧……」

その言葉を聞いて何かが頭の中に浮かぶ。それは醜悪なほどの妄執。その正体は自分にも当たり前にある、ある思い。それに飲み込まれ、意志なきままに、自我を失ったまま彷徨っていた記憶の断片が浮かぶ。

「づっ！」

突然に感じたその頭痛に、思わず膝をつく。じくじくと痛むその痛みはどこかその記憶が忌まわしいモノであると同時に、それが真実だと気付かせる。何故か、抵抗なくすんなりと事実だと受け入れられた。つまり、青年があの姿になり、あれほどの禍々しさを持つようになったのも、全ては自分の所為になる。

「まさか、そんな事が……」

半ば真実だと悟っていることを否定する。ならばさっきの自分は恩人に刃を向けた事になる。にじみ出た邪気に反応したとはいえ、それはほんの少し前まで自分が取り込まれていたものだ。過剰に危険視していたのも、今考えればその事実が原因だろう。

「それが事実なのよ。だから、私は貴方が許せない。例え知らなかったとしても、貴方がユーリに掛けた負担は並大抵じゃない。それを踏みにじろうとした貴方を、私は見過ごせない」

静かに告げられるその言葉。拳を強く握り、こちらを真っ直ぐに睨むその視線が、なによりも雄弁に真実を語っている。それを感じ取り、視線を逸らす。反射的にとは言え、救ってもらった身で恩人の命を狙ったのだ。この場で切り伏せられても仕方ない事ではある。

「……少し落ち着け。別に誰かが怪我したわけでもなんでもないんだ。それ以上引き伸ばさなくもいい。俺が気にしてないんだ。お前たちが如何こう言う事じゃない。それに知らなかったんだ。仕方ないだろう？」

「ユーリ！私は、ユーリが傷つくかもしれない事を仕方なかったで済ましたくなんかない！ただでさえ、ユーリに負担を掛けてるのに……」

「……何を考えてそこまで意地になっているのかは知らないが、もう少し冷静になったらどうだ？話が進まん」

「けど！」

「心配してくれるのは有り難いけど、エイナの場合は、早く休んで元気になる事だ。だから妙に感情的になるんだ。精神的に疲れてる証拠だ」

「……」

どこか納得のいかない表情と共に渋々と引き下がる。それほどにあの女性、エイナにとって大切な存在らしい。そんな事を想っているとユーリが此方に視線を向ける。

「さて、色々と話が脱線しているが、そろそろお互いの自己紹介でもするか」

「自己紹介？」

「何を不思議そうに見ているんだ？まだ俺らは名前すら名乗り合ってはいないんだが？」

「あっ！」

言われて気付く。お互い第一印象が最悪だったために、まだ名前すら教え合ってはいない。余程緊張していたのだろう。こんな事すら気づかないとは。

「俺から言わせてもらおうか。俺はユーリ。見ての通り……まぁ、元普通の一般人だ」

見ての通りと言うくだりで自分を見おろし、苦笑いと共に言葉を繋げる。さすがに今の状態で一般人と言い張る気は無いらしい。それには大いに同意する。

「特技は、まぁ、家事全般とか、大工仕事とか、割と何でもこなせる、と思う。趣味は特技と同義かな。好きなものは平穏と暇つぶし。後は仲間かな？嫌いなものは理不尽と不条理とかかな。とりあえずはこんな所だ」

「……そうだったの？私、初めて聞いたんだけど？」

「言って無いからな。というか、誰も聞いてこなかったろ」

「暇つぶしって何？」

「いつもしているだろう？暇があれば色々作ってるし、適当に色々してるし、それに最初の頃はやる事も無かったから、よく昼寝してたしな」

「寝るのも暇つぶし？」

「暇がつぶせれば何でもいいんだよ。とりあえず、何もせず突っ立ってるのは、どうも嫌なんでな。それなら寝てた方がましだ」

「そういうものなの？」

「俺はな」

「ふーん」

横合いからエイナが割り込んできて色々聞いている。横にあった移動式のテーブルからメモ帳を取出し、それに何か書いている。表紙にはエイナ専用と書かれている。あんなもの持っていたのか、と少し感心した。しばらく見ているとエイナがこちらに気付く。そのまま数秒ほど停止する。

「……え、えっと私の名前はエイナ。さっきの事はまだ納得してないけど、ユーリが気にしてないから私はもう何も言わない。けど、ユーリに何かしようとしたら絶対に許さないから！……特技は……
……け、剣を振ること！趣味は……お、お喋りすること！え、えっと、好きなものは……内緒！！嫌いなものは誰かを傷つけること、とかかな？」

「……エイナ、別に無理に言わなくてもいいんだぞ」

「無理じゃないよ！？なんでそんな優しい目で見るの！？そんなに変だった！？」

「……お前はあれだけ挙動不審になってたのを普通と言うのか？どんな変人だ」

「へ、変人……」

どよ～んとした空気を纏いながらエイナがへこむ。確かにこちらから見ても先ほどの事は参事だろう。見ているこっちの方が辛い。二人の無言の視線にさらされていたエイナが咳払いと共に空気を換えようとする。そこで咽てしまい。さらに痛々しい空気が重くなっ

たが。

「ごほっ！ごほっ！、えっとそれで、あなたの名前は？」

顔を赤くしながら聞いてくる。そもそもそんなに嫌ならしなければいいのに、と思いながら、自分の事を思い出す。

「……！」

少し思案してみて、不思議な感覚に襲われる。それがおかしくて思考が止まる。エイナが不思議そうにこちらを見ている。ユーリは何も言わず、静かにこちらを見つめるだけ。驚きも疑問も無く、ただ、事態の経過を眺めているだけ。それが全てを見透かしているようで、今の自分の状態を誰よりも把握しているようで、どこか浮いているように見えた。

何も思い出せない。ここに来る前の出来事も、黒い鎧に覆われていたという事実は認識できるが、どうしてそうなったのか、それ以前は何をしていたのか、それがまったくと言っていいほど判らない。

「……どうかしたの？」

さすがに気になったのか、エイナが聞いてくる。それに応える言葉がない。けれど、悩んでいるうちに、一つだけ分かった事が有る。自分の名前だけはなんとか思い出せた。

「いや、なんでもない」

とりあえずは誤魔化しておく。このままこの事を話してもいいのか。それを判断できない。結局こうして話し合いはしているが、味

方か敵かと言うのは、いまだに保留となっている。確かに、黒騎士となって誰かを傷つけていたのは事実なのだろう。けれど、だからといって、目の前の二人が味方と言う話にはならない。

「いや、俺は、俺の名はレオンだ」

そう言って、自分の名を名乗る。口にして初めて気付いたが、レオンと言う名が本当にしっくりと来ることに気付く。なぜか、ようやく自分が枷から外れたのだと認識する事が出来た。まるで自分の名を思い出した事が自分の証明であるかのように。

「そうか。ならレオン」

「なんだ？」

言い知れぬ開放感の中、ユーリから声がかかる。俺はそれを聞き、視線をユーリへと向ける。そして、ユーリの口から信じられない言葉が告げられる。

「お前、ここに来る以前の事は覚えているのか？」

「な、に？」

どういうことだ？なんで俺が全てを覚えていないことが分かった？そんなそぶりなどしていない。精々が、自己紹介の時に少し時間がかかったくらいだ。それ位の事でなんでそこまで正確に記憶がない事が見抜けるんだ？

「……どうやら覚えていないみたいだな」

沈黙を肯定と取ったのか、ユーリは一度目を閉じ、静かにこちらを見直す。エイナはその言葉に目を見開いていた。

「え？覚えてないって……昔の事が思い出せないの？」

エイナがなぜか過剰なまでに反応する。それに対し、ユーリはこちらを見据えたまま、静かに見つめている。

「……ああ、そう言う事だ。俺はどういうわけか、黒い鎧に取りつかれる以前の事が全く思い出せない。黒騎士の時の記憶もあいまいだ」

ここではぐらかして辺に疑念を持たれるよりかは正直に話す方がましと判断し、自身の状態を話す事にする。エイナが今度こそ身を乗り出し、驚きを露わにする……勢い良すぎてベッドから落ちそうになったが。

「わっとと……それじゃ、あなたも記憶喪失って事？」

「……貴方も？」

今の一言は何かおかしい。その言い方だと、まるで自分以外にも、誰か記憶喪失がいるかのような……

「うん、私と、ユーリも記憶を失くしているの」

「何？」

「……」

エイナの言葉に驚愕する。まさか二人とも記憶を失っているとは。だが……

「……」

「……なんだ？」

ユーリを見つめる。この男が記憶喪失と聞いてもなぜかピンとこないと言うか、腑に落ちない。ここまでの落ち着きを持ち、先程の奇襲にも迷うことなく対処した。これだけの芸当をこなせる人物が果たして記憶を失くしていると言われて信じれるだろうか？

「あんたは本当に記憶が無いのか？」

「……どういうことだ？」

僅かにユーリの視線が鋭くなる。それを図星を刺されたからなのか、ただ単に疑問に思ったのか判断に窮する。戸惑いつつも問いに答える。

「あんたはさっきから冷静過ぎる。俺から言えたことじゃないが、記憶が無い人間がそんなに冷静に動けるものなのか？」

「……そう言われてもな、実際に動けているから、としか言いようがない。でないなら性格上、あまり慌てたりしないと言った所か」

目を閉じ、どこか困ったように言うユーリ。その仕草は本当に困っているようで、こちらもそれ以上の言葉を言えなくなってしまう。それを見てエイナが口を挿む。

「ユーリも記憶喪失だよ！私とずっと一緒にいたんだもん！私が証人だよ！」

「エイナ、お前、証人なんて難しい言葉、よく知ってたな」

「ちょっと！ユーリ今それ関係ないじゃない！というか私のこと、馬鹿な子とか思って無い！？」

「……違うのか？」

「なんで不安そうに言うの！？違うわよ！！」

「……冗談だ」

「もう！いい加減にしないとユーリでも怒るんだからね！！」

「……いつもの事だと思うが？」

「……殴られたいの？」

「悪かったよ。だから勘弁してくれ」

「むぅ」

目の前で突如行われた、コントのような出来事に、ついつい言葉を失う。だが、今の出来事で部屋の空気が柔らかくなったのも事実だ。もしかして、計算づくでやっているのか？あの男。もし、そうだとするなら知らない間に此方の言動を誘導されるかもしれない。僅かに青年への警戒心を復活させる。

「ほら、レオンが困ってるぞ」

「いや、俺は別に……」

「私が悪いの！？あれはユーリが……」

「話が進まないからとりあえず話を戻すぞ」

「わかった」

「ちょっと！スルー！？」

話を流されたエイナが何か言っているが、こちらとしても、これ以上余計な話に持って行かれたくは無いので、関わらないようにする。如何にもエイナとかかわると盛大に自爆しそうな気がする。何故だろうか？初対面の筈なのにこうまで確信できるとは。

「とりあえず、俺の事は信じて欲しいとしか言いようがないし、その判断はそっちに任せる。それで、これからの事だが……」

「……」

「どうする気か、聞いてもいいか？」

そう言われ、少し思案する。自分の記憶は名前以外は思い出せず、頼れる知人なんかもいない。精々知り合いと言えば目の前の二人だけだろう。それも味方かどうかの判断がしづらい。特にユーリは。けれど、目の前の二人しか頼れないのも事実。どうすればいいのか、悩んでいるとユーリが口を開く。

「やっぱり何も思い浮かばないか」

「……」

「それなら俺達と一緒に旅をしないか？」

「旅？」

「そう！私とユーリは記憶を取り戻す旅をしてるの……昔の自分を取り戻すために！」

「それに、今のお前は体が無い状態だからな。今俺の体から出ていくと消滅するぞ」

「何だと！？」

ユーリの言葉に驚く。体がないとはどういう事だろうか？今確かにこうやっているのは自分の体だ。それが無いなどと言われても、にわかに信じる事はできない。

「体が無いとは、どういう事なんだ？」

「そのままの意味だ。不思議に思わなかったのか？ここは常夜の石の中だと説明しただろう？」

「だからどうしたと言うんだ？」

「常夜の石の効力は見えざる者、もしくはそう言った特殊なモノとの対話の場を作る物。主な効果はさっき話した通りだ」

「ああ」

「つまり、この中にいる時点で、お前は特殊な部類の存在にカテゴライズされてるんだよ」

「まさか……」

「事実だ。無論いくつか例外はあるが、お前はそれには該当しない」

「例外と言うのは？」

「俺たちには仲間がいる。当然の事だが、そいつらは普通に体がある。そいつらがここに入ってくるには、現在の持ち主、つまり、俺、ないしエイナの了承がいる。ちなみにレオン、お前にはそんなものしていない」

「それじゃ……」

「そこにそうやっているってこと自体が、さっきの問いの答えだってことだ」

ユーリの言葉を聞いて呆然とする。なぜこんなことになったのか。自問自答する。考えても答えは出るはずもない。判断する情報も、今までの思い出も何も持ちえないのだから。目の前が暗くなっていく気がした。そこにユーリの言葉が割って入る。

「だから、俺達と一緒に探してみないか？」

「え？」

「判らないなら、探せばいい。知らないなら調べればいい。簡単な事だ」

「だが、探しても、調べても判らないことだってある筈だ！」

もし努力した結果が徒労に終わってしまえば、結局無駄であることに変わりは無い。だとすれば、下手に希望を持つよりも、このまま諦めた方がいいのでは？と思い始めた。

「なんだ、案外悲観的なんだな」

「……俺は、ただ起こりうる自体を真剣に考えているだけだ」

「的外れとは言わないが、今それを言っても意味は無いな。結果が出てもいないのに諦めるのは逃げだぞ。まぁ、そんな選択もあると言うのは否定しないけど」

「理解できるのなら判るだろう？安易な選択で未来にどれだけの後悔を生むか。それを考えれるのならそんな楽観的にはなれない筈だ！」

「未来、ね。大きく出たな。けどさ、そんなの百も承知さ。それでも、前へ進むと決めたんだ。他でもない自分自身が」

「……どうして、そこまで前を向いて歩けるんだ？」

そう言うと、ユーリは優しく笑いこちらを見る。

「しなければいけない事と、したい事が一緒になったら、お前はどうする？」

「……しなければいけない事と、したい事が一緒」

「そうだ。例えば、今お前は料理がしたい。そしてもうすぐ飯の時間だ。何か食事を作らなければいけない。そうしたらお前はどうする？」

「……それは、何か料理をして食事を作るしかないだろう？」

「そう言う事だ。それと同じだよ」

「何？」

「俺はこの旅を続けたい。他でもない自分のために。仲間のためと言うのもあるが……そして、仲間がいる以上、俺個人が勝手にやめるわけにもいかないし、今更辞めれない。ほら、どうしようもないだろ？」

「……」

「自分の意志でしたいと決めた事と、今、優先してしなければいけない事が重なったら、もうやるしかないだろう？結果がどうであれ、行ける所まで行くしかないさ」

ユーリは迷いなく言い切る。その瞳を見て、もう止める事は出来ないと悟った。そして、この体から出る事がかなわないと言うのなら、こちらの選択も決まった様なモノだ。ついでに言えば自分でしたい事も決まった。

「そうか……」

「ああ、すまないが、そう言う事になる。嫌なら適当にこの中でくつろ出でてくれて構わない。迷惑はかけないように善処する」

「いや、その必要はない」

ユーリの言葉に否定の意を返す。ここまで言われては俺も、その行き先に興味がわいた。それに……

「俺は、俺も記憶を取り戻したい。それにこの旅の果てを見てみたくなった。だから、俺も共に行かしてほしい」

自身の気持ちを正直に言う。断られるかもしれない。初対面であれだけの事をしたのだ。抵抗はあるだろう。それでも、ここで腐っているわけにはいかない。

「……答えは出たか？」

「いや、だから、探してみようと思う。お前たちと共に、それに……」

「？」

「それが今必要な事で、俺が今したい事だ。ならしないとどうしようもない」

そう言って笑いかける。ユーリはその言葉を聞くと柔らかく微笑み、此方に言葉を返す。

「そうだな。ならどうしようもない」

「ああ」

「これからよろしくな」

「こちらこそ、よろしく頼む」

「エイナ……そこで煙みたいなもの噴いてないで、お前も何か言ったらどうだ？」

「……う、え？うぇ！？ええと、その、よろしく、ね？」

「……はぁ」

途中から、話の内容量について行けなくなったのか、オーバーヒートしていたエイナを起こし、とりあえず、これからの事を話して挨拶させる。

「それじゃ、レオンもこれからは一緒に行くの？」

「ああ、そう言う事になる」

「……もうユーリを狙ったりとかしないよね？」

「ああ、話してみた所、妖しい所も感じなかったからな」

「……本人の入る所で言う事じゃないだろう」

ユーリが呆れて俯く。だが、あれから見ていたが特に不審な点もないし、今自分に手間を割いても、あまり意味は無いだろう。どち

らかと言うならあのまま放置しておいた方が無難だったはずだ。もしくはこの部屋に監禁しておくか。なんにせよ、俺に世話を焼き、共に行こうと言ってくれた瞳に、嘘は感じなかった。だから、信じてみようと思う。少し落ち込んでいるユーリを視線の隅にとらえながら、そう思った。

「へぇ、それじゃ、この中で女は私一人か」

そんな時、発されたエイナの一言で空気が凍る。ユーリも俺も動かない。そして、エイナはそれに気付かない。

エイナの不用意な一言で、場の空気が止まる。そのことについては、俺も考えないように、というか頭から除外していたのだが。エイナは時々、場の空気が読めないからな……時々じゃなくて、しょっちゅうだったか。さて、どうするか。

「……」

レオンがふるふると肩を揺らす。それを見て、もうすぐ爆発するなと思い、手で耳を塞ぐ。エイナは今回の元凶であり、空気が読めてないので、とりあえず放置しておく。未だに自分の発言の意味が分かっていないらしい。

「俺は……」

来た。そう思い身構える。そして面倒事にしたエイナを見る。こ

の期に及んでレオンを不思議そうに見ている。ああ、諦めよう。もうタイムアップだ。もう彼女は救えない。最初からその気も無いが。

「俺は！女だ！！」

咆哮。その声は建物内を駆け抜け、一種の音波兵器となる。レオンと言う人物を少しでも知ると、ここまで大声を出すような人物だとは思わないだろう。表面上は、冷えた顔で冷静に判断を下す人物のように映るだろう。けれど、実際は結構面白い人柄をしているのだが、原作でそれを知っている身としては何とも言えない。予測できる範囲内とは言え、流石に、こんなことに巻き込まれるのはごめんだなぁとか考える。

そして、無防備なエイナは案の定、大声に耳をやられ、頭がくわんくわんと大きく揺れ、ベッドに頭から突っ伏した。自業自得だろう。さすがに助け舟を出す気は無い。

「はぁっ！はぁっ！」

そして大声を出した当の本人は、久しぶりに出した大声という事もあり、息切れしていた。のどを痛めたのかもしれないが。

「ああ、水、いるか？」

「！……ああ」

とりあえず水を渡す。それを奪い取るように取り、一気に飲み干し、また咽る。仕方ないのでとりあえず落ち着くのを待つ。

このレオン、どういうわけか、女性である。なぜかは知らない。

最初は普通に男と思っていたのだが、目覚めて奇襲された後、改めて視ると、骨格や体つきなどが、明らかに女性特有のモノになっていたのだ。暫らくその事実に驚きはしたものの、話が終わった頃合いを見計らって、確認を取ろうと考えていた所、先のエイナの発言があったのだ。よくよく見ると、線は細く、原作と比べると、若干背も低いし、肩幅とかも狭い。

とりあえず、初の男性の正式な仲間に、最初は内心喜んでいた部分もあったのだが、とんでもない不条理によって覆された。同年代の男友達とか欲しいなとか少し思っていたのだが、どうにもうまくいかない。女性ばかりの空間と言うのは、少し気疲れするのだが。

「まぁ、なんだ。あんまり気にするな……」

そんな内心などおくびにも出さずに、とりあえずなだめにかかる。レオンも水を飲んで、少しは落ち着いたのか、先程よりも冷静に見える。そうなって貰わないと、こちらが面倒くさいのだが。

「……なぁ」

「なんだ？」

内心頭を抱えていると、レオンからの言葉が聞こえ、そちらに目を向ける。エイナはまだ涙目で呻いている。あれは復活まで時間がかかりそうだ。

「お前も俺を男と思ってたのか？」

「とりあえず襲われた後に見た時には女に見えたが」

実際、あの時に骨格やら体つきやらで判断したのだ。間違っては無い。ただ襲撃した時のことを攻めていると勘違いしたのか、若干申し訳なさそうな感じでレオンは謝ってくる。

「それは、その悪かった。あの時はお前が敵にしか見えなくてな」

「それはそうだな。自分が言うのもなんだが、実に敵っぽいからな」

「本当にその通りなんだが、やけに軽く言うな」

ユーリが簡潔に言い切った事に対してレオンは呆れたように言う。けれど、ユーリにとってはそれこそ済んだことだ。

「自分で選んだことだしな。今更どうこう言う気はねぇよ」

レオンは少し俯くと、気持ち小声でほんの少しの弱音を吐露する。

「そうか……俺はこれからどうなっていくのかな？」

「どうもならんさ。進むべき道と、目指すべき目標がある。それを果たそうとする気持ちがあるんだ。聞くまでも無い。今は前を向いて進むだけだ」

その言葉を聞いてレオンはユーリを見上げる。その眼にしっかりと頷くことで返す。その反応にレオンは僅かに笑みを浮かべ、肩の力を抜くように目を閉じる。

「そう、だな」

ユーリの言葉でこれからの事に思いを馳せる。何が起ころうとも、

きっと進み続けて見せる。もう何もわからないままでいる気は無い。

「もう、俺は、自分で歩いて行ける。進んで、見せる！」

静かに独白するレオンを横目で見て、これなら大丈夫かな、とほんの少し安堵する。変に抱え込まれて先の二の舞になられても問題だ。だったら開き直ってくれた方がいいに決まっている。空元気でも中身があれば結構ましだろう。今は身近な目標でも立てて、進むきっかけを与えてやる。少しでも、やる気を奮い立たせることが肝要。

「さて、そろそろ街へと帰るかな？……リコの奴、少しは元気になってるといいんだがな……」

窓の外に視線を向け、一人呟く。残してきた少女の事を考え、帰ることを決める。

「そうと決まったらあのじゃじゃ馬を元に戻さないとな……世話ばかり焼かせてくれる」

ため息と共にエイナの側へ向かう。その後、エイナがレオンと話をしたりしていたが、割と中良さそうでよかった……レオンが困ったような顔でエイナに振り回されていたが、此方にちらちらと視線で助けを求めていたが、知らん。俺は表に戻り、アレスパの街に変えるために足を動かすことにする。

この時、エイナとレオンは話に夢中で外を見ていなかった。そこに眼をむければ、笑ってなどはいられなかっただろう。もし、ここで見ていればのちの結果は何か変わっていたのかもしれない。けれど、二人は結論として外に目を向けていなかった。だから知る事は

無い。外で起きた惨劇を……

砂塵が舞う、無人の荒野。それを生み出した原因の片割れでもあるユーリはその景色を見て、確かにあった戦闘を、様々な転機となった死闘を思い出す。その結果、自分は変わった事を自覚する。先程会話していた時からうすうす感じていたことだ。気分が浮き立つ。

「さぁ、少し試運転とでも行くか。こうなってから体が軽くてな……それでもいいのなら、かかってくるか？」

後ろを振り向く。そこには先の戦闘の轟音で集まって来たのか、モンスターが、驚くことに数百近く存在していた。見える部分は全て黒く、地平はモンスターによっておおわれている。本来なら逃げた方が無難だろう。けれど、脅威は感じない。今は……

「逃げない、か……なら、始めるか……」

軽く拳を握り、足に力を込める。体の調子は良好。軽すぎて、力がわきだし過ぎて、どこかへ飛んで行ってしまいそうな錯覚に陥る。その高揚感を感じながら、モンスターの群れに体を向ける。今は、ただ……

「後悔、するなよ……お前らぁ！！」

今はただ……この衝動を解き放ちたくてしょうがない！！

「あああぁぁあああ！！」

咆哮と共に飛び出し、腕を力の限り振り切る。力まかせのその一撃は、大気を巻き込み、摩擦で発火しながら空間を抉り取る。それに触れた数体のモンスターが抉れ飛ぶ。腕が過ぎた後の軌跡に風が舞い込み、その勢いに小規模の竜巻すら発生させる。急激に送り込まれた空気に発火した火が反応し、極大化する。

炎を纏いながら、全てを吹き飛ばす風がモンスターの群れを蹂躙する。数十のモンスターが持ちこたえる事すらできずに吹き飛ばされる。理不尽な暴力。

「おいおい、まだ撫でたくらいだ。それだけで、この体たらくか？」

つまらなそうな口調でユーリは言う。けれど、その眼は抑えきれない戦意をみなぎらせ、獣のようにギラギラと輝いていた。

「まだまだこれからなんだ。せいぜい全力で持ちこたえろ。それが……」

テンションが上がる。上がる。それは理性を飲み込み、本人すら気づかないうちに、変化を見せる。

「それが、我（オレ）に対する礼儀と知れ！」

変わる、気付かないまま、けれども確実に、際限なく回る狂気の輪。全ての根源である欲望のままに。

「さて、次はだれが来るのだ？誰でもいいぞ。推して参れ」

『ガァァァァ！！！』

『ウバシャァァァ！！』

『ジャァァァァ！！』

自分たちを威圧する、天蓋を越えたプレッシャーに負けたのか、数体のモンスターが飛び出す。自分の判断では無く、生きるために本能が指示した結果だ。背をむければ、待つのは死。けれども、待っていても死ぬだけだ。動かなければ、動かなければ死ぬ。生存本能が何より早く危機を訴える。殺さなければ、殺される！

「ふん……頭の足らぬ無能が、貴様ら、進むだけでどうにかなると……」

『ガァ！？』

『ギャァ！？』

『ギョバァ！？』

不意に足元が隆起する。そこから赤い茨が無数に這い出る。以前遭遇したような黒い茨では無い。真っ赤な、鮮血のような赤。狂気を見せるそれは、槍のように異形を貫き、鞭のように打ち払う。それが雨のように降り注ぎ、大地からも噴水のように吹き上がる。鮮血が舞う。僅か一度、ほんの一回の行動で向かってきたモンスターは絶命した。今は奇怪なオブジェに成り果て、物言わぬ骸とかして

いる。

「思っていたのか？……」

残っていた者達へ目を向け、問う。その眼には嘲るような、見下した視線があった。それを見たモンスターの総軍が一歩後ずさる。たった一人が、大地を埋め尽くす異形の群れを押し返し、あまつさえ見下している。有り得ない光景が広がっていた。それはユーリを知る者からすればありえない光景。

けれど、その姿は以前に一度見せた事が有る。迷いの森で、あの時も人格が豹変したような状態に変わった。けれど、前回も、今回も気付いたものはおらず、事実は闇へと葬り去られるのみ。

「さぁ、我を楽しませろ。その貧弱な命と体の全てを賭け、足らぬのなら、その存在全て、来世に向かう意志まで持ってこい！」

手招きし、向かって来るように焚き付ける。傲岸不遜、この世のすべては自身を中心に回っているかのようなそんな圧倒的な存在感。それはほんの少しの時間でも、目を覆いたくなるような速度で密度を上げていく。上限すらないその狂気は闇すら覆い返す。

『ガ、ガァア、アアアアアアアアア！！！！！』

『ウウオオオォオオオッォオ！！！』

「やれやれ、生きると言う意思を持つのなら、生きたいと願うのなら……」

しょうがないとでも言いたげに両手を上げ、肩をすくめる。けれ

ど、その口元は笑みの形に歪められている。

「そもこの場へ来るべきでは無かった。貴様らは、そこを決定的に間違えたのだ。我の前にその醜悪な姿をさらしたこと、万死に値する！」

茨が主の命を受け、有象無象を刈り取る死神の鎌へと変貌する。全てを断罪するギロチンの刃。断頭台へと掛けられたものはこの場のモンスター全て。

「くく、ははは」

目を向かい来る全てに向け、嘲笑する。

「くくくくく、はははははは！！」

本来の性格は鳴りを潜め、ただただ笑う、哂う、嗤う。全てを嘲笑う。

「アーハハハハハ！ハーハッハッハッハ！」

この世の万物全てが自分よりも下位の塵芥。眼にするほどの価値すらない。その世界観が支配する。疑問も無く、嗤い続ける。その笑い声の横で、無数の命が消え失せる。本来、死しても世界へと溶け、再度この世界へと組みこまれるというサイクルに入るが、それをユーリは割り込む。

茨がモンスターに刺さり、その命を吸い尽くす。その命も、魂も、記憶も、存在も、世界に残した何かの証すら吸い込んで、飲み干す。笑いながら、数百の命がただ一人の青年の中に納められる。既に死

んだ命が消滅していく。自我すら無き魂が、より大きく、際限なく巨大化を続ける魂に取り込まれる。壊れたその魂は輝きを生まない。砕け散った魂は無限の破片となり、それぞれが、際限のない密度で凝固する。

言葉とするなら、今のユーリの魂は破片一つが無量大数と言える魂を、無限にちりばめた魂の宝石箱だ。一つ一つが世界を生み出す以上の力を生み、絶対無限を誇る魂は最小単位にまで分割されて尚、無尽蔵であり、無制限。呆れるほどに染まりきった破片が禍々しく狂気を歌う。光りなき宝石。

すでに人から外れ、特異点となり始めている。様々な事象、現象の基点、世界の始点、至源至高の位置へとある。この状態のユーリは、まさしく全てを越えた存在。敵うどころか、それと伍する存在すら見つからないだろう。いるとするなら、それは同じ存在しかありえない。

「くくく、我も中々に遊び上手だな。ここまで浮き立ったのは初めてだが、存外暇つぶしも良いものだな」

周りを見つめ、そう言う。そこは血の一滴も無い大地。先ほどまでいた、それも、ほんの刹那前までいたモンスターの姿は存在すら消えている。全て掃除した後の様な清潔感がにじみ出ている。

「我がする事だ。終わりまで完璧でなくてわな。それでこそ我なのだ」

自身を褒めるかのようなその言葉。自己愛と言えばそれまでだが、それが周囲にまで伝搬し、世界すら軋みを上げる。狭苦しい世界に眉をひそめながら僅かにその顔を崩す。

「まったく……以前にも思った事だが、我がいるにもかかわらず、この狭く息苦しい世界はなんだ？我を愚弄しているのか？」

空を見上げ、睨む。それだけで空が色あせ、ひび割れ、穴が開く。それを見上げユーリは口を開く。

「この継ぎ接ぎだらけの貧乏舞台で我が踊るだと？笑わせるな！我を軽く見ていること、いずれ後悔させよう」

空間の裂け目に明らかな殺意を加え、目を閉じる。もう一度目を開いたとき、世界は変わらず回っていた。空を色あせてなどおらず、穴も無い。けれど、そこには世界すらおびえる異端がいた。それは事実。例え犠牲となったモンスターが全ていなくなっても、“元から居ない事にされても”それは動かない真実。けれど、それを認識している者はいない。知っている本人は、既にその事実を炉辺の石ころ以下とみなして記憶から消している。

天上天下唯我独尊、全てにおいて我が上はおらず、我こそが最上の者なり、全ては塵芥の有象無象。

本来の意味は己が尊いと意味であるが、この場合においては拡大解釈された自己中心的な意味を持つ。自分はこの世界で一人、だからこそ尊く、だからこそ、己が上には何も立つものがいない。並ぶものも、追いすがれるものすらいない。故に、全てにおいて我が最上である。と言う結論になる。

比較対象も、比較するものもいないが、それでも、現在のユーリに勝るものはあらゆる世界の置いて存在しない。今なら世界すら破壊し、生み出そう。遍く万象、一切合財全てを零から無限に積上げ

よう。けれども、その前に世界の根源、世界の総意を叩き潰してからだろう。先ほどの穴、その果てに、この世界の根源がいる。

「……我はこの世界を喰らう、極大極光の華なり、大海を飲み干し、贄としよう。大地を噛み砕き、糧としよう。全ては我のためにあり、我は唯一絶対になりて、覆せぬ歪まぬ屈さぬ滅びぬ不変不敗の存在なり！我が前に障害は無く、我が周囲に生み出されし者は全てが造花。今こそ咲き誇れ」

高らかに歌い上げる。今はまだ世界を潰す気は無い。なんであれ、己が目標があるのならそれを見るまで。己が下等な願いも聞き届けるが器の違い。けれど、自身は自身で独自に道を作り上げよう。全ては……

「世界を苗床とする、神上の花よ！」

世界へと茨が突き刺さり、埋め尽くす。それは全てを飲み込み、世界を赤一色に染めあげる。それは世界に溶け込み、すぐに消える。それを見とどけた後、僅かに口を開く。

「さて、愚かな我が身よ、我はこの舞台を作り直すつもりだが、どうする？貴様はまだ、矮小な者どもと歩むのか？それでは結局我に喰われて終わるぞ？精々楽しませよ。でなくば……」

そのまま続きを口にする。それは自身への宣戦布告。既に自由を取りつつある者がいう最初にして、最大の言葉。

「この身、我が貰い受ける」

その言葉は世界へと響く。隔絶された世界で、誰も気付くことな

く、世界すら気づかないまま変わらず回る。狂狂と、知らぬ間に自身を蝕む毒に気付かないまま……

息を吐く。汗が噴き出る。足が震え、大地に膝をつく。

「ぐっ！……づっ！」

こみ上げる何かを抑え、必死に冷静さを取り戻す。先ほどの事を思い返す。自身の中に変化があったのは知っていた。けれども、ここまで急速に悪化するとは思いもしなかった。戦闘、それも、腕を気持ちのままに一度振るっただけで飲み込まれた。それも向こうの気まぐれで体の主導権を戻してもらったようなものだ。

「あいつは、俺、になるのか？」

結論から言えば、自分の一面であることには変わらない。けれど、極端に一面が特化した人格と言える。自己愛がある意味極まればそうなるという事だ。まだ今は自分が混じっているためにまだ分別があるのだろうが、自分が呑み込まれれば、恐らく、際限なく飲み込んでいく。欲望が活動を始め、形成され、その強さ故に想いを想像し、世界へと流出する。

「気分が悪いな。ここまで不味い奴と気付けなかったのが、そもそもの判断ミスだ」

今更ながらにこの姿のデメリットが重くのしかかってくる。この

ままでは届かない。近いうちにも飲み込まれる。いや、近いうちどころか、今気持ちのまま一歩を踏みだせば、それだけで俺は、我に取って代わられかねない。

「くそ、一瞬一瞬が死と隣り合わせってか？しかも俺どころか、世界ひっくるめての」

口にしたとたんに、周りの事に気付く。エイナとレオンの事を忘れていた。今の事を見られていると不味い。確認すると、二人はまだ話をしていて、外の事には気付いてはいない様だ。ほっと安堵すると同時に、早速隠し事が出来た事を心の中で詫びる。

そして、一つの事に気付く。

「待て、よ。アイツはあの茨を使えるという事は、もしかして死んでも生き返るのか？」

以前あの茨はとりついたモンスターをよみがえらせた。それも迷いの森にいたっては消し飛ばそうが、切り落とそうが元に戻り、そのつど、数を増やしていった。まるで死せることのない奴隷のように。もし、あれが自身の復活に使え、その上で意志も残るのであれば、実質消しようがない。

「本当の敵は自分自身か。ふざけてんじゃねぇっての……」

あまりの薄気味悪さに愚痴がついて出る。今の所、勝てる見込みは無い。それに、それをするという事は、常夜の石の力を使わなくてはならない。つまりなし崩し的に、エイナとレオンを巻き込むことになる。そうなったら最後、アイツは間違いなく二人を殺す。あの自分最上主義は、己例外を認めない。自分と切り離せば、確実に

全てを破壊する。作り直すと言う世界も碌なものではないだろう。自己中心的な奴が作り上げる世界等、腐っているの決まっている。

「ちっ！あんな人格が自分から出たと思うと、本気で鬱になるな」

気分が悪くなりながらも、徒歩でアレスパの街へ向かう。僅かな昂揚感を感じ、眉を潜める。呑まれるな。俺が流されれば全てが消える。この世界の根源、世界に巣食う元凶すら、まだ自分の中に巣くうものと比べれば間違いなくましと言える。ラスボスよりも業の深い自分を見て溜息をつく。

「こんなはずじゃなかったんだが、どこで間違えたんだかな……」

そう言いながらも、足は止まらない。思考は無駄な案をだし、却下され、また別の案を上げ、却下されるの繰り返し。自分がアイツに勝てればいいのだが、それができない。世界すら足蹴にする破滅者。全ての万象一切を一笑に付す。笑いながら壊していくだろう。いや、最悪その眼光や言葉だけで世界を砕く。

「……追い出す、駄目だ。そうなったらどのみち終わる。封印、そんな事が出来るのか？それなら、俺ごとやれば何とかなるか？……エイナとレオンをどうにかして元の体に戻さないとな……巻き込むわけにはいかない」

封印などできるわけがない。仮にできるのなら、そもそもこの世界の元凶も封印されていないとおかしい。そうすればこの世界でエイナやレオンも普通に暮らせれる筈だ。転生するかどうかは知らんが。

「そうだ！転生させればいいんじゃないか？記憶や自我も無くなっ

てるはずだ。あの力が弱まるかは知らないが、それでも、性格さえいい方向に持って行ければ何とかなるか……けど、それなら結局今は何もできないという事か……この考えも性格が良い物に変わるとは限らないし、それにそもそも転生するのかどうか、アイツに常識なんか当てはまりはしない」

自分のことながらよくここまでいえるなと、内心苦笑いしながら、それでも、真剣そのもので考える。

「おいおい、サモンナイトって、ここまでスケールでかかったっけ？」

自身の知識に大いに疑問を抱く。現実逃避も混みの疑問ではあるが。

～常夜の石の中～

「でね！その時にユーリってば、なんて言ったと思う？」

「……さぁ？」

「気にするな、だってさ！結構かわいかったのに……あの兎、飼いたかったなぁ……」

いつまで続くんだ？

そんなレオンの疑問は心の中で浮かんで消える。満面の笑みをしているかと思えば、直に表情を変え、怒ったり、泣きそうになったり、かと思えば笑ったり、百面相も良い所だ。これに付き合っていたであろうユーリは今まで随分と苦労していたのだろう。この短期間でそれは痛いほどわかった。溜息しか出ない。

「ちょっと！聞いてる？」

「ああ……聞いてるよ」

これは既に苦行だなと思いつつも耳を傾ける。既にユーリが表に戻ってからかなりの時間が経っている。それでもエイナのトークは衰えない。大体、と言うか、８割くらいはユーリが絡んでいて、残りは結論がユーリが如何とかとなって、結局、すべての会話がユーリの事になる。

「……信用してるんだな」

「え？」

ふと思いついたら口に出た。あまりにも楽しそうに、嬉しそうに言うものだから、此方も少し興味が湧いてきた。只々聞き流すのももう疲れたし、この際だ。せっかくの自由な時間だ。自分から動かないと損だろう。

「あいつの、ユーリの事を、さ」

「信用、か。うん、信用してるけど、やっぱり信頼してるっていう方がしっくりくるかな？」

「そうか」

「レオンは」

「え？」

「レオンはユーリの事、どう思う？」

不意にエイナに問われ、レオンは面食らう。第一印象は最悪だったろう。いきなり命を奪いに行ったのだ。此方としても過剰な反応だったが、それでもあの禍々しさからくる不安は消えない。なぜかあの雰囲気を持つものからは災禍の香りがする。それもユーリからは、逃れる事すらできない天蓋を越えたそれを直感で感じ取った。けれど、本人の人格を見てとりあえず保留することにした。どのみち、彼をぬきに自分は生きれない。

体が無いのだから、体のあるユーリに憑かなければ存在できない。これは道理であり、外れない鎖でもある。レオンはユーリと言う鎖に繋がれることで仮初に近い生を得ている。それはエイナも同じ。鎖に体を縛られ、幾重にも張られた条件の元、籠の中の自由を満喫する。けれど、それでも。

「そうだな……」

思い返す。まだ、ほとんど彼の事は知らないが、それでもエイナからの話や、本人との僅かな会話を聞いて、彼があの雰囲気に、災いをもたらす力に呑まれているのでは無いと、きちんと自己を保った者であると判断した。エイナのは主観で見たひいき目が、やたらめったに入っている気がするが、それでも、悪いようには思えない。

「俺も、アイツの事は信じたい。だが、それはこれから時間をかけて知っていけばいい事だ。ゆっくりと見定めるさ。俺なりにな」

「むぅ、なんかはぐらかしてるように聞こえるんだけど……」

「そんなことはないさ。ただ、俺の目で確かめたいと言うだけさ」

「そう、かなぁ？」

エイナがどこか納得いかないように首を傾げる。それを見ながらレオンは思考する。

ユーリは人格面では問題があるようには見えない。けれど、あの気配は見過ごせない。聞いていれば結局の所、あの男には、お人好しな部分がある。そこに付け込まれれば、何か決定的に間違ってしまいそうな危うさがある。

助けてもらった恩もある。ならば行動で返そう。元々自分は言葉で伝えるのは苦手だ。ならば、精一杯彼には俺の行動を見てもらおう。恩は返す。そして、そのついでにあの気配が彼に害を及ぼすのなら全力で排除しよう。

「だから心配するな。俺もユーリの事は気に入っているし、興味があるからな」

「え！？えええ！？」

レオンが言った言葉にエイナが過剰に反応ずる。その反応にレオンが今度は首をひねる。何故そんなに驚く必要があるのか疑問に思ったが、とりあえず聞こえたのなら問題ないだろう。それよりも今

はエイナの話から逃れるのが先決。さすがにもうお腹いっぱいだ。

「さて、結構喋ったから俺は少し休む事にしとく。何か用があったら起こしてくれ」

「……あ、ああ……ぇぇ……けど……」

如何にも自分の声が聞こえていないらしい。自分の世界に旅立っているらしい。それならばそれで好都合だ。さっさと寝ておこう。

レオンがせっせと寝るための準備をしている間もエイナは、どこかうわごとのようにブツブツと言っている。正直こわい。レオンはそれをできる限り視界に入れないようにして、ベッドにもぐりこむ。これからの事に思いを馳せ、僅かに期待を持ちながら。

街への道のりを歩いている最中、モンスターがいないなどという事は無く、群れを成して現れるそれを見て、ユーリの顔が僅かに歪む。

落ち着け、感情に呑まれるな。制御しろ。自分の手足。心、細胞の一片すらも、偶然すら起こさせるな！

暴走するのなら、それにまつわる因子を全て己が制御下に置く。そうすれば問題なく動ける。簡単な話だが、実行するとなると果てしない程の神経を削る作業だ。これでも、事態を先延ばしにしているだけだ。

「今度は大丈夫、だな……これからはきちんとして見せる」

襲いかかってくるモンスターに目をやり、自分に言い聞かせるように言葉を繋ぐ。手を握り、力を込める。

「さぁ、こっちも疲れてるんでな。少し急いで行かせてもらうぞ」

突進してきたモンスターを蹴り上げ、掌底を打ち込む。次の飛び込んできたモンスターは回し蹴りで蹴り飛ばし、抜き放った朱砂で三体目を輪切りにする。

「悪いけど、さ。向かって来るなら、俺は止まる訳にはいかない……特に、今の俺はな」

神経を集中し、必要な分だけ力を汲み取る。禁忌しているだけでは意味がない。自分からも如何にかしなければ。そしてあれだけ強大な力があるのなら、使わないで放置しておくのも惜しい。使えるものは使う。それは自分でも承知している。故に開放する。災禍の狂気を。

赤い光が漏れる。大地を照らす来い狂気の思念が、大気を、空を染める錯覚を起こす。

変わるな！流されるな！俺は、まだこの力を流す気は無い。落ち着け。出来なければ俺は終わる。

赤い光はモンスターを威圧するかのようにゆらりとゆれ、蜃気楼のように空間を歪めていく。けれど、その光は狂気だけでは無く、それを放つユーリの強固な意志をも映しているように、明るく全て

を照らしていく。狂気だけでは無い、けれど、まだ狂気でしかない。

「行くぞ……二度も振り回される気は無い。今度は操りきって見せる！」

一足でモンスターとの距離を詰め、朱砂を振りぬく。赤い光が炎と混じり、紅蓮となって敵を焼く。その残りが大気に残り、火花を残して消えていく。即座に赤い光が周囲を薙ぎ払う。

「ふっ！」

蹴りはらった足に光が纏われ、巨大な衝撃波となって周りのモンスターを吹き飛ばす。間を縫ってきたモンスターの攻撃を、魔晄を持って迎撃する。攻撃に合わせ、カウンターで返し、魔力の弾丸がモンスターの顎を打つ。そのまま腹部に手を当て、砲撃を放つ。なす術も無く吹き飛んでいくモンスター。それを最後まで見送る事も無く、次のモンスターの方へと進んでいく。

「ぜあっ！」

赤い光が、手刀の形にしたてに集まり、切っ先を鋭くさせ、紅い形状の剣を作り出す。それと逆の手には朱砂を持ち、二刀流を行う。片手で攻撃を受け、反対の手で切り払う。時折砂鉄を使い、またある時は魔晄を使い、モンスターの群れを掃討していく。そこによどみは無く、迷いもない。今度は暴走する気配もなく、感情が高ぶったりもしない。

「飛べっ！」

足元から茨が伸び、モンスターの足に刺さる。ついでその茨が爆

発を引き起こす。空中に吹き飛ばされたモンスターに砂鉄の鎌が横なぎに振るわれる。

赤い光が力をまし、手のひらに圧縮される。それは先程と比べてもさらに大きく強力な砲撃として放たれる。

「くらえ！」

その声と共に赤い砲撃は大気を切り裂き放たれる。それを追うように灰色の砲撃が放たれる。二つの極光が残りのモンスターを襲い、灰燼に帰す。光の過ぎ去った後に動くものはユーリ一人。

「……なんとかなったか。毎回毎回、気にしないといけないとはな」

面倒くさい、と小言を言いながら、それでも、どうにか制御できる事実に、内心少しの安堵を得る。ある程度、感情を抑えて置けば安定して使う事が出来る。

「さて、何時までもこうして考えても仕方ないな……前へ進みながらにでもするか……」

悩みを抱えながらそれでも進む。進むごとに自身を蝕む何かを宿し、それでも止まらない。それが決めた事だから。

「さぁ、街までもう少しって所だな……ん？」

歩き始めてしばらくすると、常夜の石が光を放つ。先ほどまでの事は別段二人には見られてはいない筈だ。ならなんだろうか、と思案しながらも常夜の石の中に思念を飛ばす。

常夜の石の中では既にエイナとレオンが揃って待っていた。それを見てユーリが何か用なのかと思いそちらを見る。

「ユーリ。もう私達も動けるようになったから戦う事にするわ！」

「別にゆっくりしててもいいんだが？もう少しでアレスパの街に入るんだし」

「いいの！それに、このままユーリ一人に全部まかせっきりにするのもどうかと思うし、私達は仲間なんだし」

「……急がなくても問題ないんだが」

「……俺達も自分の力で前へ進みたいんだ。ただ見ているだけなんてできるわけがない！」

「……レオン」

「だから、ね。私たちの事は心配いらないよ。それに、私達はずっと一緒なんだからどうにかなるわよ！」

「……それもどうかと思うが」

「……ここまで苦労してきたんだな」

「……ああ、それなりにな……休んでる間、なにかあったか？」

「……ああ、それなりに、な。少しばかり疲れた……」

「……そうか」

「ちょっと！二人してなにしみじみしてんの！？これから頑張るのに！」

「やれやれ」

ため息の原因が、テンションを上げながらこっちに何か言ってきているが、それを見ても、こちらはやはり溜息をつくしかない。レオンと二人、苦笑いをしながら目を合わす。

「それじゃ行くか」

「え……うん！」

「ああ」

とりあえず、前へ進む気はある。それなら俺が止める必要はない。無理をするなら、その分俺がやれば済むだけだ。ユーリはそう思いながら表に戻る。

「さて、賑やかになってきたが、それは向こうもみたいだな」

表に戻った先、ユーリの眼はモンスターの群れを捉える。迂回して躱すこともできるが、もうすぐ街に着くのだ。わざわざ時間をかける必要もない。正面から進むのみ。それに、あの病み上がりの二人の腕試しにはちょうどいい。

「よし、行くか」

軽く助走をつけて向かう。その速度は軽くでありながら、徐々に速度を上げる。上限を知らないかのようなその速度は、既に風を追い抜き、音すら超える。規格外の身体能力。それを持ってして、遠くに見えるモンスターの群れに不意打ちを入れる。跳躍。空の上から手をかざし、力を解き放つ。即座に赤色の砲撃が空中から放たれる。

不意を打たれたモンスターの何割かは、躱す事すらままならずに飲み込まれ、消し飛ばされる。周囲のモンスターは砲撃の余波で、勢いよく大地にたたきつけられる。

「……数の調整はこんなもんでいいか？」

音も無く大地に足をつけたユーリが問う。光に包まれながら発したその一言に応えるような声が、光から聞こえる。

「……ああ！十分だ！」

白い鎧を身につけたレオンが大剣を手に光から飛び出す。その手に持っている大剣の名はストームブレード。ユーリがレオン加入を前提に買っておいた大剣だ。仮に思惑が外れても、自分が扱えるために問題は無い。

「はぁあああ！！」

力を籠め、体を動かす。長い事使われていなかった筋肉が躍動する。細胞が活性化し、生きている実感を感じる。今までの事、黒騎

士になっていた間の事は、おぼろげにしか出てこないが、それでも、自分を救った青い光は脳裏に焼き付いている。

話によればそれはユーリの力らしい。けれど、その戦闘が原因で失われた力。それならばその力の分は、最低でも力にならなければいけない。剣に力を込める。それに応えるように唸る剣閃。切り払い、即座に返し、薙ぎ払う。向きを変え、勢いよく背後に振りかぶり、振り下ろす。荒々しいその剣捌きとは裏腹に、斬撃は澄み渡り、どんどんと洗練されていった。一閃一閃が力となる。

「はぁあああ！！」

切り裂く、薙ぎ、切り落とす。それは忘れていた何かを思い出すように、久しく動いていなかった体が喚喜を覚える。止める事などしない。思いのままに、剣が振り続けられる。それは剣の名にそうように、暴風とかす。

「行くぞ！」

剣は止まる事無く、全てを切り払う。そして、モンスターの進軍が完全に止まった瞬間、レオンの体が光りに包まれる。その突然の光景にモンスターの動きが止まる。けれど、それは、光の中から桃色の光弾が撃たれることで、モンスターの意識を強引に引きづり戻す。

「さぁ！ここからは私の出番よ！」

ルナティニールを構え、エイナが魔力を剣に込める。それに反応し、薄い黄色の魔力が剣に満たされる。月の魔力、増幅された魔力はルナティニールの中で変換され、ルナティニールの刀身の中に溜

め込まれ、開放の時を待つ。

「覚悟しなさい！」

次の瞬間、エイナの体が光を放ち、青色の燐光を放つ。憑依召喚、氷魔を取りつかせたその力は、周囲を凍らせ、止める。氷弾を打ちながら、魔晄で魔力弾を更に撃ち込み、剣に魔力を込める。大地からは氷山が壁のようにせり上がり、退路を塞ぐ。

「さぁ、大きいのいっくわよ！！」

剣を両手で水平に構え、力の限り真横にふりぬく。溜め込まれた魔力がここぞとばかりに解放され、三日月形の極大の斬撃として撃ち放たれる。黄色いその魔力斬撃は全てを飲み込み、氷の壁で正面以外を防がれたモンスターは、逃げる事も出来ずに、斬撃にその身を食い破られる。その一撃によって全てのモンスターが消しとばされる。

「これで、おっわりぃ！」

エイナの声が響く。周囲にはもうモンスターの影は無く、街への道が開かれているのみ。

「さぁて、もうすぐ街に戻れるなぁ……リコちゃん、元気にしてるかなぁ。元気になってるといいんだけど……」

少し顔を曇らせながらも足を進める。そして、何もいなくなった後、その場には、黒い茨では無い、真っ赤な狂気を宿した赤い茨が覆い尽くした。まるで残骸を飲み込み、取り込むかのように。それはすぐに消え失せ、残ったモノは、乾いた大地のみ。

二人目の記憶喪失者　暴走した狂気（後書き）

今回からレオンが入ります。ちなみに女性です。原作の絵よりも肩幅が狭く、顔とかも若干女性っぽくなってると考えてください。見た目が変わってるだけで大体一緒ですが。

主人公はどんどんフラグ上がってます。カルマルートって結構作者好きです。１の白顔にはびっくりしましたが。なんだあれ。歌舞伎？もしくはバカ殿が浮かんだ作者はきっと異常。皆さんは何を連想しましたか？あの魔王。

今回から赤い光と茨が使えるようになります。ストラの代わりです。ただ、常に暴走の危険性があるので無理が利かなくなってます。

変貌した主人公は、現状、ラスボスより強い設定です。何気にこの作品全体での上位にランクインしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4519r/

サモンナイト・ストーリー

2011年11月20日20時06分発行